

京都府遺跡調査報告書

第 30 冊

内里八丁遺跡Ⅱ

2001

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1



(1) D 地区遠景(南から)

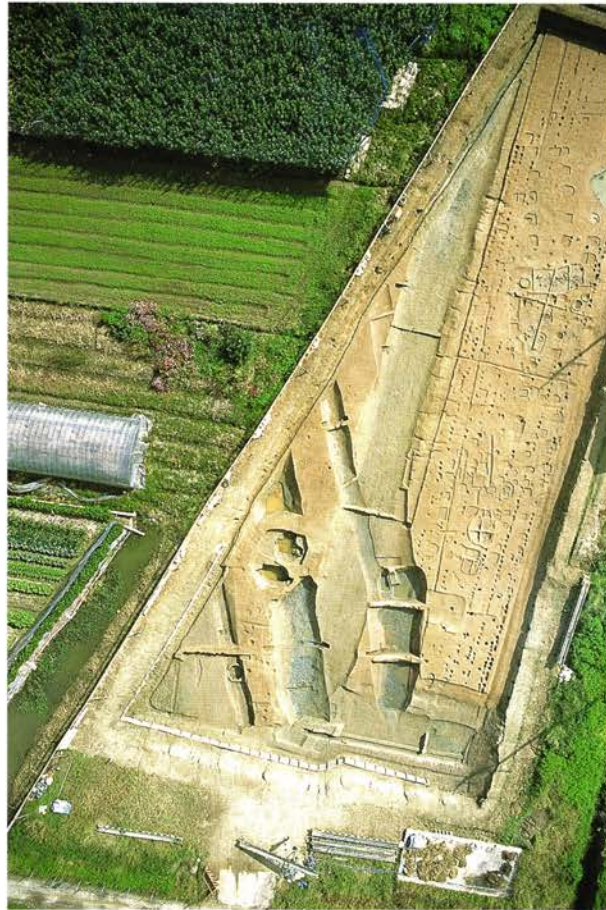


(2) C・F 地区遠景(北から)

巻頭図版 2



(1) E地区第2遺構面道路状遺構(南上空から)



(2) E地区第2遺構面道路状遺構(真上から)

巻頭図版 3



(1) F 地区第 6 遺構面水田跡全景(北上空から)



(2) F 地区第 6 遺構面水田跡全景(真上から)

序

京都府八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂に所在する、内里八丁遺跡に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第30冊として、ここに刊行いたします。

内里八丁遺跡の発掘調査は、第二京阪自動車道路(京都南道路)建設に伴い、国土交通省および日本道路公団の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、昭和63年度から平成10年度までの11年間にわたって実施致しました。各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』に掲載し、平成11年度にはA・B地区の調査成果を『京都府遺跡調査報告書』第26冊として刊行してきたところであります。

本書は、内里八丁遺跡のC～F地区につきまして、概要報告で果たせなかった詳細な事実の報告を行うとともに、それらの諸事実を分類・集成し、考察を加えたもので、これをもって記録保存の責務を果たしたものと考えます。

日本道路公団には現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会・八幡市教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに助言を頂くことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げる次第であります。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の古代集落遺跡や水田遺構研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成13年3月

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆康

例 言

1. 本書は、京都府八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂に所在する内里八丁遺跡の発掘調査報告書である。調査対象地を南北に貫くように流れる防賀川を境に、その左岸で調査を行ったA・B地区の調査成果に関しては、すでに『内里八丁遺跡』Iとしてその報告書を平成11年度に刊行している。本書は、これに続いて調査を実施したC～F地区の調査成果を対象としている。
2. 内里八丁遺跡の発掘調査は、第二京阪自動車道路(京都南道路)建設に伴い、日本道路公団と国土交通省の依頼を受けて実施したものである。現地調査の期間は、昭和63年度の試掘調査に始まり、平成10年度までの11年間を要した。このうち本書で報告するC～F地区については、日本道路公団の依頼を受けて平成6年度から平成10年度までの5年間で現地調査を実施したものである。
3. 現地調査および本報告書にかかる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。
4. 本書に掲載した遺構図は第6座標系を用い、方位は全て座標北をさす。
5. 写真撮影は、遺構を各年度担当者と一部を調査1課資料係主任田中 彰が、遺物写真は田中彰が行った。
6. 本書の執筆は、第4章第7節及び第5章第5節を柴 暁彦が、その他を森下 衛が行った。
7. 本報告書の作成は、各年度の担当者の協力のもとに、調査第1課資料係主任調査員森下 衛が行い、編集は調査第1課資料係調査員河野一隆の協力のもと森下が行った。
8. 本書に掲載した遺物・写真・図面などは当分の間、当調査研究センターが保管している。

本文目次

第1章 序説	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
1. 各年度の調査概要	
2. 調査の体制	
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 検出遺構	
第1節 層序と遺構面の概要	11
1. C・D・E地区の基本層序と遺構面	
2. F地区の層序と遺構面	
第2節 弥生時代中期の遺構	13
第3節 弥生時代後半～古墳時代初頭の遺構	14
1. 集落跡	
2. 流路および水田跡	
第4節 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構	24
1. 竪穴式住居跡	
2. 溝・土坑	
第5節 飛鳥時代の遺構	30
1. 竪穴式住居跡	
2. 掘立柱建物跡	
3. 溝・井戸・土坑	
第6節 奈良時代～平安時代初頭の遺構	35
1. 道路状遺構およびその側溝	
2. 掘立柱建物跡および柵列・竪穴式住居跡	
3. 井戸・土坑・溝	
4. 素掘り溝群	
第7節 平安時代中期～鎌倉時代初頭の遺構	43
1. 10世紀後半～11世紀前半の遺構	
2. 11世紀後半～12世紀後半の遺構	
第8節 鎌倉時代以降の遺構	49
1. 島畠	
2. 溝・土坑	
第4章 出土遺物	
第1節 概要	51
第2節 弥生時代中期	51

第3節	弥生時代後期終末～古墳時代前期-----	52
	1. 器種と器形 2. 出土遺物	
第4節	古墳時代中期後半～後期初頭-----	61
	1. 器種と器形 2. 出土遺物	
第5節	飛鳥時代～平安時代-----	66
	1. 器種と器形 2. 出土遺物 3. 古瓦類	
第6節	平安時代後期～末葉-----	78
	1. 器種と器形 2. 出土遺物	
第7節	その他-----	81
	1. 玉類・石製品 2. 木製品 3. 土製品 4. 金属製品	
	5. 鍛冶関連遺物	
第5章	総括	
第1節	弥生時代後期終末～古墳時代前期の土器様相と遺構の変遷-----	85
	1. 流路跡(N R 96222・N R 96224)出土資料にみる土器様相	
	2. 検出遺構の段階的把握 3. 小結	
第2節	古墳時代中期末～後期の集落跡と一帯の開発-----	91
	1. 古墳時代中期末～後期の調査成果 2. 文献資料にみる遺跡地一帯の動向	
	3. 小結	
第3節	飛鳥時代の土器様相と遺構の変遷-----	94
	1. 出土資料の概要 2. 資料の段階的把握 3. 飛鳥時代遺構の変遷	
第4節	奈良・平安時代の内里八丁遺跡と道路状遺構-----	99
	1. 検出遺構の概要 2. 小結	
第5節	平安時代の内里八丁遺跡と奈良園・奈良庄-----	108
	1. 平安時代前期～鎌倉時代の調査成果 2. 「奈良園」と内里八丁遺跡	
	3. 「奈良荘」と内里八丁遺跡 4. 小結	
第6章	おわりに-----	116

挿 図 目 次

第1図	調査区配置図	2
第2図	調査地周辺地理的環境図	5
第3図	調査地周辺遺跡分布図	8
第4図	弥生時代中期土坑出土遺物実測図	51
第5図	弥生時代後期末～古墳時代前期出土土器分類図(1)	53
第6図	甕A口縁分類図	54
第7図	弥生時代後期末～古墳時代前期出土土器分類図(2)	55
第8図	古墳時代中期末～後期出土土器分類図	62
第9図	甕A・B口縁分類図	63
第10図	飛鳥時代～平安時代出土土器分類図(須恵器)	67
第11図	飛鳥時代～平安時代出土土器分類図(土師器)	69
第12図	甕A・B口縁分類図	70
第13図	飛鳥時代～平安時代出土土器分類図(黒色土器)	71
第14図	出土軒丸瓦実測図	76
第15図	平瓦分類図	77
第16図	弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図(I・II期)	88
第17図	弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図(III期)	89
第18図	弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図(IV期)	90
第19図	古墳時代中期末～後期主要遺構配置図	92
第20図	飛鳥時代主要遺構配置図	97
第21図	奈良～平安時代主要遺構配置図(1)	102
第22図	奈良～平安時代主要遺構配置図(2)	103
第23図	奈良～平安時代主要遺構配置図(3)	104
第24図	足利説「古山陰道」と道路状遺構	106
第25図	平安時代中期主要遺構配置図	108
第26図	平安時代後期～鎌倉時代初頭主要遺構配置図	109
第27図	鎌倉時代以降主要遺構配置図	111
第28図	奈良園・奈良庄位置関係図	112

表 目 次

第1表	調査組織一覧表	4
第2表	水田遺構一覧表	23
第3表	平瓦分類表	77
第4表	掘立柱建物跡一覧表(飛鳥時代)	96
第5表	掘立柱建物跡一覧表(奈良時代～平安時代前期)	101
第6表	出土遺物観察表	121

図 版 目 次

図版第1	調査地土層図
図版第2	C地区遺構平面図(1)
図版第3	C地区遺構平面図(2)
図版第4	D地区遺構平面図(1)
図版第5	D地区遺構平面図(2)
図版第6	E地区遺構平面図(1)
図版第7	E地区遺構平面図(2)
図版第8	E地区遺構平面図(3)
図版第9	F地区遺構平面図(1)
図版第10	F地区遺構平面図(2)
図版第11	F地区遺構平面図(3)
図版第12	弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(1)
図版第13	弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(2)
図版第14	弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(3)
図版第15	弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(4)
図版第16	弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(5)
図版第17	C地区S X 96079・96098平面図
図版第18	弥生時代中期・後期末～古墳時代前期遺構実測図
図版第19	F地区N R 96222・96224・97537断面図

- 図版第20 F地区第6遺構面水田跡実測図1
- 図版第21 F地区第6遺構面水田跡実測図2
- 図版第22 古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(1)
- 図版第23 古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(2)
- 図版第24 古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(3)
- 図版第25 古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(4)
- 図版第26 古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(5)
- 図版第27 古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(6)
- 図版第28 古墳時代中期末～後期遺構実測図
- 図版第29 飛鳥時代掘立柱建物跡実測図(1)
- 図版第30 飛鳥時代掘立柱建物跡(2)
- 図版第31 飛鳥時代掘立柱建物跡(3)
- 図版第32 飛鳥時代遺構実測図
- 図版第33 奈良～平安時代道路状遺構想定図
- 図版第34 D地区S X94011・94012実測図
- 図版第35 奈良～平安時代遺構実測図(1)
- 図版第36 奈良～平安時代遺構実測図(2)
- 図版第37 奈良～平安時代遺構実測図(3)
- 図版第38 奈良～平安時代遺構実測図(4)
- 図版第39 飛鳥～平安時代遺構実測図
- 図版第40 奈良～平安時代土坑実測図・溝断面図
- 図版第41 奈良～平安時代井戸実測図
- 図版第42 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(1)
- 図版第43 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(2)
- 図版第44 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(3)
- 図版第45 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(4)
- 図版第46 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(5)
- 図版第47 平安時代後期～鎌倉時代遺構実測図(6)
- 図版第48 平安時代後期～鎌倉時代遺構実測図(7)
- 図版第49 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(8)
- 図版第50 平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(9)
- 図版第51 出土土器実測図(1)
- 図版第52 出土土器実測図(2)
- 図版第53 出土土器実測図(3)
- 図版第54 出土土器実測図(4)

- 图版第55 出土土器实测图(5)
图版第56 出土土器实测图(6)
图版第57 出土土器实测图(7)
图版第58 出土土器实测图(8)
图版第59 出土土器实测图(9)
图版第60 出土土器实测图(10)
图版第61 出土土器实测图(11)
图版第62 出土土器实测图(12)
图版第63 出土土器实测图(13)
图版第64 出土土器实测图(14)
图版第65 出土土器实测图(15)
图版第66 出土土器实测图(16)
图版第67 出土土器实测图(17)
图版第68 出土土器实测图(18)
图版第69 出土土器实测图(19)
图版第70 出土土器实测图(20)
图版第71 出土土器实测图(21)
图版第72 出土土器实测图(22)
图版第73 出土土器实测图(23)
图版第74 出土土器实测图(24)
图版第75 出土土器实测图(25)
图版第76 出土土器实测图(26)
图版第77 出土土器实测图(27)
图版第78 出土土器实测图(28)
图版第79 出土土器实测图(29)
图版第80 出土土器实测图(30)
图版第81 出土土器实测图(31)
图版第82 出土土器实测图(32)
图版第83 出土土器实测图(33)
图版第84 出土土器实测图(34)
图版第85 出土土器实测图(35)
图版第86 出土土器实测图(36)
图版第87 出土土器实测图(37)
图版第88 出土土器实测图(38)
图版第89 出土土器实测图(39)

- 図版第90 出土土器実測図(40)
- 図版第91 出土土器実測図(41)
- 図版第92 出土土器実測図(42)
- 図版第93 出土土器実測図(43)
- 図版第94 出土土器実測図(44)
- 図版第95 出土土器実測図(45)
- 図版第96 出土玉類・石製品実測図
- 図版第97 出土木製品実測図(1)
- 図版第98 出土木製品実測図(2)
- 図版第99 出土木製品実測図(3)
- 図版第100 出土木製品実測図(4)
- 図版第101 出土木製品実測図(5)
- 図版第102 出土木製品実測図(6)
- 図版第103 出土木製品実測図(7)
- 図版第104 (1)出土土製品実測図 (2)出土金属器実測図
- 図版第105 (1)出土貨幣実測図 (2)鍛冶関連遺物実測図
- 図版第106 (1)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94007遺物出土状況(北西から)
(2)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94008遺物出土状況(南から)
(3)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94009完掘状況(南から)
- 図版第107 (1)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94010完掘状況(東から)
(2)D 1 地区掘立柱建物跡 S B94022完掘状況(南から)
(3)D 1 地区第 3 遺構面完掘状況(北から)
- 図版第108 (1)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94004遺物出土状況(西から)
(2)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94005遺物出土状況(西から)
(3)D 1 地区竪穴式住居跡 S H94006完掘状況(北東から)
- 図版第109 (1)D 1 地区溝跡 S D97217完掘状況(北西から)
(2)D 1 地区井戸 S E94010遺物出土状況(南から)
(3)D 1 地区第 4 遺構面全景(南東から)
- 図版第110 (1)D 1 地区第 2 遺構面完掘状況(南から)
(2)D 1 地区井戸 S E94009検出状況(南から)
(3)D 1 地区 S X94013検出状況(南東から)
- 図版第111 (1)D 1 地区木製暗渠 S X94013検出状況(東から)
(2)D 1 地区木製暗渠 S X94013(南西から)
(3)D 1 地区池状遺構 S X94011遺物出土状況(東から)
- 図版第112 (1)D 2 地区第 4 遺構面(北から) (2)D 2 地区第 4 遺構面(西から)

- (3) D 2 地区第 4 遺構面(南から)
- 図版第113 (1) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95025完掘状況(北から)
 (2) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95090完掘状況(北から)
 (3) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95087遺物出土状況(西から)
- 図版第114 (1) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95087完掘状況(西から)
 (2) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95089遺物出土状況(南から)
 (3) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95089完掘状況(南から)
- 図版第115 (1) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95089完掘状況(北から)
 (2) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95092完掘状況(西から)
 (3) D 2 地区土坑 S K95095検出状況(東から)
- 図版第116 (1) D 2 地区第 3 遺構面全景(真北から)
 (2) D 3 地区竪穴式住居跡 S H95051完掘状況(南から)
 (3) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95051遺物出土状況(北西から)
- 図版第117 (1) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95052完掘状況(北西から)
 (2) D 2 地区 S H95054完掘状況(南東から)
 (3) D 2 竪穴式住居跡 S H95053検出状況(北から)
- 図版第118 (1) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95059(左)・S H95054(右)完掘状況(南から)
 (2) D 2 地区溝 S D95074検出状況(西から)
 (3) D 2 地区第 2 遺構面全景(南から)
- 図版第119 (1) D 2 地区第 2 遺構面北半部(上が北) (2) D 2 地区第 2 遺構面南西部(上が北)
 (3) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95048遺物出土状況(西から)
- 図版第120 (1) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95048完掘状況(西から)
 (2) D 2 地区竪穴式住居跡 S H95048遺物出土状況(南から)
 (3) D 2 地区掘立柱建物跡 S B95002完掘状況(南から)
- 図版第121 (1) D 2 地区掘立柱建物跡 S B95002近景(南から)
 (2) D 2 地区北遺構群(南から)
 (3) D 2 地区掘立柱建物跡 S B95033完掘状況(南から)
- 図版第122 (1) D 2 地区掘立柱建物跡 S B95036・S B95064(北から)
 (2) D 2 地区土坑 S K95045完掘状況(東から)
 (3) D 2 地区井戸跡 S E95042遺物出土状況(南から)
- 図版第123 (1) D 2 地区井戸跡 S E95072完掘状況(東から)
 (2) D 2 地区井戸跡 S E95073検出状況(北から)
 (3) D 2 地区 S X95106遺物出土状況(南から)
- 図版第124 (1) D 2 地区島畠9502全景(東から)
 (2) D 2 地区掘立柱建物跡 S B95001完掘状況(東から)

- (3) D 2 地区土坑 S K 95009・95010完掘状況(東から)
- 図版第125 (1) D 2 地区土坑 S K 95003遺物出土状況
(2) D 2 地区土坑 S K 95003遺物出土状況(北から)
(3) D 2 地区土坑 S K 95005(奥)・95008完掘状況(東から)
- 図版第126 (1) D 2 地区井戸跡 S E 95035完掘状況(東から)
(2) D 2 地区井戸跡 S E 95071完掘状況(西から)
(3) C・F 地区全景(下が北)
- 図版第127 (1) C 地区第 4 遺構面西部竪穴式住居跡群(南から)
(2) C 地区竪穴式住居跡 S H 96083・96092・96082(手前から)(南から)
(3) C 地区竪穴式住居跡完掘状況 S H 96084・96083・96092(手前から)(南から)
- 図版第128 (1) C 地区竪穴式住居跡 S H 96083完掘状況(南から)
(2) C 地区竪穴式住居跡 S H 96084完掘状況(南から)
(3) C 地区竪穴式住居跡 S H 96091礫敷部(南東から)
- 図版第129 (1) C 地区竪穴式住居跡 S H 96092・96082完掘状況(西から)
(2) C 地区竪穴式住居跡 S H 96085完掘状況(西から)
(3) C 地区周溝遺構 S X 96079・96098完掘状況(南東から)
- 図版第130 (1) C 地区周溝遺構 S X 96079(南から)
(2) C 地区周溝遺構 S X 96079南東隅遺物出土状況(東から)
(3) C 地区周溝遺構 S X 96079北辺遺物出土状況(北から)
- 図版第131 (1) C 地区第 3 遺構面(南から)
(2) C 地区掘立柱建物跡 S B 96021完掘状況(南から)
(3) C 地区掘立柱建物跡 S B 96056・96057完掘状況(北から)
- 図版第132 (1) C 地区掘立柱建物跡 S B 96056・96057完掘状況(東から)
(2) C 地区土坑 S X 96033完掘状況(北西から)
(3) C 地区井戸跡 S E 96051完掘状況(西から)
- 図版第133 (1) C 地区第 2 遺構面掘立柱建物跡 S B 96020完掘状況(南から)
(2) C 地区掘立柱建物跡 S B 96020近景(南から)
(3) C 地区掘立柱建物跡 S B 96024・96025完掘状況(南から)
- 図版第134 (1) C 地区井戸跡 S E 96022検出状況(南から)
(2) C 地区井戸跡 S E 96022完掘状況(南から)
(3) C 地区第 1 遺構面島畠9601・9602(南から)
- 図版第135 (1) C・F 地区全景(下が北)
(2) F 地区第 6 遺構面流路跡 S D 96224(南から)
(3) F 地区流路跡 S D 96224内足跡(西から)
- 図版第136 (1) F 1 地区流路跡 S D 96224上層遺物出土状況

- (2) F 1 地区流路跡 S D96224 鋤出土状況
(3) F 1 地区第 5 遺構面流路跡 S D96222 全景(南から)
- 図版第137 (1) F 1 地区流路跡 S D96222 陽物形木製品出土状況
(2) F 1 地区流路跡 S D96222 鋤出土状況
(3) F 1 地区流路跡 S D96222 槽出土状況
- 図版第138 (1) F 1 地区流路跡 S D96000 木製品出土状況
(2) F 1 地区流路跡 S D96222 木製品出土状況
(3) F 1 地区流路跡 S D96222 木製品出土状況
- 図版第139 (1) F 1 地区流路跡 S D96222 土器出土状況
(2) F 1 地区流路跡 S D96222 土器出土状況近景
(3) F 1 地区第 3 遺構面全景(南から)
- 図版第140 (1) F 1 地区第 2 遺構面主要部(左が北)
(2) F 1 地区掘立柱建物跡 S B96214 完掘状況(南から)
(3) F 1 地区掘立柱建物跡 S B96215 完掘状況(北から)
- 図版第141 (1) F 1 地区島島 3 (南から) (2) F 1 地区第 2 遺構面素掘り溝群(南から)
(3) E 地区第 4・5 遺構面全景(北から)
- 図版第142 (1) E 地区第 5 遺構面北半部遺構検出状況(北から)
(2) E 地区第 5 遺構面南半部遺構検出状況(北から)
(3) E 地区第 5 遺構面南半部素掘り溝群(南から)
- 図版第143 (1) E 地区第 5 遺構面小孔断ち割り状況(南から)
(2) E 地区第 4 遺構面全景(北から) (3) E 地区第 4 遺構面全景(南から)
- 図版第144 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H97287 完掘状況(南から)
(2) E 地区竪穴式住居跡 S H97300 完掘状況(東から)
(3) E 地区竪穴式住居跡 S H97259(奥)・97260 検出状況(東から)
- 図版第145 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H97260 完掘状況(南から)
(2) E 地区竪穴式住居跡 S H97263 遺物出土状況(北西から)
(3) E 地区竪穴式住居跡 S H97282・97297 完掘状況(南東から)
- 図版第146 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H97283 完掘状況(南東から)
(2) E 地区竪穴式住居跡 S H97683 竈土器出土状況(南東から)
(3) 同上甕口縁部取り上げ後(南東から)
- 図版第147 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H97283 竈完掘状況(南東から)
(2) 同上遺物出土状況(南東から)
(3) E 地区竪穴式住居跡 S H97301 完掘状況(西から)
- 図版第148 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H97301 土器出土状況(西から)
(2) E 地区竪穴式住居跡 S H97279 土器出土状況(西から)

- (3) E 地区 竪穴式住居跡 S H97279 完掘状況 (西から)
- 図版第149 (1) E 地区 竪穴式住居跡 S H97280 完掘状況 (南東から)
 (2) 同上 炉状遺構検出状況 (南東から)
 (3) 同上 炉状遺構完掘状況 (南東から)
- 図版第150 (1) E 地区 竪穴式住居跡 S H97266 完掘状況 (西から)
 (2) E 地区 竪穴式住居跡 S H97284 (中)・97285 検出状況 (西から)
 (3) E 地区 第3 遺構面遺構検出状況 (北から)
- 図版第151 (1) E 地区 掘立柱建物跡 S B97226 検出状況 (南から)
 (2) E 地区 中央付近第3～4 遺構面柱穴および竪穴式住居跡検出状況 (南から)
 (3) E 地区 溝 S D97236 および掘立柱建物跡 S B97253 検出状況
- 図版第152 (1) E・F 地区 全景 (南東から) (2) E 地区 第2 遺構面全景 (北から)
 (3) E 地区 第2 遺構面全景 (左が北)
- 図版第153 (1) E 地区 道路状遺構 (北西から) (2) E 地区 道路状遺構 (北西から)
 (3) E 地区 掘立柱建物跡 S B97225 検出状況 (西から)
- 図版第154 (1) E 地区 井戸跡 S E97223 検出状況 (南から) (2) E 地区 同近景 (南から)
 (3) 同断ち割り (南から)
- 図版第155 (1) E 地区 土坑 S K97203 遺物出土状況 (南から)
 (2) E 地区 池状遺構 S X97249 完掘状況 (南から)
 (3) E 地区 掘立柱建物跡 S B97212、土坑 S K97201 完掘状況 (北から)
- 図版第156 (1) E 地区 井戸跡 S E97204 遺物出土状況 (南から) (2) 同近景 (南から)
 (3) E 地区 井戸跡 S E97205 検出状況 (南から)
- 図版第157 (1) E 地区 井戸跡 S E97205 蒸籠組の状況 (北から) (2) 同下部構造 (西から)
 (3) E 地区 第1 遺構面 島畠9707 (左)・島畠9708 (右) (南から)
- 図版第158 (1) F 2 地区 遠景 (北西から) (2) F 2 地区 第6 遺構面全景 (北西から)
 (3) F 2 地区 第6 遺構面 水田跡 (北西から)
- 図版第159 (1) F 2 地区 第6 遺構面 水田跡 全景 (左が北)
 (2) F 2 地区 第6 遺構面 水田跡 (左が北) (3) F 2 地区 第6 遺構面 全景 (南から)
- 図版第160 (1) F 2 地区 水田跡 (西から) (2) F 2 地区 水田跡 (北西から)
 (3) F 2 地区 水田 稲株痕跡 検出状況 (北西から)
- 図版第161 (1) F 2 地区 水田 稲株痕跡 (竹串部分) (南西から) (2) 同 稲株痕跡 および 足跡
 (3) F 2 地区 第5 遺構面 (南から)
- 図版第162 (1) F 2 地区 流路跡 S R96224 遺物出土状況 (南から)
 (2) F 2 地区 第4 遺構面 全景 (南から) (3) F 2 地区 第3 遺構面 (北から)
- 図版第163 (1) F 2 地区 第3 遺構面 全景 (左が北)
 (2) F 2 地区 掘立柱建物跡 S B97302 完掘状況 (北から)

- (3) F 2 地区掘立柱建物跡 S B97311 検出状況 (北から)
- 図版第164 (1) F 2 地区掘立柱建物跡 S B97313 検出状況 (南から)
 (2) F 2 地区掘立柱建物跡 S B97314 検出状況 (西から)
 (3) F 2 地区掘立柱建物跡 S B97314 検出状況 (西から)
- 図版第165 (1) F 2 地区掘立柱建物跡 S B97314 近景 (西から)
 (2) F 2 地区掘立柱建物跡 S B97318 検出状況 (西から)
 (3) F 2 地区井戸跡 S E97303 完掘状況 (南から)
- 図版第166 (1) F 2 地区井戸跡 S E97319 検出状況 (北から) (2) 同完掘状況 (南から)
 (3) F 2 地区溝跡 S D97317 完掘状況 (南西から)
- 図版第167 (1) F 2 地区第 2 遺構面全景 (南から)
 (2) 同素掘り溝群 (南西から) (3) F 2 地区第 1 遺構面島畠 (南から)
- 図版第168 出土遺物 (1)
- 図版第169 出土遺物 (2)
- 図版第170 出土遺物 (3)
- 図版第171 出土遺物 (4)
- 図版第172 出土遺物 (5)
- 図版第173 出土遺物 (6)
- 図版第174 出土遺物 (7)
- 図版第175 出土遺物 (8)
- 図版第176 出土遺物 (9)
- 図版第177 出土遺物 (10)
- 図版第178 出土遺物 (11)
- 図版第179 出土遺物 (12)
- 図版第180 出土遺物 (13)
- 図版第181 出土遺物 (14)
- 図版第182 出土遺物 (15)
- 図版第183 出土遺物 (16)
- 図版第184 出土遺物 (17)
- 図版第185 出土遺物 (18)
- 図版第186 出土遺物 (19)
- 図版第187 出土遺物 (20)
- 図版第188 出土遺物 (21)
- 図版第189 出土遺物 (22)
- 図版第190 出土遺物 (23)

第1章 序 説

第1節 調査の経緯

山城盆地の南郊、京都府久世郡久御山町から八幡市にわたっての地域は、京阪間を結ぶ交通の大動脈、国道1号線に面し、朝夕には、慢性的な交通渋滞が発生する。また近年は、その北方の巨椋池干拓地を起点とする京滋バイパスも開通し、周辺の交通量は、さらに増加の一途をたどっている。こうしたなか、一帯の交通渋滞の緩和、さらには京阪間の新たな交通ネットワークの確立を目的として、第二京阪自動車道路(京都南道路)の建設が、国土交通省・日本道路公団によって計画された。

京都府内におけるその予定ルートは、八幡市荒坂から内里そして上津屋を経て木津川を渡り、久御山町佐山から同町市田を經由して京滋バイパスへと繋がるものである。

本自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関しては、国土交通省・日本道路公団・京都府教育委員会等の関係機関による事前協議が行われた。この事前協議では、予定路線に係る埋蔵文化財包蔵地が少なくとも8か所以上確認され、国土交通省・日本道路公団の依頼を受けて、当調査研究センターがその発掘調査を実施することとなった。調査は、昭和63年度に八幡市内に所在する内里八丁遺跡並びに新田遺跡の試掘調査から着手し、以後、継続実施している。

本書は、八幡市に所在する内里八丁遺跡発掘調査の成果を報告するものである。同遺跡の発掘調査は、昭和63年度から平成10年度にわたって実施したものであり、後述するように、弥生時代後期末～鎌倉時代という長期にわたるさまざまな遺構・遺物が検出され、多大な成果を得た。このため、国土交通省・日本道路公団の協力を得、ここにその成果をまとめることとなった。なお、内里八丁遺跡に係る一連の発掘調査のうち、昭和63年度から平成5年度に行った調査地西半部(A・B地区)の成果については、すでに『内里八丁遺跡』Iとして刊行している^(注1)。このため、ここに報告するのは、平成6年度以降に調査を実施した東半部(C～F地区)に関する調査成果である。また、G地区に関しては、京都文化博物館が調査を実施しており、すでに報告書が刊行されている^(注2)。

第2節 調査の経過

1. 各年度の調査概要

年度毎の調査概要に関しては、すでに概要報告書を刊行し報告しているが、ここでは簡単に調査の経過をふりかえることとする^(注3)。

平成6年度 D地区の南半分(概要報告書ではD1地区、本書写真図版でもD1地区と表記)を対象として調査を実施し(約2,000m²)、4面の遺構面が確認された。第1遺構面は平安時代末～

鎌倉時代に相当し、平安時代末の井戸3基のほか、鎌倉時代に造成された島島などが検出された。第2遺構面は、奈良～平安時代前期に相当し、調査区南端部で祭祀が行われたと考えられる池状遺構、調査区西半部で北北西-南南東に延びる溝2条などが確認された(この溝は、後述するように道路状遺構の東側溝と判断している)。第3遺構面は、古墳時代中期後半～後期初頭に相当し、竪穴式住居跡3基などが確認された。第4遺構面は弥生時代後期終末～古墳時代初頭に相当し、竪穴式住居跡3基・掘立柱建物跡1棟などを検出した。

平成7年度 平成6年度調査区の北側、D地区北半部(概要報告書ではD2地区、本写真図版でもD2地区と表記)を対象として調査を実施した(約2,350m²)。確認した遺構面は、前年度と同じ4面であった。第1遺構面は、平安時代末～鎌倉時代に相当し、鎌倉時代に造成された島島2基(うち1基は前年度調査区からの延長部)のほか、平安時代末の掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝などが検出された。第2遺構面は、飛鳥時代～平安時代前期に相当し、掘立柱建物跡5棟のほ



第1図 調査区配置図

か、井戸・土坑・溝などが確認された(この溝は、前年度検出したものの延長部で、後述する道路状遺構の東側溝)。第3遺構面は、古墳時代中期後半～後期初頭に相当し、竪穴式住居跡6基、溝などを確認した。第4遺構面は弥生時代後期終末～古墳時代初頭に相当し、竪穴式住居跡8基などを検出した。

平成8年度 C地区(約1,800m²)およびF地区(約2,000m²)の西半部(概要報告書ではF1地区、本書写真図版でもF1地区と表記)を対象として調査を実施した。C地区では、4面の遺構面を確認した。第1遺構面は、平安時代末～鎌倉時代に相当し、鎌倉時代に造成された島島2基のほか、平安時代末の掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝などを検出した。第2遺構面は、奈良時代後半～平安時代前期に相当し、大型の掘立柱建物跡1棟のほか、土坑などを確認した。第3遺構面は、飛鳥時代に相当し、掘立柱建物跡6棟・井戸・土坑3基(うち2基は鍛冶炉か)などを確認した。第4遺構面は弥生時代後期終末～古墳時代初頭に相当し、周溝を有する竪穴式住居跡2基を含む竪穴式住居跡8基・土坑などを検出した。F地区では6面の遺構面を確認した。第1遺構面は鎌倉時代以降に相当し、島島1基を検出した。第2遺構面は平安時代末～鎌倉時代に相当し、素掘り溝群を検出した。第3遺構面は奈良時代～平安時代中期に相当し、掘立柱建物跡8棟のほか、土坑、耕作地の痕跡(素掘り溝群)などを確認した。第4遺構面は古墳時代後期～飛鳥時代に相当し、沼状地形の痕跡が確認されたものの、顕著な遺構は確認できなかった。第5・6遺構面は弥生時代後期終末～古墳時代初頭に相当し、ほぼ同一地点を流れる流路跡を確認した。弥生時代後期終末段階に、一旦、洪水で埋没した流路(第6遺構面)が再び継続して同一地点を流れるもの(第5遺構面)で、流路内堆積土から多数の土器類とともに木製品も数多く出土した。

平成9年度 E地区(約1,000m²)およびF地区(約3,000m²)の東半部(概要報告書ではF2地区、本書写真図版でもF2地区と表記)を対象として調査を実施した。E地区では5面の遺構面を確認した。第1遺構面は平安時代末～鎌倉時代に相当し、鎌倉時代に造成された島島1基のほか、平安時代末の掘立柱建物跡・土坑・井戸などを検出した。第2遺構面は奈良時代～平安時代前期に相当し、掘立柱建物跡4棟のほか、道路状遺構2条(東西両側溝をなす溝4条)、土坑などを確認した。第3遺構面は飛鳥時代後半期(7世紀後半～8世紀初頭)に相当し、掘立柱建物跡4棟・土坑・溝などを確認した。第4遺構面は弥生時代後期終末～飛鳥時代前半期に相当し、竪穴式住居跡29基などを検出した。その後、弥生時代後期後半の第5遺構面の存在を確認したが、平成9年度内に終了することが困難となったため、次年度に調査を継続することとなった。F地区では、前年度の西半部と同様、6面の遺構面を確認した。第1遺構面は鎌倉時代以降に相当し、島島を3基検出した。第2遺構面は平安時代末～鎌倉時代に相当し、素掘り溝群を検出した。第3遺構面は平安時代中期～後期に相当し、掘立柱建物跡2棟のほか、土坑・耕作地の痕跡(素掘り溝群)などを確認した。第4遺構面は古墳時代後期～飛鳥時代に相当すると考えられるが、顕著な遺構は確認できなかった。第5・6遺構面は弥生時代後期終末～古墳時代初頭に相当し、ほぼ同一地点を流れる流路跡を確認するとともに、第6遺構面では流路の東側で水田跡を検出した。水田跡は、洪水による砂層に覆われ、稲株痕跡を明瞭に残していた。

平成10年度 平成10年度は、前年度に調査終了が困難となったE地区第5遺構面の調査を実施した。第5遺構面は、当初、水田跡が検出されるものと考え調査を進めたが、最終的に稲株痕跡と考えている小孔群と、東西方向を主体とする素掘り溝群を検出したにすぎず、耕作地であることは間違いないものの、水田としての明瞭な痕跡を確認することはできなかった。なお、この調査の過程で、第4遺構面で確認できなかった古墳時代の竪穴式住居跡を4基追加確認した。

2. 調査の体制

調査組織は、第1表の通りである。

第1表 調査組織一覧表

調査年度	原因者	調査主体者	調査責任者	事務局	調査担当責任者	調査担当
平成6年度	日本道路公団	樋口隆康	城戸秀夫	佐伯拓郎	安藤信策	調査第3係長 辻本和美 調査員 竹原一彦
平成7年度	日本道路公団	樋口隆康	木村英男	園山哲二	安藤信策	調査第3係長 辻本和美 調査員 八木厚之 調査員 森下 衛
平成8年度	日本道路公団	樋口隆康	木村英男	園山哲二	安藤信策	課長補佐兼 調査第3係長 奥村清一郎 主査調査員 古瀬誠三 調査員 森下 衛 調査員 大岩洋一
平成9年度	日本道路公団	樋口隆康	木村英男	福嶋利範	安藤信策	課長補佐兼 調査第3係長 奥村清一郎 主査調査員 古瀬誠三 調査員 森下 衛 調査員 柴 暁彦
平成10年度	日本道路公団	樋口隆康	木村英男	福嶋利範	安藤信策	主幹調査第3係長事務取扱 平良泰久 調査員 森下 衛 調査員 柴 暁彦

調査期間中は、下記の方々から協力および有益な指導・助言をいただいた。記して謝意に代えたい(順不同、敬称略)。

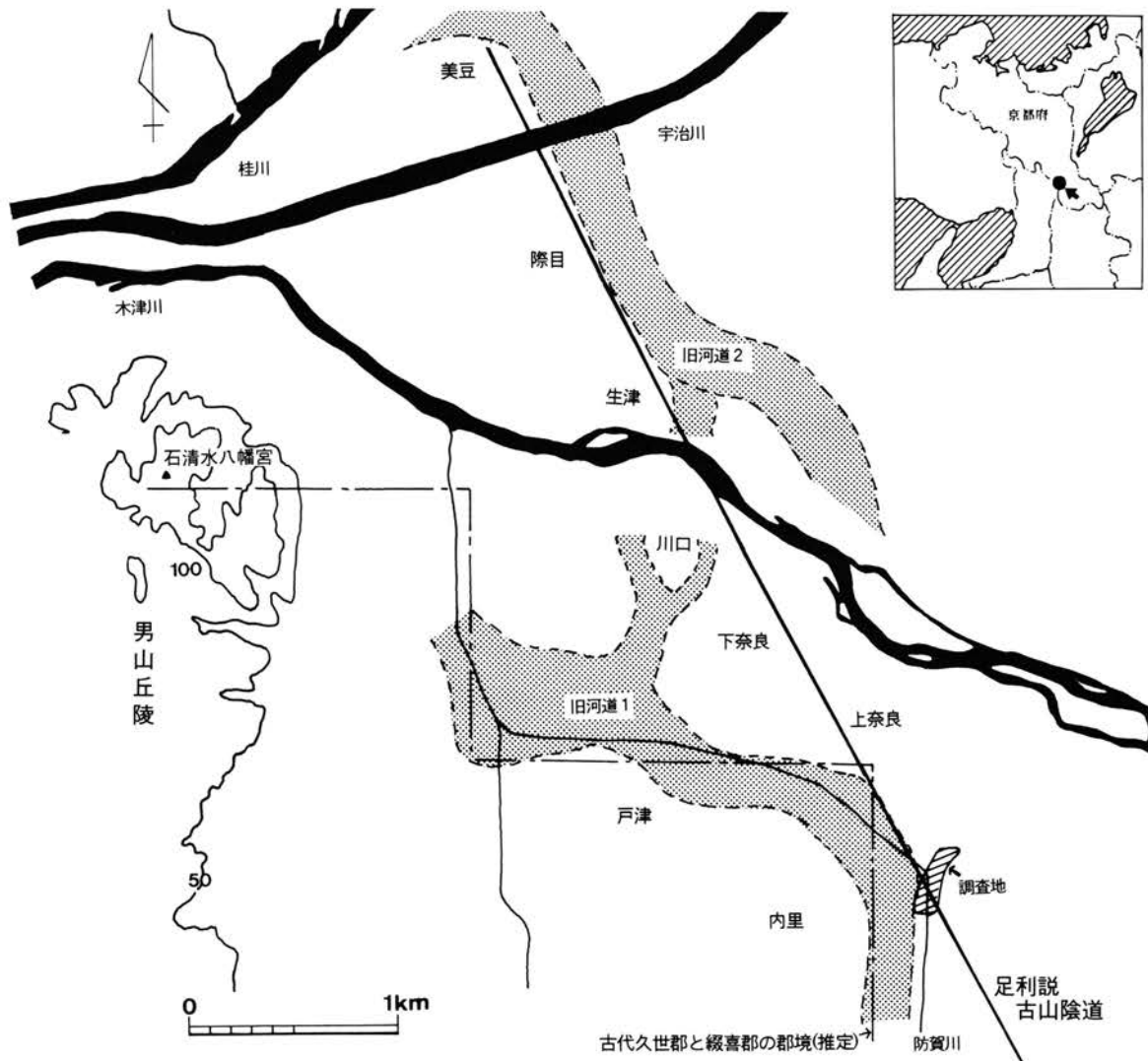
足利健亮(故人)、井上満郎(京都産業大学)、都出比呂志(大阪大学)、高橋美久二(滋賀県立大学)、高橋誠一(関西大学)、山中敏史(奈良国立文化財研究所)、杉原和雄(京都府立山城郷土資料館)、八十島豊成・大洞真白(八幡市教育委員会)、赤松一秀(四日市市埋蔵文化財センター)、植山 茂・山下秀樹・定森秀夫(京都文化博物館)、荒川 史・吹田直子(宇治市教育委員会)、鷹野一太郎(京田辺市教育委員会)、中島 正(山城町教育委員会)、辻 美紀(大阪市文化財協会)、小森俊寛・上村憲章(京都市埋蔵文化財研究所)、亀田修一(岡山理科大学)、尾野善裕(京都国立博物館)、金田章裕(京都大学)、古閑正浩(大山崎町教育委員会)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里・上奈良に所在する。八幡市は、京都府の南部、山城盆地の西南部に位置する。その市域は、西辺から南辺を石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵から連なる丘陵部が占め、北東部には木津川によって形成された沖積平野が広がる。北辺～東辺を木津川が流れ、これを介して東に城陽市、北東に久世郡久御山町、北に京都市および大山崎町と接する。また、南方は京田辺市と接し、西方は大阪府との府境をなし、男山丘陵上の府境を介して大阪府枚方市と接する。内里八丁遺跡は、このうち市域北東部に広がる平野部に位置している。

遺跡の北東、約4 kmには、かつて淀川流域の遊水池として機能した巨椋池が存在した。山城盆



第2図 調査地周辺地理的環境図

地を流れる宇治川・大堰川(桂川)・木津川の各河川は、長い歴史のなかで、これに流入したり、分離したりと、その流路を時代とともに変化させてきた。なかでも木津川は、その流域に多量の土砂を堆積させるとともに、その流路を幾度も変化させ今日に至っている。現在の木津川流路は、内里八丁遺跡の北東部で大きく流れを西方へ変え、北西方向へ流れた後、宇治川そして大堰川(桂川)と合流し淀川となるが、これは明治初年に大幅な流路の付け替えが行われ、安定した流路が人工的に構築されて以後の姿である。かつては、木津川は、その流域縁辺に自然堤防と呼ばれる微高地を多数形成し、その間を不安定に流れていた。

近年の木津川流域における発掘調査成果は、その縁辺の集落遺跡の分布が、こうした自然堤防と深く結びついて立地していることを明瞭に物語っている^(注4)。ただし、中・近世以後に急激に進行した多量の土砂の堆積作用は、多くの自然堤防を地表下に埋没させてしまっており、現況の地表観察でその痕跡を確認することは非常に困難である。

こうしたなか、現在の八幡市北東部の平野部においては、一帯が圃場整備されるまでの地形図や空中写真によって、木津川旧流路やこれによって形成された自然堤防を比較的明瞭に復原することができる。すなわち、一帯には、木津川をはじめとする大小河川の旧流路や、これらによって形成された自然堤防が随所に分布していたことが確認されるのである。そして、内里八丁遺跡をはじめ、平野部で確認されている数多くの集落遺跡が、現在では水田下に埋没している自然堤防上に立地していることも容易に推測できる。

内里八丁遺跡の立地する自然堤防の形成に深く関与したと考えられる旧河道は、旧蜻蛉尻川と称される現在の防賀川の西側を南北に走る河道の痕跡である。この旧河道は、空中写真の観察によれば幅50m以上あり、木津川旧流路の一つと考えて差し支えないものと判断している。旧河道の痕跡をより広範囲な地形図や空中写真などから復原すると、現在の八幡市岩田の南東部で現木津川流路からは西側へ大きく流れを変え、西方へ蛇行気味に進んだ後、ほぼ直角に北方へ屈曲し、内里集落の東側を北上する。その後、上奈良の南側で再び西方へ直角気味に折れ、戸津の北側で北上する流れと、西方へ向かう流れに分岐している。この先については不明な部分が多々あるが、北方へ流れた河道は、川口付近からさらに北流し、もう一方はそのまま男山丘陵東麓付近まで西流したようである。

この旧河道によって形成された自然堤防は、その両岸部において、北北西-南南東方向へ連なる。このことは、旧河道縁辺に点在する現集落や集落遺跡の分布によって確認される。すなわち、旧河道の東岸部では、南から岩田・上奈良・下奈良・二階堂の各集落が連なり、これらを結ぶように西岩田遺跡・内里八丁遺跡・上奈良遺跡・上奈良北遺跡・出垣内遺跡・今里遺跡・下奈良遺跡(第3図：2・4～7)などが帯状に分布している。西岸部でも内里・戸津などの現集落とこれに一部重複して新田遺跡・内里五丁遺跡・戸津遺跡など(第3図：9・10・12)が認められ、東岸部と同様のことが確認される。一方、戸津集落の北方で二股に分岐した後に北流する流れの西岸には川口集落から現在の久御山町生津から際目、そして京都市美豆へと現集落が連なり、ここにも微高地(自然堤防)の存在が想定できる。このように、八幡市北東部の平地部の地形は、上記の

旧河道によって大きく二分され、ここに分布する数多くの集落遺跡も両岸に形成された自然堤防と深く結びついて立地しているといえるのである。

なお、この旧河道は、古代山城国久世郡と綴喜郡との郡境をなしていたとも考えられている^(注6)。これは、近年の南山城地域の古代条里制に関する研究によるところが大きく、古代久世郡と綴喜郡との郡境が男山丘陵の先端付近から東方へいくと、上記の旧河道に沿うように復原されており、その東岸部一帯は久世郡、西岸部一帯は綴喜郡にそれぞれ相当するとされる。こうした見解に従えば、東岸に位置する内里八丁遺跡は古代久世郡那羅(ナラ)郷に属していたこととなる。

第2節 歴史的環境

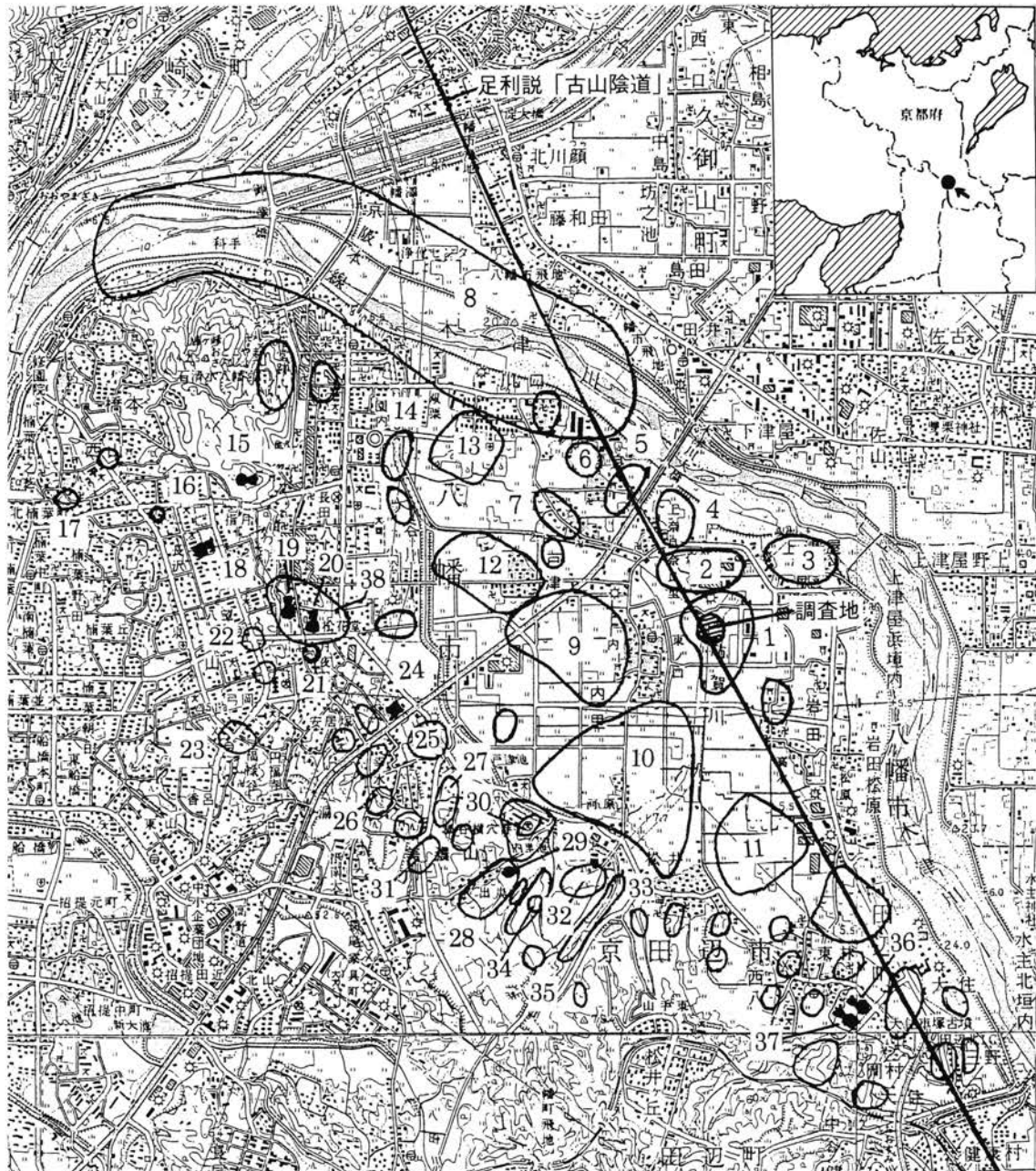
内里八丁遺跡をめぐる歴史的環境に関しては、第3図に示した周辺の主要な遺跡が物語っている。その概要は、八幡市域西～南部を構成する丘陵部およびその裾部分に古墳をはじめとする墳墓や弥生～古墳時代の集落跡、さらには古代寺院などが分布し、その一方で市域の東～北部を構成する平野部においては、先述したように木津川旧河道の縁辺に形成された自然堤防を利用して弥生時代から中世にいたる時期の集落跡が広範囲に分布する、というものである。

以下では、主要な遺跡を概述することにより、内里八丁遺跡の歴史的な環境をうかがうこととする(文中カッコ内数字は、第3図の遺跡番号に対応)。

現八幡市域内では、旧石器・縄文時代の遺跡は発見例が無いに等しい。丘陵部に立地する荒坂遺跡(35)や宮の背遺跡(31)でナイフ形石器が、金右衛門垣内遺跡(27)で縄文時代後期と考えられる石錘が、それぞれ単独で出土しているにすぎない。

弥生時代になると集落は、丘陵部からさらに低地部へ広がる。耕作地の確保が大きな要因だったようで、内里八丁遺跡G地区において行われた調査では、中期初頭段階の竪穴式住居跡1基をはじめ、縄文時代晩期～弥生時代中期の多量の土器片が出土している^(注7)。また、集落跡の中心部は未確認であるが、今回報告している内里八丁遺跡の一連の調査でも、わずかながら弥生時代中期の土器片が出土するとともに、土坑などが確認されている。これに対し、市域南辺をなす丘陵の裾部一帯でも、これまでに中期段階の金右衛門垣内遺跡(集落跡)・幸水遺跡(方形周溝墓群)などが確認されている。金右衛門垣内遺跡(27)は、古くからその存在が確認されていたもので、弥生時代中期の中核的な集落跡と考えられている。また、近年発掘調査が行われた幸水遺跡(25)は、金右衛門垣内遺跡に近接して所在し、ほぼ同期の方形周溝墓群が確認されたことから、集落跡としての金右衛門垣内遺跡に対応した墳墓群として把握されるにいたっている^(注8)。

弥生時代後期の遺跡としては、丘陵部に分布する幣原遺跡(23)・西の口遺跡(26)・宮の背遺跡(31)・中の山遺跡(22)などに加え、平野部の木津川河床遺跡(8)、そして今回報告している内里八丁遺跡などがある。前者には、いわゆる高地性集落と呼ばれてきたものが多く、枚方市側の平野部を意識した丘陵部に点在する。中でも、近年調査が行われた西の口遺跡では、平坦部の無い丘陵斜面に設けられた7基の竪穴式住居跡が確認され、従来から丘陵上に立地することで高地性集落と一括されてきた上記の集落跡をその立地条件等から細分すべきことを再認識させるもので



第3図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | | | |
|-----------|------------|--------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 内里八丁遺跡 | 2. 上奈良遺跡 | 3. 上津屋遺跡 | 4. 上奈良北遺跡 | 5. 出垣内遺跡 | 6. 下奈良遺跡 |
| 7. 今里遺跡 | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 内里五丁遺跡 | 10. 新田遺跡 | 11. 魚田遺跡 | 12. 戸津遺跡 |
| 13. 河口扇遺跡 | 14. 嶋遺跡 | 15. 石不動古墳 | 16. 西山廃寺 | 17. 平野山瓦窯 | 18. 茶臼山古墳 |
| 19. 西車塚古墳 | 20. 東車塚古墳 | 21. 志水廃寺 | 22. 中の山遺跡 | 23. 幣原遺跡 | 24. ヒル塚古墳 |
| 25. 幸水遺跡 | 26. 西ノ口遺跡 | 27. 金右衛門垣内遺跡 | 28. 本郷遺跡 | 29. 王塚古墳 | |
| 30. 狐谷横穴群 | 31. 宮ノ背遺跡 | 32. 女谷横穴群 | 33. 荒坂横穴群 | 34. 美濃山廃寺 | |
| 35. 荒坂遺跡 | 36. 大住車塚古墳 | 37. 大住南塚古墳 | 38. 女郎花遺跡 | | |

(注9) あった。一方、後者の2遺跡は、木津川が形成した自然堤防上に立地する集落跡である。木津川河床遺跡は後期終末から古墳時代前期頃を主体とするもので、内里八丁遺跡は後期後半から古墳時代へと連綿と続く集落遺跡である。特に内里八丁遺跡では、後述するように、集落跡・水田跡・そして墳墓が確認されている。

古墳時代に至ると、丘陵部に多くの古墳が築かれた。前期後半を主体に築かれたとされる石不動古墳(15)、茶臼山古墳(18)、西車塚古墳(19)、東車塚古墳(20)、さらに京田辺市域の大住車塚古墳(36)、大住南塚古墳(37)は、男山丘陵から市城南辺を経て京田辺市へつづく丘陵上ないしその裾部に築造されているもので、南山城地域の木津川西岸を代表する前方後円(方)墳である。なかでも、西車塚古墳と東車塚古墳、大住車塚古墳と大住南塚古墳は、2基が東西に並び築かれており、ともに一定地域を二世代にわたって治めた首長墓としての様相を体現している。また、茶臼山古墳からは、九州の阿蘇石で作られた石棺が出土しており注目される。

これらに続く首長墓としては、巨大な粘土槨が確認され、前期末～中期初頭に比定されるヒル塚古墳(24)(方墳)や、大型円墳(前方後円墳の可能性もあり)の美濃山王塚古墳(29)などが認められるが、これらの築造後は首長墓と目される大型墳は認められなくなる^(注10)。

後期になると、通常よくみられる横穴式石室を内部主体とする古墳は、当地域には無い。これにかわるものとして、八幡市南部から京田辺市にかけての地域に数多く認められる横穴墓があげられる。八幡市内には狐谷横穴群(30)・荒坂横穴群(33)・女谷横穴群(32)などが確認されているが、こうした墓制は、当地へ移住したとされている隼人との関わりが指摘されている^(注11)。

一方、こうした各期の古墳の造営主体となった集落跡に関しては、不明な点が多い。現在のところ良好な集落遺跡の確認は数少ない上述の木津川河床遺跡・内里八丁遺跡G地区や女郎花遺跡(38)で古墳時代前期の集落跡の一角が確認されているにすぎない。こうしたなか、本書で報告する内里八丁遺跡D・E地区で、古墳時代中期後半～後期の集落跡が確認されている点は貴重な資料と言えるだろう^(注12)。

飛鳥時代～奈良時代の遺跡としては、まず、古代寺院が注目される。現八幡市域には美濃山廃寺(34)・志水廃寺(21)・西山廃寺(16)の3か寺が確認されている^(注13)。うち志水廃寺・西山廃寺は、調査によって堂・塔が確認され、7世紀後半～末頃には創建されていたと考えられている。また、ともに近接して瓦窯跡も確認されている。一方、美濃山廃寺は、藤原宮を前後する時期の軒瓦の出土は確認されているものの、遺構としては掘立柱建物跡の一部が検出されたにすぎず、寺院跡かどうかを含め不明な点が多い。これら3か寺は、いずれも市城南～北辺の丘陵裾付近に立地するものであり、当時の有力者が平野部ではなく、丘陵裾部に居住していた可能性を示唆している。ただし、これらを結ぶライン上には古山陽道が想定されており、こうした交通路との関連で古代寺院が集中的に建立されたことも想定する必要があるだろう。なお、これらに対し、後述するが、内里八丁遺跡においても7世紀後半・8世紀後半の2時期の古瓦が出土している。これが寺院跡に伴うものかどうか不明な点が多々あるものの、こちらは古山陰道が付近を通過するように復原されており^(注14)、上記3か寺を含め、古瓦が出土する遺跡と古代交通路との関連は十分注目すべきものといえるだろう。また、このほか撰津四天王寺へその創建瓦を供給した平野山瓦窯(17)の存在も重要である。

飛鳥時代から平安時代の集落遺跡^(注15)としては、戸津遺跡(12)や上奈良遺跡(2)、荒坂遺跡(35)、女郎花遺跡(38)などで建物跡などが確認されている。このうち、荒坂遺跡では、一辺1mに及ぶ

方形の掘形を有す大型の掘立柱建物跡が数棟確認されている。残念ながら時期を特定する出土遺物に欠け、詳細を検討することはできないが、単なる一般集落とは異なった要素を示し、郷倉の可能性が指摘されている。このほか、今回報告している内里八丁遺跡では、上記のように、古瓦の出土をはじめ、古山陰道ではないかと考えられる道路状遺構や大型の建物跡などが検出されており、古山陰道に関連した公的施設の可能性もある。また、その北に位置する上奈良遺跡は、その地名から『延喜式』内膳司条に記載された古代の菜園「奈良園」の候補地として注目されている。過去の調査では則天文字を記したものを初めとする多くの墨書土器が出土している。

平安時代には、市域の北西部、男山丘陵の先端付近に石清水八幡宮が創建された。これ以後、八幡市の中心をなすのは、その門前町として発展した現在の市街地部分となった。一方で市域の北東部をしめる平野部の大半は、八幡宮領としての荘園となる。内里八丁遺跡の位置する一帯も、先の「奈良園」を引き継いだ中世「奈良荘」の一部に相当していた可能性が高い^(注17)。

そして、これ以後、遺跡周辺は、耕作地化が急激に進み、現在とかわらないものへとかわったようである。

なお、当遺跡の名称にもある内里という地名は、現在の八幡市内の大字名であるが、この地名は古代にまで遡り、旧綴喜郡有智郷(内郷)に由来する。有智郷の名は、『日本書紀』雄略天皇12年3月条に認められるほか、郷内に居住したとされる内氏の名も『古事記』や『日本書紀』に散見される。一方、地理的環境でもふれた久世郡那羅郷は、現在の八幡市上奈良・下奈良集落(字名)を中心とする一帯に比定されている。今回の調査地を含む内里八丁遺跡は、上奈良集落の南方に位置し、先の内里集落とは旧流路を隔てた東側に位置することとなるが、地理的な状況からすれば那羅郷に属していた可能性が高い。この那羅の地も、『日本書紀』などに散見される^(注18)。

第3章 検出遺構

内里八丁遺跡C～F地区の発掘調査では、弥生時代中期・弥生時代後期終末～古墳時代前期、古墳時代中期後半～後期、飛鳥時代、奈良～平安時代前期、平安時代中期～後期、平安時代末～鎌倉時代という大きく分けて7時期にわたる遺構を検出した。以下、時代を追ってこれらを報告する。なお、以下に報告する遺構の番号については、これまでの年次毎に付してきた番号(2～3ケタ)をすべて3ケタの表記に統一し、さらにその前に調査年次(西暦)の下二桁を付して5ケタによる表記とした。また、同一の遺構と判断されるものについては、適宜、番号をいずれかの調査年次の番号に統一した。

第1節 層序と遺構面の概要(図版第1)

調査地においては、中世後半～近世にわたって各所に島島と呼ばれる周囲より一段高い畑地が営まれた。これらの多くは、調査着手直前まで機能し、主に水田が広がる中に点在する畑地として利用されていた。

この島島の構築に際しては、後述するごとく、周囲の土を削り取り(地下げを行い)、その削り取った土砂を島島部分に盛り上げる作業が行われていた。このため、島島部では、盛土下部に旧来の土層が良好に確認できるものの、島島以外の部分では、大きく土層が削平されてしまっていた。したがって、調査にあたっては、島島部では、これを造成する際に行なわれた盛土部分を全て取り除いた段階から、順次、層位を確認しつつ調査を行うことができたが、島島以外の部分では、島島造成の際の削平面直下で、ここに遺存している各種の遺構を一括で確認せざるを得なかった。

なお、調査区の基本的な層序は、図版第1に示したとおりである。調査対象地内では、微細な地形の差異が認められ、本来からの微高地上に相当するC・D・E地区と、旧来は流路などが存在し低地部分に相当していたF地区では、大きく層序が異なっていた。

1. C・D・E地区の基本層序と遺構面

ここでは、現在の耕作土、島島としての盛土(旧耕作土)の下に中世段階(少なくとも13世紀頃と判断している)の耕作面(島島造成時の面)があり、これを第1遺構面と把握した。この遺構面は、C・D地区では標高12.2m前後、E地区では12.4m前後を測り、耕作の痕跡と考えられる素掘り溝群を主体とする遺構を検出した。また、これと同一面で12世紀頃の掘立柱建物跡や井戸・土坑などの存在も確認したが、多くの場合、素掘り溝があまりに多数存在したため、これを検出することが困難な状況となり、若干の掘り下げを行った後(10cm程度)、これらの検出作業を進め

た。この場合、土層の違いによって遺構面を違えたわけではない。

第1遺構面とした黄茶褐色砂質土土層(上述の第1-1遺構面)の下方約20~30cmで明黄茶褐色砂質土土層が確認され、これを第2遺構面と把握した。第2遺構面は、C~E地区で標高12~12.1mを測る。時期的には奈良~平安時代に相当する。掘立柱建物跡や溝・井戸などが検出された。

第2遺構面のさらに下方20~30cmで暗黄褐色砂質土土層となり、これを第3遺構面と把握した。この第3遺構面は、各調査区とも標高11.6~11.8mを測るが、この遺構面では調査区によって検出した遺構の時期が異なる。C地区では飛鳥時代、D地区では古墳時代中期末~後期初頭、E地区では飛鳥時代(遺構の項でも詳述するように飛鳥時代でも後半期に属する掘立柱建物跡など)の遺構がそれぞれ検出された。

第4遺構面は、さらに下方20~30cmで確認した。C・D地区では淡茶褐色土をベースとして(標高11.4m前後)、弥生時代後期終末~古墳時代初頭の遺構を、E地区では淡茶褐色砂質土をベースとして(同11.6~11.8m)、弥生時代後期終末~飛鳥時代(7世紀前半~中葉)の遺構を検出した。うち、E地区で検出した遺構は、弥生時代後期終末~古墳時代初頭、古墳時代中期末~後期、飛鳥時代などのものでは遺構の検出レベルに若干(5~10cm)の差異があったようであるが、掘削を進める上で遺構面の差異として認識できるような土色・土質などの変化は認めることはできず、最終的に同一面ですべての遺構を検出することとなった。

第5遺構面はE地区においてのみ確認した。第4遺構面の下方約20~30cmの標高11.4~11.5mで、暗茶褐色粘質土が認められ(北から南へ向かって10cm前後の傾斜が認められた)、ここで耕作の痕跡と思われる素掘り溝群および稲株痕と考えられる小孔群を検出した。時期的には、これを明確にする遺物はきわめて限られたが、弥生時代後期終末に属すると判断している(上述の第4遺構面の遺構に先行する)。

なお、島島部以外では、C・D・Eの各地区で差異はあるものの、標高11~11.6m付近までが削平を受けていた。

図版第1の上段には、土層図のサンプルとして、C地区で検出した島島の検出部南端と北端(実際には東端と西端に相当)付近の土層図を示した。ここでは、島島構築以降、少なくとも3回以上のかさ上げが確認される。そして、おそらくその際に、少なくとも1回、島島の規模が若干縮小されていることも確認される(図中、構築時の島島と改修時島島)。ここで確認した島島は、その後、削平され、調査着手時には水田となっていた。なお、この島島の削平は比較的新しく、大正~昭和に至ってからのようである。

2. F地区の層序と遺構面

F地区では、島島部において少なくとも3層の耕作面を確認した(第1遺構面~第3遺構面)。第1遺構面は、盛土を除去した段階ですぐに確認したもので、西方で標高11.7~11.8m付近の黄褐色粘砂質土をベースとする。第2遺構面は、その下方20~30cmの標高11.5m付近で確認したもので、ベース土となる淡黄灰色砂質土は、第1遺構面のベース土である黄灰色粘砂質土とほとんど

ど区別はつかない。ただこの面では、第1遺構面の素掘り溝群とは、明らかに方向の異なる素掘り溝群が確認された。第3遺構面は、さらにその下、約20cmの標高11.3m付近で確認した暗黄灰色砂質土をベース土とする。上記の第2遺構面とはほぼ同一の方向を示す素掘り溝群と、これと一部重複する掘立柱建物跡を確認した。時期的には奈良時代末から平安時代後期(8世紀末～12世紀後半頃)のものと判断している。

第4遺構面は、島島造成により削平された周囲とほぼ同じレベル(標高11.2m付近)にあたり、暗褐色粘質土をベースとする。この遺構面では、明確な遺構を確認することはできなかったが、後述する第5・6遺構面で確認された流路部分が若干窪地となり、その部位が最終的に埋没した状態を示していた。出土遺物などから、ほぼ古墳時代後期末～飛鳥時代に相当するものと考えている。

第5遺構面は、第4遺構面の下方約60cmで確認したもので、標高10.6m付近の暗乳灰色砂土をベースとする。弥生時代後期末～古墳時代前期に機能した流路2条(東側の流路は西側の肩部のみ確認したもので、G地区の調査では池もしくは沼状地形とも考えられている^(注19))が調査区の北方から流入し、調査区の中央で合流する。

第6遺構面は、上記の流路の洪水で堆積した厚さ50～60cmの砂層を除去した、標高10m付近の暗青灰色粘質土上面で検出した。流路はほぼ第5遺構面と同じ地点を流れ、これに囲まれた舌状の微高地上において水田跡を確認した。流路はさらに、下層に形成されている状況を確認したが、この第6遺構面に対応する流路の底面ですでに現地表下4mを超え、これ以後の掘削が非常に危険と判断されたため、部分的に断ち割りトレンチを入れ、以下の土層の確認を行うにとどめ、調査を終了した。

第2節 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構には、C・D地区の第4遺構面で検出した土坑(S K 95095・95096・96103)がある。これらは、後述する弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡床面(S H 96078)や、この時期の遺構面の調査終了後に行った断ち割りなどによって確認したものである。ただし、土層の検討の結果では、各遺構の検出レベルは、弥生時代後期末～古墳時代初頭のものとかわらない(標高11.4m付近)ことが判明している。土層(遺構埋土)の識別が非常に困難であったため、本来の第4遺構面調査時に検出できなかったものと思われる。

土坑 S K 95095(図版第18) D地区北半部で検出した。1m×0.6mの楕円形をなし、深さ約20cmが遺存する。埋土は炭混じりの暗青灰色砂質土で、弥生時代中期の土器片(第4図1・2)が出土した。

土坑 S K 95096(図版第18) D地区北半部、先のS K 95095の西側で検出した。1.2m×1.4mの隅丸方形の土坑で、深さ約20cmが遺存する。埋土はS K 95095と同一で炭混じりの暗青灰色砂質土であった。

土坑 S K 96103(図版第18) C地区の中央付近やや東寄りで検出した。後述する弥生時代後期

末の竪穴式住居跡(S H97098)の西壁中央付近で確認した。0.7m×0.8mの隅丸方形をなし、深さ約20cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、埋土中から弥生時代中期と考えられる甕の口縁部片(第4図3)が出土した。

第3節 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構

弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構は、C～F地区の全ての調査区において認められた。C・D地区では第4遺構面が、E地区では第4・5遺構面が、F地区では第5・6遺構面がこの時期に相当する。主な検出遺構には、C～E地区にわたって検出した集落跡に関する竪穴式住居跡や土坑・溝など、F地区で検出した流路跡並びに水田跡、E地区の耕作地の痕跡などがある。

1. 集落跡

竪穴式住居跡は、C地区からD地区北辺部、D地区中央から南半部、E地区の大きく3群に分かれて分布する。

C地区からD地区北辺で検出した竪穴式住居跡は、総数13基を数える。本グループを最も特徴づけるのは、S X96098・96079とした周溝状遺構である。調査当初は、墳墓にともなう周溝ではないかとも考えたが、当調査区では住居跡にかかる遺構以外は検出されず、最終的に住居跡に伴う施設と判断した。なお、C地区の竪穴式住居跡の中には、この周溝を切って設けられているものや、これに切られるものなどが存在することから、少なくとも3時期以上にわたるものが存在することとなる。ただし、出土遺物の検討などからは、細かな変遷を明らかにすることはできなかった。

D地区中央付近から南半部に分布する竪穴式住居跡群は総数10基を数え、これに掘立柱建物跡1棟が伴う。細かくみれば、一辺約7mの大型の竪穴式住居跡(S H95090)を中心に分布する北半部の6基と、南半部の4基に分かれる。

E地区で検出した竪穴式住居跡は総数9基を数える。多くが古墳時代～平安時代の遺構に削平を受けており、本来はこれら以外にも住居跡が存在した可能性が高い。また、時期的には古墳時代前期に属するものも認められ、上記の二つのグループより新しい様相を示す。以下、遺構番号順に各遺構の概要を記す。

竪穴式住居跡 S H94007(図版第12) D地区中央部に位置する住居跡群の1基である。一辺約4.2～5.2mの隅丸方形を呈し、深さ約20cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では4か所の支柱穴ならびに東南壁中央の壁面に接して貯蔵穴とみられる円形の浅い土坑を検出した。土坑は径1.1～1.3mの楕円形をなし、検出面からの深さ約15cmを測る。住居跡の床面は水平でなく、支柱穴で囲まれた中央部がやや高くかつ硬化しており、周壁にかけてゆるやかに下がる。床面の中央では広範囲に炭・灰の堆積が認められたことから、中央に炉が存在したと判断されるが、明瞭にその痕跡を確認することはできなかった。また、南西壁面に接して上面が平らな花崗岩を検出した。この花崗岩の周囲は通路状に高まり、住居跡中央に続いている。遺物は、床面付近・貯

蔵穴(土坑)内などから小型壺・甕・器台などが出土した(図版第51:8・9・11~13)。

竪穴式住居跡 S H94008(図版第12) D地区中央部に位置する住居跡群の1基である。一辺4.7m前後の隅丸方形をなす。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約15cmが遺存する。床面では4か所の支柱穴、東南壁中央の壁面に接して貯蔵穴とみられる楕円形の浅い土坑、中央付近で炉跡を検出した。土坑は長径1m・短径0.7m・深さ30cmを測る。炉跡は楕円形をなし、長径0.6m・短径0.4m・深さ5cmを測り、東端部が特に焼け締まっている。S H94007と同様に、床面中央が硬化し、外周部より高まる。また、住居跡の北東隅付近には白色の粘土塊(バケツ約1杯分)が集積されていた。遺物は、白色粘土塊付近から器台が、床面から壺・甕・高杯が出土した(図版第51:1~7)。

竪穴式住居跡 S H94009(図版第12) D地区中央部に位置する住居跡群の1基である。一辺約3.6~3.8mの隅丸方形を呈し、深さ約5cmが遺存する。住居跡の中央部は後世の溝で削平されている。床面では、支柱穴を3か所で検出したが、炉跡・貯蔵穴などは認められなかった。埋土は暗茶褐色砂質土で、遺物は埋土中から小片がわずかに出土したのみである。

竪穴式住居跡 S H94010(図版第12) D地区中央部に位置する住居跡群の1基である。一辺約4mの隅丸方形をなし、深さ約10cmが遺存する。住居跡の東半部は後世の溝で削平されている。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では、支柱穴を4か所で検出したほか、南半部で炭・灰の堆積が認められた。遺物は、埋土中から小片がわずかに出土したのみである。

竪穴式住居跡 S H94011(図版第12) D地区中央部に位置する住居跡群の1基である。やや小型の住居跡で、一辺約3.4mの隅丸方形を呈すると思われるが、住居跡の北側は明瞭に確認できなかった。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約10cmが遺存する。床面では、南西壁面のやや西寄りの地点で貯蔵穴とみられる小土坑を検出した。土坑は一辺約0.4mの方形を呈し、検出面からの深さ約5cmを測る。また、この小土坑の北東側床面では炉跡を検出した。炉跡は、径約0.3m・深さ約5cmの小ピット内に炭が充填されていた。遺物は、埋土中から甕・高杯の小片が出土したのみである。

竪穴式住居跡 S H95025(図版第13) D地区中央部に位置する住居跡群の1基で、北部グループに属する。一辺約4.2mの隅丸方形を呈し、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では4か所の支柱穴のほか、中央付近で炉跡と思われる炭の充満した丸底状のピットを検出した。いずれも径約30cm前後を測る。なお、南辺中央付近で、住居跡に重複する1×0.6mの楕円形の範囲で土坑状に土色の変化する個所を認めた。単に土坑と考えるより、住居跡の出入口に相当していた可能性があるかと判断している。遺物は、埋土中および床面付近から小片が出土した(図版第54:93~98)。

竪穴式住居跡 S H95087(図版第13) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、D地区の北東隅付近に位置する。遺存状況が悪く、一辺4m以上の隅丸方形の竪穴式住居跡と考えられるが、南西コーナー以外は確認できなかった。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは最も良く残っている部分で5cm程度である。床面では周壁溝は確認されなかったが、4か所で支柱穴を検

出するとともに住居跡の中央付近で炭の広がりや炉跡と考えられる径約40cm・深さ約5cmのピットを確認した。また、ここでもS H95025と同様、西辺上でこれに重複する1.2m×0.8mの楕円形の土坑状遺構を確認した。やはりこれも、住居跡の出入口に関するものではないかと考えている。遺物は、床面付近で、小型壺・小形器台などが出土した(図版第54:91・92)。

竪穴式住居跡 S H95088(図版第13) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、D地区の北辺中央付近に位置する。大半が調査区外へ及んでおり、隅丸方形を呈する竪穴式住居跡の南辺を確認したにとどまる。南辺が約4.9mを測り、深さ約5cmが遺存するほか、詳細は不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では周壁溝・支柱穴とも確認されなかった。遺物は、床面付近で甕体部片が出土したのみである。

竪穴式住居跡 S H95089(図版第13) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、D地区の北西隅付近に位置する。隅丸方形を呈する住居跡の南東コーナー付近を検出したにとどまり、全容は不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では周壁溝は確認できず、南東隅の支柱穴を1か所検出したにすぎない。南辺は約4mを測り、深さ約8cmが遺存する。遺物は、床面付近で甕体部片が出土したのみである。

竪穴式住居跡 S H95090(図版第12) D地区中央部に位置する住居跡群のひとつで、北部グループに属する一辺約7～7.4mの大型の竪穴式住居跡である。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約20cmが遺存する。周壁溝は確認されなかったが、4か所で支柱穴を検出するとともに、中央付近で炉跡と考えられる径約60cm・深さ約15cmの丸底状のピットを確認した。遺物は、床面付近から壺・甕等が出土した(図版第54:99・100)。

竪穴式住居跡 S H95091(図版第13) D地区中央部に位置する住居跡群の1基で、北部グループに属する。S H95090の北側で検出した。その大半は中世段階の鳥島造成の際に大きく削平を受け、南側コーナー付近が遺存するにすぎない。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは約8cmが遺存する。コーナー部の北側1mでピットを1か所検出しており、本住居跡の支柱穴のひとつと考えている。遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S H95092(図版第15) D地区中央部に位置する住居跡群の1基で、北部グループに属する。S H95025の西側で検出した。やはり中世段階の鳥島造成の際に大きく削平を受け、東辺付近の1/3程度を残すにすぎない。東辺は約5.6mを測り、隅丸方形の竪穴式住居跡であったと考えられる。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約20cmが遺存する。床面では、周壁溝は確認されなかったが、北東コーナー付近で支柱穴を1か所検出した。遺物は比較的多く認められ、床面付近で壺・甕・高杯・器台などが出土した(図版第51:10・14～22)。

竪穴式住居跡 S H95094(図版第13) D地区中央部に位置する住居跡群の1基で、北部グループに属する。S H95025の南側で検出した。隅丸方形を呈する竪穴式住居跡の北側約1/2程度を確認したが、南半部は良好に検出できなかった。北辺で約4.6mを測り、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では、支柱穴を2か所で確認した。遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S H96076(図版第13) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、

C地区の北西隅付近に位置する。6.1m×5.6mの隅丸方形を呈す竪穴式住居跡で、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では、周壁溝・支柱穴のほか、中央付近で炉跡と思える丸底の浅いピットを検出した。遺物は、埋土中床面付近から壺・甕等が出土した(図版第54:80~90)。

竪穴式住居跡 S H96077(図版第14) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区の中央付近に位置する。一辺5.5~5.8mの隅丸方形の竪穴式住居跡と思われるが、東辺部から南東隅付近が中世期の溝によって削平される。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは最も良く残っている部分で20cm程度である。床面では、周壁溝および北辺中央で貯蔵穴とみられる土坑、4か所で支柱穴を検出した。遺物は、埋土中から小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H96078(図版第14) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区中央やや東寄りに位置する。西辺から南辺が後述する S X96079と重複し、これに切られているため、遺存状況は極めて悪い。一辺5.4m前後の隅丸方形をなすと考えられる。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約5cmが遺存する。床面では南壁相当部分で周壁溝と考えられる幅20cm前後の溝が確認されたほか、4か所で支柱穴を確認した。遺物は、床面付近から壺・甕などの破片が出土した(図版第52:41・42)。

竪穴式住居跡 S H96082(図版第15) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区西辺部で後述する S H96092と一部重複して検出した。S H96092に南西部分約1/3が切られる。一辺約6mの隅丸方形を呈し、深さ約20cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面では支柱穴を4か所で確認したが、周壁溝は検出できなかった。遺物は、埋土中から小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H96083(図版第14) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区の南西隅付近で検出した。一辺5.6~6.1mを測る隅丸方形をなし、深さ約40cmが遺存していた。きわめて遺存状況が良い。埋土は暗茶褐色砂質土で、床面より5cm程度上方で、建築材の一部かと思われる炭化物がわずかに認められたが、焼失住居のように広がりをもたず、ごく限られたものであった。床面では、周壁溝および4か所で支柱穴を検出するとともに、中央付近で炉跡と思われる径約50cmのピットを確認した。ピットは丸底で、深さ約7cmと浅い。その北側に約1m四方の範囲で炭の広がりが認められ、ピット底部にも炭が確認された。遺物は床面付近で、甕・鉢・台付鉢などが出土した(図版第52:38~40)。

竪穴式住居跡 S H96084(図版第14) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区南辺で検出した。南側1/3が調査区外へのびているため全容を確認できなかったが、一辺約5.6m(北辺)の隅丸方形を呈すると考えられる。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約16cmが遺存する。床面では、幅約10cmの周壁溝および3か所で支柱穴を確認した。また、中央付近で炉跡と思われる径約30cm・深さ5cmのピットを検出した。遺物は、埋土中から小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H96085(図版第14) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、

C地区北辺中央付近で検出した。北西隅部を中世以降の溝(S D96005)によって切られるが、一辺約4.2mの隅丸方形の竪穴式住居跡であったと考えられる。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約20cmが遺存する。床面では、周壁溝は確認されなかったが、主柱穴を4か所、中央で炉跡と思われる径約30cm・深さ約5cmのピットを1か所確認した。遺物は、埋土中から壺・甕・鉢・高杯・手焙り形土器などが出土した(図版第52:23~30・33)。

竪穴式住居跡 S H96086(図版第15) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区東半部北寄りで検出した。S X96098と重複し、大半をこれに切られているため遺存状況は悪い。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約18cmが遺存する。その形状は一辺約7mのややいびつな隅丸方形を呈する。遺物は、床面付近から甕・鉢等が出土した(図版第52:31・32・34~37)。

竪穴式住居跡 S H96091(図版第14) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、確実に竪穴式住居跡と言い切れない面もあるが、ここではその残骸として報告する。後述する中世期の溝(S D96005)などによって大半が削平されており、竪穴式住居跡であれば、その東辺部分が遺存していることとなる。東辺で約5.2mを測り、埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約10cmを測る。遺存部南東隅付近で礫敷および土坑、北寄りで炭・灰の集積を検出した。全容を明らかにできなかった点は残念であるが、竪穴式住居跡の形態をなしていたとしても単なる住居跡とは異なり、特別な意味をもった施設であったと考えている。後述するとおり、周溝遺構(S X96079)が南辺中央付近で直角に折れ、S H96078の西辺と重複しつつ本住居跡方向へと延びる。本住居跡の排水を兼ねた施設であったと考えている。遺物は礫敷部付近から甕・高杯などが出土した。

竪穴式住居跡 S H96092(図版第15) C地区からD地区北辺に分布する住居跡群のひとつで、C地区西辺部でS H96082と重複しており、これを切る。一辺約4.8mの隅丸方形を呈し、埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約25cmが遺存する。床面で主柱穴を4か所確認したが、遺物は埋土中から小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97263(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、E地区の東辺やや北寄りで検出した。遺存状況はきわめて悪く、南西隅付近並びに北東側の半分以上はすでに削平され、また深さも8cm程度が遺存するにすぎない。このため、方形の住居跡であることは確認されるものの、全体の規模は不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、遺物は床面付近から甕・高杯等が出土した(図版第55:113・114・116・121)。

竪穴式住居跡 S H97269(図版第16) E地区東辺中央付近で、後述する古墳時代中期末の竪穴式住居跡(S H97293)と重複して検出したもので、これに大半を削平され、わずかに南西隅付近を確認したにすぎない。このため、全体の形状は不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは約10cmが遺存する。床面では、周壁溝・竈・主柱穴などは確認できなかった。遺物は、床面付近から鉢が1点出土した(図版第54:115)。

竪穴式住居跡 S H97287(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、その南端に位置する。後述するS H97289と重複して検出したもので、これに後出する。東辺を近世の溝に削平され、南辺は調査区の関係で確認できなかったため、全体の規模は不明であるが、東西が約5.3m

を測る隅丸方形を呈していたことは確認された。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約10cmが遺存する。床面では、4か所で支柱穴を検出したが、周壁溝および貯蔵穴などは認められなかった。遺物は埋土中から甕・高杯が出土した(図版第55:118~120)。

竪穴式住居跡 S H97289(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、その南端近くに位置する。先のS H97287と重複して検出したもので、これに先行する。南辺をこのS H97287に、また北辺は後述する古墳時代中期末~後期初頭の竪穴式住居跡(S H97283・97297)に切られていることから、東西約4.8mの隅丸方形を呈していたと考えられるほか、詳細は不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約10cmが遺存するが、遺物は埋土中から小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97291(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、E地区の中央やや南寄りに位置する。南東隅を古墳時代の竪穴式住居跡(S H97283)に、また北東隅付近を飛鳥時代の溝(S D97247)にそれぞれ切られているが、5.3×4.8mの隅丸方形を呈することが確認される。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは約10cmが遺存する。床面では支柱穴を3か所で検出したが、周壁溝・貯蔵穴等は認められなかった。埋土中からは壺・甕・高杯などが出土している(図版第55:104~107・122~124)。

竪穴式住居跡 S H97300(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、E地区南東隅付近に位置する。調査範囲の関係で、住居跡の南東隅付近を確認できなかったが、南北・東西とも3.8mを測るやや小規模な隅丸方形をなすことが確認される。埋土は暗茶褐色砂質土で、大半が削平されており、遺存状況は悪く深さは4cm程度を残すにすぎない。床面では、周壁溝(幅約10cm)のほか、3か所で支柱穴を、また中央付近で炉跡と思える炭の広がりを確認した。床面から甕などが出土している(図版第55:111・117)。

竪穴式住居跡 S H97301(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、E地区北東部に位置する。後述するS H98303と重複して検出したもので、これに後出する。西半部を平安時代の溝(S D97222)に切られており、東辺に沿って全体の1/3程度が遺存するにすぎない。このため、南北約6.6mを測ることは確認されるが、東西長は不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは約5cmが遺存する。床面では、周壁溝(幅約20cm)および支柱穴を2か所確認した。床面付近から甕・高杯が出土している(図版第55:101~103・108・109)。

竪穴式住居跡 S H97302(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、E地区北東部に位置する。先述のS H97301の北側でこれに接するように検出した。ただし、西側を平安時代の溝(S D97222)に切れ、北側は調査区外へのびるため、調査では南東隅付近を検出したにとどまる。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さ約20cmが遺存し、床面では周壁溝(幅約20cm)のほか、支柱穴を1か所確認した。埋土中から甕口縁部片が出土している(図版第55:112)。

竪穴式住居跡 S H97303(図版第16) E地区に分布する住居跡のひとつで、E地区北東部に位置する。先述のS H97301と重複して検出したもので、これに先行する。やはり遺存状態は悪く、北東隅付近を辛うじて確認したにとどまる。しかも、重複するS H97301に遺存部分の多くを切られているため、隅丸方形の住居であることは認められるが、本来の規模を確認するには至らな

かった。埋土は暗茶褐色砂質土で、深さは約5cmが遺存する。床面では周壁溝および主柱穴1か所を確認した。埋土中から遺物は出土しなかった。

周溝状遺構 S X 96079(図版第17) C地区のほぼ中央で検出した、角の丸い五角形状に溝がめぐる周溝遺構である。これを形成する溝は、上下2層に分かれ、上層部は幅約1mで、断面はゆるやかな「U」字状をなし、下層部は幅約30cmで断面「U」字状となる。上層部は遺構の遺存状況によって部分的に削平を受けた箇所があり、途切れる部分が随所にあるが、下層部は南西部が確認できなかった。ただし、この南西部が最初から途切れていたのか、後世の削平のために消滅したのかは確認し得なかった。なお、この南西部では溝が土坑状に一部深くなる部分を確認している。また、南東隅部では下層溝に相当する形状で東側へ分岐してのびていく。東方部が谷地形をなすF地区方面であることからすれば、地形の下がる方へ水抜きを目的として溝をのびたものと判断される。溝内の埋土は炭や焼土が混じる暗灰黄色砂質土で、下層部はこれがやや粘質(暗灰黄色粘質土)となる。遺物は南東隅付近から集中して出土した(図版第53:43~66、図版第54:67・69・72~75)。本遺構の性格については、先述のようにS H 96091を囲んだ周溝(排水溝)と判断している。

周溝状遺構 S X 96098(図版第17) C地区の北半部、先のS X 96079の北側で検出したもので、幅約12m・長さ15m以上の長方形に溝がめぐる方形周溝遺構である。これを構成する溝は南辺中央付近で一部とぎれるが、幅約1.2m・深さ約30cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土で、断面はゆるやかな「U」字形を呈する。溝内からは東辺部で土器の細片が出土した(図版第53:68・71・76~79)。溝に囲まれた内部に S H 96085が存在しており、これを囲んでいた周溝(排水溝)と判断している。

土器溜り S X 96099(図版第17) C地区北端付近で検出した。幅約50cm・長さ約2mにわたって帯状に土器(図版第58:187~194)が集中して出土したことからS Xの遺構番号を付し、土器溜りとして遺物を取りあげた。周辺の精査を繰り返し行ったが、これら土器群に係る溝などの遺構は検出できなかった。ただ、土器群の出土状況から、上記の2基の周溝状遺構(S X 96079・96098)と同様、竪穴式住居跡の周囲をめぐる溝の一部であった可能性が高いと考えている。

掘立柱建物跡 S B 94022(図版第18) D地区中央部、S H 94011の西側で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は、東西約3.6m×南北約2.8mを測り、主軸はN 8°Wである。北東隅の柱穴内から、完形の器台1点(図版第56:125)が逆位置状態で出土しており、高床倉庫跡と判断した。

土坑 S K 96080(図版第18) C地区東辺部、S X 96079の東側に接して検出したもので、長さ(南北)約2m・幅(東西)約0.8mを測る長楕円形を呈する。深さ約20cmが遺存し、断面はゆるやかな「U」字状をなす。埋土は少量の炭・焼土が混じる暗茶褐色砂質土である。

2. 流路および水田跡

F地区第5・6遺構面において、同地区の西辺および東辺を南流する二条の流路がその中央付

近で合流する状況を検出した。第5遺構面の流路と第6遺構面の流路はほぼ同一か所を流れるが、そのベース土(肩部をなす土層)には約0.5mのレベル差があり、その間には、洪水による砂層の堆積が認められた。水田跡は、二条の流路に挟まれた舌状に延びる微高地上で第6遺構面を覆う。上述の洪水砂にパックされる状況で検出した。暗灰色粘質土をベース土とし、微高地の周囲をめぐる大型の畦畔並びに小区画水田を構成する小畦畔、さらには砂の詰まった稲株痕跡と考えられる多数の小孔や足跡などを確認した。

(1)流路跡

流路跡 N R 96224(N R 97535下層) F地区第6遺構面で検出した。後述するN D 96222とは厚さ約0.5～0.6mの砂層を介して、ほぼ同一地点に重複して存在する。検出部の北端で幅約6m・深さ約0.8m、南端部で幅約20m・深さ約1mと南に向かって幅広となる。埋土は図版第19上の5～11に対応し、大きく7層に分けて把握している。うち、乳灰色砂層(図版第19：9)は流路からこの東側の水田跡を覆う洪水砂層を指し、流路内では厚さ約10～20cmの堆積を認める。ただし、底部中央付近には存在しない。乳灰色砂層の上方には黒灰色土・淡灰黒色土・淡乳灰色砂・灰黒色砂質土が、主に流路東側肩部の上昇に伴い堆積している。すなわち、これらが第6遺構面と第5遺構面の間の約60cmにわたる堆積土層に対応することとなる。土器類並びに木製品などの遺物はこのうち乳灰色砂層と淡乳灰色砂層から集中して出土した。後述するN R 96224下層出土としたのは、乳灰色砂層出土から出土したもので、上層出土としたのは淡乳灰色砂層から出土したものである。また、淡乳灰色砂層の下、流路のベースとなるのは黒褐色粘質土であったが、この黒褐色粘質土層上面では淡乳灰色砂が入り込む足跡状の窪みを多数認めた。これは、後述する水田跡上面の稲株痕跡などと同様の状況であった。さらに、最終的な断ち割り作業の結果、さらに下層に黒褐色粘質土層および灰色砂層の互層が幾重にも堆積し、この下部に流路が存在することを確認したが、湧き水の量が多く、これ以下の掘削は危険と判断した。

流路跡 N D 96222(N R 97535上層：図版第19) F地区第5遺構面で検出した。上記のN R 96224の上層遺構に相当し、N R 96224が埋没した後、ほぼ同一地点に形成されたものである。検出部北端で幅6m・深さ約1mを測るが、南方(後述するN R 96536との合流部)へ向かうにしたがい幅が増大(幅約12m)し、蛇行する。埋土は大きく4層に分かれ、上方の2層からは古墳時代中期末頃、下方の2層からは弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物が出土した。N R 96536との合流部手前(第11図網かけ部)では、下層に相当するレベルでしがらみ状遺構とともに杭列が認められたことから、簡易な井堰状の施設が設けられていたものと判断している。下層部(主に黒褐色砂質土)では、このしがらみ状遺構にせき止められたのか、この手前一带で土器類のほかに建築部材を主体とする木製品が多数出土した。また、検出部北端から約10m南側で、西岸部から一括投棄された状態で土器群および管玉など(図版第57・58：153～186、図版第104：2～5)が出土した(S X 95223：図版第11網掛け部)。

流路跡 N R 97536(図版第11図) 先のN R 96222・96224とは、舌状にのびる微高地を挟んで東側に位置する流路で、F地区の中央付近でこれと合流する。調査ではその西側肩部のみを検出

したにすぎず、詳細は不明と言わざるをえない。流路としては、先のNR96222・96224との関係と同様、大きく上下2面にわたって確認されるが、ここではNR96536上層、NR97536下層として把握している。なお、調査地の東側一帯は低湿地となっていたらしいことが、周辺部の調査で確認されており、本遺構は流路とするより、この低湿地(池・沼状地形)の西端部に相当する可能性もある。

流路跡 NR97537 (図版第11図) F地区第5・6遺構面で検出した(両遺構面とも存在)。上記の2条の流路跡がF地区の中央で合流し、大きな流れとなったものをNR97537とした。おおむね、黒褐色砂質土(図版第19下:7)の堆積を境に上層部(NR96222に対応)と下層部(NR96224に対応)に分かれる。調査範囲では、西側肩部のみを確認したにすぎず、流路の幅等は不明である。また、深さについても検出面から約2.5m(現地表下約5m)で掘削を止めたため不明である。なお、上述のNR97536が東側へ広がる沼状地形の西辺の状況をなしているとなれば、本遺構も沼状地形の一面と理解すべきものとなる。ただ、上層部の堆積状況は、東端付近が肩部をなすように上昇しており、少なくともNR96222対応時には、流路をなしていたと考えられる。

流路跡 NR94100 (図版第5図) D地区の東辺から南辺で検出した流路跡で、西岸部分を確認したにとどまるが、位置からみて、上述のNR97537の南側延長上に相当すると考えられる。

(2)水田跡

水田跡は、F地区第6遺構面およびE地区第5遺構面で確認した。

① F地区水田跡(図版第20・21)

F地区第6遺構面で検出した水田跡は、NR96224と97536下層に囲まれた調査区北東部の舌状に延びる微高地上(標高10m付近)に形成されていた。水田面直上には厚さ約5cmの洪水砂が一律に堆積し、水田は廃棄された段階の状況を残しているものと考えられ、水田面では、稲株痕と従来から認識されている径3～5cmの砂が充満した小孔や、足跡などを多数認めた(総数約14,000か所)。

水田面 水田跡は、大小合わせ26面(詳細は第2表)を確認した。検出レベルは、上記のとおり標高10m付近であるが、検出部北西隅付近に位置する水田22・13・28などは標高10.1m、東辺に位置する水田1・3・6が同9.95m、それ以外が同10.04～10.08mをそれぞれ測り、北西から東側へ向かってゆるやかに下がる。各水田跡の規模については、第2表にみるように11.2㎡のもの(水田10)を最小とし、最大で140㎡以上のものまでが認められる。うち、後述するように40㎡以上のものは何らかの要因で規模が大きい状態で検出されることとなったと思われ、これを省くと11～24㎡の範囲に収まり、平均値を求めると16～17㎡となる。水田跡のうち東辺および西辺に並ぶものは、区画が大きく、本来はさらに区画されていた際の畔が途切れる部分もある。これらは廃棄段階で小区画の水田が形成されていなかった(休耕されていた)可能性や、洪水による土砂の流入によって小区画が崩壊した可能性などが考えられる。

水田畦畔 水田域は、これを囲むように東・西辺に幅0.6～2m・高さ20～40cmの大畦畔をめぐらし、これに囲まれた平坦面を幅30～40cm・高さ10～15cmの小畦畔で小区画に区切ることによ

第2表 水田遺構一覧表

って形成されている。大畦畔は、東辺部(正確には東～南辺)で幅0.6～2m・高さ20～40cmを、西辺部では幅約2m・高さ約30cmを測る。東辺部で規模が最も小さくなる(幅約0.6m・高さ約20cm)のは南辺部の約3m程度の範囲である(図版第21の⇒部)。なお、西辺大畦畔については、この部分が調査中に崩落したため良好に検出作業が行えていない。一方、小畦畔に水口と判断される途切れた部位は認められなかった。また北半部中央付近には径約3m・高さ約15cmの円形に近い平面形を呈する島状の高まりなども認められた。小畦畔を仔細にみると、東西畔は幅30cm前後のものが多いのに対し、南北畦は40cm

No	形態	検出レベル	規模(m ²)	備考
1	—	9.95	9以上	北側調査区外
2	方形	10.06	13.2以上	北側調査区外
3	不整五角形	9.96	37.5	大型、分割小畦畔みつからず
4	方形	10.09	17.9	
5	方形	10.06	14.4	
6	不整形	10.03	68.2	大型、分割小畦畔みつからず
7	方形	10.07	14.4	
8	方形	10.05	16.0	南西隅に円形高まり
9	方形	10.04	12.0	北西隅に円形高まり
10	方形	10.02	11.2	
11	長方形	10.02	15.8	
12	不整長方形	9.98	37.9	大型、分割小畦畔みつからず
13	—	10.09	24以上	北側調査区外
14	長方形	10.09	17.6	
15	長方形	10.08	14.5	南東隅に円形高まり
16	長方形	10.06	19.0	北東隅に円形の高まり
17	長方形	10.04	14.0	
18	長方形	10.03	19.5	
19	長方形	10.03	24.0	
20	長方形	10.03	19.0	
21	台形	10.03	40.0	大型、分割小畦畔みつからず
22	方形	10.09	42以上	大型、分割小畦畔みつからず
23	長方形	10.06	26以上	大型、分割小畦畔みつからず
24	方形	10.08	140.0	大型、分割小畦畔みつからず
25	長方形	10.07	93.6	大型、分割小畦畔みつからず
26	台形	10.08	137以上	大型、分割小畦畔みつからず
27	—	10.04	14.5以上	北側調査区外
28	—	10.14	6以上	北側調査区外
29	—	10.13	24以上	北側調査区外
30	—	10.07	2以上	北側調査区外

前後のものが多い。すなわち、南北畔はわずかながら規模が大きく、またしっかり造られている状況がみてとれる。水田の区画をみても、南北畔は比較的まっすぐ調査区内を南北に通るのに対して、東西畔は水田毎に独立するものが多い。こうしたことから、まず南北方向に細長い区画列を設定した後、これから枝分かれする東西畔を造ることによって小区画を設けていったものと考えられる。

導水 上述の水田面のレベル差は、各水田への導水に大きく係わる。おそらく水田跡の西側で検出したN R 96224から水田域西辺の大畦畔に設けられた水口を通して水を取り、水田域に水を導いた際、水流は自然に小畦畔をこえて東辺へ至ったものと考えられる(上記のとおり小畦畔に水口と判断される途切れた部位は確認していない)。西辺大畦畔に認められた水口と思われる部位は2か所あり、いずれも幅約0.8m・深さ約30cmで断面「U」字状をなす。埋土は水田上面と同じ黄灰色の洪水砂であった。ただ、上記のとおり、この部分は良好に検出作業が行えておらず、これらが確実に水口としての遺構かどうかについては不明な点もある。水口から取り込んだうち、

必要以上の水は、東辺大畦畔の規模が小さくなった部位から東側の流路(N R 97536)へと流れ出ていたものと想像される。

小孔群 ^(注23)小孔群はA・B地区水田跡で確認したうちのA種とされるものが大半を占め、灰色砂を埋土としつつも、その中心付近に程度の差こそあれ黒灰色粘質土が認められた。径は3～5cmの円形に近い平面形をなし、深さはサンプル程度に幾つかを掘削したにとどめたが、3cm前後で、底部は丸底ないしは尖底気味であった。また、こうした小孔群の中に、規模が大きく楕円形に近い平面形態をなすものが幾つか認められた。長径15～20cm・短径5～7cmを測り、最大幅はどちらかの端近くにある。その形態から、成人の足跡と判断したが、明瞭に歩行の痕跡をとどめる状況のものは無かった。なお、上述の西辺に並ぶ一列の水田跡では、この稲株痕と考えられる小孔の分布はやや希薄となり、検出した水田面にも凹凸が激しい状況が認められた。上記のとおり、洪水による土砂の流入が西側から来たため、この部分がかかなり痛んだ可能性を示唆するものと考えている。

② E地区耕作地(図版第8)

E地区第5遺構面では、南半部を中心に素掘り溝群並びに小孔群を検出した。明らかに耕作地としての痕跡と判断しているが、畦畔などの存在は確認されず、水田跡としての確証は得られなかった。畑地の痕跡としての可能性もある。耕作地としての痕跡を確認した面は、E地区北半部で標高11.3m・南半部で同11.2mと約10cmのレベル差をもって、北から南へ下がっている。その南半部を中心に後述する素掘り溝群並びに小孔群を検出したものである。

素掘り溝群 E地区南半部で検出した。幅20～30cm・深さ5～10cmを測り、東西方向にのびるものを主体とする。埋土は暗黄灰色砂で、断面は浅い「U」字形をなす。

小孔群 小孔群は、E地区北端付近を除くほぼ全域で確認した。ただ、上記の素掘り溝と重複するものは無い。上述のF地区第6遺構面の水田跡で確認した小孔群と同様、径約3～5cmを測る。ただし、埋土(灰色砂)中に黒灰色粘質土の混入は認められず、A・B地区で確認した稲株痕にみるB種に相当するものがほとんどである。

③ その他

以上のほか、D地区第4遺構面の北半部できわめて遺存状況は悪かったが、素掘り溝を数条検出している(図版第5)。北西—南東方向にのびるものが多く、幅20～30cm・深さ5cm前後を測り、埋土は明乳灰色砂質土である。本遺構面で検出した竪穴式住居跡とは一部で切り合い関係を持ち、明らかに素掘り溝が後出のものであることが確認される。時期を決定する明確な手がかりを欠くが、古墳時代前期頃の畠作の痕跡を示す畝溝ではないかと考えている。

第4節 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構

古墳時代中期後半～後期初頭の遺構には、竪穴式住居跡・溝・土坑などがある。これらは、D地区第3遺構面、E地区第4遺構面で検出したものである。遺構は、大きくD地区を中心に分布する一群と、E地区を中心に分布する一群とに分かれる。確認した竪穴式住居跡は総数26基にお

よぶが、D地区では北端付近の東西溝(S D95074)を北限、南端にある流路(地形の下がり)を南限として10基が分布している。またE地区は、上記のD地区南端の流路(地形の下がり)を北限とし、南は調査区外へも広がりをみせるようで、調査区内では15基を確認した。なお、E地区の一群の東限はE地区北東隅付近で検出した南北溝(S D97305)によって区画されていたようで、西限については西側に位置するA地区(平成2・3年度調査)でこの時期の竪穴式住居跡は確認されおらず、本調査区からさほど西側へは及んでいないことが想像される。

1. 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H94004(図版第22) D地区南半部で検出した6.2m×6mの方形を呈す竪穴式住居跡である。埋土は暗黄褐色土を主体とするが、細かく検討すれば上層と下層に分かれる。色調としては、上層がやや黒色が強く、かつ土師器甕等が廃棄されたような状況で包含されていた。深さは約25cmが遺存する。東壁中央やや南に偏って、東西約1.0m・南北約0.7mの馬蹄形を呈する竈が築かれており、その中央には支脚とみられる方柱状の立石が存在した。竈の上部には壊れた竈の壁体が崩れ落ちていた。また、さらにその上面には土師器甕の破片(図版第70:477)が散乱していた。床面は水平ではなく、4か所の主柱穴に囲まれた中央部が周辺部より高く、かつ硬く締まっていた。竈の南側では貯蔵穴とみられる土坑を東西に並んで2か所検出した。東側の土坑は0.6m×0.8mの楕円形を呈し、検出面からの深さ約12cmを測る。また、西側の土坑は直径約1.1mの円形をなし、検出面からの深さ約20cmのすり鉢状を呈する。西壁中央付近の床面上では、方形を呈する浅い窪みが確認された。この窪みは、周囲の床面より底面が硬化していることから、住居の出入り口にできたものと推測される。床面四周には幅約10cmの周壁溝が存在する。遺物は上記の埋土層のほか、床面付近から須恵器杯身、杯蓋、無蓋高杯、甗、土師器壺、高杯、甕、製塩土器などが出土した(図版第69・70:454~478)。

竪穴式住居跡 S H94005(図版第22) D地区南半部で検出した。6.7×7.1mを測る大型の方形竪穴式住居跡である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約10cmが遺存する。S H94004と同じく、東壁の中央やや南寄りに竈が築かれる。竈は、煙道付近で約50cmと幅狭く、焚き口付近の最大幅は約1mであり、全長は約1.5mを測る。竈内中央には支脚に利用したと思われる土師器の小型甕(図版第68:449)が倒立状態で出土した。支脚の上部には壊れた竈壁とともに土師器甕の破片(図版第68:451)が散乱していた。床面は、4か所の主柱穴に囲まれた中央部が硬化し、周囲より幾分高まっている。南壁中央部では、貯蔵穴とみられる土坑を検出した。土坑は、0.7m×0.6mのやや楕円形をなし、検出面からの深さは約25cmで、すり鉢状を呈する。また、竈の北側、東壁に近い床面上で直径約20cmの範囲が焼土化していた。位置関係などから、過去に竈が存在したものと考えられ、住居の存続期間中に竈の造り換えがあったものと判断している。遺物は、貯蔵穴内から有孔無頸壺・杯蓋・土師器甕が出土したほか、埋土中から須恵器杯身・土師器甕などが出土している(図版第68:443~453)。

竪穴式住居跡 S H94006(図版第23) D地区南半部で検出した。一辺5.3m×5mの方形を呈し、

埋土は暗黄褐色土で、深さ約15cmが遺存する。竈は、他の住居跡と同様に、東壁中央やや南に偏った位置で検出された。規模は、全長約1.2m・最大幅約0.8mを測る。S H94005と同じく、竈内には支脚に利用された土師器甕(図版第68:438)が倒立状態で遺存しており、その周囲にはやはり土師器甕の破片(図版第68:442)が散乱していた。竈の南側には貯蔵穴とみられる一辺約40cmの方形を呈する土坑が存在する(検出面からの深さ約10cm)。また、竈の北側には過去の竈跡とみられる焼土部分を検出しており、ここでも竈の造り換えがあったものと考えられる。遺物は、埋土中から無蓋高杯・土師器高杯・甕などが出土している(図版第68:433~442)。

竪穴式住居跡 S H95050(図版第23) D地区中央付近で住居跡の北側半分を検出したが、南半部は良好に確認できなかった。中央を南北に中世期の溝によって削平されているが、一辺約4.7mを測る方形をなすと考えられる。埋土は暗黄褐色土で、深さ約10cmが遺存する。床面では主柱穴を2か所確認した。後述するS H95051と一部重複し、これに先行することが確認されるが、時期を特定する出土遺物は認められなかった。

竪穴式住居跡 S H95051(図版第23) D地区中央付近で検出した。北・東コーナー付近を中世期の溝によって削平されるが、一辺が6.2m×5.8mの方形をなすと考えられ、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗黄褐色土で、床面では周壁溝・竈・貯蔵穴・主柱穴を検出した。周壁溝は幅約20cmを測る。竈は、北西辺の中央付近で検出した。ただし遺存状況は悪く、馬蹄形をなす焼土塊として確認されたにとどまる。焼土の広がり、北西壁から長さ約1.3m・最大幅約0.7mを測り、燃焼部と思われる部位で支柱として利用された小型甕が倒立状態で出土した(図版第73:560)。貯蔵穴は南東辺で検出したもので、1×0.8mの長方形をなし、検出面からの深さ約10cmを測る。主柱穴は削平のため2か所で確認したにとどまる。なお住居跡床面では、このほかに北東辺、南東辺それぞれに沿って、径約40cmの円形に焼土が広がる部位が確認された。竈の痕跡と考えられ、ここでは2度の竈の造り換えがあったものと判断している。遺物は、貯蔵穴内から土師器甕が出土したほか、埋土中から、須恵器杯身・無蓋高杯・土師器壺・甕・椀・高杯などが出土している(図版第73:553~559・561~565)。

竪穴式住居跡 S H95052(図版第23) D地区中央付近、先のS H95051の北側で検出した。北東コーナー付近が削平されているが、一辺約5.6mの方形を呈するものと考えられる。埋土は暗黄褐色土であるが、先のS H94004と同様に埋土が上下2層に細分される。上層は、やはり黒色が強く、ここから土師器甕(鍋)や甑などが出土した。深さ約10cmが遺存する。床面では周壁溝・竈・貯蔵穴・主柱穴・炉跡を検出した。周壁溝は、幅約20cmを測る。竈は、北東辺中央付近で検出した。長さ約1.2m・最大幅約0.8mの馬蹄形をなす。竈の南側では、貯蔵穴と考えられる土坑を検出した。0.6×0.5mの円形をなし、検出面から深さ20cmを測る。主柱穴は4か所で検出した。また、中央では炉跡と考えられる径約60cmのピットを確認している。遺物は、上記のように埋土の上層部から土師器甕・甑(図版第71:503・505)などが出土したほか、埋土下層および床面付近から須恵器杯身・甕・土師器甕などが出土した(図版第71:498~502・506)。

竪穴式住居跡 S H95053(図版第22) D地区中央付近、先のS H95052の北側で検出した。中世

段階の島島造成時に大幅に削平され、わずかに南側コーナー付近が遺存するにすぎない(深さ約15cm)。

竪穴式住居跡 S H95054(図版第24) D地区北半部で後述する S H95059と重複して検出したもので、これに後出する。一辺約6.2mの方形を呈し、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗黄褐色土である。幅約20cm周壁溝がめぐる。東辺中央付近で竈を確認したが、遺存状況は悪く、東壁中央から約1m内側のところで1m×0.7mの楕円形の範囲に広がる焼土塊を確認したにとどまる。焼土中からは支柱に利用された土師器甕(図版第71:517)が倒立状態で出土した。床面中央付近と南壁付近で貯蔵穴と思われる土坑を2基検出した。いずれも一辺0.6m前後の方形で、検出面からの深さは約20cmを測る。遺物は、中央やや東寄りで見出した土坑から出土した有蓋高杯(図版第71:510)のほか、埋土中から須恵器杯蓋・甕・土師器高杯・甕などが出土した(図版第71:507~509・511~516・518)。

竪穴式住居跡 S H95059(図版第24) D地区北半部、S H95054と重複して検出したもので、S H95054に先行することが確認される。5.8m×5.6mの方形を呈し、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗黄褐色土であるが、本住居跡の埋土も、先述の S H94004と同様に上下2層に分かれ、上層には焼土がブロック状に含まれるとともに、やはり土師器甕等が廃棄された状況で包含されていた。東壁中央付近で竈の痕跡と思われる焼土を確認したが、大半が S H95054によって削平される。床面では周壁溝は確認されず、支柱穴は並びがやや歪ながら4か所を確認した。遺物は、埋土中から土師器高杯、甕などが出土した(図版第74:588~592)。

竪穴式住居跡 S H95069(図版第22) D地区中央付近、先の S H95053の西側で検出した。S H95053と同様、中世段階の島島造成時に大幅に削平され、わずかに南東コーナー付近が遺存するにすぎない。埋土は暗黄褐色土で、深さ約10cmが遺存する。

竪穴式住居跡 S H97259(図版第24) E地区北西隅付近で、後述する S H97260と東辺部が重複して検出したもので、これに先行する。1辺が5.4mの方形を呈し、深さ約30cmが遺存する。埋土は暗黄褐色土で、床面では、2か所で支柱穴を確認したが、周壁溝および貯蔵穴等は認められなかった。また、北辺中央付近で竈を確認したが、遺存状況は悪く、焼土塊を確認したにとどまる。遺物は、埋土中から須恵器杯身、杯蓋などが出土した(図版第72:526~530)。

竪穴式住居跡 S H97260(図版第24) E地区北西隅付近で、上記の S H97259と重複して検出したもので、これに後出する。東半分は削平を受けており、南北約4.5mの方形の住居跡と考えられるが、東西幅は確認できなかった。埋土は暗黄褐色土で、深さ約20cmが遺存する。竈は西辺中央付近に存在したと思われるが、焼土の遺存を認めたのみで、その形状等は明確ではない。床面では、支柱穴を2か所確認したが、周壁溝は認められなかった。遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・土師器高杯などが出土した(図版第74:593・594)。

竪穴式住居跡 S H97261(図版第24) E地区中央やや北寄りで検出したものであるが、西辺付近を確認したにとどまり、大半はすでに削平をうけていた。方形の住居跡であるが、規模は南北約5.5mを測るほかは不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約20cmが遺存する。支柱穴は西側

に相当する2か所を確認したが、竈は遺存しておらず、周壁溝および貯蔵穴などは認められなかった。遺物は、埋土中から須恵器・土師器の小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97262(図版第25) E地区西辺やや北寄りでは後述する S H97264と重複して検出したもので、これに後出する。西側は調査区外へのびており、方形の住居跡であるが、南北約6.5mであることを確認したほか全体の規模は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約30cmが遺存する。床面では、支柱穴を3か所で認めたほかは、竈および貯蔵穴・周壁溝は確認できなかった。遺物は、埋土中から須恵器・土師器の小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97264(図版第25) E地区西辺やや北寄りでは上述の S H97262、後述する S H97270と重複して検出したもので、これに先行する。西側が調査区外へのびることや、北側を S H97262に切られていることから、確認できた範囲は住居跡全体の中では南東の1/4程度であった。埋土は暗黄褐色土で、深さは約20cmが遺存するが、床面では、竈もしくは炉の残骸と思われる焼土塊を認めた他には支柱穴等を確認することはできなかった。遺物は、埋土中から須恵器杯身などが出土したにとどまる(図版第72:531~533)。

竪穴式住居跡 S H97267(図版第25) E地区東辺中央付近で検出したものだが、東辺および西辺を奈良~平安時代の溝によって削平を受けており、わずかに北辺と南辺の一部を確認したにすぎない。方形をなす住居跡と考えられるが、辛うじて確認した北辺と南辺との位置関係から、南北が約4.8mを測る以外、全体の状況は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約12cmが遺存する。床面でも、周壁溝・竈・支柱穴などは確認できなかった。遺物は、埋土中から須恵器・土師器の小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97270(図版第25) E地区西辺の中央付近で先述の S H97264、後述する S H97275・97272などと重複して検出した。うち、S H97264に先行するが、S H97275・97272には後出する。ただし、本住居跡は、わずかに南東隅付近を確認したにすぎず、全体の形状等、詳細は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さは、最も良好に遺存する部分で約12cmを測る。床面では、周壁溝、竈、支柱穴などは確認できなかった。遺物は、埋土中の床面付近から無蓋高杯、土師器甕などが出土した(図版第72:548~551)。

竪穴式住居跡 S H97272(図版第25) E地区西辺の中央付近で先述の S H97264・97270、後述する S H97275などと重複して検出した。うち、S H97264・97270に先行するが、S H97275には後出する。5m×5.1mの方形の住居跡である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約15cmが遺存する。床面では、竈は北辺やや西寄りでは竈を確認したほか、支柱穴を2か所確認した。竈の遺存状況は悪く、焼土塊として認めたにすぎない。遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・土師器高杯・甕、土鍾が出土した(図版第72:544~547、図版第104:2)。

竪穴式住居跡 S H97275(図版第25) E地区西辺の中央付近で先述の S H97270・97272と重複して検出したもので、これに先行する。わずかに南西隅付近を確認したにすぎず、規模・形態とも不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さは、最も良好に遺存する部位で20cm程度を測る。遺物は埋土中から須恵器・土師器の小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97277(図版第25) E地区西辺の中央付近で検出した。北辺から東辺にかけてを飛鳥時代の溝や竪穴式住居跡によって削平を受けているため遺存状況は悪い。このため北東隅付近が削平されて遺存しないが、おおむね5m四方の規模を有していることが確認される。埋土は暗黄褐色土で、深さ約10cmが遺存し、竈は西辺にあったと思われるが、わずかな焼土塊を認めたのみである。遺物は、埋土中から須恵器・土師器の小片が出土した。

竪穴式住居跡 S H97282(図版第26) E地区南半部で後述する S H97283と重複して検出したもので、S H97283に後出する。東半分が近世に大きく削平を受けているため、南北約4.5mの方形の住居跡であることは確認できるが、東西については不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約15cmが遺存する。竈は北辺中央付近で検出した土師器高杯が支脚として利用されていた。このほか、遺物は、埋土中から須恵器無蓋高杯、土師器高杯、土錘などが出土している(図版第72:534~536・582~585、図版第104:1)。

竪穴式住居跡 S H97283(図版第26) E地区南半部で先述の S H97282や後述する S H97285と重複して検出したもので、両者に先行する。東縁を S H97282に、西縁を S H97285に切られている状況である。このため、南北約5.5mの方形の住居跡であることは確認できるが、東西の長さについては不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さは約10cmが遺存する。竈は、北辺の中央付近と思われる場所で確認した。最大幅0.7m・長さ1mの馬蹄形状を呈し、土師器小形甕が支脚として利用されていた。床面では、支柱穴を2か所確認したが、周壁溝や貯蔵穴は確認できなかった。遺物は、床面付近から須恵器杯身・甕・土師器碗・甕などが出土した(図版第72:519~525)。

竪穴式住居跡 S H97285(図版第26) E地区南端近くで先述の S H97283や後述する S H97286と重複して検出したもので、S H97283に後出し、S H97286に先行する。南辺の西半部を S H97286に切れ、西辺部は調査区外へ及ぶようで、明確には確認できなかった。このため、南北約4.9mの方形の住居跡であることは確認できるが、東西の長さについては不明である。全体の遺存状況は悪く、深さは最も残りの良いところで8cm程度であった。床面では、竈・周壁溝・貯蔵穴等は確認することができず、支柱穴を4か所確認したにとどまる。埋土は暗黄褐色土で、遺物は埋土中から須恵器・土師器の小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97286(図版第27) E地区南端で先述の S H97285と重複して検出したもので、これに後出する。遺存状況はきわめて悪く、辛うじて北辺の一部と南東隅付近を確認したにとどまる。埋土は暗黄褐色土で、深さは最もよく残っているところで5cm程度、規模は南北が約6mの方形の住居に復原されるほかは不明である。竈は北辺で確認されたが、幅0.4m・長さ1.1mの範囲に焼土の広がり認め、中に支脚として利用された土師器壺を検出した(図版第72:552)。床面では、このほか2か所で支柱穴を確認したが、周壁溝・貯蔵穴などは認められなかった。

竪穴式住居跡 S H97293 E地区東辺中央付近で検出した。ただ、北半部を奈良時代の溝に切られ、東半部が調査区外へ延びており、ここで検出したのは西辺付近の一部にとどまる。このため、規模・形態とも不明であり、床面でも何ら確認できなかった。埋土は暗黄褐色土で、深さ約

5cmが遺存する。遺物は、埋土中から須恵器・土師器の小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡 S H97294(図版第27) E地区中央付近で、後述する S H97278と重複して検出したものであるが、大半を S H97278に削平されており、規模・形態とも不明である。住居の北側隅で竈を確認した。埋土は暗黄褐色土で、遺存部分での深さは約10cmを測り、床面付近から須恵器杯身・杯蓋などが出土した(図版第72:537~543)。

竪穴式住居跡 S H97278(図版第27) E地区中央付近で、先述の S H97294と重複して検出したもので、これに後出する。北辺から西辺の一部を検出したにすぎず、他は近世の溝などによって削平される。このため、南北約5.2mの方形の住居跡であることは確認されるが、東西長は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さは約10cmが遺存する。竈は北辺で確認されたが、遺存状況は悪く、径約0.5mの円形をなす焼土塊として認めたとにすぎない。また、支柱穴を2か所認めたが、周溝・貯蔵穴等は確認できなかった。遺物は埋土中から須恵器高杯・土師器小型甕が出土した(図版第74:586・587)。

竪穴式住居跡 S H97299(図版第24) E地区北西隅付近で、先述の S H97259・97262と重複して検出したもので両者に先行する。遺存状況は悪く、方形の住居の南東隅付近を検出したものである。深さ約0cmが遺存し埋土は暗黄褐色土である。

2. 溝・土坑

溝 S D95074(図版第28) D地区の北端近く、S H95059の北側で検出した東西溝である。幅約1m・深さ30cmを測り、断面はゆるやかな「U」字状をなす。埋土は暗黄褐色砂質土の単一層であった。溝底の高低差は西側がやや高く、東流していたものと考えられる。D地区北東隅近くでは削平のため遺存していなかった。

溝 S D97305(図版第28) E地区北東隅付近で検出した。北西—南東方向にのびるもので、幅約0.7m・深さ(最も良好に遺存している部分で)約20cmを測る。断面はゆるやかな「U」字状をなし、埋土は暗灰色砂質土であった。埋土中からは土師器甕や須恵器の高杯片が出土している(図版第73:573・574)。

土坑 S K95056(図版第28) D地区北半部、S H95052の北側に接する部分で検出した。約1.3m(南北)×約1m(東西)の長方形を呈し、深さ約30cmが遺存する。埋土は、暗黄褐色土の単一層である。

土坑 S K95063(図版第28) D地区中央付近、S H95050・95051の西側で検出した。約1m(東西)×約0.8m(南北)の長方形を呈し、深さ約20cmが遺存する。埋土は暗黄褐色土で、焼土がブロック状に入る。

土坑 S K95068(図版第22) D地区北半部、S H95069と一部重複して検出したもので、これに先行する。約1m(東西)×1.5m(南北)以上の長方形を呈し、深さ約30cmが遺存する。埋土は暗黄褐色土の単一層である。

第5節 飛鳥時代の遺構

飛鳥時代の遺構には、やや古相を呈する遺物(7世紀前半～中葉)が出土したE地区第4遺構面の竪穴式住居跡と、新相を呈する遺物(7世紀後半～8世紀初頭)を伴うC・E地区第3遺構面およびD地区第2遺構面の掘立柱建物跡群に大別される。なお、掘立柱建物跡群に関しては、その所属時期を限定することはきわめて難しいが、ここでは、後述する奈良～平安時代の掘立柱建物跡群と遺構面を違えて検出したC・E地区第3遺構面の掘立柱建物跡から導きだされた主軸方位(N5°以上W)をもとにし、D地区でもこれに一致するものを抽出した。

C地区の第3遺構面で検出した掘立柱建物跡は計9棟ある。また、この遺構面での精査中には、土層中に焼土・炭が大量に含まれ、鉄滓やフイゴの羽口などが出土した。最終的に焼土を埋土に含む土坑や底面が熱を受けた土坑を2基(SX96030・96033)を確認し、鍛冶炉の一部ではないかと判断した。一方、E地区では、第3遺構面で掘立柱建物跡4棟、溝2条などを検出したほか、同地区第4遺構面では竪穴式住居跡9基およびこれに重複してN20°W以上西方へ主軸が振れる建物跡2棟などを確認している。

1. 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH97266(図版第25) E地区中央付近東寄りで検出した方形の竪穴式住居跡である。大半が削平され、東辺と南西隅付近が遺存するにすぎない。規模は、南北4.6m、東西は4.3m以上を測る。埋土は暗黄褐色土で、深さ約10cmが遺存する。竈は東辺中央で検出された長さ0.8m・幅0.8mの馬蹄形状を呈し、中央付近で支脚に利用された小型甕の一部(図版第75:618)を認めた。また、遺物は、埋土中から須恵器小片が出土したにとどまる。

竪穴式住居跡SH97268(図版第27) E地区中央付近東寄り、先のSH97266の南側に接して検出した方形の竪穴式住居跡である。やはり大半が平安時代の溝(SD97218)に削平され、遺存状況は悪く、南辺の一部とこれに沿って設けられた焼土塊としての竈の一部を確認したのみで、正確な規模は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さは約10cmが遺存する。遺物は、床面付近から土師器杯身・鉢などが出土している(図版第75:614～616)。

竪穴式住居跡SH97273(図版第27) E地区中央付近、先のSH97266の西側に接して確認した方形の竪穴式住居跡である。やはり大幅に削平を受けており、南北約4.5mを測るほか、正確な規模は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さは約5cmが遺存する。竈は、北辺で確認されたが、南北1.3m・東西0.5mの範囲で焼土が認められたにすぎない。遺物は床面付近から須恵器杯身・土師器甕などが出土した(図版第75:603～606)。

竪穴式住居跡SH97276(図版第26) E地区中央付近で検出した。4.8m×4.5mを測る方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗黄褐色土で、深さは5cm程度が遺存するにすぎない。後述するSD97246とSD97247に十字に切られる。北辺中央やや西寄りの部分で焼土塊の一部が認められたことから、竈はここに設けられたものと判断された。遺物は、床面付近から須恵器杯身・甕、土師器高杯、甕などが出土した(図版第75:595～602)。

竪穴式住居跡 S H97279(図版第26) E地区西辺中央付近で検出した方形の住居跡である。南北約4.5m・東西4.3mの規模を有することが確認された。埋土は暗黄褐色土で、深さは約10cmが遺存する。竈は、南辺中央やや西寄りに設けられたものと考えられ、焼土塊の一部が確認された。ただし、竈の遺存状況は悪く、焼土塊として検出できたにすぎない。遺物は、床面付近から須恵器杯身、土師器杯身・高杯などが出土した(図版第75:611~613)。

竪穴式住居跡 S H97280(図版第26) E地区南半部で検出した。方形の住居である。先述の古墳時代中期末~後期初頭の竪穴式住居跡(S H97282)の真上に重複するが、東辺から南東隅付近は近世の溝によって削平されている。南北約5m・東西約4.5m以上を測り、埋土は暗黄褐色土で、深さ約8cmが遺存する。竈は北辺やや東寄り確認したが、遺存状況は悪く、長さ1.2m・最大幅0.6mの馬蹄形状をなす焼土の広がり認めにすぎない。ただ、燃焼部と思われる部位で、須恵器高杯が支脚に使用された状態で検出された。床面では、支柱穴を4か所で確認したが、周壁溝等は認められなかった。出土遺物には、竈支脚に利用されていた須恵器高杯のほか、床面付近から須恵器杯蓋が出土している(図版第75:619・620)。

竪穴式住居跡 S H97284(図版第26) E地区南端付近で検出した方形の住居跡である。遺存状況は悪く、北辺は一部を残すにすぎないが、南北約4.7m・東西約4mの規模に復原される。埋土は暗黄褐色土で、深さは最も遺存している部分で約8cmを認めた。また、竈は北辺に設けられていたらしく確認できなかった。遺物は、床面付近から須恵器杯身・杯蓋、土師器甕などが出土した(図版第75:607~610)。

竪穴式住居跡 S H97288(図版第26) E地区西辺部で南東隅付近を検出したもので、大半が調査区外へのび、全体の規模等は不明である。埋土は暗黄褐色土で、深さ約5cmが遺存する。遺物は、埋土中から須恵器杯身が1点出土した(図版第75:617)。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 S B95064(図版第30) D地区北半部で検出した2間×2間の正方形に近い平面形態の建物跡である。柱間は東西約3.8m(1間:約1.9m等間)・南北約4m(1間:約2m等間)を測る。柱掘形は一辺0.6m×0.8m前後の隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。総柱の倉庫ではないかと考えたが、中央の柱穴は確認できなかった。主軸はN6°W。

掘立柱建物跡 S B95065(図版第32) D地区北半部、先のS B95064の北側で検出した。後世の削平のため、南北2間以上・東西1間以上の総柱建物であることを確認したにとどまる。柱間は東西・南北とも1間が約1.8mを測る。柱掘形は一辺0.6~0.7mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN6°W。

掘立柱建物跡 S B96021(図版第31) C地区中央やや北寄りで検出した南北棟の建物跡で、南北(桁行)が6間(約8.3m、1間:1.4m前後)・東西(梁行)は中央の柱穴が確認されなかったが、柱穴間の距離からみて2間(約4.6m)であったと思われる。柱掘形は一辺0.7m前後の隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。中に径約0.2~0.3mの柱痕跡を残すものが認められた。建

物の主軸はN7°W。

掘立柱建物跡S B96053(図版第29) C地区中央やや西寄りで見出したが、大半が調査区外へのびる。東西1間以上(1間:約1.8m)・南北2間以上(4.2mまでを検出、1間:約2.1m)の規模を有する。柱掘形は一辺0.6m前後の隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。西辺柱筋は後述する掘立柱建物跡S B96054と重複し、これに切られる。主軸はN8°W。

掘立柱建物跡S B96054(図版第29) C地区西辺部で見出したが、やはり大半が調査区外へのびる。東西1間以上(1間:約2.3m)・南北4間以上(6.4mまでを検出、1間:約1.6m)の南北棟建物である。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN4°W。

掘立柱建物跡S B96055(図版第29) 上記のS B96053・96054と北辺柱筋が重複する。東西4間(7.9m、1間:1.3~2.3m)・南北2間(約4.4m、1間:約2~2.4m)の規模を有する東西棟建物である。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN4°W。

掘立柱建物跡S B96056(図版第30) C地区西辺部、先のS B96055の南側で、後述するS B96057と重複して見出したもので、これに先行する。南北2間(2.9~3.2m、1間:1.4~1.6m)・東西3間以上(5.5mまでを検出、1間:1.8m前後)の東西棟建物である。柱掘形は一辺約0.4mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土であるが、中に焼土をブロック状に含むものが認められた。ややいびつな柱筋をなすが、主軸はN15°W。

掘立柱建物跡S B96057(図版第30) C地区西辺部で、先述のS B96056と一部重複して見出したもので、これに後出する。東西6間(約8m、1間:1.3m前後)・南北2間(4.3m、1間:2.1m前後)と考えているが、東辺の梁行は3間(1間:1.4m前後)となる可能性が高い。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN15°W。

掘立柱建物跡S B96058(図版第30) C地区西辺部、S B96057と西側柱筋が重複して見出されたもので、これに先行する。南北2間(約3.9m、1間:1.4~1.5m)・東西1間以上(1間:2.3~2.4m)の総柱建物である。柱掘形は一辺約0.5~0.6mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN15°W。

掘立柱建物跡S B96059(図版第29) C地区西辺部付近、先のS B96021の西側で見出したものであるが、柱穴が南北に2間(3.6m、1間:約1.8m)分並ぶことから建物跡と把握したにとどまり、これを梁行とする東西棟建物と考えている。柱掘形は一辺0.5m前後の隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN8°W。

掘立柱建物跡S B96060(図版第29) S B96053の北側で確認した南北棟建物跡である。大半が調査区外へのびているため、全容は不明だが、東西2間以上(4.3mまでを検出、1間:2.1m前後)・南北3間以上(6.2mまでを検出、1間:1.5~2.7m)を見出した。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN12°W。

掘立柱建物跡S B97226(図版第31) E地区南半部で見出した南北棟の大型建物である。東西

2間(4.8m：1間約2.4m)、南北5間(8.8m：1間約1.8m)の規模を有し、柱掘形は一辺0.7～1m前後の隅丸方形である。主軸は、N6°W。

掘立柱建物跡 S B 97253(図版第32) E地区中央付近、先のS B 97226の北側で検出したもので、南北2間(4m：1間約2m)・東西2間(4.2m：1間約2.1m)以上の東西棟建物と考えている。柱掘形は一辺0.5mの隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。建物の周囲をめぐるように溝(S D 97236)があり、特異な性格を有した建物であった可能性も考えられる。主軸は、N5°W。

掘立柱建物跡 S B 97333(図版第31) E地区北西部で検出した3間(5m、1間：約1.7m)×2間(3.5m、1間：約1.75m)の南北棟建物である。柱掘形は一辺0.5m前後で、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N5°W。

掘立柱建物跡 S B 97336(図版第30) E地区南端付近、先のS B 97226の南側で検出した。1間(1.8m)以上×2間(3.6m、1間：約1.8m)の総柱建物で倉庫と考えられ、柱掘形は一辺0.4m前後の隅丸方形で、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N6°W。

掘立柱建物跡 S B 97334(図版第31) E地区中央付近で検出した。本建物跡と後述するS B 97336の2棟のみE地区第4遺構面(古相を呈する遺物が出土した遺構面)をベースとする。東西2間(3.3m、1間：約1.65m)・南北6間(8.6m、1間：約1.6m)以上の長大な南北棟建物に復原される。柱掘形は一辺0.5～0.6m前後の方形で、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N20°W。

掘立柱建物跡 S B 97335(図版第31) 上記のS B 97334とともにE地区第4遺構面で検出した。S B 97334の北辺および北辺から2間分の柱穴に建替えの痕跡が認められたことから掘立柱建物跡として復原したものである。南北2間(3.4m、1間：約1.7m)以上×東西2間(3.3m、1間：約1.65m)以上の南北棟建物で、柱掘形は一辺0.4m前後の方形で、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN24°W。

3. 溝・井戸・土坑

溝 S D 97236(図版第32) E地区中央付近で検出した。先述のS B 97253の西辺～南辺をめぐるように逆「L」字状にのびる。幅約0.7m・深さ約30cmを測り、断面は「U」字形をなす。埋土は暗黄褐色砂質土の単一層であった。直上に奈良時代の土坑S K 97203が存在しており、非常に検出作業にとまどった。北端は途切れる状況となっているが、後述するS D 97247へつながる可能性もある。埋土中から須恵器・土師器(図版第76：644～649)とともに、軒平瓦片(第14図2)などが出土した。

溝 S D 97246(図版第39：断面) E地区中央付近を東西にのびる東西溝で、幅0.6～1.2m・深さ20～30cmを測る。埋土は暗黄褐色砂質土の単一層であった。先述のとおり、S D 97247と切り合い関係を有し、これに先行することが確認される。埋土中から須恵器杯身・杯蓋、土師器杯身・同甕などが出土した(図版第76：636～640)。

溝 S D 97247(図版第39：断面) E地区中央付近を南北にのびる溝で、幅約1m・深さ約20cm

を測る。ゆるやかに「U」字状の断面形をなし、埋土は暗黄褐色土の単一層であった。先のS D 97236とつながる可能性を有するとともに、後述するS D 97246と切り合い、これに後出するものであることが確認される。埋土中から須恵器杯身・蓋などが出土した(図版第76:634・635)

S K 96028(図版第32) C地区中央付近で検出した。東端部が削平されるが、幅約0.9m・長さ1.5m以上の隅丸長方形を呈していたと思われる。深さ約0.2mが遺存する。埋土は暗黄褐色砂質土で、埋土中から須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯などが出土した(図版第75:625~633)

井戸S E 96051(図版第32) C区南端付近、先の掘立柱建物跡S B 96058の南側で検出した。径約2.8mの円形をなすが、東側に約1.2mほどの一段浅い張り出し部が付く。井戸部分は深さ約1.2m、張り出し部は深さ約0.3mを測る。張り出し部は、井戸の廃絶段階に井戸枠等を取り除く目的で掘られた可能性もあるが、断面観察では埋土にこうした痕跡は確認できなかった。埋土は暗黄褐色土で、井戸枠の痕跡は確認できなかった。埋土中から須恵器壺底部・土師器甕・鋳型などが出土した(図版第76:641~643)。

土坑S K 96031・96032・96043(図版第39) C地区西辺中央付近で検出した方形の土坑である。南北に一直線に並び柱穴の可能性もあるが、埋土中で柱の痕跡は確認されなかった。S K 96031は南北約1.5m・東西約1.2mの長方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。S K 96032は、一辺約0.9mの方形を呈し、深さ約0.5mを測る。S K 96043は、一辺1mの方形を呈し、深さ約0.6mが遺存する。いずれも埋土は暗黄褐色土の単一層であった。埋土中からは、須恵器・土師器の細片は出土したが、明確に時期を示す遺物は認められなかった。

鍛冶炉跡S X 96030(図版第32) C地区西辺やや北寄りで検出した径約0.8mの円形の土坑である。遺存状況は悪く、東側のおよそ半分程度は削平を受け遺存しておらず、深さも7cm程度が遺存しているにすぎない。底面が赤橙色になり熱を受けた痕跡をとどめていたことから炉跡の残骸と判断した。埋土は大きく2層に分かれ、上層は暗黄灰色砂質土、下層は細かな焼土と炭とによって構成されていた。遺物は出土しなかった。

鍛冶炉跡S X 96033(図版第32) C地区西辺中央付近で検出した方形の小さな土坑である。東西約0.5m・南北約0.3mの長方形をなし、深さ約12cmが遺存する。側壁及び床面は赤橙色になり熱を受けた痕跡をとどめていたことから炉跡の残骸と判断した。ただし、埋土は暗茶褐色土で、炭や灰は認められなかった。遺物は出土しなかった。

S X 96027(図版第3) C地区中央付近で包含層の掘削中に土器がまとまって出土したことからS Xの遺構番号を付して取り上げたものである。精査を繰り返したが遺構としての掘形等は確認できなかった。出土土器は須恵器杯身・杯蓋などがある(図版第75:622~624)

第6節 奈良時代～平安時代初頭の遺構

奈良～平安時代前期の遺構には、掘立柱建物跡14棟・竪穴式住居跡1基・道路状遺構2条・溝4条・土坑10基・井戸4基がある。これらは、C地区からF地区までのすべての調査区で確認され、今回報告している遺構の中では最も多く、かつ広範囲に分布している。C～E地区では第2

遺構面、F地区では第3遺構面に相当する。検出遺構は、出土遺物などから、少なくとも3期にわたるものと判断されるが、その細かな時期的把握は改めて検討する^(注24)。

1. 道路状遺構およびその側溝(図版第33・34・40)

溝S D97217 位置関係からみて、E地区からD地区で検出した南北溝へつながってのびると判断される^(注25)。とすれば、E地区の北東部から北北西にのび、一旦、D地区南端付近で池状遺構(S X94011)へ流入した後、さらに北進し、D地区北端からC地区の南西隅でもその一部を確認したこととなり、総延長は150mをこえる。溝の方位は、北上するに従い西方への振れを減ずる。検出部南端に相当するE地区でN24°W、D地区中央付近(D1とD2地区の境付近)ではN12°W、D地区北端ではN7°Wとなる。溝の規模は、後世の削平などにより、検出した各調査区で若干の差異が認められる。E地区では、幅約1.2m・深さ約0.6~0.8mを測るが、その北側延長部(D地区)では、幅1~1.6m・深さ約0.6~0.8mとなる。断面は逆台形に近い。溝の埋土は基本的に、下層の暗黄灰色砂質土と上層の黄灰色砂質土の2層に分かれる。検出面は、鳥島の造成により削平を受けたD地区中央付近(D1地区北半とD2地区南半)では、標高11.2~11.5m前後となるが、これ以外はほぼ標高11.8~12mをベースとする。ただし、後述するとおり、これが道路遺構の側溝とした場合、道路面は遺存しておらず、本来のベース面はすでに削平されていることとなる。埋土からは、奈良時代~平安時代前期(8世紀後半~9世紀初頭)を主体とする土器類(須恵器・土師器)が出土し、これにわずかに飛鳥時代(7世紀末葉)のものが含まれるといった状況であった(図版第80・81)。なお、本溝は、D地区北端付近で土器溜り(S X95106、図版第81:808~815・817・818)、E地区で井戸(S E97207)と重複しており、両遺構に切られる。両遺構からは9世紀中葉~10世紀初頭の遺物が出土している。

溝S D97219 検出した範囲は、E地区北東部に限られるが、検出範囲においては、先のS D97217とほぼ平行してのびる(N24°W)。E地区北端付近で池状遺構(S X97249)に流入した後、幅・深さとも減ずる(幅約0.5m・深さ約0.3m)が、さらに北北西へのびていることが確認される。埋土の堆積状況や規模などは、S D97217とほぼ共通する。幅は約1.2m・深さ約0.8mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は下層の暗黄灰色砂質土と上層の黄灰色砂質土の大きく2層からなる。埋土中からの出土遺物もS D97217に共通するが、池状遺構(S X97229)の近辺では、溝底付近から細片となった製塩土器が出土した(図版第79)。

道路状遺構1 上記のS D97217およびS D97219が東西の両側溝をなすと考えられ、北北西—南南東にのびる^(注26)。側溝と判断した溝のうち、S D97219はE地区北端付近で池状遺構(S X97249)に流入し、さらに北北西方向へのびる。またS D97217は、D地区南端付近でやはり池状遺構(S X94011)に流入した後、北北西方向にのび、最終的にC地区の南西隅でその一部を検出している。S D97217とS D97219は、心々間で約12mを測り、平行してのびる。また、ともに幅約1.2m・深さ約0.8mを測り(E地区部分)、その断面形も逆台形をなす。道路面と考えられる硬化面などは確認されなかったが、両溝に挟まれた空間が道路遺構と判断している理由は、調査区の東西両

側で確認している奈良～平安時代前期の多くの遺構(柱穴など)がこの部分へ全く及んでいないこと、規模・形態・機能した時期の近似する2条の溝が平行してのびる点、などを大きな根拠としている。溝内からの出土遺物は、8世紀後半～9世紀前半頃のものを主体とし、わずかに7世紀末頃まで遡るものが含まれるといった状況である。これが道路遺構であった場合、これら出土遺物の所属時期が道路の機能した時期を示しているものと判断している(確実に8世紀後半～9世紀前半)。なお、側溝と切り合い関係を有する遺構は、7世紀後半頃の竪穴式住居跡を上限とし、9世紀中葉～後半の井戸・土坑(後述するS E97223・S X95106)を下限とする。

溝S D97218 後述する道路状遺構2の東側溝と考えている南北溝である。E地区の北東隅からD地区の西辺へと続く大型の素掘り溝である。規模は、E地区北東部で、幅約4m・深さ約1.4mを測るが、D地区西辺部では幅約4.5m・深さ約0.5m程度となる。また断面形も、E地区で「U」字形をなすのに対し、D地区では浅い「U」字状となる。これは、中世の島畠造成の際の削平によるもので、検出面がE地区で標高12m付近、D地区で11.5～11.7m付近とそのレベルに明らかな差異があることによる。D地区における本来の遺構面は30cm以上高かったものと判断される。溝の方位は、N14°Wである。溝底は、D地区では北(北西)から南(南東)へ、E地区では南(南東)から北(北西)へそれぞれ下がり、D地区南端付近が最も低くなる。このD地区南端部には、先述の池状遺構(S X94011-2)がありこれに流入する。この状況は、先の道路状遺構1(S F97300)の東側溝(S D97217)と同様である。溝の埋土は、基本的に暗黄灰色砂質土であるが、上層では粘性が強く、下層になるほど粒子は粗く砂質となる。溝最下層には3mm前後の石を含む砂が10cmほど堆積し、多量の土器とともに土馬・ミニチュア竈などの祭祀遺物や墨書土器・銅製帯金具などが包含されていた(図版第83～85・図版第104:下1)。また、埋土の最上層には飛鳥時代～奈良時代の土器片が多く認められた。これは溝の廃絶段階に周辺の遺物包含層を削り取り、溝を一気に埋めたことによると判断している。なお、D地区西辺部では後述する橋状遺構(S X94012)を検出したほか、足跡と思われる径10cm弱の小孔が多数認められた。

溝S D97222 大半を近世の溝に削平されて遺存状況が悪く、明確にその痕跡を認めたのはE地区中央付近(後述するS X97249と重複する部位から南側へ約5mおよびE地区東辺中央付近の約2m程度の範囲に限られる。溝の幅は約2m、深さは最も良好に遺存する部位で約0.3mを測る。断面はゆるやかな「U」字状をなし、埋土の大半は暗黄灰色砂質土であるが、S X97249付近およびこれと重複する部分では、砂質が強く、暗黄灰色砂(洪水による堆積層に近い)となる。埋土中からは、わずかに須恵器片や古瓦片が出土したものの、図化できるものはなかった。

道路状遺構2 S D97218とS D97222が東西の両側溝を構成すると考えている。S D97218は、D地区でもその延長部を確認しており、D地区南端で池状遺構へ流入した後、さらに北西方向へのびる。部分的な遺存状況の差異もあるが、幅4m以上・深さ1以上mを測る規模の大きな溝である。一方、S D97222は約2mを測るが、遺存状況はきわめて悪く、残りのよい部分でも深さ約30cmを測るにすぎない。遺存部分は、S X97249以南で部分的に認められるほかは、大半がすでに削平されていた。両溝は、このように一部は平行してのびる(溝の肩間の距離は5～6m)こ

とから道路状遺構の側溝としての可能性を考えることができる。しかし、両者には規模に明らかな差異が認められるほか、S D97222の遺存状況の問題もあり、その確証は十分でないと言わざるをえない。なお、S D97218からは9世紀後半～10世紀前半頃の遺物が出土しており、これが道路遺構であれば、先の道路状遺構1(S F97001)が廃絶した後、規模を縮小して造り変られたものと考えられる。

橋状遺構 S X 94012(図版第34) 上述のS D97218中で検出した2列の杭列痕跡(直径約5～8cmの小穴)である。D地区西辺部に位置する。検出状況から小規模な橋脚の痕跡と推測される。並走する杭列の間隔は約50cmを測り、列における各杭間隔は40～50cmである。橋自体は、杭列の上部に板を渡した簡易なものと考えられる。

池状遺構 S X 97249 E地区北半部で検出した南北(長軸)約13m・東西(短軸)約5mの長楕円形をなす池状遺構で、深さ約1.2mを測る。先述の道路状遺構(S F97000)の西側溝と考えているS D97219が南側から流入し、さらに北側へ流出して延びる。埋土は大きく2層に分層され、上層は黄灰色砂質土(やや粒が粗い)、下層はほぼ同色の粘質土である。また、上層部にはさらに、これと切りあう溝(S D97222)の埋土(暗黄灰色砂)が切り込んでいる。埋土中からは、須恵器、土師器の杯身・杯蓋類を中心に、製塩土器・土馬などが出土した。時期的には8世紀後半頃のものを主体とし、一部7世紀末～8世紀初頭頃のものや9世紀初頭頃のものが含まれていた。

池状遺構 S X 94011(図版第34) D地区の南端部で検出した池状遺構である。底面は平坦でなく、大きく波うつ形状を呈する。堆積土層の観察によると、常時一定量の水が滞水していた状況は想定できない。ただ、奈良時代後半を主体とする段階と、平安時代前半を主体とする段階に分かれ、その形状は大きく異なっていたようである。奈良時代後半には、東側に中心が存在し、S D97217が流入していた段階と考えられる。埋土は褐灰色系の細粒砂が堆積し、須恵器・土師器が少なからず含まれている。また、平安時代前半は、中心が西方(S D97218の延長上)へ移動した段階で、その形状は南北に長い楕円形を呈していたと推測される。この段階の規模は、長さ(南北)10m以上・幅(東西)8m前後・深さ約1.2mと判断され、その西端部から後述する暗渠(S X 94013)が西方へのびる。S D97218の溝底と池状遺構底面との比高差は約50cmを測る。底部付近には有機物を含む暗灰色系の微砂が互層に約40cm堆積し、土器類と共に墨書土器・土馬・獣骨・板材などが出土した。さらにS D97218に近い底面上から、和同開珎11枚・万年通寶1点・神功開寶1点・銅製帯金具が、およそ1mの範囲内から出土した(図版第104・105)。

暗渠 S X 94013(図版第34・40) 上述の池状遺構(S X 94011-2)に注ぎ込む暗渠排水施設である。暗渠の主軸はW7°Sである。全長は約5.3mを測り、広葉樹の幹の中ほどを縦割りして心部を取り除いた幹2本を使用して設けられていた。幹部は、西側のものが直径約40cm・長さ3.9m、東側のものが直径約50cm・長さ1.7mを測り、結合部は30cmほどを重ね合わす。暗渠の施設手順は、幅約1.6mの溝を掘り、池状遺構に近い東側に長尺の暗渠材を据え、さらに短尺の暗渠材を西側に重ねた後、埋め戻すというものであった。また、暗渠の側面には暗渠の固定とみられる、直径約7cmの丸木も存在した。なお、暗渠西側の調査区壁面の観察では、さらに西方へのびる素

掘り溝の痕跡が確認されている。暗渠底面は、西から東へ約7cm下がっており、西方から東方への排水を意図したものであったと判断している。

2. 掘立柱建物跡および柵列・竪穴式住居跡

掘立柱建物跡 S B 95002(図版第35) D地区北西隅付近で検出した2×3間の総柱建物跡である。柱間は東西(梁行)約4.2m(1間:約2.1m等間)・南北(桁行)約5.3m(1間:1.7~1.8m)を測る。柱掘形は一辺0.6m前後の方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。また、いくつかの柱穴には径20cm前後の柱痕跡を認めたほか、南辺の柱穴には柱の抜き取り痕跡をとどめるものも認められた。主軸はN2°W。

掘立柱建物跡 S B 95033(図版第35) D地区北半部中央付近で検出した2間×3間の南北棟建物跡である。柱間は東西(梁行)約4m(1間:約2m等間)・南北(桁行)約5.7m(1間:約1.9m等間)を測る。柱掘形は一辺0.6m前後の隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。また、大半のものは径15cm前後の柱痕跡を認める。建物の主軸はN2°W。

掘立柱建物跡 S B 95034(図版第35) D地区北半部中央付近、先の掘立柱建物跡 S B 95033と一部重複して検出した。南半部が削平を受けているが、東西5間・南北1間以上の東西棟建物跡と考えられる。柱間は、東西(桁行)約9m(1間:約1.8m等間)・南北約2.1m以上(1間:2.1m)を測る。柱掘形は0.6m×1mの長方形をなす。埋土は暗黄灰色砂質土である。建物の主軸はN2°E。

掘立柱建物跡 S B 95036(図版第35) D地区北半部で検出した2間×3間の東西棟建物跡である。柱間は、東西(桁行)約5.4m(1間:約1.8m等間)・南北(梁行)約4.2m(1間:約2.1m等間)を測る。柱掘形は、一辺0.6m前後の隅丸方形をなし、埋土は、暗黄灰色砂質土である。また、径15cm前後の柱痕跡を認めたほか、南辺の柱穴には柱の抜き取り痕跡も認められた。建物の主軸はN2°W。

掘立柱建物跡 S B 96020(図版第36) C地区西半部で検出した2間×5間の南北棟の大型掘立柱建物跡である。柱間は、南北(桁行)12m(1間:2.4m等間)・東西(梁行)4.8m(1間:2.4m等間)を測る。柱掘形は一辺1m前後の隅丸方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。また、径0.2~0.3mの柱痕跡を認めた。主軸はN2°E。

掘立柱建物跡 S B 96216~96218(図版第37) F地区の北辺やや東寄りの部分で、S B 96216~96218の3棟の掘立柱建物跡がほぼ同一地点に重複して検出された。柱穴掘形の切り合い関係から、S B 96218→S B 96216→S B 96217の順に建て替えられたものと考えられる。S B 96216は東西3間(約6.5m、1間:2.1~2.2m)、南北1間以上(約3m)、S B 96217は東西2間(約4.2m、1間:2.1m)、S B 96218は東西3間(約6.3m 1間:2.1m)を確認したにとどまる。いずれも、大半が調査区外(北側)へ延びているため、その全容は不明だが、S B 96217が総柱建物で倉庫と考えられること、3棟が同一地点に建て替えられたように存在することなどから、いずれも倉庫であった可能性が高い。主軸は、S B 96216・96218がほぼ座標北、S B 96217はN2°Eを向く。柱掘形の埋土はいずれも暗黄灰色砂質土で、一辺0.5m前後の方形の柱掘形をなす。径

20cm前後の柱痕跡を認めるものもあった。なお、これら掘立柱建物跡3棟の南側では、10世紀の掘立柱建物跡が比較的多く検出されており、この時期まで時代が下がる可能性もある。

掘立柱建物跡 S B 96219(図版第37) F地区西辺部で検出したもので、遺存状況が悪く、全容は不明ながら南北3間(5.9m、1間:1.8~2m)・東西2間以上(約5.6m、1間:2.8m)の建物跡として把握した。柱掘形は、一辺0.4m前後の方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN2°W。なお、本掘立柱建物跡も、先の3棟の建物跡と同様に、10世紀まで時代が下がる可能性を有す。

柵列 S A 96221(図版第37) 先の掘立柱建物跡 S B 96219の東側に接して検出したもので、南北に3間分(約9m、1間:約3m)の柱穴の並びを確認しており柵列と判断した。柱掘形は、一辺0.4m前後の方形をなす。主軸はN2°E。

掘立柱建物跡 S B 97317(図版第39) F地区南西隅付近で検出した2×3間の東西棟総柱建物跡である。柱間は、東西(桁行)6.6m(1間:2.2m等間)・南北(梁行)4.2m(1間:2.1m等間)を測り、柱掘形は一辺約0.6mの方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸はN2°W。

掘立柱建物跡 S B 97225(図版第38) E地区西辺中央付近で検出した。2間×3間以上の東西棟建物跡で、西方部が調査区外へ延びる。南北(梁行)5.4m(1間:2.7m)・東西(桁行)7.2m以上(1間:2.4m)を測る。柱掘形は一辺0.9~1.2m前後の方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N4°E。

掘立柱建物跡 S B 97250(図版第38) E地区西辺中央付近で検出したもので、西半部は調査区外へ延びる。2間×3間の南北棟建物跡と理解しているが、建物跡東辺および南辺に沿って約1.5m離れたところに柱列が認められ、庇の可能性もある。この場合、三面に庇が取り付く東西棟建物の可能性が高くなる。柱間は、南北(桁行)5.4m(1間:1.8m等間)・東西(梁行)2.7m(1間:2.7m)を測る。柱掘形は一辺0.5m前後の方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N3°W。

掘立柱建物跡 S B 97331(図版第38) 先の掘立柱建物跡 S B 97225の南側で検出した2間×2間の東西棟建物跡である。柱間は、南北(梁行)4m(1間:2m)・東西(桁行)6.2m(1間:3.1m)を測る。柱掘形は一辺0.6m前後の方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N3°W。

掘立柱建物跡 S B 97332(図版第39) E地区南西隅付近で検出した。大半が調査区外へのびているため規模・形態は不明だが、南北3間(4.8m)分の柱穴を確認しており、南北棟建物の東辺部と考えている。柱掘形は一辺0.7m前後の方形をなし、埋土は暗黄灰色砂質土である。主軸は、N2°E。

竪穴式住居跡 S H 95048(図版第41) D地区北半部、先の掘立柱建物跡 S B 95002と S B 95033の中間で検出した。東西約3.3m・南北約4.2mの長方形の竪穴式住居跡である。埋土は暗黄灰色砂質土で、深さ約5cmが遺存する。東辺やや南寄り、長さ、幅とも約0.4mの馬蹄形状に広がる焼土塊を確認し、竈の痕跡と判断している。床面には炭・灰層の広がりが認められた。また、4か所で支柱穴(径約0.3m)を確認している。遺物は、床面付近で須恵器杯身・同椀、土師器杯身・同甕が出土した(図版第82:828~837)。

3. 井戸・土坑・溝

井戸 S E 95042(図版第41) D地区北東部で検出した。径約1.8mの円形掘形をもち、深さ約1.5mが遺存する。井戸枠は遺存していない。底部付近から須恵器杯身・土師器甕口縁部片が出土している(図版第82:819~823)。

井戸 S E 95072(図版第41) D地区南東部で検出した。径約2mの円形の掘形をもち、深さ約1mが遺存する。内部に径約1.2mを測る円形の井戸枠痕跡を認めたが、井戸枠等は遺存していなかった。埋土中から土師器杯身・同皿・同甕・製塩土器が出土している(図版第82:824~827)

井戸 S E 95073(図版第41) D地区北東隅付近で検出した。一辺約3mの隅丸方形掘形をもち、深さ約1.5mが遺存する。内側には、一辺約1.6mの方形に組まれた井戸枠が遺存していた。井戸枠は、四隅に杭を打ち、幅約20cmの板材を各辺に縦位に配置したもので、底部には曲物を置く。ただし、板材はその大半が腐食し、底部で確認した曲物は土圧のため大きく変形していた。底部から軒丸瓦片等(第14:4)が出土している。

井戸 S E 97223(図版第41) E地区の北東部、S D 97217に重複して検出した。4.3m×3.6mの方形の掘形を有し、深さ約2.8mが遺存する。井戸枠は下半部に径約1.2mの丸太材をくり貫いた白を再利用しており、上半部は一辺約1.3mの方形に幅約0.2mの板材を縦位に配置し横棧を設けるものであった。切り合い関係から、S D 97217が埋没した後に穿たれたもので、埋土中からは9世紀後半頃の遺物が出土している(図版第82:838~845)。

土坑 S K 95044・95045・95047(図版第40) D地区北半部東寄りで検出した。S K 95044が掘立柱建物跡 S B 95033と重複して、S K 95045・95047はその東側で検出した。いずれも遺存状況は悪く、全容が確認されるものはS K 95045のみだが、およそ一辺2.4m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。遺存状況はきわめて悪く、深さは3~5cm前後が遺存するにすぎない。埋土は暗黄灰色砂質土で、床面は火を受けたように淡青灰色に変色していた。埋土中から、わずかに製塩土器片が出土している。

土坑 S K 96013・96014(図版第40) C地区の西辺やや北寄りで検出した長方形の土坑である。両者とも東西約1.2m・南北約0.8mの長方形を呈し、埋土は暗黄灰色砂質土で、深さ約20cmを測る。土坑とするより、柵列などの柱穴と理解すべきかもしれないが、東側で延長部は確認されなかった。

土坑 S K 96015(図版第40) C地区の西半部、先述の掘立柱建物跡 S B 96020の北東側で検出した方形の土坑である。南北約2.5m・東西約2mの隅丸方形を呈し、深さ約30cmが遺存する。埋土は暗黄灰色砂質土である。埋土中からは明確に時期を決定する遺物は出土しなかったが、検出状況からこの時期のものと判断した。

土坑 S K 97203(図版第39) E地区南半部で検出した。南北約7.4m・東西約6mの大型の隅丸長方形をなし、深さは10~20cmが遺存していた。埋土は、灰や焼土が混在する暗黄灰色砂質土で、ブロック状のまとまりをなして8世紀中葉~9世紀初頭の土器類が包含されていた(図版第77・78:650~719)。本来は、単独で土器溜り状に形成された土坑群が、集中して営まれたため、大

型の土坑状に検出されたものの可能性が高い。遺物は、須恵器杯身・杯蓋や土師器皿など供膳形態のものが主体をなすが、中には多くの製塩土器が含まれていた。検出状況および遺物の出土状況などからみて、いくたびも行われた何らかの行為にともなって廃棄された土器群が繰り返し近接した場所に廃棄されたものと判断している。

土坑 S K 96205(図版第39) F地区北辺付近、後述する掘立柱建物跡 S B 96210の南辺柱筋と重複して検出した長方形の土坑である。南北約1.4m・東西0.9mの長方形を呈し、埋土は暗黄灰色砂質土で、深さ約20cmが遺存する。遺物は土師器杯身片等が出土したが図示できなかった。

土坑 S K 96206(図版第39) S K 96205の東側で検出した長方形の土坑である。南北約0.9m・東西1.4mの長方形を呈し、埋土は暗黄灰色砂質土で、深さ約20cmが遺存する。時期を示す顕著な遺物は出土しなかった。

土坑 S K 96203(図版第39) F地区の北端近く、後述する10世紀の掘立柱建物跡 S B 96214の中央北寄り、この柱穴と重複して検出した。約1.1m×約0.9mの長方形を呈し、埋土は暗黄灰色砂質土で深さ約20cmが遺存する。顕著な遺物は出土しなかった。

土器溜まり S X 95106(図版第123) D地区北西隅、S D 97219の東側肩部付近でこれと重複して検出したもので、これに後出する。ただし、土色の変化などは明確には確認できず、掘形の形状も明確に把握することはできなかった。このため、土器溜まりとしているが、土坑状の遺構内に土器が埋納されたものと考えている。出土土器には、須恵器杯身・壺、土師器皿・甕などがある(図版第81:808~815・817・818)。明らかにS D 97219を切って設けられていることから、この溝の下限を示す資料として重要である。

溝 S D 97307(図版第50:断面) F地区中央付近を南北にのびる南北溝で、総延長約60m分を検出した。幅約1.2m・深さ約40cmを測り、北北西-南南東にのびる(N20°W)。断面はゆるやかな「U」字形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土で、埋土中から、9世紀末~10世紀初め頃の緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・黒色土器などが出土した(図版第86)。その主軸方向は、上記の道路状遺構2にはほぼ平行し、道路状遺構(北側延長上の想定位置)から東方へ約110mの距離を隔てる。ここでは、道路に沿う地域に形成された地割りに関するものと判断している。

4. 素掘り溝群

C・D・Fの3地区においては、遺存状況は悪いものの、9世紀後半~10世紀初頭頃のものと考えられる素掘り溝群(畑作の痕跡と考えている)が、上述の各遺構に重複して認められた。幅30cm前後・深さ5cm前後を測り、断面は浅い「U」字形をなす。溝群の主軸はN8~10°Wを示し、これが上記の道路状遺構(1・2)にきわめて近似する方位であることや、切り合い関係から、本時期の遺構の中では最も新しい遺構と認識されることなどから、時期的には道路状遺構2などと同じ9世紀後半~10世紀前半頃のものと考えている。ただ、これらは遺存状況が悪く、調査対象地の東半部を中心として散在する状況で検出されるにすぎない。

第7節 平安時代中期～鎌倉時代初頭の遺構

平安時代中期～鎌倉時代初頭(10世紀後半～12世紀末)の遺構には、掘立柱建物跡16棟・井戸12基・土坑11基のほか、耕作の痕跡を示す数多くの素掘り溝群がある。時期的には、10世紀後半～11世紀前半に比定され、F地区第3遺構面を中心として掘立柱建物跡が認められる段階、11世紀末～12世紀末に比定され、C・D・Eの各地区第1～2遺構面を主体として掘立柱建物跡や井戸などが認められる段階(一部F地区第3遺構面にも掘立柱建物跡や井戸を認める)に大別される。

1. 10世紀後半～11世紀前半の遺構

この時期の遺構は、F地区第3遺構面を中心に検出したもので、一部、遺存状況は悪いもののE地区第2遺構面で検出した建物跡などを含む。

掘立柱建物跡 S B 96210(図版第42) F地区北西隅付近で検出した。東西4間(約9.2m、1間：2～2.2mで西端の1間のみ2.7m)・南北3間(約7.2m、1間：2.3～2.4m)の総柱建物跡である。主軸はほぼ座標北を示し、柱掘形は径0.3m前後の円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。柱掘形埋土中から黒色土器碗や土師皿の破片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 96214(図版第42) 先のS B 96210の東側で検出した。東西2間(約4.7m、1間：2.3～2.4m)・南北3間(約6.2m、1間：2～2.4m)の南北棟総柱建物跡で、主軸はN3°Eを示す。柱掘形は径0.3m前後の円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。柱掘形埋土中から黒色土器碗や土師皿の破片が出土した。位置関係からS B 96210の付属建物と考えている。

掘立柱建物跡 S B 96215(図版第43) F地区北半部西寄りで検出した。東西3間(約7.2m、1間：2.2～2.5m)・南北3間(約6m、1間：1.4～2.1m)の総柱建物跡で、主軸はN7°Eを示す。柱掘形は径0.3m前後の円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。柱掘形埋土中から、黒色土器碗や土師皿の破片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 96225(図版第43) F地区北西部、先の掘立柱建物跡S B 96215の北東側で検出した。東西2間(約3.6m、1間：1.8m)・南北3間(約5.5m、1間：1.5～1.8m)の南北棟建物跡で、主軸はN1°Eを示す。柱掘形は径0.3m前後の円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。本建物跡は柱掘形の検出作業が難しく、第3遺構面精査時にはいくつかの柱穴が未発見に終わり、第4遺構面調査段階でようやくその全容を把握した。なお、位置関係からみてS B 96215の付属建物と考えている。

掘立柱建物跡 S B 97311(図版第44) F地区中央やや東寄りで検出した。南北棟の総柱建物跡で、3間(6m、1間：2m)×2間(4m、1間：2m)の規模を有し、主軸はN4°Wを示す。柱掘形は径0.3m前後の円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。位置関係から後述するS B 97313の付属建物の可能性が高いと考えている。

掘立柱建物跡 S B 97313(図版第44) F地区西辺中央付近で検出した。南北棟の総柱建物跡である。遺存状況が悪く、確認できなかつた柱穴もあるが、南北4間(8.8m、1間：2.2m)・東西4間(7.5m、1間：1.8～1.9m)の規模を有していたと考えている。主軸はN4°Wを示し、柱

掘形は径0.3～0.5mの円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。柱掘形埋土中から黒色土器碗や土師皿の小片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 97252(図版第43) E地区中央西寄りで検出した。2間(3.9m、1間：1.8～1.9m)×2間(3.5m)以上の東西棟建物跡と考えられる。主軸はN15°Eを示し、柱掘形は径0.3m前後の円形をなし、埋土は暗乳灰色砂質土である。柱掘形埋土中から黒色土器碗や土師皿の小片が出土した。

柵列 S A 96251(図版第43) 掘立柱建物跡 S B 97253の北東側で径約30cmの円形の柱穴を5間分(約10.3m：1間2～2.1m)検出したもので、南北柵列と判断している。主軸はN8°Eを示す。柱掘形の埋土は暗乳灰色砂質土である。

井戸 S E 96023(図版第43) C地区の南半部で検出した。一辺約2.5mの隅丸方形の掘形を有し、その内部に蒸籠組の井戸枠が遺存していた。井戸枠は幅30～40cmの板材を蒸籠組みし、約1.2m四方に設けられていた。深さは、約2.1mが遺存し、底部には拳大の礫が敷かれ、その直上に一辺約0.5m四方に板が方形に組まれていた。埋土中からは11世紀前半頃の土師皿などが出土した。

素掘り溝群(図版第10) 主にF地区第3遺構面を中心に、この時期に属すと考えられる素掘り溝群を確認した。その検出状況は、掘立柱建物跡等に重複した状態であり、これに先行するもの、後出するものなどが複雑に認められた。その方向はほぼ座標の南北に沿うものが多く、一部に西へ振るものがある。また、多くは南北方向のものであるが、中に東西方向のものも認める。畠作の痕跡と理解しており、規模は幅約20～30cm・深さ約5cmを測る(単位としては2m前後の間隔が想定される)。切り合い関係をみると、上記のように掘立柱建物跡を切るものや、これに切られるものがあるほか、その主軸が若干西方へ向くものが古く、座標北を向くものが新しいことが確認される。うち、主軸が西方へ振るものが、先述の南北溝(S D 97307)との関連で9世紀後半～10世紀前半まで遡る可能性を有するほかは、10世紀後半～11世紀前半段階に、南北方向に延び、ほぼ座標北～N1°Eの主軸をもつものから東西方向にのびるもの(主軸はE3°N～E4°N)のものへと変遷したと判断している。

2. 11世紀後半～12世紀後半の遺構

この時期の主な検出遺構には、C・D・E区第1遺構面(第1～2遺構面)およびF地区第3遺構面で検出した掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝のほか、調査区南半部を中心に検出した素掘り溝群がある。

掘立柱建物跡 S B 95001(図版第45) D地区北辺中央で検出した。南北5間(約10.5m、1間：2.1m)・東西3間(約6.3m、1間：2.1m)の南北棟総柱建物跡である。柱穴は径40cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土で中に炭が混入するものが多い。柱痕跡が確認されるものでは、径約10cmを測る。柱筋はややいびつで、南東隅付近の2か所の柱穴は、後世の削平のため確認できなかった。主軸はN4°Eを示す。柱掘形中から瓦器碗や土師皿の小片が出土している。

掘立柱建物跡 S B 96024・96025(図版第45) C地区南西隅付近で検出したもので、ほぼ同一地

点に2棟が重複して検出された。2棟とも4間×2間の南北棟総柱建物跡で、規模も近似する。またいずれも柱掘形は径30cm前後の円形をなし、径15cm程度の柱痕跡を認めるものもある。埋土は暗灰褐色砂質土である。S B 96024は、南北7.2m(1間:1.8m)・東西4.7m(1間:2.3~2.4m)で、主軸はほぼ座標北を向く。S B 96025は、南北7.3m(1間:1.8~1.9m)・東西4.2m(1間:2.1m)で、主軸はN 2° Eを示す。直接的な柱穴掘形の切り合い関係が無く両者の前後関係は不明であるが、その主軸から掘立柱建物跡S B 96024→S B 96025へと建て替えられたものと判断している。柱掘形中からは、12世紀後半頃の瓦器椀や土師皿の破片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 97212(図版第47) E地区北北部西辺で検出した南北4間(約8m、1間:2m)×1間(2.2m)以上の総柱建物跡である。遺存状況が悪いことや、大半が調査区外へのびていることなどから、全体の規模は確認できない。主軸はN 8° Eを示す。柱掘形は径30cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 97213(図版第47) E地区北東隅付近で検出した南北2間(約5.4m、1間:1.8m)以上・東西1間(2.4m)以上の総柱建物跡である。遺存状況が悪いことや、大半が調査区外へのびていることなどから、全体の規模は確認できなかった。主軸はN 8° Eを示す。柱掘形は径30cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 97214(図版第47) E地区東辺中央付近で検出した南北3間(7.7m、1間:2.5~2.6m)×1間(2.1m)以上の総柱建物跡である。遺存状況が悪いことや、大半が調査区外へのびていることなどから、全体の規模は確認できない。主軸はN 6° Eを示す。柱掘形は径20~30cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 97302(図版第46) F地区北西隅付近で検出した東西棟の総柱建物跡で、2間(4.6m、1間:2.3m)×5間(10.9m、1間:2.1~2.2m)の規模を有し、北西部に1間×2間の張出しをもつようである。主軸はN 9° Eを示し、柱掘形は径40cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 97314(図版第46) F地区南西隅付近で検出した。東西棟建物跡で、1間(2.8m)×3間(3.7m、1間:1.2~1.3m)の規模を有する。主軸はN 2° W。柱掘形は径30cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 97318(図版第46) F地区南西隅付近、先の掘立柱建物跡S B 97314と一部重複して検出した。南北棟建物跡で、3間(3.8m、1間:1.2~1.3m)×1間(2.2m)の規模を有する。主軸はN 2° E。柱掘形は径30cm前後の円形をなし、埋土は暗灰褐色砂質土である。

井戸 S E 94009(図版第48) D地区西南部で検出した。掘形は円形で、径約1.2mを測る。深さ約1.6mが遺存し、径約0.8mの円形の井戸枠痕跡を確認した。

井戸 S E 94010(図版第48) D地区南東部で検出した。掘形は円形で、径約0.8mを測る。深さ約2.2mが遺存し、径約0.6mの円形の井戸枠痕跡を確認した。底部付近で、一括投棄された状況で土師器皿・瓦器椀・曲物の底板・網代籠が出土した。さらに、底部から約1.5m上方でも、一括投棄された可能性の高い状況で、土師器皿・高台皿・白磁椀・人頭大の河原石などが集中して

出土した。井戸の埋没過程で2回程度の祭祀が行われたと判断される。

井戸 S E 95035(図版第48) D地区北半部中央で検出した。掘形は円形で、径約1.5mを測る。深さ約1.9mが遺存し、径約0.9mの円形の井戸枠痕跡を確認した。埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土し、11世紀末葉～12世紀初頭頃のものと考えられる。

井戸 S E 95071(図版第48) D地区北半部、掘立柱建物跡 S B 95001の南側で検出した。掘形は円形で、径約2mを測る。深さ約1.6mが遺存する。井戸枠の痕跡は認められなかったが、底部には径50cm前後の曲物が2段に組み立て設置されていた。埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土し、12世紀後半頃のものと考えられる。

井戸 S E 96022(図版第48) C地区南辺中央付近で、先述の S E 96021と重複して検出した。約2.2m四方の隅丸方形の掘形を有し、深さ約1.7mが遺存する。埋土は淡灰褐色砂質土である。埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土し、11世紀末葉～12世紀初頭頃のものと考えられる。

井戸 S E 96095(図版第48) C地区南西隅で検出した。径約1.5mの円形の掘形を有し、深さ約1.1mが遺存する。径約1.1mの円形の井戸枠痕跡を確認した。埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土し、12世紀後半頃のものと考えられる。

井戸 S E 96096(図版第48) C地区南西隅、S E 095の北側約4mの部位で検出した。径約2mの円形の掘形を有し、深さ約1.3mが遺存する。井戸枠の痕跡は確認できなかった。埋土は淡灰褐色砂質土である。埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土し、12世紀後半頃のものと考えられる。

井戸 S E 97204(図版第47) E地区東辺寄りで検出した。後述する S E 97205に南側半分を大きく切られ、直径約3mに復原される掘形を確認したに過ぎず、井戸枠の痕跡も認められなかった。ただ、底部近くでは、2段に組み立てられた曲物が遺存していた。埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土し、11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。

井戸 S E 97205(図版第47) E地区東辺寄りで、先述の S E 97204と重複して検出したもので、これを切っている。3m×2.8mの隅丸方形の掘形をもち、その内側に一辺約1.2mの方形に蒸籠組みされた井戸枠が残る。井戸枠は、断面が20cm×15cm程度の角材を1m程の長さにそろえて、これを蒸籠組したもので、12段積み上げた状態で遺存していた。深さは、検出面から約2.5mを測る。底部付近には、長さ約1.3mの角材を井桁に組んでいた。底部から土師器羽釜がほぼ完形で出土したほか、埋土中から瓦器碗や土師皿などが出土している。11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。

井戸 S E 97303(図版第48) F地区北辺中央付近で検出した。掘形は円形で、径約1.8mを測る。深さ約1.5mが遺存し、径約0.8mの円形の井戸枠の痕跡を認めた。出土遺物には土師器皿・瓦器碗などがあり、11世紀後半頃のものと考えられる。

井戸 S E 97319(図版第48) F地区南西隅付近で検出した。掘形は円形で、径約1.8mを測る。深さ約1.5mが遺存し、径約1mの井戸枠の痕跡を認めた。出土遺物には土師器皿・瓦器碗・黒色土器などがあり、11世紀後半頃のものと考えられる。

土坑 S K 95003(図版第49) D地区の北辺中央付近、S B 95001の北辺でこれに重複して検出し

た。幅約0.6m・長さ約2.5mを測る溝状を呈する。深さは約20cmが遺存し、埋土は暗灰褐色砂質土で、瓦器椀や土師器皿などが出土した。S B95001の廃絶に伴う土器溜まりと考えている。

土坑 S K 95005・95008(図版第50) D地区の北辺、先のS B95001の東側で検出した隅丸の長方形をなす土坑である。S K95005が東西、S K95008が南北に長い長方形をなし、一部が重複する状況で検出したもので、S K95008が先行する。S K95008は南北約1.8m・東西約1m・深さ約20cm、またS K95005は、東西1.5m・南北約1m・深さ約20cmを測る。S K95005では検出面で瓦器椀がうつ伏せに置かれた状態で出土した。埋土は両者とも暗灰褐色砂質土である。

土坑 S K 95007(図版第50) D地区北東部で検出した径約0.8mを測る円形の土坑である。深さ約30cmが遺存し、埋土は暗灰褐色砂質土である。

土坑 S K 95009・95010(図版第50) D地区の北半部、先のS B95001の西側で検出した楕円形の土坑である。一部が重複し、S K95010が先行する。S K95009は長径約1m・短径約0.8mを測り、深さ約10cmが遺存する。S K95010は、長径約0.8m・短径約0.7m(遺存部分)を測り、深さ約10cmが遺存する。埋土は両者とも暗灰褐色砂質土である。

土坑 S K 95070(図版第50) D地区北辺中央で検出した。約0.5m×約0.4mの楕円形を呈し、深さ約0.4mが遺存する。埋土は暗灰褐色砂質土で、瓦器椀や土師皿の小片が出土した。

土坑 S K 96001(図版第45) C地区の南西部、上述のS B96024・96025の東側で、これに一部重複して検出した。一辺約2mの隅丸方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。埋土は暗灰褐色砂質土で、埋土中から瓦器椀・土師器皿・同羽釜などが出土した。

土坑 S K 97201(図版第49) E地区の北西部、先述の掘立柱建物跡S B97212の東側に接して検出したもので、この建物の廃絶に伴って設けられたものと考えている。東西約2.5m・南北約1.5mの隅丸方形をなし、深さ約15cmが遺存する。埋土は暗灰褐色砂質土で、瓦器椀や土師皿の小片が出土した。

土坑 S K 97202(図版第49) E地区中央やや西よりで検出した。南北約1.2m・東西約0.7mの長方形をなし、深さ約10cmが遺存する。埋土は暗灰褐色砂質土である。

土坑 S K 97210(図版第49) E地区北東部で検出した。東西約1.4m・南北約0.8mの長方形をなし、深さ約10cmが遺存する。埋土は暗灰褐色砂質土である。

溝 S D 97308(図版第50:断面) F地区東半部で検出した。幅約0.7m・深さ約20cmを測り、断面はゆるやかな「U」字状をなす。南々西―北々東(N 8°E)にのびる。この主軸方向は、本地区の第1・2遺構面の素掘り溝群に沿った方向を示している。埋土は暗灰褐色砂質土で、埋土中から黒色土器片等が出土した。時期的には11世紀後半頃に属すと考えている。

溝 S D 94084 旧来の微高地周縁部をめぐるように、D地区の東～南辺をめぐるように検出した。幅約0.7m、深さは約20cmを測る。埋土中からはほとんど遺物が出土しなかったため、時期決定の材料を欠くが、検出状況からおおむね12世紀後半頃のもの判断している。

溝 S D 95012 D地区の南半部、後述する島島9404上で、これを南北に縦貫するように検出した。主軸はN 4°Eを示す。後述する溝(S D95013)とは島島9404の中央付近で交差し、これに後

出ることが確認される。北・南両端は島島造成に伴う削平のため遺存していない。幅約0.7～1m・深さ20～40cmを測り、断面「L」字形をなす。溝埋土は乳灰色砂質土で、上半部は砂質が強い。埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片が出土した。

溝S D95013 D地区北半部で検出した東西溝で、先述の溝(S D95012)と交差し、これに先行する。主軸は、S D95012にはほぼ直交する。東・西両端は島島造成に伴う削平のため遺存していない。幅約0.5～1m・深さ20～30cmを測り、断面「L」字形をなす。埋土は淡灰褐色砂質土で、埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片が出土した。

溝S D95014 D地区北西隅を南々西―北々東(N 4°E)にのびるが、大半が調査区外へのび、その延長部にあたるC地区では検出されなかった。幅約1.3m・深さ20～50cmを測り、断面はゆるやかな「U」字形をなす。埋土は暗灰褐色砂質土で、埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片などが出土している。12世紀後半頃のものとして判断している。

溝S D95043 D地区北半部の中央やや東寄りから南方へ向かって鍵の手状に折れ曲がってのびる。幅約1.5m・深さ約30cmを測るが、東肩部から南側延長部は削平を受けて遺存していない。このため、ここでは溝としたが、どのような性格を有していたか詳細は不明である。埋土は暗灰褐色砂質土で、埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片が出土しており、12世紀後半頃のものとして判断している。

溝S D96005 C地区の東半部を一直線に南北にのびる溝である。主軸はほぼ座標北を指す。幅は約1m・深さ約30cmを測り、断面は「U」字形を呈する。埋土は淡灰褐色砂質土で、埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片が出土した。

溝S D96201 F地区東半部を南北に延びる南北溝で、主軸はN 8°Eを示す。幅約0.6m・深さ約20cmを測り、断面は「U」字形をなす。埋土は淡灰褐色砂質土で、埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片が出土した。

溝S D96211 F地区の中央付近、島島(9603)と同(9604)の間、南半部では島島(9605)の東側を南北に伸びる溝で、主軸はN 8°Eを示す。幅約0.6m・深さ約20cmを測り、断面は「U」字形をなす。埋土は淡灰褐色砂質土で、埋土中からは瓦器碗や土師皿の小片が出土した。

溝S D96212 F地区西辺で検出した南北溝で、主軸はN 4°Eを示す。幅約0.6m・深さ約20cmを測る。断面はゆるやかな「U」字形をなす。埋土は暗灰褐色砂質土で、瓦器碗や土師皿の小片が出土しており、12世紀後半頃のものとして判断している。

素掘り溝群(図版第9) F地区第2遺構面を中心に、この時期の素掘り溝群を検出した。いずれも、幅約30cm・深さ約5cmを測る。これらが示す方向性は、先の10世紀後半～11世紀段階のものとはほぼ変化はない。すなわち、南北方向にのび、ほぼ座標北の方向を示すものと、東西方向にのび、主軸がE 2°N～E 3°Nのものである。これらは、やはり同様に切り合い関係等から、前者から後者の順に変化したものと判断される。

第8節 鎌倉時代以降の遺構

鎌倉時代以降の遺構は、各調査区で確認した島畠や素掘り溝をはじめとする耕作地としての痕跡のみである。

1. 島畠

島畠は、現在も一帯で認められる、周囲の水田より一段高く造られたられた畑地である。調査着手直前まで畑地として利用されていたものが大半であるが、すでに上方部が削平された状態となり水田下に埋没していたものも幾つか認めた。こうした島畠の多くは、各調査区の土層観察の結果、まず周囲を削り取り、その土砂を島畠造成箇所へ盛り上げることによって造られていることが確認された。一方、削り取られ、地下げされた部位は、水田として利用されていたようで、ここには少なくとも2段階以上の厚さ0.6m以上の水田耕作土(暗灰褐色砂質土・暗乳灰褐色砂質土)の堆積が認められた。しかも、この間には数cmの厚さで洪水による堆積物と思われる淡灰色砂層が間層として認められた。島畠造成以後、一帯が被った洪水の頻度を物語っているのであろう。このように、島畠造成後はいくたびもの洪水を被ったようだが、その度に一面を覆った洪水砂などを島畠上にかさ揚げを繰り返しつつ、また、若干の規模の変化を行いつつ近年まで島畠は営まれ続けた。

ただ、調査では、こうした後世の盛り土は着手段階で除去することとし、造成以後の状況は断面観察によって確認するにとどめた。このため、各調査区で第1遺構面とした遺構面で検出した遺構は、島畠造成以後の耕作痕跡が確認されたわけではなく、島畠造成直前の土地利用の状況を示すものといえる。また、島畠の造営期を探る方法としては、島畠外の水田部と考えられる地点から出土する遺物の示す時期を注視した。これによると13世紀後半から14世紀頃の遺物が最も古いという結果を得た。一方、島畠上の第1遺構面で確認された島畠造営直前の遺構からもやはり13世紀後半頃の瓦器碗の破片などが出土している。このため、その造成は、13世紀後半～14世紀頃から開始されはじめ、その後、順次、近世まで継続して続けられたものと判断している。

島畠9404(図版第4) D地区中央部で検出した。南北約60m・東西約25mの南北に長い長方形を呈する。

島畠9502(図版第4) D地区北半部で検出した。東西約30m・南北約13mを測り、東西に長い長方形を呈す。面積では島畠9404の約1/4である。

島畠9601(図版第2) C地区西辺部で検出した。東西約13m・南北40m以上の規模である。調査着手段階ではすでに削平され、水田下に埋没していた。

島畠9602(図版第2) C地区の東半部で検出した。東西6m・南北35m以上の規模である。元来かなり低いものであったが、後世に周囲の土砂を盛り上げることによって高くされた痕跡を認めた。これはその形態に反映されているようで、島畠9602のみは幅が狭く、畦畔状となっている。当初の造営段階での利用形態が異なっていた可能性もある。調査着手段階ではすでに削平され、水田下に埋没していた。

島島9603(図版第9) F地区北西部で検出した。東西13m・南北24mを測る。

島島9604(図版第9) F地区中央で検出したもので、南北約80m・東西約21mを測る。

島島9605(図版第9) F地区南西部で検出した。大半が調査区外へ延びており、全体の規模は不明である。

島島9606(図版第9) F地区東辺部で検出した。大半が調査区外へ延びており、全体の規模は不明である。調査着手段階ではすでに削平され、水田下に埋没していた。

島島9707(図版第6) E地区西半部で検出した。調査区外へのびており、全体の規模は不明だが、その形態は南北に細長い長方形をなし、幅は13m前後を測る(長さは50m以上)。北東隅から北東方向に向かって畔の痕跡と思われる土質の変化が確認された(幅約0.6m)。

島島9708(図版第6) E地区東半部で検出した。調査区外へのびており、全体の規模は不明だが、その形態は南北に細長い長方形をなし、幅は13m前後を測る(長さは50m以上)。

2. 溝・土坑

溝 S D 95008・95009(図版第4) D地区北半部で検出した。幅約1m、深さは約10cmを測る。埋土は黒灰色土で、いずれも島島(9502)の周囲を囲むようにあり、水田部と島島との区画に関するものであったと考えている。

溝 S D 96004(図版第2) C地区中央、島島(9601)と同(9602)の間を南北にのびるもので、幅約5m、深さは約10cmを測る。埋土は黒灰色砂質土である。

溝 S D 97206(図版第6) 島島(9707)と島島(9708)の間で検出した幅約4mの南北溝で、深さ約30cmを測る。埋土は黒灰色砂質土である。島島の造成によって作られた低部の排水に係わるものと思われる。

土坑 S K 96002・96003(図版第2) いずれも径1m程度の円形をなす。埋土は黒灰色砂質土で、野井戸と考えられる。

素掘り溝群(図版第2・4・6・9) いずれの島島でも、その上面では、最も新しい時期の遺構として多数の素掘り溝群を検出した。畑作の痕跡を示す畝溝と考えており、作物に関する資料を得ることを目的に、ベース土等の花粉分析を行ったが、ベース土が砂質土のため良好な成果は得られなかった。溝は幅20~30cmを測り、深さは10cm前後で、断面は浅い「U」字状をなすものが多い。ただ、作物の特性を示しているのか、数mおきに深くなるものも認められた。素掘り溝群は、それぞれが確認された島島の長辺と同一の方向性を示し、C地区ではほぼ座標北、D地区やF地区ではN8~10°Eを示す。その多くは、洪水等によって堆積したと思われる細かな砂が埋土となっているものが多く、大半が川の氾濫によって埋没したものである。比較的単一の素掘り溝群が検出された島島もあるが、D地区の島島9501や、F地区の島島9702などでは2~3時期のものが重複して検出された。一部に島島をこえて延びていたものが、その造成の際に削平されたことが確認されるものもあり、時期的には島島造成直前の耕作の痕跡と考えている。埋土中から13世紀後半頃に属す瓦器椀などの破片が出土しており、この頃を中心としたものと考えている。

第4章 出土遺物

第1節 概要

内里八丁遺跡C～F地区から出土した遺物は、コンテナにして総数約750箱に及ぶ。時期的には、先に報告した検出遺構に対応する。わずかに弥生時代中期の土器を含むが、おおむね、弥生時代後期終末～古墳時代初頭、古墳時代中期後半～後期初頭、飛鳥時代、奈良時代～平安時代前期、平安時代後期～末のものが主体をなす。

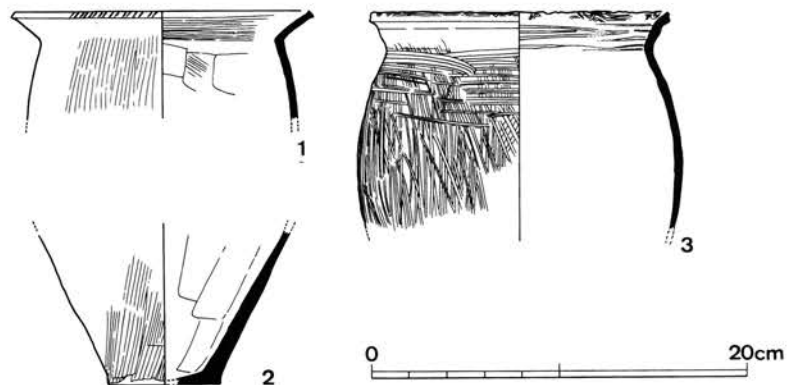
出土遺物の大半は、土器資料(陶磁器類を含む)が占め、他に木製品・石器・古瓦類などがある。一方、出土量から見れば、弥生時代後期終末～古墳時代初頭のものが最も多く、コンテナの約半数を占める。これは、この時期の土器資料の大きさにもよるが、F地区で検出した流路跡から土器類が多量に出土したためである。次いで奈良時代～平安時代前期の資料が多く、コンテナでおよそ200箱を占める。先述の道路状遺構の側溝と考えた南北溝をはじめ、調査区全域の包含層中などから最も多く出土したことによる。続いて、古墳時代中期後半～後期初頭の資料がコンテナ約80箱、平安時代中期～末のものが約50箱ある。いずれもその大半は、井戸・土坑・竪穴式住居跡といった各遺構の埋土中から出土したものである。飛鳥時代のものは約40箱と最も少なく、うち5箱をこの時期に属すと判断している鉄滓が占める。残る30箱のうち、弥生時代中期のものが1箱を占め、それ以外は小片のため所属時期等が不明なものである。

出土資料は、上記のとおり、非常に多くあったが、その整理作業にあたり、全てを図化し、ここに掲載することは難しいと判断された。そこで、各時期とも、主要な遺構に伴って出土した資料を優先的に図化・報告するとともに、包含層中から出土したものについては主要な資料を部分的に報告することとした。

第2節 弥生時代中期

この時期の資料はきわめて少ない。C・D地区の調査において検出した土坑の埋土中から甕が3点出土したにとどまる(第4図1～3)。

1・2は、同一個体と思われる甕の口縁部と底部の破片である。SK95095から出土した。「く」の字状に外



第4図 弥生時代中期土坑出土遺物実測図

反する口縁部は端面に刻目を施す。

3は、やはり甕の口縁部から体部上半を残す破片である。S K 96103から出土した。口縁部の屈曲はゆるやかで、端部に刻目を施す。体部外面および口縁部内面を粗いハケメで仕上げるが、体部外面上半には、直線文を意図したように、横方向のハケメを施す。

第3節 弥生時代後期終末～古墳時代前期

本時期の遺物は、調査区のほぼ全域から出土した。中でもF地区の流路跡(N R 96222・96224)からは多くの木製品とともに、多数の土器資料を得た。ある程度の混入はあるが、おおむねN R 96222・96224下層・96224上層の各土層中から出土した3群の土器資料は比較的まとまった量があり、当該期の資料を段階的に把握する上で有効な資料と考えている。南山城地域における弥生時代後期終末～古墳時代前期の土器様相を知る上で貴重な資料といえるだろう。また、C～Eの各地区では、この時期の竪穴式住居跡を総数30基以上検出しているが、うち約半数の住居跡からわずかずつではあるが土器資料が出土した。ここでは、まとまった量が出土した遺構のものを示している(図版第51～67:1～432)。以下、器種分類を行った上で各出土土器の概要を報告する。なお、木製品については一括して後述する。

1. 器種と器形(第5・6図)

出土土器には、壺・小型壺、小型丸底壺・甕・高杯・器台・小型器台・鉢(有孔鉢・台付鉢)がある。分類に際しては、前回の報告(注)(以下、『報告書I』と略記)の分類をもとに行った。このため、『報告書I』において付した名称を踏襲し、これ以外の新たなものに追加の名称を与えた。また、『報告書I』で名称を付したものの、今回の報告中に無い器種については欠番とした。

壺 『報告書I』では、A～Iの9種類に分類したが、今回はこのうちA・B・D・E・Gの5種類が認められ、さらに新たにI～Kの3種類を追加した。

A：二重口縁を有す広口壺。

B：口縁端部を上下もしくは上方に拡張する広口壺。

D：外反して立ち上がる口縁部を有す広口壺。口縁部が大きく外反するものや、外反が小さく、短頸壺(後述の壺I)と区別が難しいものがある。

E：上外方へ直線的に立ち上がる口縁部を有す直口壺。

G：口縁部が、一旦、「ハ」の字状に開いた後、屈曲して内傾気味に立ち上がるもの。

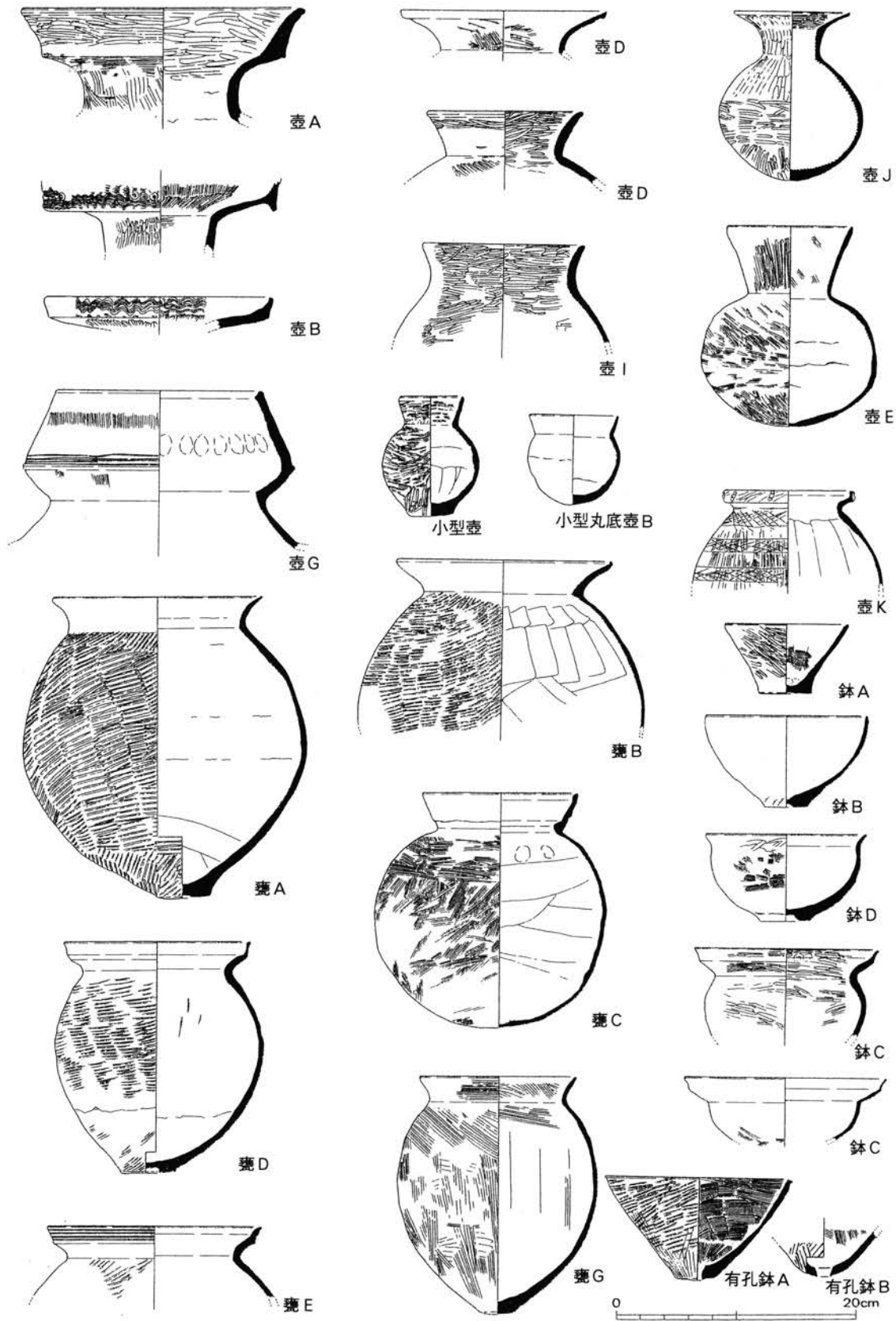
I：口縁部が短く広がる短頸壺。

J：直立する頸部から「ハ」の字状に広がる口縁部を有す広口壺。

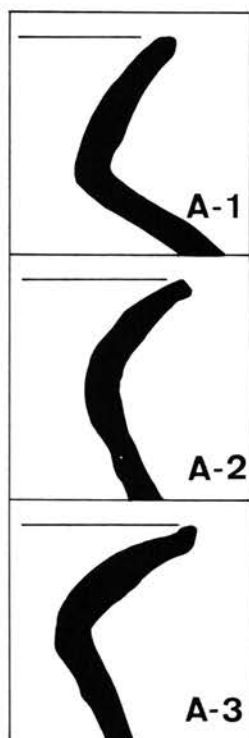
K：いわゆる受口状口縁を有すもの。

小型壺 通常の壺に比べ小型に作られたミニチュア的な壺を小型壺とした。口縁部は、直立気味に立ち上がるもの、複合口縁状となるものがある。

小型丸底壺 『報告書I』では、A～Cの3種に分類したが、今回は体部最大径が口径をうわ



第5图 弥生時代後期末~古墳時代前期出土土器分類图(1)



まわるもの(B)が1種類のみ認められた。

甕 『報告書Ⅰ』では、A～Gの7種類に分類したが、今回はこのうちA・B・D・E・Gの5種類が認められた。

A：弥生時代後期以来の甕で、平底、楕円形の体部、「く」の字状に短く外反する口縁部からなる。体部外面にタタキを施し、内面はナデないしはハケ目で仕上げるものが多いが、中にヘラケズリを施すものもある。口縁端部の形状から、口縁端部が丸くおわるもの(A-1)、端部を外側へつまみ出すもの(A-2)、端部をかるく上方へつまみあげるもの(A-3)の3者に細分される。

B：尖り気味の底部、外面に細かなタタキ、内面にヘラケズリを施した体部、短く外反して端部をつまみあげる口縁部からなる。いわゆる庄内式甕。

C：丸底で外面にハケメ、内面にヘラケズリを施した体部、短く外反して端部を内側へ折り返す口縁部からなる。いわゆる布留式甕。

第6図 甕A口縁分類図 D：受口状口縁を有すもの。

E：複合口縁を有すもの。ただし、口縁部の形態から、二段目の立ち上がりが短く丹波方面の影響をうけたもの、二段目の立ち上がりが大きく山陰方面の影響をうけたと思われるものなどが認められる。

G：「く」の字状に外反する口縁部を有すもので、体部外面をハケメないしナデ調整で仕上げるものを一括した。内面はハケメで仕上げるもの、ヘラケズリを施すものなどがある。

鉢 『報告書Ⅰ』では、A～Cの3種類に分類したが、今回はこれらにDを追加した。

A：平らな底部から上外方へ直線的に立ち上がる口縁部をもつもの。

B：平らな底部から上外方へ内湾気味に立ち上がる口縁部をもつもの。

C：扁球状の体部から外反する口縁部が複合口縁をなすもの。器壁を薄く仕上げるものを含む。

D：短く外反する口縁部を有すもの。

台付鉢 『報告書Ⅰ』と同じA～Cの3種類が認められた。

A：椀形の鉢部に高台様の小さな台を付すもの。

B：椀形の鉢部に「ハ」の字状に広がる脚台を付すもの。

C：甕状の鉢部に「ハ」の字状に広がる脚台を付すもの。

有孔鉢 『報告書Ⅰ』では、A～Cの3種類に分類したが、今回はこのうち、A・Bの2種類が認められた。

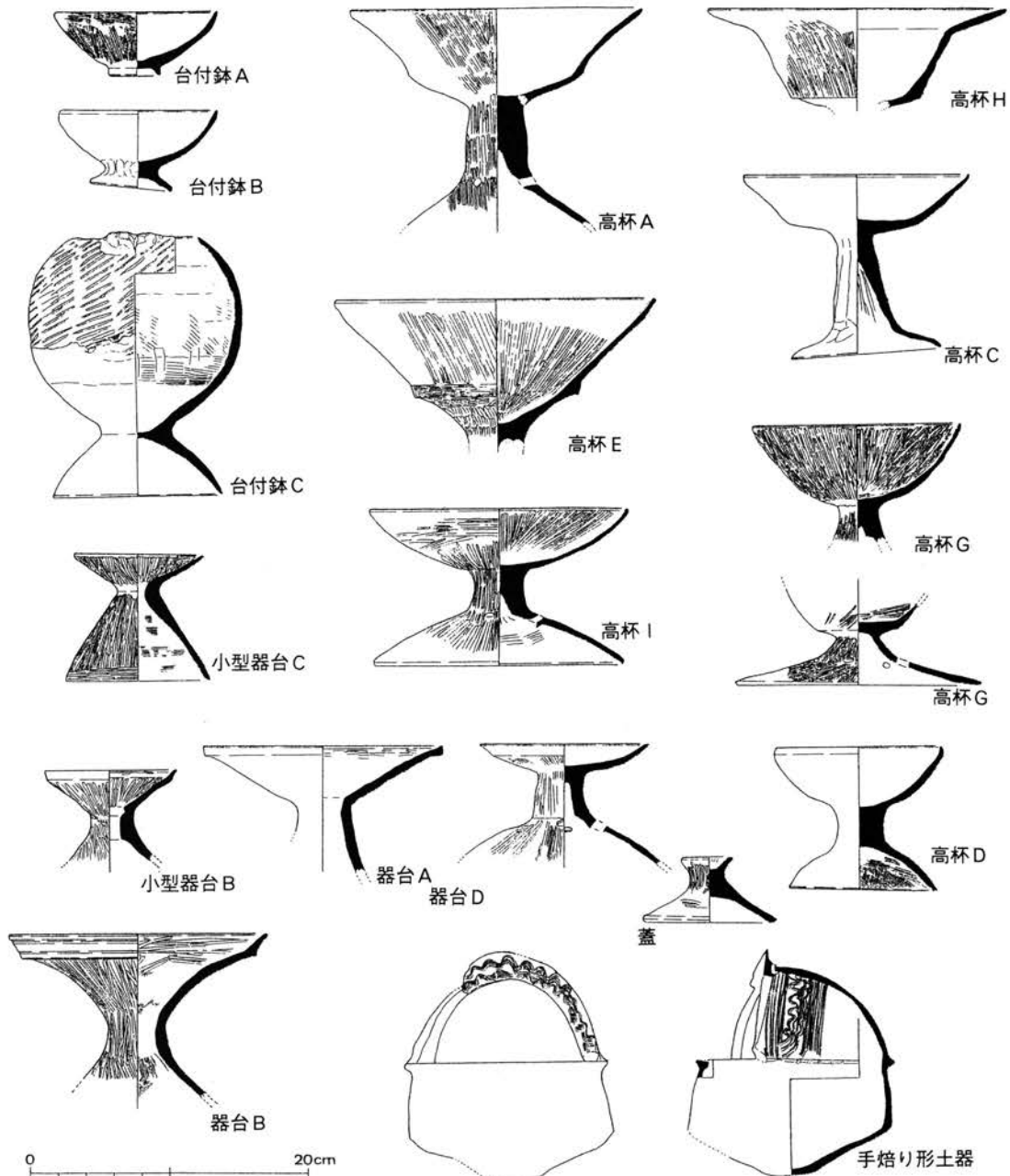
A：平底の鉢の底部に孔を穿つもの。

B：丸底の鉢の底部に孔を穿つもの。

高杯 『報告書Ⅰ』では、A～Gの7種類に分類したが、今回はこのうちA・C・D・E・Gの5種類が認められ、さらにこれにH・Iの2種類を追加した。

- A：杯部が、底部から明瞭な段をなして屈曲し、外反して立ち上がる口縁部をなすもの。
- C：底部から口縁部への境が明瞭な段をなさない杯部を有すもの。
- D：杯部が底部から口縁部へゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁端部付近が内傾するもの。
- E：杯部は底部と口縁部の境に明瞭な段をなし、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。
- G：小さな底部からわずかに屈曲して内湾気味の口縁部が立ち上がる杯部を有すもの。
- H：底部から明瞭な段をなして立ち上がる口縁部が、さらに屈曲して大きくひろがる杯部を有すもの。
- I：浅身の椀状の杯部を有すもの。

器台 『報告書I』では、A～Cの3種類に分類したが、今回はこのうちA・Bの2種類が認



第7図 弥生時代後期末～古墳時代前期出土土器分類図(2)

められ、さらにDを1種類追加した。

A：断面が「く」の字状をなし、「ハ」の字状に広がる脚部と直線的に広がる口縁部とからなるもの。

B：口縁部が、複合口縁状をなすもの。

D：皿状の受け部と下半部が大きく広がる脚台部からなるもの。

小型器台 『報告書I』では、A～Cの3種類に分類したが、今回はこのうちB・Cの2種類が認められた。

B：脚台部が中空で、口縁部が複合口縁をなすもの。

C：脚台部が中空で、器形全体の断面形が「く」の字状をなすもの。

2. 出土遺物

S H94008(図版第51：1～7) 壺B(1・2)、甕A(3・4)、高杯G(5)、小型器台B(6)のほか、高杯脚台部片(7)がある。壺B(1・2)はいずれも口縁端部の小片で、1は端部を上下に小さく拡張し内外面とも波状文を施す。2は、端部を上方にわずかに拡張するもので、外面に擬凹線を施す。甕A(3・4)は、ともに球形に近い体部を有し、口縁部の形態から3はA-3、4はA-1に細分される。高杯G(5)は杯部から脚台の一部を残すものである。

S H94007(図版第51：8・9・11～13) 甕A(8・9)・G(11)、小型壺(12)、器台D(13)がある。甕A(8・9)はともに口縁端部を丸くおさめるA-1。甕Gとした45は、体部外面をナデ、内面をヘラケズリで仕上げる。小型壺(15)は平底で、短く上方へ立ち上がる口縁部を有す。

S H95092(図版第51：10・14～22) 壺D(14)、甕A(21)・D(10)・E(15)・G(18)、高杯G(22)のほか、器台の破片(19)、蓋(20)、甕底部片(16・17)がある。甕A(21)は、口縁端部をわずかに外側へつまみ出すA-2。甕D(10)はほぼ完形に復原される資料で、体部外面はタタキの後にハケメ、内面はナデで仕上げる。甕Gとした18は、小型品で内外面ともナデで仕上げる。高杯G(22)は、杯部下半から脚台の一部を残す小片である。

S H96085(図版第52：23～30・33) 壺E(23)、甕A(26～28)、鉢B(29)、高杯D(30)、手焙り形土器(33)のほか、壺体部片(24・25)がある。壺E(23)は、やや内湾気味に立ち上がる口縁部の小片である。甕A(26～28)は、口縁端部の形態から26がA-1、27・28がA-3に細分される。27には体部外面に羽状タタキが認められる。高杯D(30)は、口縁端部付近が内傾する。手焙り形土器(67)は、体部中位に最大径を有し平底をなす鉢部と、「く」の字状に外反する鉢部の口縁端部から大きく立ち上がる覆部からなる。覆部には装飾は認められない。壺体部片のうち24は、口縁部を欠くが、筒状に立ち上がる頸部が遺存する。

S H96086(図版第52：31・32・34～37) 甕A(34・37)・B(36)、鉢B(31)・E(32)のほか、甕底部片(35)がある。甕A(34・37)では、34はA-2に、37はA-3に細分される。鉢E(32)は、扁平気味の体部から短く外反する口縁部を有す。

S H96083(図版第52：38～40) 甕A(39)、有孔鉢A(40)、台付鉢D(38)がある。甕A(39)の

口縁端部はA-2の形態をなす。台付鉢D(38)はわずかに外反する口縁部を有す。

S H96078(図版第52:41・42) 甕(41)・壺(42)の底部片がある。うち、甕底部片(41)は外面に羽状タタキを施す。

S X96079(図版第53・54:43~67・69・72~75) 壺B(46・50)・D(43)、小型壺(62)、甕A(44・45・48・51~56)・E(47・57・64・65)、鉢B(60)・C(61)・E(58・59)、高杯A(49・69)・I(22)のほか、甕の底部片(99・100)や高杯・台付鉢の脚台片(27~30)がある。壺Bのうち80は口縁端部外面に円形浮文を配す。壺D(77)は球形の体部から短く外反する口縁部を有すもので、口縁端部をわずかに摘み上げる。小型壺(62)は平底で、短く立ち上がる口縁部を有す。甕Aのうち、53・55は球形に近い体部を有す。口縁部の形態から、48・51・54がA-1、44がA-2、45・52・53・55・56がA-3に細分される。甕Eのうち、57は口縁部の屈曲が弱くなったもの、65は口縁部外面に擬凹線が認められるものである。鉢C(95)は大型品で、口縁の一部をつまみ出し片口状とする。高杯Aのうち24は小型品である。

S X96098(図版第54:68・70・71・76~79) 甕A(76・77)、台付鉢A(79)、高杯A(68)のほか、壺体部片(70)、甕底部片(71)、脚台片(79)がある。甕Aは76・77ともA-3に属す。

S H96076(図版第54:80~90) 壺E(80)、小型壺(81)、甕A(83~87)、鉢B(88)、台付鉢の脚台片(82)、甕底部片(89・90)がある。甕Aでは、83・84がA-3、85・86がA-1、87がA-2に細分される。

S H95087(図版第54:91・92) 小型器台C(91)、小型壺(92)がある。小型器台C(91)はやや器壁が厚く、口縁端部をわずかに摘み上げる。

S H95025(図版第54:93~98) 壺E(93)、甕A(94)・E(95)のほか、甕底部片(96・97)、高杯脚台片(19)がある。壺E(93)は口縁端部付近の小片であり鉢Aの可能性もある。甕A(94)はA-3に属す。

S H95090(図版第54:99・100) 壺I(99)、甕底部片(100)がある。壺I(99)は、口縁部付近を残す小片であるが、上外方へ短く立ち上がる口縁部を有す。

S H97301(図版第55:101~103・108・109) 甕B(101・102)・C(103)、高杯C(108・109)がある。甕Bのうち101は、ほぼ球形の体部をなす。甕C(103)は口縁部の立ち上がりが大きく、わずかに端部を折り返す。

S H96291(図版第55:104~107・110) 壺E(104)、甕B(105・106)・G(107)、高杯H(110)がある。

S H97300(図版第55:111・117) 甕C(111)のほか小型丸底壺の体部片(117)がある。甕Cの口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部の折り返しは大きい。

S H97302(図版第55:112) 甕C(112)がある。口縁端部付近の破片で、口縁端部の折り返しはやや大きい。

S H96263(図版第55:113・114・116・121) 甕C(113・114)、高杯C(121)のほかミニチュア椀(116)がある。甕C(113・114)の口縁端部の折り返しは大きい。

S H96269(図版第55:115) 鉢A(115)がある。口縁部付近の破片であるが、体部にタタキを施す。

S H96287(図版第55:118~120) 甕C(118)・E(119)、高杯C(120)がある。甕E(119)は、口縁端部が内面に肥厚する。

S H96291(図版第55:122~124) 壺E(122)、甕C(123・124)がある。

S X96223(図版第57・58:153~186) 本資料は、上述の旧流路(N R222上層)西側肩部で検出した土器溜りから出土した。ただ、明確な掘形を有していたわけではなく、周囲の流路内堆積層中に包含されていた資料との区別が困難なものもあった。このため、かなりの混入資料が含まれている可能性が高い。壺G(158)・I(153・154)・J(155)、小型壺(160・162)・小型丸底壺(161)、甕A(163~180)、鉢A(159)・台付鉢A(184)、高杯A(185)、手焙り形土器(186)のほか、壺(156・157・183)・甕(181・182)の体部から底部の破片がある。壺J(155)は小型品で球形の体部を有す。体部片(156)もやや扁球状となるが、ほぼ同様の形態をなしている。壺Iのうち、154の口縁部外面には、波状文風にヘラミガキが施される。壺体部(157)は、下膨れの体部をなし、徳利状の形態をなす。甕類では、甕Aのみが認められたが、平底をなすものと尖底気味のものが混在する。口縁部の形態では、A-1が9点(163・164・166・168・170・174・175・177・180)、A-2が4点(165・169・171・176)、A-3が4点(172・173・178・179)認められる。台付鉢A(184)は、やや扁平気味に「ハ」の字状に広がる小さな脚台を付す。高杯Aとした185は、小片のため壺Aの口縁端部片の可能性もある。手焙り形土器(186)は、中位よりやや下方に最大径をもつ体部と小さな平底気味の底部からなる鉢部、外方へ拡張され上方に面をなす口縁部からのびる覆部からなる。覆部の端部は上方へ大きく拡張され、これによって設けられた面には波状文を配す。また覆部外面には、端部寄りから直線文・波状文・直線文の順に加飾される。

S X96099(図版第58:187~194) 高杯C(187)、鉢A(191)のほか、壺・甕の底部片(192~194)や高杯や器台・台付鉢の脚台片(188~190)がある。高杯C(187)は、屈曲部がゆるやかな杯部と「ハ」の字状に短くひらく脚台部からなる。

N R96224下層(図版第59~61:195~275) 壺B(195)・D(196・197)・E(198・199)・I(200)・K(201)、甕A(202~227、229~236)・B(228)・C(237~245)・E(246・249~252)・G(253)、鉢A(257)・E(254~256)・C(247・248)・有孔鉢A(262~266)、台付鉢A(259~261)・D(258)、高杯A(267~270)・E(271)、器台B(272)のほか、脚台片(273~275)がある。壺B(195)は、口縁部外面に円形浮文を配す。壺Iは近江(湖東方面)からの搬入品である。壺Eのうち、198は小型品で、内外面ともヘラミガキによって仕上げる。壺K(201)も、内外面ともヘラミガキによって仕上げる。甕Aでは、体部の形状が分かるもののうち、球胴化が進行したものは比較的少ない(202・203・222・225の4点程度)。また、口縁端部の形態をみると、A-1は14点(203~214・216・230)、A-2は5点(217~220・229)、A-3は12点(215・221~228・231・235・236)ある。甕B(228)は河内方面からの搬入品と思われる。甕Eには、口縁端部付近が直立気味となるもの(249・250)、上外方へ立ち上がるもの(246・251・252)の二者がある。鉢Eとした254~

256では、254・255が偏球状の体部に短く外反する口縁部を有するもので、256は深身の体部から口縁部が比較的大きく外反する。鉢C(247・248)は、内外面ともヘラミガキで仕上げられる。有孔鉢A(262~266)では、体部外面をタタキで仕上げるもの(262・263・265)とハケメないしはナデで仕上げるもの(264・265)がある。台付鉢Dの258は、内傾しておわる口縁の一部をつまみ出し片口状としている。高杯Aでは、口縁部が強く外反し、端部付近が水平気味にのびるもの(269)や、口縁部が外反せず直線的にのびるもの(268)などがある。器台B(272)は、口縁部に二条の擬凹線文を認める。

N R96224上層(図版第62~63:276~326) 壺B(280)・D(276・278)・E(277)、小型壺(282)、甕A(283~296)・B(303)・D(298~302)・E(305~311)・G(287・293・297・304)、鉢B(317)・C(316)、有孔鉢A(318・320)・B(319・321)、台付鉢B(314)、高杯E(312)・G(313)、器台B(322)、小型器台B(323)のほか、台付鉢や高杯の脚台片(324~326)がある。壺B(280)は、口縁部外面に円形浮文を配する。壺D(276・278)は、いずれも口縁端部を上方へわずかに摘み上げる。小型壺(282)は、口縁部が上方へ直線的に立ち上がる。甕A(283~296)のうち、283・284・288がA-1、289・290~292がA-2、285・286・294~296がA-3に細分される。鉢C(316)は、器壁が薄く、いわゆる小型丸底鉢とされるものである。台付鉢B(14)は小型品である。小型器台B(323)は口縁部が水平近くにのびた後、端部を上方へ拡張し複合口縁状となる。

N R96222(図版第64~65:327~387) 壺A(327)・B(328・329)・D(330・331・333~336)・E(332)、小型壺(339・340)、小型丸底壺(337・338)、甕A(341~351・353~355・359・372・373)・B(352・361~364・369)・C(365~368・370・371・378~383)・D(357・358)・E(374~377)・G(356・360)、鉢A(387)、台付鉢A(386)、高杯C(385)・G(384)がある。壺A(327)は、口縁端部の屈曲部外面に円形浮文を配する。壺Bのうち328は口縁端部を上下に拡張するもので、拡張部外面に円形浮文および波状文を配す。また329は、口縁端部を上方へ拡張するもので、端部内外面ともに波状文を配する。壺Dでは、330・331・333はやや大型品、334~336は小型品で、うち、後者は壺D(広口壺)というより壺G(短頸壺)とすべきかもしれない。甕Aでは、口縁端部の形態をみると、A-1タイプのは5点(341~344・348)、A-2のものは3点(345~347)、A-3のものは7点(349~351・353~355・359)がある。また、体部内面をヘラケズリで仕上げるものが3点(351・354・355)認められる。うち、351は他の資料が右上がりのタタキが施されているのに対し、右下がりのタタキが施されている点で異なる(大和方面からの搬入品か)。甕Bでは、352・361・362が口縁端部のつまみあげが大きく、外面に凹面をなす。363・364は、体部外面をハケメで仕上げ、タタキをほぼ消している。369は、小型品であるが、体部最大径が肩部付近にあり、右下がりのタタキが認められる。他の甕Bの体部最大径が体部の中位へ下がっているのに対し、やや古様を示すものといえ、大和方面からの搬入品と思われる。甕Cでは、口縁端部内面の折り返しが小さく、上方もしくは上外方に面をなすもの(365~368・378・379)、折り返しがやや大きくなったもの(380~383)のほか、折り返しが非常に小さい小型品(371)などがある。また、370は甕Cとしているが、口縁端部を上方へ摘み上げ、外面に縦ハケメ、内面にヘラケズリの後、

一部にハケメを施す小型品で、その位置づけには多少戸惑いを感じる。甕Eは、いずれも丹波・丹後方面というより、山陰方面の影響を強く認めるものである。特に、376・377は搬入品と思われる。

N R 96222とN R 97537の合流点付近(図版第66・67:388~432) 上述の流路跡(N R 96222・96224)が東側の流路(N R 97536)と合流する合流点付近から出土したものである。本来は、層位を把握して上述のとおりN R 96222上層・同下層、N R 96224という順に取上げるべきであったが、これが十分にできていない資料である。ここでは合流点付近の様相を示すために主な資料を図示した。壺A(388)・I(389~391)・E(392)、甕A(393~404)・B(405~407)・C(408・409・414・416)・D(410・412)・E(411・413)、鉢C(418)、有孔鉢A(419)、台付鉢A(417)、高杯A(427・428)・C(429)のほか、甕体部片(415)、同底部片(422・423・425)、壺底部片(420・421・424・426)、高杯および器台の脚台片(430~432)がある。壺A(388)は、筒状に大きく立ち上がる頸部を有し、一旦水平気味に広がった後、上外方へ立ち上がる口縁部をなす。壺I(389~391)はいずれも口縁部付近の破片で、開き気味に短く立ち上がる口縁部をなす。壺E(392)はやや扁球状の体部から開き気味に口縁部が立ち上がる。甕Aでは、A-1タイプのものは5点(393~397)、A-2のものは1点(403)、A-3のものは6点(398~402・404)がある。甕Cでは、口縁端部内面の肥厚が小さなもの(408・409)と、大きく上方に面をなすもの(414・416)の二者がある。甕体部片(415)は、羽状タタキが施されているものである。鉢Cとした418は、口縁部中位の屈曲が弱い。有孔鉢A(419)は底部付近の破片である。台付鉢A(417)は、底部に高台状の小さな脚台を付す。高杯A(427・428)には、口縁部が大きく外反気味にのびるもの(427)、強く外反するもの(428)がある。

包含層出土資料(図版第56:125~152) ここでは、各調査区において遺構検出作業中に出土した遺物の中から主なものを図示した。なお、149のみは、掘立柱建物跡(S B 94022)の柱穴中から出土したものである。壺A(125・126)・D(132)・E(127~130)、小型丸底壺(133)、甕A(131・135~137)・B(139・143・144)・C(140)・E(141・142)、鉢C(145)、有孔鉢A(134)、台付鉢C(146・147)、高杯A(150)・I(151)・G(152)、器台A(148)、小型器台C(149)がある。壺A(125・126)のうち、125は外面に波状文・円形浮文・刺突文を、内面に波状文をそれぞれ配す。壺Eのうち、127・128はいずれも肩部に凸帯がめぐり、そこに刺突文を配す。また129・130は、口縁端部を折り返し内面を肥厚させる。壺Dとした132は、口縁端部付近をわずかに屈曲させ複合口縁状とする。小型丸底壺(133)はやや平底気味で、扁球状の体部から大きく口縁部が立ち上がる。甕A(131・135~137)では、135がA-1、131・136がA-2、137がA-3に細分される。甕E(141・142)では、141は口縁部上半が直立気味に立ち上がり、142は外反気味におわる。後者は北陸方面の影響を強く認める。鉢C(145)は扁球状の体部に受口状の口縁を有す。台付鉢C(146・147)は、同一個体の口縁部と体部で、受口状の口縁部を有す。高杯G(152)は、杯部下半から脚台部を残す破片である。器台A(148)は口縁部から脚台部上半を残すもので、口縁部は直線的に広がり、端部をわずかに上方へ摘み上げる。

第4節 古墳時代中期後半～後期初頭

古墳時代中期末～後期初頭とした時期の出土遺物は、そのほとんどが竪穴式住居跡から出土したものであった。その出土状況を仔細にみると、竪穴式住居跡の床面から出土したもの、埋土中から出土したものが、なかでも埋土中から出土したものには、住居跡がある程度埋没したことを示す堆積土層の上面付近からまとまった量の土器片が出土する場合が認められた。その状況は、住居を廃棄した時点でそこで使用していたものを一括投棄したか、もしくは住居の廃絶後に改めて土器の廃棄坑としてこれを使用したか、いずれかであったものと考えている。なお、住居群出土遺物の年代としては、おおむねTK47段階、すなわち5世紀末～6世紀初頭頃を中心とする時期を想定している。ただ、須恵器杯身の中に口径の大小が認められることは、これらが一定の時期幅を有していることを示している。すなわち、やや古く遡る可能性の高いもの、やや新し段階のものなどを含み、5世紀後半から6世紀前半頃まで集落が存続したものと考えている。

1. 器種と器形(第8・9図)

須恵器では杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・甕がある。

杯身 浅身の体部から大きく口縁部が立ち上がる。口縁端部には、内傾する面もしくは凹面を有するものが多いが、丸く終わるものも一部で認められる。

杯蓋 丸みのある天井部から比較的シャープにめぐる稜ないしは段を経て口縁部へ至るもので、口縁端部内面には凹面をなすものが多い。

有蓋高杯 1点が認められたにすぎない。杯部は、先の杯身とほぼ同一の形態をなし、脚部は逆「ハ」の字状に開いた後、端部が玉縁状となる。

無蓋高杯 杯蓋を逆転させて杯部とし、それに「ハ」の字状に開く脚部を付すという形態をなすものと、やや深身の杯部を有し、杯部外面に波状文を配すものの二者がある。前者は、口縁部の破片では杯蓋との区別が難しい。前者を高杯A、後者をBとした。

無頸壺 樽形甕の体部の片方を口縁としたような形状をなすものが1点認められた。

甕 口縁部の破片が多く、玉縁状となる口縁端部の直下に断面三角形の凸帯を一条付す。

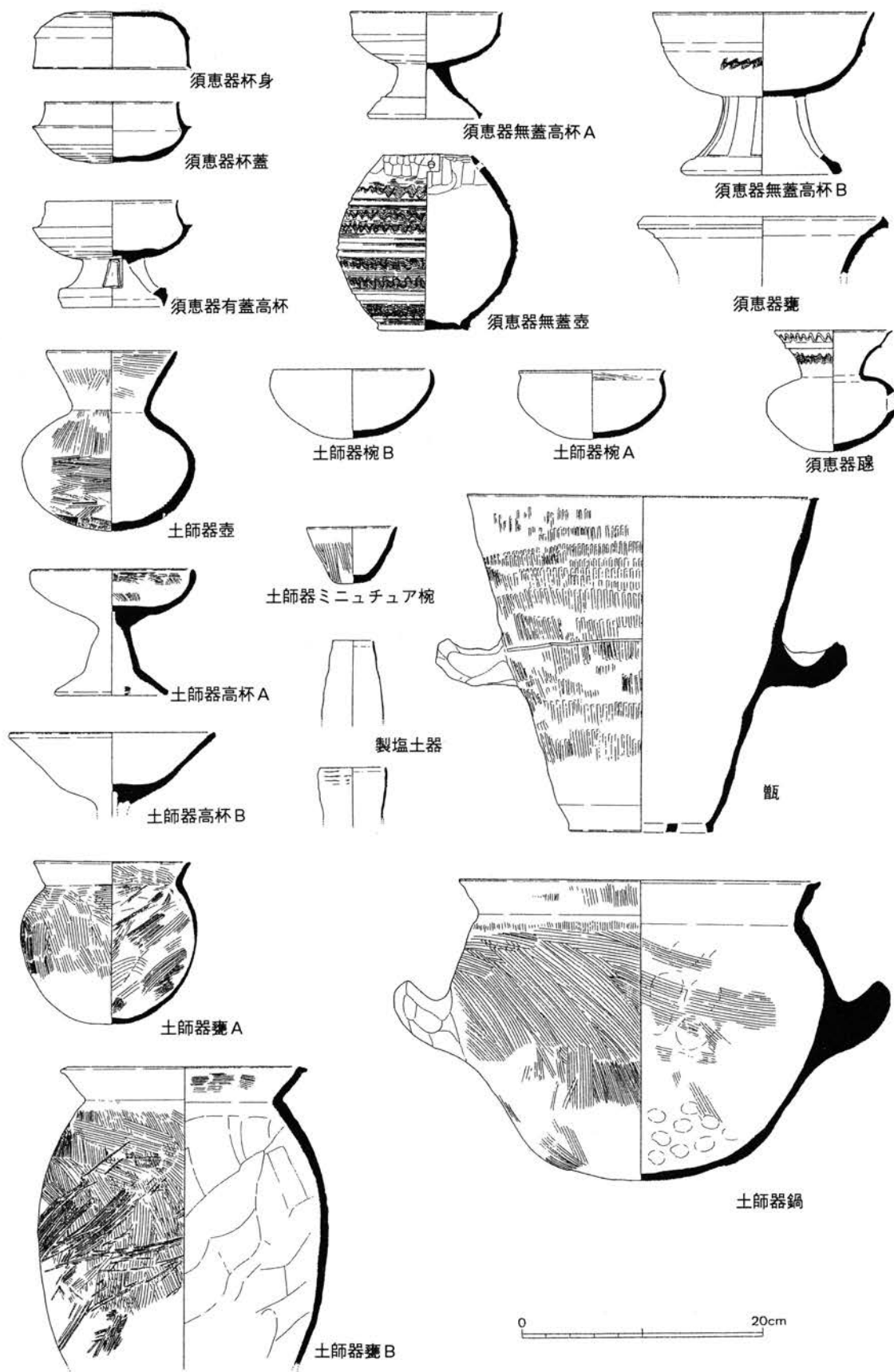
土師器では壺・椀A・椀B・高杯A・高杯B・甕A・甕B・鍋・甑・ミニチュア椀・製塩土器がある。

壺 偏球状の体部からやや開き気味に大きく立ち上がる口縁部をもつ直口壺である。

椀 口縁端部が、短く外反するタイプ(椀A)と直立気味ないしはやや内湾気味となるタイプ(椀B)の二者のほか、ミニチュアの椀がある。

高杯 口縁部が内湾気味となる浅身の椀タイプの杯部を有すもの(A)と、口縁部が直線的に開くタイプの杯部(B)を有すものの二者がある。また、いずれの形態にも、杯部底面の脚装着部に、竹管を差し込み、脚部成形の軸としたと考えられるものがいくつか認められた。

甕 大きく大小の二者があり、小型品を甕A、大型品を甕Bとした。小型品は鉢とすべきかもしれないが、ここでは甕として把握している。全体の形状としては、甕A(小型品)には、楕円形



第8図 古墳時代中期末～後期出土土器分類図

もしくは球形の体部を有すものも多く、甕B(大型品)には長楕円(やや長胴系)のものが多い。また、口縁部の形態については、第9図に示したA～Fの6タイプがある。

鍋 1点のみを確認した。偏球状の体部に短く外反する口縁部を有す。体部中位に角状の取っ手を一対付す。

甕 2点を確認した。1点は、ほぼ完形に復原されるもので、低部から体部、口縁部が直線的に開き気味に立ち上がるものである。体部外面には平行タタキが施され、土師器としては焼きが良く硬質である。角状の取っ手には切り込みがあり、いわゆる韓式系土器の特徴を備える。もう1点は直立気味に立ち上がる口縁部の破片である。

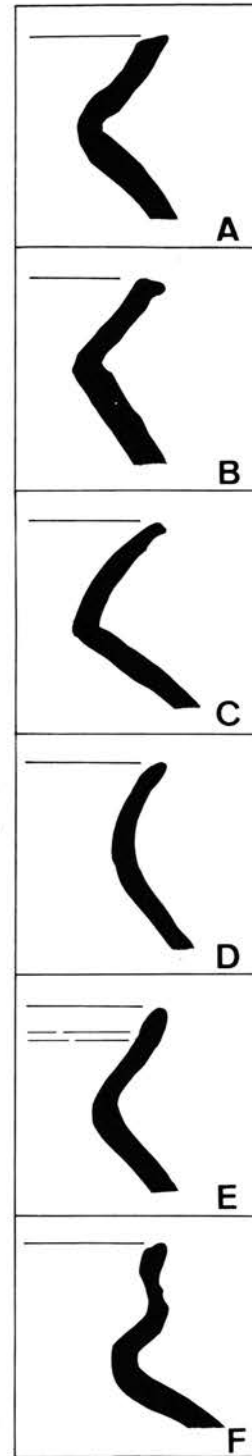
製塩土器 口径5cm前後で、深身の椀状の形態をなし、器壁は1mm前後と非常に薄い。内外面ともナデによって仕上げられるものが大半で、一部外面にタタキを認めるものもある。

2. 出土遺物(図版第68～74)

S H94006(図版第68:433～442) 須恵器無蓋高杯A(433)、土師器高杯A(434)、同脚部片(435・436)、土師器甕A(437～439)・B(440～442)がある。土師器甕Aは、437がCタイプ、438がEタイプ、439がAタイプの口縁部形態をなす。438は球形の体部をなし、439はやや下膨れの体部なす。甕Bでは440がAタイプ、441・442がBタイプの口縁部形態をなす。

S H94005(図版第68:443～453) 須恵器では杯身(444・445)・杯蓋(443)・無頸壺(446)、土師器では甕A(447～449)・B(450～452)のほか、製塩土器(453)がある。須恵器杯身は、いずれも口縁部の立ち上がりは高く、端部は内傾する面を有す。須恵器無頸壺(446)は、樽形甕の体部の一方を口縁部としたような特異な形態をなす。口縁部には径0.5cm程度の小孔を穿ち、内外面ともヘラ削りを施す。体部外面には二条の沈線と櫛描き波状文を三段にわたって施している。土師器甕Aとした447～449では、447・449が扁平気味の体部をなす。うち447は、竈の支脚として利用されていたもので、製作途中のもの可能性もある。また449は、平底と短く外反する口縁部からなり、一見、韓式系土器の平底の鉢に類似した形状をなす。447はDタイプ、448・449はBタイプの口縁部形態をなす。甕Bでは、450・451がAタイプ、452がCタイプの口縁部形態をなす。

S H94004(図版第69・70:454～478) 須恵器では杯身(456～458)・杯蓋(454・455)・無蓋高杯A(459)・甕(460)、土師器では壺(463)、高杯A(464)・B(465)、甕A(466～470)・B(471～478)、製塩土器(461・462)がある。甕(460)は口縁部の小片である。土師器高杯(464・465)はい



第9図 甕A・B口縁分類図

ずれも杯部の破片で、うち464の脚の取り付け部内面には、径0.5cm程度の竹串状の工具を差し込んだ痕跡が認められる。甕Aとした466～470は、楕円形の体部をなすもの(466・467)と、球形の体部をなすもの(468～470)がある。口縁部形態では、466・469がDタイプ、467・468がAタイプ、470がEタイプである。甕Bでは、471・473・477がAタイプ、472・474・475がBタイプ、476がDタイプ、478がFタイプの口縁形態をなす。

S H95052(図版第71：498～506) 須恵器杯身(498・499)・無蓋高杯A(500)、土師器甕A(501・502)、鍋(504)、甑(503・505)、製塩土器(506)がある。土師器甕A(501・502)は、501がCタイプ、502がAタイプの口縁形態をなす。504は鍋で、Aタイプの口縁形態をなす。甑(503・505)のうち、503は体部外面に平行タタキが施され、取っ手には切り込みが認められる。焼成も土師器としては非常に堅い。いわゆる韓式系土器とされるものの範ちゅうに入るものである。505は、直立気味に口縁部が立ち上がるもので、土師質の甑である。

S H95054(図版第71：507～518) 須恵器杯蓋(507・508)・有蓋高杯(510)・甕(511)、土師器高杯A(518)、土師器甕A(512・514・516・517)・B(513・515)、ミニチュア鉢(509)がある。須恵器甕(511)は口縁部の破片で、端部は上下に拡張され、端部直下にシャープな一条の凸帯がめぐる。土師器甕Aとした514・516・517では、514がEタイプ、516がBタイプ、512・517がDタイプの口縁形態をなす。また、甕Bでは513がBタイプ、515がEタイプの口縁形態をなす。

S H97283(図版第72：519～525) 須恵器杯身(519)、廳(520)、土師器碗A(522)・B(523)、甕A(524)・B(525)、ミニチュア碗(521)がある。土師器ミニチュア碗は碗Bを小型化した形状をなす。土師器甕A(524)は、球形の体部を有し、Dタイプの口縁形態をなす。甕B(525)は、Cタイプの口縁部形態をなし、体部は球形に近い。

S H97259(図版第72：526～530) 須恵器杯身(528)・杯蓋(526・527)、土師器高杯脚部片(530)、ミニチュア碗(529)がある。ミニチュア碗(529)は、口縁部が直線的に立ち上がる。

S H97264(図版第72：531～533) 須恵器杯身(531・532)・脚台部片(533)がある。脚台部片(533)は、底径12.4cmとやや大型で、長方形の透かしが3方向に穿たれる。器台の脚台の可能性が高い。

S H97282(図版第72：534～536) 須恵器無蓋高杯A(534)、土師器高杯B(535)、製塩土器(536)がある。須恵器高杯(534)は、同杯蓋との区別は難しいが、口縁部が直線的に立ち上がることから高杯と判断した。土師器高杯B(535)では、脚部接合部内面には、径0.5cm程度の竹管状工具を差し込んだ痕跡が認められた。

S H97298(図版第72：537～543) 須恵器杯身(538・539)・杯蓋(537)、土師器壺(540)・甕A(541・542)・B(543)がある。須恵器杯身のうち、539の口縁部立ち上がりはやや低い。土師器甕Aでは、541がBタイプ、542がDタイプの口縁形態をなし、甕Bの543はCタイプの口縁形態をなす。

S H97272(図版第72：544～547) 須恵器杯蓋(544)、土師器高杯B(546)、甕A(545)、異形土師器(547)がある。土師器高杯A(546)は口縁部を残す小片であるが、端部付近がわずかに外反し

水平気味にのびて終わる。土師器甕A(545)はEタイプの口縁形態をなす。異形土師器(547)は、内傾する端部(口縁もしくは底部)の外面に棒状の凸帯と縦位に、等間隔に貼り付けるものである。ここでは、底部片と判断し図示しているが、明確な根拠は無い。

S H97270(図版第72:548~551) 須恵器無蓋高杯B(548)、土師器高杯A(549)・B(551)・甕A(550)がある。須恵器無蓋高杯B(548)は、体部に2条の凸帯と櫛描き波状文を施す。土師器甕A(550)は、Aタイプの口縁形態をなす。

S H97286(図版第72:552) 土師器壺(552)がある。

S H95051(図版第73:553~565) 須恵器杯蓋(553・554)・高杯(555)、土師器壺(559)・椀A(557)・椀B(556)・高杯A(558)・甕A(560~563)・甕B(564・565)がある。土師器高杯A(558)は、口縁端部付近が直立気味となる。土師器甕A(560~563)では、562がAタイプ、560・563がBタイプ、561がEタイプの口縁形態をなす。また甕B(564・565)では、564がEタイプ、565がAタイプの口縁形態をなす。

S H95048(図版第73:566~570) 須恵器杯蓋(566)・甕(570)、土師器壺(567)・甕B(568・569)がある。須恵器杯蓋(566)は、丸みのある天井部から内湾気味に口縁部が下がる。甕B(568・569)では、568はBタイプ、569がEタイプの口縁形態をなす。

S D97305(図版第73:573・574) 573は須恵器無蓋高杯Bである。574は土師器甕BでAタイプの口縁形態をなす。

S D97305周辺(図版第73:571・572・575~579) E地区のS D97305の周辺精査時に出土した土器を一括した。須恵器杯身(571)・壺口縁部(572)・土師器甕A(575)・高杯脚台部片(576)・製塩土器(577~579)がある。575はCタイプの口縁形態をなす。製塩土器の577~579の体部外面には、タタキを認める。

S H97295(図版第74:580・581) 須恵器杯身(580)、土師器壺(581)がある。土師器壺(581)は、扁球状の体部と内湾気味に立ち上がる口縁部とからなる。

S H97280(図版第74:582~585) 須恵器杯蓋(582)・椀(583)、土師器甕A(584)・甕(585)がある。須恵器椀(583)は、底部付近の小片であるが、体部中位やや下方に2条の凹線を配すとともに、低部付近外面にヘラケズリを施す。土師器甕A(584)は口縁端部付近の小片で、Dタイプの口縁形態をなす。

S H97287(図版第74:586・587) 須恵器無蓋高杯A(586)、土師器甕A(587)がある。土師器甕A(587)はDタイプの口縁形態をなす。

S H95059(図版第74:588~592) 土師器高杯A(588)・甕A(591)・B(592)・製塩土器(589・590)がある。土師器高杯A(588)は、杯部と脚台部の接合部内面に竹櫛状の工具を差し込んだ痕跡を認める。甕A(591)はAタイプ、甕B(592)はBタイプの口縁形態をなす。

S H97260(図版第74:593・594) 須恵器杯蓋(593)、土師器高杯B(594)がある。

包含層資料(図版第70:479~497) 479~482は須恵器杯蓋、483~486は同杯身である。杯身のうち、483はやや口径が小さく、口縁端部は丸くおわる。また486も同様に口縁端部は丸くおわる。

487は土師器高杯B、488は土師器甕Aで、やや扁平な体部とDタイプの口縁からなる。489は土師器壺である。490・491は須恵器高杯B、492・493は須恵器甕である。494～497は土師器甕Bで、494・496はAタイプ、497はBタイプ、495はCタイプの口縁形態をなす。

第5節 飛鳥時代～平安時代

検出遺構としては、飛鳥時代・奈良～平安時代と区分したが、出土遺物においては、特に包含層を中心にこれらの時期のものが混在して出土している状況が認められたことから、ここでは飛鳥時代～平安時代中期までのもの(7世紀～10世紀)を一括して報告する。

飛鳥時代の遺物は、E地区の第4遺構面で検出した竪穴式住居跡群から出土した資料(立ち上がり有す須恵器杯身を主体とする土器群で、7世紀中葉を中心とする時期のもの)と、E・C地区の包含層(第3遺構面の精査時やこの遺構面で検出した遺構(土坑や溝など))から出土した資料(須恵器蓋の口縁端部内面にかえりを有するものから、これが無くなるものを含み7世紀後半～8世紀初頭を主体とするもの)の大きく二者に大別される。ここでは、この様相を明確に把握するために、前者の資料としてE地区第4遺構面の各竪穴式住居跡出土資料を、また後者の資料としてC・E各地区の第3遺構面で検出した土坑(S K 96027)・井戸(S E 96051)・溝(S D 97247)からの出土資料を示した。またこのほか、奈良～平安時代の溝などからもわずかながらこの時期の資料が出土している。

奈良～平安時代の遺物は、C～F地区の包含層(各調査区でのこの時期に相当する遺構面での精査時)および各調査区での検出遺構内(土坑や溝など)から出土した。時期的には、おおむね8世紀～9世紀前半のもの、9世紀後半～10世紀初頭のもの、10世紀後半のものに大別される。これは、遺構の項でも述べたように、道路状遺構1・2の側溝と想定している各溝内からの出土遺物やF地区第3遺構面で検出した掘立柱建物跡群に対応している。ここでは、8世紀～9世紀前半の資料として道路状遺構1の側溝と想定した南北溝(S D 97217・97219)およびこれとほぼ同時期と考えている土坑資料(S K 97203)などを、9世紀後半～10世紀初頭の資料として道路状遺構2の東側溝と想定している南北溝(S D 97218)および道路状遺構1の東側溝と判断しているS D 97217と切り合い関係を有す土器溜まり(S X 95106)・井戸(S E 97223)から出土した資料をそれぞれ示した。続くF地区第3遺構面の様相(10世紀後半)を示す良好な遺構出土資料は無いが、これについては包含層資料として遺構面精査時の資料を示している。

1. 器種と器形(第10～13図)

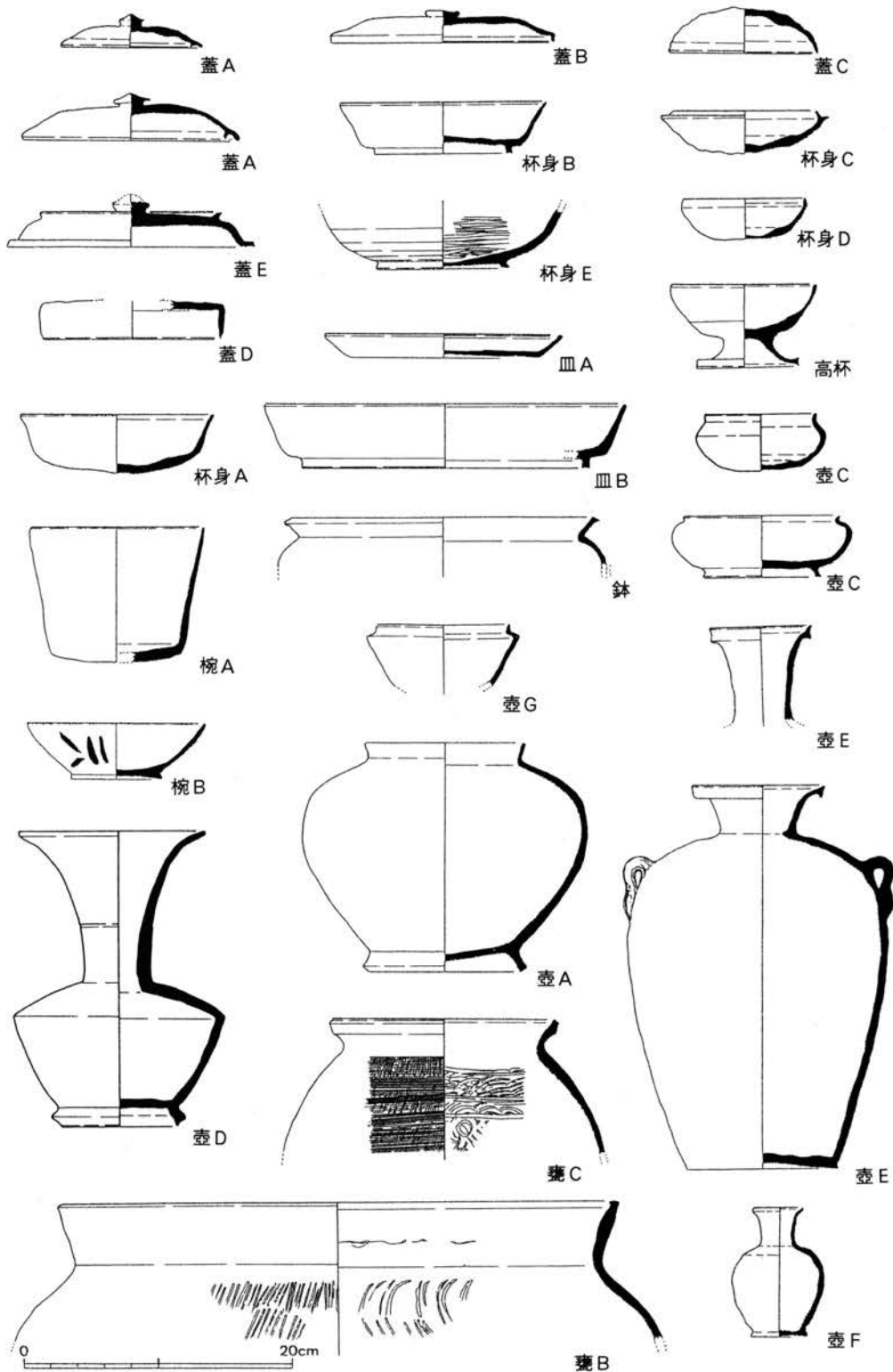
出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。以下、各出土遺物の記述は器種分類に基づいて進める。

①須恵器

蓋 須恵器蓋は、『報告書I』の分類と同じ杯・皿類の蓋と壺の蓋がある。うち、杯・皿類の蓋には、口縁端部内面にかえりを付すものと付さないもの、古墳時代以来の立ち上がりのある杯

身(後述の杯C)の蓋がある。この他、『報告書I』には確認できなかったが、口縁端部内面にかえりを付さないものには、天井部に環状凸帯を付すものがありこれを蓋Eとした。

蓋A：口縁端部内面にかえりを付す杯・皿類の蓋。口径が11cm前後を測るもの、15~16cmのもの二者がある。



第10図 飛鳥時代～平安時代出土土器分類図(須恵器)

蓋B：口縁端部内面にかえりを付さない杯・皿類の蓋。口径16～17cmのものが主体を占める。なかに口径18cm前後のものがあり、これは皿類の蓋と考えられる。

蓋C：古墳時代以来の立ち上がりのある杯身(後述の杯身C)の蓋。

蓋D：平らな天井部から垂下する口縁部を有す短頸壺(壺A)の蓋。

蓋E：天井部に環状凸帯を付すもの。

杯身 須恵器杯身は、基本的に『報告書I』の分類と同じく高台を付すもの、付さないもの、さらに古墳時代以来の立ち上がりのある杯身、そしてこの杯身の蓋の形態を踏襲する椀形の杯身・いわゆる稜椀の5者がある。

杯身A：平らな底部から上外方へ口縁部が立ち上がり高台を付さないものを。

杯身B：高台を付すもの。

杯身C：古墳時代後期以来の立ち上がりのある口縁部を有す杯身。

杯身D：杯Cの杯蓋の形態を踏襲するもの。

杯身E：いわゆる稜椀。

皿 須恵器皿に関しても、『報告書I』と同じ、高台を付すもの、付さないものの二者がある。

皿A：平らな底部から屈曲して口縁部が立ち上がるもの。

皿B：高台を付すもの。

椀 椀と認識したものには、平らな底部から直線的に大きく口縁部が立ちあがる杯Aの深身のものと、平高台から内湾気味に口縁部が立ち上がるものの二者がある。

椀A：平らな底部から直線的に大きく口縁部が立ちあがるもの。

椀B：平高台から内湾気味に口縁部が立ち上がるもの。

鉢 須恵器鉢は、『報告書I』では1種類のみを確認していたが、今回はこれと形態の異なる鉢1種が認められた。ここでは鉢として記述する。

高杯 須恵器高杯には、低脚の高杯を1点確認している。

壺 須恵器壺には、短頸壺・長頸壺などがある。『報告書I』ではA～Dの4者を認めたが、ここではこのうちA・C・Dの3者に加え、E・Fの2者を加えた。

壺A：球形の体部に短く直立する口頸部を有す短頸壺(いわゆる薬壺)。

壺C：小型品で扁球状の体部に短く直立もしくは外反する口頸部を有すもの(高台を付す)。

壺D：肩のはった体部からラッパ状に大きく立ち上がる口頸部を有す長頸壺。

壺E：「ハ」の字状に開く口頸部を有するもので、口縁端部をわずかに上下に拡張する。

壺F：器高12cm前後の小型品で、卵形の体部と直立気味に立ち上がる口頸部からなる。

また、この他にも破片のため、明確に分類できない壺の体・底部片が多数認められた。

甕 須恵器甕は、『報告書I』では、口縁部の形態からA～Cの3者に分類したが、ここではB・Cの2者が認められた。

甕A：短く外反する口縁部をもつもの。

甕B：直立気味に口縁部が立ち上がるもの。

甕C：短く外反し端部が玉縁状をなすもの。

②土師器

蓋 土師器蓋は、杯蓋が1点認められたにすぎない。

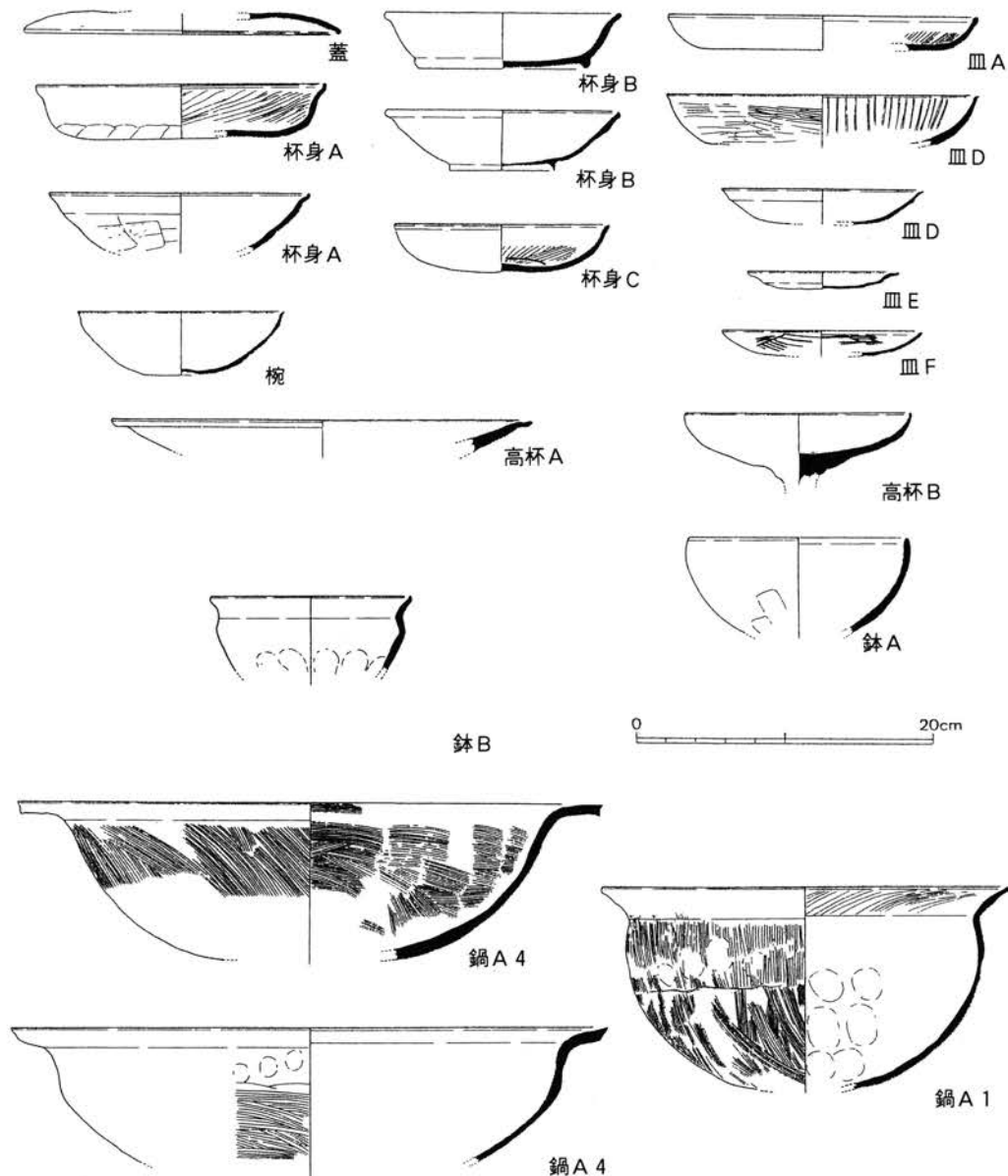
杯身 土師器杯身は、『報告書I』ではA～Cの3者に分類したが、ここにも同じタイプのものが認められた。

杯身A：平らな底部から上外形へ口縁部が立ち上がり、口縁端部を内側に折り返すもの

杯身B：高台を有すもの。

杯身C：丸みのある浅身の椀形の体部を有すもの。

皿 皿は、『報告書I』では、A～Cの3者に分類したが、ここではAのみが認められたほか、新たにD～Fの3者を追加した。



第11図 飛鳥時代～平安時代出土土器分類図(土師器)

皿A：杯身Aの浅身のもの

皿D：杯身Cの浅身のもの

皿E：口縁部付近が、水平近くまで外反した後端部を上方へつまみ上げるもの。

皿F：口縁端部が丸くおわるもの。

高杯 土師器高杯は、『報告書I』では、大型品を1点のみ確認したが、ここでは、浅身の杯部を有する大型品と椀状の杯部を有するものの2者を認めた。前者を高杯A、後者を同Bとした。

鉢 土師器鉢は、椀状で口縁部が内傾するものと、口縁部が外反するものの2者を認めた。

鉢A：口縁部が内傾するもの。

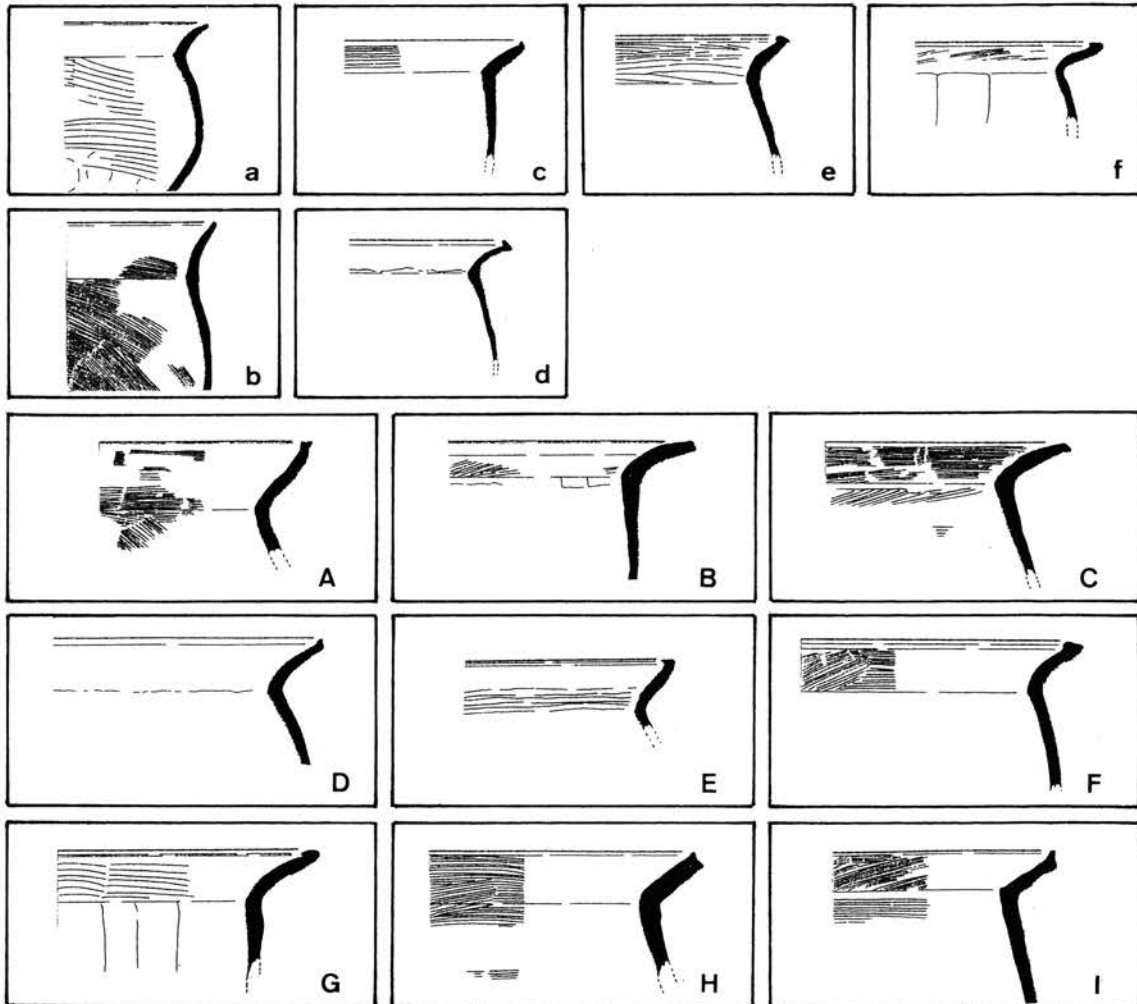
鉢B：口縁部が短く外反するもの。

甕 土師器甕には、小型甕・大型甕の二者がある。前者を甕A、後者を甕Bとした。いずれも口縁部の形態からさらに細分(第12図)している。

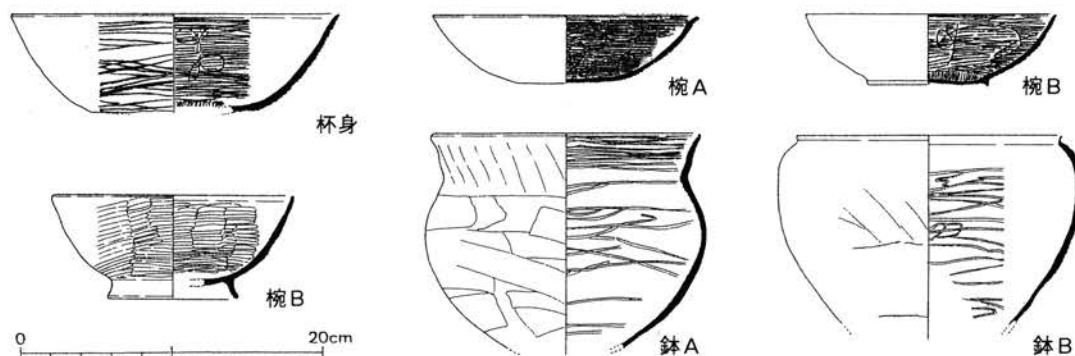
甕A：小型甕で、口縁部の形態からa～fの6タイプに細分している。

甕B：大型甕で、口縁部の形態からA～Iの9タイプに細分している。

鍋 甕のなかで扁球状の体部を有すものを鍋とした。『報告書I』では、口縁部の形態等から



第12図 甕A・B口縁分類図



第13図 飛鳥時代～平安時代出土土器分類図(黒色土器)

A～Cの3者に分類しているが、ここではこのうちAタイプに属するものを認めた。うち、口縁端部の形状から、前回のA1と、新たなタイプとしてのA4の2者に分類している。

製塩土器(焼塩壺) 製塩土器は、細片となって出土するケースが多く、全体の形状が判明するものは皆無に等しい。そのなかで、図上復原によると、口径20cm前後のもの、12～15cmのもの、8～10cmのもの三者に分かれるようである。また口縁部の形状では、内傾するもの、内湾するもの、直線的に開くものがある。ここでは、口径20cm前後のものをA、12～15cmのものをB、8～10cmのものをCと表記し、さらに口縁部が内傾するものをa、内湾するものをb、直線的に開くものをcとする。

黒色土器 黒色土器は全て内面を黒色とするものである。器種としては、杯身・椀・鉢がある。うち、椀には、高台を付すもの(B)と付さないもの(A)の2者が、鉢には、口縁部が大きく立ち上がるもの(A)と短く立ち上がるもの(B)の2者がある。

施釉陶器 施釉陶器には緑釉陶器と灰釉陶器があり、それぞれに椀・皿が認められた。また、このほか成形調整等は、施釉陶器と同一であるが、釉薬をかけていないものを無釉陶器とした。

2. 出土遺物(図版第74～88)

E地区竪穴式住居跡資料(図版第75:595～621) E地区の第3遺構面で検出した竪穴式住居跡群から出土した土器資料は、ほぼすべて同一時期のものと把握される。また、個々の竪穴式住居跡出土資料となると点数は多くなく、記述も煩雑となるため、ここでは一括して記述する。須恵器では、杯身C(597・598・604・605・608・609・611・617)、杯蓋C(595・596・603・607・619)、高杯(620)、甕C(599)がある。土師器では、杯A(616)・C(612・614)、皿(621)、高杯A(613)、鉢(615)、甕A(601・618)、甕B(602・606・610)、鍋A4(600)がある。須恵器杯身や杯蓋では、古墳時代以来の立ち上がりのある杯身(杯C)とこれとセット関係をなす杯蓋(蓋C)のみの資料と判断した。これは杯蓋として理解すべき、いわゆる宝珠状のつまみ片がまったく認められなかったことによる。ただし、杯蓋Cとしたものの中には、口縁端部付近がやや内傾気味となる603など、杯身Dの可能性のあるものも含んでいる。須恵器では、このほか高杯(620)・甕C(599)なども認められた。うち高杯は、低脚の無蓋高杯で、SH97280の竈の支脚として使用され

ていた。土師器甕A(601・618)はaタイプの口縁形態をなす。甕Bは、体部を残すものはないが、口縁部の形態は、Aタイプのもの(610)、Dタイプのもの(602・606)が認められた。

S X 96027資料(図版第75:622~624) 口径11cmの須恵器杯身C(624)とこれとセットをなす杯蓋C(622・623)が出土している。

S K 96028(図版第75:625~633) 須恵器杯身D(626・627・629)・同蓋A(625・628)、土師器杯身A(632)・C(630)・D(631)、土師器甕B(633)がある。須恵器蓋A(625・628)は、口径10cm前後の小型品で、杯身Dでは626・629がこれとセット関係をなすものと思われる。土師器甕B(633)は、Aタイプの口縁形態をなす。

S D 97247(図版第76:634・635) 須恵器杯身A(635)、蓋A(634)がある。

S D 97246(図版第76:636~640) 須恵器杯身B(637)、蓋A(636)、土師器杯身(638)、甕A(639)、鍋A 4(640)がある。土師器甕A(639)はaタイプの口縁形態をなす。

S E 96051(図版第76:641~643) 須恵器杯身A(641)・脚台片(642)、土師器甕A(643)がある。土師器甕Aはbタイプの口縁形態をなす。

S D 97236(図版第76:644~649) 須恵器杯A(646)・蓋B(644・645)、土師器杯B(648)・C(647)、甕A(649)がある。須恵器蓋B(644・645)は、平らな天井部からゆるやかに下がり口縁部へいたるもので、端部はシャープに短く垂下する。土師器杯B(648)・C(647)とも内面の暗文は摩滅のため観察できない。土師器甕A(649)はaタイプの口縁形態をなす。

S X 97203(図版第77・78:650~723) 須恵器では、蓋B(650・651)・E(652)、杯身A(653~664)・B(665~669)・椀A(671・672)、皿A(670)、甕B(706・707)、壺C(673・674)が、土師器では、杯身A(678~686・690~694)・C(675~677・696)、皿A(687~689)、高杯A(695)、甕A(697~700)・B(701~704)、製塩土器(708~723)、黒色土器鉢B(705)がある。須恵器蓋E(652)は、口縁端部付近が屈曲して水平気味にのびるものである。須恵器壺Cのうち、673は底部に高台を付すもので、674は口縁部付近の破片である。土師器杯身Aには、暗文を認めるもの、認められないものが混在するとともに、口縁部外面をナデで仕上げるものがほとんどを占めるなかにヘラケズリで仕上げるもの(694)なども認められる。土師器杯Cには、小型品(675・676)と大型品(677・696)が認められる。なお、これらは下層遺構からの混入品の可能性が高い。土師器甕Aは、697・698がcタイプ、699がdタイプ、700がeタイプの口縁形態をなす。土師器甕B(701~704)では、702~704がDタイプ、701がEタイプの口縁形態をなす。製塩土器(708~723)では、708・709がC b、710~713・716・717がB b、714がB c、715がB a、718がA c、719がA bとなる。また720~723は口径を復原できない細片であるが、720・722がbの内湾するタイプ、721・723がaの内傾するタイプである。大半のものが器壁をナデによって仕上げるが、712・720には内面にハケメが認められる。

S D 97219(図版第79:724~751) 須恵器では、蓋B(724・725)、杯身A(726~732)・B(733~740)、甕B(751)、壺B(747)、壺底部(748)が、土師器では、蓋(741)、杯身A(742~744)・C(745・746)、甕B(749・750)、製塩土器(752)がある。須恵器蓋B(724・725)には、平らな天井

部から口縁部へ至るもの(724)と丸みのある天井部から口縁部へいたるもの(725)がある。須恵器蓋D(724)は、口縁部が開き気味に下がる。須恵器壺低部(748)は、壺D(長頸壺)の底部片と考えられる。土師器甕B(749・750)は、長胴気味の体部から強く外反する口縁部を有すと思われ、口縁部はBタイプをなす。製塩土器(752)はC bタイプのものである。

S D97217(図版第80・81) 遺構の項でもふれたようにS D97217は、C～E地区にわたって検出した。出土遺物は、調査年次毎に整理しており、ここではその調査区毎に出土資料を提示した。S D97222-1はD地区南半部(D 1地区)、S D97222-2はD地区北半部(D 2地区)から出土したものである。

S D97222-1(753～785) 須恵器では、蓋B(753～757)、杯身A(760～767・781・782・784・785)・B(769～774・775)・D(758・759)、皿B(775)が、土師器では、杯身A(776・777)、椀(778・783)、皿A(780)・C(779)がある。またこのほか、緑釉陶器(768)や器形は判然としない墨書土器片3点を図示した。須恵器蓋Bでは、平らな天井部から口縁部へ至るもの(753)と丸みのある天井部から口縁部へいたるもの(754)のほか、扁平なもの(755～757)がある。うち、755の内面には墨痕が認められ、転用硯と考えられる。須恵器杯身Aのうち781・782・784・785には墨書が認められる。ただ、785(底部外面)のみ「上上」と判読されるが、781(底部外面)・782(底部外面)・784(口縁部下半の外面)は判読できない。須恵器杯身Bには、深身のもの(769・772・773)や口縁部が内湾して立ち上がり端部付近が外反するもの(771)などがある。土師器杯身A(776・777)は、口縁端部付近がわずかに外反し端部を内側へ折り返すものである。椀(778・783)は、口縁端部付近をわずかに外反させるもので、783は内面をハケメで仕上げ、底部外面に「口女」の墨書がある。786～788はいずれも器形は判然としない土師器片であるが、底部外面と考えられる部位に墨書がそれぞれ認められる。ただし、文字が判読できるのは、788のみである(「井」カ)。

S D97222-2(789～818) 須恵器では、蓋B(789)、杯身A(790～794・808)・B(795～797・809)、椀A(799)、皿A(798)、壺A(800)・F(811)が、土師器では、杯身A(801・812・813)、皿A(817)、甕A(802・815)・B(803～806・818)、鍋A 4(807)、黒色土器椀A(814)、灰釉陶器椀(810)、製塩土器(816)がある。須恵器杯身B(809)の底部外面には「矢」の墨書がある。土師器杯身Aは、いずれも上外方へ口縁部がのび端部を上方へわずかに摘み上げるもので、801の内面にはハケメが観察される。土師器皿A(817)は、口縁端部を比較的大きく内面へ折り返す。土師器甕A(802・815)のうち、802はcタイプ、815はdタイプの口縁形態をなす。土師器甕Bでは、803がEタイプ、804・818がFタイプ、805はIタイプ、806はHタイプの口縁形態をなす。灰釉陶器椀(810)は、底部に断面方形の小さな高台をケズリ出すものである。製塩土器(816)はA bタイプのものである。なおこのうち、須恵器杯身A(808)・B(809)、壺F(811)、土師器杯身A(812・813)、皿A(817)、甕A(815)・B(818)、黒色土器杯(814)、灰釉陶器椀(810)は溝の肩部に重複していた土器溜まり(S X95106)から出土したものである。

S E 95042(図版第82: 819～823) 須恵器では、杯身A(820)・B(819)、椀A(821)、土師器で

は、甕B(822)、製塩土器(823)がある。土師器甕B(822)は、口縁端部を上方へ摘み上げる。

S E 95072(図版第82:824~827) 土師器皿A(824・825)、甕A(826)、製塩土器(827)がある。甕A(826)はcタイプの口縁形態をなす。製塩土器(827)はB bタイプのものである。

S H 95049(図版第82:828~837) 須恵器では、杯身A(828~830)・椀A(831)が、土師器では、杯身C(833~835)、甕A(836)・B(837)、鍋A 1(832)がある。土師器甕A(836)はcタイプの口縁形態をなす。土師器甕B(837)はDタイプの口縁形態をなす。

S E 97223(図版第82:838~845) 須恵器では、杯身A(838)・B(839)が、土師器では、杯身A(843)、皿A(841)・D(844)、甕B(845)、黒色土器杯身(842)、緑釉陶器杯(840)がある。須恵器杯身A(838)は、口縁部外面に「大」の墨書が認められる。土師器甕B(845)は、Fタイプの口縁形態をなす。黒色土器杯身(842)の底部外面には意味不明の墨書が認められる。緑釉陶器杯(840)は、外反する口縁端部付近の小片である。

S D 97218(図版第83~86) S D 97218についても、先のS D 97222と同様にE地区からD地区南半部にわたって検出した。このため、ここでは調査区毎の様相を示している。S D 97218-1はD地区南半部(D 1地区)から、S D 97218-2はE地区から出土したものである。

S D 97218-1(846~911) 須恵器では、蓋A(846)・B(847・848)・E(849)、杯身A(850~862)・B(864~870・909)、椀A(863)、椀B(908)、壺A(895~897)・G(898)、壺E(四耳壺:903)のほか、壺体部・底部片(899~902・904)が、土師器では、杯身B(892・893)・C(886・887)、皿A(888~890)・E(885)、甕B(907)、鉢B(906)があるほか、黒色土器では、杯身(891・894)、椀B(880・910)、鉢B(905)がある。また、このほか無釉陶器皿(871)、緑釉陶器椀(872~874)、同皿(878・879)、灰釉陶器椀(873・875~877・881~884)がある。また、器形は不明だが、墨書を認める須恵器・土師器片が4点(911~914)ある。須恵器蓋Bのうち、848は扁平な器形をなす。杯身Bのうち、909は底部外面に「□女」の墨書が認められる。須恵器椀A(863)は、口径19cm・器高7.1cmで大型の杯身Aの形状をなす。須恵器椀B(908)は、平高台の底部から口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、口縁部外面に意味不明の墨書が2か所認められる。壺G(898)は、口縁部から体部上半の破片で、肩の張る体部を有す。壺F(903)は、平らな底部から筒状の体部が立ち上がり、丸みのある肩部から短く外反する口縁部へといたる。肩部に4か所の環状の取手を付す。壺底部~体部片(899~902・904)のうち、899~901は平底から体部が立ち上がるもの、902は高台を付すものである。また、904は高台を付す底部から立ち上がった体部の肩がはり、内傾して口縁部へといたるものである。土師器甕B(907)はFタイプの口縁形態をなす。黒色土器椀B(910)は底部外面に「寺」の墨書が認められる。器形不明の墨書土器(911~914)は、いずれも須恵器・土師器の杯類底部片と考えられる。913が「大」と判読できるほかは、文字であるのか記号であるのか不明なものが多い。

S D 97218-2(915~964) 須恵器では、蓋B(915・916)、杯身A(917~919・963・964)・B(921・922)、椀B(920)が、土師器では、杯身A(923・924・934~938)、皿A(926~928・930・931)・D(929)・F(925・932・933)、甕A(954・957)・B(955・956・958~962)がある。またこ

の他、黒色土器に、杯(939)、椀(940・941・943～945)、皿(942)、鉢A(952・953)が、施釉陶器に、緑釉陶器椀(948・949)、同皿(951)、灰釉陶器椀(946・947)、同皿(950)がある。須恵器杯身Aのうち、963・964には墨書が認められる。963は底部外面に「稻」、964は体部外面に意味不明の2文字が確認される。須恵器椀B(920)は、平高台から内湾気味に口縁部が立ち上がる。土師器杯身Aでは、923を除く他のものは上外方へ大きく開く口縁部を有するものである。土師器甕A(954・957)は、fタイプの口縁形態をなす。甕B(955～962)では、958がDタイプ、955がEタイプ、956・959がFタイプ、960～962がGタイプの口縁形態をなす。またこの他、黒色土器鉢Aでは、953の口縁部の外反は少ない。

S D97307(図版第86:965～990) 須恵器では、壺C(978・979)・壺体部(977)が、土師器では、杯A(965・966)、杯C(967)、椀(968・969)、皿A(972)・D(970・971)、甕B(980～984)が、黒色土器では、椀A(986・987)、鉢A(990)が、施釉陶器では、緑釉陶器皿(973～975)、灰釉陶器椀(976)がある。須恵器壺体部(977)は、体部下半に×状のヘラ記号が描かれる。土師器甕B(980～984)では、980・981がGタイプ、982・983がIタイプ、984がHタイプの口縁形態をなす。

包含層出土資料(図版第87～89:991～1098)

ここには、調査区の全域から出土した飛鳥時代～平安時代の遺物を図示した。

須恵器 991～1004は蓋である。991は蓋Cで、口径12.3cmを測り、天井部外面はヘラ切り未調整である。992～994は蓋Aである。995～999・1002～1004は蓋B。995～999は平らな天井部から口縁部が傘形にさがるもの、1002～1004は口縁部が屈曲するものである。また、1000・1001はいわゆる環状突帯を有す蓋Eである。1005～1028は杯身。1005は、先の991とセットをなす杯身C、1007～1018は杯身A、1006は杯身Dである。1019・1021～1028は杯身Bである。1022は口径8.6cmの小型品、1019・1023～1025・1027の高台は底部と口縁との境よりやや内側に付される。1021・1026・1028は高台が底部と口縁との境に付される。1020はいわゆる稜椀の形態をなす杯身Eであるが、体部下半の屈曲はややゆるやかとなる。1029は椀Bで、口縁端部を欠くが、体部に粘土ひも積み上げ痕の凹凸を明瞭に残し、底部を糸切りする。1030～1034は皿A。1030～1032は平らな底部から上外方へ短く口縁部が立ち上がるもので、口縁端部を内側へ折り返す。1033は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、端部は内傾する面をなす。1034は口縁端部をわずかに外反させるものである。1035～1039は壺。1035～1037は壺C。1038は壺Eの口縁部、1039は壺Eの体部片である。1040は鉢で、短く外反する口縁部を有し、端部を上下にわずかに拡張する。

土師器 1041～1050・1056～1057は土師器杯身である。1041～1046・1048・1049・1056・1057は杯身A、1047・1050～1052は杯C。杯身Aのうち、1049は内面に二段の暗文を施す。1053～1055は皿である。1053・1054は皿A、1055は皿Fである。1058～1060・1096は椀である。うち、1096の底部外面には記号状の墨書が認められる。1080～1083は甕A、1084～1090は甕B、1091・1092は鍋A4である。甕Aのうち1080・1082はcタイプ、1081・1083はeタイプの口縁形態をなす。甕Bでは、1084～1086がGタイプ、1087はAタイプ、1088はIタイプの口縁形態をなす。1089はCタイプ、1090はIタイプの口縁形態をなす。1093は製塩土器でBbタイプのものである。

黒色土器 1061・1062は杯、1063～1068は椀Bである。うち、1063は高い高台を付すもので、他の椀と明らかに趣が異なる。1069～1071は鉢Aである。

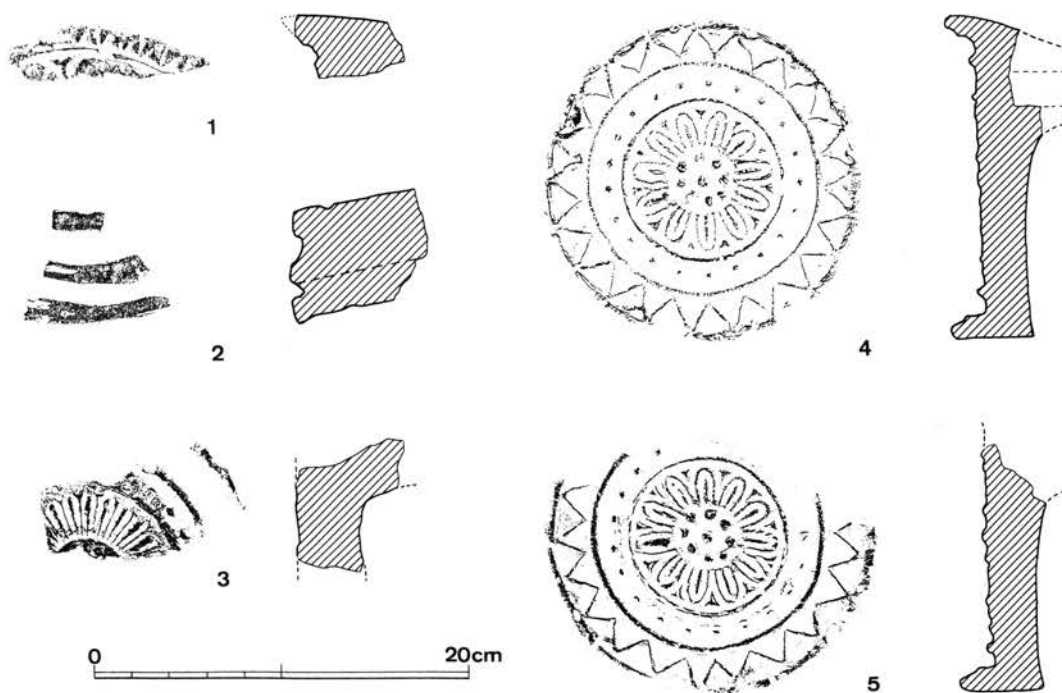
無釉陶器 1072は皿である。

施釉陶器 1073・1076・1077・1079は緑釉陶器椀の底部片、1075は緑釉陶器耳皿である。うち、1075・1076には陰刻花文が描かれる。1074・1078は灰釉陶器椀である。

墨書土器 以上のほか、墨書を認める土器を5点認めた(1094～1098)。1094は、須恵器杯身Aで、底部外面に意味不明の文字3文字が記されている。1095は、土師器杯底部片で、外面に「□女」と記される。1096は、土師器椀で底部外面に意味不明の文字(記号か)が記される。1097は土師器片で外面に墨書された文字の一部が認められる。1098は須恵器椀で、体部外面に「中」と思われる文字が認められる。

3. 古瓦類(第14・15図)

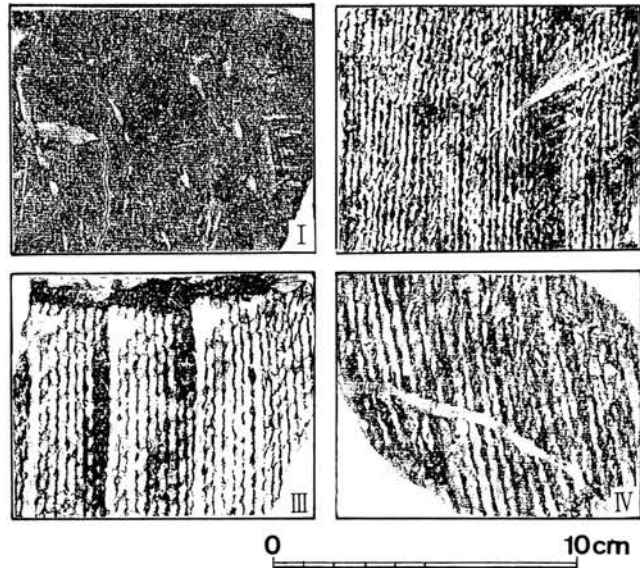
調査では、大きく2群に分類される古瓦類が出土した。これは、先に報告したA・B調査区の様相とはほぼ同様である。それは、7世紀後半～末葉と8世紀後半頃の2時期に大別される古瓦類であり、前者には凸面をナデによって仕上げる平瓦(平瓦Ⅰ類)と焼成がやや甘く淡黄褐色を呈する丸瓦(丸瓦Ⅰ類)が、後者には凸面に縦位の縄タタキを施す平瓦(平瓦Ⅱ～Ⅳ類)と焼成が良く淡黒灰色を呈する丸瓦(丸瓦Ⅱ類)がそれぞれ認められるというものである。ただし、今回報告しているC～F地区では、D・E地区の包含層を中心に平瓦類が主体的に出土したことから、ここでは、この両地区から出土した平瓦およびこれとともに出土した軒瓦を報告する。



第14図 出土軒丸瓦実測図

今回の調査区(C～F地区)で出土した古瓦類(平瓦を主体とする)は、総数でコンテナ6箱程度ある。内容的には、軒丸瓦が3種4点、軒平瓦1種1点のほかは平瓦類である。平瓦では、平瓦Ⅰは、付表3に示したごとく全体の4割強を占め最も多い。続いて平瓦Ⅱ・同Ⅲ・同Ⅳという具合になるが、このうち平瓦Ⅰが7世紀後半～末、同Ⅱ～Ⅳは8世紀後半に属すと判断している。また、出土地点でみると、平瓦ⅠはE地区を中心に、平瓦Ⅱ～ⅣはD地区を中心に出土するという傾向がある。

軒瓦 軒丸瓦1(第14図1)は、周縁の一部を残す軒丸瓦片である。外区は断面三角形をなし、面違い鋸歯文を配する。内区は複弁の先端部が確認され、復原される直径などからみて八葉であったものと考えられる。中房部は遺存していないが、これらの特徴は、いわゆる川原寺式軒丸瓦に属すものであることを示している。焼成は良好で、淡灰色を呈する。高麗寺出土資料と対比した結果、飛鳥時代末(7世紀後半～末)頃のものと考えられる。軒丸瓦2(第14図3)は、細弁二十一葉軒丸瓦の瓦当片である。菊花状の花弁、突出した二条の圏線に囲まれた外区内縁の珠文帯、断面台形の外区外縁からなる。外区外縁には鋸歯文が配されていると思われるが、遺存しておらず、それが面鋸歯文であったのか線鋸歯文であったのか、明らかでない。その瓦当文様は平城京6320型式軒丸瓦と同範と判断されるが、外区外縁の鋸歯文の種類が不明なため、恭仁宮跡出土のKM01との区別がつかない。軒丸瓦3(第14図4・5)は、単弁十六葉軒丸瓦である。瓦当面はほぼ完存している。平坦な中房部は、一条の圏線で区画され、そこに1+8の蓮子を配す。花弁も線で表現されるが、部分的に長短が認められ、その形態は若干不揃いといえる。特に一部では中房の輪郭線を越えてのびるものもある。もともとは、現状より長めの花弁と小振りの中房によって構成されていたものを、彫り直して利用している可能性もある。外区は、内縁に二条の圏線に囲まれた珠文帯と断面が台形に近く、内傾面に線鋸歯文を配する外縁から成る。外区外縁の鋸歯文帯および内区の花弁の一部に範傷が認められ、文様構成やこの範傷の特徴などから平城京6134C型式軒丸瓦と同件であることが確認される。軒平瓦(第14図2)は、軒平瓦の瓦当部片である。瓦当面には、型引きの三重弧文が認められる。



第15図 平瓦分類図

第3表 平瓦分類表

	破片数	%
Ⅰ類	43	42.2%
Ⅱ類	13	12.7%
Ⅲ類	30	29.4%
Ⅳ類	16	15.7%
計	102	100%

平瓦 平瓦には凸面の調整痕からみて、凸面のタタキ痕跡をナデ消すもの、凸面に縄タタキを

施すものの大きく2種類があり、さらに後者は縄目の粗密から3種類に分かれる。平瓦Ⅰ類は、凸面をナデで仕上げるもので、タタキの痕跡は確認されない。凹面には細かな布目が観察されるとともに、桶の杵板の痕跡と思われる約3cm間隔の段が確認される。また、側面は面取りされるものが多く、その角度などを加味するとこのタイプの平瓦は桶巻作りであった可能性が高い。焼成はやや甘く、灰白色から淡灰青色を呈するものが多い。平瓦Ⅱ類は、凸面に縦位の縄タタキを施すもので、縄の数が2cmあたり8本前後と細かなものをⅡ類とした。ただし、一部タタキをナデ消すものも認められる。凹面には細かな布目が観察され、側面は凸面側から幅約1.5cm程度の面取りをするものもある。凹面には桶巻作り特有の桶の杵板痕跡は確認されず、一枚作りによるものと思われる。焼成は比較的良好で、黒灰色から暗灰色を呈するものが多い。平瓦Ⅲ類は、凸面に縦位の縄叩きを施すもので、縄の数は2cmあたり6～7本とⅡ類に比べやや粗いものである。凹面には布目が確認されるが、なかには凹面にナデを施し布目を消すものもある。側面は面に沿ってヘラケズリを施すが、面取りは行わない。一枚作りによるものである。焼成は良く、黒灰色を呈するものが多い。平瓦Ⅳ類は、凸面に縦位の縄タタキを施すもので、縄の数は、cmあたり4～5本と最も粗い一群である。凹面には布目が確認される。一枚作りによるものと思われる。焼成はやや甘く、暗灰色を呈するものが多い。

第6節 平安時代後期～末葉

この時期の資料としては、C～E地区第2遺構面で検出した掘立柱建物跡や土坑・井戸などから出土した11～12世紀の資料を図示した。なお、資料としてのまとまりという点で土坑や井戸からの出土遺物を図示しているが、これらの時期に相当する生活の痕跡(掘立柱建物跡など)としては、後述する最終段階としての12世紀中葉～後半に属する掘立柱建物跡(C～E地区)が主体で、他の11世紀～12世紀前半のものは非常に希薄であった。

時期的な面をみても、黒色土器・須恵器・緑釉陶器などが出土しているS E 96023が最も古く、おおむね11世紀初頭頃に位置づけられる。続いて、S E 94010・96035・97204・97205などの資料が11世紀末葉頃、さらにS E 95071・96096が12世紀前半～中葉に、そして、ここに示した中で最も新相を示す資料として、S E 96095・96001が12世紀後半頃に位置づけられるものと考えている。

1. 器種と器形

土師器と瓦器が主体を占め、黒色土器・白磁などがわずかに認められる。

土師器 皿・台付皿・杯・椀・羽釜などがある。

土師器皿には、口径15cm前後の大皿と口径8～10cmの小皿がある。また、両者とも、口縁部が短く立ち上がるもの(皿A)と、口縁部付近が一旦外反したあと、端部を折り返し、ないしは軽くつまみあげるもの(皿B)の二者がある。また、このほかに「ハ」の字状に開く脚台を有する台付皿がある。

土師器羽釜には、幅広のタガを有し口縁部が高く立ち上がるもの(羽釜A)と、同じく幅広のタガを有し立ち上がりの低いもの(羽釜B)、幅の狭いタガを有し口縁部の立ち上がりが低いもの(羽釜C)の二者がある。また、羽釜Aには、口縁部付近が内傾するもの(羽釜A a)と、直立気味に立ち上がったあと端部付近がわずかに内反するもの(羽釜A b)がある。

瓦器 椀・皿がある。

瓦器椀には、口径13.2~16.2cmのものが認められるが、いずれもいわゆる樟葉型とされるものである。瓦器皿は、すべて口径10cm前後の小皿であり、上記の土師器小皿Bとほぼ共通する器形をなす。

黒色土器 椀が認められた。低部に小さな断面三角形の高台を付すものである。

白磁 椀を認めた。口縁部が玉縁状となるものである。

2. 出土遺物(図版第90~95)

S E 96023(図版第90:1099~1117) 土師器小皿B(1099~1103)・杯(1104)・鍋(1117)・羽釜C(1114~1116)、黒色土器椀(1105~1107)、須恵器杯身(1108~1111)、緑釉陶器椀底部(1112・1113)がある。土師器小皿B(1099~1103)は、口径9~10cm前後を測るもので、端部を内側へ折り返す。うち、1103は底部に4か所の小孔を穿っている。土師器杯身(1104)は、平らな底部から立ち上がった口縁の端部付近が外反する。黒色土器は3点(1105~1107)を認めた。うち、1105のみが完形で、口径16.8cm・器高5cmを測り、底部に断面三角形の小さな高台を付す。須恵器杯身片(1108~1111)は、いずれも墨書を認めるが意味は不明である。緑釉陶器椀(1112・1113)は、両者とも削り出しによる平高台を有す底部片である。土師器羽釜Cは3点を確認した(1114~1116)。土師器鍋(1117)は、短く外反した口縁部は玉縁状に内側へ折り返される。

S E 95204(図版第90:1118~1134) 土師器小皿A(1119)・B(1118)・大皿A(1121~1123)・B(1120)、瓦器椀(1124~1134)がある。土師器小皿A(1119)の器壁はやや厚手である。同小皿B(1118)は、図上復原では非常に扁平な器形となる。同大皿A(1121~1123)のうち、1123はやや深みで、口縁部を二段のヨコナデで仕上げている。瓦器椀(1124~1134)は、底部には断面台形の高台を付し、器壁の厚手のものが多い。体部は内外面とも密にヘラミガキが施され、内面見込みにはジグザグ状の暗文を重ねて施す。

S E 95205(図版第91:1135~1152) 土師器小皿A(1138・1139)・B(1135)・大皿A(1140・1141)・杯(1136)・椀(1137)・羽釜B(1142)、瓦器椀(1144~1149)・皿(1143)、黒色土器(1150)、白磁椀(1152)、緑釉陶器椀(1151)がある。土師器大皿Aは2点(1140・1141)を認めたが、うち1141には底部外面に意味不明の墨書が認められる。土師器椀(1137)は、口縁部付近がわずかに外反し端部を内側へわずかにつまみ出すものである。瓦器椀は底部に断面台形の高台を付す。体部内面には密なヘラミガキを施し、外面にも非常に密なヘラミガキが認められる。内面見込みにはジグザグ状の暗文を重ねて施している。また、1150は「ハ」の字状にふんばった高台を付す黒色土器椀の底部片である。1142は、羽釜Bでほぼ完形に復原された。下膨れの体部とやや幅広のタ

ガ、短く立ち上がる口縁部からなる。1152は白磁碗底部片で、外面に墨書が認められる(意味不明)。1151は緑釉陶器碗である。口径10.6cmの小型品で、濃緑色の釉薬をかける。おそらく混入品であろう。

S E 95035(図版第91:1153~1180) 土師器小皿A(1153~1163)・大皿A(1164~1168)・台付き皿(脚台片)(1179)、瓦器碗(1170~1178)・皿(1169)、白磁碗(1180)がある。土師器小皿Aは口径8~10.1cmを測るものがあり、丸みのある底部を有すもの(1153・1154・1156・1158~1161・1163)、平らな底部を有すもの(1155・1157・1162)がある。うち、1156には口縁端部に明瞭な面取りが認められ、1157には底部中央に径5mmの小孔が穿たれている。同大皿A(1164~1168)では、1165のみ二段のヨコナデによって仕上げられ、口縁端部に明瞭な面取りが認められる。瓦器皿(1169)は、内面見込みにはジグザグ状の暗文が認められる。瓦器碗(1170~1178)のうち、全形の判明する(1170・1171)は、口径14.6cm前後・器高6cm前後を測り、底部には断面台形の高台を付す。内面には密にヘラミガキが施され、外面のヘラミガキも分割性を認める。これに対し、底部片として図示した資料のうち、1175・1176・1178では見込みにらせん状の暗文を認める。

S E 94010(図版第92:1181~1201) 土師器小皿A(1184~1192)・B(1181~1183)、大皿A(1197)、台付き皿(1198・1199)、瓦器碗(1194~1196)、瓦器皿(1193)、白磁碗(1200・1201)がある。土師器小皿A(1184~1192)は、底部が平らで器壁が薄手のものや、底部が丸味を有し器壁が厚手のものなどがある。また、口縁端部をわずかに外反させるものなども認められる。土師器小皿B(1181~1183)は、丸みのある底部と、わずかに外反する口縁部とからなる。口縁端部はわずかにつまみ出される。大皿A(1197)は、口縁部内面に墨書の痕跡を認めるが意味は不明である。台付き皿は2点認められたが(1198・1199)、1199は脚台部片、1198は大型品で、やや深みの皿部を有す。瓦器碗(1194~1196)は底部に断面が三角形もしくは台形の高台を付す。体部内面には密なヘラミガキを施し、外面には分割性のあるヘラミガキが認められる。内面見込みには、ジグザグ状の暗文を施す。瓦器皿(1193)は底部中央に径5mm程の小孔を穿っている。白磁碗(1200・1201)は、完形品(1201)と、底部片(1200)の2点を認めた。前者は、台形状の高台を付し、玉縁状の口縁をなすもので、後者は断面が方形をなす高台を付す。

S E 96096(図版第92:1202~1223) 土師器小皿A(1202~1210)・大皿A(1211~1216)・台付き皿脚台部片(1217)、瓦器碗(1218~1223)がある。土師器小皿A(1202~1210)は、底部が平らなものや丸みをなすものがあるが、いずれも口縁部を一段のナデで仕上げる。同大皿A(1211~1216)は、口縁部付近の破片が多いが、底部のややくぼむものが目につく(1214~1216)。瓦器碗(1218~1223)は、底部に断面が三角形の高台を付す。体部内面には比較的密なヘラミガキを施し、外面のヘラミガキは分割性をたもっている。内面見込みにはらせん状の暗文が施される。

S E 95071(図版第93:1224~1253) 土師器小皿A(1224~1229)・大皿A(1230~1234)、瓦器碗(1243~1253)・皿(1235~1242)、白磁碗(1254)がある。土師器小皿A(1224~1229)は、いずれも平らな底部から短く口縁部が立ち上がる。土師器大皿A(1230~1234)では、1231の口縁端部に明瞭な面取りが認められる。瓦器皿(1235~1242)では、1242のみ断面が三角形の高台を付す。い

ずれも内面見込みにジグザグ状の暗文を施す。瓦器椀(1243～1253)は、全形の分かるもの(1243・1245・1248・1251)や、底部片(1252・1253)では、底部に断面三角形の高台を付し、内面見込みにはらせん状の暗文が認められる。

S K 96001(図版第94：1255～1281) 土師器小皿A(1255～1260)、瓦器椀(1262～1275)、瓦器皿(1261)、羽釜A a(1278・1279)・A b(1276・1277)のほか、羽釜の足部片がある。土師器小皿A(1255～1260)には、平らな底部から口縁部が短く立ち上がるもの(1255～1257)、丸みのある底部を有すもの(1258・1260)、やや深身のもの(1259)などがある。瓦器椀(1262～1275)は底部に断面三角形の高台を付す。体部内面のヘラミガキはやや粗となり、外面のヘラミガキも認められるものと認められないものがある。瓦器皿(1261)は、土師器小皿である1260とほぼ同形同大で、内面見込みにジグザグ状の暗文を認める。羽釜A a(1278・1279)のうち、1278は体部上半を残し、下膨れの体部を有することが確認される。羽釜A b(1276・1277)は、1276が小型品で、口縁部付近に最大径を有し、底部に向かってゆるやかに内湾する形態をなす。このほか、足釜の足部分(1280・1281)を確認している。羽釜A aのタイプのもものが足釜であった可能性が高い。

S E 96095(図版第95：1282～1288) 土師器小皿A(1282)、瓦器椀(1283～1288)がある。土師器小皿(1282)は、平らな底部から短く口縁部が立ち上がるものである。瓦器椀(1283～1288)は底部に断面三角形の高台を付すものが主体をなす。体部内面のヘラミガキはやや粗くなり、外面のヘラミガキは分割性を失う。内面見込みにはらせん状の暗文が認められる。

S K 95005(図版第95：1289～1305) 土師器小皿A(1289～1292)、大皿A(1293～1295)、瓦器椀(1299～1305)、瓦器皿(1296～1298)がある。土師器小皿A(1289～1292)には、丸みのある底部を有し器壁が厚手のもの(1289・1290)と、平らな底部から短く口縁部が立ち上がるもの(1291・1292)の二者がある。瓦器椀(1299～1305)では、完形に復原されるものは認められなかったが、底部片の1302～1305では、高台はやや細くなった断面台形をなし、内面見込みにはらせん状の暗文が認められる。瓦器皿(1296～1298)のうち、最も残りの良い1298では見込みにジグザグ状の暗文が確認される。

S B 95001(図版第95：1306～1320) 土師器小皿A(1306～1311)、瓦器椀(1316～1320)、瓦器皿(1312～1315)がある。土師器小皿A(1306～1311)は、やや深身のもの(1306)、低部の丸いもの(1307・1308)、平らな底部を有するもの(1309～1311)がある。瓦器皿(1312～1315)は、平らな底部を有する土師器小皿とほぼ同様の形態をなし、いずれも、内面見込みにジグザグ状の暗文が認められる。瓦器椀(1316～1320)は、底部に断面台形の高台を付し、内面にはらせん状の暗文を施す。

第7節 その他

ここでは、各時代のものを含め、玉類・石製品、木製品、土製品、金属製品(貨銭を含む)、鍛冶関連遺物について報告する。

1. 玉類・石製品(図版第96：1～25)

玉類には、管玉・白玉・ガラス小玉・勾玉がある。また石製品には、石製模造品・打製石鎌・打製尖頭器・紡錘車・砥石・鋳型・石鍋の破片がある。1・17はN R 96222、2～5はS X 96223、6はS H 97297、21・23はS D 97218、22はS E 96051、24はS H 97299から出土したものであり、この他は包含層中からの出土である。

1～7は、管玉である。石材の風化の度合いで見ると、3と5が色調灰緑色を呈する緑色凝灰岩、そのほかは碧玉と呼ばれる硬質な素材を使用している。2は出土品の中で法量が最小であるが、暗緑色の碧玉を用いており、作り自体も精巧である。6はやや中ほどが太くなる紡錘形を成している。8は滑石製の白玉である。9・10は色調がコバルトブルーのガラス小玉である。いずれもややいびつなかたちをしている。11は翡翠製の勾玉である。12は色調が暗緑色を呈する勾玉である。孔は片面穿孔による。13～16は滑石製の石製模造品である。13は勾玉、14は鎬状の表現が見られることから剣型と思われる。15は円板である。16はやや身部に反りを持つ棒状製品である。成形時のキズを残し、全体に研磨されている。装身具の一種と思われる。18は小型尖頭器、19は柳葉形の石鎌である。20は大型の尖頭器である。先端と基部が折損している。17～19の石材はサヌカイトである。17は紡錘車である。21・22は鋳型である。底部を除いて5面すべて研磨調整されている。型枠は直径約2.4cmの円形で、断面凹形にくぼんでいる。型枠内には、黄黒灰色の滓状の付着物が見られる。凝灰岩質の石材である。23・24は凝灰岩の砥石である。24は石質が緻密であり、仕上げ砥と思われる。25は滑石製石鍋片である。口縁部下に鐳の付かないタイプである。口縁部下に一对の把手が付く、桶状の器形で器高の高いものか。復原口径は約13.4cmを測る。色調は灰紫色で、光沢がある^(註27)。

2. 木製品(図版第97～103：1～47)

木製品には農具(鎌・鋤・横槌・田下駄)、漁労具(櫂状製品・浮子)、容器(槽・曲物)、武器(剣鞘)、建築部材(梯子)、井筒、井戸枠材、その他用途不明品がある。1～10・12～20・21～25・27～31がN R 96222、11・21・26・32がN R 96224から出土したものである。37・38はS E 97204の井筒、S E 97205の44～47は下部井戸枠材である。39はE地区S E 97223の井筒、40～43はC地区S E 96023の井戸枠材である。

1～3は直柄平鎌である。いずれも泥除装着装置が付く。1は泥除の基部が残存する。4は直柄又鎌である。刃部が二股のフォーク状に枝分かれするタイプである。5は鋤または櫂状の製品である。柄と身の部分に並列する2つの孔がある。8は横槌である。身部分は一部に樹皮が残存する。柄部分を削り出している。9は頭部分が四つに分かれた杭状製品である。先端部分は尖っており、打ち込み杭のようであるが、頭部分が精緻に作り出されており、部材と思われる。10・11は櫂状製品である。農具の鋤の可能性もある。12は田下駄である。13は一本鋤である。把手は上端の横木を太く作り出し、中央に逆台形状の孔があく。身部分の形状は欠損のため不明である。14～16は槽である。15は底部に木目と平行する台脚が二つ、16は円形の台脚が二つ見られる。17

は、建築材の一部と思われる台形をなす板材である。中央部に柱を通したと考えられる径約13cmの円形の穴を穿つ。18は剣の鞘である。19は陽物形製品である。24は浮子状製品である。25は転用されているものの下部に磨耗した突起が見られるため、扉板と思われる。26は棍棒状製品である。先端部分を突起状に削り出している。27は右上がりの突帯状の装飾を施した棒状製品である。28は先端部分を斜めにカットした棒状製品である。29は一木梯子である。足掛けを二段作り出している。下端の角は上端と比較すると、丸く仕上げられている。30は部材である。方形の孔には2か所にサクラの皮の綴じ紐が残存しているため、組み合わせ部材としての使用が想定できる。31・32は杭である。33～35は曲物の底板である。33・34は側面に釘の打ち込まれた孔(図中の矢印部分)が見られるが、35は木釘が4か所に残存する。36～38は曲物の側板でS E 97205から出土した。39～47は、井筒および井戸枠材である。39は一木井筒である。内面をくり抜いて、側面に3か所長方形の孔を穿っている。40～43は順に北・東・南・西側板である。それぞれを鉄釘で固定していた。44～47は蒸籠組の井戸枠の下部で柄組されていたものである。44・46の北および南の側板の両端の挟り込み部分に上部の井戸枠が乗るかたちになっていた。それぞれの材には、4枚の板材の段階で加工基準線を墨打ちしたと思われる墨痕が確認できる。直径20cm強の柵目材で、側面に樹皮を残していたことから松材と思われる。

3. 土製品(図版第104:上)

土錘・土鈴・土玉・土馬・ミニチュア竈がある。1はS H 97287、2はS H 97272、11はS E 96023、12・22～24・28・29はS D 97218、20はS D 97247、25・26はS E 97204掘形内、27はS X 97249から出土したもので、他は包含層出土である。土錘は、16点を図示した。法量から全長が8～9cmのもの(1・2)、5～7cmのもの(3～8)、3cm前後のもの(9～16)の3つに分類できる。大きさの違いは用途もしくは時代性によるものと思われる。形状は紡錘形のもので大半であるが、5のように筒状のものもある。

土鈴は2点(18・19)が出土している。法量・形状と類似する。18は中に玉が残存する。

土玉(17)は1点が出土しているが、通常穿孔されたものが多いが、穿孔は見られない。

土馬は7点が出土している。20は鞍や鬣は粘土の貼り付け、顔の目と鼻の表現は棒状工具の刺突である。耳は粘土塊の貼り付けである。四肢は別作りで、接合されている。手綱は棒状工具の先端で押し引きされているなど細部の表現が見られる。四肢は太く短足で農耕馬のような力感がある。21～27は簡略・意匠化されている。21・22は頭部が残存する資料である。頭部は円板状にした粘土を頸部部分に2つ折りにして挟み込んでいる。手綱は頭部の接合より先に貼り付けられている。目の表現は竹管による刺突である。27は四肢が長く、残存高が14cmを測るものである。21～26の土馬とは異なり、大振りな作りである。頭部と右前後の脚が失われている。欠損した頸部には、手綱と思われる粘土紐の貼り付けが残存する。

ミニチュア竈(28・29)は焚き口周囲に廂を持つものである。天井部分は竈本体を作り出した粘土を窪ませて鍋を一体形として表現している。本来は竈と鍋がセットになるものであるが、ミニ

チュア竈としては一番新しい形態を示していると言える。

4. 金属製品(図版第104：下、105：上)

銭貨を除く金属製品(図版第104：下)には、銅製の蛇尾(1)・丸柄(2)、銅鏃(3)、鋸状製品、錘状製品(4)、鉄釘(5～8)、刀子状製品、鉄斧状製品(10・11)、貨銭などがある。1・6・7はS D97218、2はS X94011、3はS D96222、6はS K96203、8はS X97203、10はS D97307から出土した。4は鉛と思われる錘状製品である。1か所穿孔されている。

銭貨(図版第105：上)は17点を掲載した。1～11はD地区S X94011、14・15はC地区S E95023掘形内、その他は、包含層出土である。その内、和銅開寶(珎)(初鑄年708年)が10点(1～10)、万年通寶(11)(初鑄年760年)、隆平永寶(12)(初鑄年796年)、長平大寶(13)(初鑄年848年)、延喜通寶が2点(14・15)(初鑄年907年)、元祐通寶(16)(初鑄年1086年：北宋銭)、寛永通寶(17)が各1点である。和銅開寶は2点(9・10)が破片資料であるが、その他は、ほぼ完形品である。隆平永寶は12のほかに銭面同士が銹着した資料がある。拓本はないが、長平大寶8枚が縄状の繊維に束ねられた状態で出土したものもある。14の延喜通寶は鑄型に湯を流し込んだ際に流シムラがあったためか、「延」と「喜」の文字間に長楕円形の穴が生じている。

5. 鍛冶関連遺物(図版第105：下)

鍛冶関連遺物はいずれもC地区から出土した。1～10はフィゴの羽口の破片、11～15は椀形滓である。11～13はS E96051から出土している。ほかは包含層中から出土したものである。1～4はフィゴの羽口の端部、5・6は還元部位が見られるため、端部やや中央寄り、7～10は中央ないし末端寄りの部分と思われる破片である。1～3にはガラス滓が付着している。1には外面に羽口製作時のハケ調整痕が内外面とも明瞭に確認できる。端部は被熱により還元作用を受け、断面も暗紫色になり硬化している。4は、本来は端部ではないが、破断面ガラス滓が付着しているため、破損後の再利用と思われる。11は小鍛冶に伴う椀形滓であり、図の下半部が欠損している。12～14は木炭片が混在している。特に14の資料は木炭が錆を吸着した鉄錆色で、木炭本来の色調は止めていないが、砂鉄の炉内での溶解時に炉が破損して、温度低下等の不手際があったのであろう。11～15のいずれも磁性を帯びているが、特に14の個体の磁性が強い。

第5章 総 括

本報告においては、弥生時代中期、弥生時代後期終末～古墳時代前期、古墳時代中期後半～後期、飛鳥時代、奈良～平安時代前期、平安時代中期～後期、平安時代末～鎌倉時代という大きく分けて7時期にわたる遺構・遺物を確認し、これについて報告した。

本章では、このうち弥生時代後期終末～古墳時代初頭、古墳時代中期後半～後期、飛鳥時代、奈良～平安時代前期、平安時代中期～後期、平安時代末～鎌倉時代の各期における細かな視点からの遺構・遺物に関する検討を行い、当遺跡の時期別変遷の把握に努めることとしたい。

ただし、調査を行った内里八丁遺跡全体を検討の対象とするため、以前に報告したA・B地区を含めることとする。^(注28)

第1節 弥生時代後期終末～古墳時代前期の土器様相と遺構の変遷

今回の発掘調査では、弥生時代後期終末～古墳時代前期(いわゆる庄内式～布留式並行期)の遺構・遺物を多数確認した。主な検出遺構には、C～E地区にわたって検出した竪穴式住居跡群、F地区第6遺構面で確認した水田跡などがある。また、出土遺物としては、F地区第5・6遺構面で検出した流路跡から出土した多量の土器がある。

これらには遺構面を違えて検出されたものがあり、明らかに同一時期にすべてが機能したものでないことが確認される。しかし、竪穴式住居跡や水田跡にはその時期を明確に把握することが可能な遺物が出土していないものも多く、現状ではこれらを細かく段階的に把握することは難しい。ここでは主に流路跡出土の土器群を段階的に整理することを一つの時期的把握の柱とし、これをもとに各遺構の概略的な時期的変遷について検討を行うこととする。

1. 流路跡(N R 96222・N R 96224)出土資料にみる土器様相

先に報告したように、F地区第5・6遺構面では、同一地点を流れる流路跡2条(N R 96222・96224)を確認した。この流路跡では、上層で検出したN R 96222の堆積土(黒褐色砂質土・暗灰褐色粘質土)および、下層で確認したN R 96224の底部付近に堆積する砂層と埋没段階に堆積した砂質土層からまとまった量の土器が出土した。またこれらは、層位的に明らかにN R 96224下層→N R 96224上層→N R 96222へと変遷したものと考えられる。資料的には、流路内の堆積層であり時期的な面では多くの混入品等を含んでいると考えられるなどの問題を有しているが、当遺跡の変遷を知る上では、一定の段階的な様相をうかがえるものと判断している。ここではまず、これら資料を改めて概観することとする。なお、出土資料のすべてを図示できているわけではなく、細かな点で器種構成について述べることは難しい。

(1) N R 96224下層資料

図示した資料では、壺7点・甕50点・鉢6点・小型壺1点・有孔鉢5点・台付鉢4点・高杯5点・器台1点がある。すべてを図示していない点で、器種構成に関して詳述できないが、出土資料全体で甕類が多い点(全体の6割近くを占める)は、ここに示したとおりである。また甕類の中では、甕Aが最も多く、甕全体の7割近くを占め、続いて多いのが甕Eで同じく2割近くを占める。一方、小型壺・鉢・有孔鉢・台付鉢などの小型品は、あわせて全体の2割弱であった。ただし、明確に小型器台と認識できるものは認められなかった。

他地域の影響といった面では、壺Kとした201が近江(湖東方面)からの搬入品、甕Bとした228が河内方面からの搬入品と思われる。ほかに高杯Eは近江～東海方面からの影響を示すものと考えられ、また甕Eや複合口縁を有す器台Bなどは、いわゆる丹波・丹後方面の影響を強く示すものである。ただ、甕Eでは、体部にタタキを施す例があるなど、搬入品として認識できるものはほとんどないようである。

この他、時期的な面を強く示唆するものとして、甕Aでは、体部の球胴化が進行したものは少なく、大半の資料では底部は突出気味の平底である。口縁端部の形態では、A-1は甕Aのうち45%、A-2は同16%、A-3は同39%ある(図化できたものでの数値)。甕Bとした228は、体部最大径が肩部にあり、いわゆる庄内甕としては古相を呈する資料であろう。高杯Aでは、口縁部が強く外反するものが認められるが、大きく立ち上がるものは認められない。また器台Bは、口縁部に二条の擬凹線文を認める。

(2) N R 96224上層資料

図示した資料では、壺5点・甕29点・鉢3点・小型壺1点・有孔鉢4点・台付鉢2点・高杯2点・器台1点・小型器台1点がある。下層資料と同様、すべてを図示していない点で、器種構成に関して詳述できないが、出土資料全体で甕類が多い点(全体の6割近くを占める)は、ここに示したとおりである。また甕類で甕Aが最も多い点も変わりはないが、甕類のなかで占める比率は減少し、甕全体の4割強となる。甕Eもある程度存在するが、甕全体の中で1割強となる。これにかわって、甕Bなどの点数が若干増える様相をみる。ただ、上記のN R 96224下層とは大きな違いをみせ、下記のとおりこの段階の甕Bの多くは播磨型とされるものである。なお、小型壺・鉢・有孔鉢・台付鉢などの小型品は全体の2割程度で、この点は下層とあまり変化は無い。

他地域の影響といった面では、上記のとおり甕Bとした303が播磨型とされるもので、播磨方面からの搬入品と思われる。またここにも近江～東海方面からの影響を示す高杯Eが認められるほか、丹波・丹後方面の影響を強く示す甕Eや器台Bが存在する。

時期的な面を強く示唆するものとして、甕Aでは、体部の球胴化の進行したものが比較的多く認められるようになる。口縁端部の形態では(図化できたものでの数値)、A-1甕Aのうち25%、A-2は同33%、A-3は同42%となる。また器台Bは、口縁部上半が強く外反し、擬凹線文を施さなくなる。甕Bの303は、最大径が体部中位にある資料である。

(3) N R 96222資料

N R 96222資料には、最上層として流路がほぼ埋没した段階の資料も混在する。これらは布留式段階でも新相を呈する一群であり、明瞭に区分される。

図示した資料では、壺10点・甕43点・鉢1点・小型壺2点・小型丸底壺2点・台付鉢1点・高杯2点がある。最も多い甕類をみると、甕Aが3割強、甕Cが3割弱、甕Bが2割弱、甕Eは1割弱となる。ただし、上記のとおり、甕Cには明らかに新相を呈するものを含んでいるが、甕Aが減少し、これに代わって甕B・Cが多く認められるようになることは確実である。ただこれらが、さらに細かな時期差を有しているのか、ほぼ同一時期の様相ととらえられるのかは不明である。^(注29)

他地域の影響といった面では、やはり甕Bとした361・362などが播磨型とされるものである。ただ、この段階では当地でも甕Bを生産しはじめたようで播磨型とされるもののいくつかは地元産の可能性を有す。甕Eでは、口縁部上半の立ち上がりが大きく、376・377など山陰方面の影響を強く示す(搬入品か)ものが目につくようになる。また高杯G(384)は東海方面の影響を示すものである。

時期的な面を強く示唆するものとして、上記のように、甕Aの減少と甕B・Cの増加、特に甕Cが新たに加わり一定量認められるようになる点が最も大きな特徴といえる。一方、減少したとはいえ、いまだ一定量認められる甕Aでは、体部の球胴化が進行したものが多く、口縁端部の形態では、A-1は甕Aのうち25%、A-2は同25%、A-3は同50%となる(図化できたものでの数値)。

(4) 資料の段階的把握

以上が、F地区第5・6遺構面で検出した流路N R 96222・96224出土資料の概略である。すなわち、最も資料数の多い甕類でみると、球胴化の進行していない甕Aを主体とし、わずかに古相を呈する河内産の庄内甕(甕B)が搬入されるN R 96224下層の段階、球胴化の進行が認められる甕Aを主体とした播磨産の庄内甕(甕B)が認められるN R 96224上層の段階、球胴化および口縁端部のつまみ上げという様相の進んだ甕Aを主体とし、播磨産の庄内甕(甕B)に加え地元産の甕Bや新たに甕Cが加わるN R 96222の段階という状況に整理されるものと考えている。先に示したように、ある程度の資料の混入はあるが、N R 96224下層→同上層→N R 96222へと変化したことは、資料の検討からもうかがえる。便宜上、以下の記述においては、N R 96224最下層段階をⅠ期、N R 96224上層段階をⅡ期、N R 96222段階をⅢ期と段階的な把握の柱とすることとしたい。

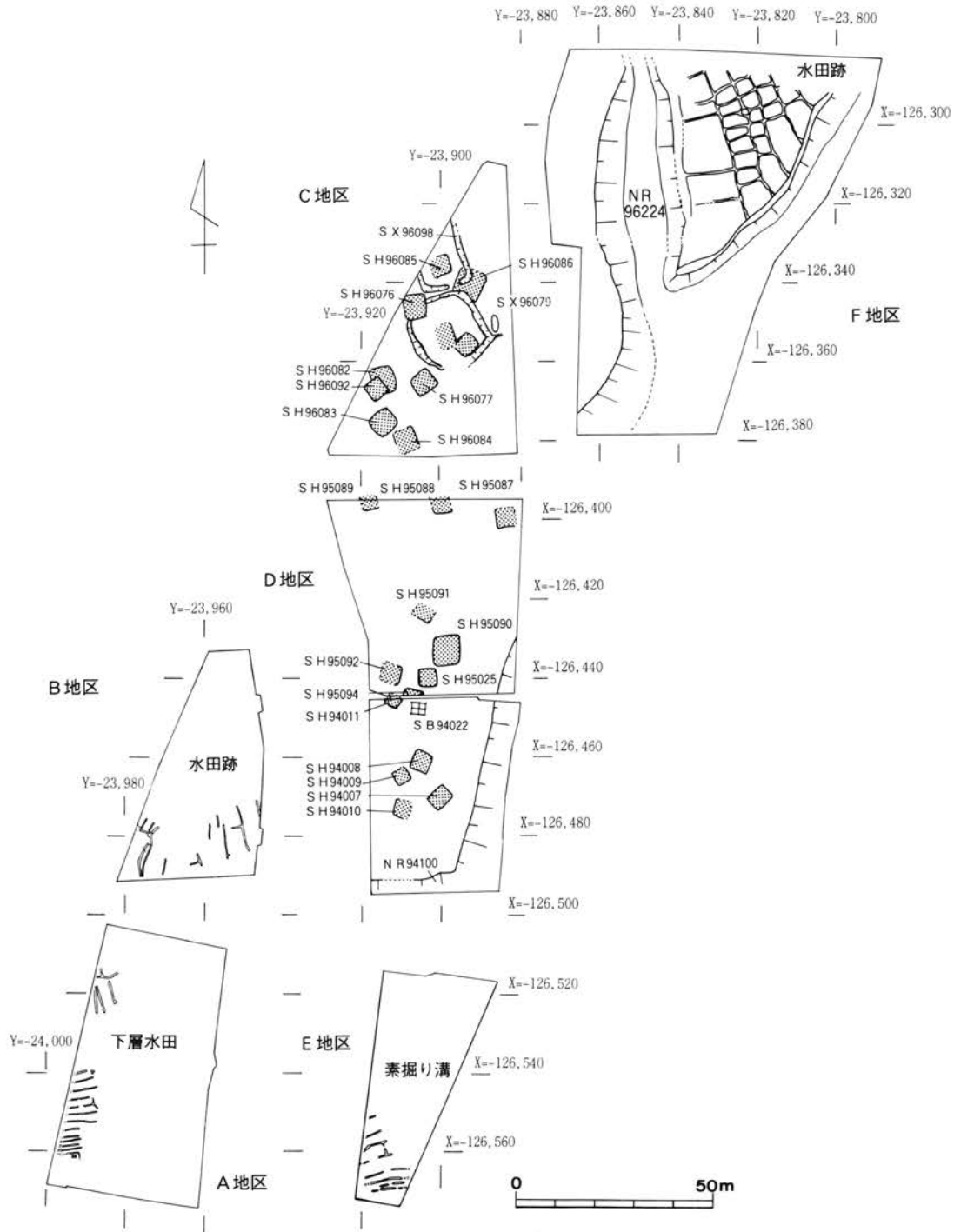
さらに、N R 96222の中に、これが埋没した時期を示す布留式期でも新相を示す土器群が認められるが、これと近似した時期の資料が出土した竪穴式住居跡がE地区第4遺構面にも散在する。こうした資料の段階をⅣ期として把握し、本時期の遺構の変遷としては、都合Ⅰ～Ⅳ期にわたる変遷としてとらえておきたい。^(注30)

2. 検出遺構の段階的把握

さて、こうした段階的な把握を、流路跡以外の竪穴式住居跡群をはじめとする各遺構に対応さ

せた場合どうであろうか。明らかに時期の決定が可能なたままと出土している遺構(竪穴式住居跡)は少なく、遺構の切りあい関係などを含め概括的な把握が行えるにすぎないが、以下簡単な検討を行うこととする。

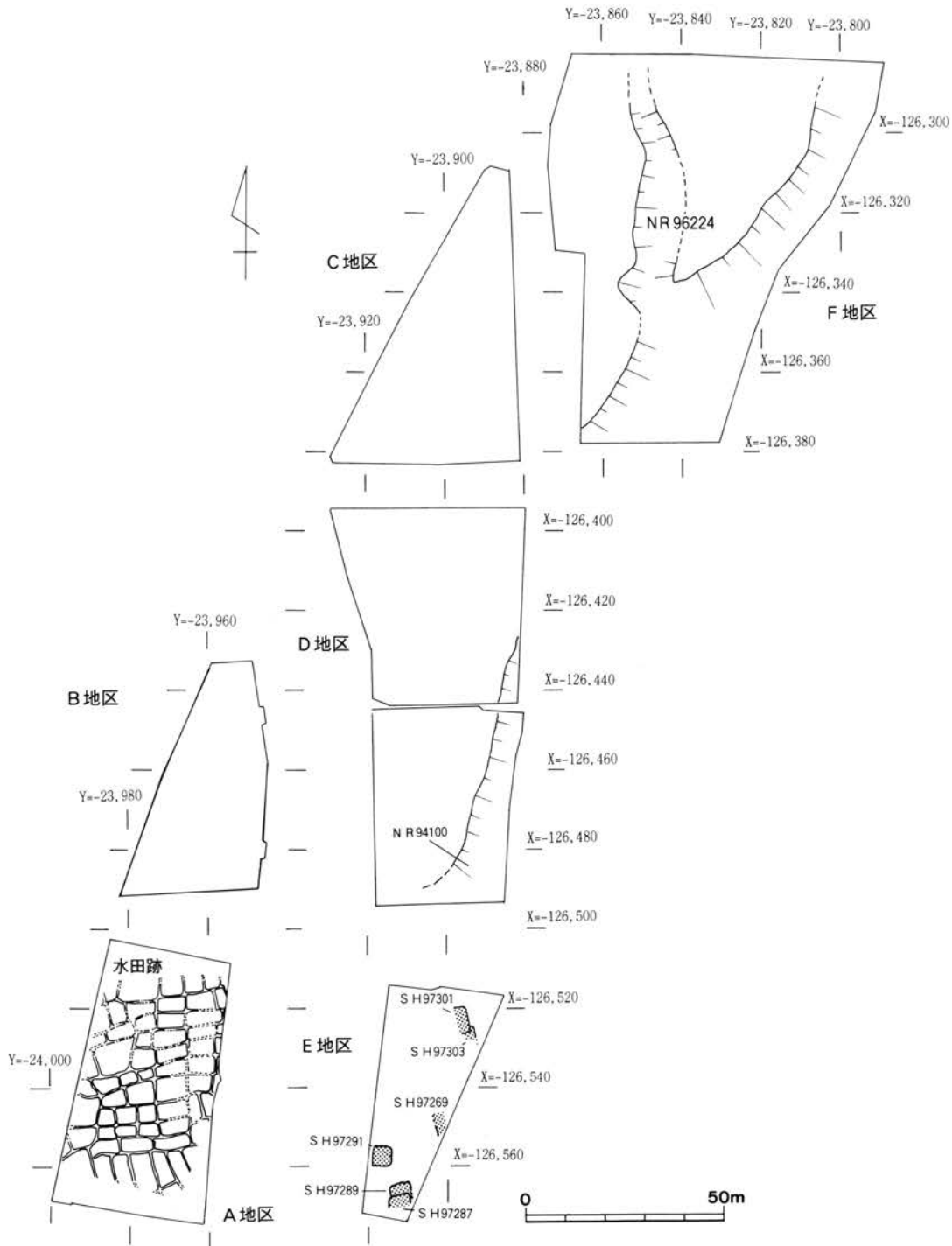
まず、流路跡に見られた洪水砂層とその東側で検出した水田跡との関係であるが、土層断面の検討の結果、NR 96224下層に相当する洪水砂によって水田跡が一様に覆われており、このF地区第6遺構面で検出した水田跡の廃絶期がI期に相当するものと判断される。さらにF地区の第



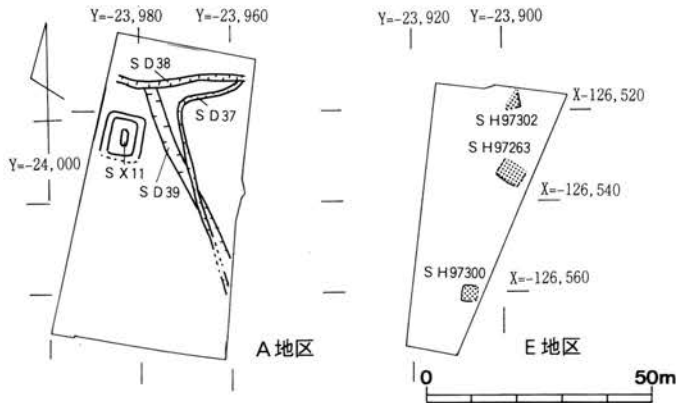
第16図 弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図(I・II期)

5 遺構面から同第 6 遺構面の状況を付け加えると、その後、N R 96224 上層に相当する土層の段階(Ⅱ期)に F 地区第 6 遺構面から第 5 遺構面への堆積が進んだものと判断され、第 5 遺構面の N R 96222 が機能したのがⅢ期、これが完全に埋没したのがⅣ期ということとなる。

一方、遺構の切り合い関係をみると、特に C 地区に顕著に認められ、S H 96082 と S H 96092、S X 96079 と S H 96076・96086、S X 96098 と S H 96086 など認められ、ここ(D 地区北辺から C 地区にわたって分布する一群)には少なくとも 2～3 時期にわたるものが混在することが確認さ



第17図 弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図(Ⅲ期)



第18図 弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図 (Ⅳ期)

第18図 弥生時代後期末～古墳時代前期主要遺構配置図 (Ⅳ期)

堅穴式住居跡出土資料の多くは、Ⅰ・Ⅱ期を中心とするものが多く、E地区にⅡ～Ⅳ期のものが多い傾向が認められる。

このようにみると、C地区(C地区からD地区北辺の一群)にみとめられた2時期は、Ⅰ期とⅡ期を主体とするものであり、E地区の第4遺構面はⅢ・Ⅳ期に相当し、第5遺構面は時期の決定材料を欠くものの、ⅠもしくはⅡ期に相当するものと考えられる。ここで明確に把握されるのは、調査区内でも北側に位置するC・D地区にⅠ・Ⅱ期、E地区にⅢ・Ⅳ期という具合に集落自体が徐々に南下していく状況、そしてC地区近辺に集落が営まれたⅠ期にその東側に隣接するF地区に水田が営まれた可能性の高いことである。

続いて、こうした状況に、以前に報告したA・B地区の様相を対比させてみる。この両地区での顕著な遺構は、A地区で上下二面にわたって検出された水田跡、上層水田跡のさらに上層で確認された方形周溝墓および南北溝、B地区での水田跡およびこれを検出する過程で確認された土器溜りなどであった。これらに伴う土器資料には、弥生時代後期末～古墳時代初頭の中でも古相を呈する一群と新相を呈する一群が存在し、さらに古墳時代前期資料(A地区方形周溝墓や南北溝に相当する)が認められることとなる。これを遺構と遺物の関係から段階的に整理すれば、A地区下層水田・B地区水田・B地区土器溜り(一部)が弥生時代後期末～古墳時代初頭の古相を示す資料に、A地区上層水田・B地区土器溜り(一部)が弥生時代後期末～古墳時代初頭の新相を呈する資料に、そして古墳時代前期(布留式併行)のA地区方形周溝墓や南北溝という状況に整理されるものと考えている。今回出土した資料と、A・B地区出土資料の対比を行うと、古相をなす一群は今回のⅠ・Ⅱ期に、新相をなすものはⅢ期に相当するものとする。古墳時代前期の資料は今回のⅣ期のほうが新しい様相を示すが、一応Ⅲ・Ⅳ期に対応させておく。

3. 小 結

以上、前項での検討により、これまでに内里八丁遺跡で検出した当該期の各遺構は、以下の段階的な把握が可能と考えている。

まず、Ⅰ期にC地区周辺を中心に集落が形成され、その東側のF地区に水田が形成された。こ

れる。また、E地区では、第4遺構面で6基の堅穴式住居跡が検出されているが、この下層(第5遺構面)でこれに遡る耕作地(水田跡か)も確認されていることから、ここにも新旧関係を確認することができる。

堅穴式住居跡出土遺物のみをみると、実際に図示できるものが出土したのは総数29基のうち21基であった。うち、C地区からD地区の堅穴

の段階にはF地区のNR96224下層が機能し、水田への引水を行っていた。続くⅡ期には、C地区からD地区に集落が営まれたものと考えている。この段階には、F地区の水田はほぼ埋没しており、本期の生産の場としての水田域をA地区下層水田・B地区水田・E地区耕作地に求めたいところである。ただし、これらはその性格上、時期を細かな面で特定する資料に限られること、遺構の遺存状況がきわめて悪いこと、時期を特定する上で重要となるB地区水田上で確認された土器溜まり出土資料の取り上げやその後の検討が十分でないことなどから、その可能性の高い点を指摘することにとどめざるをえない。ただし住居跡群については、Ⅰ・Ⅱ期の区分できないものも多く、遺構配置図は、Ⅰ・Ⅱ期を一括している(第16図)。Ⅲ期にはさらに集落の中心は南へ移り、E地区を中心とすることとなる(第17図)。この時期にはF地区のNR96222が機能するとともに、A地区を中心に水田が営まれたようで、本地区上層水田が本期に相当する。Ⅳ期には、A地区に方形周溝墓や溝、E地区に集落、F地区のNR96222が埋没していった状況が認められるが、上述のようにA地区の遺構はE・F地区の遺構に先行する(第18図)。

第2節 古墳時代中期末～後期の集落跡と一帯の開発

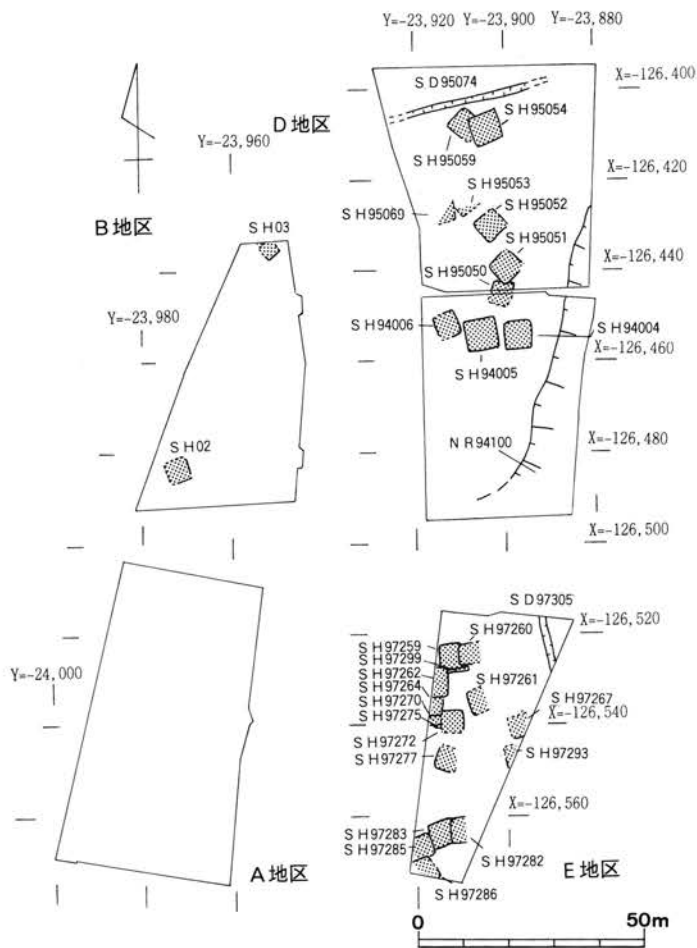
今回の内里八丁遺跡の発掘調査では、古墳時代中期末～後期の集落跡が確認された。ただし、その状況は、すべて竪穴式住居跡で構成され、その竪穴式住居跡にも目立って規模の大きなものは認められなかった。現状でこの集落を評価すれば、半世紀足らずの間に、比較的均質な立場の居住者達によって営まれた集落と位置づけられることとなる。一方、『日本書紀』などの文献資料には、このころの動向を示すいくつかの記事が認められる。ここでは、当該期の調査成果のまとめを兼ねて、文献資料の対比を行うこととする。

1. 古墳時代中期末～後期の調査成果

古墳時代中期末～後期の遺構としては、D・E地区にわたって検出した総数26基の竪穴式住居跡など集落に係わる遺構があるが、これらはD地区とE地区の間に存在した小さな谷状地形によって大きく2分される。

北側(D地区)を中心に分布する一群は、D地区北辺付近の東西溝(SD95074)を北限とし、東～南限を谷状地形(流路の可能性もあり)、西限はB地区以西へ広がると考えられる。比較的散在する形で住居跡が分布し、遺構間の重複関係もSH95054とSH95059、SH95051とSH95050の2か所で認められる程度であった。おそらく2世代程度にわたる集落と考えられ、総数10基が確認されたことからすれば4～5基程度が同一時期に機能したものと考えられる。ただし、西方のB地区でもこの時期の竪穴式住居跡が確認されていることからすれば、もう少し広範囲に広がり、また一時期の住居の数も多かった可能性もある。

E地区の住居群は、北限をD・E地区の間の谷状地形、東限をE地区東辺の南北溝(SD97305)、西限はA地区までの間にそれぞれ求められ、南限は調査区外へさらにのびていくものと考えられる。住居跡は上記のD地区のものにくらべ、比較的密集する傾向が認められ、同一地点



第19図 古墳時代中期末～後期主要遺構配置図

干时期的に新しい段階まで存続したものと把握している。

両集落の居住者の足跡を示す古墳などは、当地近辺にはあまり存在しない。かつて内里古墳と呼ばれた中期古墳が現内里集落近辺に存在したとされるが、地形的にみれば遺跡地の西方を流れる流路を隔てた対岸に位置することとなる。ただ、当遺跡G地区では、6世紀前半頃の円墳の残骸が確認されており、本来は、遺跡の立地する微高地の縁辺にいくつかの古墳が築造されたものの、後世に削平を受けてしまっている可能性もある。

先に記したように、現状の調査成果からは、掘立柱建物跡や規模の大きな住居跡など、有力者の痕跡を示すものは認められない。比較的均質な居住者によって営まれた集落という位置付けがなされるであろう。ただし、調査区外にこれらを示す遺構が埋没している可能性は残されている。

2. 文献資料にみえる遺跡地一帯の動向

さて、今回の調査で確認された古墳時代集落(中期末～後期)の時期に、内里八丁遺跡周辺における歴史的な動向が日本書紀などに散見される。

まず、最初に確認されるのは、日本書紀雄略17(494)年条にみる「内里の地に贅土師部を住ま

に重複する住居も、多くは3基程度、中には4基が重複するものもあり、3～4世代にわたって営まれた集落と考えられることとなる。総数16基の住居が確認されていることからすれば、同一時期に機能した住居の数は4～5基となり、上記のD地区とあまり差はないものと考えられる。

时期的には、いずれも5世紀末～6世紀初頭に位置付けられる遺物(須恵器・土師器)が出土しているが、E地区の集落跡がD地区に比べ若干長期にわたることを示すごとく、E地区ではやや新しい様相(6世紀前半)を示す土器も散見された。あくまで調査範囲内での出土遺物からの傾向であるが、両者はほぼ近似した時期に設営された集落であり、E地区の集落が若

わせた」という記事である。贅土師部とは、天皇家の食膳を司る役目をになっていたとされる。無論、これがどの程度史実を伝えているか不明であるが、ここに食物(野菜類)の栽培・供給といった面をあてはめれば、木津川沿岸の微高地(自然堤防)上を利用した畑作、すなわち一帯での畑地としての土地開発が非常に古くまで遡る可能性のあることを示している。しかもそれが、朝廷直属の野菜類の栽培であることは、後述する「奈良園」へと結びつく要素ともいえ、その成立に大きな影響をあたえたとも考えられるだろう。

続いて、確認されるのは、同じく日本書紀欽明26(565)年条にみる「高麗人を奈羅の地に住ませた」記事である。すなわち、現在も当遺跡の北方にその地名をのこす奈羅(現在は奈良と表記)の地に渡来系氏族を移住させた記事である。彼らがどういった目的で当地に移住してきたのか明確ではないが、この時期の渡来系氏族の各地への移住に関しては、彼らが保有した高度な土木技術を背景とし、各地の開発を担わせたものと理解される場合が多い。この場合、当地一帯に広がる木津川縁辺の自然堤防上の開発がまずもって想定されるであろう。

この他、久世郡内における仁徳紀・推古紀の栗隈(栗前)溝の記事は著名なものである。現在の木津川東岸一帯を対象としていたと考えられているが、おそらく木津川に面した低地部分の耕地開発を目的として、その用水確保(場合によっては排水を目的としたとも考えられている)のため栗隈(前)溝が開掘されたというものである。仁徳紀のそれについては疑問視される場合が多いが、推古紀に相当する7世紀初頭～前半の開発については、屯倉の設置などから注目されているものである。当地がかつて久世郡内に属していたことを考えれば、まったく無縁の事象とも思えないように考える。

古墳時代中期末～後期の一帯の動向を知る手がかりとなる資料は以上のとおりであるが、ここに一つの志向性をみいだすことは飛躍しすぎであろうか。すなわち、欽明紀の渡来人の移住・仁徳紀・推古紀にみる栗隈溝の開掘などから、木津川沿岸のなかでも旧巨椋池南側一帯地域の耕作地拡大を目的とした土地開発であり、さらに雄略紀の贅土師部の移住にみる一帯の畑地としての開発といった点である。

3. 小 結

先にみた、贅土師部と内里との関連を示した雄略紀の記載、ならびに渡来人(高麗人)との関連を示した欽明紀の記事に関しては、その史実性および当遺跡との関連について、現状では十分に検討できる状況ではない。しかし、これらの記事が5世紀末葉～6世紀の事象として記録されていることは、今回の調査で確認した集落跡がこれに近い時期(5世紀末～6世紀初頭)に相当していることから非常に興味をもたれるところであろう。

木津川沿岸の微高地(自然堤防)上は、肥沃な土地と表記される場合が多い。河川が搬んできた土砂が堆積し、木津川による洪水の危険、水捌けの悪い点を克服すれば、非常に生産力の高い土地として認識できたと考えられる。しかも、巨椋池南側一体という広い視野をもつと、平安時代には奈良園と奈癸園の2つの菜園が営まれていたことも考えられる。『延喜式』によって確認さ

れる。

今回報告した古墳時代中期末葉～後期初頭の集落跡は、総数26基の竪穴式住居跡が確認され、これらは比較的均質的な集落構成をとっていた。こうした意味では、当地の開発に携わった人々の居住地を思わせる面を有している。しかし、出土遺物の面では、わずかにD地区の竪穴式住居跡S H95052から韓式系土器と認識しうる甑が1点のみ認められたほかに、特にその居住者を想定させるものは確認できなかった。まして開墾に使用された農具などは見当たらなかった。上記の栗隈(前)溝の開掘に関しては、推古朝を中心とする7世紀前半に丘陵先端付近の高台に急激にいくつかの集落が出現する状況が認められている^(注34)。古墳時代中期末～後期に関しても、今回の内里八丁遺跡にみたような集落が、近似した時期に一帯に急激に出現するといった動向が認められれば、今後、新たな展開をみいだすことも可能となろう。今後の調査・研究に大きな期待をもつところである。

第3節 飛鳥時代の土器様相と遺構の変遷

今回の内里八丁遺跡の発掘調査において出土した飛鳥時代(7世紀)の土器は、近年、この時期の土器様相がさまざまに議論されるなかきわめて貴重な資料を得たものと評価している。しかし、現状では明確な段階的把握が難しい現状にある。ここでは、出土資料の段階的把握と、これをもとにした検出遺構群の変遷について簡単な検討を行うことにしたい。

1. 出土資料の概要

まず、主な出土土器資料について、その様相を簡単にまとめておきたい。

S X 96027資料(C地区第3遺構面) S X 96027は、C地区第3遺構面精査中に確認したもので、明確な掘形を確認することはできなかったが、須恵器杯身C・杯蓋Cがセットで出土したものである。杯身は口径11cmを測り、底部外面はヘラ切り未調整である。

竪穴式住居跡群資料(E地区第4遺構面) E地区第4遺構面で検出した竪穴式住居跡群は、出土資料を見る限り、ほぼ同一時期に営まれたものと判断される。出土資料は、上記のS X 96027と同様、須恵器杯類では杯身Cおよび同蓋Cのみで構成される資料であった。ただし、その口径は、やや小型となり8～10cmで、底部外面はヘラ切り未調整である。また、供伴している土師器杯Cは口径指数が33前後を示す。なお、ほぼ同様の特徴を示す資料は、前回報告したA地区のS D08にも認めることができる。

S K 96028資料(C地区第3遺構面) S K 96028は、C地区第3遺構面で検出した土坑である。須恵器では杯身A・杯身E・蓋Aが、土師器では杯身Cなどが認められる。須恵器杯身Aは、口径10cm・器高3.5cmと小型品で、ほぼ同大の杯身Eとは区別が難しい。土師器杯Cは口径指数が30前後を示し、上記のE地区竪穴式住居跡群よりも後出的要素を示す。

S D53・S K11資料(B地区) 上記のS K 96028とほぼ同様の特徴を示す資料として、前回報告したB地区のS D53およびS K11出土資料がある。B地区S D53は、調査区のほぼ中央で確認

された南北溝であるが、遺構の遺存状況の関係から、一部途切れ、途切れた部位以北をS D51、以南をS D53と命名している。またS K11は、B地区の東辺で確認された土坑である。まずS D53資料では、須恵器杯身Eが杯類の大半を占める点を大きな特徴とし(これを杯蓋とせずに杯身と判断した根拠は、蓋とした場合にこれとセット関係をなすこととなる杯身Cが、A・B両調査区においては全く確認されなかったことによる)、その口径は9~11cmのものが主体をなす。ただ、この中には、資料的にはわずかであるが、須恵器杯Aや高台が下外方へ踏ん張った同杯身Bの存在も認めることができる。一方、これに伴う土師器、特に杯類では、杯身Cが主体をなす。その特徴は、外面は、口縁部付近のヘラミガキは少なく、体部下半をヘラケズリもしくはナデ調整によって仕上げ、内面には放射状の暗文を施すものが認められるというものであった。法量面では、大(口径17~18cm・器高5cm前後)・中(口径14~16cm・器高4~4.5cm)・小(口径10.3~13cm・器高3~4cm)の三者が認められ、その径高指数は28~30前後を示す。一方、S K11から出土した資料では、須恵器杯身B・杯身E・皿・壺、土師器杯身Cなどが認められる。うち須恵器杯身Eには、口径10~11cmのものと口径13cm前後のもの二者が認められるが、前者は下記のS D97247資料に近似する。土師器杯身Cが、口径指数25を示点で、上記のS K96028やS D53に比べやや後出的要素をもつ。

S D97246・97247資料(E地区第3遺構面) S D97246はE地区第3遺構面で検出した南北溝、S D97247は、S D97246に切られる東西溝である。両資料には、須恵器杯身に杯身Eが認められず、杯身Aおよび杯身Bの両者によって構成されている点を特徴とする。ただ、これだけでは上記のS K96028やS D53、S K11資料に後出する資料かどうか十分な判断をできないが、伴出している土師器杯身Cをみると口径指数が20前後を示している点で、これらの資料に後出する可能性が高いと考えられる。

S D97236資料(E地区第3遺構面) S D97236は、E地区第3遺構面で検出した「L」字状に屈曲する溝である。出土資料には、須恵器杯身A・B、同蓋B、土師器杯身C、同甕などが認められる。須恵器蓋Bが存在する点、土師器杯身Cに暗文が認められない点で、上述のS D97247と比べるとかなり後出する要素を備える。報文中で奈良時代とした竪穴式住居跡(S H95042)からの出土資料に類似した要素を示し、本来は奈良時代(8世紀前半~中葉)に比定すべき資料の可能性が高い。

2. 資料の段階的把握

以上が出土した飛鳥時代の土器資料の概略である。これらを段階的に整理すると以下のとおりとなる。^(注30)

I段階：S X96027 口径11cm前後の須恵器杯身C。

II段階：E地区竪穴式住居跡群 口径8~10cmの須恵器杯身C、口径指数33の土師器杯身C。

III段階：S K96028(S D53・S K11) 須恵器杯身Eが主体で、そこに同杯身Aや杯身Bがわずかに存在、土師器杯Cは口径指数28~30。ただし、S K11は土師器杯身Cの口径指数が25。

第4表 掘立柱建物跡一覧表(飛鳥時代)

遺構名	地区	東西規模			南北規模			面積 (㎡)	主軸	特徴	時期
		間数	規模(m)	柱間(m)	間数	規模(m)	柱間(m)				
S B 97334	E	2	3.3	1.65等間	6以上	9.6	1.6等間	—	N20° W	南北棟建物	Ⅱ
S B 97336	E	2	3.3	1.65等間	2	3.4	1.7等間	11.2	N24° W	南北棟建物	Ⅱ
S B 96056	C	3以上	5.4	1.8等間	2	3.2	1.4~1.6	—	N15° W	東西棟建物	Ⅲ
S B 96057	C	6	8	1.3~1.4	2	4.3	2.1~2.2	34.4	N15° W	東西棟建物	Ⅲ
S B 96058	C	1以上	2.3	2.3	2	3.9	1.8~1.9	—	N15° W	南北棟総柱建物	Ⅲ
S B 96060	C	2以上	4.2	2.1等間	3以上	6.2	1.5~2.7	—	N12° W	南北棟建物	Ⅲ
S B 96021	C	2	4.6	2.3等間	6	8.4	1.4等間	38.6	N 7° W	南北棟建物	Ⅳ
S B 96053	C	1以上	1.8	1.8等間	2以上	4.2	2.1等間	—	N 8° W	南北棟建物か	Ⅳ
S B 96054	C	1以上	2.3	2.3	4以上	6.4	1.6等間	—	N 4° W	南北棟建物	Ⅳ
S B 96055	C	4	7.9	1.3~2.3	2	4.4	2~2.4	34.8	N 4° W	東西棟建物	Ⅳ
S B 96059	C	—	—	—	2	3.6	1.8等間	—	N 8° W	—	Ⅳ
S B 95064	D	2間	3.8	1.9等間	2間	4	2等間	15.2	N 6° W	南北棟建物(ほぼ正方形)	Ⅳ
S B 95065	D	2以上	3.6	1.8等間	1以上	1.8	1.8等間	—	N 6° W	総柱建物	Ⅳ
S B 97226	E	2	4.8	2.4等間	5	8.8	1.76等間	42.2	N 6° W	南北棟建物	Ⅳ
S B 97253	E	2以上	4.2	2.1等間	2	4	2等間	—	N 5° W	東西棟建物	Ⅳ
S B 97333	E	2	3.5	1.75等間	3	5	1.6~1.7	17.5	N 5° W	南北棟建物	Ⅳ
S B 97335	E	2	3.6	1.8等間	1以上	1.8	1.8	—	N 6° W	総柱建物	Ⅳ
S B 04	A	2	3.83	1.9~2	2	4.2	2.1	16	N 6° W	総柱建物	Ⅳ
S B 05	A	3	4.8	1.6	2	3.25	1.6~1.7	15.6	N 6° W	総柱建物	Ⅳ
S B 16	B	2	5.1	2.55	6	10.8	1.8	55	N 4° W	南北棟建物	Ⅳ
S B 19	B	2	4.65	2.25・2.4	5	11.4	7~8.5	53	N 4° W	南北棟建物	Ⅳ
S B 20	B	3	4.5	1.5	3	4.9	1.55~1.65	22	N 5° W	総柱建物	Ⅳ

Ⅳ段階：S D 97246・97247 須恵器杯身Eが存在しなくなっている可能性が高い。土師器杯身Cの口径指数は20。

なお、これに続く段階としてのS D 97236は、上述のとおり8世紀前半~中葉頃まで下がる時期に比定される可能性が高く、本時期の段階的把握からは省くこととする。

各段階の実年代に関してしてみると、まずⅠ段階を示す口径11cm前後の底部がヘラ切り未調整の須恵器杯身Cは、隼上り編年^(注35)のⅡに、Ⅱ段階を示す口径10cm前後の須恵器杯身Cは同Ⅲに対応するものと考えられ、7世紀前半~中葉までの資料ということができよう。これは、Ⅱ段階に伴う土師器杯身Cの口径指数が33を示すことから妥当性をもつと考えている。ただし、本資料には須恵器杯類では杯Cを認めるのみで、杯A(もしくは杯E：飛鳥編年・分類では杯Gに相当)を明瞭に抽出できてはいない。

続くⅢ・Ⅳ段階については、大まかにみて、須恵器杯類において杯身Dを主体とし、同A・同Bがわずかに認められる段階から、杯Dが認められなくなる段階として整理できそうであるが、現状では資料数に限界があり明確に把握できない。ただ、相伴する土師器杯身Cの口径指数からは、明瞭に変遷が指摘でき、28~30のS K 96028・S D 53、25のS K 11、20のS D 97246・97247へと変化したことがうかがえる。これに実年代をあてはめることは非常に難しいが、およそ7世紀後半~8世紀初頭といった時間幅のなかで変遷したものと、とらえておきたい(S K 96028・S D 53：7世紀後半、S K 11・S D 97246・97247が7世紀末葉~8世紀初頭)。

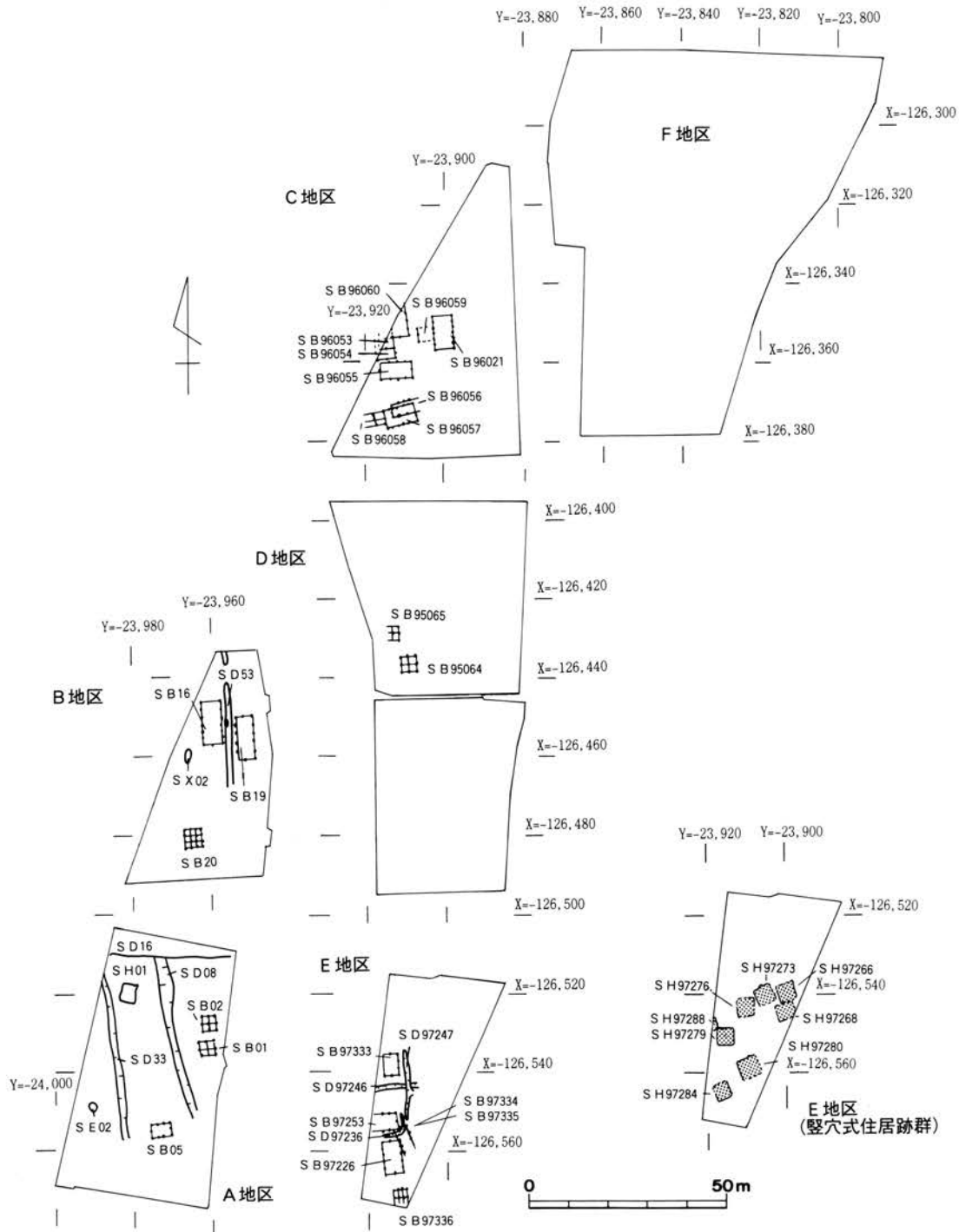
3. 飛鳥時代遺構の変遷

ここでは、上記のⅠ～Ⅳ期の区分を飛鳥時代Ⅰ～Ⅳという段階的な把握として、各段階の様相を概観する。

① 飛鳥Ⅰ段階(7世紀前半)

飛鳥Ⅰ段階に相当する明確な遺構は、この時期の遺物が出土したS X 96027が認められるにすぎない。

② 飛鳥Ⅱ段階(7世紀前半～中葉)



第20図 飛鳥時代主要遺構配置図

飛鳥Ⅱ段階は、E地区第4遺構面の竪穴式住居跡群を主体とする。E地区第4遺構面では、この時期の竪穴式住居跡を総数8基確認したが、同一遺構面で確認した掘立柱建物跡2棟(SB97334・97336)もこの時期に属すと考えている。両掘立柱建物跡は、竪穴式住居跡(SH97280)と切り合い関係を有し、これを切って設けられているが、建物跡の主軸がN20・24°Wという方向を示すこと(この時期の多くの竪穴式住居跡と近似した方向を向く)、この上層遺構面(第3遺構面)で確認した掘立柱建物跡群(後述する飛鳥Ⅲ段階)とは検出面が異なり、これよりは古いと考えられることなどがら、一部の竪穴式住居跡と並存した可能性が高いと判断している。なお、A地区の東辺近くで確認されている南北溝(SD08)は、この時期の集落の西限付近に位置することとなる。

③飛鳥Ⅲ段階(7世紀後半)

飛鳥Ⅲ段階の遺構としては、現状では、この時期の遺物が出土したC地区の土坑(SK96028)、B地区のSD53があげられるにすぎない。ただ、掘立柱建物跡の主軸を検討することによってさらに数棟の掘立柱建物跡がこの時期に属する可能性が考えられる。飛鳥時代の掘立柱建物跡はC地区第3遺構面およびE地区第3・4遺構面で検出している。うちE地区第4遺構面の掘立柱建物跡(SB97334・97336)については、上記のように整理している。この他のC地区第3遺構面で確認した掘立柱建物跡は、主軸方向がN12~15°WおよびN4~8°Wを示すものが混在し、またE地区第3遺構面では、N5~6°Wの主軸方向を示す掘立柱建物跡の一群が認められる。各掘立柱建物跡での切りあい関係が明瞭ではなく、これらを段階的に把握するには多少問題もあるが、おおむね、徐々に座標北への振れを減ずるものと把握しており、先のSB97334・97336の示すN20・24°WからN12~15°Wの一群、そしてN4~8°Wの一群へと変化したものと考えている。このように考えると、N12~15°Wを示す掘立柱建物跡が本段階に相当することとなり、続く飛鳥Ⅳ期にN4~8°Wの方向を示す掘立柱建物跡が相当するという具合に整理され。すなわち、本時期の掘立柱建物跡としてC地区第3遺構面のSB96056~96058・96060など4棟の掘立柱建物跡が考えられることとなる(第4表)。

また、C地区第3遺構面で確認した小鍛冶に関する遺構もこの段階のものである可能性が高い。上記のこの段階に比定した掘立柱建物跡(SB96056)の柱穴内に焼土や鉄滓の混入を認めたことによる。

④飛鳥Ⅳ(7世紀末~8世紀初頭)

飛鳥Ⅳ段階には、様相が一変するごとく、広範囲に遺構、特に掘立柱建物跡が分布するようになる。上記のとおり、その主軸がN4~8°Wを示す掘立柱建物跡をこの時期のものと考えた場合、A地区の掘立柱建物跡SB01・02・05・09、B地区の掘立柱建物跡SB16・19・20、C地区の掘立柱建物跡SB96055・96021、D地区の95064・95065、E地区の97226・97253・97373・97336など16棟の掘立柱建物跡が認められる(第4表)ほか、井戸(SE96051)などもこれに加わるものと判断している。これらの特徴としては、B・E地区を中心に大型の掘立柱建物跡が出現することがまずあげられる。B地区のSB19が南北棟で2間×5間(53m²)、SB16が同じく南北

棟で2間×6間(55m²)、E地区のS B97226がやはり南北棟で2間×5間(42.2m²)である。これに対し、大型建物が認められないC・D地区では、C地区で柱間の狭い倉庫風の建物が1棟、D地区でもやはり倉庫風の建物が2棟検出されている。ここには、明確な土地の使用区分があったように思われ、遺跡の西半部に大型建物が点在し、東半部に倉庫風建物が配置されるというものである。また、出土遺物をみると、この時期の古瓦の出土地点はA・B・E地区といった西半部に集中する傾向を認める。ところで、こうした遺跡地内の土地利用区分を想定した場合、注目されるのが道路状遺構の存在である。上記のごとく遺跡を東西に二分した場合、その境界に位置するのが道路状遺構となる。溝埋土の出土遺物から確実な時期としては、奈良～平安時代初頭(8世紀後半～9世紀前半)と把握せざるをえないものの、この段階の遺跡の状況に道路状遺構1が大きくかかわっていた可能性はきわめて高いと判断されるのである。また逆に、こうした大型建物の出現の背景に道路の敷設といった要因があったとも考えられよう。この時期の遺跡の性格としては、単なる一般集落とは考えられない面を有していることは明らかであるが、有力者の居宅もしくは官衛的な施設といった可能性以上を指摘することは現状では難しい。なお、この段階の資料は、先に飛鳥時代の段階を示す資料からはずしたS D97236に相当する8世紀前半頃までを想定し、もう少し時間幅を持たせる必要があるかもしれない。

第4節 奈良・平安時代の内里八丁遺跡と道路状遺構

内里八丁遺跡では、報文中でも記したように、C・D・Eの3地区にわたって奈良～平安時代の道路状遺構(道路状遺構1)を確認した。当地付近は、従来から足利健亮氏の推定する古山陰道が通過するとされており、遺構の所属時期やその規模などからみて、これが古山陰道の痕跡である可能性は、きわめて高いと判断している。ただし、細かく見れば、今回検出した道路状遺構と足利説の古山陰道とは若干のズレがあるなど、いくつかの問題点も残されている。ここでは、当遺跡における奈良～平安時代の調査成果を含め、この道路状遺構に関して若干検討を行うことしたい。

1. 検出遺構の概要

(1)道路状遺構の概要と変遷

調査区内ではC・D・E地区において、その側溝と判断している溝2条を検出したものである。残念ながら、路面の遺存は認められなかったが、この時期に属する他の遺構がこの両溝間の道路想定部位に及んでいないこと、側溝と判断される平行する2条の溝を確認したことなどから、これを道路状遺構と考えている。

うち、道路状遺構1は、側溝(S D97219・97217)の心々間で約12mを測り、少なくとも8世紀中葉～9世紀前半に機能していたと判断される。ただし、これと切り合い関係を有する確実な遺構は、8世紀以前では、7世紀中葉と考えている竪穴式住居跡であり、9世紀以降では9世紀前半～中葉の井戸(S E97223)・土坑などである。このため、道路の機能した時期については、こ

の両者の示す、7世紀後半～9世紀初頭という時期幅を想定することも可能である。道路の西側溝(S D97219)は、E地区の北端近くで池状遺構(S X97249)に一旦流入し、さらに北北西へ延びる。また、東側溝(S D94085)はD地区南端で池状遺構(S X94011)に流入し、北方へ延びる。池状遺構(S X97249・S X94011)では、前者から製塩土器や土馬、後者からは和銅開珎やミニチュア竈などが出土しており、ともになんらかの祭祀的(儀式的)行為が行われていた可能性が高い。特に、S X97249のあるE地区では、同様に製塩土器を多数含む土器類が廃棄された土坑(S K97203)やいくつかの掘立柱建物跡などが確認されており、ここが祭祀的行為を行う中心的な場所であった可能性も考えられる。

一方、道路状遺構2は、側溝と判断している溝の肩間の幅で5～6mを測り、出土遺物からみて9世紀中頃～10世紀初頭頃に機能していたと考えられるものである。この道路状遺構2については、良好に両側の側溝を確認できたわけではなく、また東側の側溝の規模が幅約4m・深さ約1.3mと非常に大きい。この点で、道路としての確証は低いと言わざるをえない。ただ、D地区で検出した池状遺構(S X94011)が大きく西方へ移動し、これに側溝が流入していたと判断されることや、木樋(S X94013)がここで想定される道路状遺構2に対応するように存在することなどは、道路状遺構2の存在をうかがわせる材料と考えている。

(2) 周辺の遺構群の変遷

ここでは、道路状遺構が機能していたことが、溝内からの出土遺物から確認される奈良～平安時代前期(8世紀～9世紀初頭)の遺構群を中心に検討することにする。ただし、先にも述べたように飛鳥時代における遺構の変遷のなかで道路状遺構1の敷設にかかわるのではないかと考えられた飛鳥Ⅳ段階の様相に関してもふれることとする。

調査区全域(A～F地区)にわたるこの時期の主な検出遺構を第20～22図に示した。

検出した奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物跡はその主軸から、大きく3群に分類される(第5表)。北に向かって1～3°西へ振るもの(I群)、北に向かって2°東へ振るもの(II群)、北に向かって4°以上東へ振るもの(III群)である。

8世紀前半から9世紀初頭頃の間、N1～3°W(I群)からN1～2°E(II群)へと掘立柱建物の主軸が変化したことは、C～Eの各調査区第2遺構面で検出した掘立柱建物跡の切り合い関係やこれに伴う出土遺物からうかがうことができる。すなわち、D地区第2遺構面でN2～3°Wの方向をもつI群の掘立柱建物跡がN1～2°Eの方向を示すII群の掘立柱建物跡に切られた状況で検出しており、明らかに前者が後者に先行するものと判断される。また、D地区第2遺構面上の包含層出土遺物をみると、おおむね8世紀から9世紀のものが存在し、主体をなすのは8世紀後半～9世紀初頭頃のものとして把握している。

こうした状況から、おおまかに8世紀～9世紀前半という時間幅を3つに区切り、I群を8世紀前半～中葉、II群を8世紀後半～9世紀初頭、III群を9世紀前半以降という具合にここでは段階的な把握をした。以下、奈良～平安Ⅰ段階、同Ⅱ段階、同Ⅲ段階と段階的な把握として、各段階の様相を概観する。また、先にみた飛鳥時代の様相(飛鳥Ⅳ)についてもふれることとする。

第5表 掘立柱建物跡一覧表(奈良時代～平安時代前期)

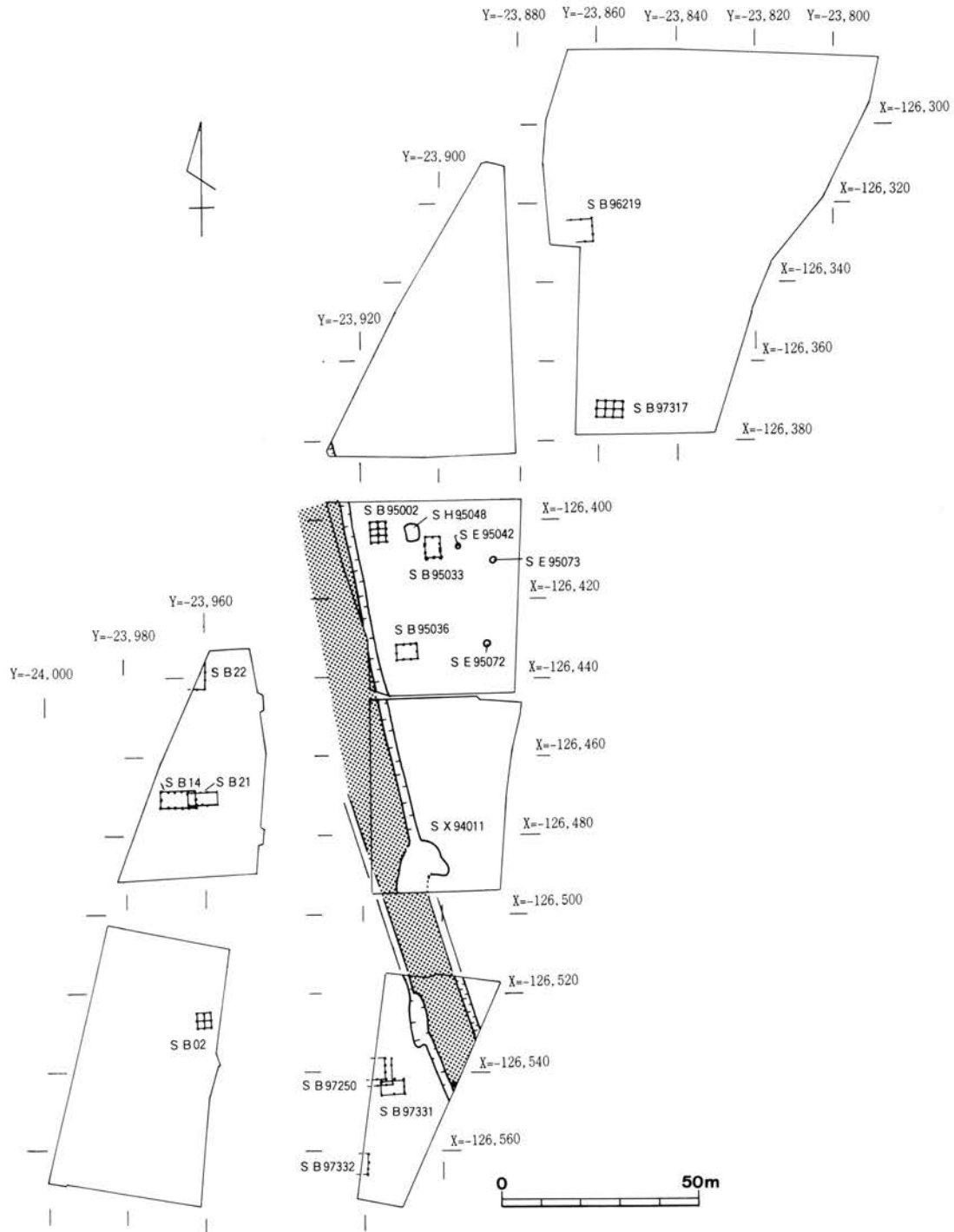
遺構名	地区	東西規模			南北規模			面積 (㎡)	主軸	特徴	時期
		間数	規模(m)	柱間(m)	間数	規模(m)	柱間(m)				
S B 95002	D	2	4.2	2.1等間	3	5.3	1.7~1.8	22.26	N 2° W	南北棟総柱建物	I
S B 95033	D	2	4	2等間	3	5.7	1.9等間	22.8	N 2° W	南北棟建物	I
S B 95036	D	3	5.4	1.8等間	2	4.2	2.1等間	22.68	N 2° W	東西棟建物	I
S B 96219	F	2	5.6	2.8	3	5.9	1.8~2	33.04	N 2° W		I
S B 97250	E	1以上	2.7	2.7	3	5.4	1.8等間	—	N 3° W	南北棟建物か	I
S B 97317	F	3	6.6	2.2等間	2	4.2	2.1等間	27.72	N 2° W	東西棟総柱建物	I
S B 97331	E	2	6.2	2.7・3.5	2	4	2等間	24.8	N 3° W	東西棟建物	I
S B 97332	E	1以上	—	—	2	4	2等間	—	N 3° W	東西棟建物	I
S B 03	A	2	3.45	1.7~1.8	2	3.75	1.8~1.9	12.9	N 2° W	総柱建物	I
S B 14	B	5	8.85	1.7~1.8	2	4.5	2.25	40	N 2° W	東西棟建物	I
S B 21	B	5	7.5	1.5	2	3.7	1.8~1.9	28	N 2° W	東西棟建物	I
S B 22	B	1以上	—	1.8	3以上	—	1.65	—	N 1° W	南北棟建物	I
S B 95034	D	5	9	1.8等間	1以上	1.8	1.8	—	N 2° E	東西棟建物	II
S B 96020	C	2	4.8	2.4等間	5	12	2.4等間	57.6	N 2° E	南北棟建物	II
S B 01	A	2	3.3	1.65	2	3.3	1.65	10.9	N 2° E	総柱建物	II
S B 02	A	3	4.5	2.25	2	4.2	1.2~1.5	18.9	N 2° E	総柱建物	II
S B 96216	F	3	6.5	2.1~2.2	1以上	—	3	—	座標北	—	II
S B 96217	F	2	4.2	2.1等間	—	—	—	—	N 2° E	—	II
S B 96218	F	3	6.3	2.1等間	—	—	—	—	座標北	—	II
S B 10	B	5	9	1.8	2	4.8	2.4	43.2	N 2° W	東西棟建物	II
S B 15	B	(5)	9	1.8	4	6.9	1.65・1.8	62	N 2° E	東西棟南北二面 廂	II
S B 97225	E	3以上	7.2	2.4等間	2	5.4	2.7等間	39以上	N 4° E	東西棟建物	III
S B 11	B	2以上	—	2.2~2.3	2	4.5	2.25	—	N 5° E	東西棟建物	III
S B 12	B	1以上	—	2.1	2	4.5	2.25	—	N 4° E	東西棟建物	III
S B 13	B	1以上	—	2.1	3	4.95	16.5	—	N 9° E	総柱建物	III

飛鳥時代の様相(飛鳥—Ⅳ段階) 飛鳥時代の遺構群については、先述のとおり、飛鳥—Ⅰ～飛鳥—Ⅳの4段階に分け、その変遷を検討した。その中で、特に飛鳥—Ⅳ段階については、遺跡が大きく変容する状況が認められた。それは、遺構からみた場合、大型掘立柱建物跡の出現と遺跡地内での明確な土地利用区分の実施であり、出土遺物からみた場合は、古瓦の使用などである。特に前者においては土地区分において道路状遺構がすでに存在し、これが大きくかかわっていた可能性の高いことが確認されるにいたった。なお、このうち主軸がN 4° Wの一群は、段階的にやや後出する可能性も考えられる。

奈良～平安—Ⅰ段階(第21図) Ⅰ群の遺構には、調査地全域(A～F地区)にわたって分布する総数12棟の掘立柱建物跡をはじめ、竪穴式住居跡1基・井戸2基のほか溝などがある。掘立柱建物跡は、広範囲に分布するが、その平面規模からみると、あまり目立ったものは無い。B地区に2間×5間のS B 14(約40㎡)が1棟あるほか、E地区に三面廂の建物の可能性を有するS B 97250が認められるにすぎず、このほかはいずれも2間×3間(20~25㎡)程度のものである。また、竪穴式住居跡(S H 95048)は、D地区北半部で2棟の掘立柱建物跡の中間地点で検出した。これら掘立柱建物跡と同時期に有機的な関係を有しつつ存在したものと考えている。飛鳥時代の遺構の検討でもふれたが、本遺跡では飛鳥時代後半(7世紀後半)には居住建物として竪穴式住居

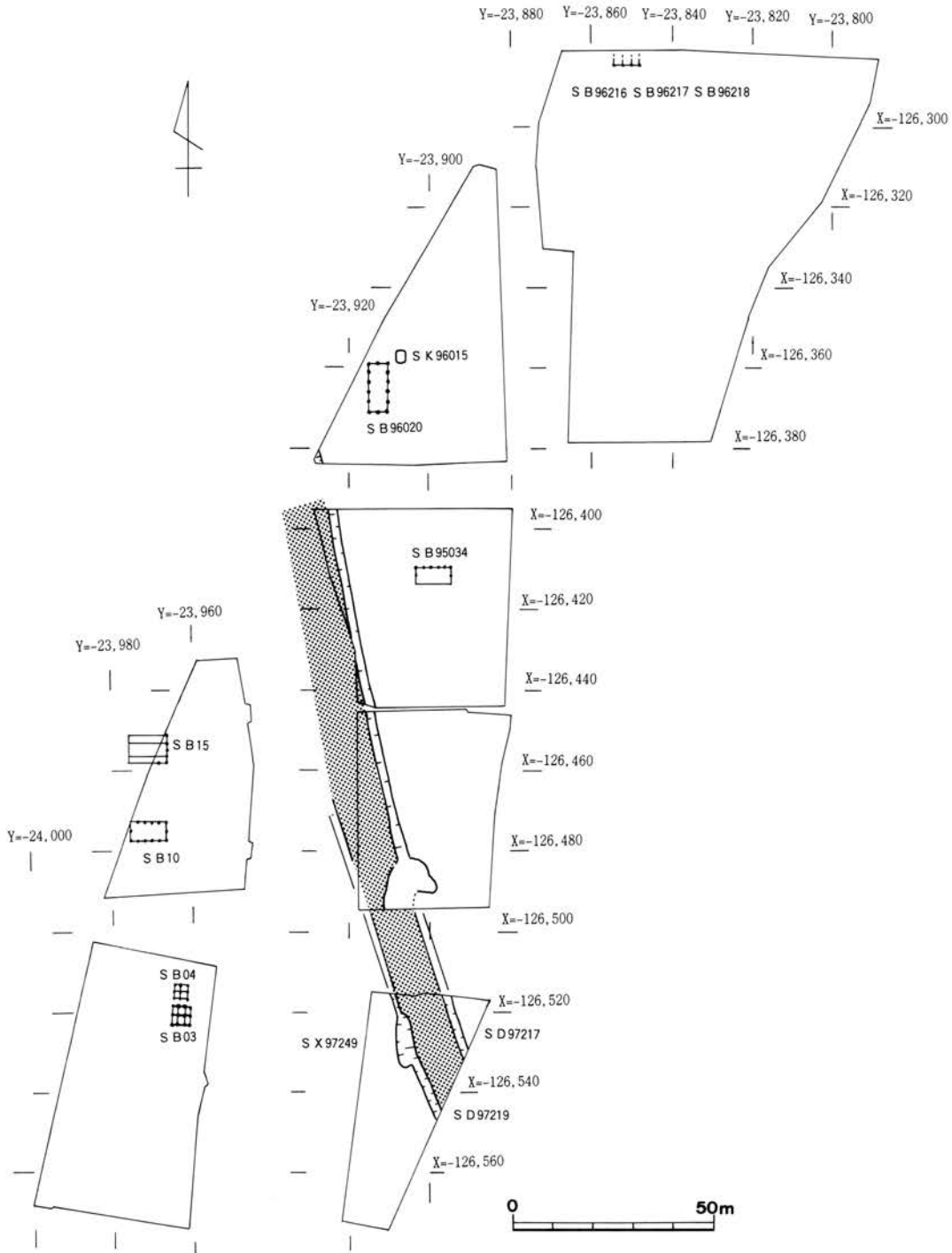
から掘立柱建物へ変化した様相が確認される。こうした場合、この竪穴式住居は、特別な意味を有した施設であった可能性が高い。住居跡の床面からは灰や炭などが多く出土しており、何らかの工房的な施設であった可能性もある。

奈良～平安Ⅱ段階(第22図) II群の掘立柱建物跡は総数9棟が確認されたが、その平面規模は大きなものが多い。B地区のS B10・15では、S B10が2間×5間の東西棟(約43m²)、S B15が2間×5間の東西棟に南北2面庇を付した建物(廂を含め約62m²に復原)に復原される(S B15



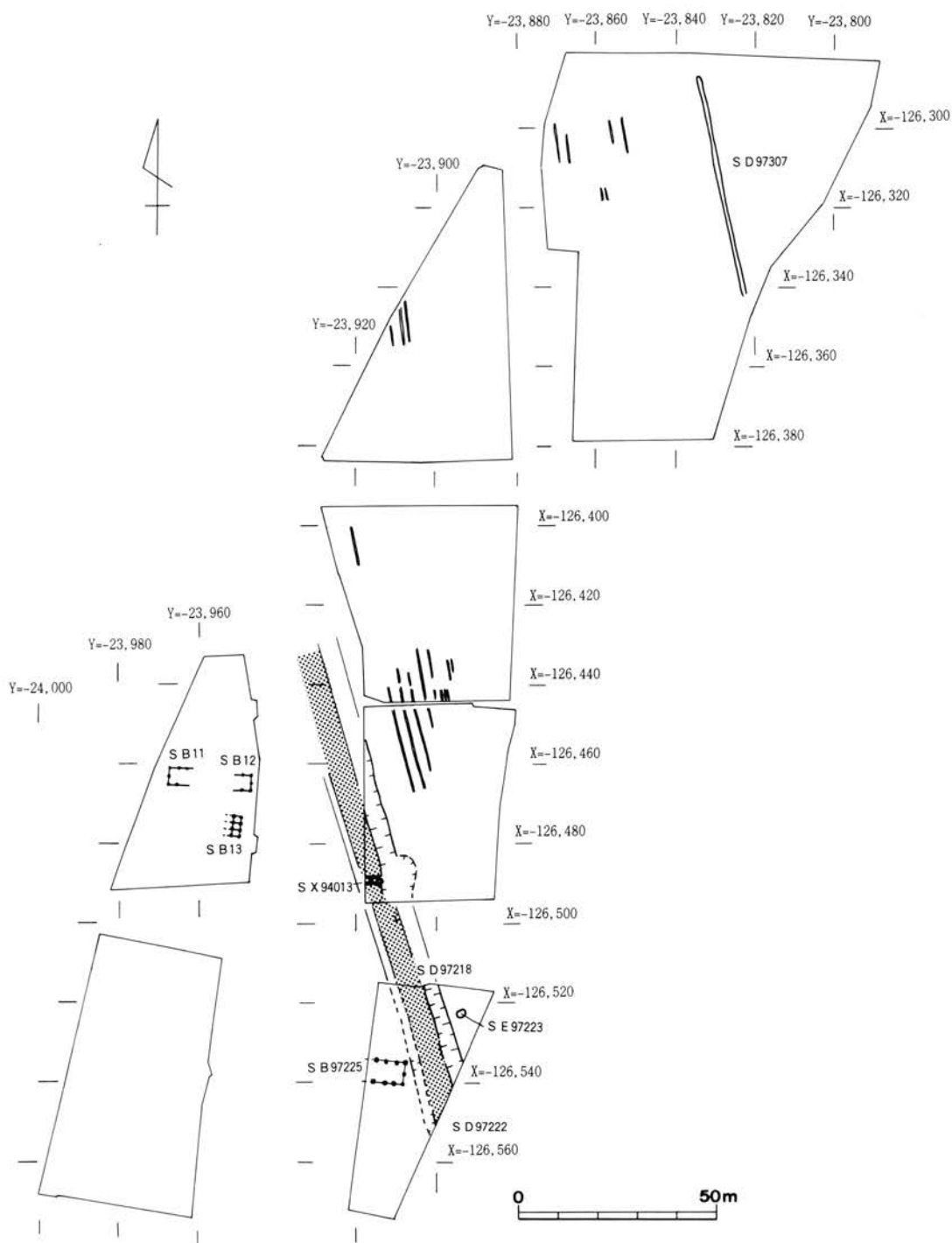
第21図 奈良～平安時代主要遺構配置図(1)

は、一部分の確認にとどまっているものの、その東辺柱筋をSB14とそろえていること、SB15の東辺の柱間(4間)が北から1.8・1.65・1.65・1.8mとなっていることなどから、これが北・南の二面に廂を付した東西棟建物に復原されるものと判断している)。そして、SB10・15の2棟の建物は、主軸をそろえた前・後殿の関係をなすものと考えられるのである。また、C地区のSB96020は、南北棟ながら60㎡近い平面規模を有し、D地区のSB95034は30㎡をこえる規模の東西棟建物である。このように、この段階の建物は、道路状遺構1をはさんで、B地区とC・D地



第22図 奈良～平安時代主要遺構配置図(2)

区の2か所に中心があり、しかもそれが単なる一般集落というより、規模の大きな建物で編成され、有力者の居宅もしくは官衙的な施設の一部であることを示唆しているようである。なお、この時期の遺構は、これら掘立柱建物跡のほかには土坑や井戸などがごくわずか確認されたにすぎない。うち、D地区北半部分で検出した3基の土坑は注目される。遺存状況は悪かったものの、約2m四方の規模を有す方形の土坑を3基検出した。床面は火を受けたごとく変色しており、埋土中からは製塩土器片が出土した。集落内で焼塩を行った施設であった可能性もある。また、E



第23図 奈良～平安時代主要遺構配置図(3)

地区南半部で確認した土坑(S K97223)は、報文中でも述べたが、近辺で複数回行われた儀式的行為に伴って使用された土器群を一定個所に廃棄したために形成されたものの可能性が考えられるものであった。土器群中には、製塩土器を含む多くの土器があり、時期的に主体をなすのは、このⅡ群の掘立柱建物跡に比定している8世紀後半頃のものであるが、これを遡るもの、やや時期の下がるものなどを含んでいた。また、出土遺物の中で、特に注目されるものに古瓦がある。古瓦片は包含層中を初め、井戸や土坑、さらには道路状遺構の埋土中からも出土している。この時期に属す軒瓦としては、2種類が認められ、いずれも平城宮跡出土品に同範品が認められ、8世紀中葉～後半の時期を示している。これらには縄タキを施した平瓦や玉縁式の丸瓦が伴出している。これを使用した建物跡は明確ではないが、本時期の掘立柱建物跡の柱掘形が他の時期のものに比べ大型化している点、これに比べ柱間が1.8m前後とあまり大きくない点は、掘立柱建物跡の薨棟などに瓦が使用されていた可能性も考えておく必要がある。一方、B地区のSB10・15の2棟の掘立柱建物跡が前殿・後殿の関係にある点は上述したが、この一画で仏具の可能性のある托形須恵器が出土している。このことは、これら建物が仏教関係の施設であり、掘立柱形式の建物ではあるが、これに瓦が使用されていた可能性も考えられる。

奈良～平安Ⅲ段階(第23図) 続くⅢ群の建物群(9世紀前半)の分布状況は、今一つ明確でない。この方向を示す建物跡は、今回の調査ではE地区で1棟を確認したにとどまり、B地区などでも数棟認められたにすぎない(N4～5°E:SB11・12、N9°E:SB13)。遺構の遺存状況が悪く、調査区の西半部(道路状遺構1の西側一帯)に散在するといった状況を確認することができるにすぎない。

(3)遺跡の様相

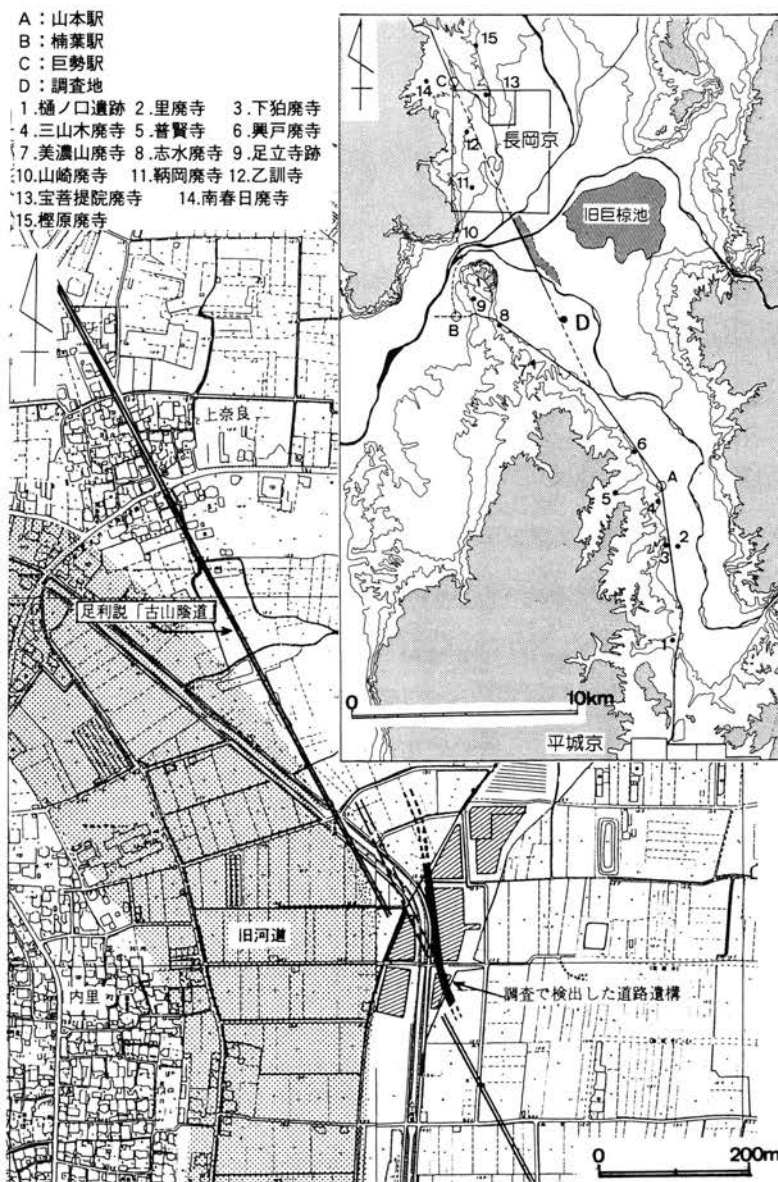
以上、当遺跡の飛鳥時代後半期～平安時代初頭の様相を略述した。その中では、以下の点が確認された。

- ・飛鳥時代の後半期(飛鳥Ⅳ:7世紀末～8世紀初頭頃)に、遺跡の様相が一変する状況が認められる。そこには、官衙的施設もしくは有力者の居宅といった色彩が強く認められる。しかも、大型建物が営まれた地区、倉庫などが設けられた地区という土地利用区分が、道路状遺構1が存在したあたりを境に設けられていたようで、このことは道路状遺構1の敷設がこの頃まで遡る可能性を高める大きな要因と判断される。

- ・奈良時代の前半期(8世紀前半～中葉)に位置付けられる遺構群では、飛鳥時代後半期に認められた官衙もしくは有力者の居宅といった色合いはやや薄れる。目立った規模の建物はあまりなく、B・E地区にわずかに認められる程度である。

- ・奈良時代後半(8世紀後半)には、再び大型建物が出現する。確認された掘立柱建物の数は9棟と少ないが、B地区に前殿・後殿の関係をなす2棟の建物が営まれるのをはじめC・D地区にも30㎡をこえる建物が営まれた。

- ・平安時代前期(9世紀後半以降)頃には、官衙もしくは有力者の居宅としての色彩は薄れる。おそらくこの頃に道路状遺構1は機能しなくなったようで、道路状遺構2としたものが道路であ



第24図 足利説「古山陰道」と道路状遺構

においては、古山陽道との併用道として、現在の木津町・精華町・京田辺市と木津川西岸を北上するとされる。そして、両道は、京田辺市の北端あたりにある岡村付近で分岐し、山陽道は八幡市の南辺の丘陵裾を西北方向に進み、男山丘陵を越えて、楠葉へと至る。山陰道は、そのまま北北西へ進み、内里八丁遺跡付近を通った後、木津川西岸から美豆付近でこれを渡り、後に長岡京が造営された乙訓地域を南南東から北北西へぬけるとされる。

これまで、こうした両道の推定ライン上において、道路遺構と考えられるものは、まったく確認されていない。その手がかりとしては、唯一、京田辺市興戸にある興戸遺跡で、両道併用道に沿った地割りが広範囲に確認され、これが7世紀末～8世紀初頭頃まで遡ることが確認されているにすぎない。まして、古山陰道のルートに関しては、古山陽道から分岐して以後、乙訓地域に至るまでの間が低湿地に相当するということから、分岐せずに楠葉までは同一ルートをたどったとする説が有力視^(注38)されていた。

ったならば、これへ造り替えられたものと判断される。建物は、道路状遺構2の西側のみに数棟営まれる程度となり、その東側一帯は耕作地へと急激に変容した可能性が高い。東側一帯では、この時期に相当する掘立柱建物跡は確認されず、素掘り溝群のなかで最も下層で確認されるN5～8°Wという方向性をもつものが散在するといった状況である。

・以上のように飛鳥時代後半期～平安時代前期の内里八丁遺跡は、道路状遺構ときわめて密接に結びついて変遷している状況が改めて確認できたものと考えている。

2. 小結 —古山陰道と内里八丁遺跡—

奈良時代、平城京を出発した古山陰道は、南山城地域に

こうした中、内里八丁遺跡で道路状遺構が確認された意味は非常に大きい。また、上記のように遺跡の変遷を検討したところ、内里八丁遺跡が、この道路状遺構と深い結びつきを有しつつ変遷したことも確認された。あたかも、7世紀末頃に敷設された幹線道路とその傍らに設けられた官衙的施設ないしは有力者の居宅といった様相であった。

しかし、すでに述べているように、今回検出した道路状遺構、なかでも道路状遺構1を古山陰道に結びつけるには、大きく二つの問題点が残されている。一つは、足利説古山陰道の当否に関する問題である。また二つ目は、今回確認した道路状遺構の位置やその方向自体が正確に足利説に合致しない点である。足利説の当否に関しては上述の通りであるが、二つ目の足利説と正確に合致しない点についてみてみると、第24図に示したように、今回検出した道路状遺構は、地図上でみて、東方へ最大で100m程ずれた場所に相当している。調査終了後、数年を経た現在も、これらに関して十分な回答を用意できていないわけではない。ここでは、現状の中でこうした問題点に関して、思うところを箇条書きに記し、今後さらなる検討を行っていく糧とすることでまとめとしたい。

まず、足利説による古山陰道のルートについては、以下の4点がある。

1) 調査地一帯から現淀川の渡航点までのルートは、奇しくも後述する奈良園が営まれた範囲と合致するように復元されることとなる。奈良園は『延喜式』に記された菜園であるが、これが営まれた範囲を検討すれば、本書の冒頭の「位置と環境」でふれたごとく、北北西—南南東に連なる自然堤防状の微高地上に相当するものと考えられ、少なくとも渡航点までは、従来から言われるように低湿地のために道路が設置できないといった地理的な環境はみあたらないように思われる。

2) 一方、淀川(木津川)の渡航についてであるが、先の奈良園は淀から船で行き来したことが記されており、舟による渡航を想定しても良いと考える。

3) 奈良時代の大和国弘福寺領の比定を、当地の条里の復原とともに検討された高橋美久二氏^(注39)の説では、ちょうど現在の久御山町生津の西側付近に「路里」という名の里が存在したこととなる。古山陰道との関係で非常に興味深い里名がある。

4) 現在までに、乙訓地域で行われた発掘調査では、古山陰道に関する遺構がまったく確認されていないことについては、足利説のルート上で数多くの調査が行われたわけではなく、今後の成果に期待することも許されるもの^(注40)と思っている。

足利説のルートと正確に一致しないという問題に関しては、以下の2点がある。

1) 遺跡地の西側には、北流していた木津川旧流路が存在し、当時、これが遺跡の北東部でその流れを大きく西方へ流れを変えていた可能性が高い。すなわち調査地付近はこの流路による流れの攻撃面に相当し、増水時などにはかなり土砂が削られるといった危険を伴った部位に相当する(一方で洪水時には多量の土砂がもたらされたこともあったようだ)。こうした要因から、川に面した危険な部位へ道路を設けることを避け(当時すでにルート上は川の流れによって削られていたかもしれない)、これを迂回するように内陸部へルートをカーブさせたために路線がゆがむ

ようなこととなったとも考えられる^(注41)。

2) 今回の調査地の北方約500mの地点で八幡市教育委員会によって実施された上奈良遺跡の発掘調査では、奈良時代後半～平安時代初頭頃の溝(今回の道路状遺構1の側溝の出土遺物とほぼ同時期)が検出されているが、この溝は、上記のように道路が大きく東へ迂回した延長上から再度、道路推定ラインへもどるような方向を示している。今回の道路状遺構の側溝と上奈良遺跡で検出された南北溝が同一の溝となる可能性はさておき、上記の迂回説の可能性を高めるきわめて大きな材料と考えている。

第5節 平安時代の内里八丁遺跡と奈良園・奈良庄

内里八丁遺跡の発掘調査では、9世紀後半以降、遺跡の様相が一変した状況が確認された。9世紀前半頃に道路状遺構1が廃絶した後は、先述の建物群が示していた官衙的色彩は薄れ、調査地の東半部一帯が急激に耕作地へと変化した。さらに、平安時代中期から同後期、そして鎌倉時代へと時代を経るにしたがい、一帯の耕作地化は一層進行した。

当地に北接する現在の八幡市上奈良の地は、『延喜式』に記載された「奈良園」の推定地である。しかも、当遺跡一帯もその範囲に含まれていた可能性が高いと考えられる。また、この「奈良園」はのちに石清水八幡宮領「奈良庄」となる。延喜式が編纂されたのが10世紀初頭、石清水八幡宮領「奈良庄」の記録が認められるのは11世紀末葉である。こうした状況は、調査で確認された耕作地の痕跡が、これら文献に見える「奈良園」もしくは「奈良庄」に係るものである可能性がきわめて高いことを示唆する。ここでは、こうした発掘調査で明かとなった耕作地の痕跡に関して、すこし検討を行っておきたい^(注42)。

1. 平安時代前期～鎌倉時代の調査成果

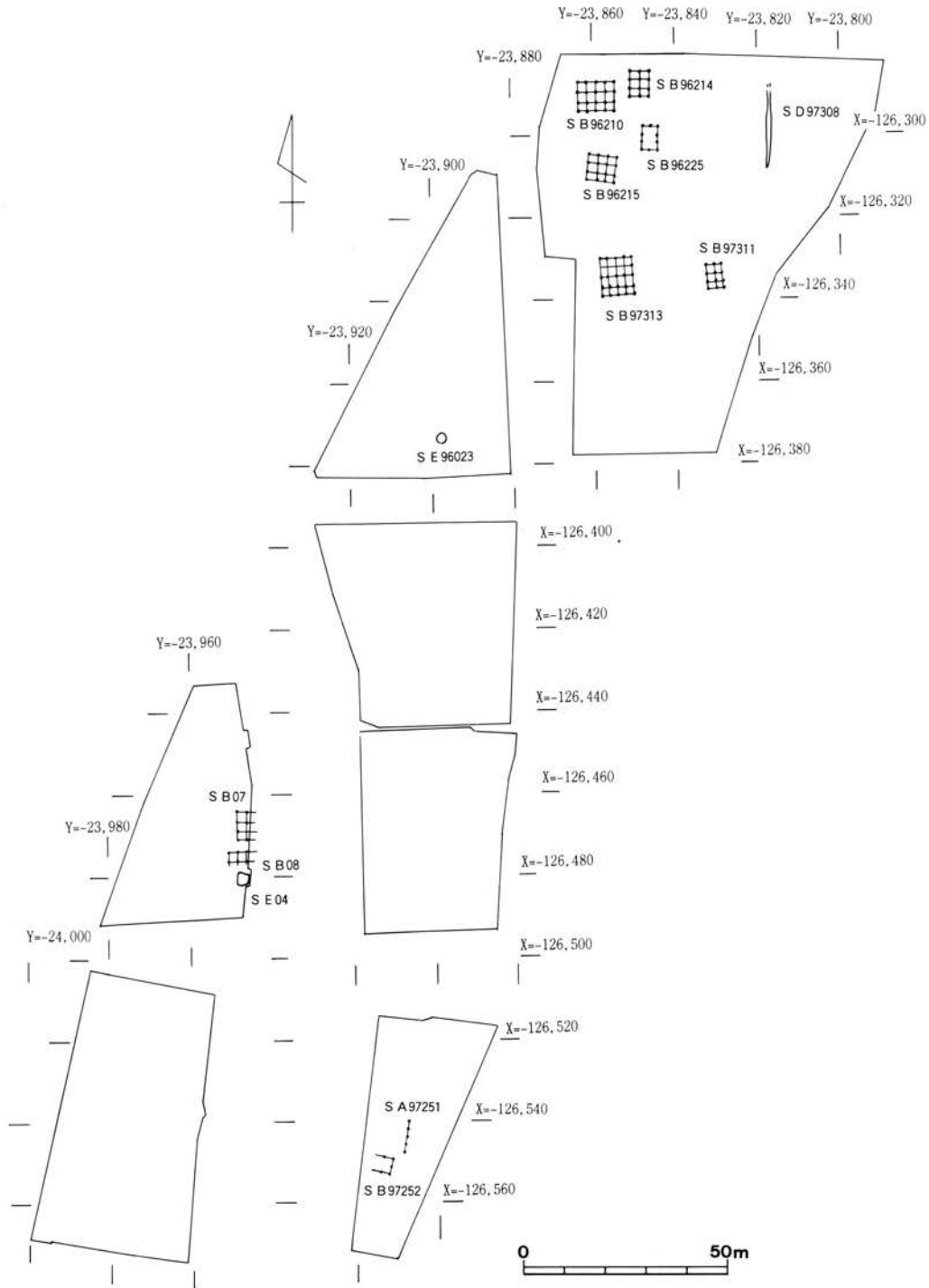
平安時代前期(9世紀前半～10世紀初頭)

先にも述べたように、道路状遺構1が廃棄され、同2が造成された時期に相当し、前項で検討した奈良～平安Ⅲ段階に相当する(第23図)。これが道路であったかについては疑問も残るが、この時期、この道路想定部分を境に西と東で大きく土地利用が異なってくることは確実である。この時期の遺構は、今回報告しているものでは、E地区第2遺構面の掘立柱建物跡1棟のほかには、C・D・F地区の素掘り溝群がある。また前回報告分では、A・B地区の掘立柱建物跡3棟がある。掘立柱建物跡の主軸は、北に向かって東に大きく振れるものを一括しており、一時期に共存したものではない。ただ、こうした建物跡は、道路状遺構2の西側に限って検出され、その東側は耕作地としての土地利用をうかがわせる素掘り溝群が認められるのみとなるのである。この素掘り溝群は、全体に遺存状況は悪いものの、道路状遺構2とほぼ同一の方向を示し、また道路状遺構2から東へおよそ110mのところ、地割りの痕跡を示すと思われる、やはり同一方向の溝(SD96307)なども確認している。このように、この段階には、道路状遺構1の廃絶にともない、

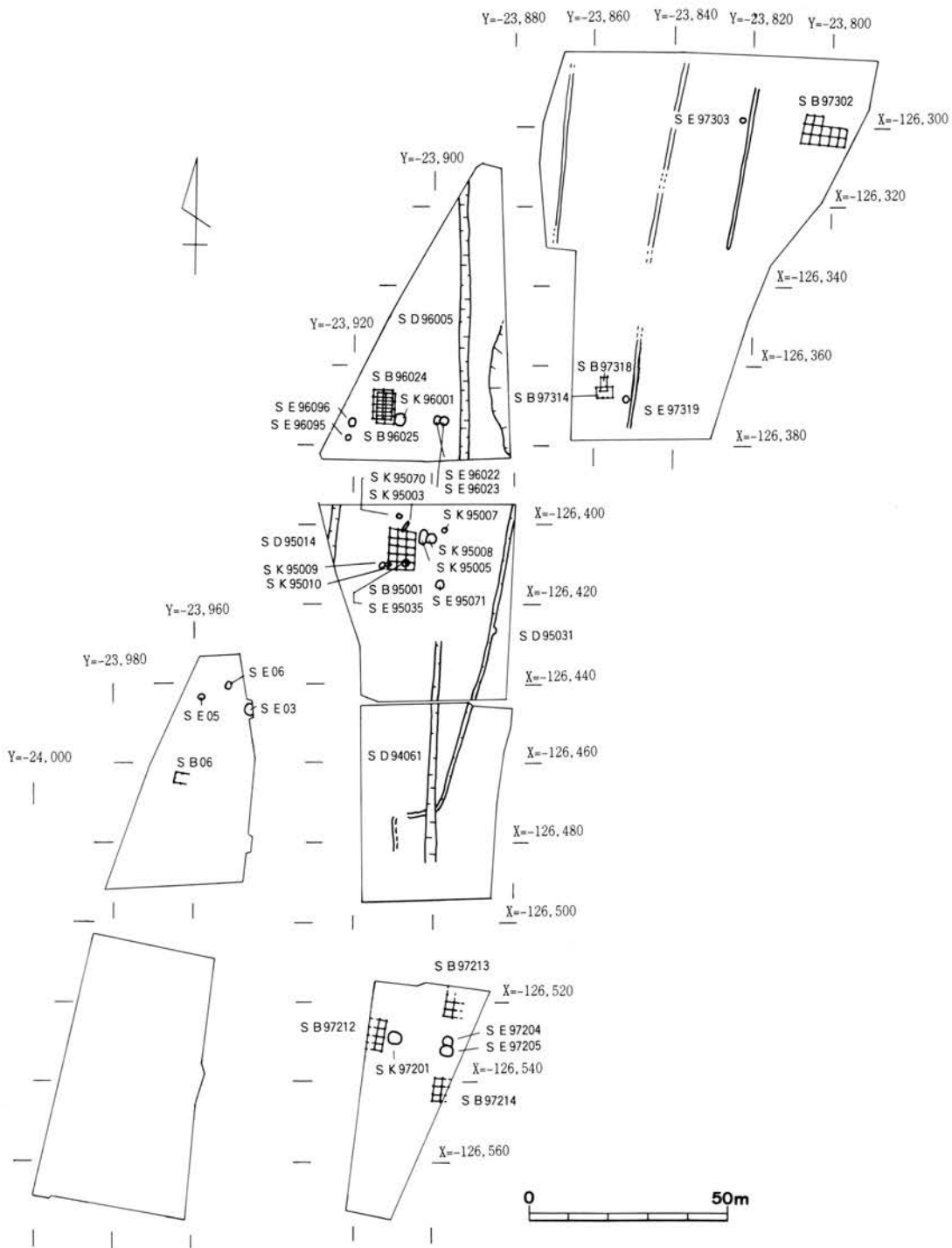
遺跡の性格に変化が訪れたことがうかがえる。

平安時代中期～後期(10世紀後半～12世紀)

この時期には、道路状遺構は姿を消し、調査範囲一帯が耕作地を中心とする土地利用へ大きく変化した時期と考えている。ただし、耕作地の中にも、掘立柱建物跡が散在する状況は確認される。出土土器などから大きく10世紀後半～11世紀前半を主体とする一群(第25図)と、11世紀末葉～12世紀後半を主体とする一群(第26図)に細分される。



第25図 平安時代中期主要遺構配置図

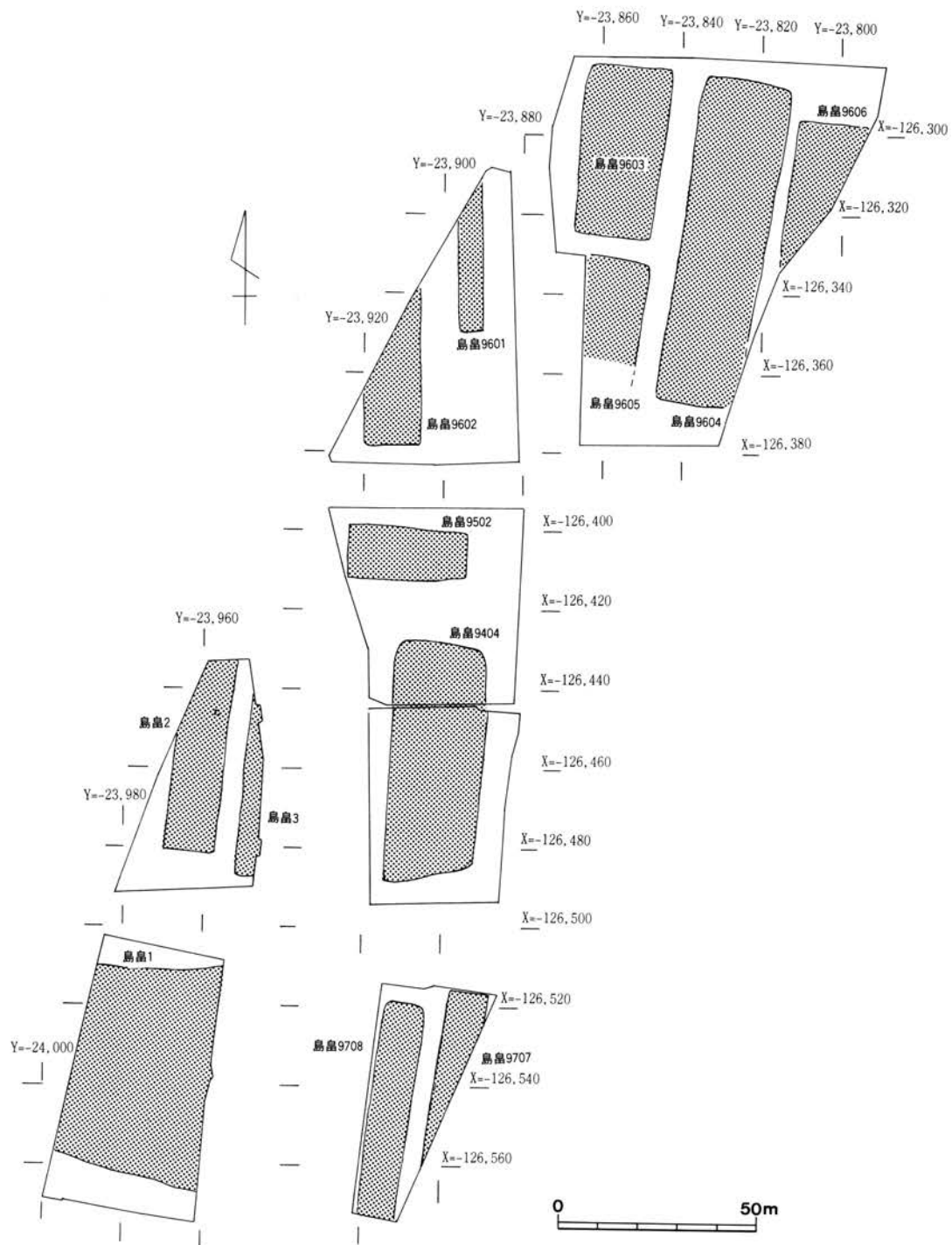


第26図 平安時代後期～鎌倉時代初頭主要遺構配置図

両時期とも、耕作地の痕跡である素掘り溝群と重複し、数棟の建物が存在するという状況であった。両者の差異としては、後者の段階に井戸が急増する点がある。

鎌倉時代以降(13世紀以降)

当遺跡の調査で、建物跡など集落跡の痕跡が確認されるのは、上記の12世紀後半頃までである。この頃を境に、掘立柱建物跡は姿を消し、以後、現代まで一帯は耕作地として利用され続けてきた。こうした当地の土地利用の中で、最も注目される変化は、島畠と呼ばれる周囲の水田より一



第27図 鎌倉時代以降主要遺構配置図

段高く造られた畑地の造成である(第27図)。この畑地が、全体に微高地であった部分を、一部溝状に削りとり、この削りとった土を長方形の畑地部分に盛り上げることによって造成されていることは、すでに報告したとおりである。

2. 「奈良園」と内里八丁遺跡

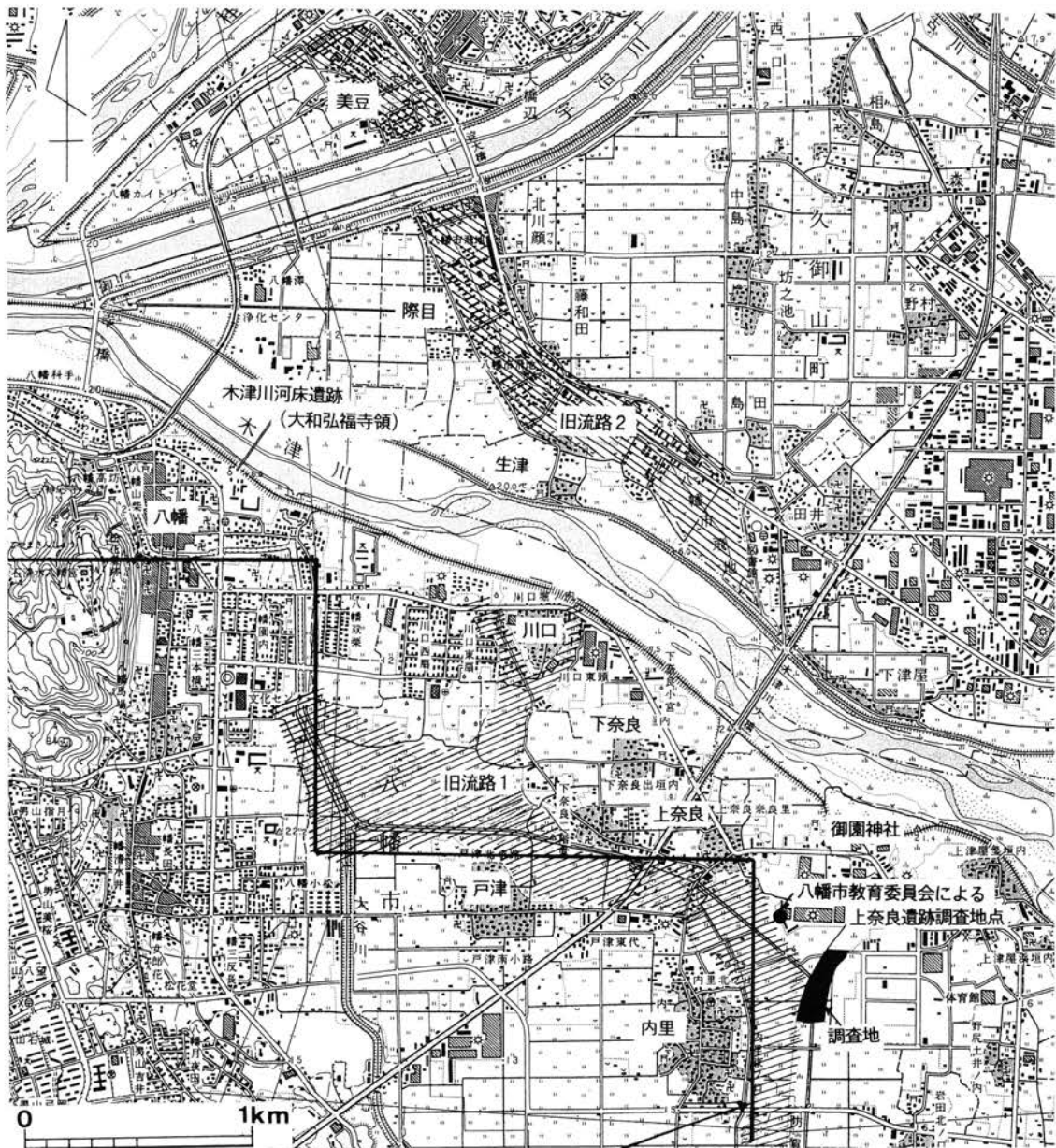
「奈良園」については、『延喜式』内膳司条にその概要が記されているほか、『類聚雑要抄』に

「瓜・茄子・羅蘿蔔」が栽培されていたことが記録されている。

また、『和名類聚抄』には「奈良莊」がもと「奈良園」であったこと、その範囲が奈良・八幡・河原・川口・生津・際目・美豆にわたることなどが示されている。

奈良園の範囲および位置に関してしてみると、先の奈良・八幡・川口・生津・美豆といった地名は現在も遺存し、比較的容易に復原することが可能である。第28図にこれら地名を記した一帯の地形図を示したが、これは木津川旧流路と思われる河道の痕跡に沿う微高地(自然堤防)に連なることが確認できる。しかも、この河道の痕跡は、古代の久世郡と綴喜郡の郡境であったと考えられており、奈良園の範囲はこのうちの久世郡内におさまることとなる^(注43)。

ところが、ここにみる「奈良園」の範囲と内里八丁遺跡の位置関係については、非常に微妙と言



古代久世郡・綴喜郡の郡境(推定)

第28図 奈良園・奈良庄位置関係図

わざるをえない。地名からみた「奈良園」の南限は奈良の地であったことが確認されるが、内里八丁遺跡はその奈良の地(なかでも南側に位置する上奈良集落)からさらに南方約800mに位置するのである。

こうしたなか、平成6年度に八幡市教育委員会によって行われた上奈良遺跡の発掘調査で非常に貴重な成果が得られている^(注44)。上奈良遺跡は、現在の上奈良集落の南側に広がっており、位置的には先にみた奈良の地の南端付近に相当していたと考えられる。ただし、この遺跡と内里八丁遺跡とは明瞭に区分できる地形的な要因はみあたらず、本来はひとつづきの遺跡と理解できる状況にある。平成6年度の調査範囲は、遺跡の南西部における小規模なものであったが、奈良時代末～平安時代初頭の掘立柱建物跡2棟(総柱建物で倉庫跡と考えられる)と北北西-南南東に延びる溝2条を主体に、これを遡る時期(飛鳥時代か)の水田跡などが確認された。また、こうした遺構に伴って、多くの土器類が出土したが、中に則天文字の「厠」や「考所」と記された墨書土器がいくつか認められた。こうした調査成果から、当地は「奈良園」にともなう管理施設などが設けられた一画ではないかと想定されるに至っている。

こうした調査成果は、内里八丁遺跡の範囲へ「奈良園」が及んでいた可能性を大いに高めるものと判断している。しかもそこでは、「奈良園」に関係するのではないかと思われる建物跡(倉庫建物であるが)が、奈良時代末～平安時代初頭のものであることも確認されており、「奈良園」の成立時期を探る上で重要な資料が提供されているといえる。

さて、内里八丁遺跡の調査成果をこれに重ね合わせると、上奈良遺跡にみた8世紀末～9世紀初頭頃には、いまだ道路状遺構1が機能していたようで、遺跡の性格が大きく変化したとはとらえがたい。遺跡が大きく様変わりするのは、道路状遺構1が機能しなくなったと思われる9世紀中葉頃である。この頃には、奈良の地に近接する遺跡(調査区)の北～東側が急激に農地化するのである。

このことは、先にみたように7世紀末～9世紀前半までの間に営まれた掘立柱建物跡群を、道路に関連した施設とみるならば、道路の変質(道路状遺構2への造り変えとともにその役割を終え、その跡地に上奈良遺跡付近を中心に成立していた「奈良園」が及んできたことを示唆するものではないだろうか。

こうした変遷をものがたる1つの要因として、内里八丁遺跡から上奈良遺跡にかけて認められる遺構の方向性に着目している。内里八丁遺跡で7世紀末～9世紀前半の遺構(掘立柱建物跡)は、その主軸が磁北～真北を意識したものである点についてはすでに前節で述べている。ところが、その中を南北にはしる道路状遺構1は北北西-南南東の方位を有していた。9世紀中葉以降、遺跡地内で確認される耕作痕跡はいずれも道路状遺構1の方向をほぼ踏襲している道路状遺構2(もしくはその東側溝と把握しているSD97217)に沿うものであった。このことは、内里八丁遺跡のなかでも、特異な性格をもった遺構は正方位を意識していたのに対し、それ以降の耕作地など(おそらくこれは周辺の地割りを表現していたと判断している)は道路にそった方位が意識されていたことが確認されるのである。しかも、先の上奈良遺跡の掘立柱建物跡は、道路状遺構に沿

った方位(内里八丁遺跡の耕作痕跡と一連の方位)を示している。すなわち、ここに正方位を意識した施設の終焉とともに、北方から異なった方位の地割りが及んできた様相が反映されていると考えることもできるのである。

3. 「奈良荘」と内里八丁遺跡

「奈良園」は、その後、「奈良荘」へと変化した。「奈良荘」については、延久4(1072)年9月の太政官牒から石清水八幡宮領であったこと、また和名類聚抄に「奈良荘」がもと「奈良園」であったこと、そこに示されている範囲から両者がほぼ同一の範囲を踏襲しているらしいことが確認されるが、いつ、どのような契機で前者から後者へ変容したのかは全く不明である。

内里八丁遺跡の調査成果では、10世紀前半頃、13～14世紀頃の2回、当地に土地利用の面で大きな画期があったらしいことが確認された。一つ(前者)は、道路状遺構2の廃絶とこれに沿った地割りの消滅であり、もう一つ(後者)は、島島の造営開始である。

第1の画期を具体的にみると、出土遺物からは10世紀前半のうちに道路状遺構2はほぼ機能しなくなっていたことが確認されるが、周辺の遺構(掘立柱建物跡や耕作痕跡)の状況から明確に画期が認められるのは10世紀後半頃とみられる。広範囲に広がる農地の中に、3間×3～4間程度の主屋(平面規模40～50㎡)に2間×3間程度(平面規模25～30㎡)の付属建物(倉庫か)がセットをなす集落が散在するとともに、その周辺に耕作地が広がるといった状況へ変化する。これらの示す方向性は、ほぼ正方位を意識したもので、かつ当地にいまも認められる条里地割り(正確には条里的地割り)に一致する道路状遺構2の廃棄とともにこれに沿った地割りが消滅したようである。こうした状況は基本的に13世紀初頭頃まではわからなかったようで、遺構としては12世紀後半頃までの掘立柱建物跡が確認されるが、やはり同様の集落形態を踏襲している。

平安遺文に「奈良荘」が登場するのは、まさにこの間(11世紀後半)のことである。当地が奈良園そして奈良荘の範囲に含まれたと仮定すれば、先にみた2度の画期のうち、第1の画期の頃、すなわち10世紀中葉～後半頃には「奈良園」から「奈良荘」へ変容した可能性が高いこととなる。そして、第2の画期は、「奈良荘」として進められた当地域独自の農地としての土地活用が一層進行した状況を示すものととらえられる。この段階には、もはや宅地としての利用は遺跡地内には認められなくなり、一帯はすべて農地となった。こうした中、より多くの水田と安定的な耕作地の確保を目的に進められたものと理解している。すなわち、微高地上に位置するため水係りの悪かった当地においては、それまで畑作が主体であったと思われるが、高い部分を削り取り、水を引きやすい低い部位を形成することで水田域の拡大を可能とし、一方で当地が木津川に面し洪水の危険性を常にはらんでいたという土地条件を克服していく過程で、高い部分「島島」を残すという作業が進められたものと考えられる。もとより、「島島」の造営は、非常に多くの人手を要する大工事であったと思われる。荘園領主としての石清水八幡宮の主導がなければ実現しなかったであろう。なお、「島島」には、その主軸を北に向かってやや東へ振るもの、ほぼ正南北を向くものなどが複雑に存在する。このことは「島島」の造営が短期間で広範囲に及んだのではなく、

時期差を含みながら徐々に進められたことを物語っていると理解される。また、10世紀段階に一旦形成された正方位を意識した地割りが、微妙に東偏するなどの変化もその後に行われたことも考えられる。

4. 小 結

現状の考古学的成果からは、「奈良園」の成立が奈良時代末を大きく遡る可能性は低いと言わざるをえないが、それは極一部でのことであり、今後の調査研究によっては、これを大きく遡る可能性も考えておく必要もあろう。しかし少なくとも、今回の調査地一帯は、遺跡の性格が変容した9世紀後半頃に、この「奈良園」の一面に取り込まれた可能性が非常に高い。

ちなみに道路状遺構2とした道路の東側溝と判断しているSD97217の規模が非常に大きい点は、これが単に道路側溝としてではなく、この段階に耕作地化した遺跡地の東側一帯へ用水を引く目的も兼ねていたことによるのではないかと考えている。そして、道路状遺構の終焉とともに、これらに沿った地割りが廃棄されたようである。10世紀段階の遺構(建物跡や溝)は、全て正方位を意識したものへと、大きく様変わりしていた。

その後、「奈良荘」へと受け継がれた当初は、「奈良園」と大きく状況は変化しなかったようである。すなわち、畑地(菜園)として土地利用されていたものと考えられる。それが、おそらく13世紀以降になると、一帯に水田としての開発が訪れる。微高地上に位置するため、畑地としての利用が主であった当地において、多くの場所を削り取り、その土砂を一定部分に積み上げることにより、「島畠」と呼ばれる一段高い畑地と、その周囲に低くなった水田部分が形成されたのである。この変遷の過程では微妙に東偏する(N 8° E)島畠が幾つか認められ、何等かの要因で地割りが変化した可能性が考えられる。そしてこの情景は、調査前まで当地の一般的な風景であった。

第6章 おわりに

以上、第二京阪自動車道路並びに京都南道路の建設に先立ち、京都府八幡市において当調査研究センターが実施した内里八丁遺跡の調査成果です。

内里八丁遺跡の発掘調査は、先にも述べたように昭和63年度の試掘調査から着手し、平成元年度からの本格調査、そして平成10年度の調査終了と、足掛け11年というきわめて長期にわたるものとなりました。この間、本文中でもふれているように、洪水に埋まった弥生時代後期終末～古墳時代初頭の水田跡の発見、奈良時代の幹線道路であった古山陰道の痕跡ではないかと思われる道路状遺構の確認など、全国的にも注目される発見がありました。なかでも、水田跡に関しては、この調査成果を受けて「弥生時代の水田跡」と題して開催した当調査研究センターの平成9年度講演会等でも大きな反響を呼ぶこととなりました。

ここに無事、現地調査を終了するとともに、本報告書の刊行にいたることができました。末筆になりましたが、ご理解とご協力を賜りつつ現地調査の進展を見守っていただいた国土交通省並びに日本道路公団、そして地元八幡市内里・上津屋の方々、また調査計画やその遂行等に関して調整を願うとともに、調査の運営等で御協力いただいた京都府教育委員会・八幡市教育委員会・京都文化博物館、さらに猛暑・厳寒のなか発掘調査に参加・協力いただいた多くの方々には、厚く御礼申し上げます。

調査参加者

東 政江・石津孝朗・石橋紘二・市原信幸・伊藤こず江・上田真一郎・有働一哉・浦島華代・大杉麻紀・大林祐司・小川正志・奥平廣子・尾田 孝・梶本祥史・兼田詩織・川嶋聡子・北村伊佐子・木下 亮・木本陽子・小荒尚幸・小島ふゆ子・小谷哲也・榊原貴子・坂本 薫・菅谷友一・高島明日香・高橋あかね・谷本和歌子・打矢泰之・辻井和子・坪内達雄・栃木道代・永沢拓志・長島広美・永田優子・永濱寛子・中前幸子・中村美也・灘井貴博・西川悦子・西村香代子・西脇夏海・長谷川洋・坂東鉄弥・平井真由美・広瀬純子・福田玲子・藤井矢壽子・細山田章子・堀ノ内淳・本多伯舟・前田 稔・前田暁宏・前野博史・真弓拓也・丸谷はま子・宮本美紀・村山和幸・森田千代子・八尾嘉男・山内基弘・山崎美智子・山端紀明・山道裕美子・山本健一・横山明生・吉田 幸・吉永直子・与十田節子・与十田麗子・米本雅一・渡辺 努

- 注1 竹原一彦ほか「内里八丁遺跡」I(『京都府遺跡調査報告書』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注2 植山 茂ほか「内里八丁遺跡 第二京阪自動車道路建設に伴う京都府八幡市所在遺跡の調査」(『京都文化博物館調査研究報告』第13集 京都府京都文化博物館) 1998
- 注3 第二京阪自動車道路建設に伴い当調査研究センターが実施した内里八丁遺跡に係る平成6～10年度の調査成果は、以下の概報で報告している。
「2.第二京阪自動車道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
「4.第二京阪自動車道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
「3.第二京阪自動車道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第78冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
「3.第二京阪自動車道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第84冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
「2.第二京阪自動車道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注4 近年、木津町上津遺跡や精華町椋ノ木遺跡・八幡市木津川河床遺跡などでは、現地表面下に埋設している木津川縁辺の微高地(自然堤防)上で古代～中世の集落跡が明瞭に検出される反面、微高地から少しでも離れると、かなり厚く砂層が堆積している状況が認められる。
- 注5 岩田集落以南の部分でも木津川旧流路は、現流路とは異なり蛇行気味に北流していたようである。なお、この付近一帯の木津川旧流路および地理的環境については、以下の文献を参考とした。中山修一「木津川流路の変遷」(『家政短期大学紀要』12) 1973、中塚 良「木津川下流域の表層地質と遺跡立地—八幡市木津川河床遺跡・新田遺跡を例に—」(『京都考古』33 京都考古刊行会) 1984
- 注6 鳥居治夫『山城国久世郡・綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察』 1986
高橋美久二「第5章—3 正道官衙遺跡と条里」(『正道官衙遺跡発掘調査報告書』城陽市埋蔵文化財調査報告第24冊 城陽市教育委員会) 1993
- 注7 注3文献に同じ。
- 注8 「I. 幸水遺跡(第1・第2次)発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第25集 八幡市教育委員会) 1998
- 注9 河野一隆ほか「4. 一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西の口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注10 『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会 1990
- 注11 久保田健士ほか「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注12 注2文献および八幡市教育委員会八十島豊成氏の御教示による。
- 注13 「志水廃寺発掘調査報告」(『八幡市文化財調査報告』2 八幡市教育委員会) 1978
「西山廃寺(足立寺)発掘調査概報」 八幡市教育委員会 1971
西田直二郎・赤松俊秀「八幡町志水瓦窯址」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第17冊 京都府) 1937
「I. 志水瓦窯跡発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第23集 八幡市教育委員会)

1997

「I. 志水瓦窯跡第2次発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 八幡市教育委員会) 1998

「I. 志水瓦窯跡第3次発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第25集 八幡市教育委員会) 1999

「美濃山廃寺跡発掘調査報告」(『八幡市文化財調査報告』1 八幡市教育委員会) 1977

「I. 美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集 八幡市教育委員会) 2000

『平野山瓦窯跡発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1985

『楠葉平野山窯跡(第2次)発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1992

注14 足利健亮『日本古代地理研究』 大明堂 1985

注15 奥戸津遺跡・今里遺跡「ほ場整備事業地内遺跡第3次発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第19集 八幡市教育委員会) 1996

「上奈良遺跡発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第16集 八幡市教育委員会) 1994

伊賀高弘ほか「3. 京都南道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

女郎花遺跡については調査を担当された八幡市教育委員会八十島豊成氏の御教示による。

注16 『延喜式』内膳司条に「奈良園川船一艘。(長三丈)在與等津。右漕奈良。奈癸等園供御雜菜」との記載がある。また、『類聚雜要抄』には、「奈良園 瓜・茄子・蘿蔔」と栽培作物に関する記載がある。

注17 延久4(1072)年9月の太政官牒に奈良庄に関する記載がある。また、『和名類聚抄』には「奈良庄 その広さ六町八段三畝二〇歩とし、奈良の御園として、瓜・茄・蘿蔔を進ず。上奈良・下奈良・八幡・河原・川口・生津・際目・美豆の七邑にわたる。」との記載がある。

注18 奈良(那羅)・内里(内)に関しては、以下の文献資料がある。

『日本書紀』欽明26(565)年5月条 「高麗人頭霧喇耶陞等投化於筑紫、置山背國。今畝原・奈羅(八幡市奈良)・山村高麗人之先祖也。」

『日本書紀』雄略17(494)年3月条 「十七年春三月丁丑朔戊寅、詔土師連等、使進應盛朝夕御膳清器者。於是、土師連祖吾筍、仍進撰津國、來狹々村、山背國內村、俯見村、伊勢國藤形村及丹波・但馬・因幡私民部。名曰贊土師部。」

注19 注2文献に同じ。

注20 本堅穴式住居跡は、鳥島造成によって大きく削平を受けた部位に存在しており、調査着手直後の重機掘削段階でその存在が確認されるとともに、遺物の多くがこの際に出土したため、出土位置等を記録し取上げを行った。このため、最終的に住居床面付近での出土状況を詳しく検討できなかった。

注21 概報(注3文献 概報78冊)で、NR96222下層としたのは、土層の検討の結果、実際はこのNR96224上層から出土していたことが判明し、ここに訂正する。

注22 この小孔に関しては、A・B両地区の調査以降、稲株痕として報告しているものと検出状況はほぼ同一であったことから、ここでは稲株痕として報告している。

注23 先に報告した注1文献による。

注24 平成7年度調査の概要報告(注3文献 概報64冊)における本時期の遺構の把握について、若干の事実誤認が認められる。以下の記述でこれを訂正しているが、重要な点についてはそれぞれ注記する

- こととする。なお、D地区南半部の遺構としてSD87が報告されているが、その後の検討の結果、これを明確な遺構として把握することが困難な状況となったため、ここでは除外している。
- 注25 平成7年度調査の概要報告(注3文献 概報64冊)では、SD85(本報告ではSD97217)は平安時代の遺構として、またSD86(本報告ではSD97218)は奈良時代の遺構として報告しているが、出土遺物の検討の結果、両者は逆で、前者が奈良時代、後者が平安時代の遺構であることが判明した。
- 注26 両溝を道路側溝と考え、北方へのばした場合、D地区南西隅付近でSD97219の延長部が検出されるはずであったが、この部位は調査過程で崩落し、最終的に遺構の検出作業を放棄せざるを得なかった。これは、後述するSD97222の場合も同様である。
- 注27 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」(『中世土器の基礎研究Ⅸ 中世前期の流通—瀬戸内・淀川水系を中心に—』 日本中世土器研究会) 1993
- 注28 注1文献で報告している内容を含めて検討する。
- 注29 これが、時期的に一定の幅を有しているものか、同時期に混在するのか明らかではない。ただし、例えば京田辺市大切遺跡などでも、これにきわめて類似した様相が確認されている。
- 注30 おおむね、Ⅰ期はいわゆる庄内式併行期の古段階、Ⅱ期は同中段階、Ⅲ期は同新段階～布留式併行期古相、Ⅳ期は布留式併行期新相という段階的な把握をしているが、流路資料のため資料に混入が予想される反面、注29にも記したように本来単体で段階的な把握が行われている資料が混在することが混入か同時並存かの区別が難しい面がある。ここでは、当遺跡内における遺構変遷のための段階的把握であり、より詳細な検討は今後の課題としておきたい。
- 注31 ここでは限られた資料同士での対比であり、竪穴式住居跡の時期比定には不十分な面を残す。
- 注32 注2文献による。
- 注33 注18に示したとおり。
- 注34 近藤義行「南山城の古代集落」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993
- 注35 後述する遺構の変遷にどれだけⅢとⅣの時期的な差異が反映しているか不明な面もある。というのも、近年、各地の須恵器等の検討によって、ここにⅢ～Ⅳ期とした資料が7世紀後半～8世紀初頭までの間に混在するという指摘をみるからである。特に、Ⅲ・Ⅳ期の把握については、出土土器資料のみでのⅢ～Ⅳ期の位置付けはできるだけ避け、遺構の切り合い関係のある程度重視し、段階的把握を行った。なお、隼上り編年に関しては、菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の移動」『史林』第69巻第3号 1986による。
- 注36 注14文献におなじ。
- 注37 森下 衛「京都府八幡市内里八丁遺跡の道路状遺構」(『古代交通研究』10 古代交通研究会) 1998、同「八幡市内里八丁遺跡の道路状遺構」(『京都府埋蔵文化財情報』第73号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注38 足利説古山陰道復原ルートに否定的な見解を出されているものに、中山修一「木津川流路の変遷」(『家政短期大学紀要』12) 1973、小林 清「長岡京造営の基準点」(『長岡京の新研究』 比叡書房) 1985、岩松 保「第5章 総括」(『京都府遺跡調査報告書』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998、などがある。ただし、岩松 保氏の論考は古代幹線道路というものについての認識に誤解がある。
- 注39 高橋美久二「第5章-3 正道官衙遺跡と条里」(『正道官衙遺跡』城陽市埋蔵文化財調査報告書第24冊 城陽市教育委員会) 1993。なお、「路里」の所在地点と足利説による古山陰道復原ルートと

は一致しているわけではなく、現状で両者の関係について論述することは十分注意すべきである。これについては高橋美久二氏からも指摘を受けている。ただ、足利説の大きな根拠となっている木津川の築堤とこの堤防上に古山陰道が位置するという点については、本文中でも述べているようにあまり大きくは評価すべきではないと考えている。この部分には自然堤防が存在することから、むしろ築堤の必要はなく、自然堤防上に道路を設けることは十分に可能だったと思われるからである。このため、足利説のルートから多少実際の道路がずれることは十分にありうることとっており、足利説想定ラインより、「路里」所在地点に近いところに道路が設けられていた可能性も考えてよいのではと思っている。これは、今回の調査地の道路状遺構についても同様であり、足利氏からも、現地で、実際の道路が存在する範囲は、想定ラインからある程度の幅をもって対応すべきとのご指摘をうけている。

注40 乙訓地域においては、足利説による古山陰道の復原ルートとは一致しないものの、当地にほぼ同一方向の地割りもしくはこれに平行する道路の存在を示す道路遺構(神田古道と呼ばれる)が確認されている。将来の調査成果に期待する大きな根拠である。山本輝雄「左京第116次(7ANMKD地区)発掘調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和59年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1985、中島皆夫「左京第235次(7ANLRB-2地区)発掘調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成元年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1991

注41 足利健亮氏のご教示による。

注42 奈良園・奈良荘に関しては、注16・17に資料を示している。

注43 上奈良遺跡調査成果に関しては、注15文献中の上奈良遺跡の報告による。

注44 注6文献に同じ。

第6表 出土遺物観察表

図面 番号	出土地点	器種・器形	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
1	SH94008	壺B	21.6		口縁部ナデ	ナデ	密	黄褐色	良	口縁部外面に波状文
2	SH94008	壺B	21.0		頸部ハケメの後 ナデ 口縁部ナデ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	乳褐色	良	
3	SH94008	甕A-3	15.2	15.6	口縁部ナデ 体部タタキ	体部ハケメ	密	淡褐色	良	
4	SH94008	甕A-1	15.1		口縁部ナデ 体部タタキ	体部ハケメ	密	淡黄褐色	やや軟	
5	SH94008	高杯G	14.9		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	やや軟	
6	SH94008	小型器台B	9.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
7	SH94008	高杯脚台部	11 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	茶褐色	良	
8	SH94007	甕A-1	14.2		口縁部ハケメ 体部タタキ	口縁部ナデ ハケメ	密	黄褐色	良	
9	SH94007	甕A-1	15.1		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	
10	SH95092	甕D	15.6		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
11	SH94007	甕G	32.4		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
12	SH94007	小型壺	7.2	9.2	タタキの後ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
13	SH94007	器台B	12.2		ヘラミガキ	磨減	やや粗	乳褐色	良	
14	SH95092	壺D	12.6		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
15	SH95092	甕E	12.2		ナデ	ナデ	やや粗	暗褐色	やや軟	
16	SH95092	甕底部	3.4 (底径)		タタキ	ナデ	密	茶褐色	良	
17	SH95092	甕底部	3.6 (底径)		タタキ	ハケメ	やや粗	暗褐色	やや軟	
18	SH95092	甕G	9.2		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
19	SH95092	器台体部	—		ヘラミガキ	ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
20	SH95092	蓋	9.1		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
21	SH95092	甕A-2	17.8		タタキ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
22	SH95092	高杯G	—		ヘラミガキ	磨減	密	淡褐色	良	
23	SH96085	壺E	15.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
24	SH96085	壺体部	2.4 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	体部上半に波状文・刺突重点文
25	SH96085	壺体部	2 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
26	SH96085	甕A-1	12.8		タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
27	SH96085	甕A-3	12.8	13.9	口縁部ハケメ 体部羽状タタキ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
28	SH96085	甕A-3	7.3		タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
29	SH96085	鉢B	10.5	6.1	ヘラミガキ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
30	SH96085	高杯D	11.9		ナデ	脚部ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
31	SH96086	鉢B	13.3	7.7	タタキの後ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
32	SH96086	鉢E	11.4	8.2	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
33	SH96086	手焙り形土器	17.1		タタキ	ナデ	密	淡赤褐色	良	
34	SH96086	甕A-2	15.3		タタキ	ナデ	やや粗	茶褐色	良	
35	SH96086	甕底部	4.4 (底径)		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
36	SH96086	甕B	13.6		ナデ	ナデ	やや粗	乳褐色	やや軟	

37	SH96086	甕A-3	14.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	茶褐色	やや軟	
38	SH96083	台付鉢C	9.7	14.0	体部タタキ 脚台部ナデ	体部ナデ 脚台部ハケメ	密	淡褐色	良	
39	SH96083	甕A-1	13.0		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
40	SH96083	有孔鉢A	15.6	10.0	タタキの後ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
41	SH96078	甕底部	3.5 (底径)		羽状タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
42	SH96078	壺底部	4 (底径)		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡褐色	良	
43	SX96079	壺D	16.4		口縁部ナデ 体部上半タタキ 同下半ハケ後ナ デ	口縁部ヘラミガ キ 体部ナデ	密	黄灰色	やや軟	
44	SX96079	甕A-1	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
45	SX96079	甕A-3	19.2		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
46	SX96079	壺D	14.9		ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	口縁端部に 円形浮文
47	SX96079	壺D	16.4		ナデ	ヘラミガキ	密	淡茶褐色	良	口縁は複合 口縁状
48	SX96079	甕A-1	11.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
49	SX96079	高杯A	19.6		ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
50	SX96079	壺B	17.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
51	SX96079	甕A-1	17.8		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
52	SX96079	甕A-3	15.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ	密	淡橙褐色	良	
53	SX96079	甕A-3	17.1		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	茶褐色	良	
54	SX96079	甕A-1	17.4		ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
55	SX96079	甕A-3	18.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
56	SX96079	甕A-3	8.5		ナデ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡茶褐色	良	
57	SX96079	甕F	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	ハケメ	密	淡茶褐色	良	
58	SX96079	鉢E	14.0	7.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや粗	淡橙褐色	良	
59	SX96079	鉢E	13.4	6.3	口縁部ヘラミガ キ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
60	SX96079	鉢B	12.2	7.35	ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
61	SX96079	鉢C	28.4	20.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや粗	淡褐色	良	
62	SX96079	小型壺	3.8	5.8	ナデ	ヘラミガキ	密	暗黄褐色	良	
63	SX96079	甕底部	17.2		タタキ	ハケメ	密	黒褐色	良	
64	SX96079	甕E	17.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
65	SX96079	甕E	4.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ハケメ	密	茶褐色	良	口縁部外面 に擬凹線文
66	SX96079	甕底部	3.1		タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
67	SX96079	高杯I	18.6	11.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	やや軟	
68	SX96098	高杯A	13.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
69	SX96079	高杯A	21.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや粗	淡黄褐色	良	
70	SX96098	壺体部	1.25 (底径)		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄褐色	良	
71	SX96098	甕体部	2.1 (底径)		タタキ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	

出土遺物観察表

72	SX96079	高杯脚台部	—		ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
73	SX96079	高杯脚台部	5.6		ヘラミガキ	ハケメ	密	暗褐色	良	
74	SX96079	高杯脚台部	10.6		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
75	SX96079	脚台部	4.7 (底径)		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
76	SX96098	甕A-3	16.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ	密	淡褐色	良	
77	SX96098	甕A-3	15.8		ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
78	SX96098	台付鉢B	11.5	6.75	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
79	SX96098	脚台部	9.6 (底径)		ナデ	ハケメ	密	淡乳褐色	良	
80	SH96076	壺E	14.0		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	頸部に波状 文・刺突連 点文
81	SH96076	小型壺	10.2	7.4	ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
82	SH96076	台付鉢	8.6 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
83	SH96076	甕A-3	16.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
84	SH96076	甕A-3	17.7		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	黄褐色	良	
85	SH96076	甕A-1	16.7		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	乳褐色	良	
86	SH96076	甕A-1	15.9		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	乳褐色	良	
87	SH96076	甕A-2	17.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁ハケメ後ナ デ 体部ナデ	密	淡黄褐色	良	
88	SH96076	鉢B	14.9	7.3	ナデ	ナデ	密	乳褐色	良	
89	SH96076	甕底部	4 (底径)		タタキ	ナデ	密	乳褐色	良	
90	SH96076	甕底部	3.6 (底径)		タタキ	ハケメ	密	暗褐色	良	
91	SH95087	小型器台	9.8	9.1	口縁部ハケメ 体部ヘラミガキ	口縁部ヘラミガ キ 体部ハケメ	やや粗	暗褐色	良	
92	SH95087	小型壺	8.2	7.2	タタキ ヘラケズリ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
93	SH95025	壺E	12.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
94	SH95025	甕A-3	13.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
95	SH95025	甕E	27.8		ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
96	SH95025	甕底部	1.7 (底径)		タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
97	SH95025	甕底部	3.8 (底径)		タタキ	ハケメ	やや粗	暗褐色	良	
98	SH95025	高杯脚台部	14.4 (底径)		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
99	SH95090	壺I	10.1		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
100	SH95090	甕底部	3.8 (底径)		ナデ	ハケメ	密	淡茶褐色	良	
101	SH97301	甕B	15.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
102	SH97301	甕B	13.9		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	良	
103	SH97301	甕C	10.4	13.8	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	やや軟	
104	SH97291	壺E	13.4		ヘラミガキ	磨滅	密	淡褐色	良	
105	SH97291	甕B	13.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
106	SH97291	甕B	16.7		口縁部ハケメ	口縁部ナデ	密	暗茶褐色	やや軟	

107	SH97291	甕G	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
108	SH97301	高杯C	15.5		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
109	SH97301	高杯C	14.7		ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
110	SH97291	高杯H	21.4		ヘラミガキ	磨滅	密	淡褐色	良	
111	SH97300	甕C	16.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
112	SH97302	甕C	16.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
113	SH97263	甕C	13.9		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡黄灰色	良	
114	SH97263	甕C	15.5		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	茶褐色	良	
115	SH97269	鉢A	15.5		タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
116	SH97263	ミニチュア椀	9.3	9.3	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
117	SH97300	小型丸底壺	3.6 (底径)		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや粗	
118	SH96287	甕C	15.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	やや軟	
119	SH96287	甕E	18.8		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	褐色	良	
120	SH96287	高杯C	16.2	13.0	脚台部ケズリ	ナデ	密	淡褐色	良	
121	SH96263	高杯C	16.0	13.3	ヘラミガキ	杯部ハケメ 脚台部ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
122	SH96291	壺E	10.6		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
123	SH96291	甕C	16.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡乳褐色	良	
124	SH96291	甕C	22.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡乳褐色	良	
125	D地区	壺A	23.2		ナデ	ヘラミガキ	やや粗	褐色	良	竹管文と刻 み目文
126	C地区	壺A	22.8		口縁部ヘラミガ キ 頸部ハケメ	口縁部ヘラミガ キ 頸部ハケメ	やや粗	淡黄褐色	良	
127	E地区	壺E	13.8		ヘラミガキ	ハケメ	やや粗	淡褐色	良	頸部に刺突 文を配した 突帯
128	C地区	壺E	13.2		ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	頸部に刺突 文を配した 突帯
129	E地区	壺D	16.2		ナデ	ナデ	密	黄灰色	良	口縁端部肥 厚
130	E地区	壺D	20.4		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	口縁端部肥 厚
131	D地区	甕A-2	15.6	15.2	口縁部ハケメ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
132	F地区	壺D	13.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡黄褐色	良	口縁部複合 口縁状とな る
133	D地区	小型丸底壺	10.4	9.3	ナデ	ナデ	密	暗黄褐色	良	
134	F地区	有孔鉢A	12.2	7.7	ハケメ後ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
135	D地区	甕A-1	13.8	13.3	口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
136	D地区	甕A-2	14.6		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
137	D地区	甕A-3	14.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ後ナ デ	密	淡褐色	良	
138	C地区	甕D	17.4		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	ナデ、体部上半 に一部ヘラミガ キ	密	黄褐色	良	
139	C地区	甕A-3	14.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡茶白色	良	

出土遺物観察表

140	C地区	甕C	17.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗褐色	良	
141	D地区	甕E	13.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
142	C地区	甕E	17.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
143	D地区	甕B	13.6		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
144	C地区	甕B	13.6		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	暗茶褐色	良	
145	D地区	鉢D	17.5		タタキ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
146	D地区	台付鉢C	10.7		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	147と同一個 体
147	D地区	台付鉢C	10.7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	146と同一個 体
148	D地区	器台A	8.6		磨滅	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
149	D地区	小型器台C	9.1	9.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	
150	C地区	高杯A	23.1		磨滅	磨滅	密	淡褐色	良	
151	C地区	高杯I	15.2		磨滅	磨滅	やや粗	淡褐色	やや軟	
152	D地区	高杯G	17.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
153	SX96223	壺D	12.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄灰色	良	
154	SX96223	壺E	9.4		ヘラミガキ	口縁部ヘラミガ キ 体部ナデ	密	淡黄褐色	良	
155	SX96223	壺J	9.6	14.1	ヘラミガキ	口縁部ヘラミガ キ 体部ナデ	密	淡黄灰色	良	
156	SX96223	壺体部	1.2 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
157	SX96223	壺体部	5.5		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
158	SX96223	壺G	17.1		ハケメの後ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
159	SX96223	鉢A	10.2	5.8	ヘラミガキ	ハケメの後ナデ	密	淡黄褐色	良	
160	SX96223	小型壺	11.2	9.4	口縁部ハケメ 体部ナデ	ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
161	SX96223	小型丸底壺	7.5	7.5	ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
162	SX96223	小型壺	9.6	7.8	口縁部ナデ、体 部ハケメ後ヘラ ミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
163	SX96223	甕A-1	13.4	13.4	口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ後ナ デ	密	淡灰褐色	良	
164	SX96223	甕A-1	14.2	16.7	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
165	SX96223	甕A-1	13.4	19.7	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
166	SX96223	甕A-1	17.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	褐色	良	
167	SX96223	甕A-1	13.4	13.7	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
168	SX96223	甕A-1	15.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡黄灰色	良	
169	SX96223	甕A-2	17.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	黄茶褐色	良	
170	SX96223	甕A-1	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡灰色	良	
171	SX96223	甕A-2	12.3		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
172	SX96223	甕A-3	14.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	茶褐色	良	
173	SX96223	甕A-3	13.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	

174	SX96223	甕A-1	13.0	21.0	口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡黄褐色	良	
175	SX96223	甕A-1	12.9	14.8	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	暗褐色	やや軟	
176	SX96223	甕A-2	13.4		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗黄灰色	やや軟	
177	SX96223	甕G	14.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
178	SX96223	甕G	16.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
179	SX96223	甕A-3	16.6		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡黄茶褐色	良	
180	SX96223	甕A-1	17.2		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	黄茶褐色	良	
181	SX96223	甕体部	1.2 (底径)		タタキ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
182	SX96223	甕体部	2.3 (底径)		タタキ	ナデ	密	暗黄褐色	良	
183	SX96223	壺体部	1.0 (底径)		ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
184	SX96223	台付鉢B	11.4	5.9	ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
185	SX96223	高杯A	22.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄茶褐色	良	
186	SX96223	手焙り形土器	14.6	16.6	ヘラミガキ	ナデ	密	黄灰色	やや軟	直線文・波 状文
187	SX96099	高杯C	20.6	11.8	ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
188	SX96099	脚台部	17.1		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
189	SX96099	高杯脚台部	7.1		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡褐色	良	
190	SX96099	脚台部	10.2		ナデ	ハケメ	密	淡褐色	良	
191	SX96099	鉢A	4.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	やや軟	
192	SX96099	甕底部	4.6 (底径)		ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
193	SX96099	甕底部	4.3 (底径)		ナデ	ナデ	密	茶褐色	良	
194	SX96099	甕底部	4 (底径)		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
195	NR96224下 層	壺B	13.0		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	円形浮文
196	NR96224下 層	壺D	14.7		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
197	NR96224下 層	壺D	15.2		ナデ	ナデ	密	暗灰褐色	良	
198	NR96224下 層	壺E	10.0	12.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや粗	淡灰褐色	良	
199	NR96224下 層	壺E	9.8		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡灰褐色	良	
200	NR96224下 層	壺I	13.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
201	NR96224下 層	壺K	10.2		ハケメ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	口縁部に刻 みを入れた 棒状浮文、 体部上半に 直線文・斜 格子文
202	NR96224下 層	甕A-3	17.6	25.3	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗褐色	やや軟	
203	NR96224下 層	甕A-1	14.5		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
204	NR96224下 層	甕A-2	17.0		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	淡灰褐色	良	

出土遺物観察表

205	NR96224下層	甕A-1	17.2		口縁部ナデ 体部羽状タタキ	ナデ	やや粗	淡灰褐色	やや軟	
206	NR96224下層	甕A-1	15.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
207	NR96224下層	甕A-1	12.3		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
208	NR96224下層	甕A-1	14.5		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
209	NR96224下層	甕A-1	14.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	茶褐色	良	
210	NR96224下層	甕A-1	13.3		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡灰褐色	良	
211	NR96224下層	甕A-1	12.2	16.4	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
212	NR96224下層	甕A-3	12.7	12.9	口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡茶褐色	良	
213	NR96224下層	甕A-1	12.8		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗黄褐色	良	
214	NR96224下層	甕A-1	12.9		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
215	NR96224下層	甕A-3	11.7		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
216	NR96224下層	甕A-1	16.5	18.6	口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡橙褐色	良	
217	NR96224下層	甕A-1	13.5		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
218	NR96224下層	甕A-2	12.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗色	良	
219	NR96224下層	甕A-2	15.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
220	NR96224下層	甕A-2	17.9		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
221	NR96224下層	甕A-3	15.1	17.9	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	暗褐色	良	
222	NR96224下層	甕A-3	17.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	やや粗	淡黄灰色	良	
223	NR96224下層	甕A-3	15.9		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
224	NR96224下層	甕A-3	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
225	NR96224下層	甕A-3	12.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
226	NR96224下層	甕A-3	17.6		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
227	NR96224下層	甕A-3	16.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
228	NR96224下層	甕B	12.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
229	NR96224下層	甕A-2	11.8		口縁部ナデ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
230	NR96224下層	甕A-1	14.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
231	NR96224下層	甕A-3	14.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
232	NR96224下層	甕A-3	16.6		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡黄灰色	良	
233	NR96224下層	甕A-3	17.1		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
234	NR96224下層	甕A-3	16.5		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ	密	暗褐色	良	
235	NR96224下層	甕A-3	15.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	

236	NR96224下層	甕A-3	12.8		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
237	NR96224下層	甕D	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗黄灰色	良	
238	NR96224下層	甕D	14.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗黄灰色	良	
239	NR96224下層	甕D	15.4	19.4	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
240	NR96224下層	甕D	13.2		口縁部ナデ	口縁部ナデ	密	淡黄褐色	良	
241	NR96224下層	甕E	17.2		口縁部ナデ	口縁部ナデ	密	淡褐色	良	
242	NR96224下層	甕E	18.8		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
243	NR96224下層	甕E	13.9		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
244	NR96224下層	甕E	17.2		ナデ	口縁部ナデ	密	淡灰褐色	良	
245	NR96224下層	甕E	16.0		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
246	NR96224下層	甕E	11.6		ヘラミガキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
247	NR96224下層	鉢C	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
248	NR96224下層	鉢C	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
249	NR96224下層	甕E	12.6		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡黄灰色	良	
250	NR96224下層	甕E	17.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	褐色	良	
251	NR96224下層	甕E	17.7		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡灰色	良	
252	NR96224下層	甕E	14.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
253	NR96224下層	甕G	11.9		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗灰褐色	良	
254	NR96224下層	鉢E	11.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄灰色	良	
255	NR96224下層	鉢E	10.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡茶褐色	良	
256	NR96224下層	小型壺	10.2		ナデ	ナデ	やや粗	暗茶褐色	良	
257	NR96224下層	鉢B	9.0	5.4	ナデ	ハケメ	密	暗褐色	良	
258	NR96224下層	台付鉢C	9.2	19.0	上半タタキ 下半ナデ	ハケメ後ナデ	密	淡黄褐色	良	
259	NR96224下層	台付鉢A	9.7	10.7	ヘラミガキ 脚台部ナデ	ナデ 一部ヘラミガキ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
260	NR96224下層	台付鉢B	10.7	7.0	口縁部・脚台部 ナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ハケメ 体部ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
261	NR96224下層	台付鉢B	4.8 (底径)		ナデ	体部ハケメ 脚台部ナデ	密	淡褐色	良	
262	NR96224下層	有孔鉢A	14.8	8.7	タタキ後ハケメ	ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
263	NR96224下層	有孔鉢A	15.2	11.1	タタキ後ナデ	ハケメ後ナデ	密	淡褐色	良	
264	NR96224下層	有孔鉢A	10.2	7.3	ナデ	ハケメ後ナデ	密	淡褐色	良	
265	NR96224下層	有孔鉢A	13.0	8.1	タタキ	ナデ	やや粗	淡黄灰色	良	
266	NR96224下層	有孔鉢A	12.2	7.7	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
267	NR96224下層	高杯A	18.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	

出土遺物観察表

268	NR96224下層	高杯A	16.9		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	
269	NR96224下層	高杯A	21.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
270	NR96224下層	高杯A	18.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄茶褐色	良	
271	NR96224下層	高杯E	22.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗黄灰色	良	
272	NR96224下層	器台B	18.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
273	NR96224下層	脚台片	12.6		ナデ	ハケメ	密	淡褐色	良	
274	NR96224下層	脚台片	14.9		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡褐色	良	
275	NR96224下層	脚台片	10.2		ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
276	NR96224上層	壺D	17.2		口縁部ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ	密	淡黄灰色	良	
277	NR96224上層	壺E	12.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	
278	NR96224上層	壺D	14.0		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
279	NR96224上層	壺頸部片	—		ヘラミガキ	頸部ヘラミガキ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
280	NR96224上層	壺B	15.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡灰褐色	良	口縁端部に 円形浮文
281	NR96224上層	鉢B	12.2		口縁部ナデ 体部ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
282	NR96224上層	小型壺	5.2	10.1	ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ 体部ナデ	密	淡茶褐色	良	
283	NR96224上層	甕A-1	16.2		口縁部ハケメ後 ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
284	NR96224上層	甕A-1	14.9		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	暗褐色	良	
285	NR96224上層	甕A-3	17.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
286	NR96224上層	甕A-3	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
287	NR96224上層	甕A-2	16.1		口縁部ハケメ 体部タタキ後ハ ケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
288	NR96224上層	甕A-1	13.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
289	NR96224上層	甕A-2	13.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
290	NR96224上層	甕A-2	19.6		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
291	NR96224上層	甕A-2	16.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
292	NR96224上層	甕A-2	16.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
293	NR96224上層	甕G	15.0		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
294	NR96224上層	甕A-1	11.4	12.8	口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
295	NR96224上層	甕A-1	12.6		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
296	NR96224上層	甕A-1	12.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
297	NR96224上層	甕G	15.3		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色	やや軟	
298	NR96224上層	甕D	17.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	

299	NR96224上層	甕D	17.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
300	NR96224上層	甕D	17.6		口縁部ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡乳褐色	良	
301	NR96224上層	甕D	17.0		口縁部ナデ	口縁部ナデ	密	淡黄灰褐色	良	
302	NR96224上層	甕D	15.1		ナデ	ナデ	やや粗	暗灰褐色	やや軟	
303	NR96224上層	甕B	15.1		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗茶褐色	良	
304	NR96224上層	甕G	15.8		口縁部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
305	NR96224上層	甕E	16.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ後 ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗褐色	良	
306	NR96224上層	甕E	16.7		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
307	NR96224上層	甕E	17.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	良	
308	NR96224上層	甕E	16.3		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
309	NR96224上層	甕E	15.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	口縁部に疑 凹線文
310	NR96224上層	甕E	25.7		ナデ	ハケメ	密	暗褐色	良	
311	NR96224上層	甕E	29.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
312	NR96224上層	高杯E	—		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
313	NR96224上層	高杯G	11.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	円形透し3 方向
314	NR96224上層	台付鉢B	6.4	4.3	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
315	NR96224上層	台付鉢脚台部	8.1 (底径)		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
316	NR96224上層	鉢C	16.8		ヘラミガキ	摩滅	密	淡褐色	良	
317	NR96224上層	鉢B	13.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
318	NR96224上層	有孔鉢A	14.8		タタキ	ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
319	NR96224上層	有孔鉢B	—		ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
320	NR96224上層	有孔鉢A	2.5 (底径)		タタキ	ハケメ	密	淡褐色	良	
321	NR96224上層	有孔鉢B	—		タタキ	ハケメ	密	淡褐色	良	
322	NR96224上層	器台B	19.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	
323	NR96224上層	小型	10.5	8.65	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	円形透し3 方向
324	NR96224上層	脚台片	9.2 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	暗褐色	良	
325	NR96224上層	脚台片	12.4 (底径)		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	円形透し3 方向
326	NR96224上層	脚台片	15.2 (底径)		ハケ後ヘラミガ キ	ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
327	NR96222	壺A	17.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡橙褐色	良	口縁屈曲部 に円形浮文
328	NR96222	壺B	—		ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	口縁部に波 状紋・円形 浮文
329	NR96222	壺B	18.4		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	口縁部内外 面に波状文
330	NR96222	壺D	20.0		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	密	淡褐色	やや軟	

出土遺物観察表

331	NR96222	壺D	18.2		ハケメ後ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
332	NR96222	壺E	10.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	やや軟	
333	NR96222	壺D	15.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
334	NR96222	壺D	12.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
335	NR96222	壺D	11.8		ナデ	口縁部ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
336	NR96222	壺D	7.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
337	NR96222	小型丸底壺B	7.3	6.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
338	NR96222	小型丸底壺B	8.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
339	NR96222	小型壺	17.5		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	複合口縁を なす
340	NR96222	小型壺	7.6		ハケ後ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	口縁短く外 反
341	NR96222	甕A-1	13.7		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
342	NR96222	甕A-1	15.8		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
343	NR96222	甕A-1	15.0		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
344	NR96222	甕A-1	18.6		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
345	NR96222	甕A-2	14.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
346	NR96222	甕A-2	15.4		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
347	NR96222	甕A-2	18.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
348	NR96222	甕A-1	12.4	10.3	口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
349	NR96222	甕B	14.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
350	NR96222	甕A-3	11.8		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
351	NR96222	甕A-3	15.8		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
352	NR96222	甕B	12.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
353	NR96222	甕A-3	17.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
354	NR96222	甕A-3	15.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
355	NR96222	甕A-3	14.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
356	NR96222	甕G	14.8		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
357	NR96222	甕D	15.6		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	暗褐色	良	
358	NR96222	甕D	15.7		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
359	NR96222	甕A-3	16.7		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
360	NR96222	甕G	14.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗黄灰色	良	
361	NR96222	甕B	18.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
362	NR96222	甕B	16.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
363	NR96222	甕B	14.8		摩滅	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	茶褐色	良	
364	NR96222	甕B	15.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ後 ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	

365	NR96222	甕C	15.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ	密	淡褐色	良	
366	NR96222	甕C	17.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
367	NR96222	甕C	14.9		口縁部ナデ	口縁部ナデ	密	暗褐色	良	
367	NR96222	甕C	14.9		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
368	NR96222	甕C	17.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	暗褐色	良	
369	NR96222	甕B	12.6	12.6	口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	やや軟	
370	NR96222	甕C	11.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
371	NR96222	甕C	10.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
372	NR96222	甕A-1	29.0		ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
373	NR96222	甕A-1	35.8		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ	密	暗褐色	良	
374	NR96222	甕E	16.6		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
375	NR96222	甕E	14.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
376	NR96222	甕E	18.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
377	NR96222	甕E	25.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	良	
378	NR96222	甕C	15.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
379	NR96222	甕C	17.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	良	
380	NR96222	甕C	15.2		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
381	NR96222	甕C	16.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	黒褐色	良	
382	NR96222	甕C	15.0		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
383	NR96222	甕C	12.9	19.7	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
384	NR96222	高杯G	12.2		口縁部ナデ ヘラミガキ	口縁部ナデ ヘラミガキ	やや粗	淡褐色	やや軟	脚部に透かし孔
385	NR96222	高杯C	14.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
386	NR96222	台付鉢A	5.6		ナデ	受け部ナデ 脚部ハケメ	密	暗褐色	良	
387	NR96222	鉢A	6.8	2.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
388	NR96222 NR97537	壺A	16.8		ナデ	口縁部ヘラミガキ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
389	NR96222 NR97537	壺I	13.4		口縁部ナデ 頸部ハケメ	口縁部ナデ 頸部ハケメ	密	淡褐色	良	
390	NR96222 NR97537	壺I	16.9		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
391	NR96222 NR97537	壺I	12.4		口縁部ナデ 頸部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
392	NR96222 NR97537	壺E	10.35		ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
393	NR96222 NR97537	甕A-1	12.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
394	NR96222 NR97537	甕A-1	13.0		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
395	NR96222 NR97537	甕A-1	15.4		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
396	NR96222 NR97537	甕A-1	17.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
397	NR96222 NR97537	甕A-1	14.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	

出土遺物観察表

398	NR96222 NR97537	甕A-3	15.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
399	NR96222 NR97537	甕A-3	14.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	茶褐色	良	
400	NR96222 NR97537	甕A-3	17.4		口縁部ハケメ 体部ナデ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
401	NR96222 NR97537	甕A-3	14.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
402	NR96222 NR97537	甕A-3	11.2	12.0	口縁部ナデ 体部タタキ後ハ	ナデ	密	淡褐色	良	
403	NR96222 NR97537	甕A-2	14.0		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
404	NR96222 NR97537	甕A-3	14.4		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
405	NR96222 NR97537	甕B	15.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
406	NR96222 NR97537	甕B	16.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
407	NR96222 NR97537	甕B	15.6		口縁部ハケメ 体部タタキ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
408	NR96222 NR97537	甕C	17.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ	密	暗黄褐色	良	
409	NR96222 NR97537	甕C	14.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
410	NR96222 NR97537	甕D	13.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
411	NR96222 NR97537	甕E	11.7		摩滅	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
412	NR96222 NR97537	甕D	15.2		口縁部ナデ 体部タタキ	ナデ	密	淡灰褐色	良	
413	NR96222 NR97537	甕E	23.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	良	
414	NR96222 NR97537	甕C	14.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
415	NR96222 NR97537	甕体部	—		羽状タタキ	ナデ	密	淡褐色	良	
416	NR96222 NR97537	甕C	15.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
417	NR96222 NR97537	台付鉢A	11.6	4.65	ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
418	NR96222 NR97537	鉢C	14.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
419	NR96222 NR97537	有孔鉢A	1.4 (底径)		タタキ	ナデ	やや粗	茶褐色	良	
420	NR96222 NR97537	壺底部	5.6 (底径)		ヘラミガキ	ハケメ	密	暗褐色	良	
421	NR96222 NR97537	壺底部	2.6 (底径)		ヘラケズリ後 ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	
422	NR96222 NR97537	甕底部	3.9 (底径)		タタキ	ナデ	密	茶褐色	良	
423	NR96222 NR97537	甕底部	5 (底径)		タタキ	ナデ	密	暗茶褐色	良	
424	NR96222 NR97537	壺底部	2.4 (底径)		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
425	NR96222 NR97537	甕底部	5.1 (底径)		ナデ	ハケメ	密	暗褐色	良	
426	NR96222 NR97537	壺底部	4.8 (底径)		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡褐色	良	
427	NR96222 NR97537	高杯A	22.1		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
428	NR96222 NR97537	高杯A	19.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	
429	NR96222 NR97537	高杯C	17.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡茶褐色	良	

430	NR96222 NR97537	高杯脚台部	12.2 (底径)		脚柱部ケズリ 脚部ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	脚部に透かし孔
431	NR96222 NR97537	脚台部	10.7 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	脚部に透かし孔
432	NR96222 NR97537	脚台部	10.2 (底径)		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	良	脚部に透かし孔
433	SH94006	須恵器 無蓋 高杯A	13.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
434	SH94006	土師器 高杯A	12.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
435	SH94006	土師器 高杯 脚台部	8 (底径)		ナデ	ハケメ	密	茶褐色	良	
436	SH94006	土師器 高杯 脚台部	8.4 (底径)		ナデ	ナデ	密	茶褐色	良	
437	SH94006	土師器 甕A-C	11.4		ナデ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	茶褐色	良	
438	SH94006	土師器 甕A-E	14.2	15.8	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
439	SH94006	土師器 甕A-A	15.2	18.3	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部上半指ナデ 体部下半ヘラケズリ	やや粗	暗褐色	やや軟	
440	SH94006	土師器 甕B-A	16.9		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	密	茶褐色	良	
441	SH94006	土師器 甕B-B	20.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
442	SH94006	土師器 甕B-B	19.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	良	
443	SH94005	須恵器 杯蓋	12.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	やや粗	青灰色	良	
444	SH94005	須恵器 杯身	11.0	4.7	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
445	SH94005	須恵器 杯身	10.1		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
446	SH94005	須恵器 無頸壺	7.5		口縁部ヘラケズリ	口縁ヘラケズリ 体部ナデ	密	淡青灰色	良	口縁部に四孔 二条の沈線 櫛描き波状文
447	SH94005	土師器 甕A-D	13.4	16.5	口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	黄褐色	やや軟	
448	SH94005	土師器 甕A-B	11.6	13.6	口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	赤黄褐色	良	
449	SH94005	土師器 甕A-B	21.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 頸部ナデ 体部ハケメ	密	黄褐色	良	
450	SH94005	土師器 甕B-A	18.0		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
451	SH94005	土師器 甕B-A	20.3		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	黄褐色	良	
452	SH94005	土師器 甕B-C	21.0		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	黄褐色	良	
453	SH94005	土師器 製塩土器	3.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
454	SH94004	須恵器 杯蓋	12.5		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	灰色	良	
455	SH94004	須恵器 杯蓋	10.9		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
456	SH94004	須恵器 杯身	10.4	4.3	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	灰色	良	
457	SH94004	須恵器 杯身	9.2	4.5	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	灰色	良	
458	SH94004	須恵器 杯身	11.2	5.0	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
459	SH94004	須恵器 無蓋 高杯A	13.0	8.4	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
460	SH94004	須恵器 二ハツ	9.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	波状文

出土遺物観察表

461	SH94004	土師器	製塩土器	3.8		ナデ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	良	
462	SH94004	土師器	製塩土器	3.3		ナデ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	良	
463	SH94004	土師器	壺	10.2	8.1	ハケメ	ナデ	密	淡橙茶褐色	良	
464	SH94004	土師器	高杯A	6.3		ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
465	SH94004	土師器	高杯B	26.4		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
466	SH94004	土師器	甕A-D	12.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	ヘラケズリ ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
467	SH94004	土師器	甕A-A	15.2	18.9	口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
468	SH94004	土師器	甕A-A	15.8		ハケメ	口縁部ナデ ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	
469	SH94004	土師器	甕A-D	15.0	20.4	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ ヘラケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
470	SH94004	土師器	甕A-E	14.7	19.2	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ケズリ	やや粗	茶褐色	やや軟	
471	SH94004	土師器	甕B-A	19.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ ハケ後ナデ	密	淡黄褐色	良	
472	SH94004	土師器	甕B-B	17.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ケズリ	やや粗	淡茶褐色	良	
473	SH94004	土師器	甕B-A	19.2		ハケメ	口縁部ナデ 体部ケズリ	密	淡黄褐色	良	
474	SH94004	土師器	甕B-B	20.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部 ナデ 体部 ケズリ	密	黄褐色	良	
475	SH94004	土師器	甕B-B	19.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	やや粗	淡黄褐色	良	
476	SH94004	土師器	甕B-D	19.7		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ケズリ	密	暗褐色	良	
477	SH94004	土師器	甕B-A	19.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	体部ケズリ	密	暗褐色	良	
478	SH94004	土師器	甕B-F	15.9		口縁部ナデ 体部上半ヨコハケ 下半タテハケ	口縁部ナデ 体部上半ヨコケズリ 下半タテケズリ	密	淡褐色	良	
479	E地区	須恵器	杯蓋	12.8		ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	暗青灰色	良	
480	D地区	須恵器	杯蓋	11.5	4.1	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
481	D地区	須恵器	杯蓋	12.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
482	D地区	須恵器	杯蓋	13.0	4.8	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
483	D地区	須恵器	杯身	9.0	4.5	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
484	E地区	須恵器	杯身	9.8	3.9	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
485	D地区	須恵器	杯身	11.2	5.0	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
486	D地区	須恵器	杯身 (底部)	11.6		ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
487	E地区	土師器	高杯B	15.3		ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
488	D地区	土師器	甕A-D	12.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
489	D地区	土師器	壺	9.6	16.0	ハケメ	ナデ	密	青褐色	良	
490	D地区	須恵器	高杯B	18.4	13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	波状文
491	F地区	須恵器	高杯B	15.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	波状文
492	C地区	須恵器	甕	21.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
493	C地区	須恵器	甕	20.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
494	C地区	土師器	甕B-C	17.4		ナデ	ナデ	やや粗	暗褐色	良	

495	D地区	土師器	甕B-A	19.8			ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
496	D地区	土師器	甕B-A	20.8			ハケメ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
497	D地区	土師器	甕B-B	23.8			口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
498	SH95052	須恵器	杯身	11.8			ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
499	SH95052	須恵器	杯身	10.4	4.4		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
500	SH95052	須恵器	高杯	12.6	8.9		ロクロナデ 体部下半ヘラケ ズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
501	SH95052	土師器	甕A-C	14.0			口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
502	SH95052	土師器	甕A-A	13.0	12.5		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
503	SH95052	土師器	甕	29.2	27.9		タタキ	ナデ	密	淡黄褐色	良	底部に5孔 体部に一条 の沈線
504	SH95052	土師器	鍋A	29.8	24.7		ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
505	SH95052	土師器	甕	27.6			ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
506	SH95052	土師器	製塩土器	3.2			ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
507	SH95054	須恵器	杯蓋	12.8			ロクロナデ 天井部ヘラケズ リ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
508	SH95054	須恵器	杯蓋	11.2	3.8		ロクロナデ 天井部ヘラケズ リ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
509	SH95054	土師器	ミニチュ ア鉢	8.4	4.6		ナデ	ナデ後ハケメ	密	淡褐色	良	
510	SH95054	須恵器	有蓋高杯	12.0	8.7		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
511	SH95054	須恵器	甕	19.8			ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
512	SH95054	土師器	甕A-D	13.5			ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
513	SH95054	土師器	甕B-B	12.4			口縁部ハケメ 体部ナデ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
514	SH95054	土師器	甕A-E	14.0			口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
515	SH95054	土師器	甕B-E	21.0			口縁部ナデ、ハ ケメ	ハケメ	やや粗	淡褐色	やや軟	
516	SH95054	土師器	甕A-B	15.0			口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
517	SH95054	土師器	甕A-D	17.4			ハケメ	口縁部ナデ 頸部ハケメ 体部ナデ	密	暗桃褐色	良	
518	SH95054	土師器	高杯B	14.8			ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
519	SH97283	須恵器	杯身	11.6	4.9		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
520	SH97283	須恵器	甕	9.8	10.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
521	SH97283	土師器	ミニチュ ア椀B	6.6	4.7		ナデ	ナデ	密	淡青灰色	良	
522	SH97283	土師器	椀A	12.0	5.8		ナデ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
523	SH97283	土師器	椀B	13.0			ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
524	SH97283	土師器	甕A-D	13.0	13.5		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	黄褐色	良	
525	SH97283	土師器	甕B-C	18.8			口縁部ナデ、ハ ケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
526	SH97259	須恵器	杯蓋	13.1			ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
527	SH97259	須恵器	杯蓋	12.9			ロクロナデ 天井部ヘラケズ リ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	

出土遺物観察表

528	SH97259	須恵器	杯身	12.7		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
529	SH97259	土師器	ミニチュ ア椀	7.4	4.7	口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
530	SH97259	土師器	高杯 脚台部	9.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
531	SH97264	須恵器	杯身	11.0		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
532	SH97264	須恵器	杯身	11.4		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
533	SH97264	須恵器	脚部片	12.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
534	SH97282	須恵器	無蓋 高杯A	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
535	SH97282	土師器	高杯B	16.8		ナデ	ナデ	やや粗	暗青灰色	良	
536	SH97282	土師器	製塩土器	4.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
537	SH97298	須恵器	杯蓋	13.6		ロクロナデ 天井部ヘラケズ リ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
538	SH97298	須恵器	杯身	10.8		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
539	SH97298	須恵器	杯身	11.9		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	暗青灰色	良	
540	SH97298	土師器	壺	10.9		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	淡褐色	良	
541	SH97298	土師器	甕A-B	15.9		口縁部ナデ、ハ ケメ	ハケメ	密	茶褐色	良	
542	SH97298	土師器	甕A-D	19.0		口縁部ナデ、ハ ケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
543	SH97298	土師器	甕B-C	28.8		口縁部ナデ、ハ ケメ	ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
544	SH97272	須恵器	杯蓋	12.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
545	SH97272	土師器	甕A-E	14.0		口縁部ナデ、ハ ケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
546	SH97272	土師器	高杯A	20.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
547	SH97272	土師器	異形 土師器	14.2 (底径)		ナデ	ハケメ	密	淡褐色	良	
548	SH97270	須恵器	無蓋 高杯B	15.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	波状文
549	SH97270	土師器	高杯B	14.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
550	SH97270	土師器	甕A-A	18.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	茶褐色	良	
551	SH97270	土師器	高杯B	17.2		ナデ	口縁部ナデ 杯部ハケメ	密	茶褐色	良	
552	SH97286	土師器	壺	10.4		口縁部ミガキ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
553	SH95051	須恵器	杯蓋	12.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
554	SH95051	須恵器	杯蓋	12.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
555	SH95051	須恵器	高杯	13.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
556	SH95051	土師器	椀A	11.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
557	SH95051	土師器	椀B	13.7		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
558	SH95051	土師器	高杯B	13.2		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
559	SH95051	土師器	壺	12.2		口縁部ミガキ 体部ハケメ	口縁部ハケ後ナ デ	密	褐色	良	
560	SH95051	土師器	甕A-B	12.8	13.8	ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
561	SH95051	土師器	甕A-E	14.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	やや粗	淡褐色	良	
562	SH95051	土師器	甕A-A	14.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
563	SH95051	土師器	甕A-B	13.6		ナデ	口縁部ナデ 体部ケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
564	SH95051	土師器	甕B-E	9.5		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ケズリ	やや粗	淡褐色	良	

565	SH95051	土師器	甕B-A	21.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ケズリ	やや粗	淡褐色	やや軟	
566	SH95048	須恵器	杯蓋	12.6		ロクロナデ 天井部ケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
567	SH95048	土師器	壺	13.0		ヘラミガキ	ナデ	密	暗褐色	やや軟	
568	SH95048	土師器	甕B-B	25.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ケズリ	密	淡褐色	やや軟	
569	SH95048	土師器	甕B-E	20.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	赤茶褐色	良	
570	SH95048	須恵器	甕	17.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
571	SD97305周 辺	須恵器	杯身	11.4	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
572	SD97305周 辺	須恵器	甕	16.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	波状文
573	SD97305	須恵器	高杯B	14.8	14.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	脚部透かし
574	SD97305	土師器	甕B-A	19.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
575	SD97305周 辺	土師器	甕A-C	14.4		ナデ	ナデ	密	黄褐色	良	
576	SD97305周 辺	土師器	脚台部	14.0		ナデ	ナデ	密	橙褐色	やや堅	
577	SD97305周 辺	土師器	製塩土器	5.6		タタキ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
578	SD97305周 辺	土師器	製塩土器	4.2		タタキ	ナデ	密	橙褐色	良	
579	SD97305周 辺	土師器	製塩土器	4.0		タタキ	ナデ	密	黒灰色	良	
580	SH97295	須恵器	杯身	10.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
581	SH97295	土師器	壺	15.2		ナデ タタキ	口縁部ナデ 体部ユビオサエ	密	橙褐色	良	
582	SH97280	須恵器	杯蓋	12.4	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
583	SH97280	須恵器	椀	6.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
584	SH97280	土師器	甕A-D	16.4		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
585	SH97280	土師器	甕	22.4		ハケメ	ハケメ	密	褐色	良	
586	SH97287	須恵器	無蓋 高杯A	13.1	10.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
587	SH97287	土師器	甕A-E	11.4		ナデ	ナデ	密	黄褐色	良	
588	SH95059	須恵器	高杯A	13.6		ナデ	受け部ハケメ 脚部ナデ	密	青灰色	良	
589	SH95059	土師器	製塩土器	3.8		ナデ	ナデ	やや密	淡黄褐色	良	
590	SH95059	土師器	製塩土器	3.6		ナデ	ナデ	密	灰褐色	良	
591	SH95059	土師器	甕A-A	15.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
592	SH95059	土師器	甕B-B	17.4		体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
593	SH97260	須恵器	杯蓋	13.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	黄灰色	良	
594	SH97260	土師器	高杯B	12.0		ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
595	SH97278	須恵器	杯蓋C	12.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
596	SH97278	須恵器	杯蓋C	11.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
597	SH97278	須恵器	杯身C	10.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
598	SH97278	須恵器	杯身C	11.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
599	SH97278	須恵器	甕C	17.2		タタキ カキメ	タタキ	密	灰色	良	
600	SH97278	土師器	鍋A4	24.2		ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
601	SH97278	土師器	甕A-a	12.9		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡灰褐色	良	
602	SH97278	土師器	甕B-D	25.8		ハケメ	ハケメ	密	淡灰色	やや軟	
603	SH97273	須恵器	杯蓋C	10.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
604	SH97273	須恵器	杯身C	10.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
605	SH97273	須恵器	杯身C	10.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
606	SH97273	土師器	甕B-D	27.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	

出土遺物観察表

607	SH97284	須恵器	杯蓋C	10.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
608	SH97284	須恵器	杯身C	9.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
609	SH97284	須恵器	杯身C	9.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
610	SH97284	土師器	甕B-A	27.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
611	SH97279	須恵器	杯身C	11.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
612	SH97279	土師器	杯身C	15.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
613	SH97279	土師器	高杯A	15.2		ナデ	ナデ	密	橙褐色	良	
614	SH97268	土師器	杯身C	9.8		ナデ	ヘラミガキ	密	橙褐色	良	放射状暗文
615	SH97268	土師器	鉢	14.6		ケズリ	ナデ	やや粗	褐色	良	
616	SH97268	土師器	杯身A	17.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	赤茶褐色	良	放射状暗文
617	SH97288	須恵器	杯身C	10.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
618	SH97266	土師器	甕A-a	12.6		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
619	SH97276	須恵器	杯蓋C	9.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
620	SH97280	須恵器	高杯	10.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
621	SH97281	土師器	皿	25.8		口縁部ナデ 体部下半ケズリ	ヘラミガキ	密	淡橙褐色	良	放射状暗文
622	SX96027	須恵器	杯蓋C	11.5	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
623	SX96027	須恵器	杯蓋C	11.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
624	SX96027	須恵器	杯身C	10.6	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
625	SK96028	須恵器	杯蓋A	9.4	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
626	SK96028	須恵器	杯身D	9.1	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
627	SK96028	土師器	杯身D	10.6	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡橙褐色		
628	SK96028	須恵器	杯蓋A	9.4	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
629	SK96028	須恵器	杯身D	9.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
630	SK96028	土師器	杯身C	10.4	3.3	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
631	SK96028	土師器	杯身D	11.9	3.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
632	SK96028	土師器	杯身A	12.1		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	橙褐色	良	放射状暗文
633	SK96028	土師器	甕B-A	22.5		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡橙褐色	良	
634	SD97247	須恵器	蓋A	9.4	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	白灰色	良	
635	SD97247	須恵器	杯身A	4.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
636	SD97246	須恵器	蓋A	15.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
637	SD97246	須恵器	杯身B	14.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
638	SD97246	土師器	杯身C	14.4	3.2	ナデ	口縁部ナデ 底部ヘラミガキ	密	橙褐色	良	放射状暗文
639	SD97246	土師器	甕A-a	16.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ナデ	密	淡橙褐色	良	
640	SD97246	土師器	鍋A4	42.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	暗茶褐色	良	
641	SE96051	須恵器	杯身A	14.4	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	やや軟	
642	SE96051	土師器	脚台片 9 (底径)			ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
643	SD97236	土師器	甕A-b	15.8	14.3	口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡黄褐色	良	
644	SD97236	須恵器	蓋B	17.7	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
645	SD97236	須恵器	蓋B	17.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
646	SD97236	須恵器	杯身A	12.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
647	SD97236	土師器	杯身C	12.2		ナデ	摩滅	密	橙褐色	良	
648	SD97236	土師器	杯身A	15.6	3.7	ナデ	摩滅	密	淡褐色	良	
649	SD97236	土師器	甕A-a	15.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
650	SX97203	須恵器	蓋B	14.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	

651	SX97203	須恵器	蓋B	14.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
652	SX97203	須恵器	蓋E	18.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
653	SX97203	須恵器	杯身A	11.8	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
654	SX97203	須恵器	杯身A	12.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
655	SX97203	須恵器	杯身A	12.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
656	SX97203	須恵器	杯身A	12.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
657	SX97203	須恵器	杯身A	13.3	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
658	SX97203	須恵器	杯身A	13.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
659	SX97203	須恵器	杯身A	15.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	やや軟	
660	SX97203	須恵器	杯身A	13.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗青灰色	良	
661	SX97203	須恵器	杯身A	14.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
662	SX97203	須恵器	杯身A	14.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	やや軟	
663	SX97203	須恵器	杯身A	15.3	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
664	SX97203	須恵器	杯身A	14.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
665	SX97203	須恵器	杯身B	11.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
666	SX97203	須恵器	杯身B	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
667	SX97203	須恵器	杯身B	7.8	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	やや軟	
668	SX97203	須恵器	杯身B	14.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
669	SX97203	須恵器	杯身B	16.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
670	SX97203	須恵器	皿A	15.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
671	SX97203	須恵器	椀A	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
672	SX97203	須恵器	椀A	17.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
673	SX97203	須恵器	壺C	11.6	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
674	SX97203	須恵器	壺C	8.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗青灰色	良	
675	SX97203	土師器	杯身C	10.3		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
676	SX97203	土師器	杯身C	11.2		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
677	SX97203	土師器	杯身C	13.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
678	SX97203	土師器	杯身A	14.2		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
679	SX97203	土師器	杯身A	14.4		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
680	SX97203	土師器	杯身A	12.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
681	SX97203	土師器	杯身A	6.9		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
682	SX97203	土師器	杯身A	14.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
683	SX97203	土師器	杯身A	16.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
684	SX97203	土師器	杯身A	17.2		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
685	SX97203	土師器	杯身A	16.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
686	SX97203	土師器	杯身A	18.7		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
687	SX97203	土師器	皿A	17.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
688	SX97203	土師器	皿A	19.8		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	底部放射状暗文
689	SX97203	土師器	皿A	22.2		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
690	SX97203	土師器	杯身A	17.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	底部螺旋状暗文
691	SX97203	土師器	杯身A	19.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
692	SX97203	土師器	杯身A	19.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
693	SX97203	土師器	杯身A	20.5		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
694	SX97203	土師器	杯身A	17.4		口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	ナデ	密	淡褐色	良	
695	SX97203	土師器	高坏A	28.1		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	
696	SX97203	土師器	杯身C	18.8	4.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	底部外面に 墨書「ホ・カ」
697	SX97203	土師器	甕A-c	14.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	

出土遺物観察表

698	SX97203	土師器	甕A-c	14.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
699	SX97203	土師器	甕A-d	14.4		口縁部ナデ 頸部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
700	SX97203	土師器	甕A-e	14.1		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
701	SX97203	土師器	甕B-E	21.7		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡橙褐色	良	
702	SX97203	土師器	甕B-D	23.2		ナデ	ハケメ	密	淡褐色	良	
703	SX97203	土師器	甕B-D	28.5		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
704	SX97203	土師器	甕B-D	27.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁端部ハケメ	密	淡褐色	良	
705	SX97203	黒色 土器	鉢B	22.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	外面淡褐色 内面黒褐色	良	
706	SX97203	須恵器	甕B	41.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部タタキ	密	青灰色	良	
707	SX97203	須恵器	甕B	55.8		口縁部ナデ 体部タタキ キメ	口縁部ナデ 体部タタキ カ	密	青灰色	良	
708	SX97203	土師器	製塩土器 C b	8.4		ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
709	SX97203	土師器	製塩土器 C b	9.0		ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
710	SX97203	土師器	製塩土器 B b	14.6		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
711	SX97203	土師器	製塩土器 B b	12.0		ナデ	ナデ	やや粗	暗褐色	やや軟	
712	SX97203	土師器	製塩土器 B b	14.8		ナデ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
713	SX97203	土師器	製塩土器 B b	15.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
714	SX97203	土師器	製塩土器 B c	13.3		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
715	SX97203	土師器	製塩土器 B a	11.2		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
716	SX97203	土師器	製塩土器 B b	12.2		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
717	SX97203	土師器	製塩土器 B b	14.3		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
718	SX97203	土師器	製塩土器 A c	19.6		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
719	SX97203	土師器	製塩土器 A b	23.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
720	SX97203	土師器	製塩土器 b	-	-	ナデ	ハケメ	密	淡褐色	良	
721	SX97203	土師器	製塩土器 a	-	-	ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
722	SX97203	土師器	製塩土器 b	-	-	ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
723	SX97203	土師器	製塩土器 a	-	-	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
724	SD97219	須恵器	蓋B	16.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
725	SD97219	須恵器	蓋B	17.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
726	SD97219	須恵器	杯身A	14.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡黄灰色	良	
727	SD97219	須恵器	杯身A	12.1	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
728	SD97219	須恵器	杯身A	14.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
729	SD97219	須恵器	杯身A	12.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
730	SD97219	須恵器	杯身A	14.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
731	SD97219	須恵器	杯身A	13.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
732	SD97219	須恵器	杯身A	13.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	やや軟	

733	SD97219	須恵器	杯身B	13.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
734	SD97219	須恵器	杯身B	14.6	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	黄灰色	良	
735	SD97219	須恵器	杯身B	15.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
736	SD97219	須恵器	杯身B	17.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
737	SD97219	須恵器	杯身B	15.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
738	SD97219	須恵器	杯身B	17.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
739	SD97219	須恵器	杯身B	18.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
740	SD97219	須恵器	杯身B	21.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	黄灰色	良	
741	SD97219	土師器	蓋	21.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	螺旋状暗文
742	SD97219	土師器	杯身A	12.8		ナデ	ナデ	密	暗灰色	良	
743	SD97219	土師器	杯身A	16.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
744	SD97219	土師器	杯身A	15.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
745	SD97219	土師器	杯身C	15.4		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
746	SD97219	土師器	杯身C	13.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
747	SD97219	須恵器	壺B	9.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
748	SD97219	須恵器	壺底部	8.9	(底径)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
749	SD97219	土師器	甕B-B	24.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
750	SD97219	土師器	甕B-B	26.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
751	SD97219	須恵器	甕B	4.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ナデ	密	青灰色	良	
752	SD97219	土師器	製塩土器 C b	9.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
753	SD97217-1	須恵器	蓋B	16.5	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
754	SD97217-1	須恵器	蓋B	15.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
755	SD97217-1	須恵器	蓋B	16.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	転用硯
756	SD97217-1	須恵器	蓋B	21.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
757	SD97217-1	須恵器	蓋B	22.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
758	SD97217-1	須恵器	杯身D	10.6	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
759	SD97217-1	須恵器	杯身D	9.2	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
760	SD97217-1	須恵器	杯身A	10.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
761	SD97217-1	須恵器	杯身A	10.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
762	SD97217-1	須恵器	杯身A	10.8	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
763	SD97217-1	須恵器	杯身A	12.8	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗青灰色	良	
764	SD97217-1	須恵器	杯身A	12.9	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
765	SD97217-1	須恵器	杯身A	12.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
766	SD97217-1	須恵器	杯身A	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
767	SD97217-1	須恵器	杯身A	12.4	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
768	SD97217-1	緑釉 陶器	椀	13.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
769	SD97217-1	須恵器	杯身B	14.7	4.9	ナデ	ナデ	密	暗青灰色	良	
770	SD97217-1	須恵器	杯身B	16.3	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
771	SD97217-1	須恵器	杯身B	17.6	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
772	SD97217-1	須恵器	杯身B	18.4	7.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
773	SD97217-1	須恵器	杯身B	18.4	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
774	SD97217-1	須恵器	杯身B	20.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
775	SD97217-1	須恵器	杯身B	26.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
776	SD97217-1	土師器	杯身A	13.2		磨滅	ナデ	密	橙褐色	良	
777	SD97217-1	土師器	杯身A	13.7		磨滅	ナデ	密	淡青灰色	良	
778	SD97217-1	土師器	椀	15.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	

出土遺物観察表

779	SD97217-1	土師器	皿C	20.6	3.7	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
780	SD97217-1	土師器	皿A	16.6	2.3	ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	放射線状暗文
781	SD97217-1	須恵器	杯身A	12.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部外面に墨書か?
782	SD97217-1	須恵器	杯身A	13.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部外面に墨書「冬」不明
783	SD97217-1	土師器	椀	13.7	3.5	ヨコナデ	ハケメ	密	茶褐色	良	底部外面に墨書「女」か?
784	SD97217-1	須恵器	杯身A	12.4	4.0	ロクロナデ 底部未調整	ロクロナデ	密	淡灰色	良	体部外面に意味不明の墨書
785	SD97217-1	須恵器	杯身A	10 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	体部外面に墨書「上上」
786	SD97217-1	土師器	破片	—	—	—	—	密	淡褐色	良	意味不明の墨書
787	SD97217-1	土師器	破片	—	—	—	—	密	淡褐色	良	意味不明の墨書
788	SD97217-1	土師器	破片	—	—	—	—	密	淡褐色	良	墨書土器「井」か?
789	SD97217-2	須恵器	杯蓋B	15.3	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
790	SD97217-2	須恵器	杯身A	10.6	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
791	SD97217-2	須恵器	杯身A	13.3	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
792	SD97217-2	須恵器	杯身A	13.1	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
793	SD97217-2	須恵器	杯身A	13.5	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
794	SD97217-2	須恵器	杯身A	16.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡褐色	良	
795	SD97217-2	須恵器	杯身B	12.6	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
796	SD97217-2	須恵器	杯身B	15.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
797	SD97217-2	須恵器	杯身B	15.8	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
798	SD97217-2	須恵器	皿A	17.4	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
799	SD97217-2	須恵器	椀A	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
800	SD97217-2	須恵器	壺A	13.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
801	SD97217-2	土師器	杯身A	15.4		ナデ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	茶褐色	良	
802	SD97217-2	土師器	甕A-c	18.7		ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
803	SD97217-2	土師器	甕B-E	22.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 頸部ハケメ	密	淡褐色	良	
804	SD97217-2	土師器	甕B-F	23.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
805	SD97217-2	土師器	甕B-I	13.2		ハケメ	ハケメ	やや粗	暗褐色	良	
806	SD97217-2	土師器	甕B-H	27.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	やや粗	暗褐色	良	
807	SD97217-2	土師器	鍋A4	33.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	やや軟	
808	SD97217-2	須恵器	杯身A	13.6	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
809	SD97217-2	須恵器	杯身B	14.6	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部外面に墨書「矢」
810	SD97217-2	灰釉陶器	椀	17.6	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰白色	良	
811	SD97217-2	須恵器	壺F	3.6	9.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
812	SD97217-2	土師器	杯身A	13.7	3.0	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
813	SD97217-2	土師器	杯身A	14.9	3.7	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
814	SD97217-2	黒色土器	杯	17.4	4.5	ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	内面黒色、暗文あり
815	SD97217-2	土師器	甕A-d	16.7	6.4	ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	

816	SD97217-2	土師器	製塩土器 A b	20.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
817	SD97217-2	土師器	皿A	18.4		ナデ 底部ヘラケズリ	ナデ	密	暗褐色	良	
818	SD97217-2	土師器	甕B-F	28.6		口縁部上半ナデ 体部ハケメ下半 ナデ	口縁部ハケメ 体部上半ナデ下 半タタキ	密	淡褐色	良	
819	SE95042	須恵器	杯身B	12.3	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
820	SE95042	須恵器	杯身A	14.1	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
821	SE95042	須恵器	椀A	15.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
822	SE95042	土師器	甕B	28.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡青灰色	良	
823	SE95042	土師器	製塩土器 B b	12.4		ナデ	ナデ	やや粗	淡青灰色	良	
824	SE95072	土師器	皿A	16.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	放射状暗文
825	SE95072	土師器	皿A	19.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	放射状暗文
826	SE95072	土師器	甕A-c	12.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	良	
827	SE95072	土師器	製塩土器 B b	11.0		ナデ	ナデ	やや粗	暗褐色	良	
828	SE95049	須恵器	杯身A	12.8	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
829	SE95049	須恵器	杯身A	12.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
830	SE95049	須恵器	杯身A	15.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
831	SE95049	須恵器	椀A	9.7	10.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
832	SE95049	土師器	鍋A 1	27.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	茶褐色	良	
833	SE95049	土師器	杯身C	12.4	3.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
834	SE95049	土師器	杯身C	13.2	3.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
835	SE95049	土師器	杯身C	13.4	3.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
836	SE95049	土師器	甕A-c	12.2	9.2	口縁部ナデ 体部下半ハケメ	口縁部から体部 上半にかけてナ デ 体部下半ユビオ サエ	密	淡褐色	良	
837	SE95049	土師器	甕B-D	26.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	淡褐色	やや軟	
838	SE97223	須恵器	杯身A	13.4	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	体部外面に 墨書「大」
839	SE97223	須恵器	杯身B	7.6 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
840	SE97223	灰釉 陶器	椀	12.8		ナデ	ナデ	密	淡緑色	良	
841	SE97223	土師器	皿A	13.2		ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
842	SE97223	黒色 土器	杯	16.4	4.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	堅	内面に暗文 底部外面に 意味不明の 墨書
843	SE97223	土師器	杯身A	14.2		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
844	SE97223	土師器	杯身E	13.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
845	SE97223	土師器	甕B-F	28.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
846	SD97218-1	須恵器	蓋A	17.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
847	SD97218-1	須恵器	蓋B	22.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
848	SD97218-1	須恵器	蓋B	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
849	SD97218-1	須恵器	蓋E	13.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
850	SD97218-1	須恵器	杯身A	9.7	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	

出土遺物観察表

851	SD97218-1	須恵器	杯身A	10.2	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
852	SD97218-1	須恵器	杯身A	11.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
853	SD97218-1	須恵器	杯身A	11.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
854	SD97218-1	須恵器	杯身A	11.9	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
855	SD97218-1	須恵器	杯身A	11.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
856	SD97218-1	須恵器	杯身A	11.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
857	SD97218-1	須恵器	杯身A	11.6	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
858	SD97218-1	須恵器	杯身A	13.0	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
859	SD97218-1	須恵器	杯身A	13.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
860	SD97218-1	須恵器	杯身A	12.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
861	SD97218-1	須恵器	杯身A	12.1	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
862	SD97218-1	須恵器	杯身A	13.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
863	SD97218-1	須恵器	椀A	19.0	7.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
864	SD97218-1	須恵器	杯身B	14.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
865	SD97218-1	須恵器	杯身B	15.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
866	SD97218-1	須恵器	杯身B	15.2	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
867	SD97218-1	須恵器	杯身B	15.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
868	SD97218-1	須恵器	杯身B	14.2	4.0	ナデ	ナデ	密	青灰色	良	
869	SD97218-1	須恵器	杯身B	14.6	5.1	ナデ	ナデ	密	青灰色	良	
870	SD97218-1	須恵器	杯身B	18.0	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
871	SD97218-1	無釉陶器	椀	16.3	5.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
872	SD97218-1	緑釉陶器	椀	17.2	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	濃緑色	良	
873	SD97218-1	灰釉陶器	椀	17.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑灰色	良	
874	SD97218-1	緑釉陶器	椀	18.8	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	濃緑色	良	
875	SD97218-1	灰釉陶器	椀	15.8	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑灰色	良	
876	SD97218-1	灰釉陶器	椀	16.4	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑灰色	良	
877	SD97218-1	灰釉陶器	椀	15.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰白色	良	
878	SD97218-1	緑釉陶器	皿	11.0	1.9	ロクロナデ	剝離	密	緑灰色	良	
879	SD97218-1	緑釉陶器	皿	14.6	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗緑色	良	
880	SD97218-1	黒色土器	椀	17.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰白色	良	内面黒色
881	SD97218-1	灰釉陶器	椀底部	6.8 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰白色	良	
882	SD97218-1	灰釉陶器	椀底部	8.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰白色	良	

883	SD97218-1	灰釉陶器	椀	15.2 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
884	SD97218-1	灰釉陶器	椀底部	10.4 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
885	SD97218-1	土師器	皿E	8.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
886	SD97218-1	土師器	杯身C	14.4	3.3	ナデ	口縁部ナデ ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
887	SD97218-1	土師器	杯身C	13.2	3.5	ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
888	SD97218-1	土師器	皿A	23.5	2.8	ナデ	口縁部ナデ ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
889	SD97218-1	土師器	皿A	20.8		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
890	SD97218-1	土師器	皿A	20.8		剝離	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	放射状暗文
891	SD97218-1	黒色土器	杯	21.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄褐色	良	内面黒色
892	SD97218-1	土師器	杯身B	15.6	3.1	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
893	SD97218-1	土師器	杯身B	20.4	5.1	口縁部ナデ 体部ヘラケズリ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
894	SD97218-1	黒色土器	杯	22.4		磨耗	ヘラミガキ	密	黄褐色	良	内面黒色
895	SD97218-1	須恵器	壺A	11.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
896	SD97218-1	須恵器	壺A	11.4	12.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
897	SD97218-1	須恵器	壺A	10.6	16.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
898	SD97218-1	須恵器	壺C	9.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
899	SD97218-1	須恵器	壺底部	8 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
900	SD97218-1	須恵器	壺底部	8.7 (底径)		ロクロナデ 底部糸切り	ロクロナデ	密	青灰色	良	
901	SD97218-1	須恵器	壺底部	8.3 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
902	SD97218-1	須恵器	壺底部	7.9 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
903	SD97218-1	須恵器	壺E	9.8	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	四耳壺
904	SD97218-1	須恵器	壺体部	13.2 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
905	SD97218-1	黒色土器	鉢	17.6		ヘラケズリ	ヘラミガキ	密	黄褐色	良	内面黒色
906	SD97218-1	土師器	鉢B	13.4		ナデ	ナデ	密	淡青灰色	良	
907	SD97218-1	土師器	甕B-F	19.6		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
908	SD97218-1	須恵器	椀B	13.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	体部外面に 意味不明の 墨書
909	SD97218-1	須恵器	杯身B	14.3	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部外面に 墨書「口 女」
910	SD97218-1	黒色土器	椀B	16.5	4.8	ナデ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	内面黒色 底部外面に 墨書「寺」
911	SD97218-1	須恵器	杯	9.1		ナデ	ナデ	密	青灰色	良	体部外面に 意味不明の 墨書
912	SD97218-1	土師器	破片	-	-	-	-	密	暗褐色	良	底部外面に 意味不明の 墨書

出土遺物観察表

913	SD97218-1	須恵器	破片	—	—	—	—	密	青灰色	良	底部外面に意味不明の墨書
914	SD97218-1	須恵器	破片	—	—	—	—	密	青灰色	良	底部外面に意味不明の墨書
915	SD97218-2	須恵器	蓋B	17.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗青灰色	良	
916	SD97218-2	須恵器	蓋B	19.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
917	SD97218-2	須恵器	杯身A	6.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	
918	SD97218-2	須恵器	杯身A	12.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	やや軟	
919	SD97218-2	須恵器	杯身A	13.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	やや軟	
920	SD97218-2	須恵器	椀B	13.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
921	SD97218-2	須恵器	杯身B	10.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
922	SD97218-2	須恵器	杯身B	11.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
923	SD97218-2	土師器	杯身A	15.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
924	SD97218-2	土師器	杯身A	17.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
925	SD97218-2	土師器	皿F	15.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
926	SD97218-2	土師器	皿A	14.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
927	SD97218-2	土師器	皿A	14.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
928	SD97218-2	土師器	皿A	15.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
929	SD97218-2	土師器	皿D	12.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
930	SD97218-2	土師器	皿A	14.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
931	SD97218-2	土師器	皿A	13.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
932	SD97218-2	土師器	皿F	13.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
933	SD97218-2	土師器	皿F	15.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
934	SD97218-2	土師器	杯身A	15.3		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
935	SD97218-2	土師器	杯身A	13.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
936	SD97218-2	土師器	杯身A	13.7		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
937	SD97218-2	土師器	杯身A	14.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
938	SD97218-2	土師器	杯身A	13.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
939	SD97218-2	黒色土器	杯	17.3		ナデ 一部ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	暗褐色
940	SD97218-2	黒色土器	椀	15.6		ケズリ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	内面黒色
941	SD97218-2	黒色土器	椀B底部	9(高台径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗褐色 内面黒灰色	良	内面黒色、 暗文あり
942	SD97218-2	黒色土器	皿	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒色	良	内面黒色
943	SD97218-2	黒色土器	椀	14.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗褐色 内面黒灰色	良	内面黒色

944	SD97218-2	黒色土器	椀	14.3		ケズリ	ヘラミガキ	密	暗褐色 内面黒灰色	良	内面黒色、 暗文あり
945	SD97218-2	黒色土器	椀	14.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	内面黒色、 暗文あり
946	SD97218-2	灰釉陶器	椀	17.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑灰色	良	
947	SD97218-2	灰釉陶器	椀底部	7.4 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑灰色	良	
948	SD97218-2	緑釉陶器	椀底部	6 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	濃緑色	良	
949	SD97218-2	緑釉陶器	椀	19.8 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄色	良	
950	SD97218-2	灰釉陶器	皿	14.4	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰白色	良	
951	SD97218-2	緑釉陶器	皿	14.0	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄灰色	良	
952	SD97218-2	黒色土器	鉢A	13.4		口縁部ナデ 体部ケズリ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色 内面黒灰色	良	
953	SD97218-2	黒色土器	鉢A	17.0		口縁部ナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ナデ 体部ヘラミガキ	密	内面外面 上半黒色 下半黄褐色	良	
954	SD97218-2	土師器	甕A-f	14.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
955	SD97218-2	土師器	甕B-E	21.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
956	SD97218-2	土師器	甕B-F	22.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
957	SD97218-2	土師器	甕A-f	17.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	暗褐色	良	
958	SD97218-2	土師器	甕B-D	24.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
959	SD97218-2	土師器	甕B-F	22.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
960	SD97218-2	土師器	甕B-G	27.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	淡褐色	良	
961	SD97218-2	土師器	甕B-G	26.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	暗褐色	良	
962	SD97218-2	土師器	甕B-G	29.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	黄褐色	良	
963	SD97218-2	須恵器	杯身A	13.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	やや軟	底部外面に 墨書「稲」 か？
964	SD97218-2	須恵器	杯身A	13.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡青灰色	良	体部外面に 意味不明の 墨書
965	SD97307	土師器	杯身A	12.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
966	SD97307	土師器	杯身A	14.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
967	SD97307	土師器	杯身C	14.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
968	SD97307	土師器	椀	15.0		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
969	SD97307	土師器	椀	12.3		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
970	SD97307	土師器	皿E	14.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
971	SD97307	土師器	皿A	15.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
972	SD97307	土師器	皿A	17.7		ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
973	SD97307	緑釉陶器	皿	15.4		ナデ	ナデ	密	濃緑色	良	
974	SD97307	緑釉陶器	皿	7.0		ナデ	ナデ	密	淡緑色	良	
975	SD97307	緑釉陶器	皿	13.6		ナデ	ナデ	密	淡灰色	良	
976	SD97307	灰釉陶器	椀	14.2		ナデ	ナデ	密	淡緑灰色	良	

出土遺物観察表

977	SD97307	須恵器	壺体部	8.8 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	ヘラ記号 「メ」
978	SD97307	須恵器	壺C	11.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青白灰色	良	
979	SD97307	須恵器	壺C	10.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
980	SD97307	土師器	甕B	26.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡黄色	良	
981	SD97307	土師器	甕B	25.6		口縁部ナデ 体部タタキ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
982	SD97307	土師器	甕B	24.6		ナデ	ハケメ	密	淡茶褐色	良	
983	SD97307	土師器	甕B	26.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	やや粗	茶褐色	良	
984	SD97307	土師器	甕B	29.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	やや粗	橙褐色	良	
985	SD97307	黒色土器	椀B	16.8		ナデ	ヘラミガキ	密	淡桃茶褐色	良	底部に暗文あり
986	SD97307	黒色土器	椀A	16.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	内面と外面 口縁黒色 他茶褐色	良	内面に暗文あり
987	SD97307	黒色土器	椀A	16.8		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	内面黒色
988	SD97307	黒色土器	椀B底部	8.5 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	内面黒色
989	SD97307	黒色土器	椀B底部	7 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	内面黒色
990	SD97307	黒色土器	鉢A	17.8		ヘラケズリ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	内面黒色
991	E地区	須恵器	蓋C	12.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
992	D地区	須恵器	蓋A	10.4	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
993	C地区	須恵器	蓋A	14.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
994	C地区	須恵器	蓋A	15.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
995	D地区	須恵器	蓋B	16.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
996	C地区	須恵器	蓋B	16.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
997	D地区	須恵器	蓋B	15.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
998	E地区	須恵器	蓋B	15.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
999	C地区	須恵器	蓋B	16.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
1000	D地区	須恵器	蓋E	18.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1001	E地区	須恵器	蓋E	15.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1002	D地区	須恵器	蓋B	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1003	D地区	須恵器	蓋B	17.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1004	C地区	須恵器	蓋B	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1005	E地区	須恵器	杯身C	11.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
1006	C地区	須恵器	杯身D	10.2	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1007	D地区	須恵器	杯身A	9.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1008	C地区	須恵器	杯身A	11.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1009	D地区	須恵器	杯身A	11.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1010	D地区	須恵器	杯身A	19.8	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1011	C地区	須恵器	杯身A	10.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1012	D地区	須恵器	杯身A	13.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1013	F地区	須恵器	杯身A	12.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1014	D地区	須恵器	杯身A	13.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1015	E地区	須恵器	杯身A	14.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1016	D地区	須恵器	杯身A	13.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1017	D地区	須恵器	杯身A	13.6	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1018	F地区	須恵器	杯身A	14.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	やや軟	

1019	C地区	須恵器	杯身B	13.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1020	F地区	須恵器	杯身E	9.8		ロクロナデ	ヘラミガキ	密	青灰色	良	
1021	F地区	須恵器	杯身B	17.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1022	D地区	須恵器	杯身B	8.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1023	D地区	須恵器	杯身B	15.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1024	D地区	須恵器	杯身B	15.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1025	D地区	須恵器	杯身B	14.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1026	C地区	須恵器	杯身B	14.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1027	C地区	須恵器	杯身B	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1028	C地区	須恵器	杯身B	14.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1029	F地区	須恵器	椀B	6.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1030	D地区	須恵器	皿A	18.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1031	F地区	須恵器	皿A	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1032	F地区	須恵器	皿A	21.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1033	C地区	須恵器	皿A	21.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1034	E地区	須恵器	皿A	19.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1035	C地区	須恵器	壺C	6.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1036	D地区	須恵器	壺C	9.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1037	D地区	須恵器	壺C	10.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1038	D地区	須恵器	長頸壺	7.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗灰色	良	
1039	D地区	須恵器	壺体部	2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1040	D地区	須恵器	鉢	22.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
1041	C地区	土師器	杯身A	14.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1042	D地区	土師器	杯身A	14.6		ナデ	ナデ	密	黄褐色	良	
1043	E地区	土師器	杯身A	14.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1044	C地区	土師器	杯身A	15.0	3.3	ナデ 体部下半ヘラケ ズリ	ナデ	密	淡褐色	良	
1045	C地区	土師器	杯身A	15.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1046	D地区	土師器	杯身A	19.2	3.7	口縁部ナデ 体部下半ヘラケ ズリ	ヘラミガキ	密	淡褐色	良	
1047	D地区	土師器	杯身C	16.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1048	C地区	土師器	杯身A	15.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1049	C地区	土師器	杯身A	21.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1050	D地区	土師器	杯C	15.0	3.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1051	C地区	土師器	杯C	18.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1052	C地区	土師器	杯C	10.9		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1053	C地区	土師器	皿A	10.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1054	C地区	土師器	皿A	11.4	1.2	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1055	C地区	土師器	皿F	13.4	1.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1056	E地区	土師器	杯身A	16.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1057	F地区	土師器	杯身A	16.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1058	F地区	土師器	椀	14.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1059	F地区	土師器	椀	14.6		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
1060	E地区	土師器	椀	14.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1061	D地区	黒色土 器	杯	18.1		ヘラケズリ	ヘラミガキ	密	淡褐色 内面黒灰 色	良	
1062	F地区	黒色土 器	杯	20.2		ヘラケズリ	ヘラミガキ	密	淡褐色 内面黒灰 色	良	

出土遺物観察表

1063	F地区	黒色土器	椀B	8.4 (底径)		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗茶褐色	良	内面黒色
1064	F地区	黒色土器	椀B	14.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄褐色	良	内面黒色
1065	D地区	黒色土器	椀B	15.5		ナデ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	内面黒色
1066	F地区	黒色土器	椀B	14.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	内面黒色
1067	C地区	黒色土器	椀B	14.6	3.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄茶褐色	堅	内面黒色
1068	F地区	黒色土器	椀B底部	9.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗茶褐色	良	内面黒色
1069	E地区	黒色土器	甕A	15.2		ナデ	ヘラミガキ	密	茶褐色	良	内面黒色
1070	F地区	黒色土器	甕A	17.2		ナデ	口縁部ナデ 体部ヘラミガキ	密	茶褐色	良	内面黒色
1071	F地区	黒色土器	甕A	17.6		ナデ	ナデ	密	暗茶褐色	良	内面黒色
1072	F地区	無釉陶器	皿	12.2	2.9	ヘラケズリ	ロクロナデ	密	淡黄褐色	良	
1073	D地区	緑釉陶器	皿	12.8	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄灰色	良	
1074	D地区	灰釉陶器	椀	16.0	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
1075	C地区	緑釉陶器	耳皿	12.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑灰色	良	陰刻花文
1076	C地区	緑釉陶器	椀底部	6.4 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄灰色	良	陰刻花文
1077	C地区	緑釉陶器	椀底部	6.4 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄灰色	良	
1078	C地区	灰釉陶器	椀底部	3.8 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
1079	F地区	緑釉陶器	椀底部	6 (底径)		ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄灰色	良	
1080	C地区	土師器	甕A-c	17.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
1081	D地区	土師器	甕A-e	17.5		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
1082	F地区	土師器	甕A-c	17.4		ハケメ	ナデ	密	淡褐色	良	
1083	F地区	土師器	甕A-e	17.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	密	茶褐色	良	
1084	F地区	土師器	甕B-G	19.2		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色	良	
1085	C地区	土師器	甕B-G	2.1		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1086	F地区	土師器	甕B-G	27.0		口縁部ナデ 体部タタキ	口縁部ハケメ 体部ナデ	やや粗	淡褐色	良	
1087	E地区	土師器	甕B-A	25.1		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
1088	C地区	土師器	甕B-E	27.6		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
1089	C地区	土師器	甕B-C	25.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
1090	F地区	土師器	甕B-I	15.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
1091	C地区	土師器	鍋A4	39.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
1092	C地区	土師器	鍋A4	37.2		口縁部ナデ 体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色	良	
1093	E地区	土師器	製塩土器 Bb	15.6		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	良	
1094	D地区	須恵器	杯身A 底部片	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部外面に 意味不明の 墨書

1095	D地区	土師器	杯身 底部片	—	—	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	底部外面に 墨書「口 女」
1096	F地区	土師器	椀	13.8	4.3	ナデ	ナデ	密	青灰色	良	底部外面に 墨書 不明
1097	D地区	土師器	破片	—	—	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	底部外面に 意味不明の 墨書
1098	F地区	須恵器	椀B 口縁部	11.7	—	ナデ	ナデ	密	青灰色	良	体部外面に 墨書「中」 か？
1099	SE96023	土師器	小皿B	9.7	1.6	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1100	SE96023	土師器	小皿B	9.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1101	SE96023	土師器	小皿B	9.7	0.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1102	SE96023	土師器	小皿B	11.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1103	SE96023	土師器	小皿B	9.0	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	底部に径5 mmの孔
1104	SE96023	土師器	杯	14.8	2.8	ナデ	ナデ	密	淡灰褐色	良	
1105	SE96023	黒色土 器	椀	16.8	5.0	ナデ	ヘラミガキ	密	暗褐色	良	
1106	SE96023	黒色土 器	椀	15.8		ナデ	ヘラミガキ	密	淡褐色 内面黒色	良	
1107	SE96023	黒色土 器	椀	7.5 (底径)		ナデ	ナデ	密	暗茶褐色 内面黒色	良	
1108	SE96023	須恵器	杯身	14.2		ナデ	ナデ	密	青灰色	良	体部外面に 意味不明の 墨書
1109	SE96023	須恵器	杯身	14.2		ナデ	ナデ	密	青灰色	良	体部外面に 意味不明の 墨書
1110	SE96023	須恵器	破片	—	—	—	—	密	青灰色	良	外面に意味 不明の墨書
1111	SE96023	須恵器	杯身	7.2		ナデ	ナデ	密	青灰色	良	内外面に意 味不明の墨 書
1112	SE96023	緑釉陶 器	底部	6.2 (底径)		ナデ	ナデ	密	暗緑茶褐 色	良	底部糸切り
1113	SE96023	緑釉陶 器	底部	5.3 (底径)		ナデ	ナデ	密	緑黄灰色	良	底部糸切り
1114	SE96023	土師器	羽釜C	28.3		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
1115	SE96023	土師器	羽釜C	23.4		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
1116	SE96023	土師器	羽釜C	20.8		口縁部ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	灰褐色	良	
1117	SE96023	土師器	鍋	36.0		口縁部ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
1118	SE95204	土師器	小皿B	9.7		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1119	SE95204	土師器	小皿A	8.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1120	SE95204	土師器	杯身	14.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1121	SE95204	土師器	大皿A	14.8		ナデ	ナデ	密	淡黄灰褐 色	良	
1122	SE95204	土師器	大皿A	14.9		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1123	SE95204	土師器	大皿A	15.2	3.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1124	SE95204	瓦器	椀	14.8	5.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗黒灰色	良	底部内面に 暗文
1125	SE95204	瓦器	椀	14.8	6.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒褐色	良	底部内面に 暗文
1126	SE95204	瓦器	椀	15.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1127	SE95204	瓦器	椀	14.8	5.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	底部内面に 暗文
1128	SE95204	瓦器	椀	15.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	底部内面に 暗文

出土遺物観察表

1129	SE95204	瓦器	椀	16.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1130	SE95204	瓦器	椀	14.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	底部内面に 暗文
1131	SE95204	瓦器	椀	15.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1132	SE95204	瓦器	椀	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1133	SE95204	瓦器	椀	15.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1134	SE95204	瓦器	椀底部	5.2 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	底部内面に 暗文
1135	SE95205	土師器	小皿B	12.6	1.2	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1136	SE95205	土師器	杯身	15.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1137	SE95205	土師器	椀	13.7		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1138	SE95205	土師器	小皿A	8.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1139	SE95205	土師器	小皿A	8.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1140	SE95205	土師器	大皿A	13.8	2.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1141	SE95205	土師器	大皿A	15.2	2.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	外面一面に 意味不明の 墨書
1142	SE95205	土師器	羽釜B	20.2	19.3	ナデ	ハケメ	密	黒灰色	良	
1143	SE95205	瓦器	皿	9.8	2.0	ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	底部内面に 暗文
1144	SE95205	瓦器	椀	16.0	5.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗茶黒色	良	底部内面に 暗文
1145	SE95205	瓦器	椀	14.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗茶黒色	良	
1146	SE95205	瓦器	椀	14.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1147	SE95205	瓦器	椀	16.2	5.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1148	SE95205	瓦器	椀	16.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1149	SE95205	瓦器	椀	14.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗黒灰色	良	
1150	SE95205	黒色 土器	椀底部	6.3		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1151	SE95205	緑釉 陶器	椀	10.6		ナデ	ナデ	密	濃緑色	良	
1152	SE95205	白磁椀	底部	6.9 (底径)		ナデ	ナデ	密	乳白緑色	良	底部外面に 意味不明の 墨書
1153	SE95035	土師器	小皿A	8.0	1.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1154	SE95035	土師器	小皿A	8.9	1.5	ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
1155	SE95035	土師器	小皿A	8.6	1.2	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1156	SE95035	土師器	小皿A	9.2	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1157	SE95035	土師器	小皿A	8.8	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	底部中央に 径5mmの孔有 り
1158	SE95035	土師器	小皿A	10.1	1.6	ナデ	ナデ	密	淡桃褐色	良	
1159	SE95035	土師器	小皿A	9.5	2.0	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1160	SE95035	土師器	小皿A	9.4	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1161	SE95035	土師器	小皿A	9.4	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1162	SE95035	土師器	小皿A	9.8	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1163	SE95035	土師器	小皿A	9.6	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1164	SE95035	土師器	大皿A	14.4	2.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1165	SE95035	土師器	大皿A	14.8		ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
1166	SE95035	土師器	大皿A	14.7	1.6	ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
1167	SE95035	土師器	大皿A	15.4	2.3	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1168	SE95035	土師器	大皿A	15.4		ナデ	ナデ	密	灰褐色	良	
1169	SE95035	瓦器	皿	11.2	1.5	ナデ	ヘラミガキ	密	暗黒色	良	ジグザグ状 暗文

1170	SE95035	瓦器	椀	14.8	5.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状 暗文
1171	SE95035	瓦器	椀	14.2	5.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	ジグザグ状 暗文
1172	SE95035	瓦器	椀	15.1		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	
1173	SE95035	瓦器	椀	15.3		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	
1174	SE95035	瓦器	椀	16.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	
1175	SE95035	瓦器	椀底部	5.9		ナデ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	螺旋状暗文
1176	SE95035	瓦器	椀底部	7.2		ナデ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	螺旋状暗文
1177	SE95035	瓦器	椀底部	5.1		ナデ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	ジグザグ状 暗文
1178	SE95035	瓦器	椀底部	5.4		ナデ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	螺旋状暗文
1179	SE95035	土師器	脚台片	10.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1180	SE95035	白磁	椀	13.4		ナデ	ナデ	密	淡灰色	良	
1181	SE94010	土師器	小皿B	9.9	2.0	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1182	SE94010	土師器	小皿B	9.7	1.9	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1183	SE94010	土師器	小皿B	9.5	1.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1184	SE94010	土師器	小皿A	9.6	2.0	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1185	SE94010	土師器	小皿A	9.9	1.8	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1186	SE94010	土師器	小皿A	9.5	1.7	ナデ	ナデ	密	暗褐色	やや軟	
1187	SE94010	土師器	小皿A	9.3	1.3	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1188	SE94010	土師器	小皿A	9.6	1.3	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1189	SE94010	土師器	小皿A	10.0	1.8	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1190	SE94010	土師器	小皿A	9.8	1.8	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1191	SE94010	土師器	小皿A	9.7	2.1	ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
1192	SE94010	土師器	小皿A	10.0	1.9	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
1193	SE94010	瓦器	皿	10.2	1.4	ナデ	ナデ	密	黒灰色	良	底部中央に 径5mmの孔有 り
1194	SE94010	瓦器	椀	16.0	5.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状 暗文
1195	SE94010	瓦器	椀	15.0	6.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黒灰色	良	ジグザグ状 暗文
1196	SE94010	瓦器	椀	16.8	6.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状 暗文
1197	SE94010	土師器	大皿A	15.0	3.1	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	口縁部外面 に意味不明 の墨書
1198	SE94010	土師器	台付き皿	22.4		ナデ	ナデ	密	暗茶褐色	良	
1199	SE94010	土師器	脚台片	9		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1200	SE94010	白磁	椀底部	6.4		ナデ	ナデ	密	灰白色	良	
1201	SE94010	白磁	椀	15.2	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
1202	SE96096	土師器	小皿A	8.3	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1203	SE96096	土師器	小皿A	8.4	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1204	SE96096	土師器	小皿A	9.0	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1205	SE96096	土師器	小皿A	9.2	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1206	SE96096	土師器	小皿A	9.1	1.7	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1207	SE96096	土師器	小皿A	9.8	1.5	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1208	SE96096	土師器	小皿A	9.8	1.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1209	SE96096	土師器	小皿A	9.7	2.0	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1210	SE96096	土師器	小皿A	10.4	2.0	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1211	SE96096	土師器	大皿A	13.6	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1212	SE96096	土師器	大皿A	14.0	—	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	

出土遺物観察表

1213	SE96096	土師器	大皿A	12.0	—	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1214	SE96096	土師器	大皿A	13.4	2.0	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1215	SE96096	土師器	大皿A	14.6	2.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1216	SE96096	土師器	大皿A	14.8	1.7	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1217	SE96096	土師器	脚台片	5.3 (底径)		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1218	SE96096	瓦器	椀	14.9	5.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1219	SE96096	瓦器	椀	14.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1220	SE96096	瓦器	椀	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1221	SE96096	瓦器	椀	14.0	5.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1222	SE96096	瓦器	椀	14.7	5.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1223	SE96096	瓦器	椀	14.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1224	SE95071	土師器	小皿A	8.8	1.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
1225	SE95071	土師器	小皿A	9.0	1.7	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
1226	SE95071	土師器	小皿A	9.2	1.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
1227	SE95071	土師器	小皿A	9.2	—	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
1228	SE95071	土師器	小皿A	9.5	1.7	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
1129	SE95071	土師器	小皿A	9.6	1.6	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
1230	SE95071	土師器	大皿A	13.8	1.6	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1231	SE95071	土師器	大皿A	14.2	2.7	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1232	SE95071	土師器	大皿A	14.3		ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや堅	
1233	SE95071	土師器	大皿A	14.6	2.4	ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや堅	
1234	SE95071	土師器	大皿A	16.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1235	SE95071	瓦器	皿	8.8	1.9	ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1236	SE95071	瓦器	皿	10.4		ナデ	ナデ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1237	SE95071	瓦器	皿	10.1	1.5	ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1238	SE95071	瓦器	皿	9.4		ナデ	ナデ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1239	SE95071	瓦器	皿	9.2	2.1	ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1240	SE95071	瓦器	皿	10.0		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1241	SE95071	瓦器	皿	9.4	1.7	ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1242	SE95071	瓦器	皿高台付	10.4	2.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	ジグザグ状暗文
1243	SE95071	瓦器	椀	14.4	5.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1244	SE95071	瓦器	椀	15.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1245	SE95071	瓦器	椀	14.4	5.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1246	SE95071	瓦器	椀	14.2		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1247	SE95071	瓦器	椀	15.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1248	SE95071	瓦器	椀	14.8	6.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1249	SE95071	瓦器	椀	14.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1250	SE95071	瓦器	椀	13.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1251	SE95071	瓦器	椀	15.0	5.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1252	SE95071	瓦器	底部	5.9 (底径)		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1253	SE95071	瓦器	底部	5.65 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1254	SE95071	白磁	椀	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
1255	SK96001	土師器	小皿A	7.6	1.0	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	

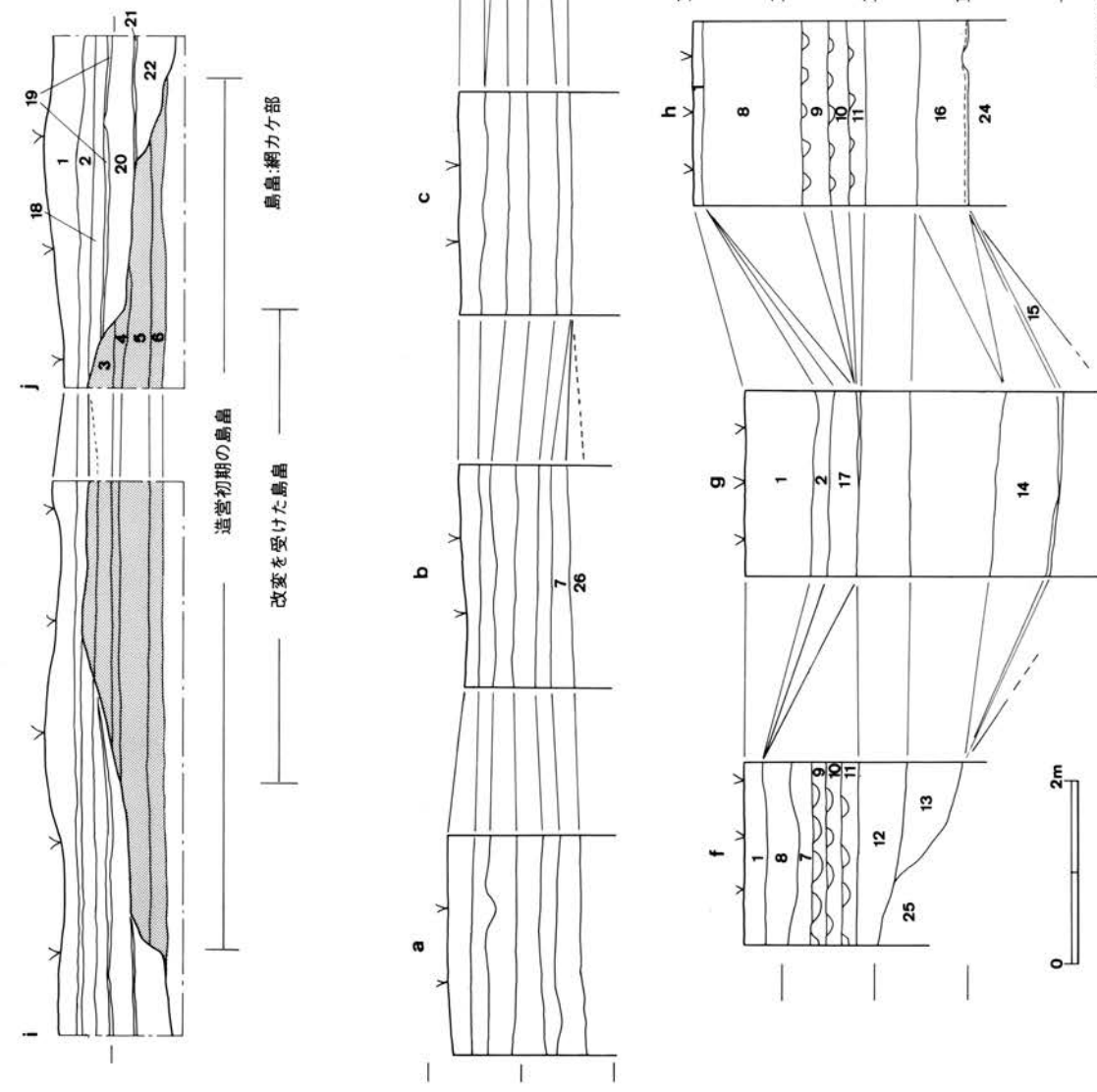
1256	SK96001	土師器	小皿A	8.4	1.0	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1257	SK96001	土師器	小皿A	8.4	1.2	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1258	SK96001	土師器	小皿A	4.0	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1259	SK96001	土師器	小皿A	9.3	2.1	ナデ	ナデ	密	乳灰色	良	
1260	SK96001	土師器	小皿A	10.0	1.8	ナデ	ナデ	密	暗灰色	良	
1261	SK96001	瓦器	皿	9.4	1.6	ナデ	ナデ	密	暗灰色	やや軟	ジグザグ状の暗文
1262	SK96001	瓦器	椀	13.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1263	SK96001	瓦器	椀	14.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1264	SK96001	瓦器	椀	13.2		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1265	SK96001	瓦器	椀	14.2		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1266	SK96001	瓦器	椀	14.6	4.9	ヘラミガキ 下半ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1267	SK96001	瓦器	椀	13.5	4.9	ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1268	SK96001	瓦器	椀	15.0		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1269	SK96001	瓦器	椀	15.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	やや軟	
1270	SK96001	瓦器	椀	13.7	4.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1271	SK96001	瓦器	椀	14.4	5.0	ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	やや軟	
1272	SK96001	瓦器	椀	15.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1273	SK96001	瓦器	椀	16.2		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1274	SK96001	瓦器	椀底部	5.4 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	やや軟	螺旋状暗文
1275	SK96001	瓦器	椀底部	4.6 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	螺旋状暗文
1276	SK96001	土師器	羽釜A b	20.0		ナデ	ナデ	密	暗茶褐色	良	
1277	SK96001	土師器	羽釜A b	14.2		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1278	SK96001	土師器	羽釜A a	26.0		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
1279	SK96001	土師器	羽釜A a	29.8		ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
1280	SK96001	土師器	羽釜足片			ナデ	ナデ	密	淡黄灰色	良	
1281	SK96001	土師器	羽釜足片			ナデ	ナデ	密	淡黄灰色	良	
1282	SE96095	土師器	小皿A	8.8	1.2	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1283	SE96095	瓦器	椀	14.3		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1284	SE96095	瓦器	椀	13.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1285	SE96095	瓦器	椀	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1286	SE96095	瓦器	椀	14.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
1287	SE96095	瓦器	椀底部	5.2 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	螺旋状暗文
1288	SE96095	瓦器	椀底部	4 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	螺旋状暗文
1289	SK95005	土師器	小皿A	7.2		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1290	SK95005	土師器	小皿A	7.8	2.1	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1291	SK95005	土師器	小皿A	9.4		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1292	SK95005	土師器	小皿A	10.1		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1293	SK95005	土師器	大皿A	13.4		ナデ	ナデ	密	黄褐色	良	
1294	SK95005	土師器	大皿A	13.6		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1295	SK95005	土師器	大皿A	15.4		ナデ	ナデ	密	黄褐色	良	
1296	SK95005	瓦器	皿	9.2		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1297	SK95005	瓦器	皿	9.5		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1298	SK95005	瓦器	皿	10.0	2.0	ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	ジグザグ状暗文
1299	SK95005	瓦器	椀	13.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1300	SK95005	瓦器	椀	15.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	灰色	良	

出土遺物観察表

1301	SK95005	瓦器	椀	14.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	
1302	SK95005	瓦器	椀底部	4.8 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	螺旋状暗文
1303	SK95005	瓦器	椀底部	4.5 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	螺旋状暗文
1304	SK95005	瓦器	椀底部	4.6 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	螺旋状暗文
1305	SK95005	瓦器	椀底部	5.2 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	暗灰色	良	螺旋状暗文
1306	SB95001	土師器	小皿A	8.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1307	SB95001	土師器	小皿A	9.2	1.6	ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
1308	SB95001	土師器	小皿A	9.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1309	SB95001	土師器	小皿A	9.8		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1310	SB95001	土師器	小皿A	9.8	1.6	ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
1311	SB95001	土師器	小皿A	10.4		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
1312	SB95001	瓦器	皿	9.8	1.7	ナデ	ヘラミガキ	密	灰黒色	やや軟	ジグザグ状暗文
1313	SB95001	瓦器	皿	10.0		ナデ	ヘラミガキ	密	灰黒色	良	ジグザグ状暗文
1314	SB95001	瓦器	皿	9.8	1.7	ナデ	ヘラミガキ	密	灰黒色	やや軟	ジグザグ状暗文
1315	SB95001	瓦器	皿	10.0		ナデ	ヘラミガキ	密	灰黒色	やや軟	ジグザグ状暗文
1316	SB95001	瓦器	椀	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	灰黒色	良	
1317	SB95001	瓦器	椀	15.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	灰黒色	良	
1318	SB95001	瓦器	椀	10.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	灰黒色	良	
1319	SB95001	瓦器	椀底部	7.3 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	灰黒色	良	螺旋状暗文
1320	SB95001	瓦器	椀底部	4.8 (底径)		ナデ	ヘラミガキ	密	灰黒色	良	螺旋状暗文

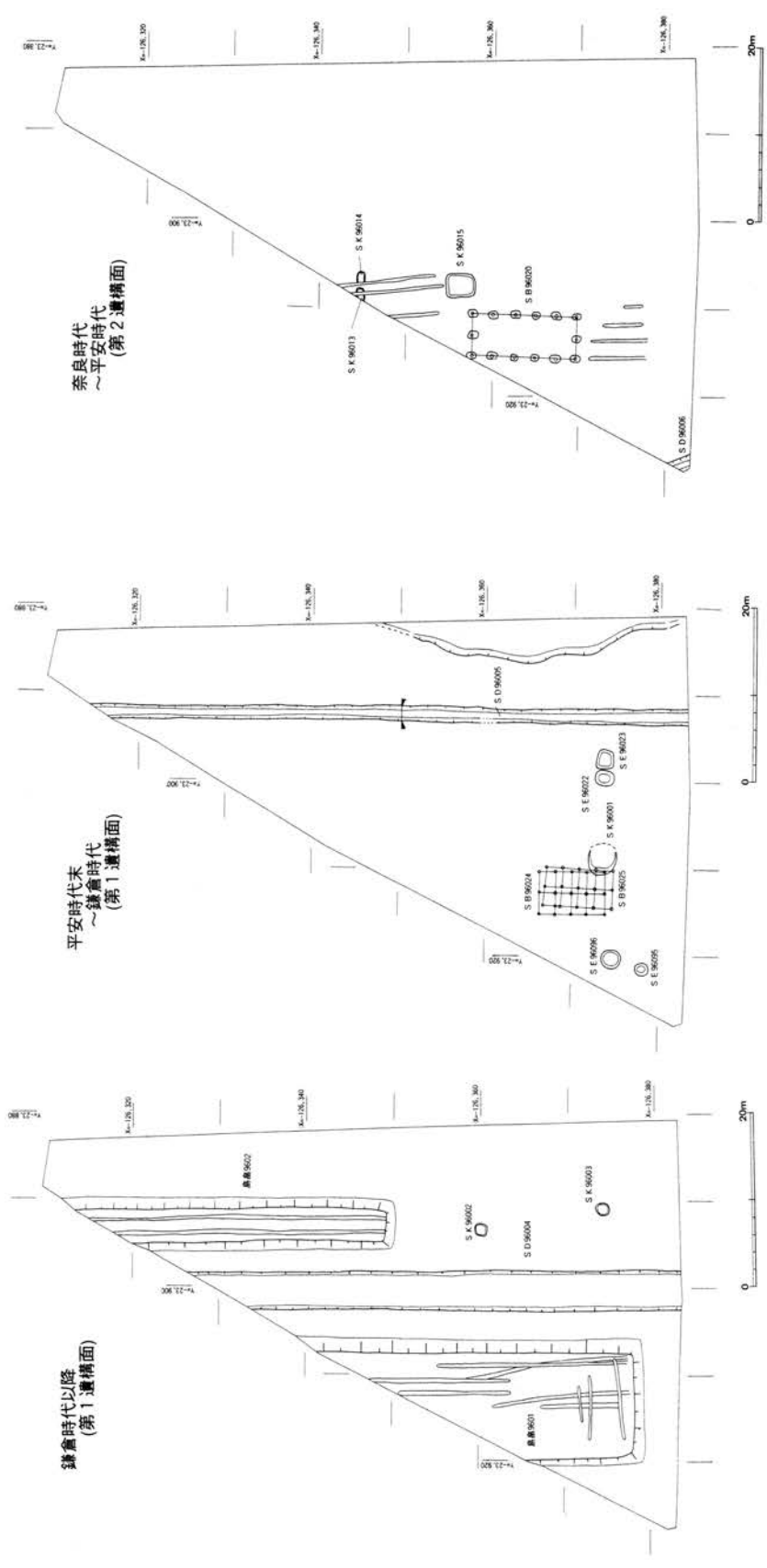
圖 版

- 1. 精作土(暗灰色土)
- 2. 暗灰黄色土
- 3. 黄茶灰色砂質土
- 4. 黄茶褐色砂質土(C-E地区第1遺構面ベース土)
- 5. 明黄茶褐色砂質土(C-E地区第2遺構面ベース土)
- 6. 暗黄茶褐色砂質土(C-E地区第3遺構面ベース土)
- 7. 淡茶褐色砂質土(E地区第4遺構面ベース土)
- 8. 暗黄灰色粘砂質土
- 9. 黄灰色粘砂質土(F地区第1遺構面ベース土)
- 10. 淡黄灰色砂質土(F地区第2遺構面ベース土)
- 11. 暗黄灰色粘質土(F地区第3遺構面ベース土)
- 12. 暗褐色粘質土(F地区第4遺構面ベース土)
- 13. NR96222堆積土(詳細図版第19)
- 14. NR96224堆積土(詳細図版第19)
- 15. 黒褐色粘質土(NR96224下の流路埋土)
- 16. 暗乳灰色砂(F地区第5遺構面ベース土)
- 17. 淡灰褐色砂質土
- 18. 灰褐色砂質土
- 19. 淡灰色砂(洪水砂)
- 20. 暗灰褐色砂質土
- 21. 灰色砂(洪水砂)
- 22. 暗乳灰褐色砂質土
- 23. 淡茶褐色土(C・D地区第4遺構面ベース土)
- 24. 暗黄灰色粘砂質(F地区第6遺構面ベース土)
- 25. 暗黄灰色砂質土
- 26. 暗茶褐色粘砂質土(E地区第5遺構面ベース土)

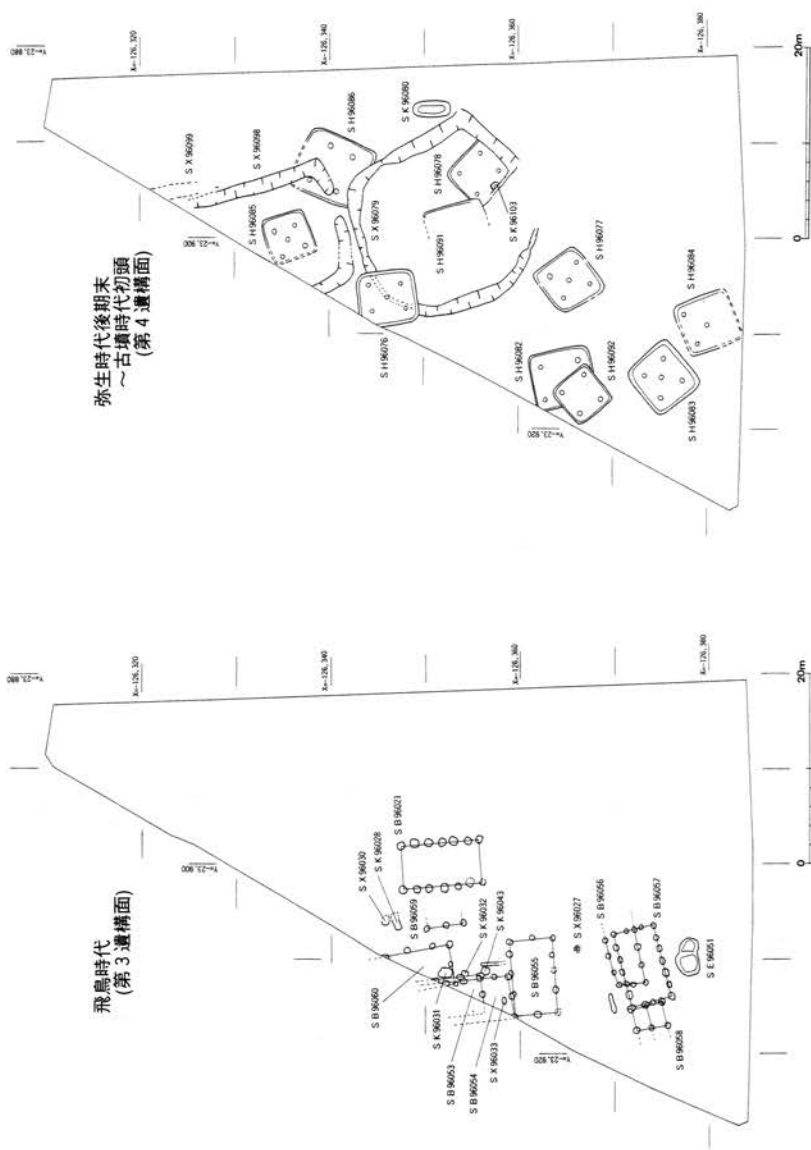


※各柱状断面図は、模式図としていたため一部、断面図作成部位の遺構埋土等を省略しているものもある。

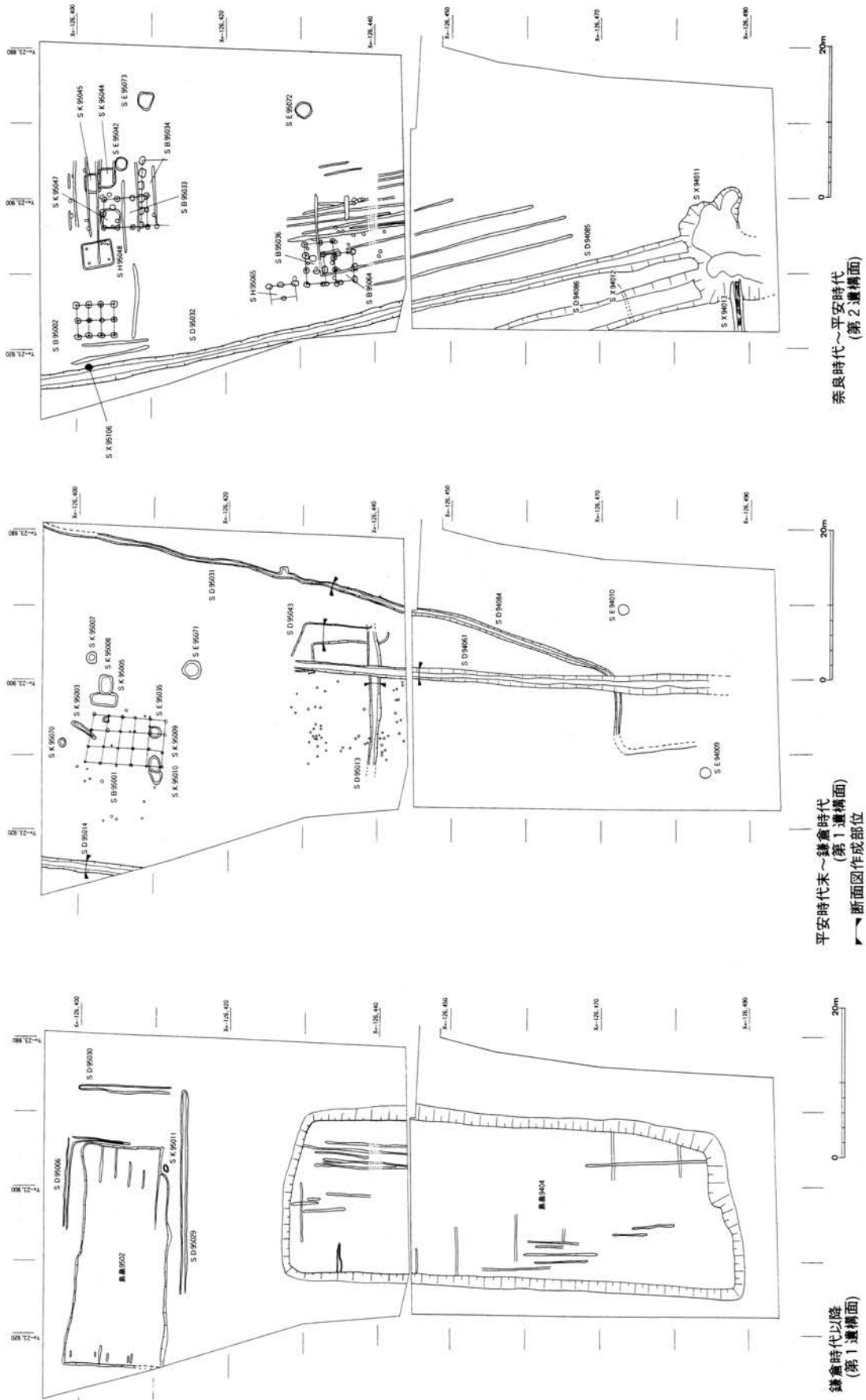
調査地土層図(各柱状図の位置は右下図に対応)



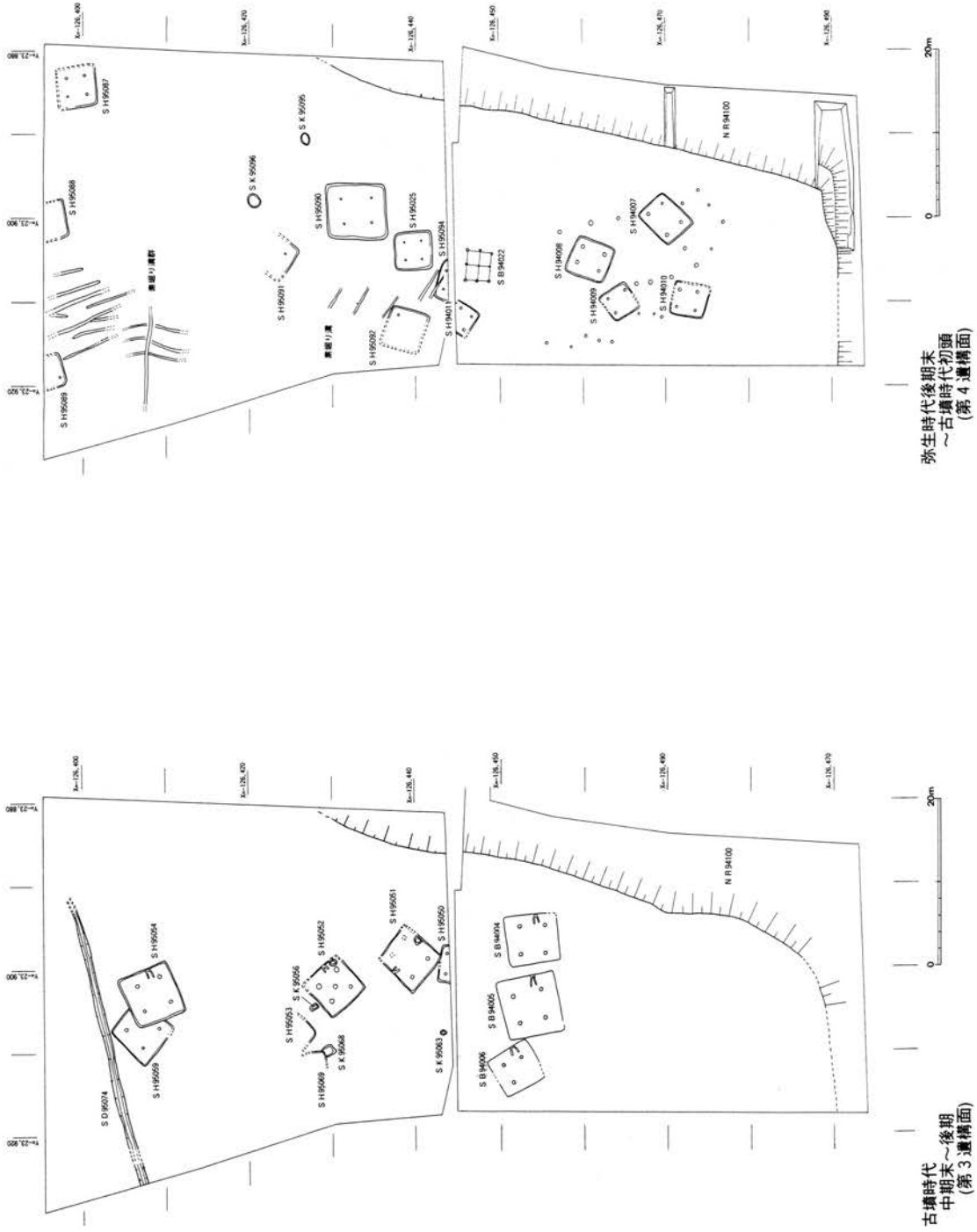
C地区遺構平面図(1)



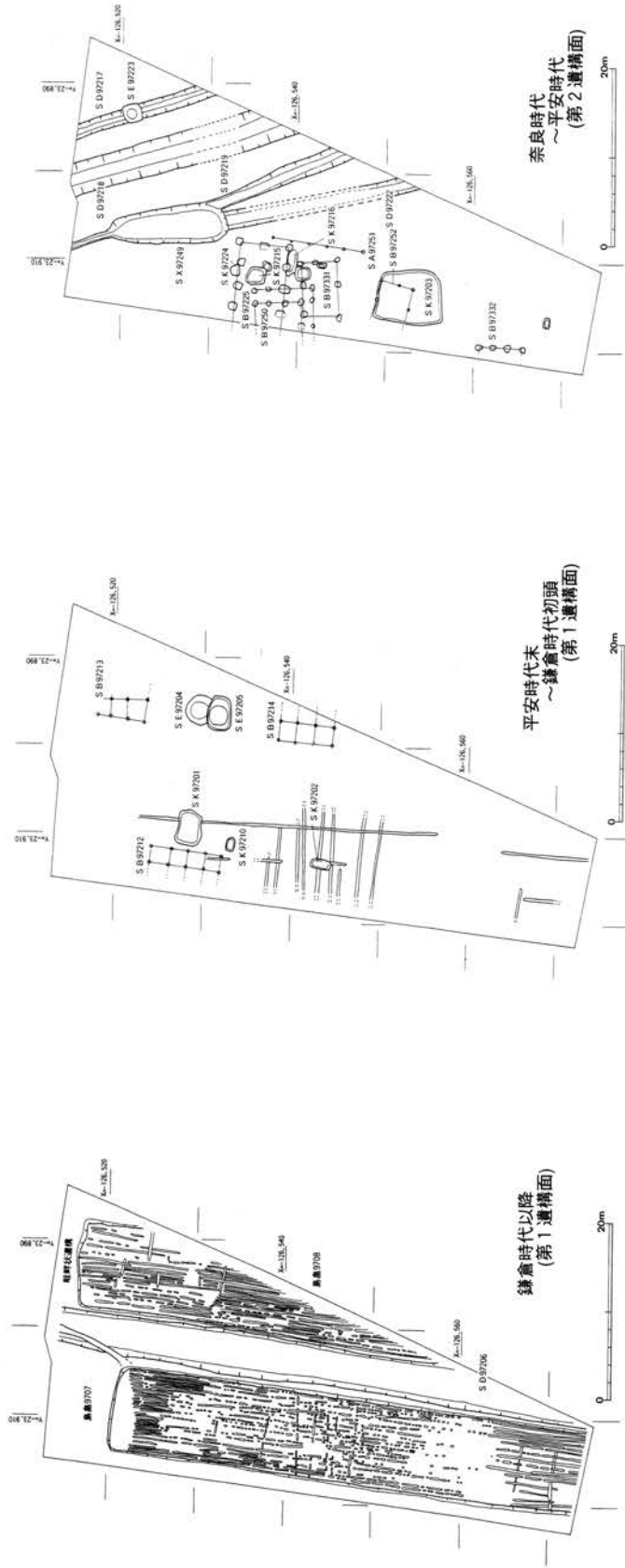
C地区遺構平面図(2)



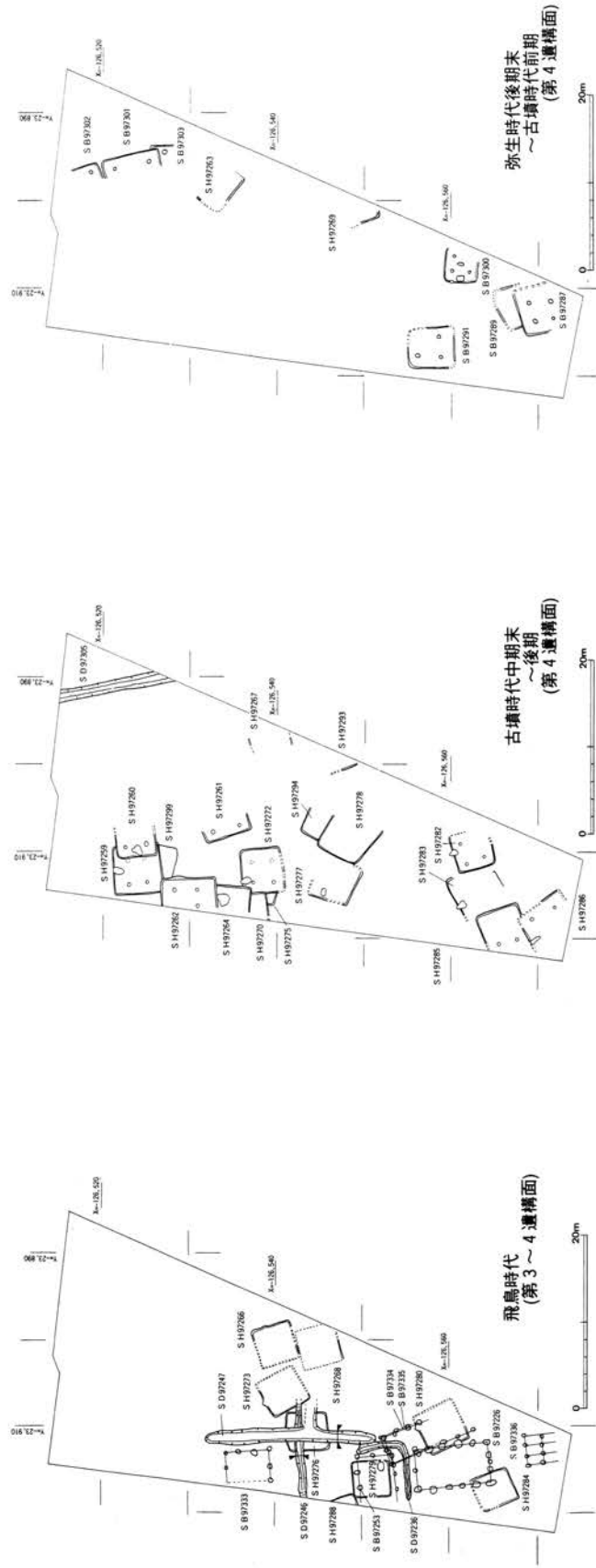
D地区遺構平面図(1)



D地区遺構平面図(2)

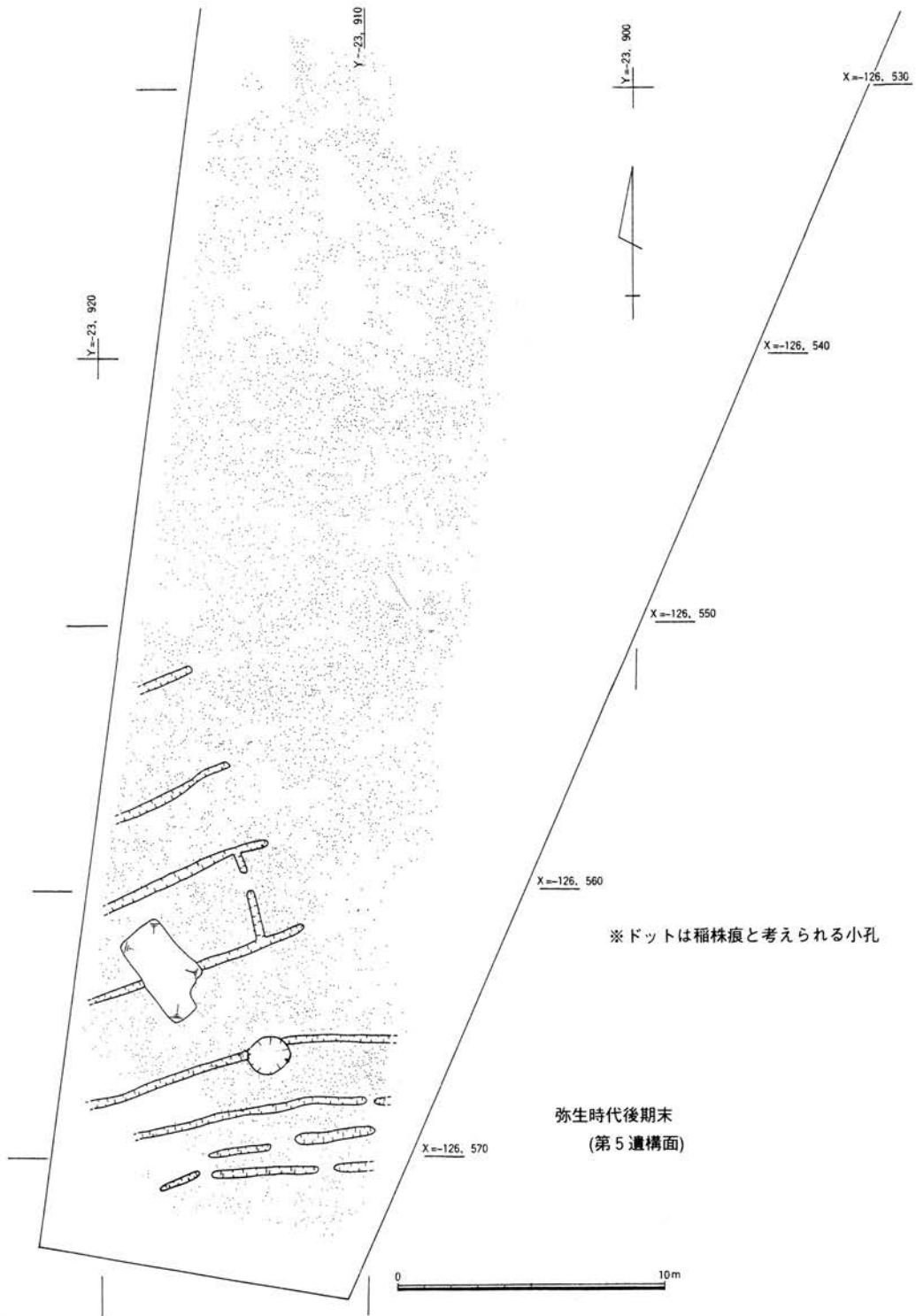


E地区遺構平面図(1)

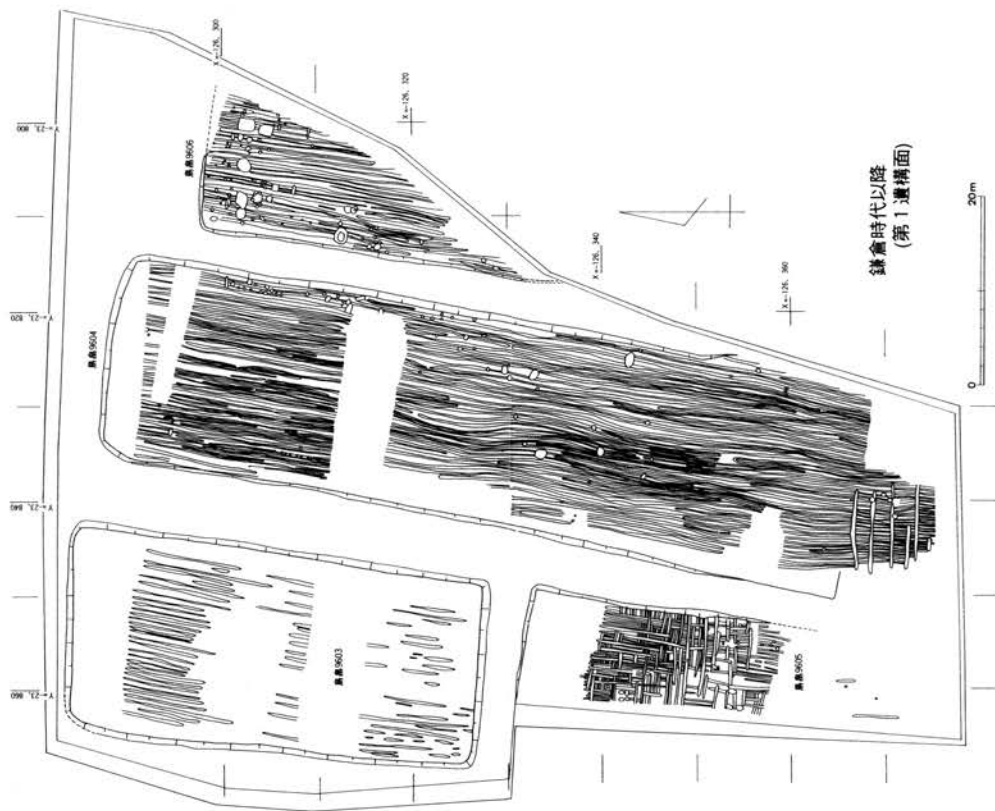
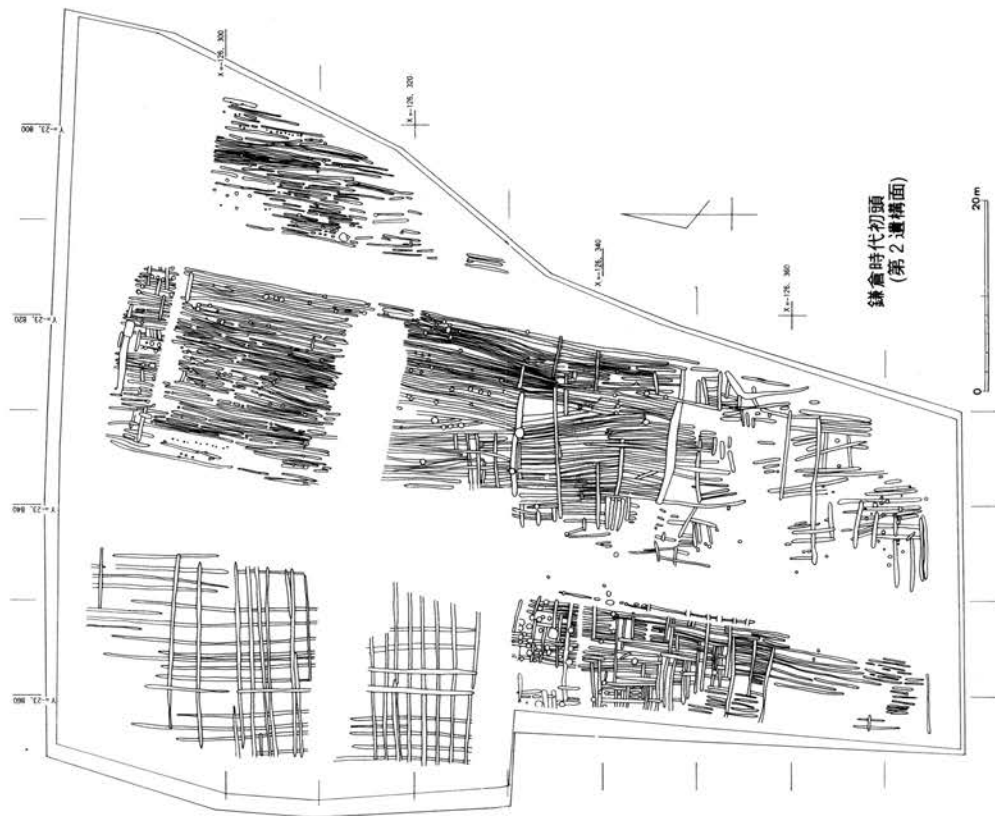


断面図作成部位

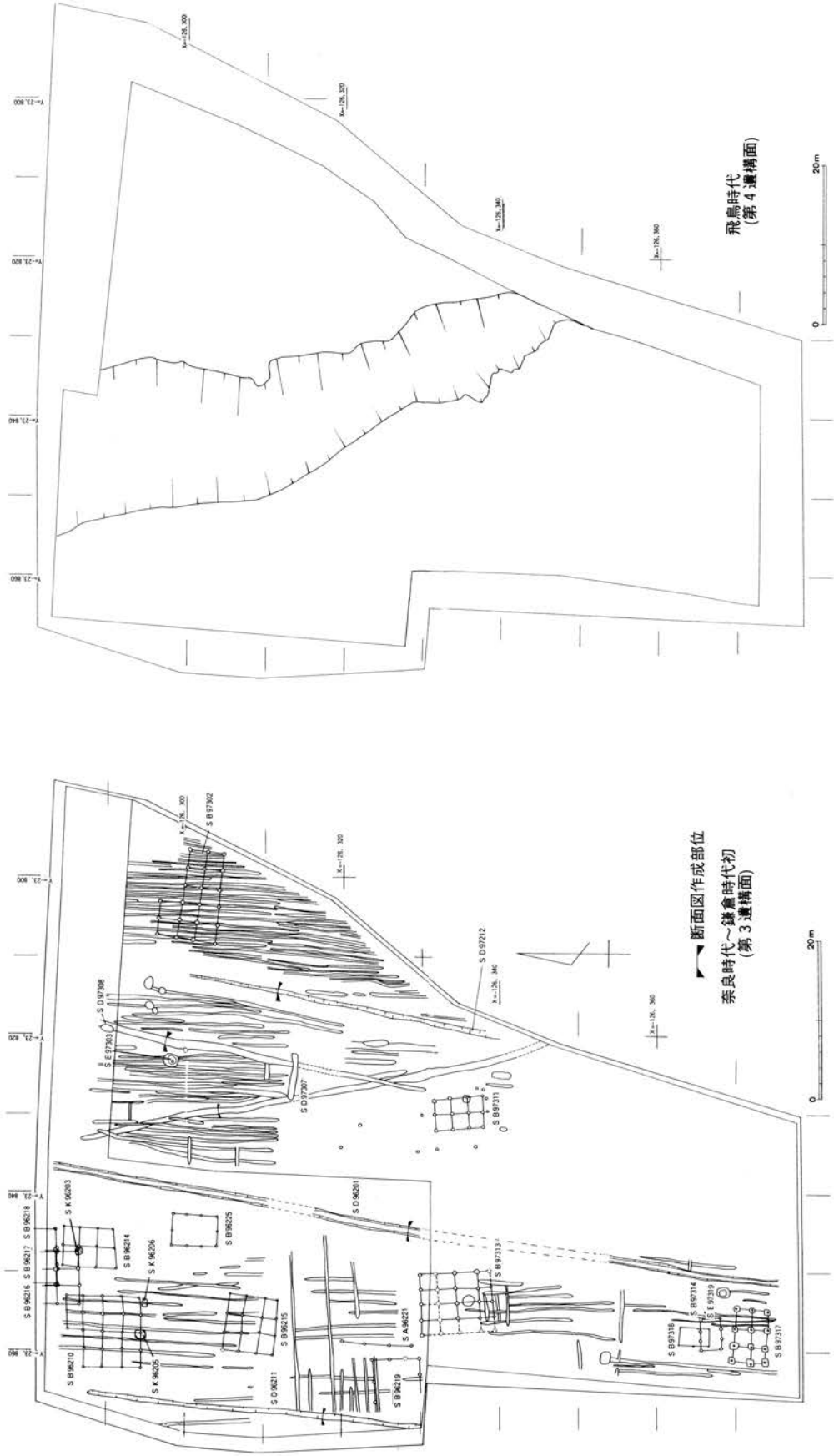
E地区遺構平面図(2)



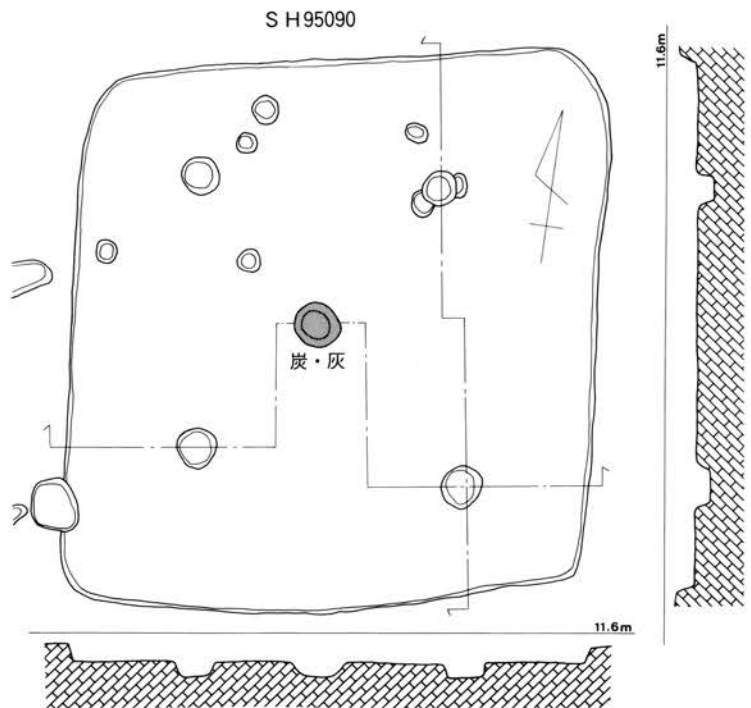
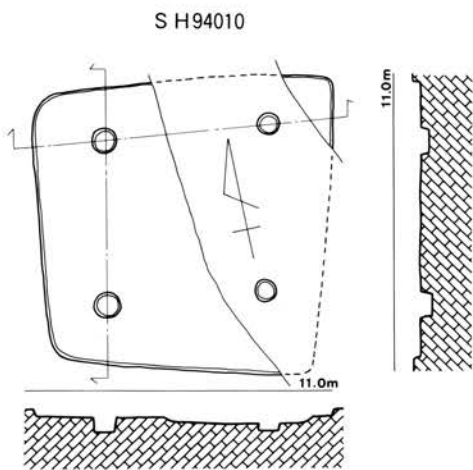
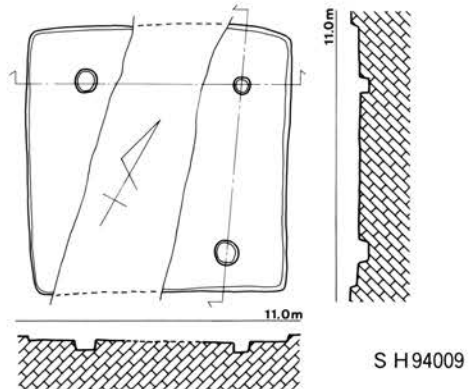
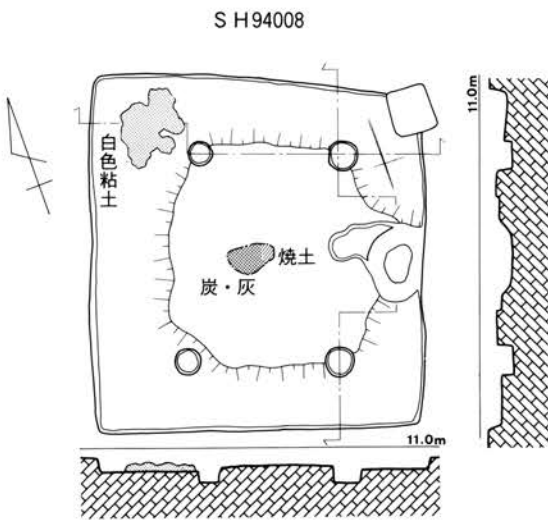
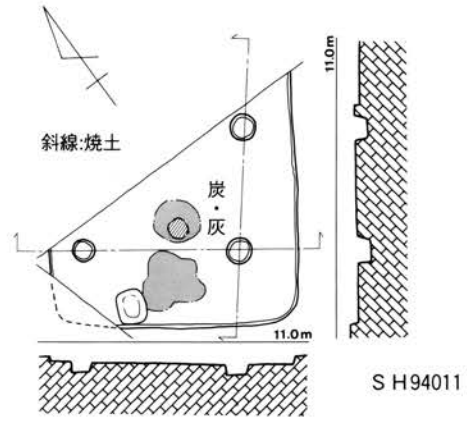
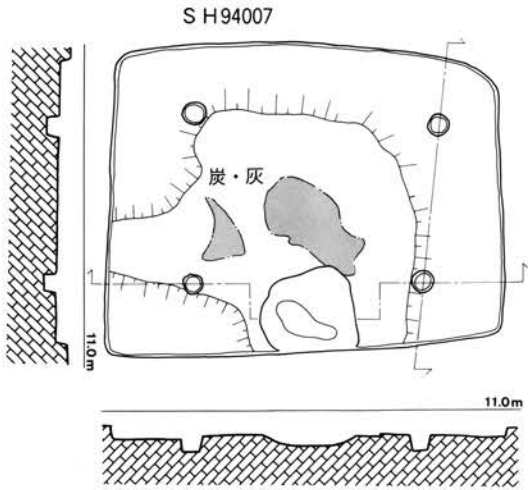
E地区遺構平面図(3)



F地区遺構平面図(1)

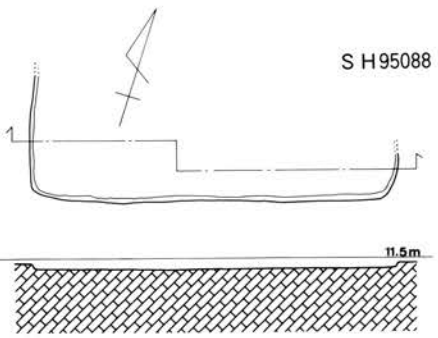
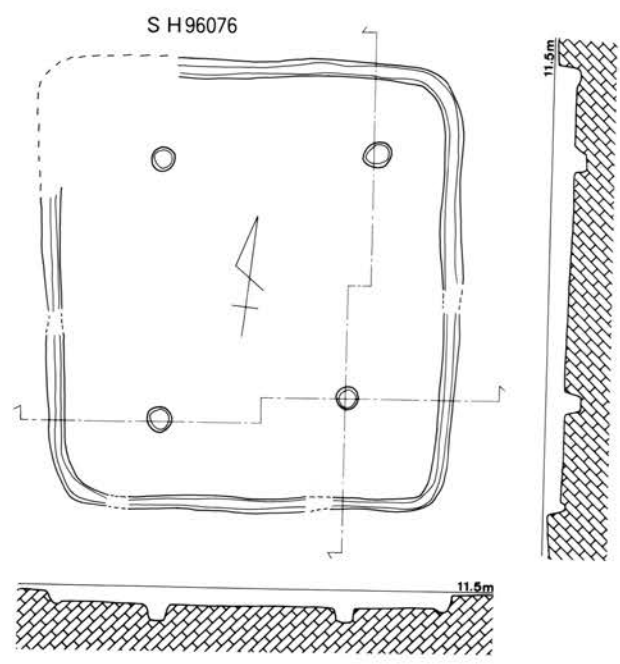
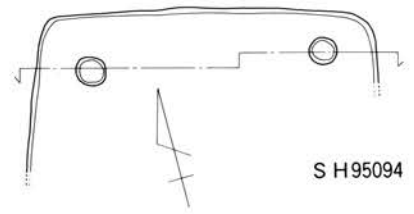
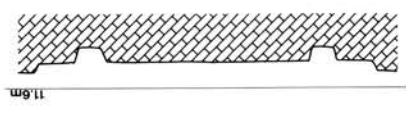
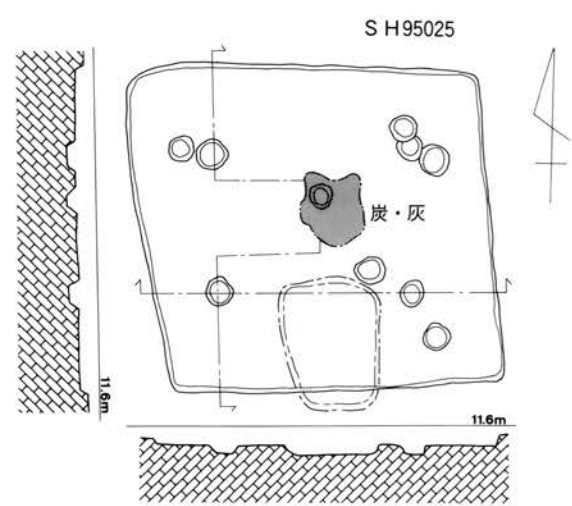
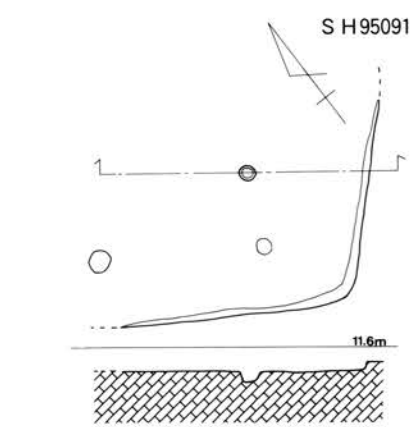
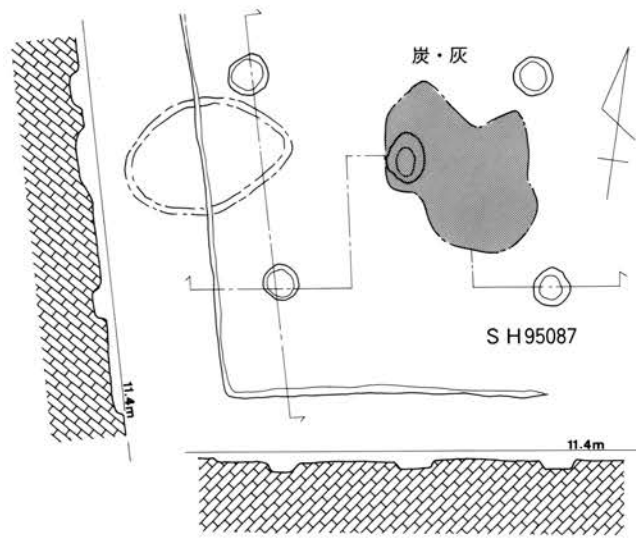
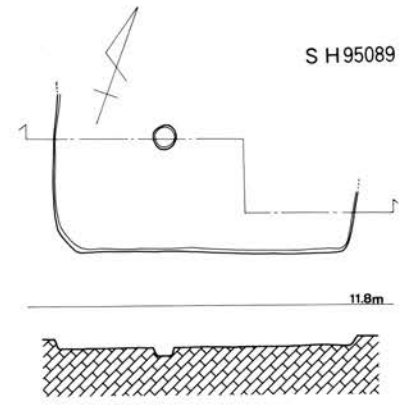


F地区遺構平面図(2)

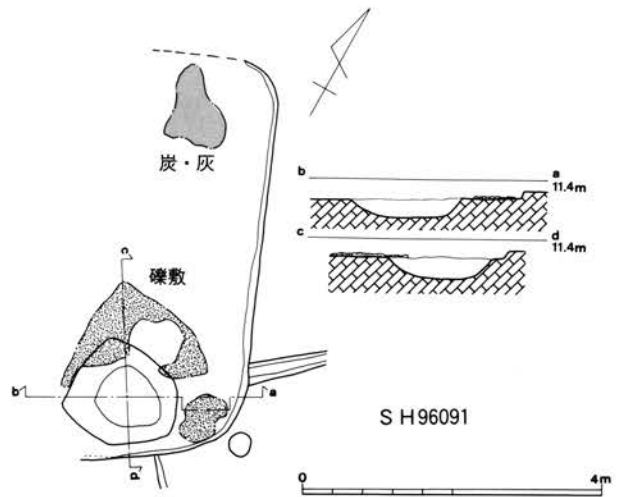
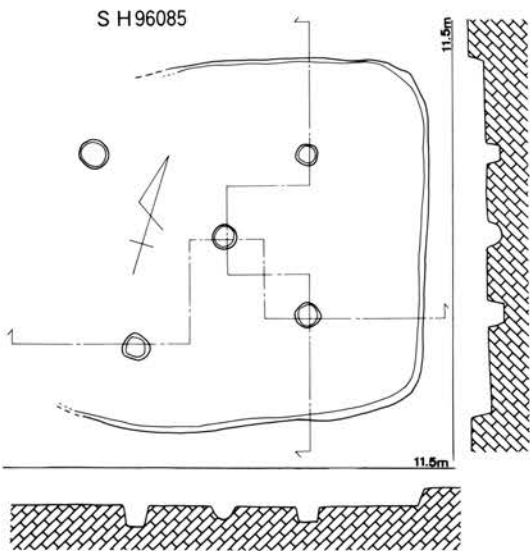
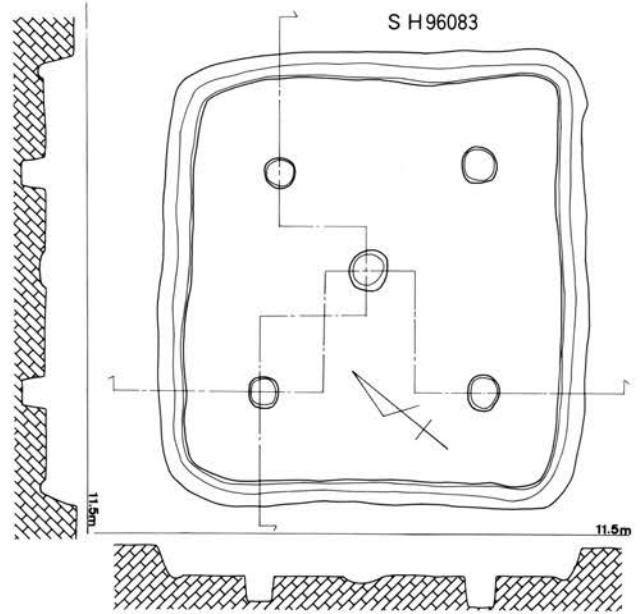
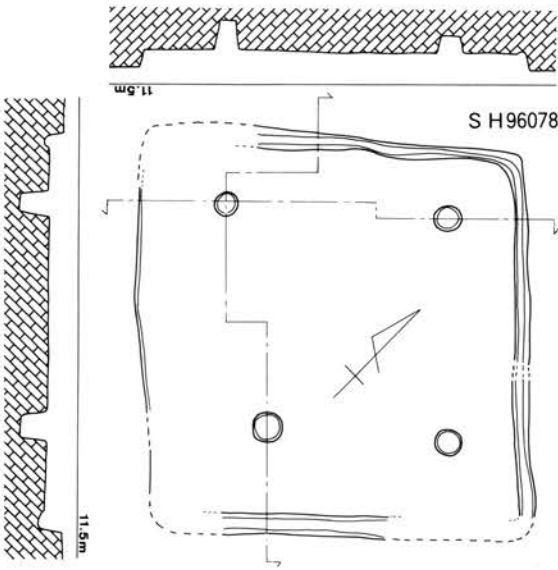
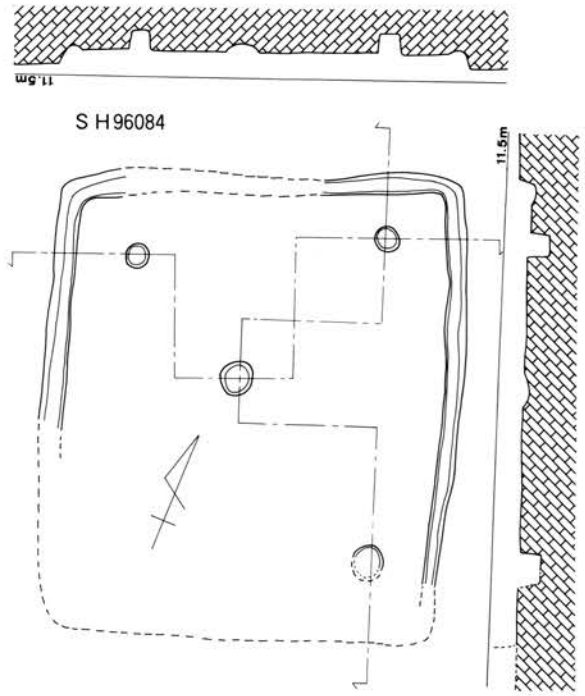
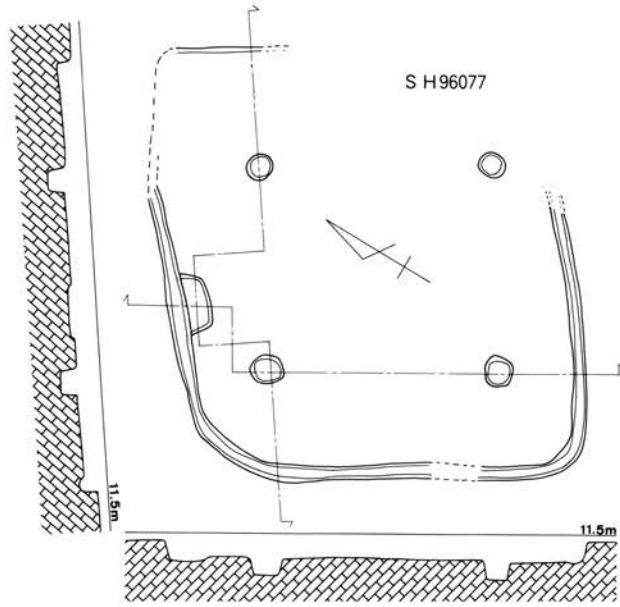


0 4m

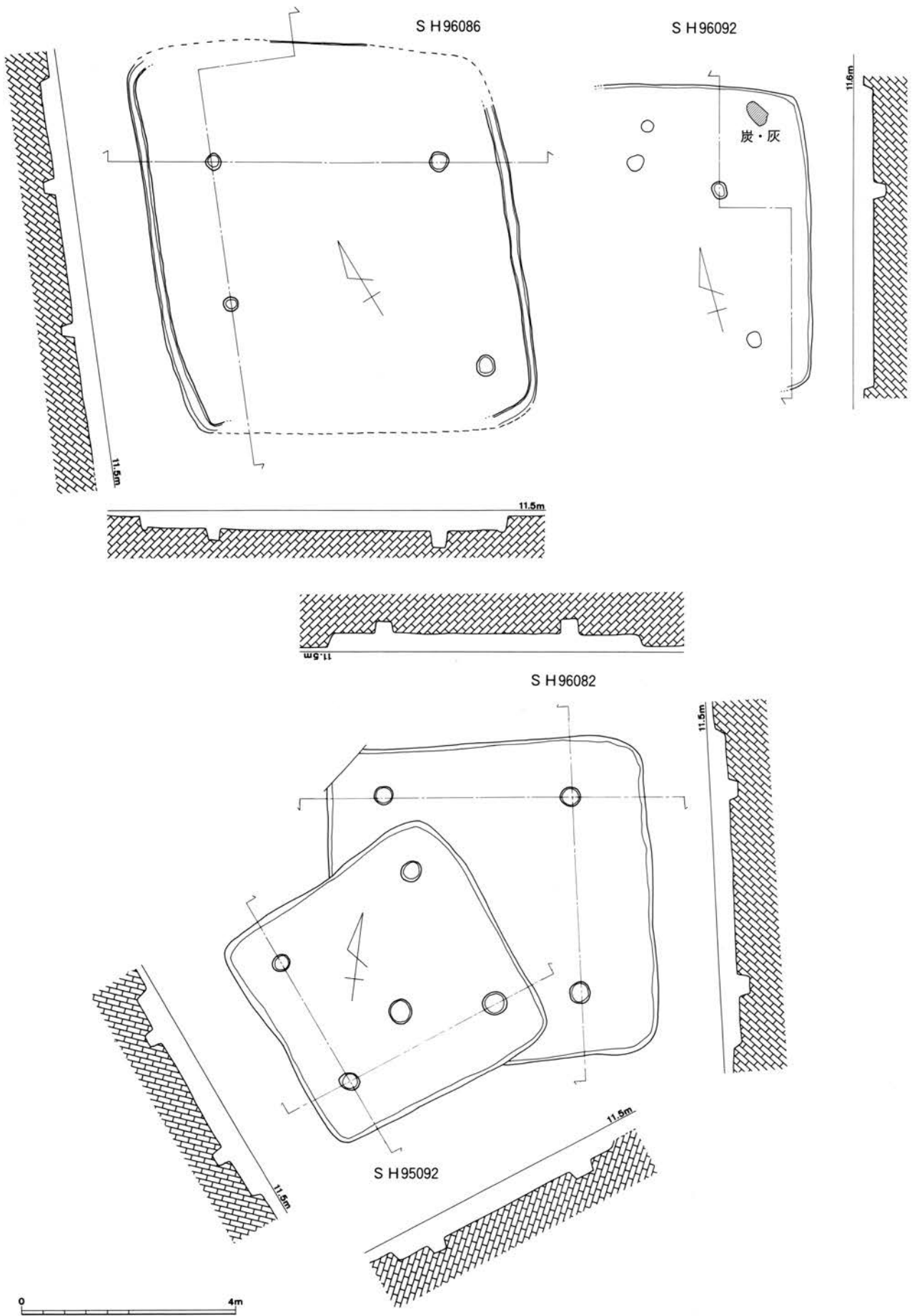
弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(1)



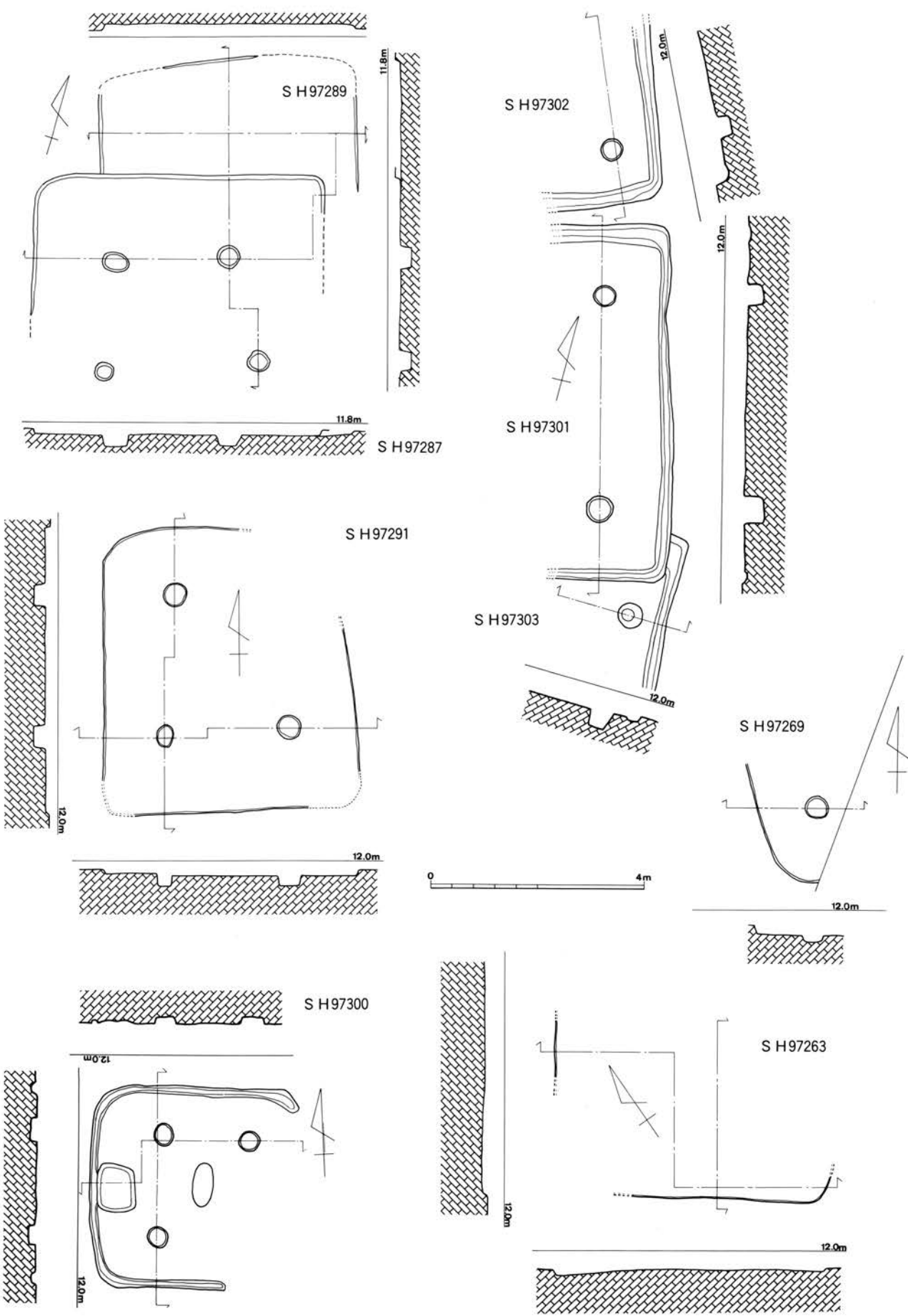
弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(2)



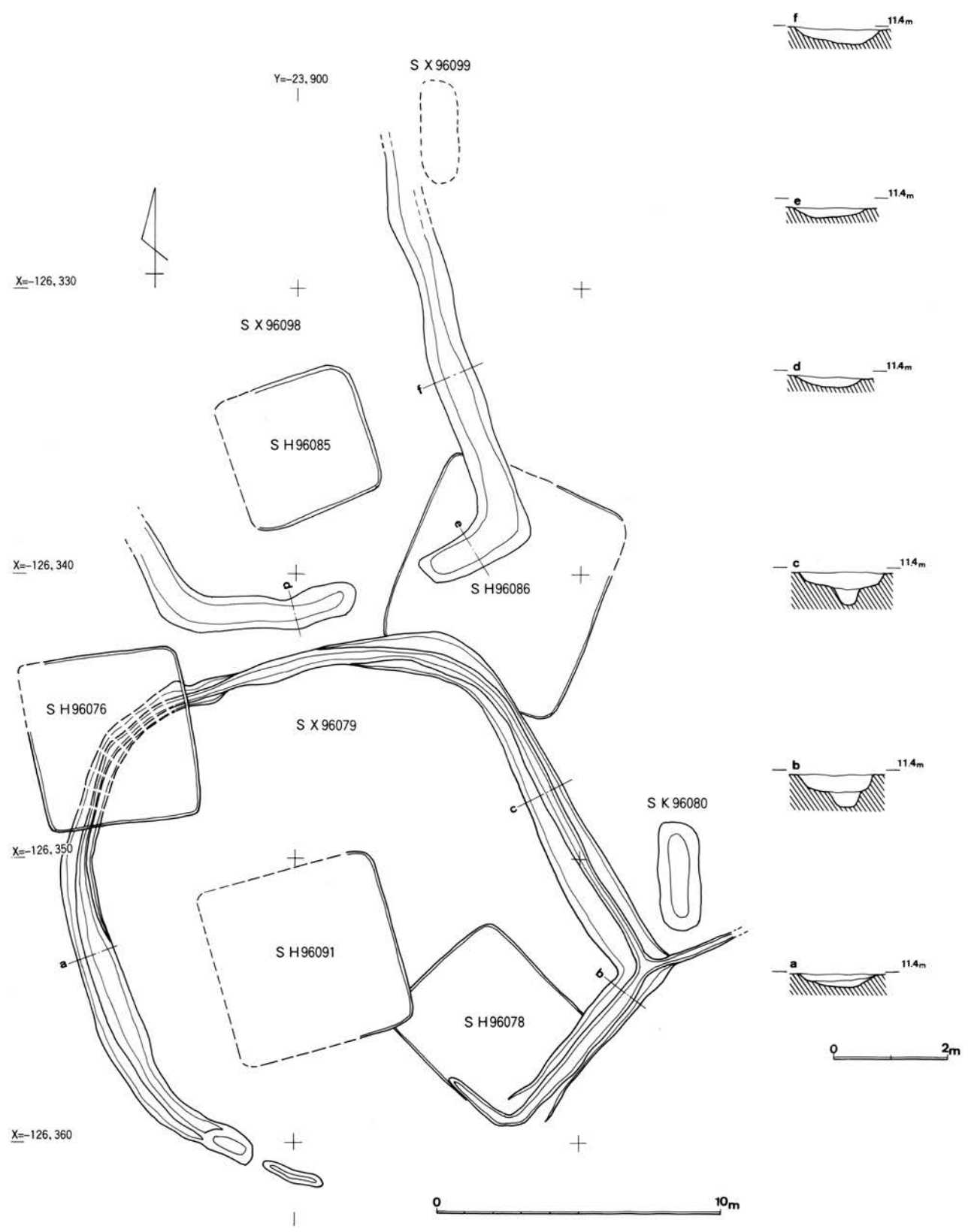
弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(3)



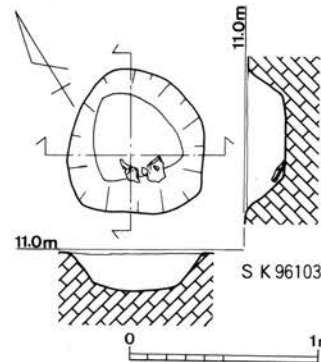
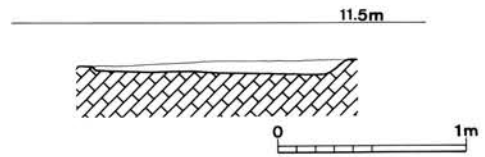
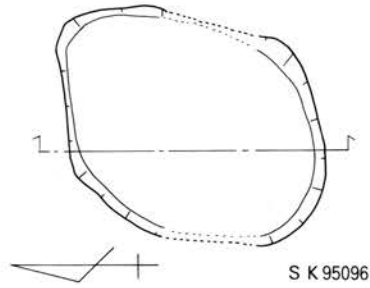
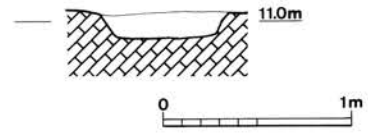
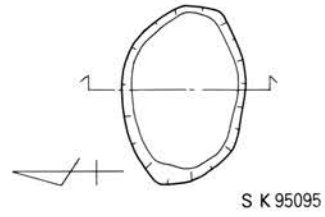
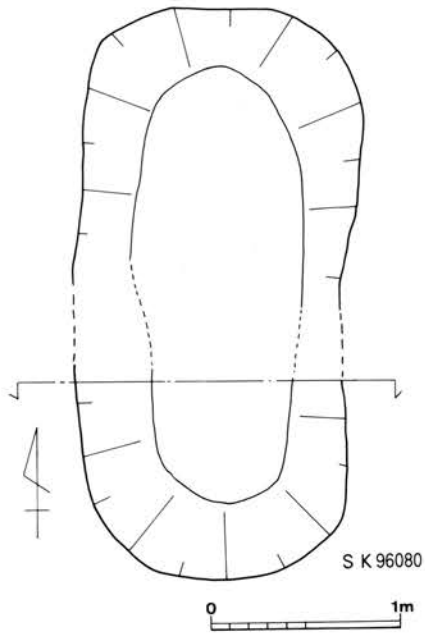
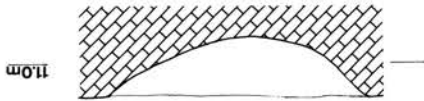
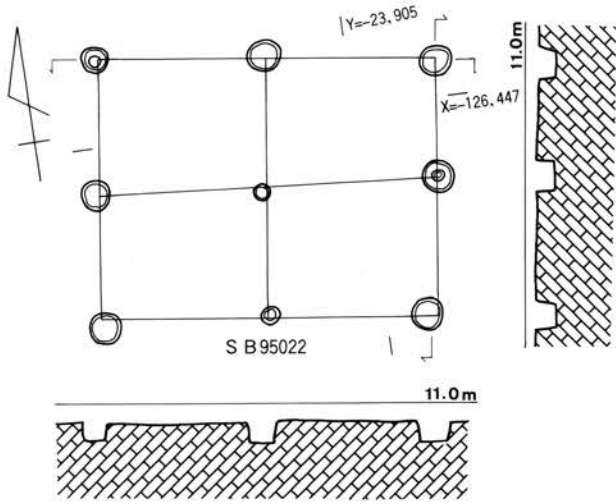
弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(4)

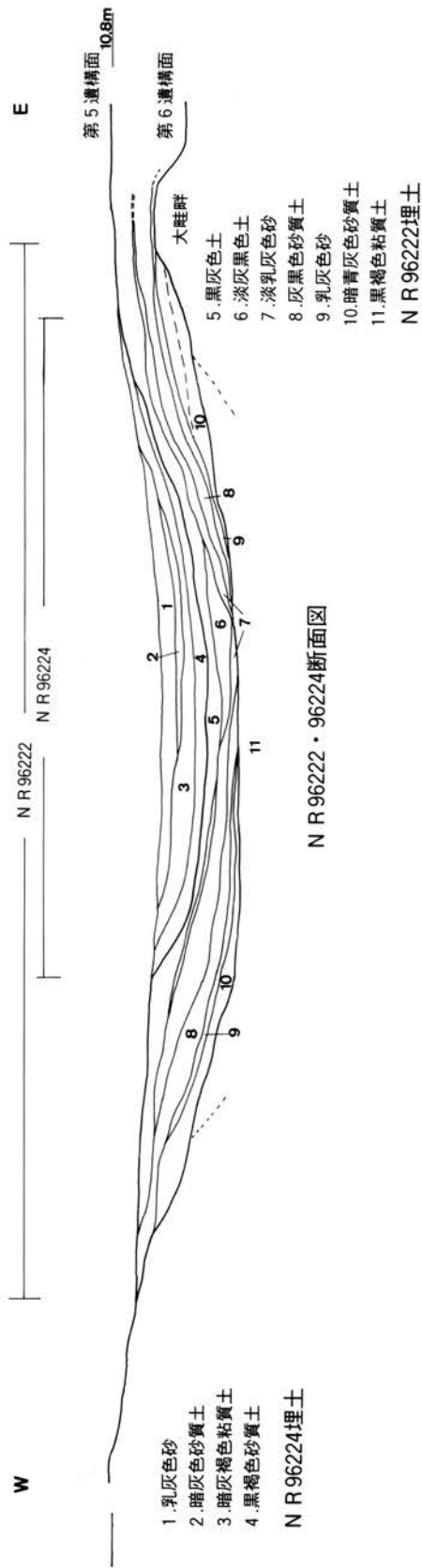


弥生時代後期末～古墳時代前期竪穴式住居跡実測図(5)

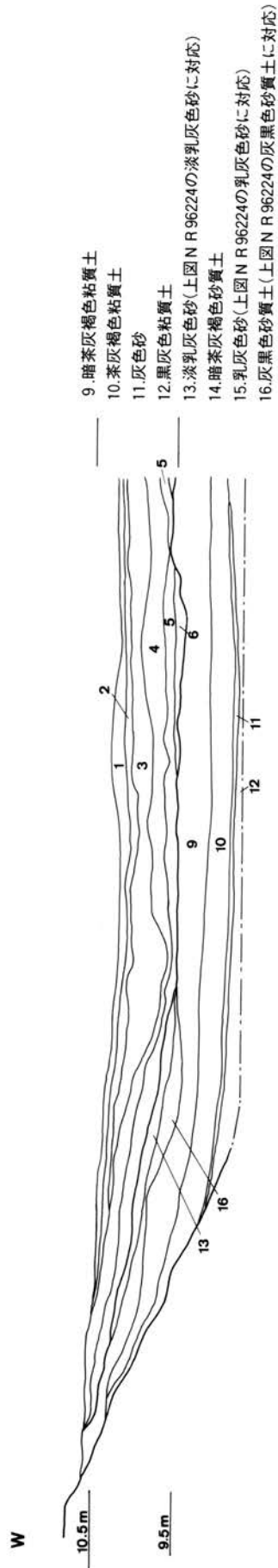


C地区 S X 96079 · 96098平面图

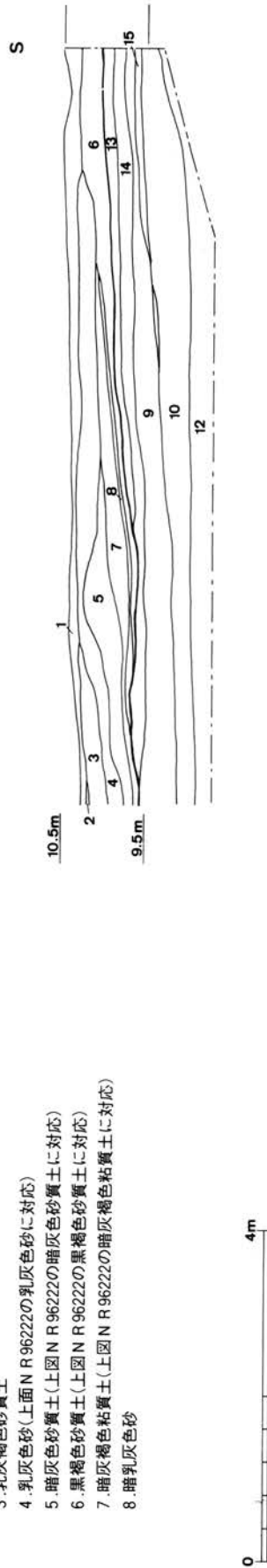




N R 96222・96224断面図

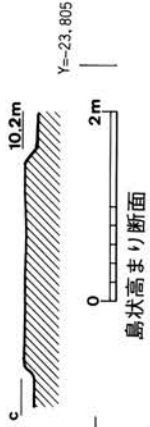


N R 97537断面図



0 4m

Y=23,815
※図中 d~K、l~P は図版第21の断面図に対応



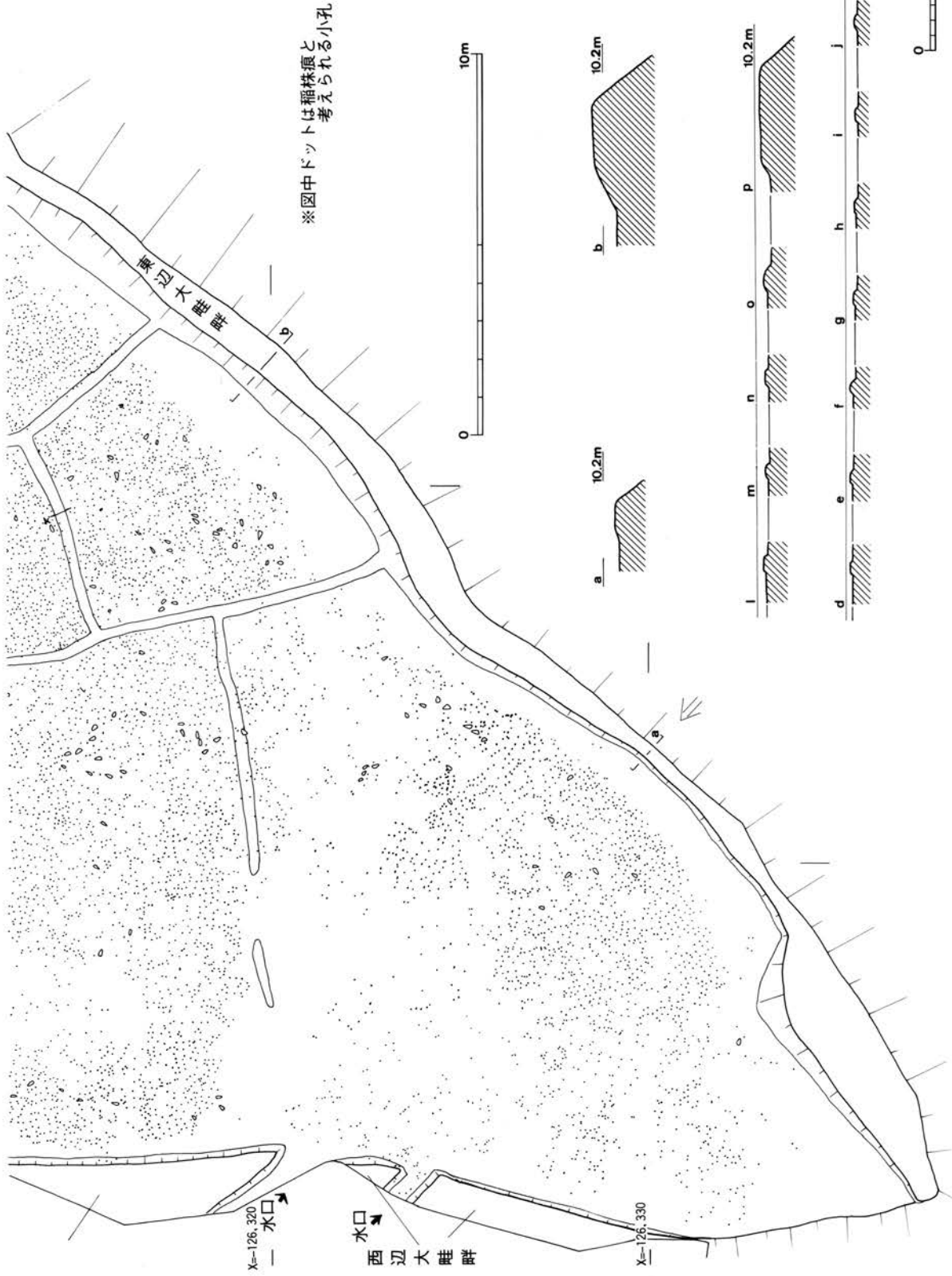
※図中ドットは
稲株痕と
考えられる小孔



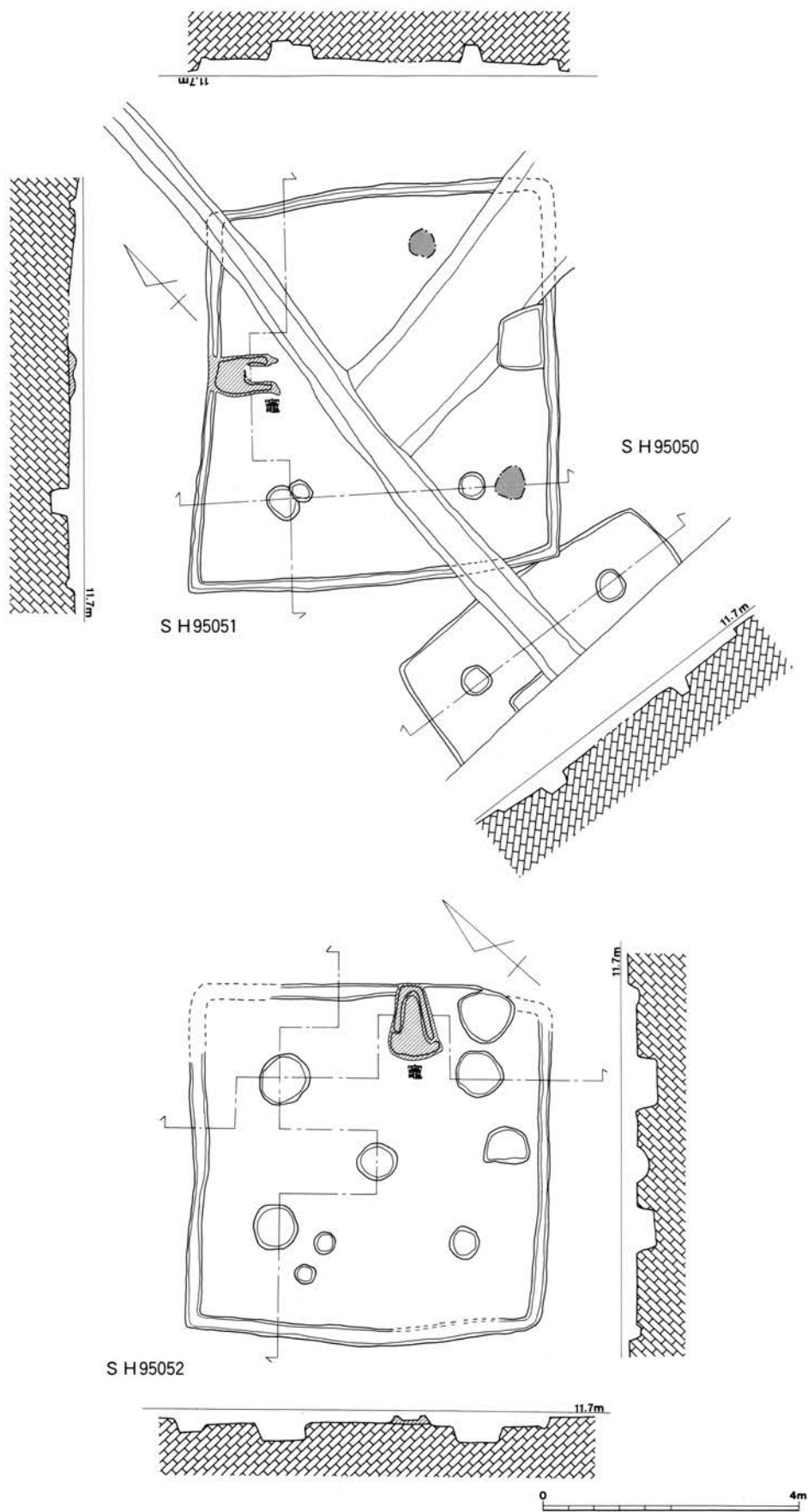
F地区第6遺構面水田跡実測図1 (小畦畔は下場線のみ表示)

| Y=23,820

| Y=23,830

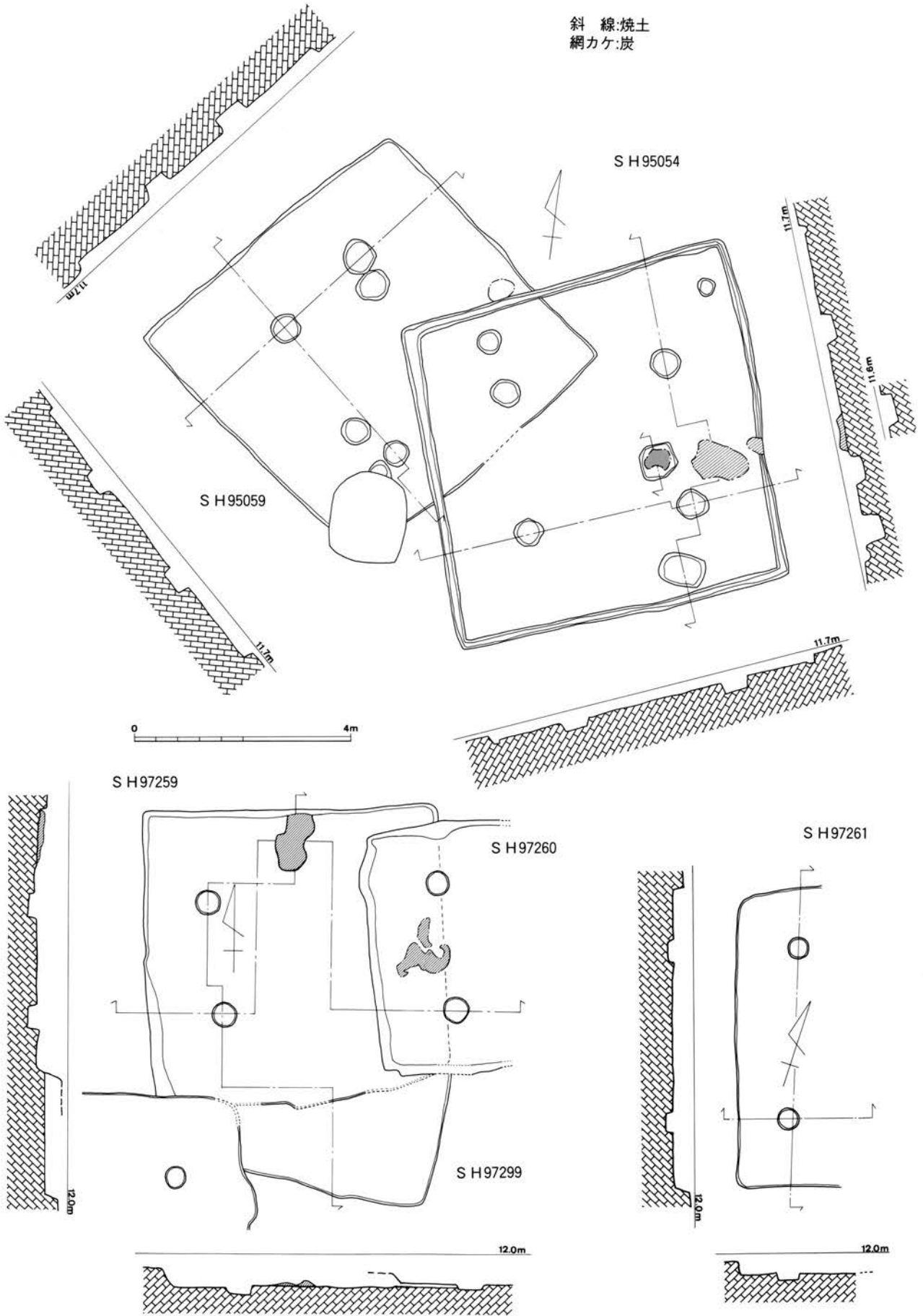


F地区第6遺構面水田跡実測図2 (小畦畔は下場線のみ表示)

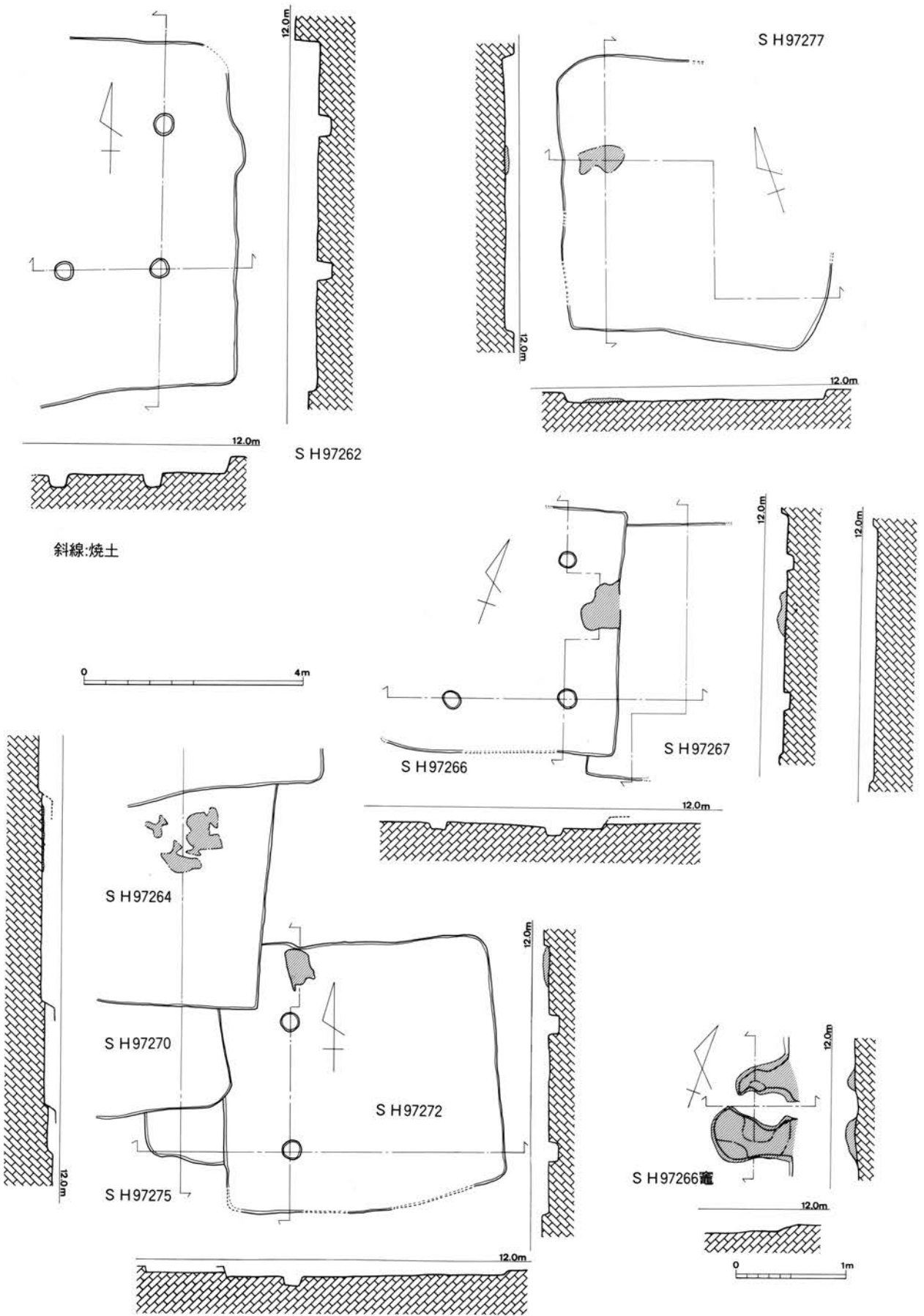


斜線:焼土
網カケ:炭・灰

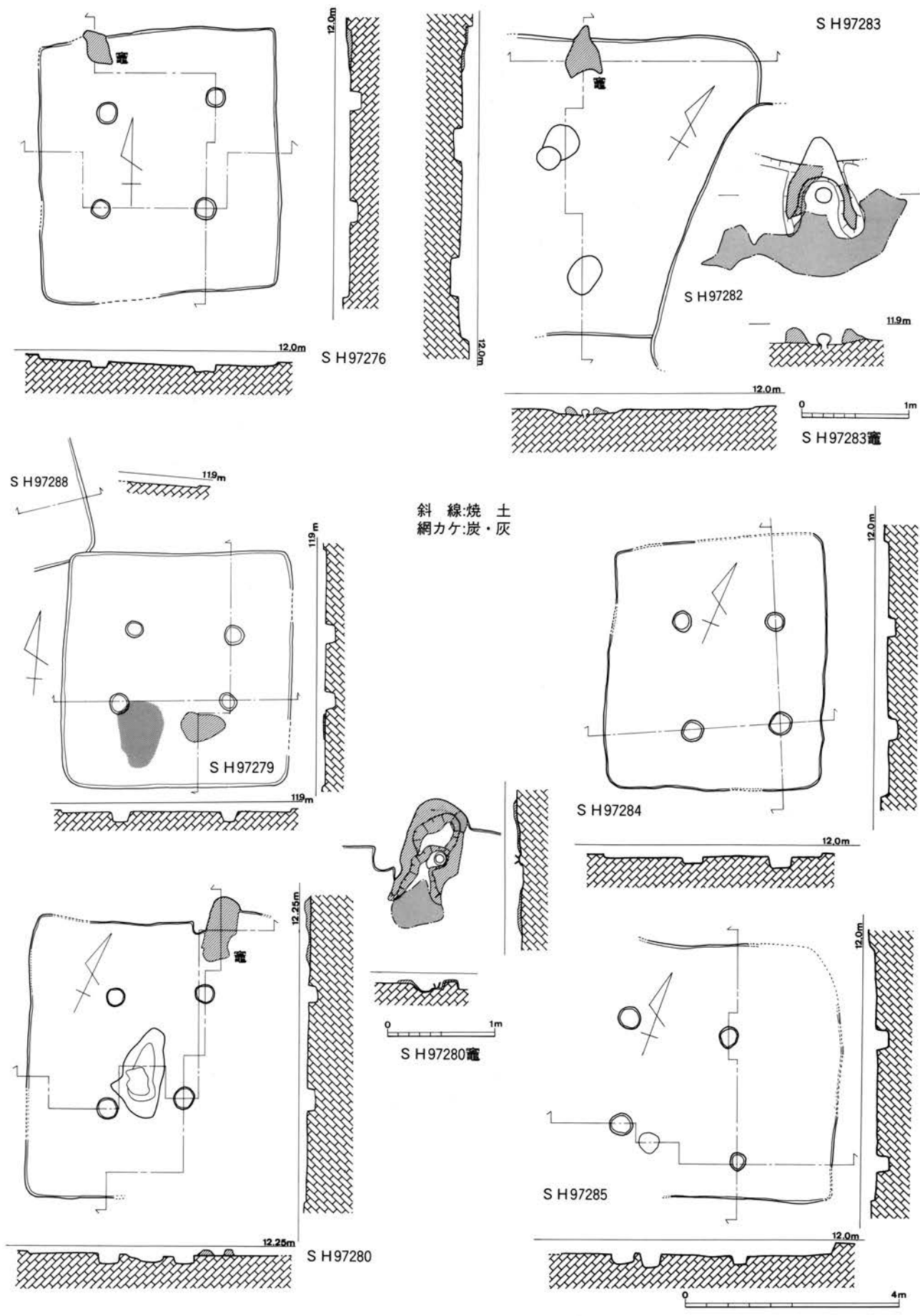
古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(2)



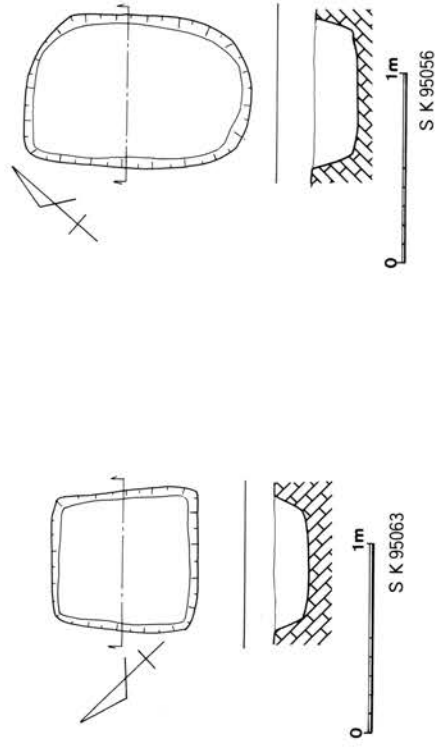
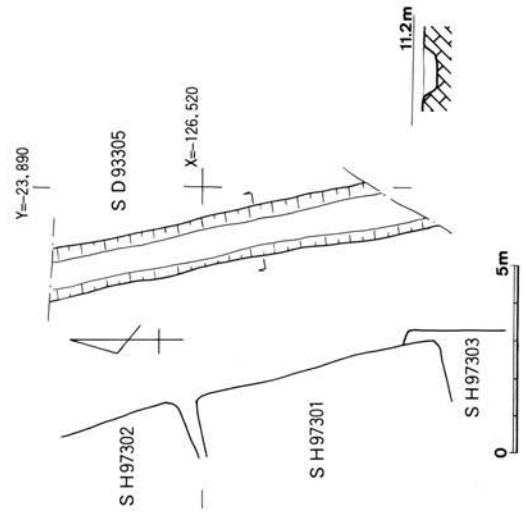
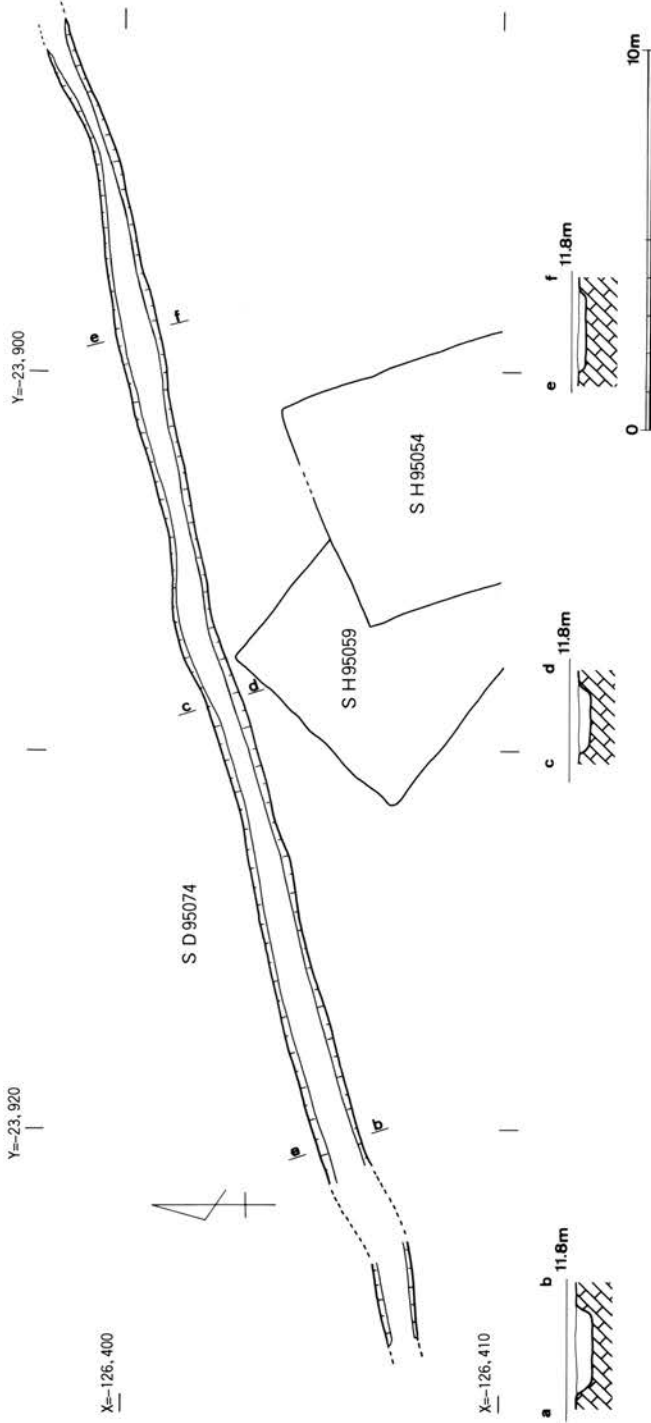
古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(3)



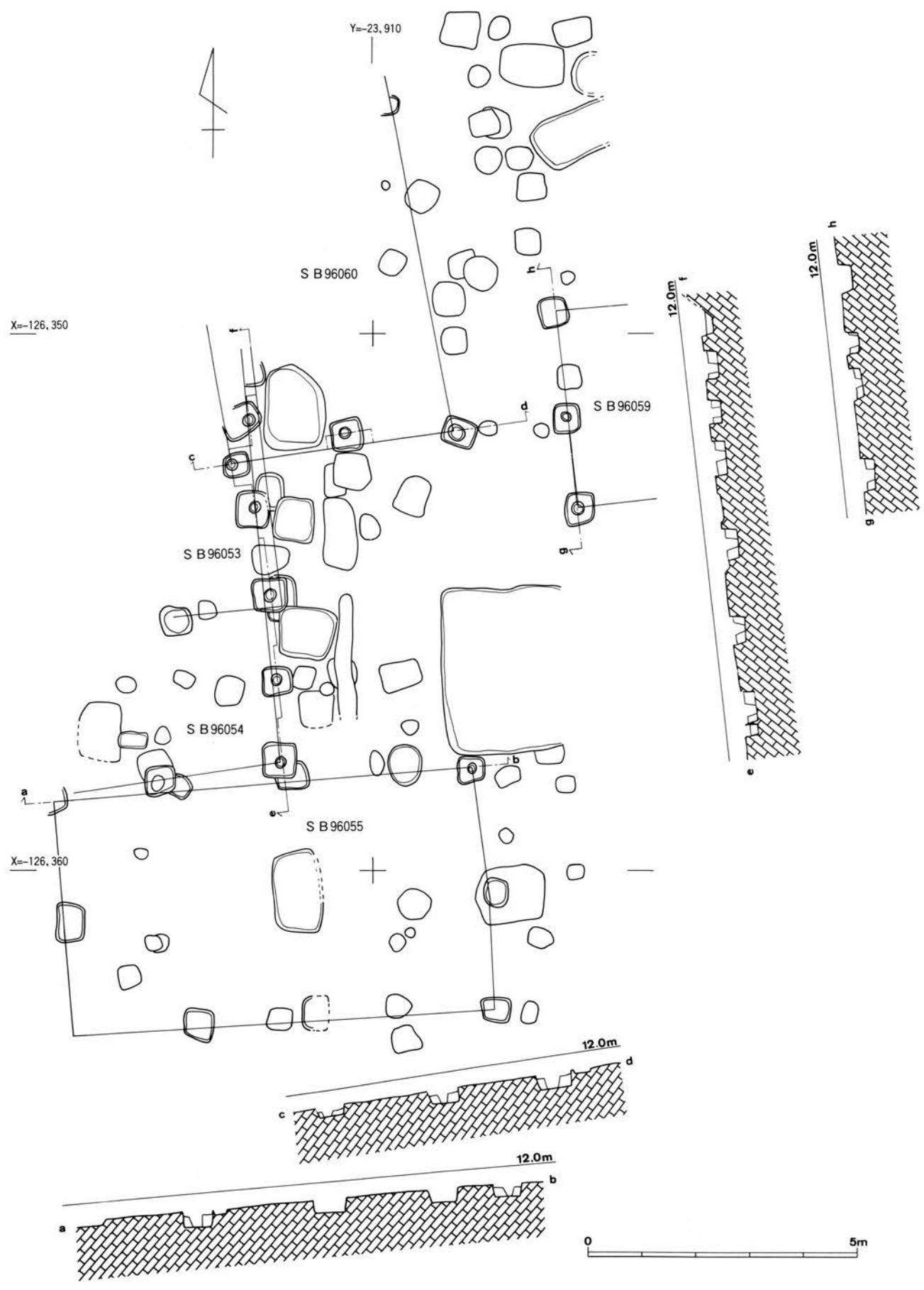
古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(4)



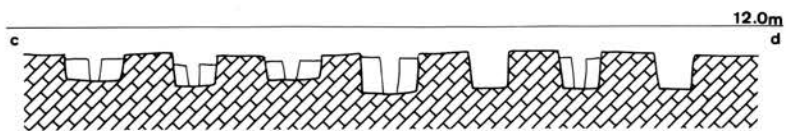
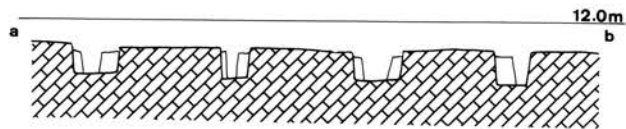
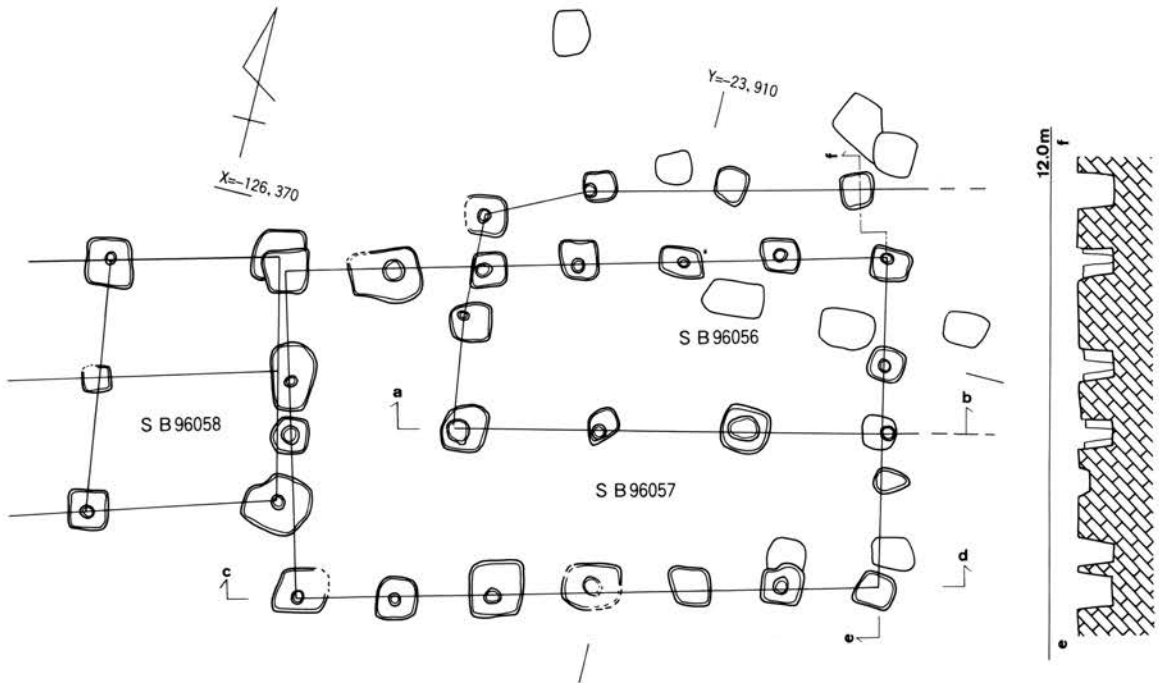
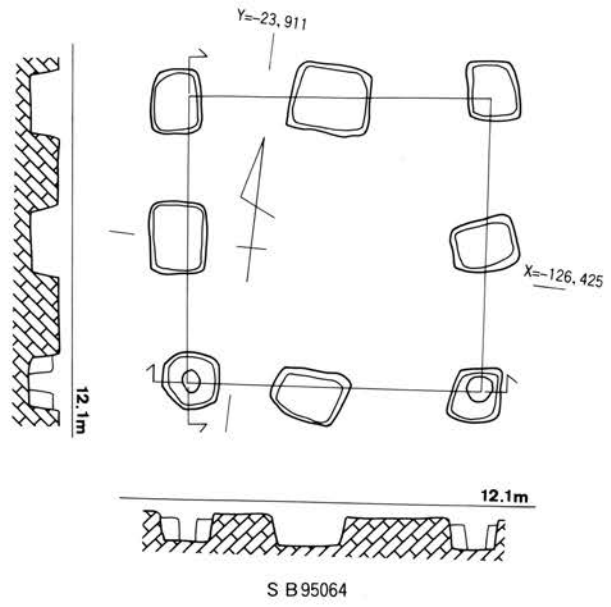
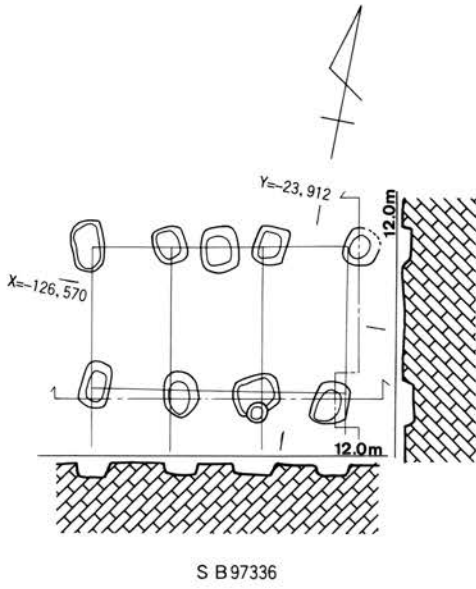
古墳時代中期末～飛鳥時代竪穴式住居跡実測図(5)



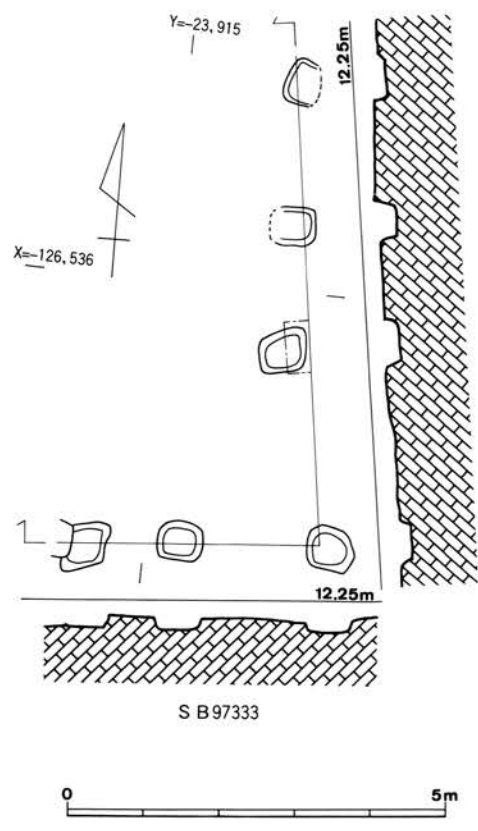
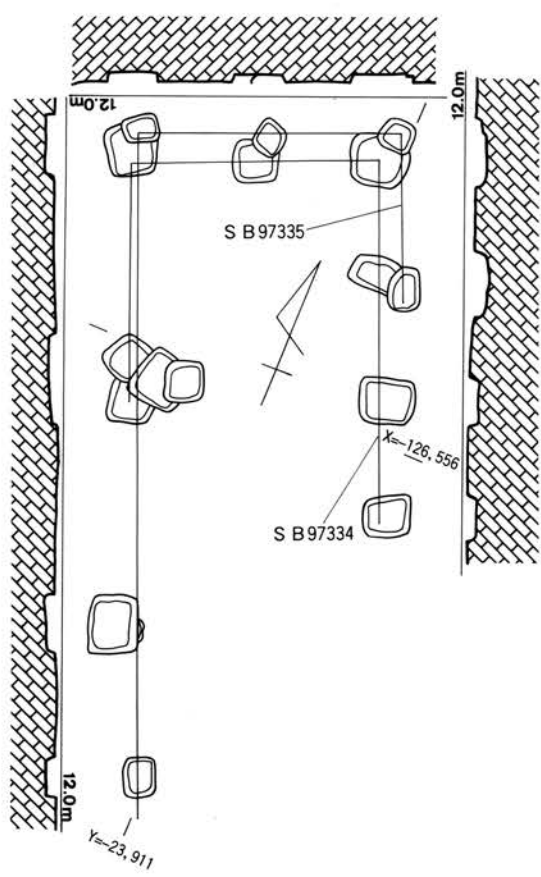
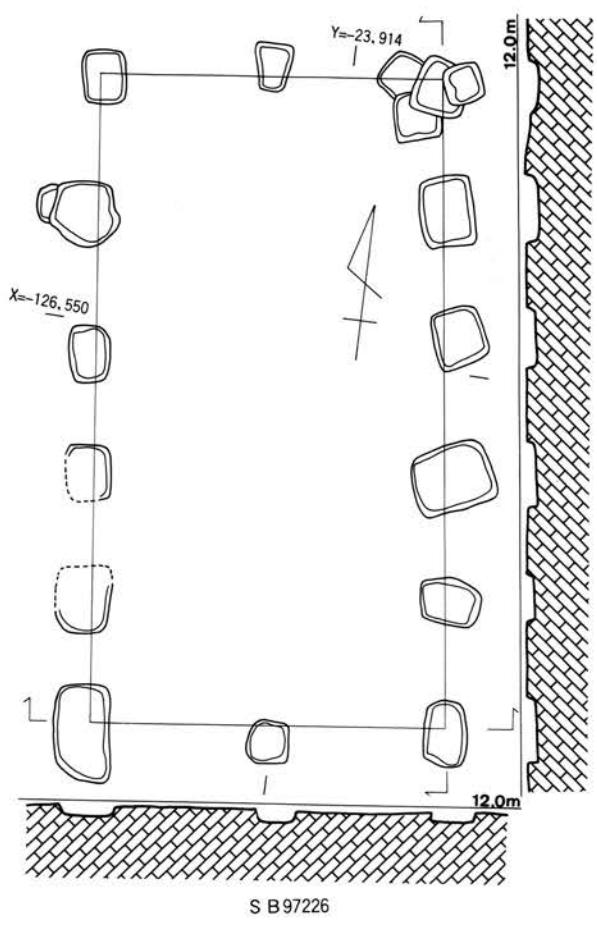
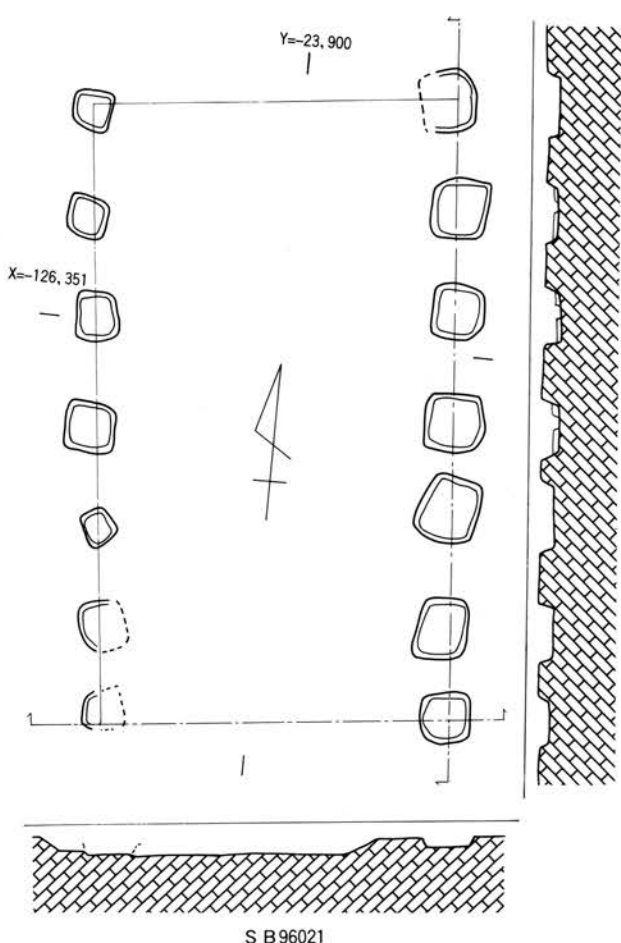
古墳時代中期末～後期遺構実測図



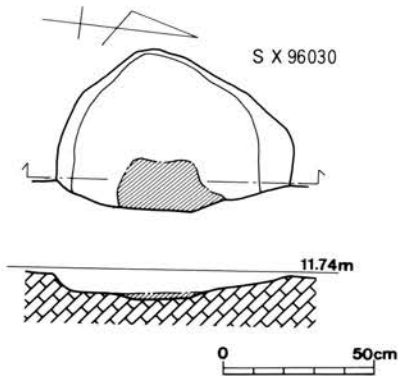
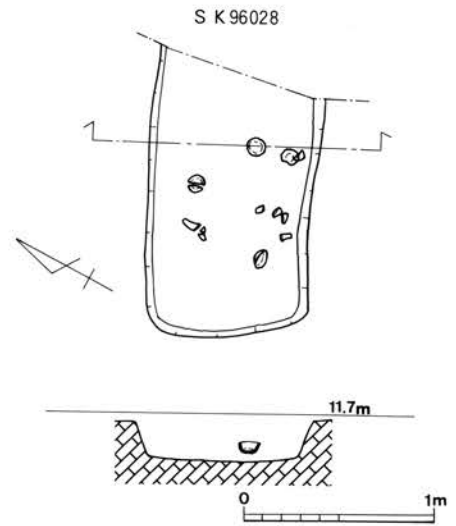
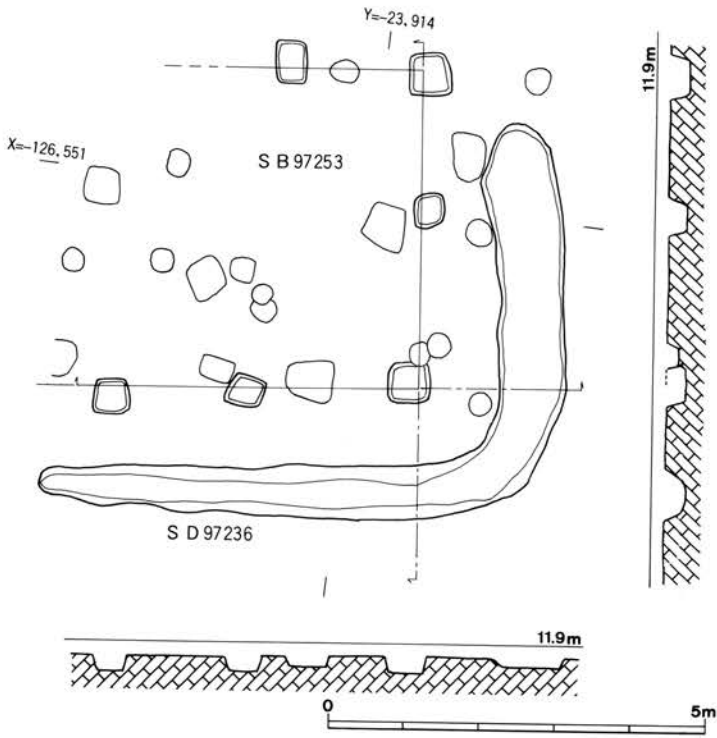
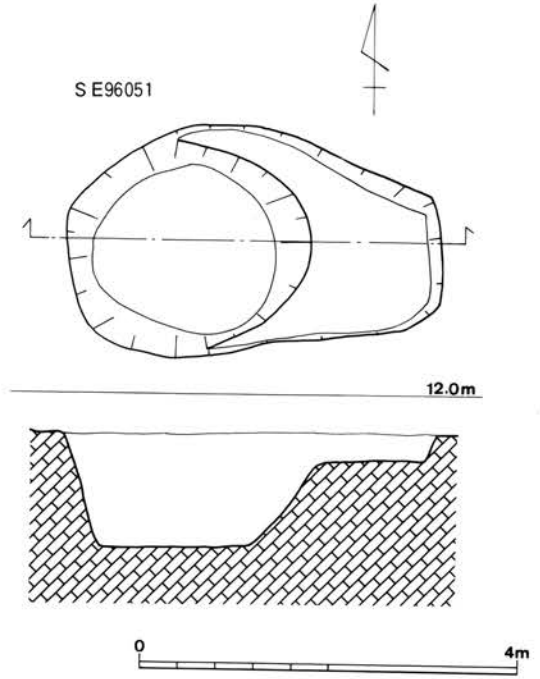
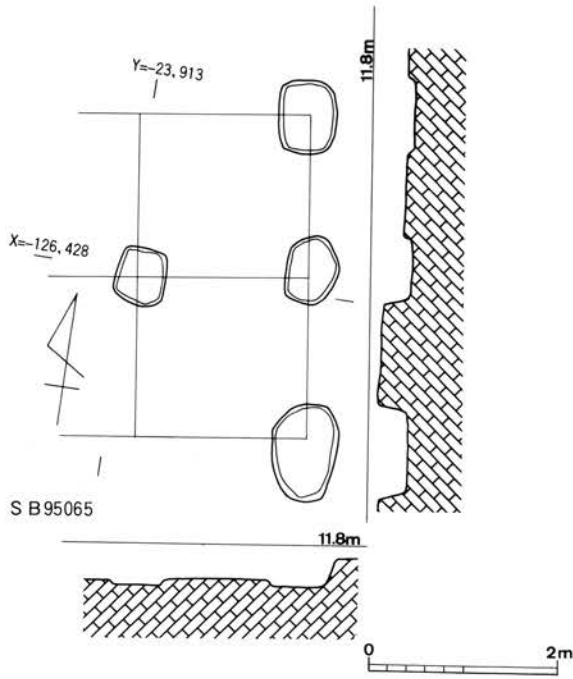
飛鳥時代掘立柱建物跡実測図(1)



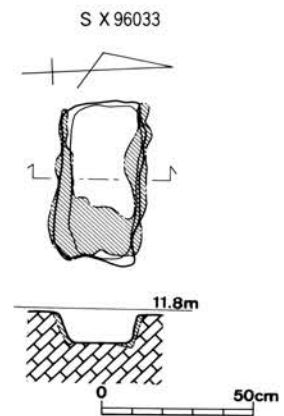
飛鳥時代掘立柱建物跡(2)



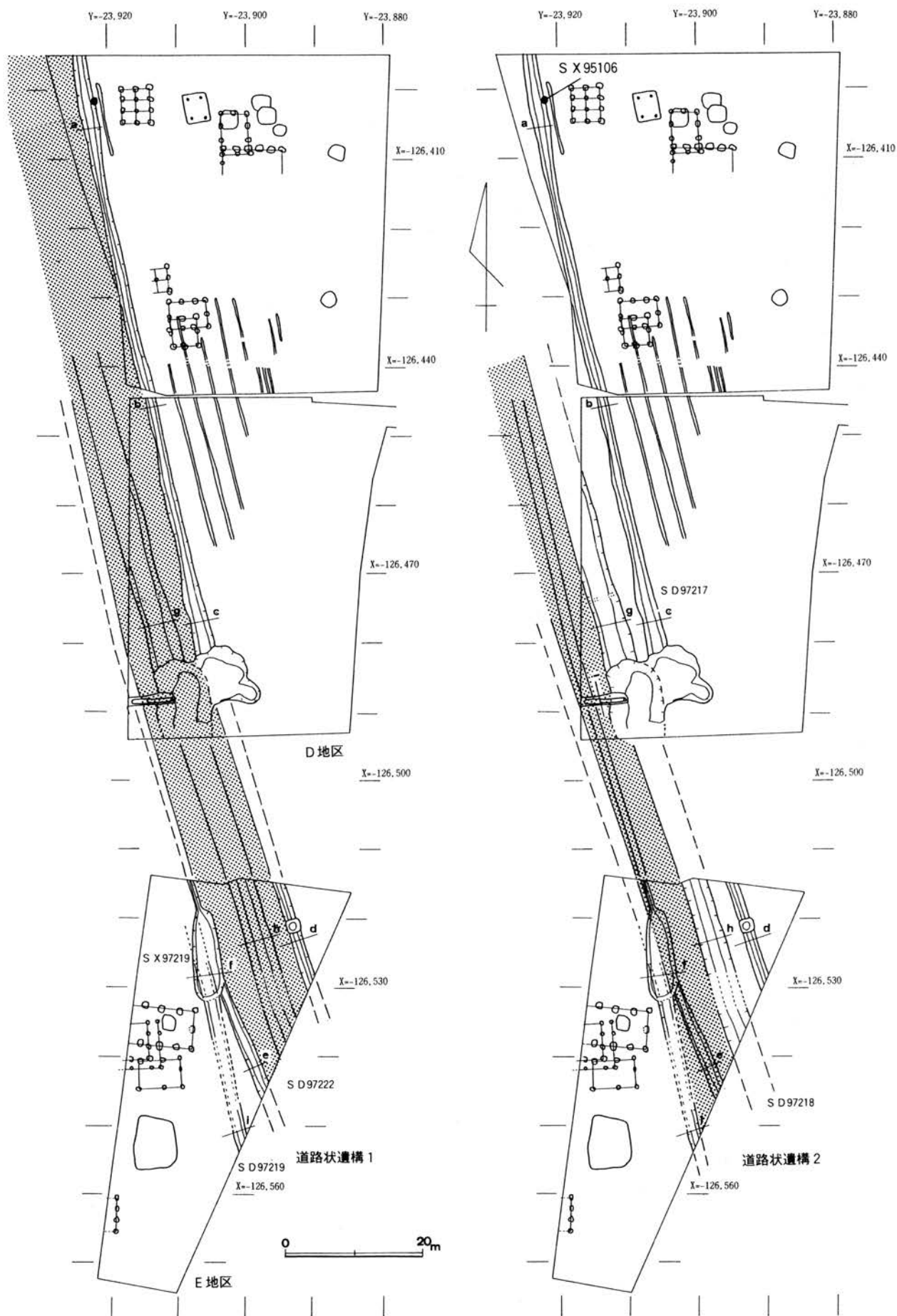
飛鳥時代掘立柱建物跡(3)



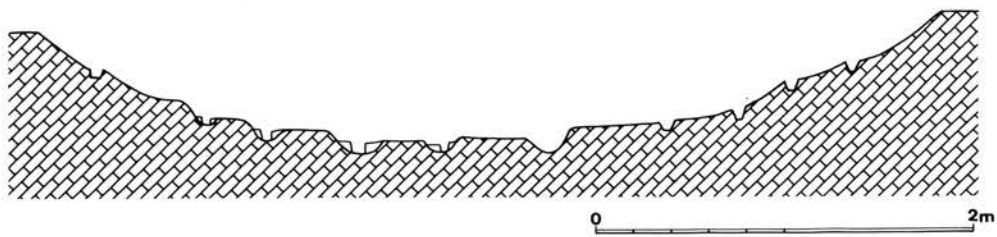
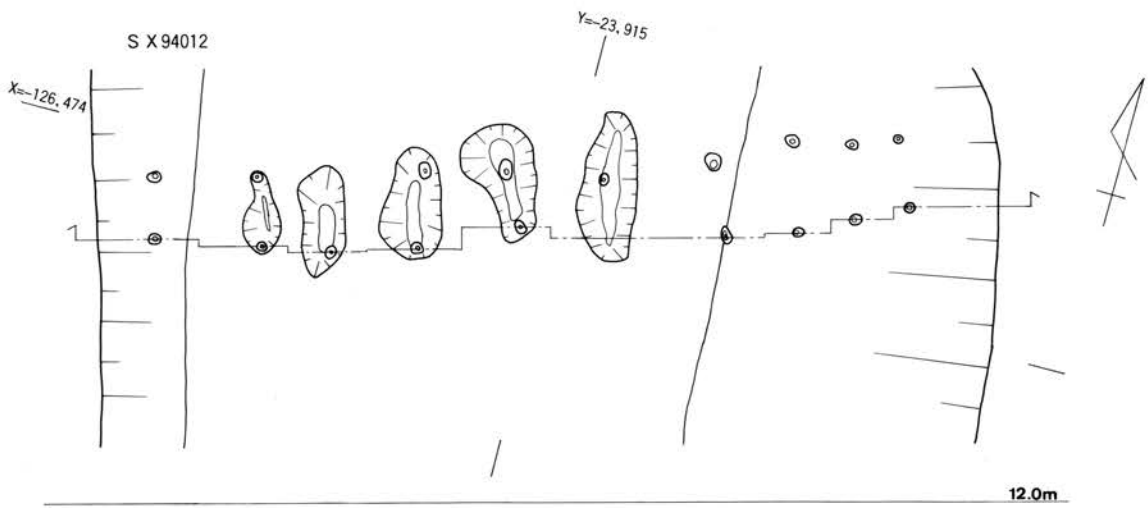
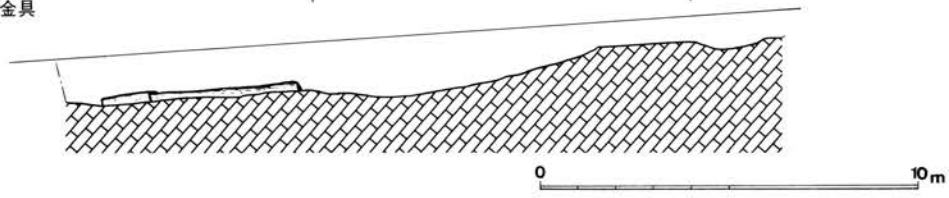
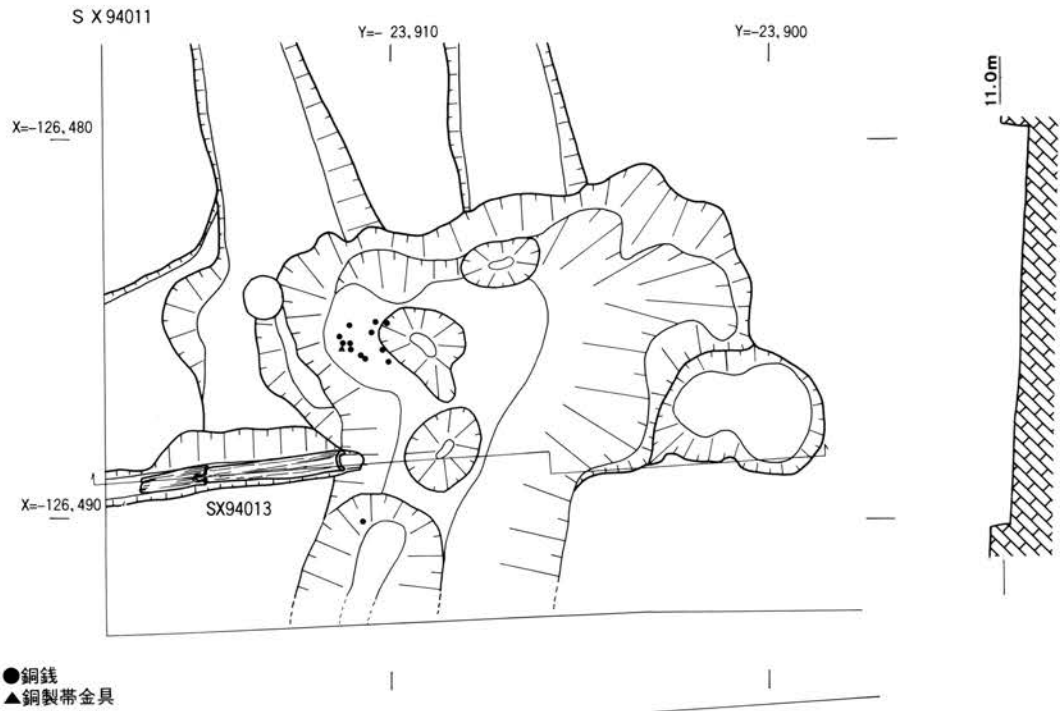
斜線は焼土



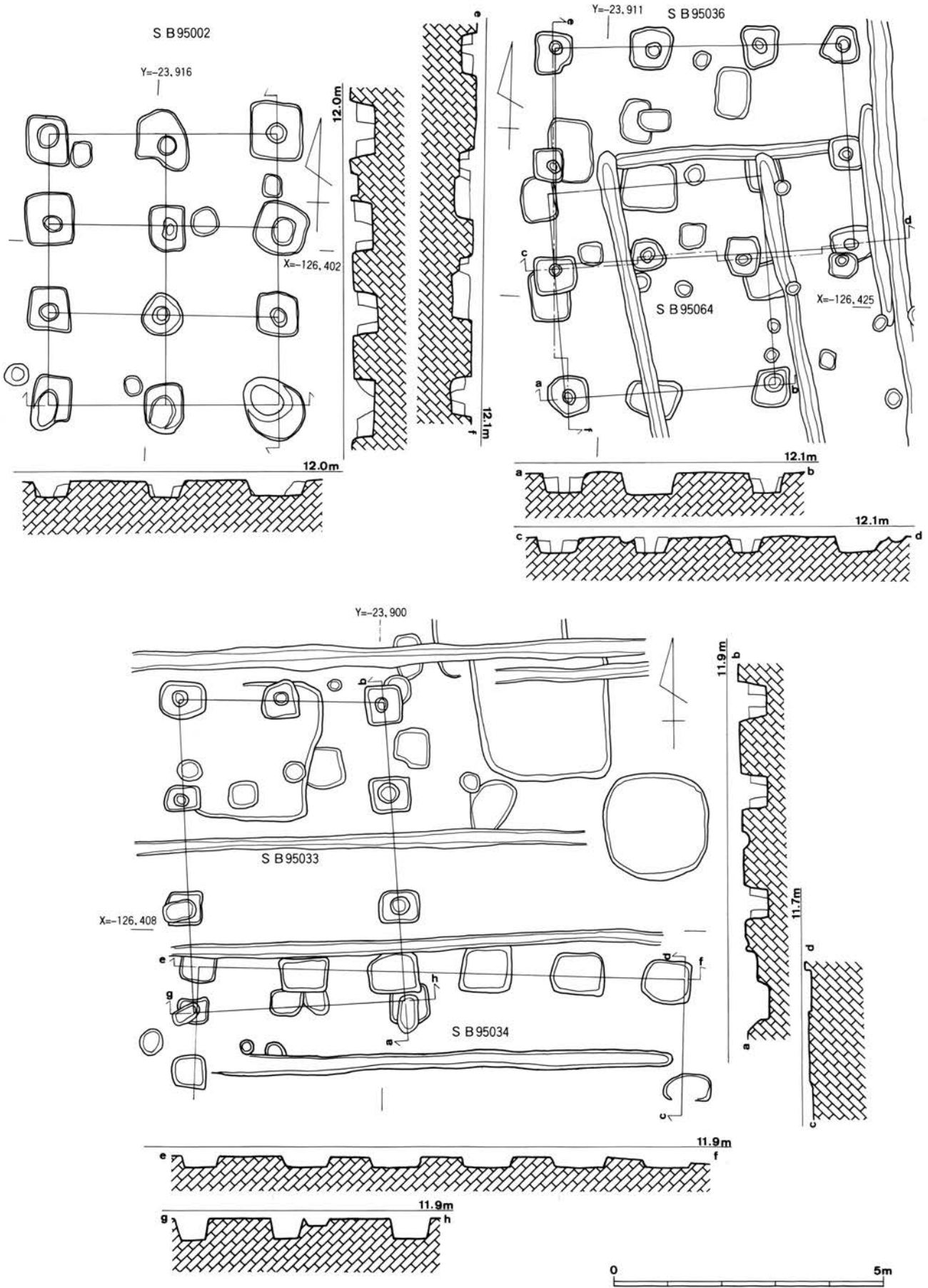
飛鳥時代遺構実測図



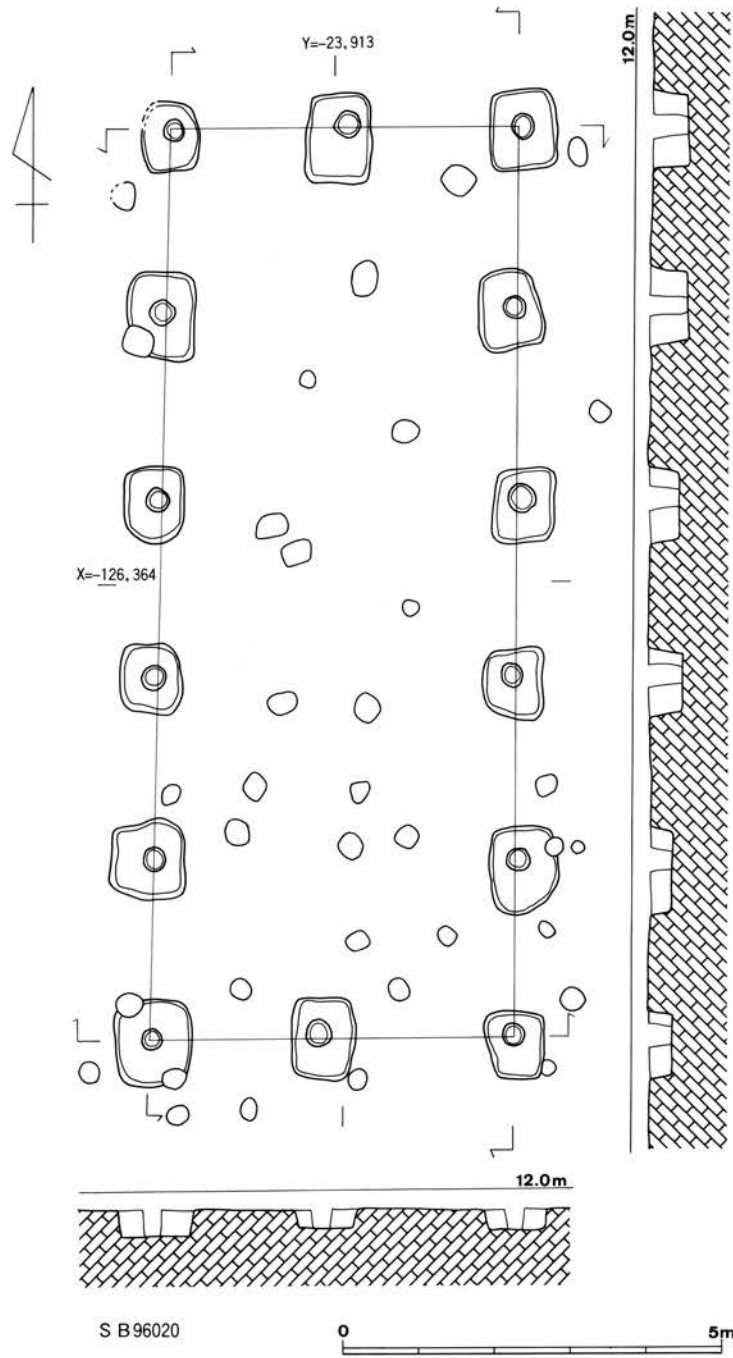
奈良～平安時代道路状遺構想定図



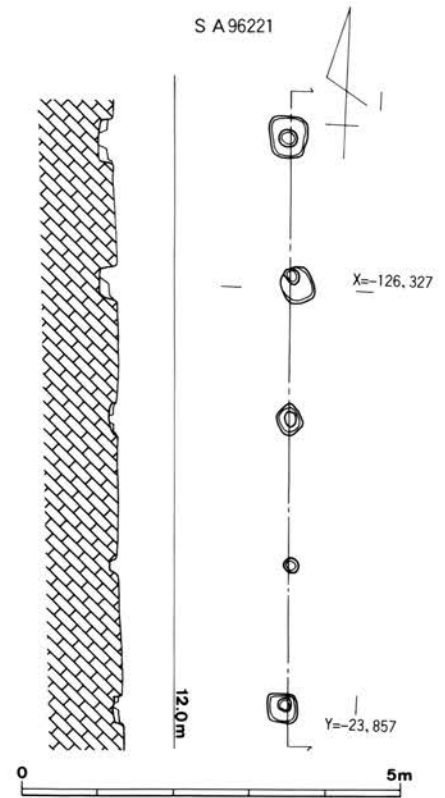
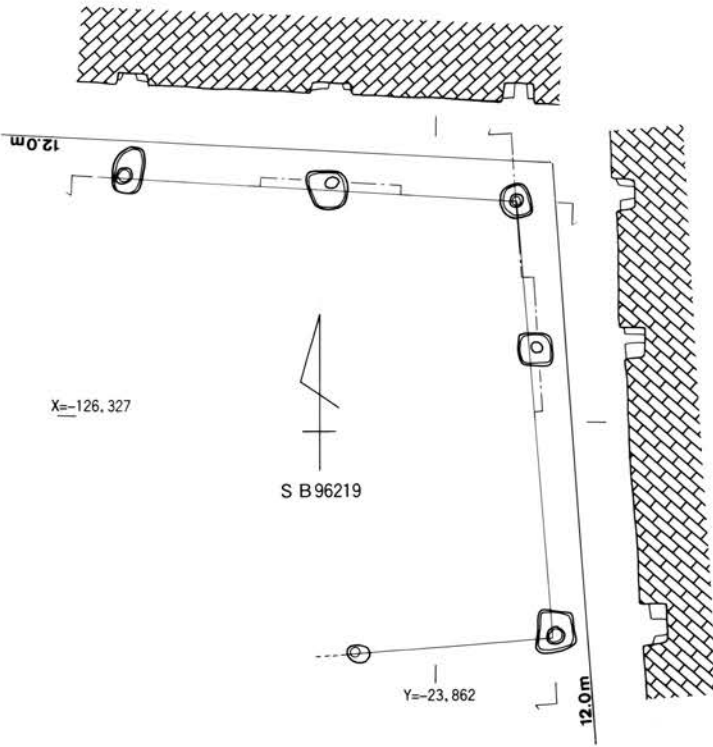
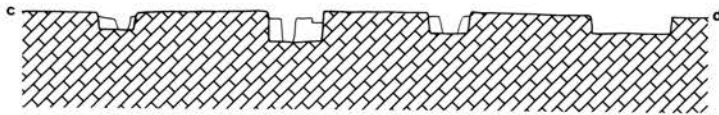
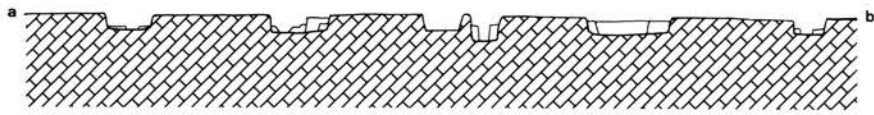
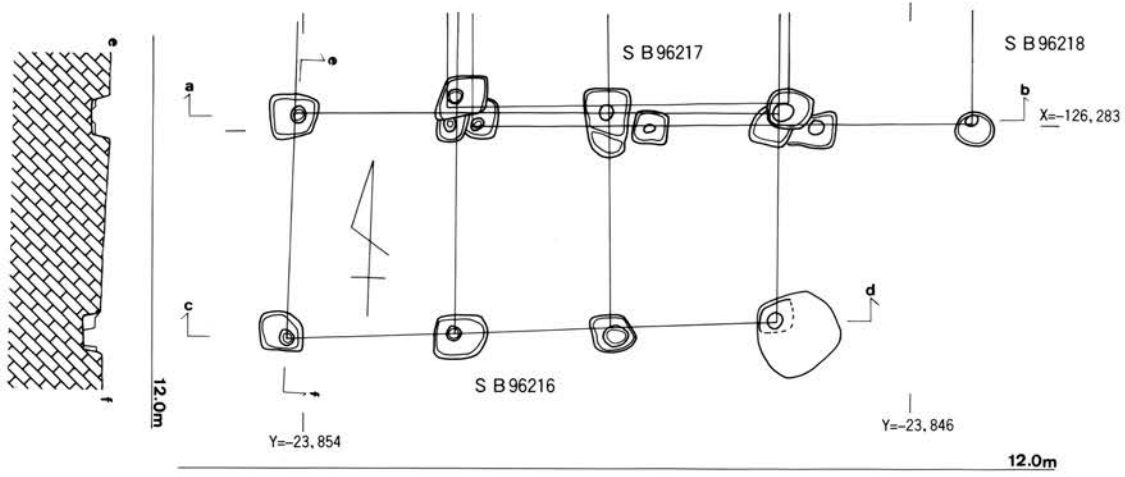
D地区 S X 94011・94012実測図



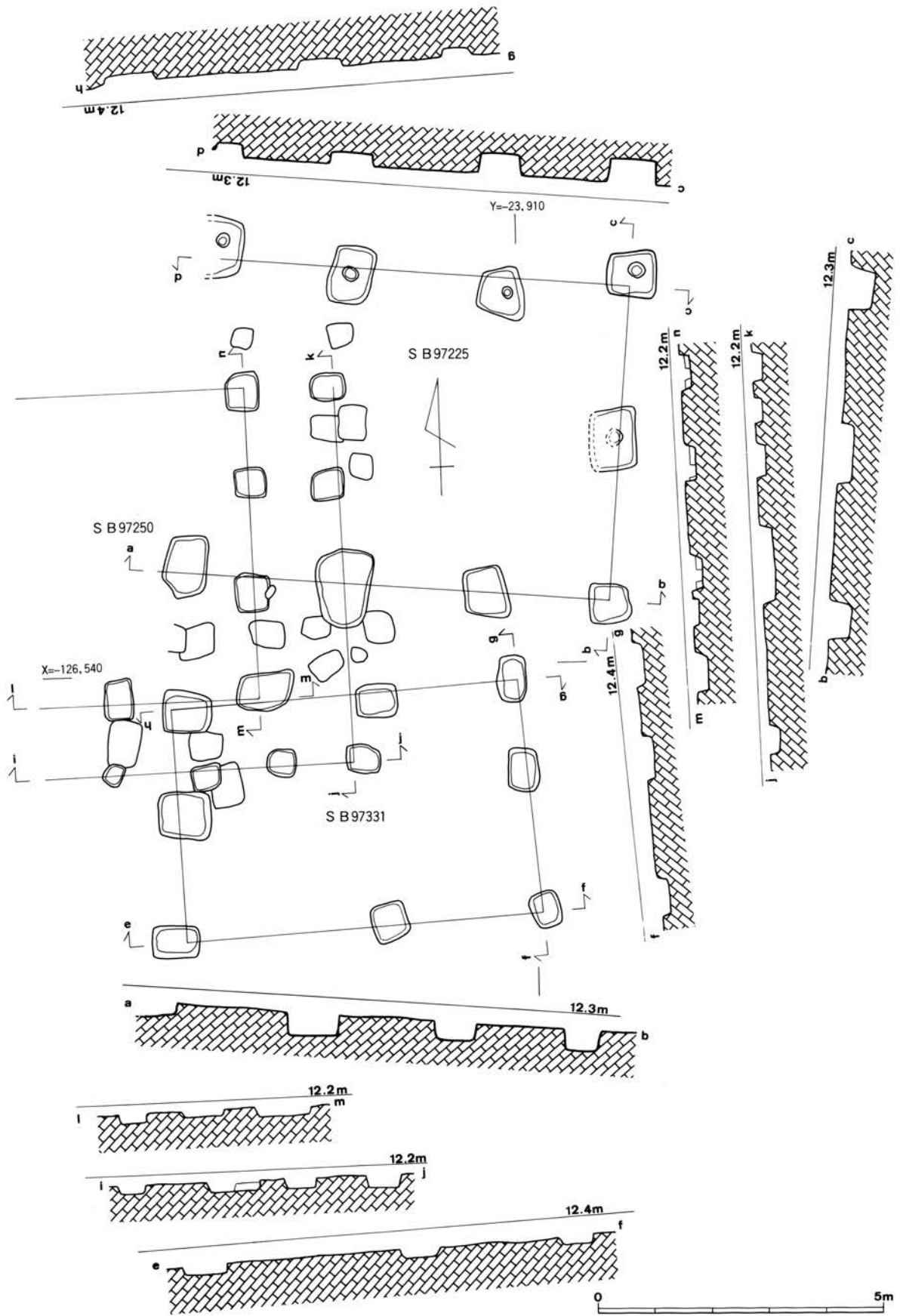
奈良～平安時代遺構実測図(1)



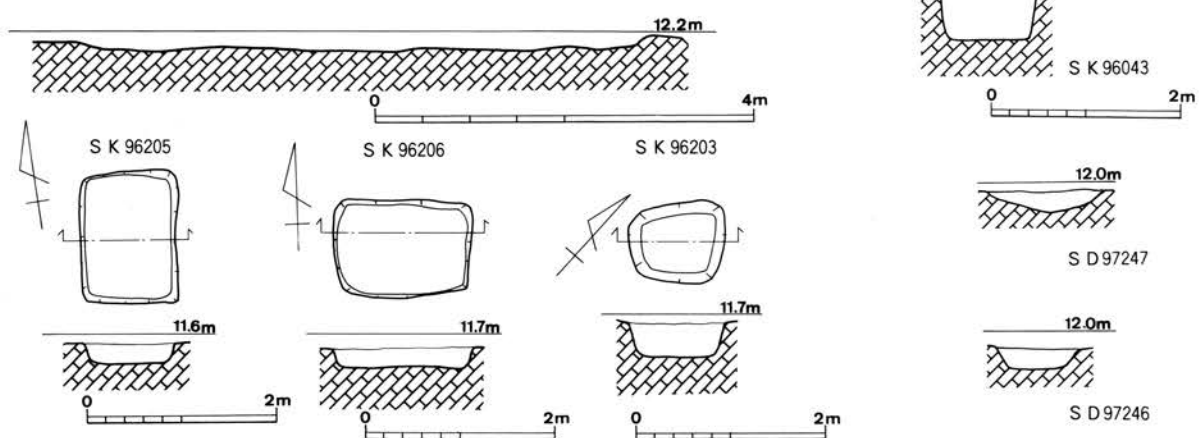
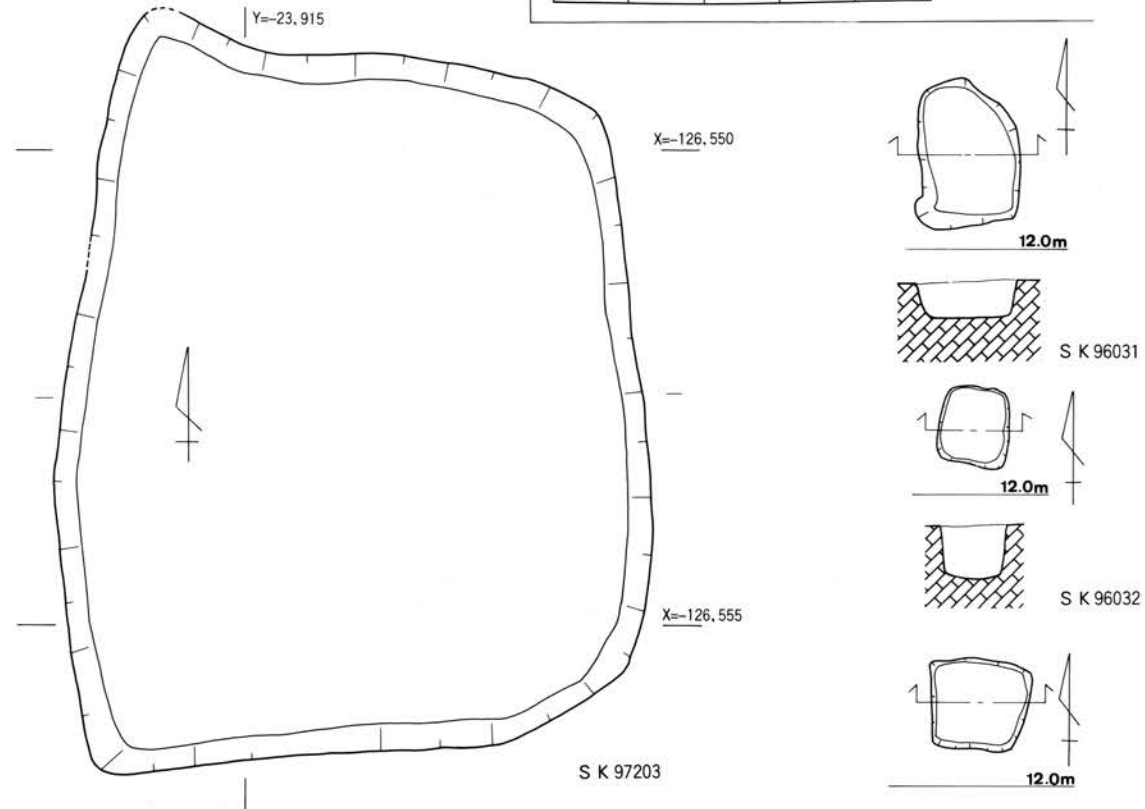
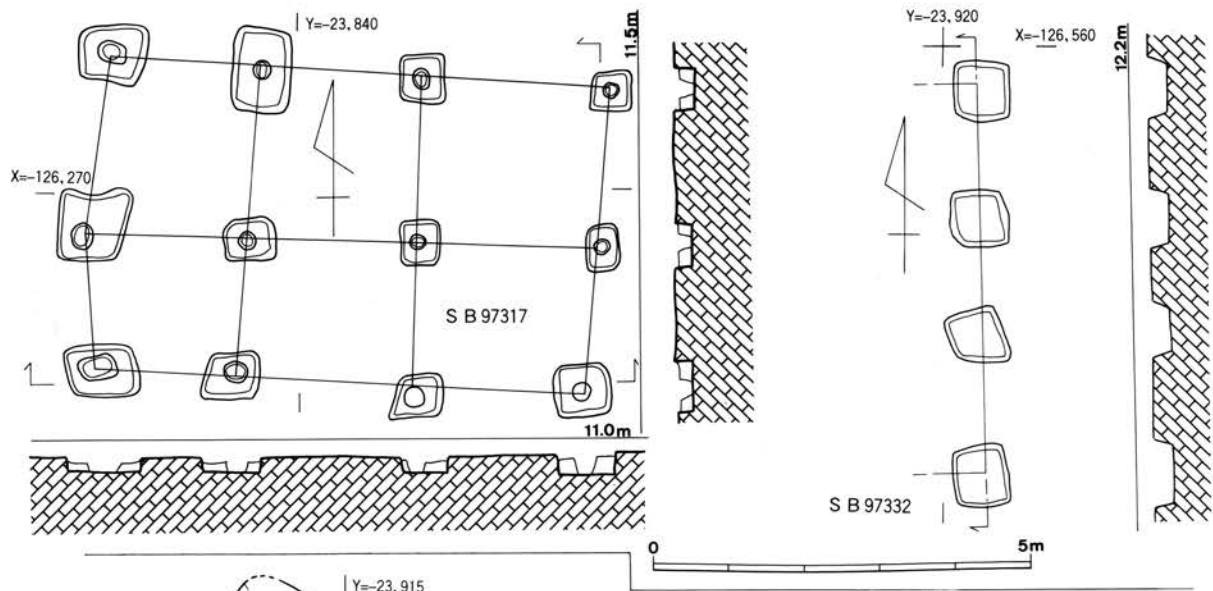
奈良～平安時代遺構実測図(2)



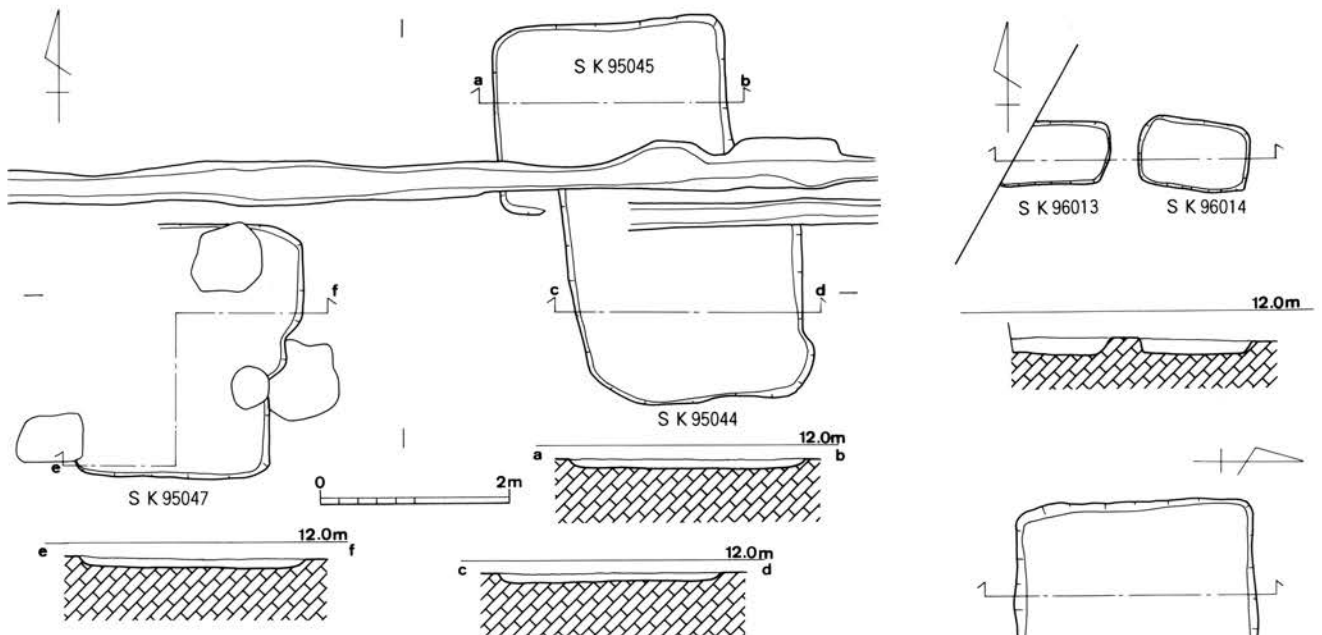
奈良～平安時代遺構実測図(3)



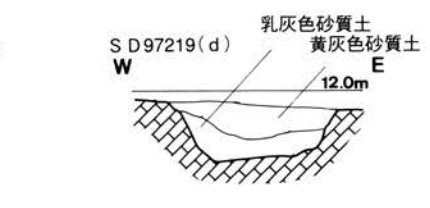
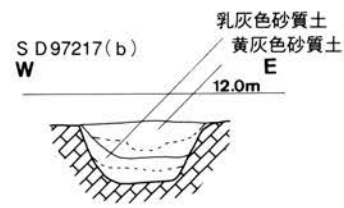
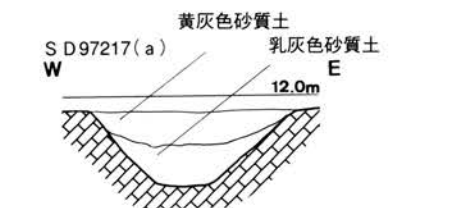
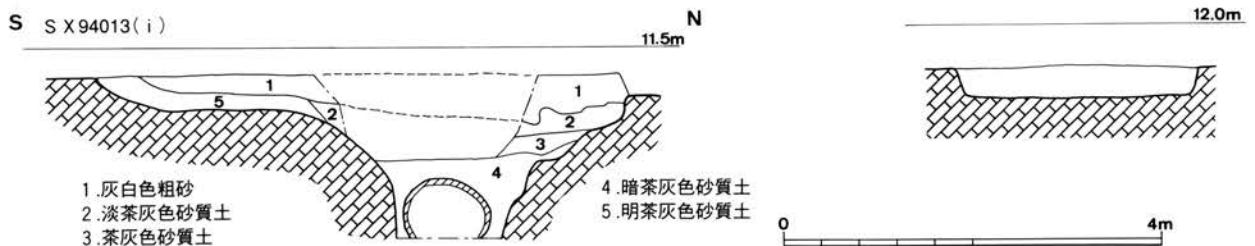
奈良～平安時代遺構実測図(4)



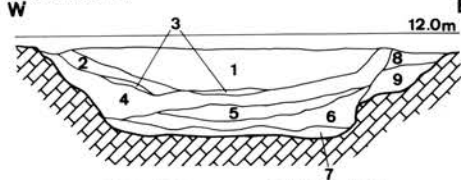
飛鳥～平安時代遺構実測図



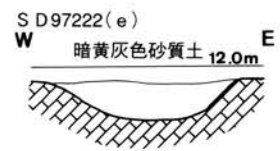
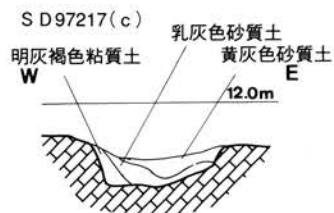
各溝断面図作成箇所は図版第32のアルファベットに対応



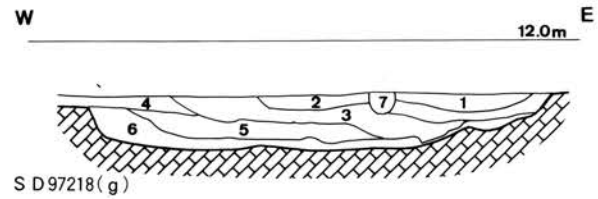
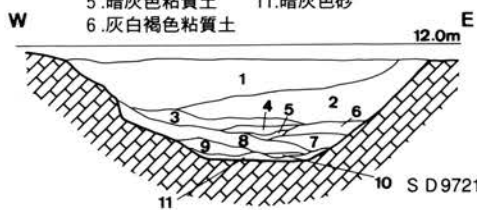
1. 暗黄灰色砂質土 (S D 97222埋土) 6. 淡黒褐色砂質土
2. 灰黄色砂質土 7. 黄灰色砂質土
3. 灰白色砂 8. 乳灰色砂質土
4. 淡黒灰色粘質土 9. 乳灰褐色砂質土
5. 黒灰褐色粘質土



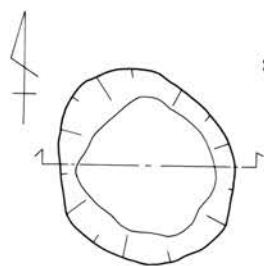
1. 暗褐色砂質土 7. 淡乳褐色砂質土
2. 淡褐色砂質土 8. 乳褐色砂質土
3. 明乳褐色粘質土 9. 暗乳褐色砂質土
4. 明灰白砂 10. 暗灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土 11. 暗灰色砂
6. 灰白褐色粘質土



1. 淡灰白砂 5. 乳褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土 6. 暗乳褐色砂質土
3. 淡褐色砂質土 7. 灰黄色砂質土
4. 淡褐色砂

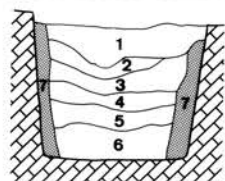


奈良~平安時代土坑実測図・溝断面図



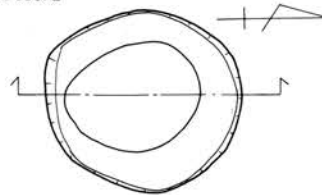
S E 95042

12.0m

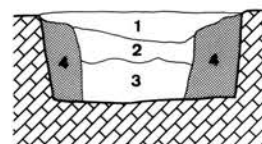


1. 灰黄色土
2. 暗灰黄色粘質土
3. 暗灰褐色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 暗灰色粘土
6. 灰色粘土
7. 暗灰黄色土

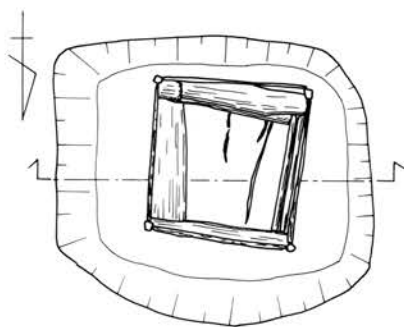
S E 95072



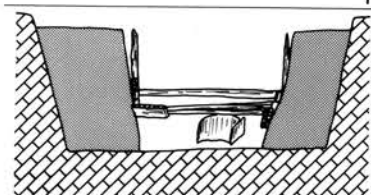
11.5m



1. 淡茶褐色砂質土
2. 暗灰褐色粘質土
3. 灰色粘土
4. 乳灰褐色粘質土

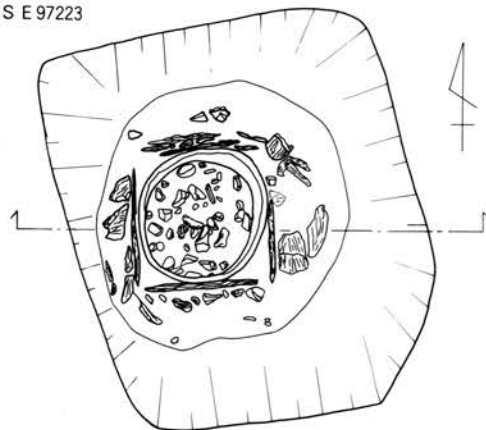


11.2 m



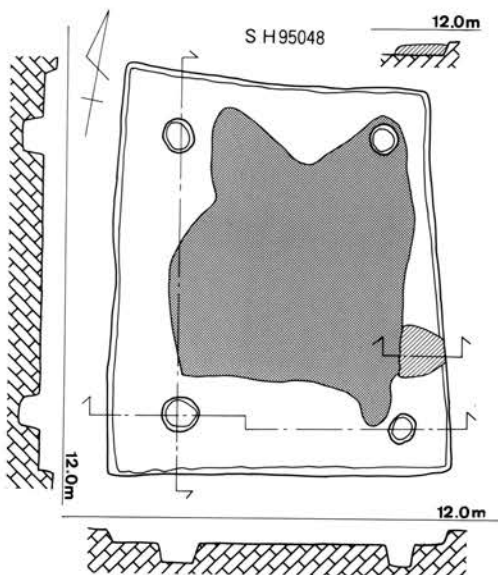
S E 95073

S E 97223

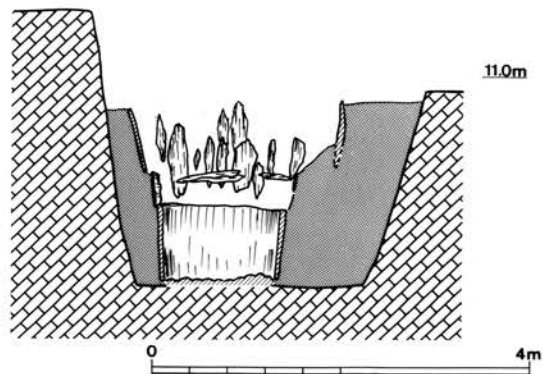


S H 95048

12.0m

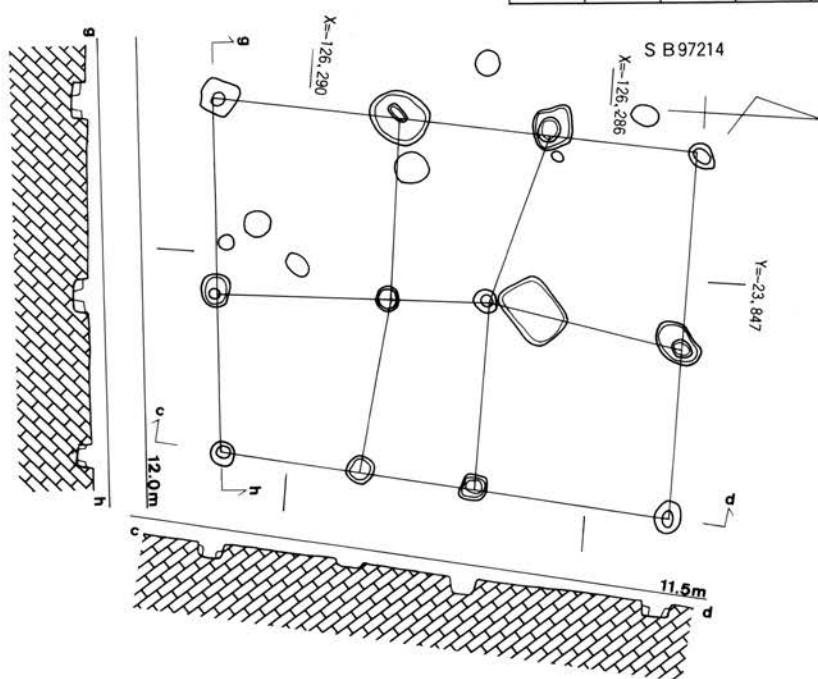
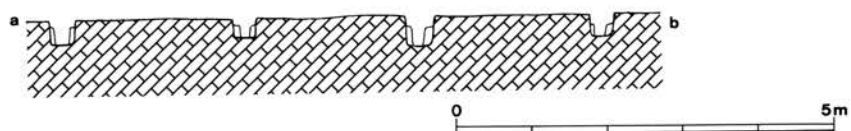
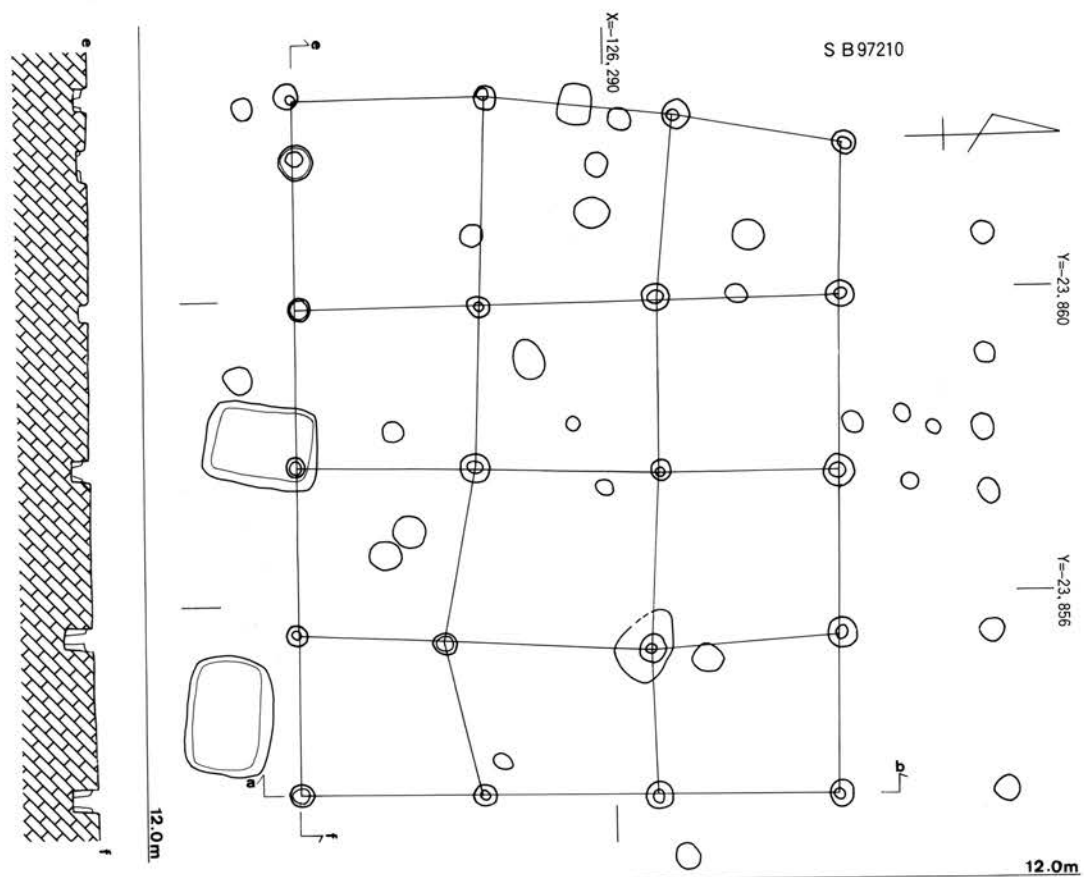


12.0m

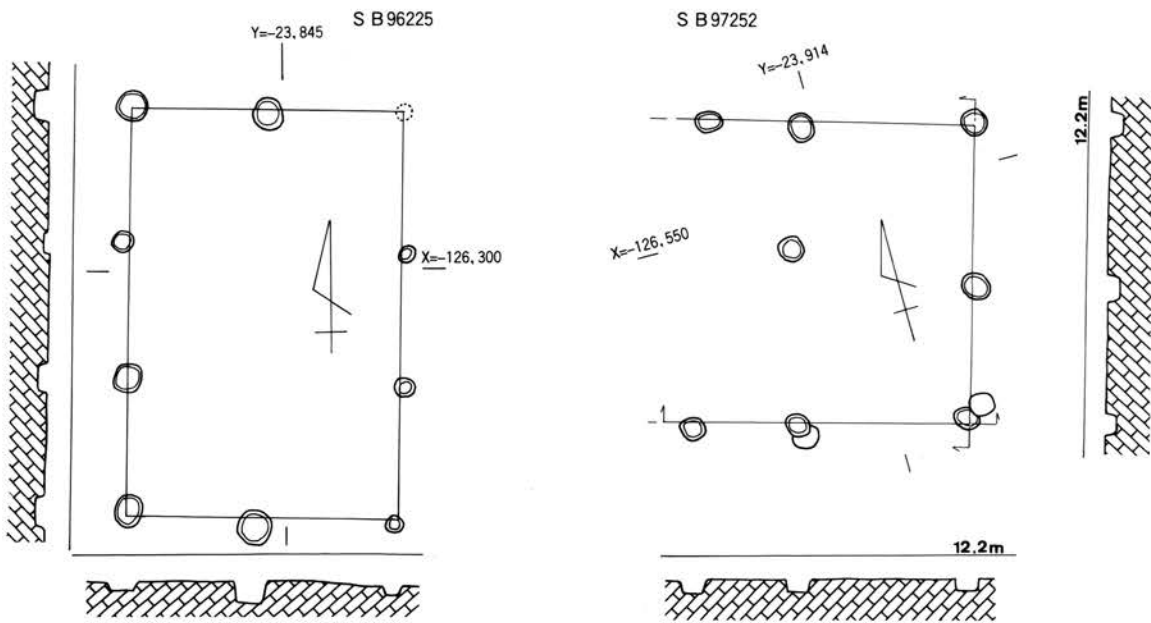
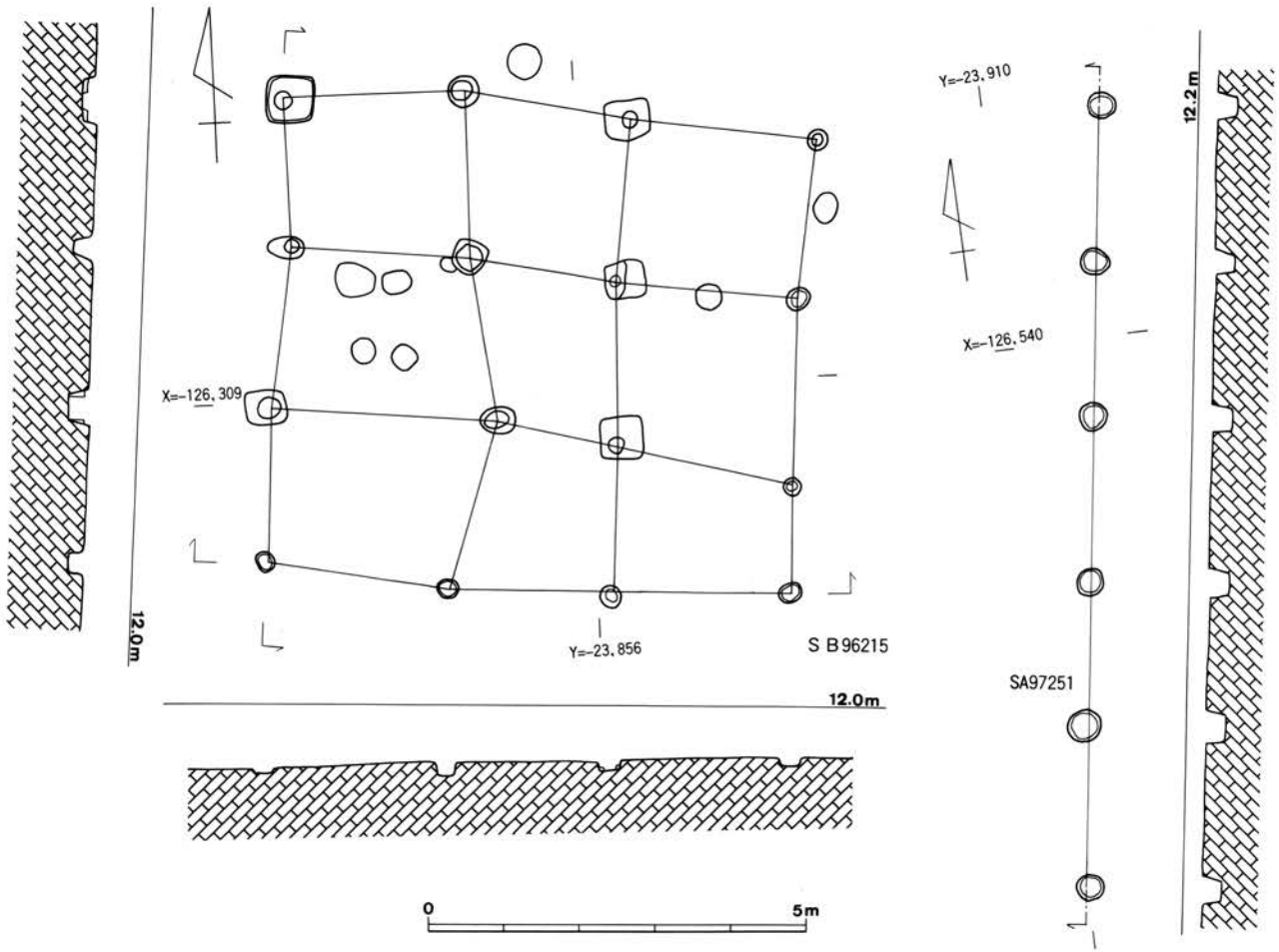


11.0m

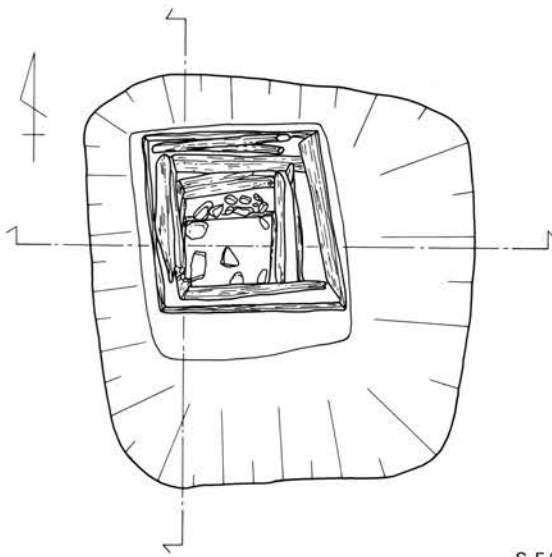
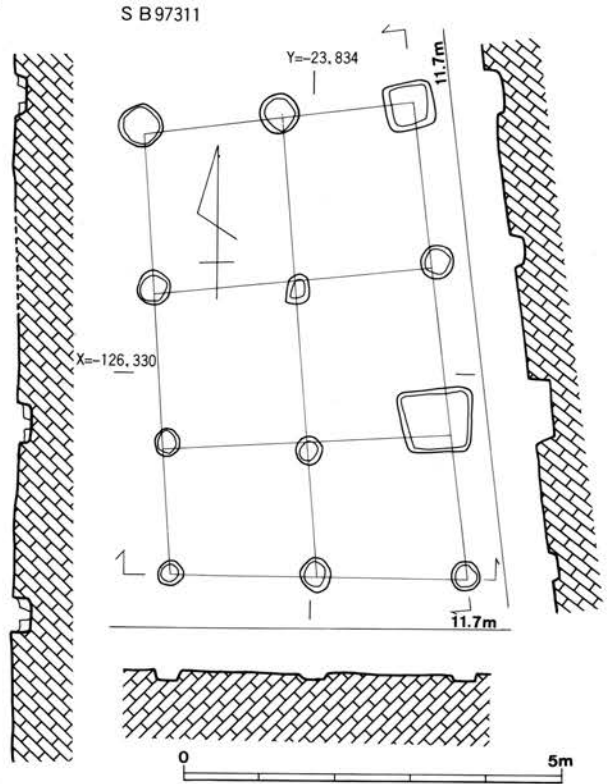
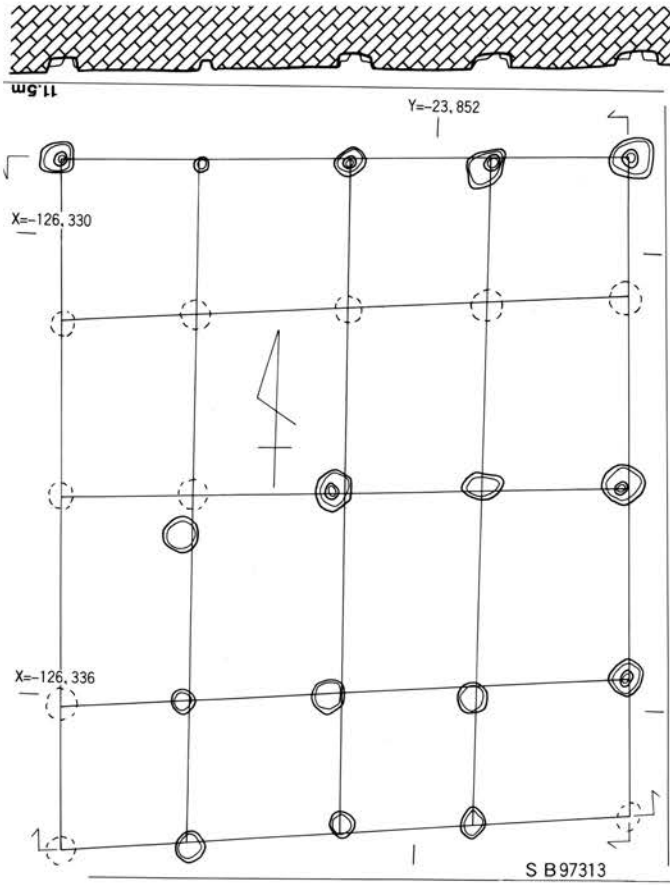
0 4m



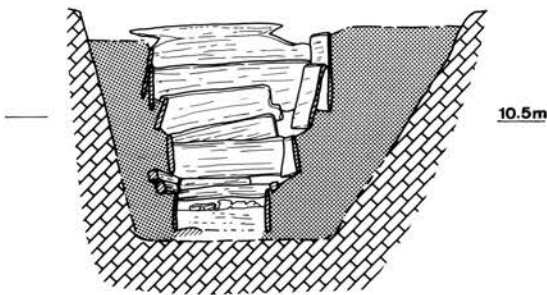
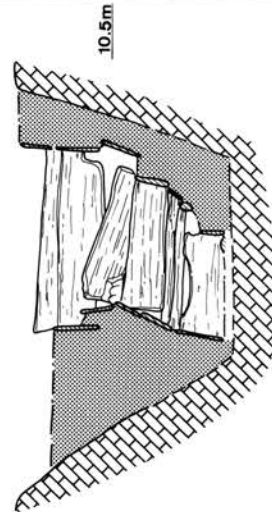
平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(1)



平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(2)

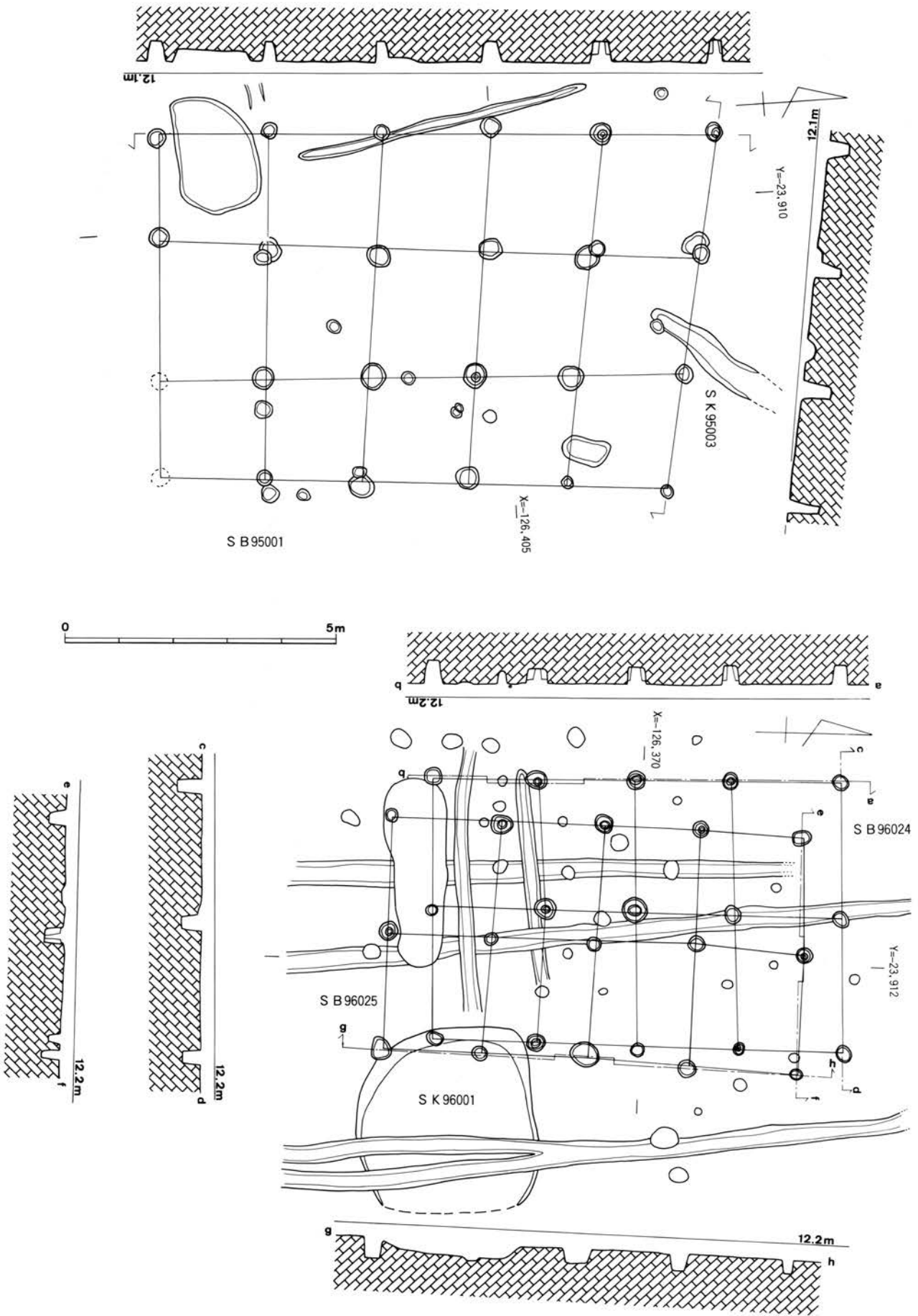


S E 96023

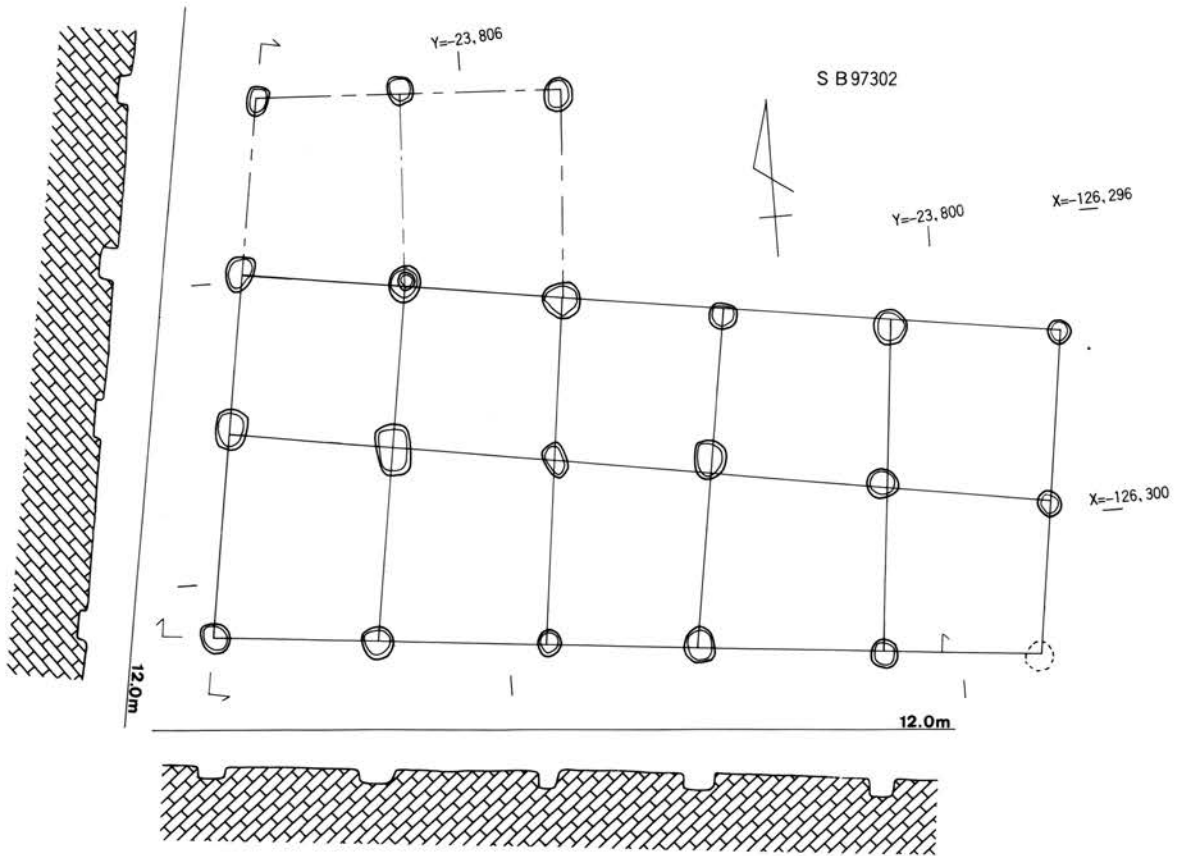
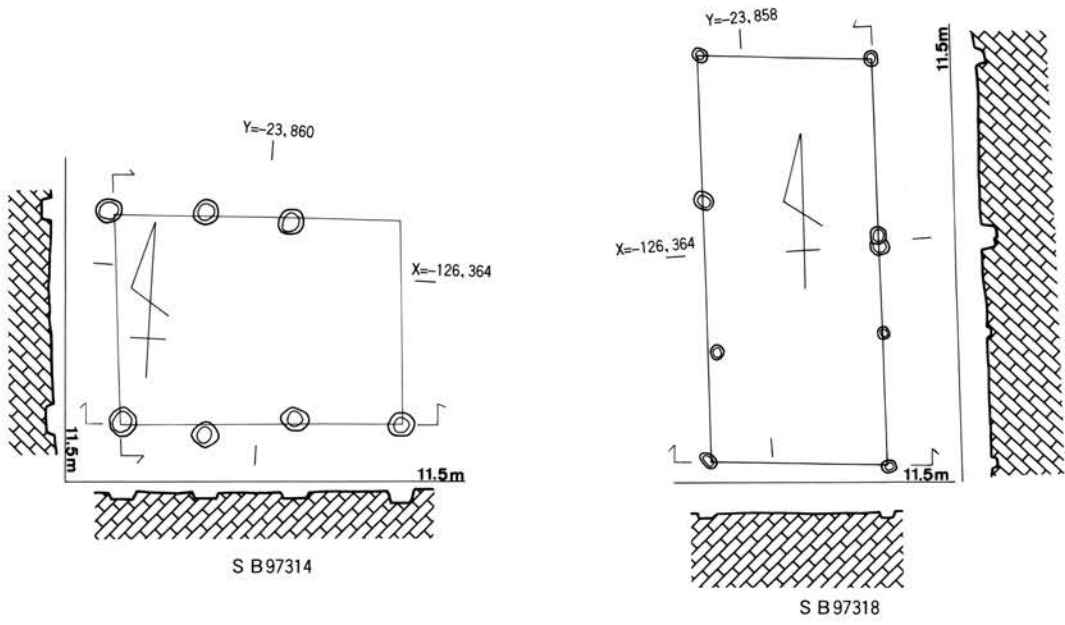


0 2m

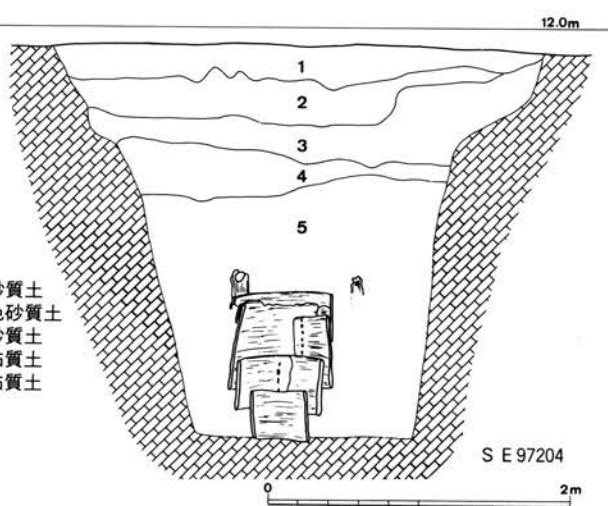
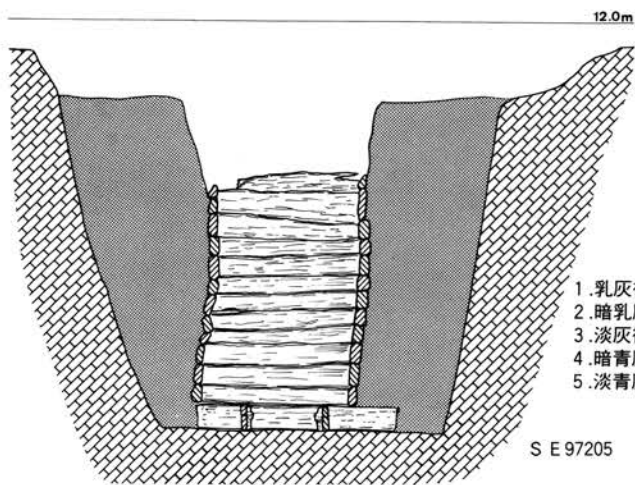
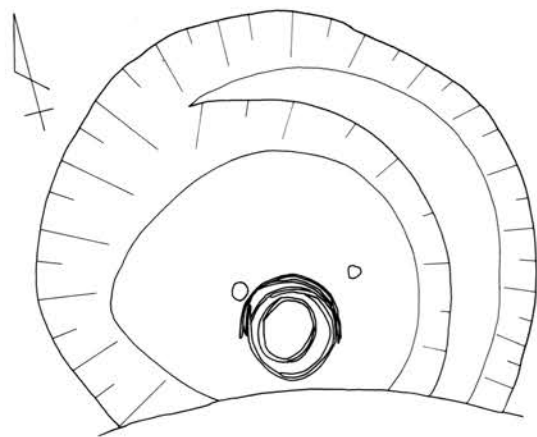
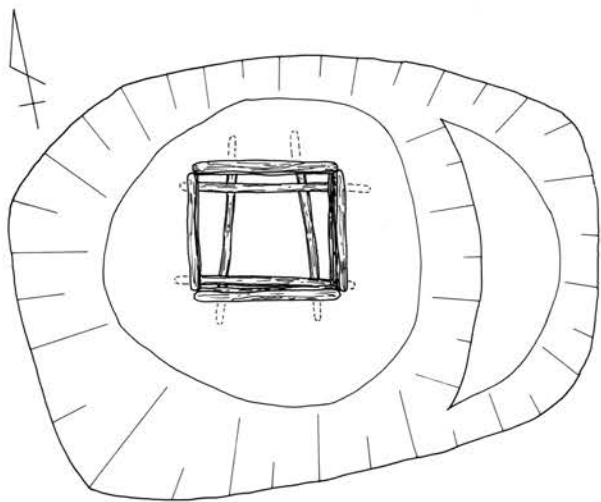
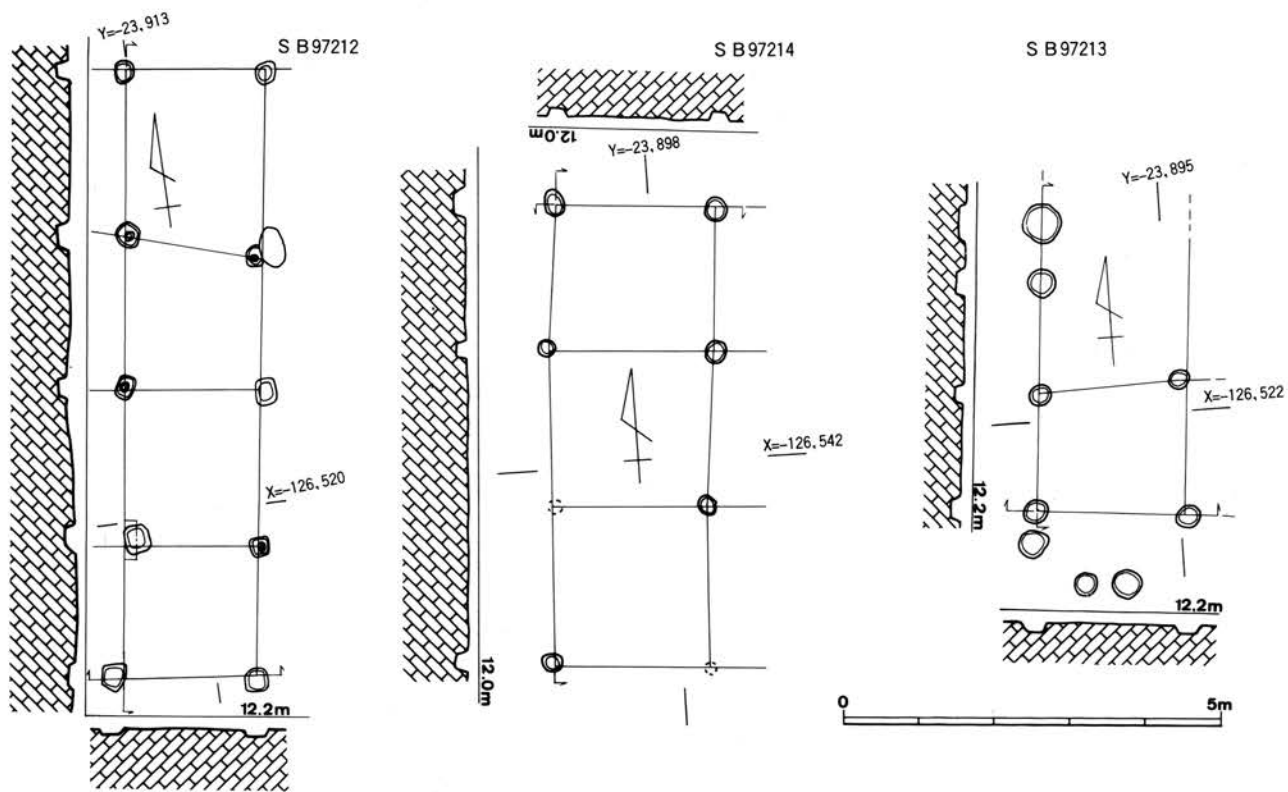
平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(3)



平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(4)



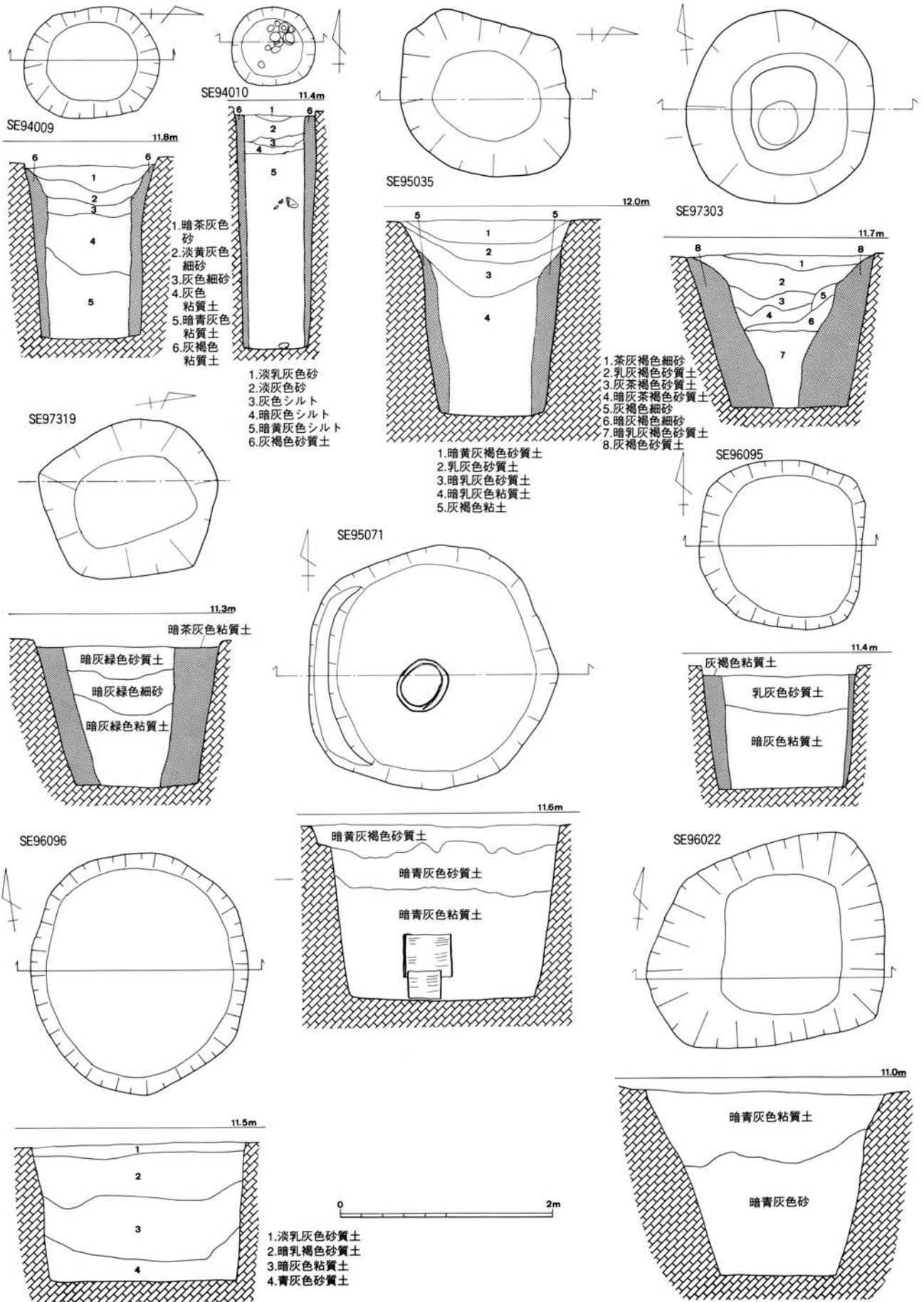
平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(5)



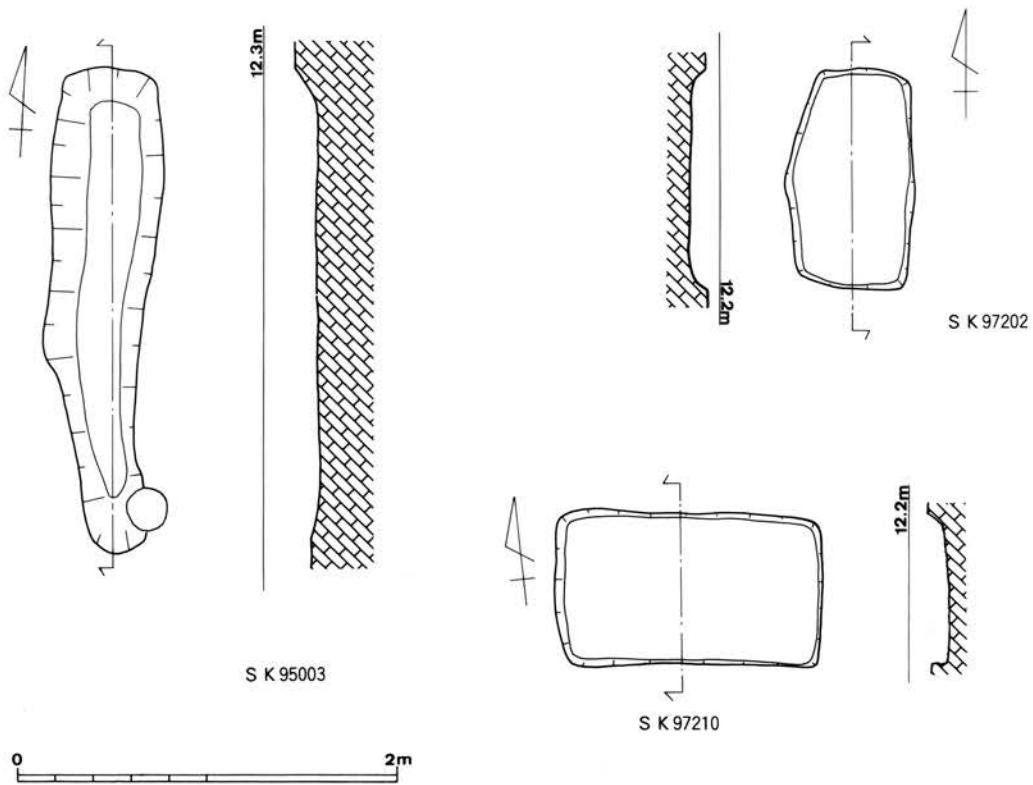
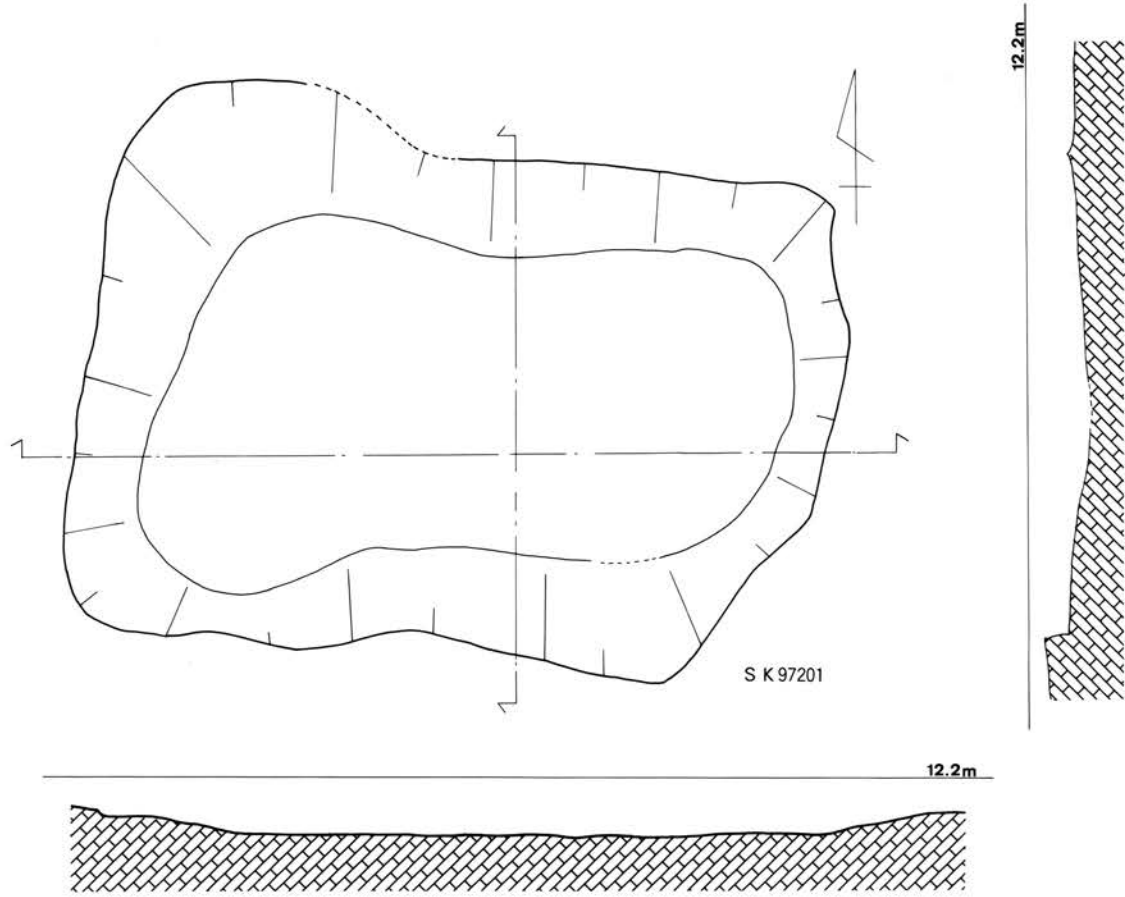
1. 乳灰褐色砂质土
2. 暗乳灰褐色砂质土
3. 淡灰褐色砂质土
4. 暗青灰色粘质土
5. 淡青灰色粘质土

S E 97205

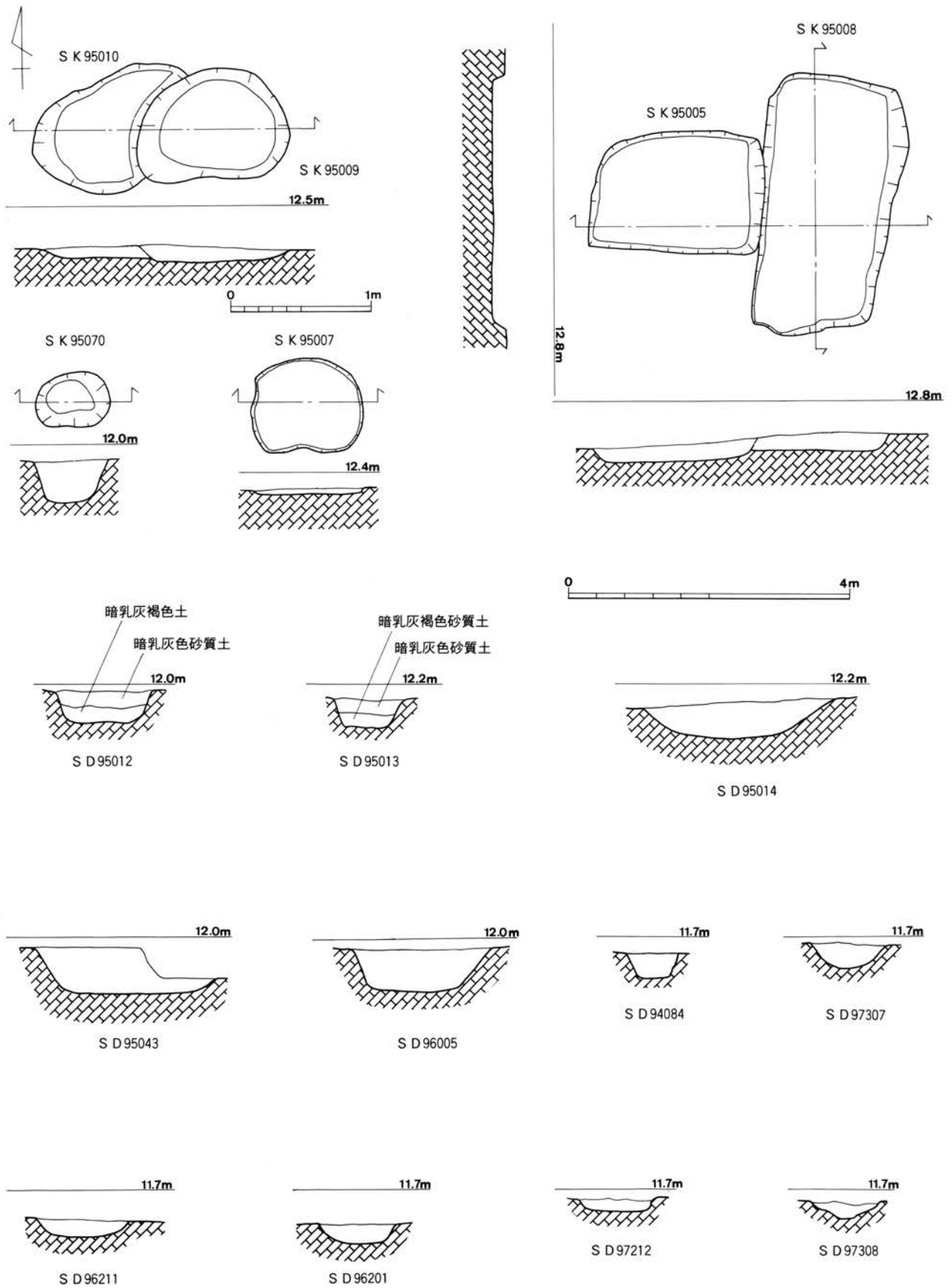
S E 97204



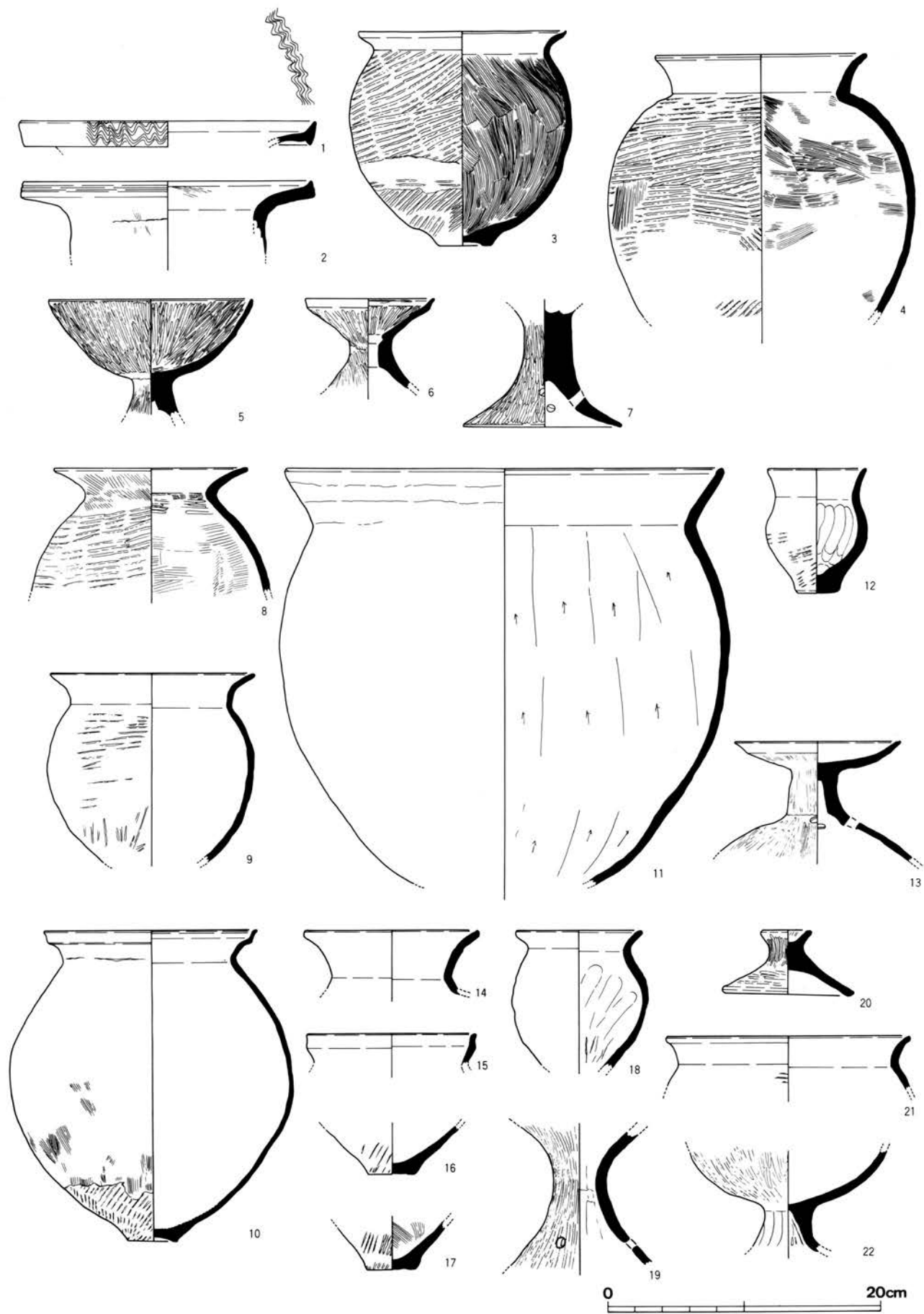
平安時代後期～鎌倉時代遺構実測図(7)



平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(8)

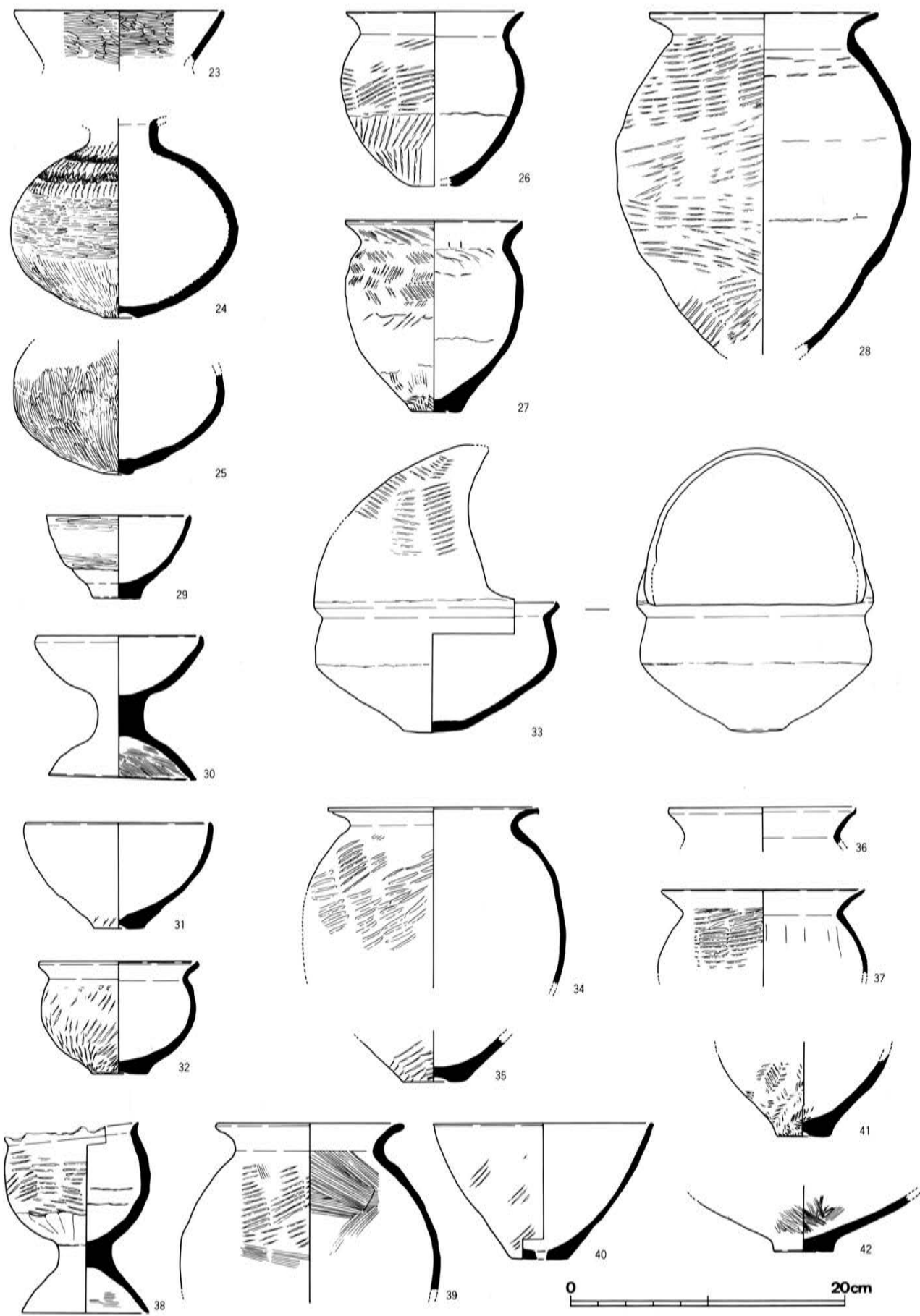


平安時代後期～鎌倉時代初頭遺構実測図(9)



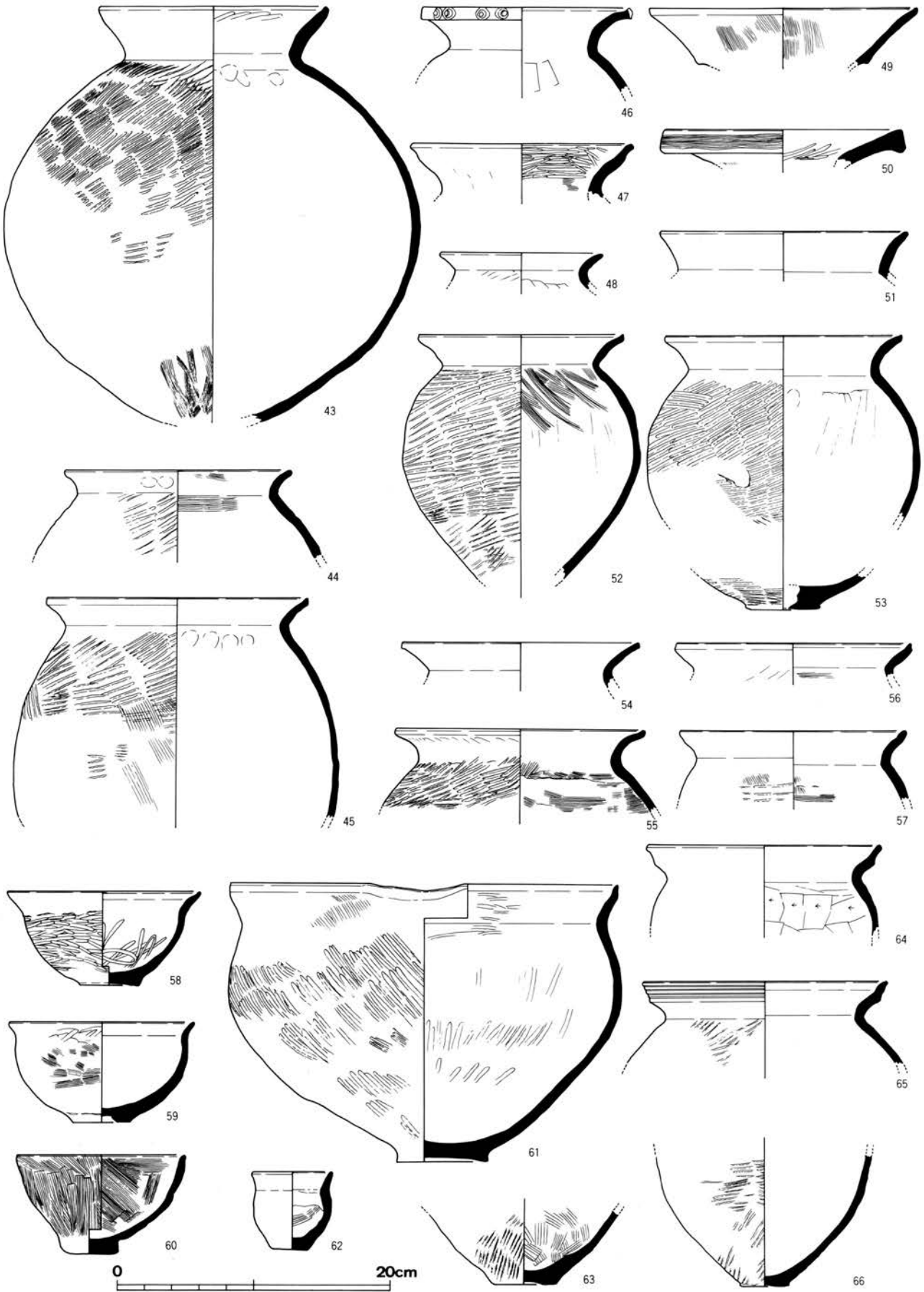
出土土器实测图(1)

1~7: SH94008 8·9·11~13: SH94007 10·14~22: SH95052

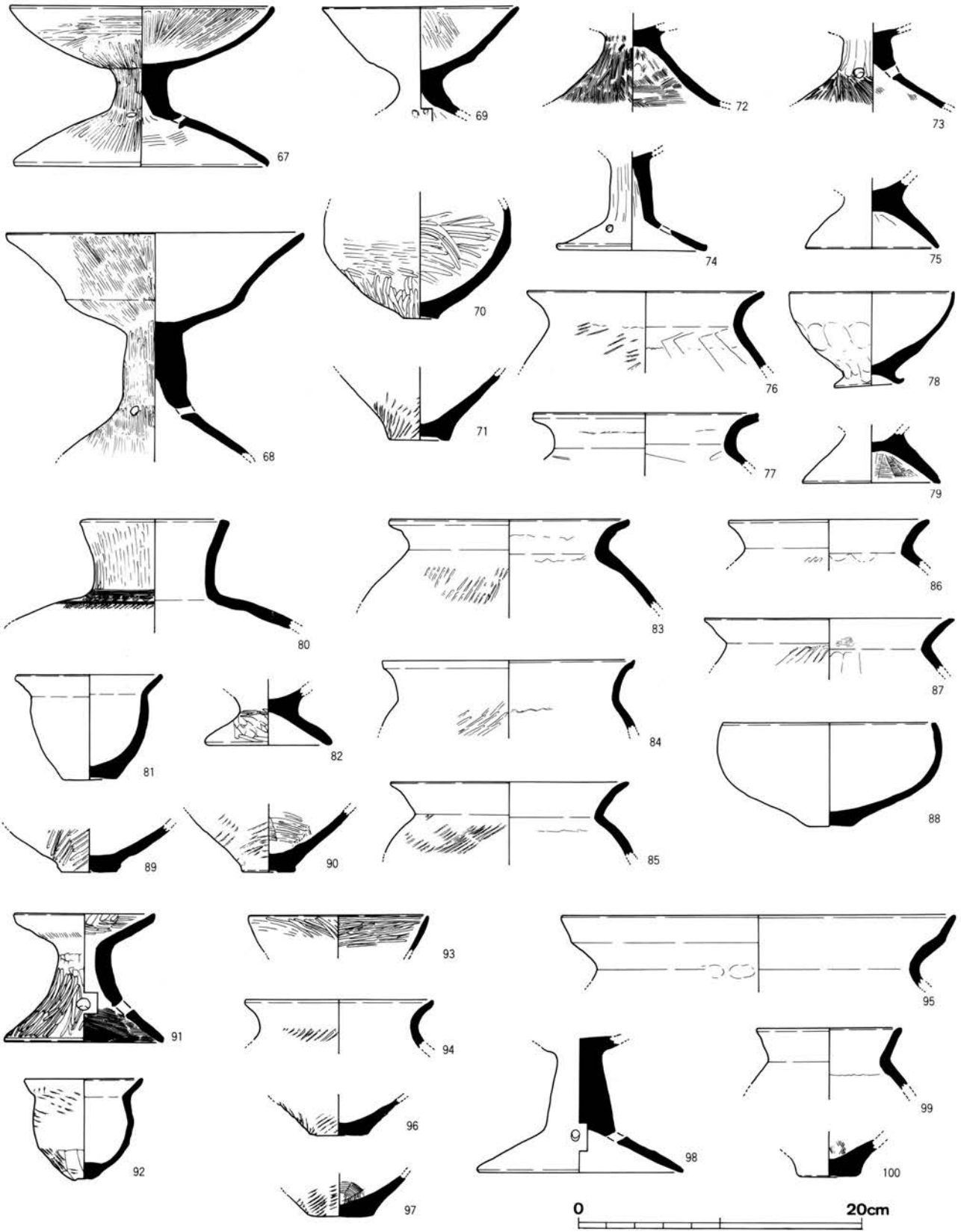


出土土器実測図(2)

23~30・33 : S H96085 31・32・34~37 : S H96086 38~40 : S H96083 41・42 : S H96078



出土土器実測図(3)
43~66: S X 96079

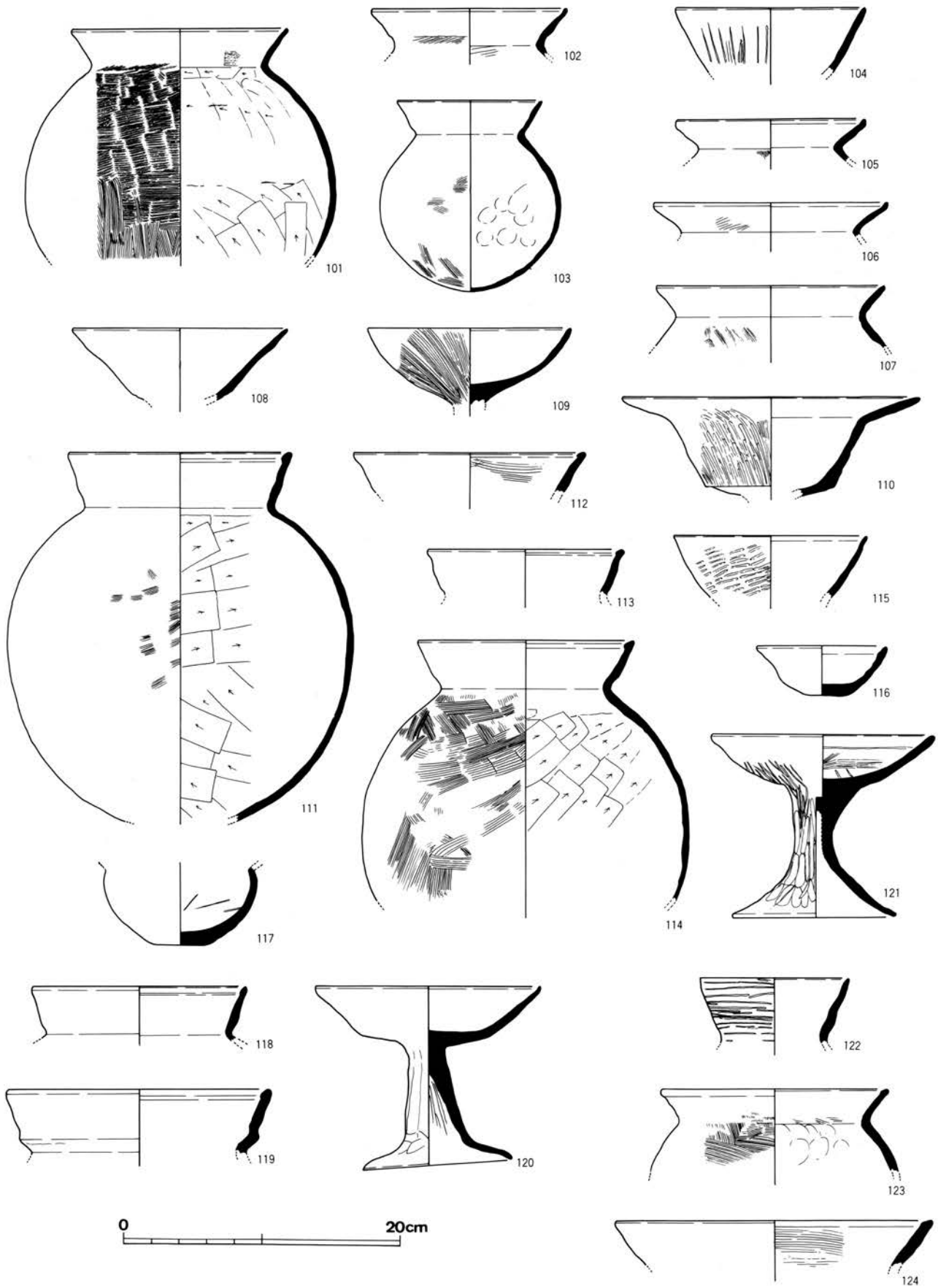


出土土器实测图(4)

67 · 69 · 72 ~ 75 : S X96079
80 ~ 90 : S H96076

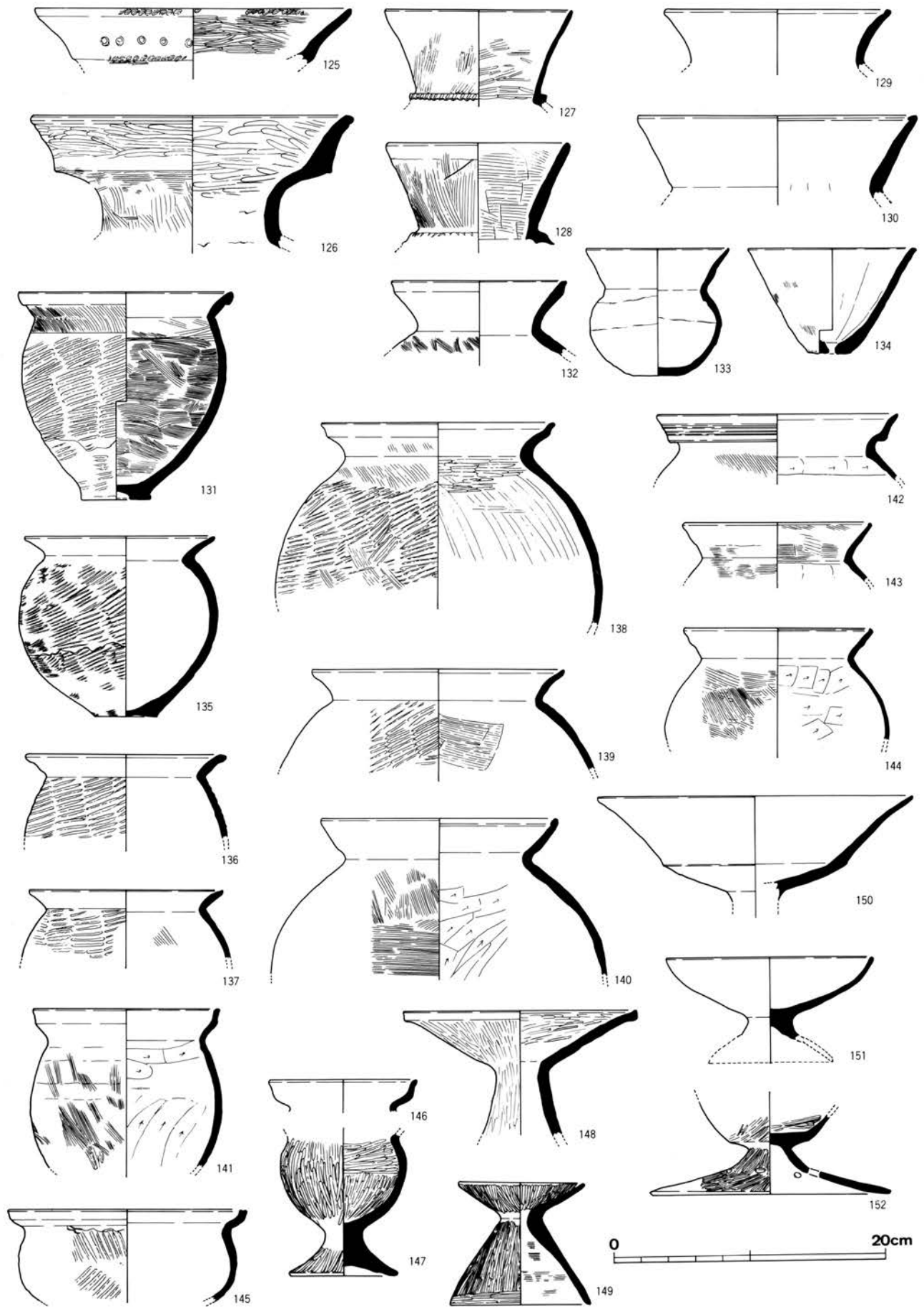
68 · 70 · 71 · 76 ~ 79 : S X96098
91 · 92 : S H95087

80 · 83 · 86 ~ 88 : S H96089
93 ~ 98 : S H95025
99 · 100 : S H95090

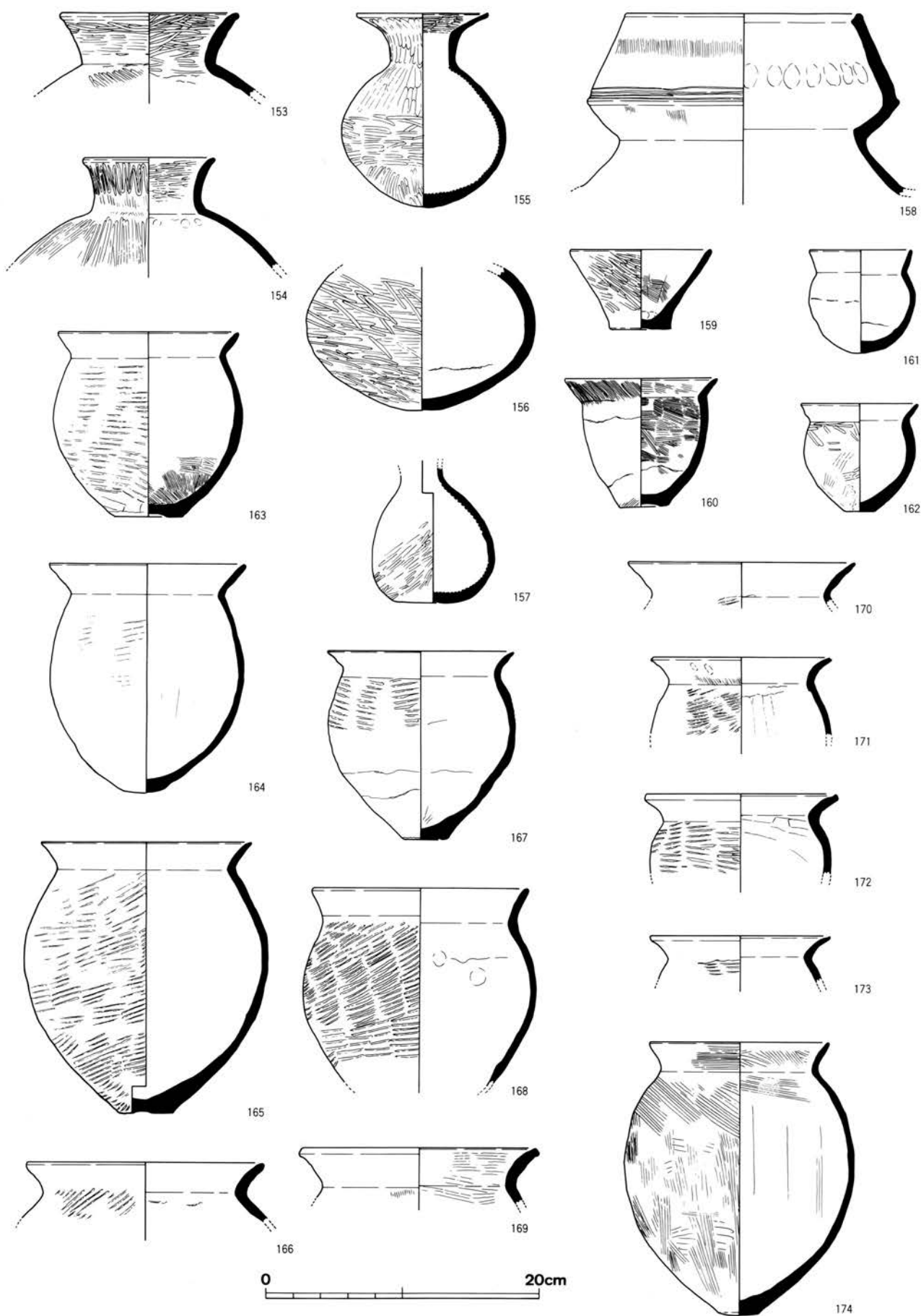


出土土器実測図(5)

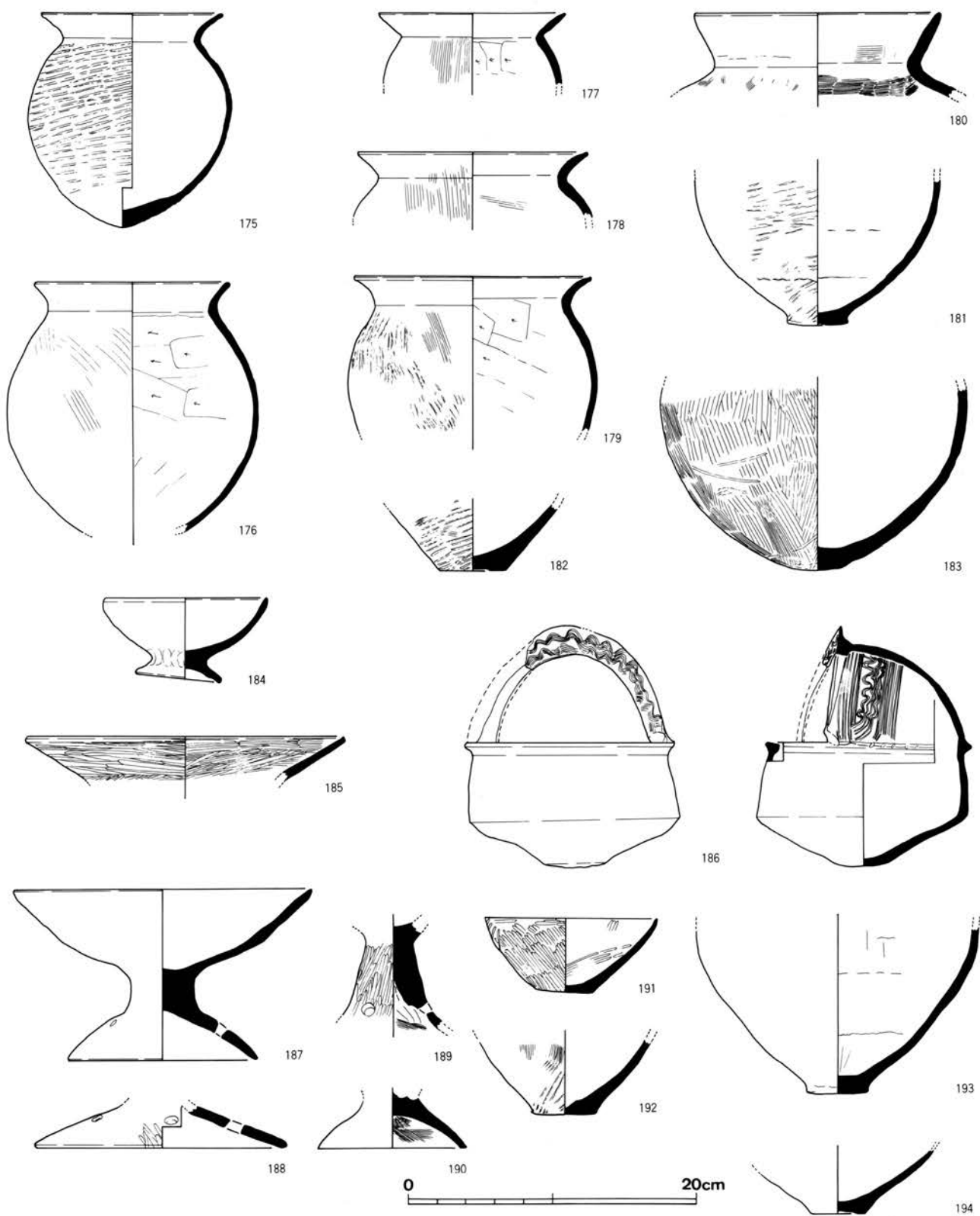
101~103 · 108 · 109 : S H97301 104~107 · 110 : S H96291 111 · 117 : S H97300 112 : S H97302
 113 · 114 · 116 · 121 : S H96263 115 : S H96269 118~120 : S H96287 122~124 : S H96291



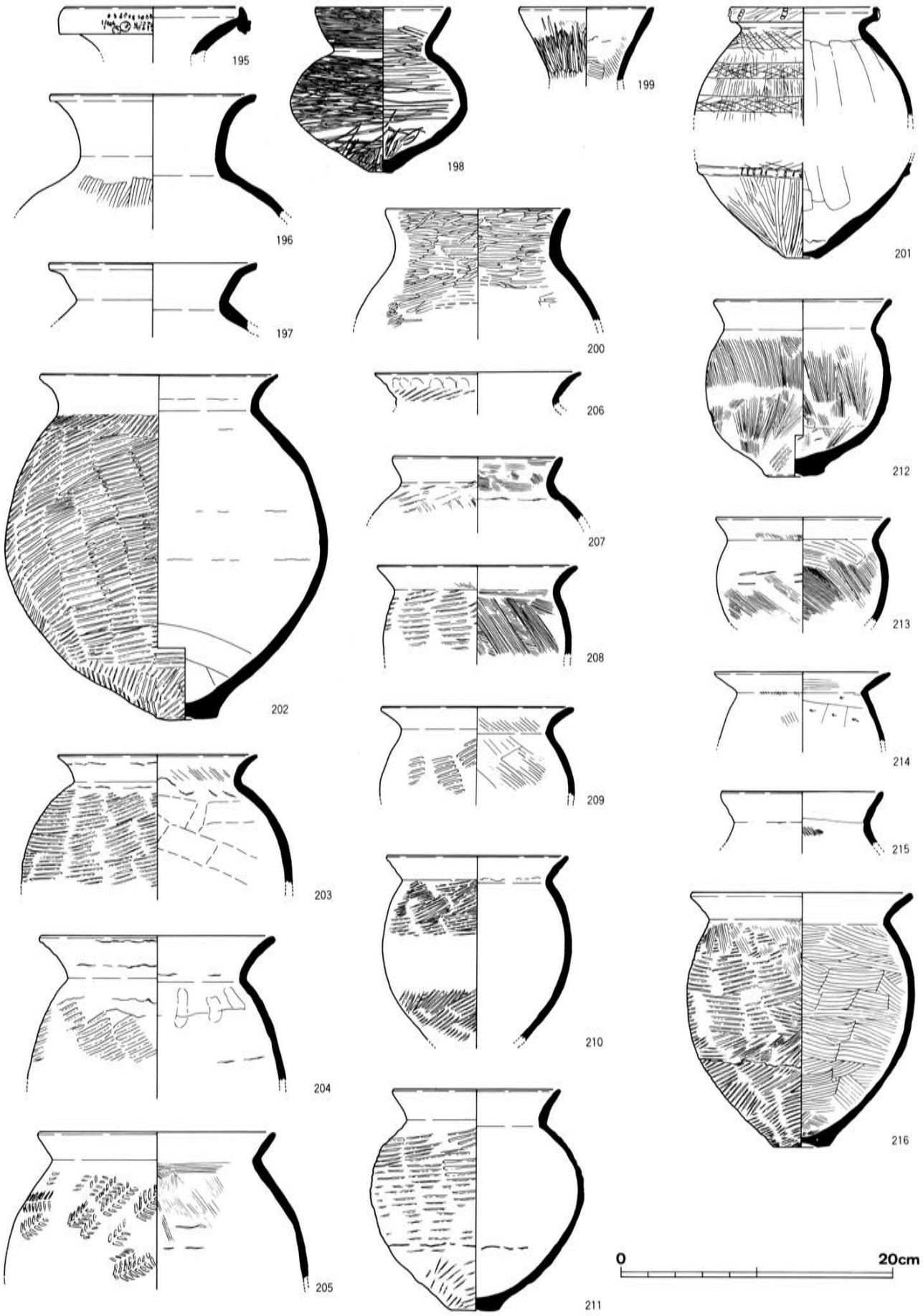
出土土器实测图(6)



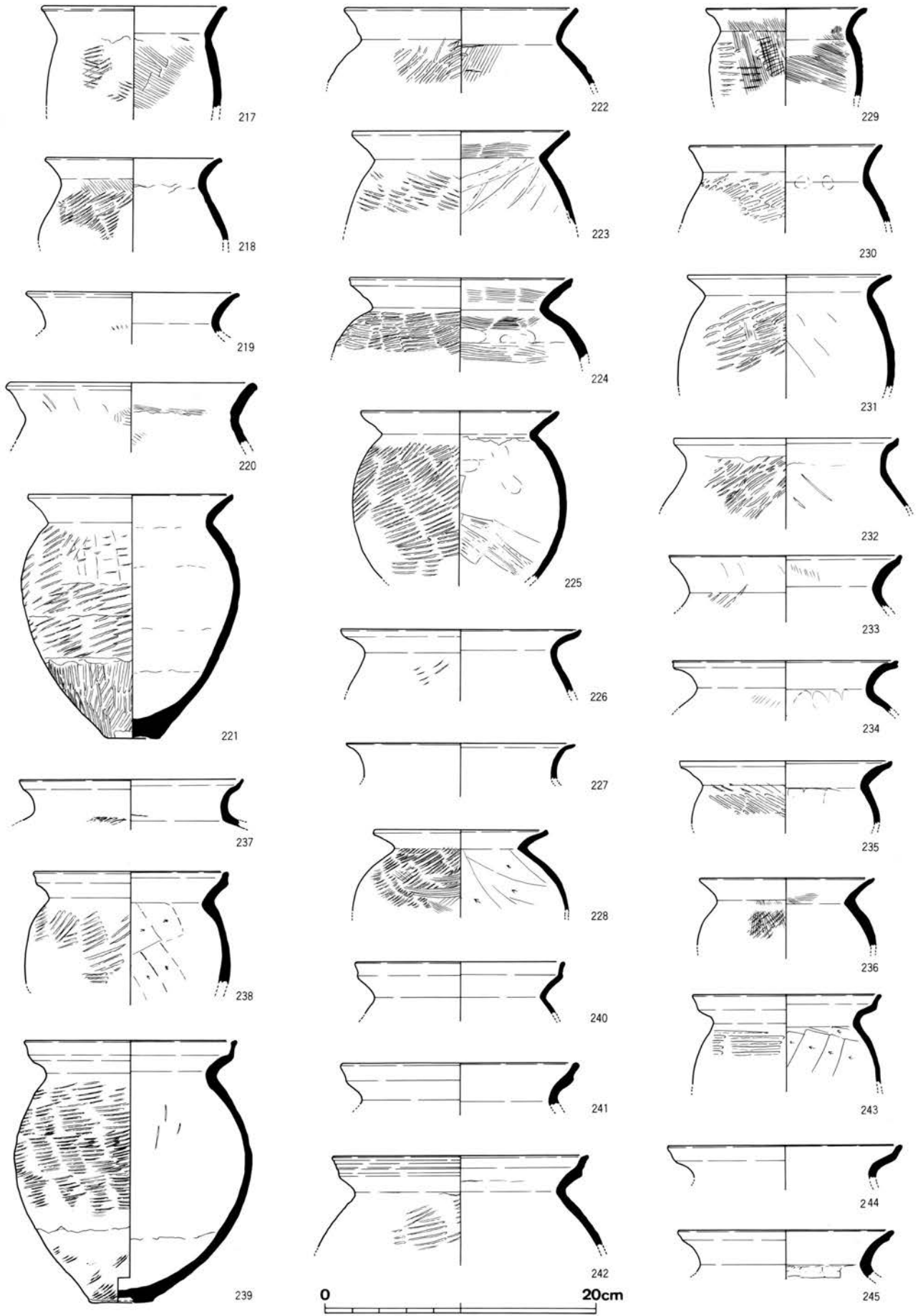
出土土器实测图(7) S X96223



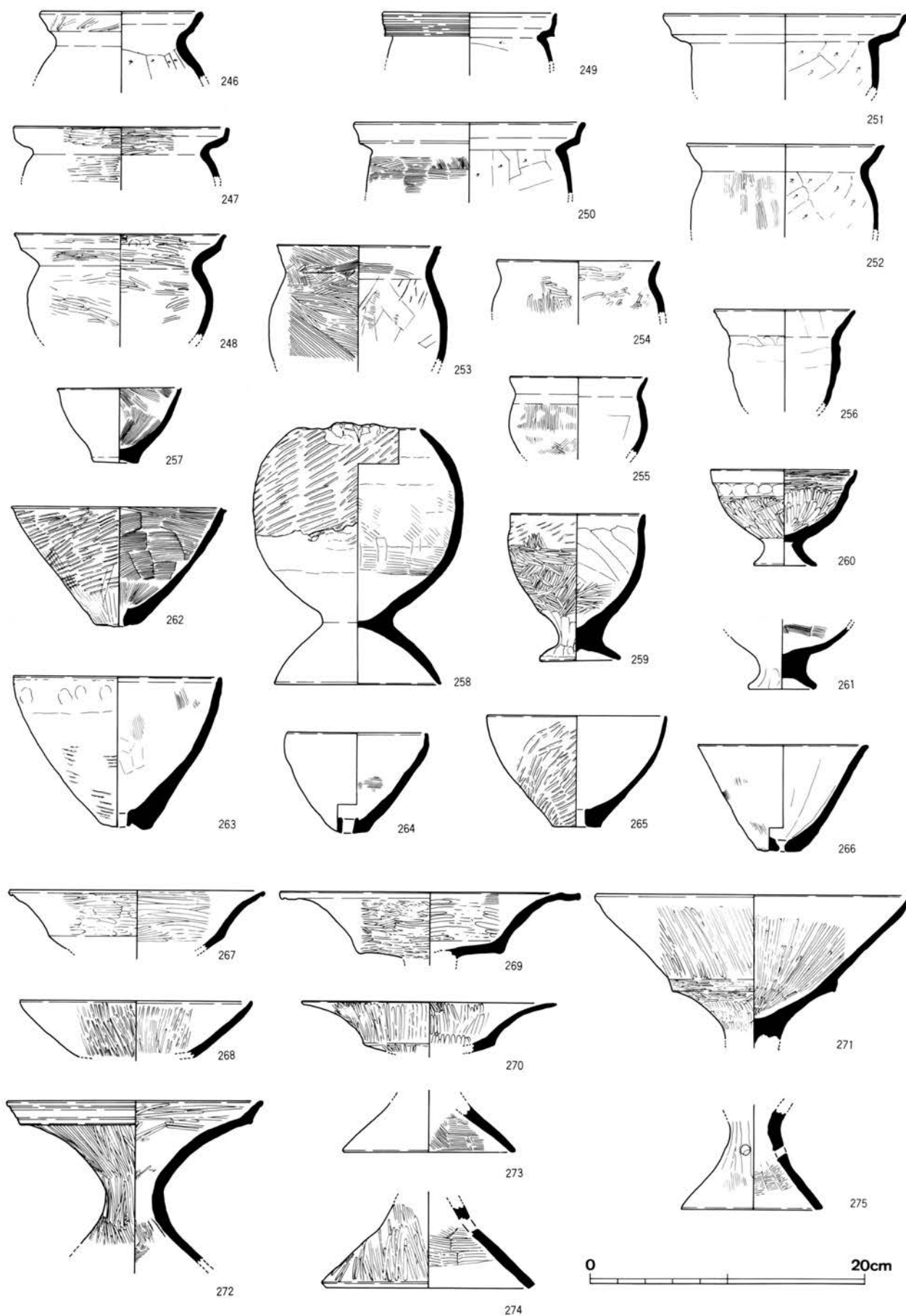
出土土器実測図(8) 175~186: S X96223 187~194: S X96099



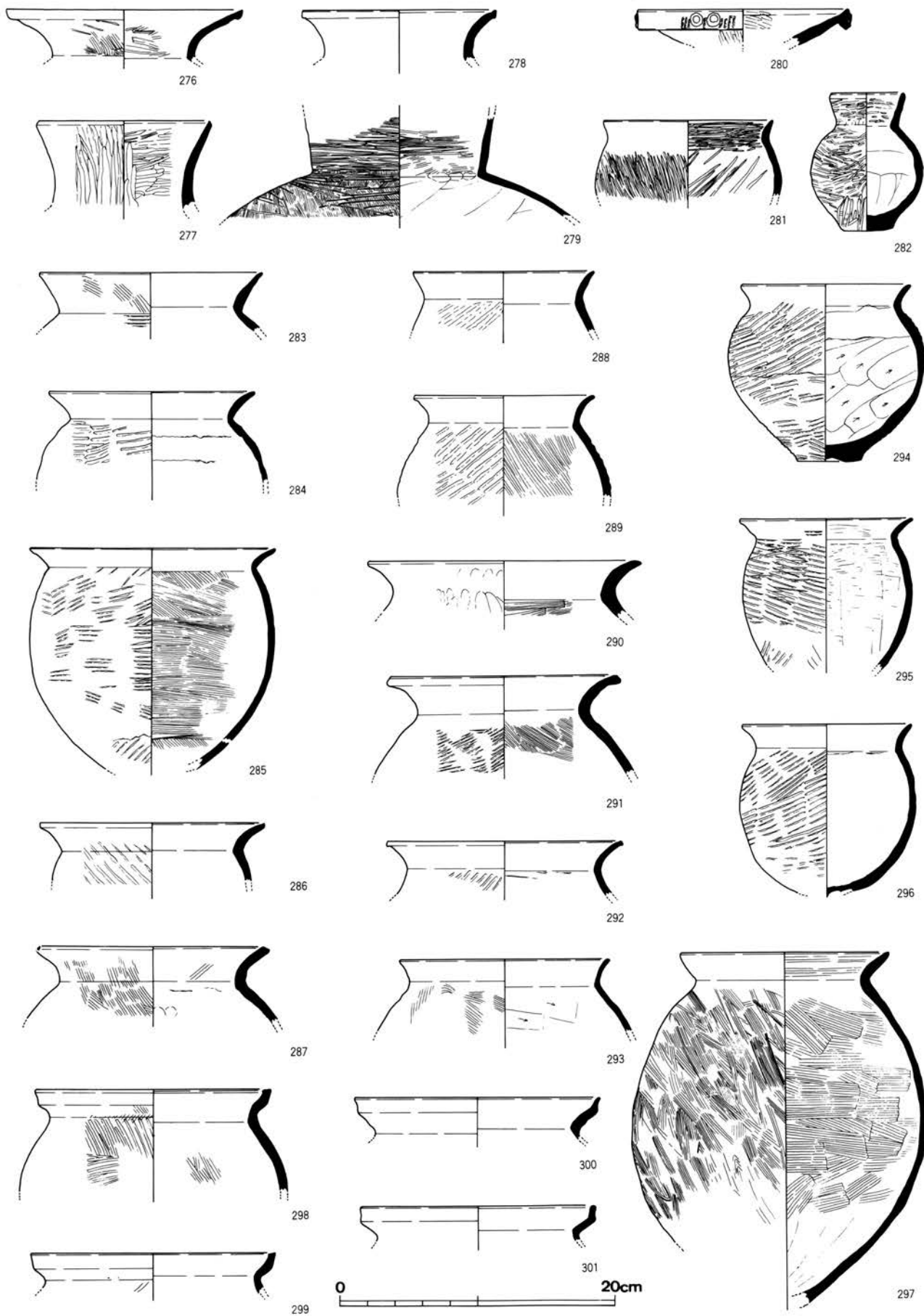
出土土器実測図(9) NR96224下層



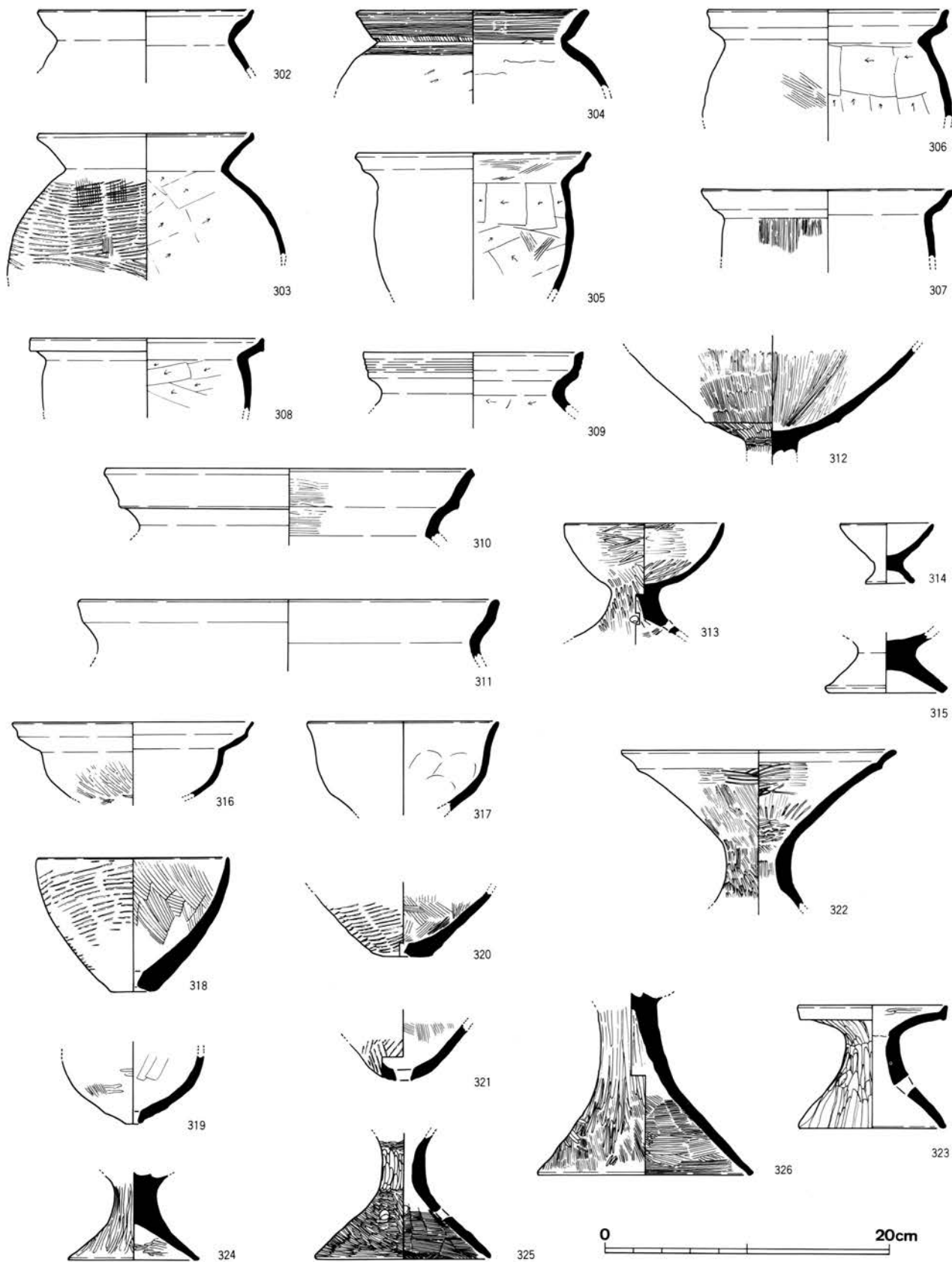
出土土器実測図(10) NR96224下層



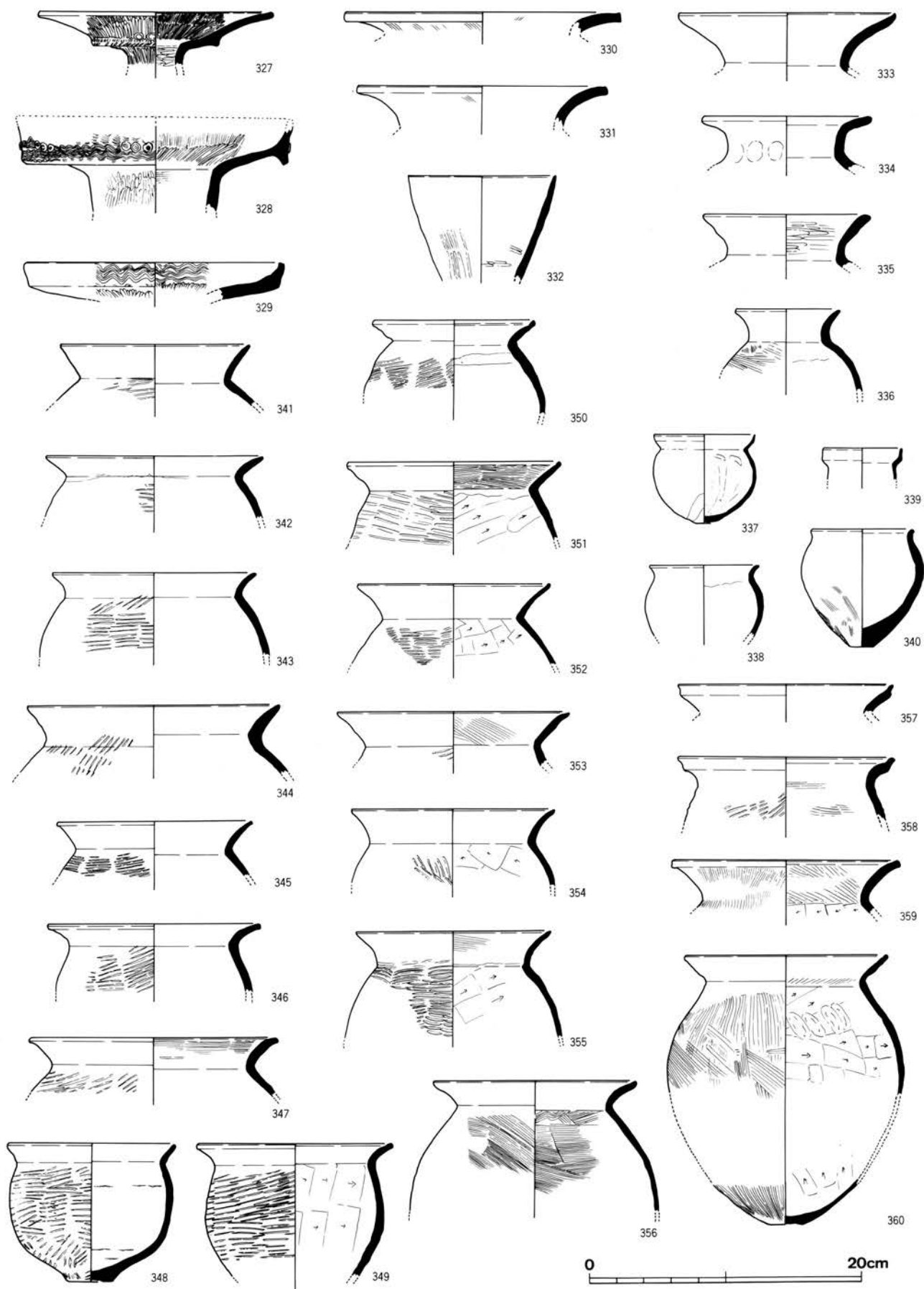
出土土器実測図(11) NR96224下層



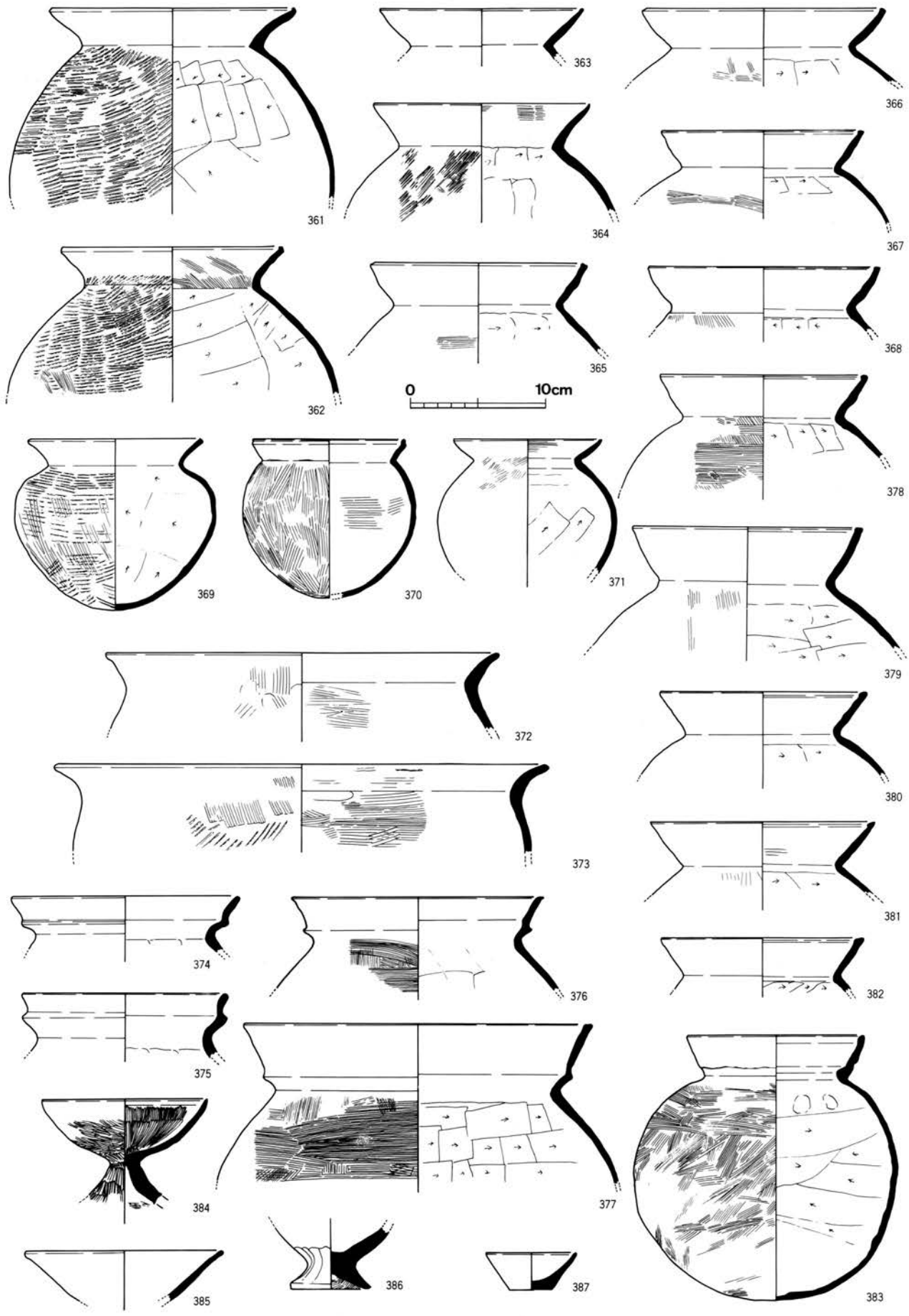
出土土器実測図(12)
N R 96224上層



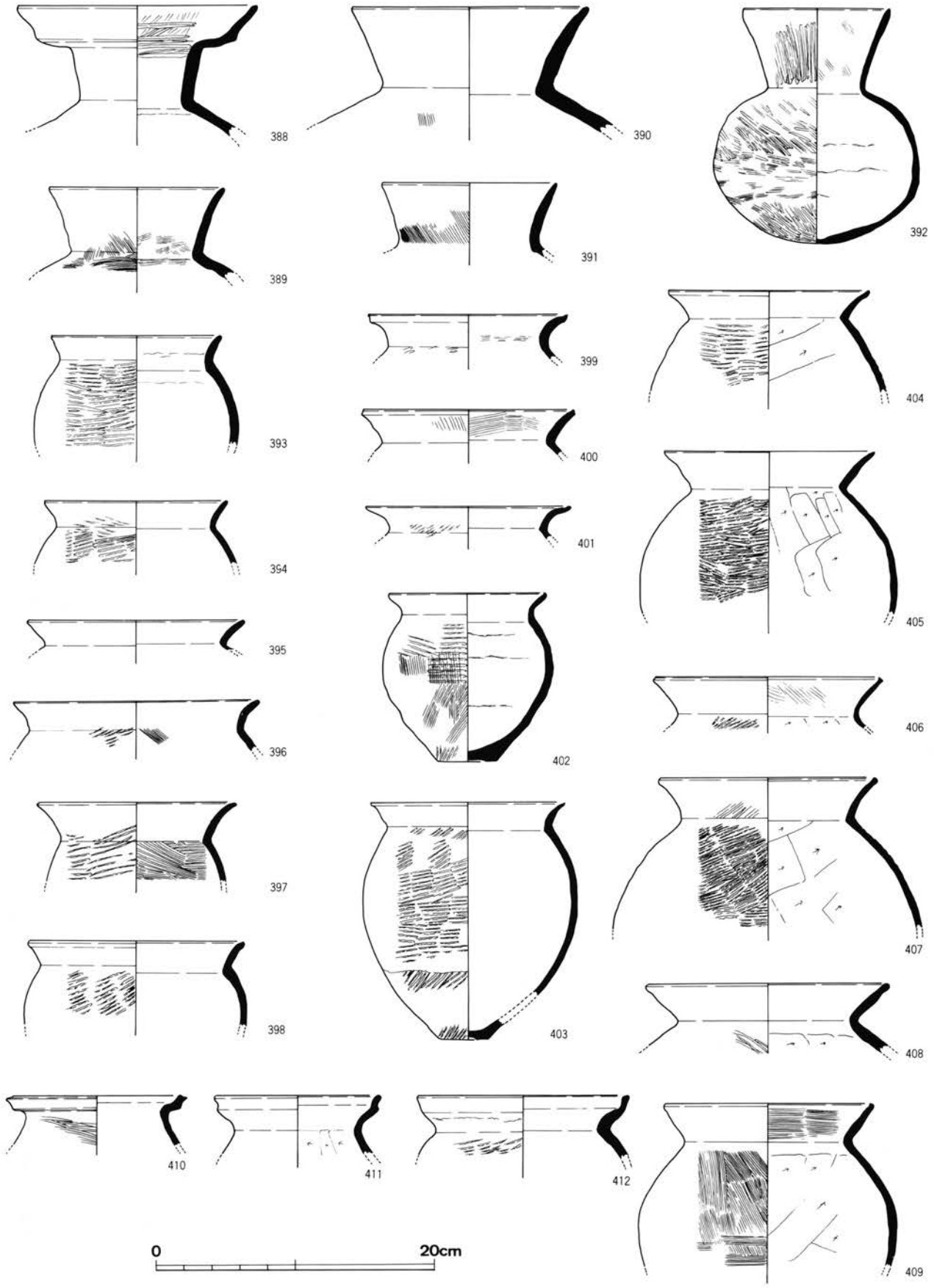
出土土器实测图(13)
NR96224上層



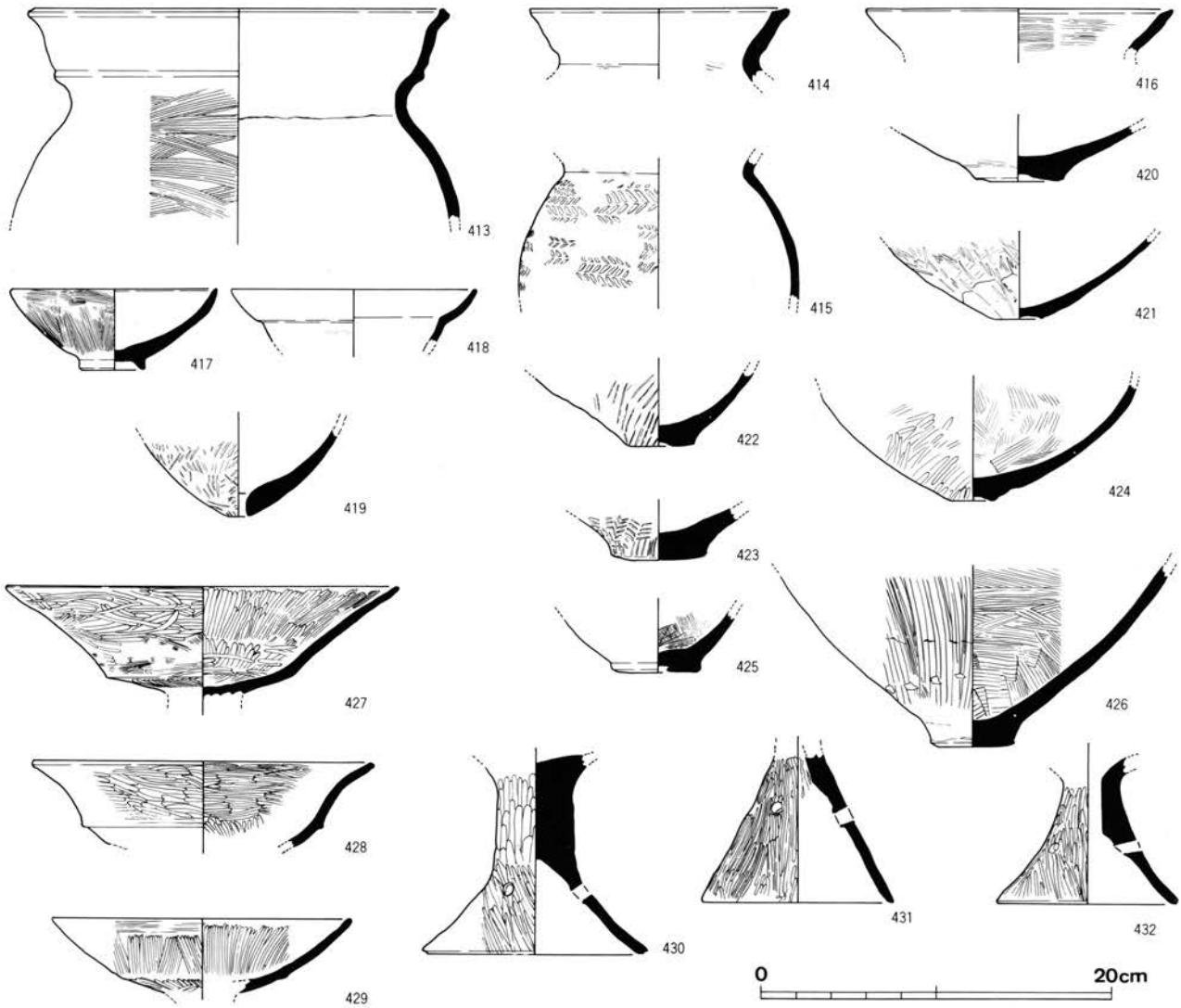
出土土器実測図(14)
N R 96222



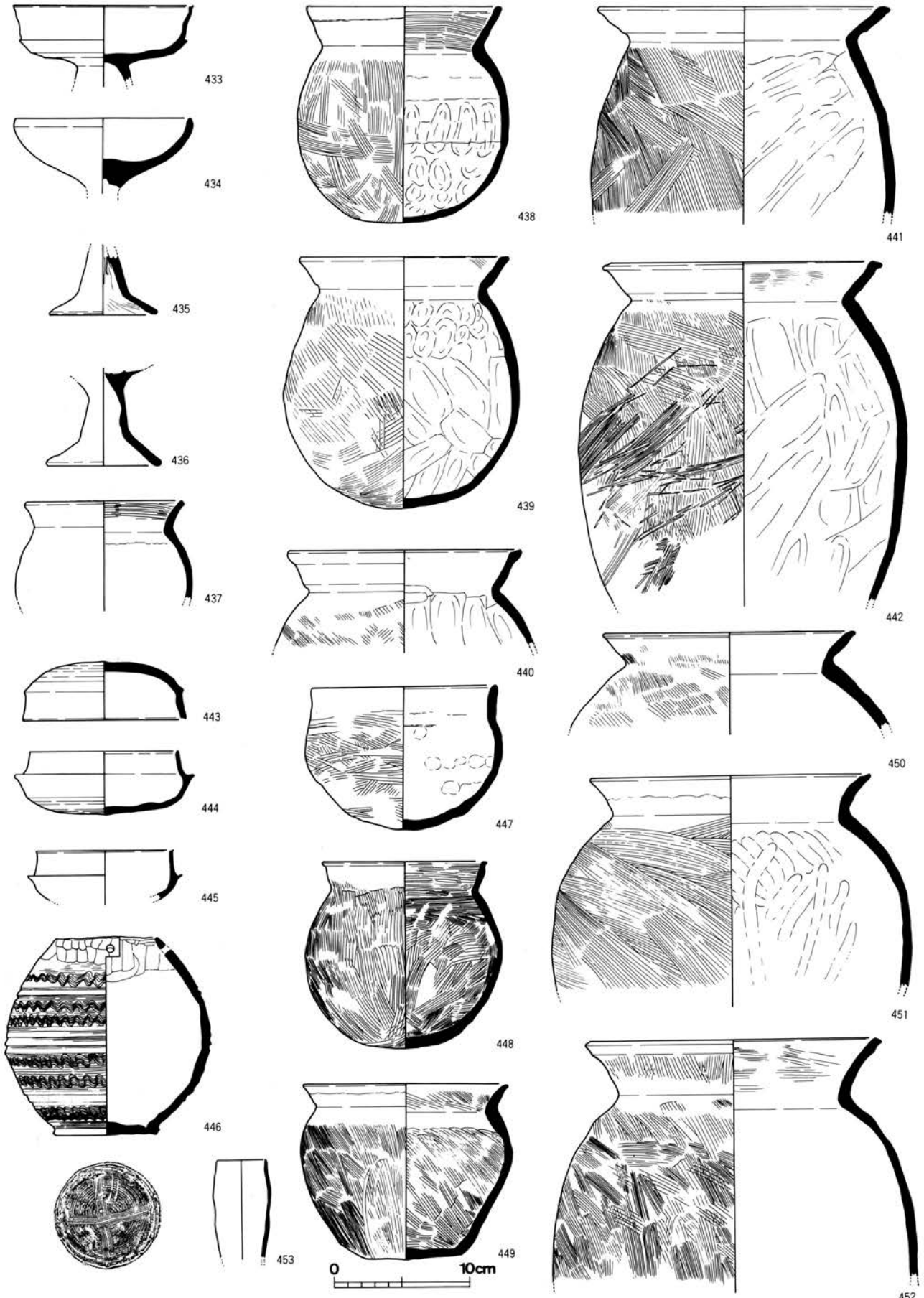
出土土器实测图(15)
NR 96222



出土土器実測図(16)
N R 96222・97537合流部

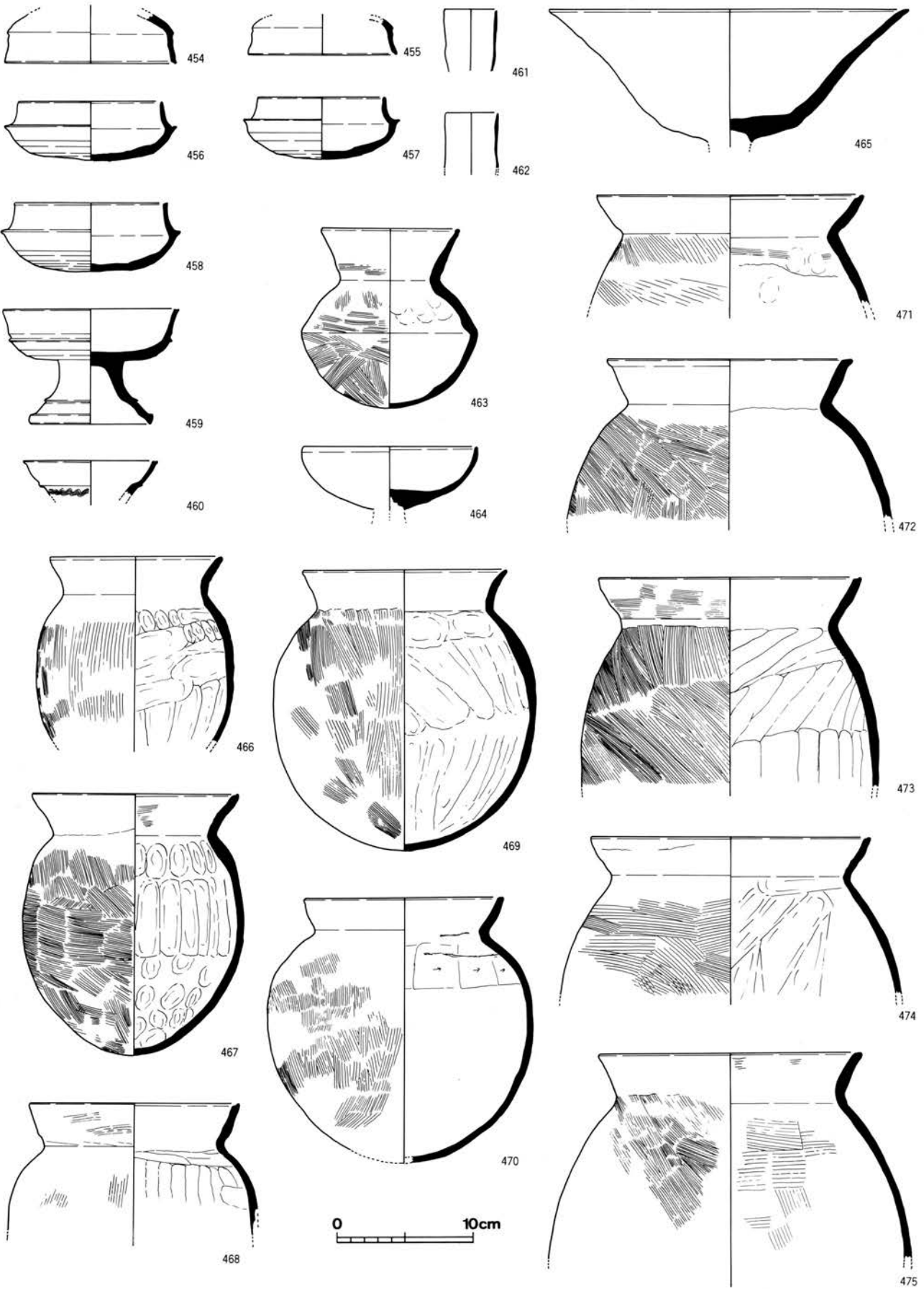


出土土器实测图(17)
N R 96222 · 97537 合流部

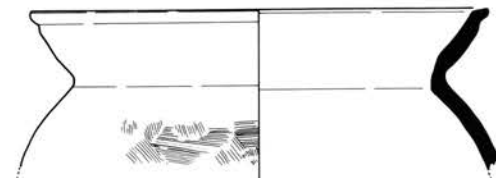
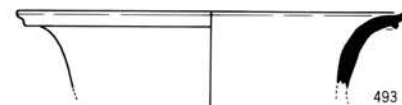
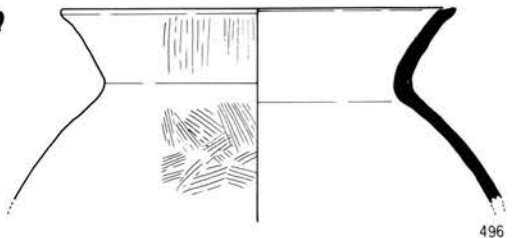
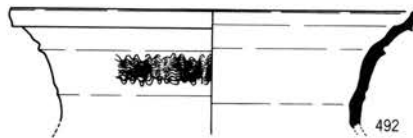
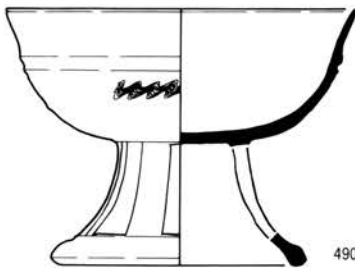
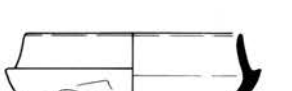
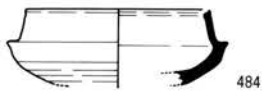
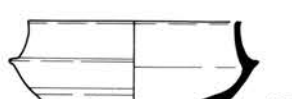
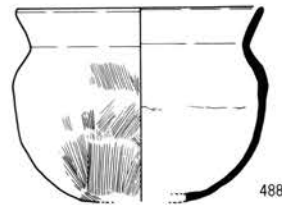
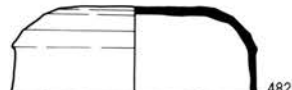
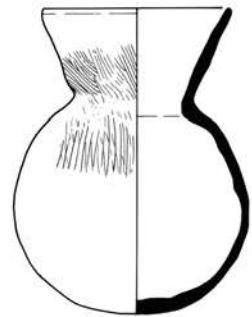
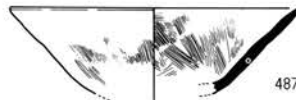
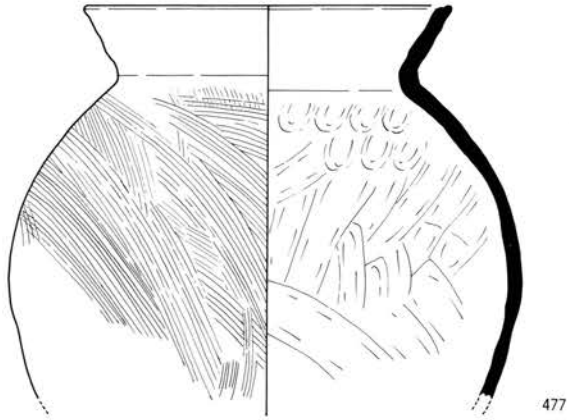
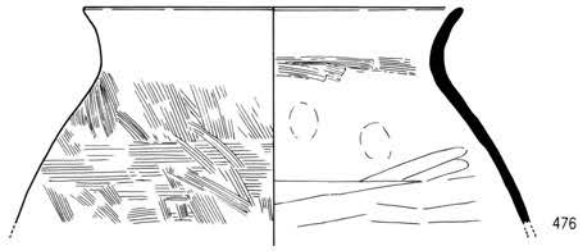


出土土器実測図(18)

433~442 : S H94006 443~453 : S H94005

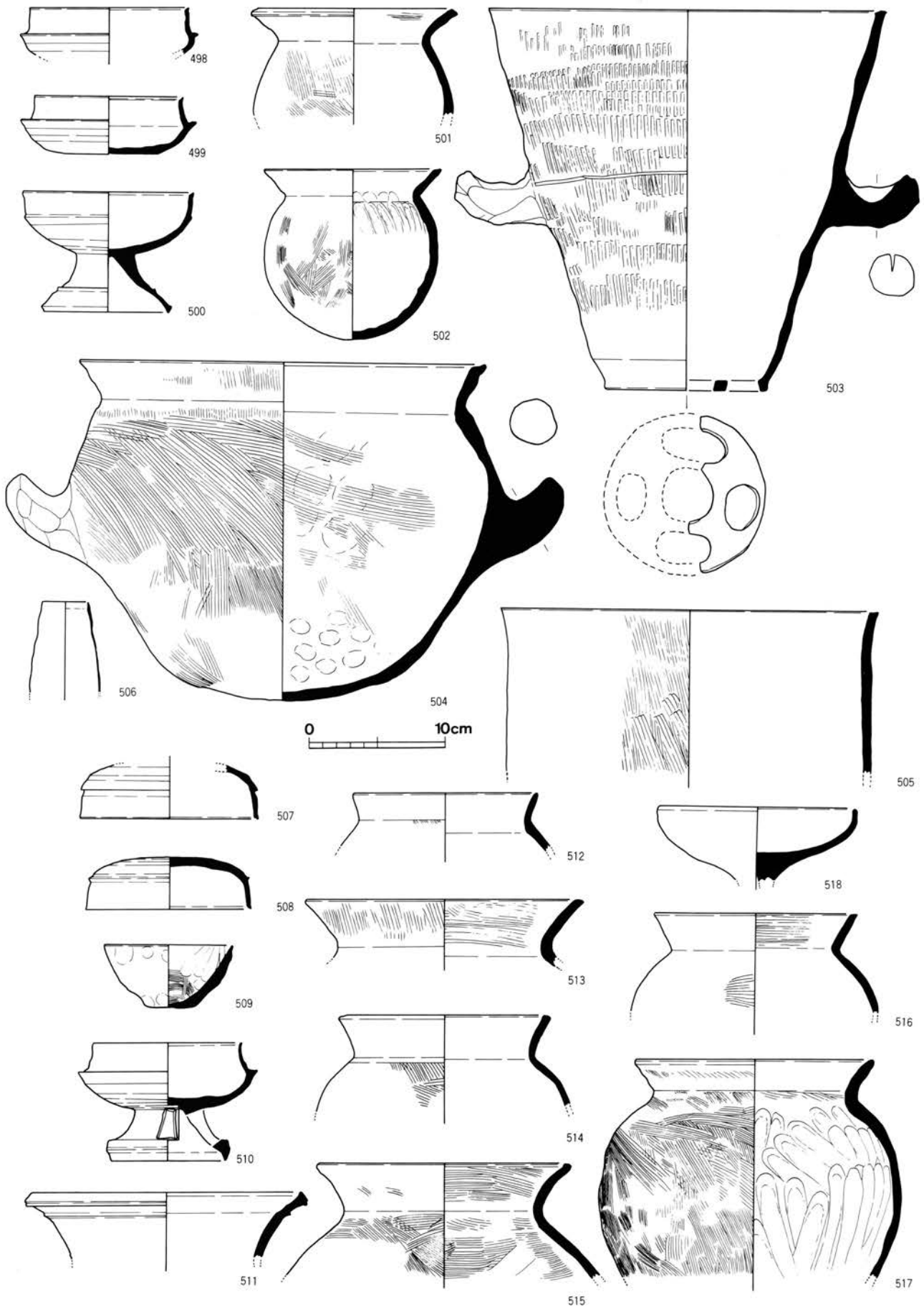


出土土器実測図(19) S H94004



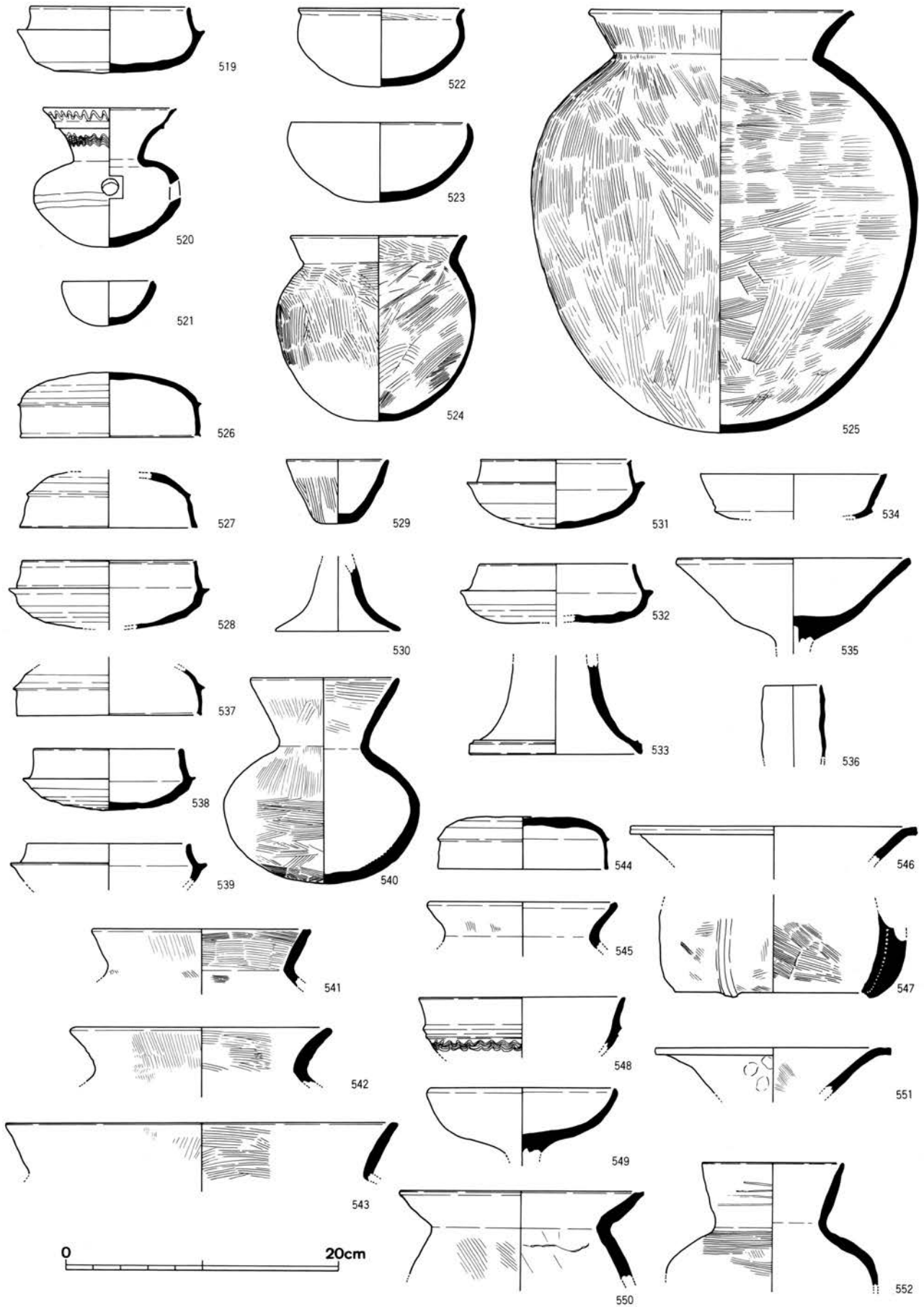
出土土器実測図(20)

476~478 : S H94004 479~497 : 包含層



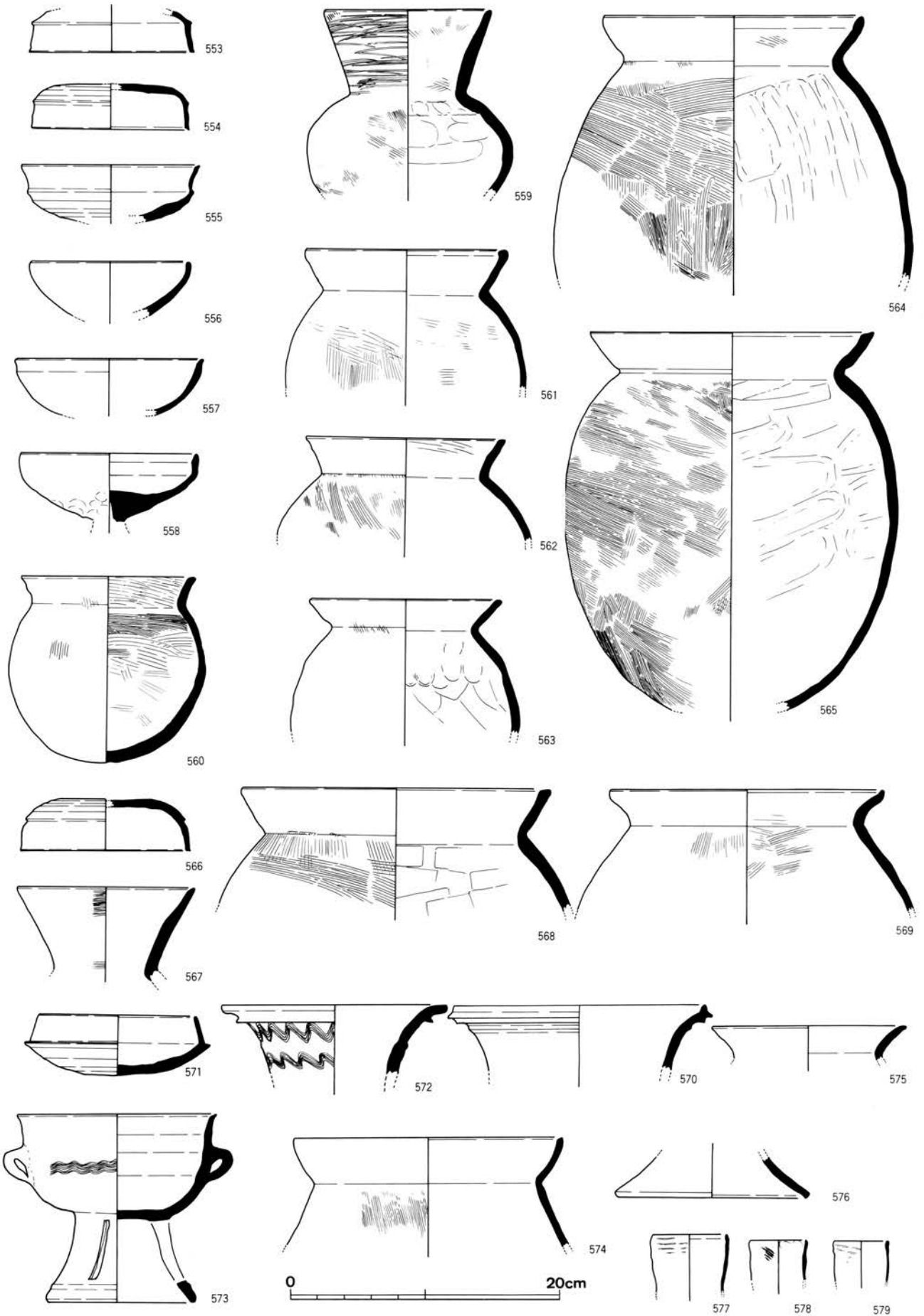
出土土器実測図(21)

498~506 : S H95052 507~518 : S H95054



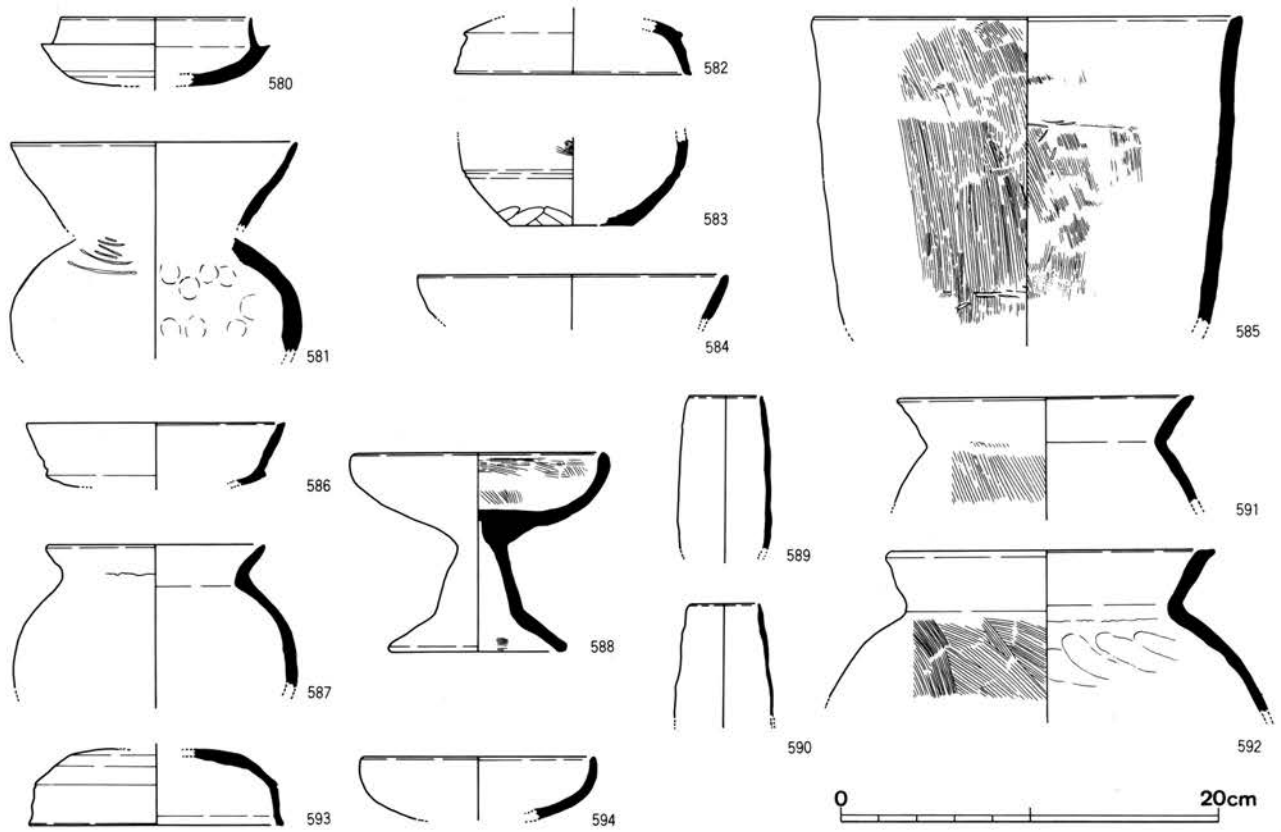
出土土器实测图(22)

519~525 : S H97283 526~530 : S H97259 531~533 : S H97264 534~536 : S H97282
 537~543 : S H97298 544~547 : S H97272 548~551 : S H97270 552 : S H97286



出土土器実測図(23)

553~565 : S H95051 566~570 : S H95048 573・574 : S D97305 その他包含層



出土土器実測図(24)

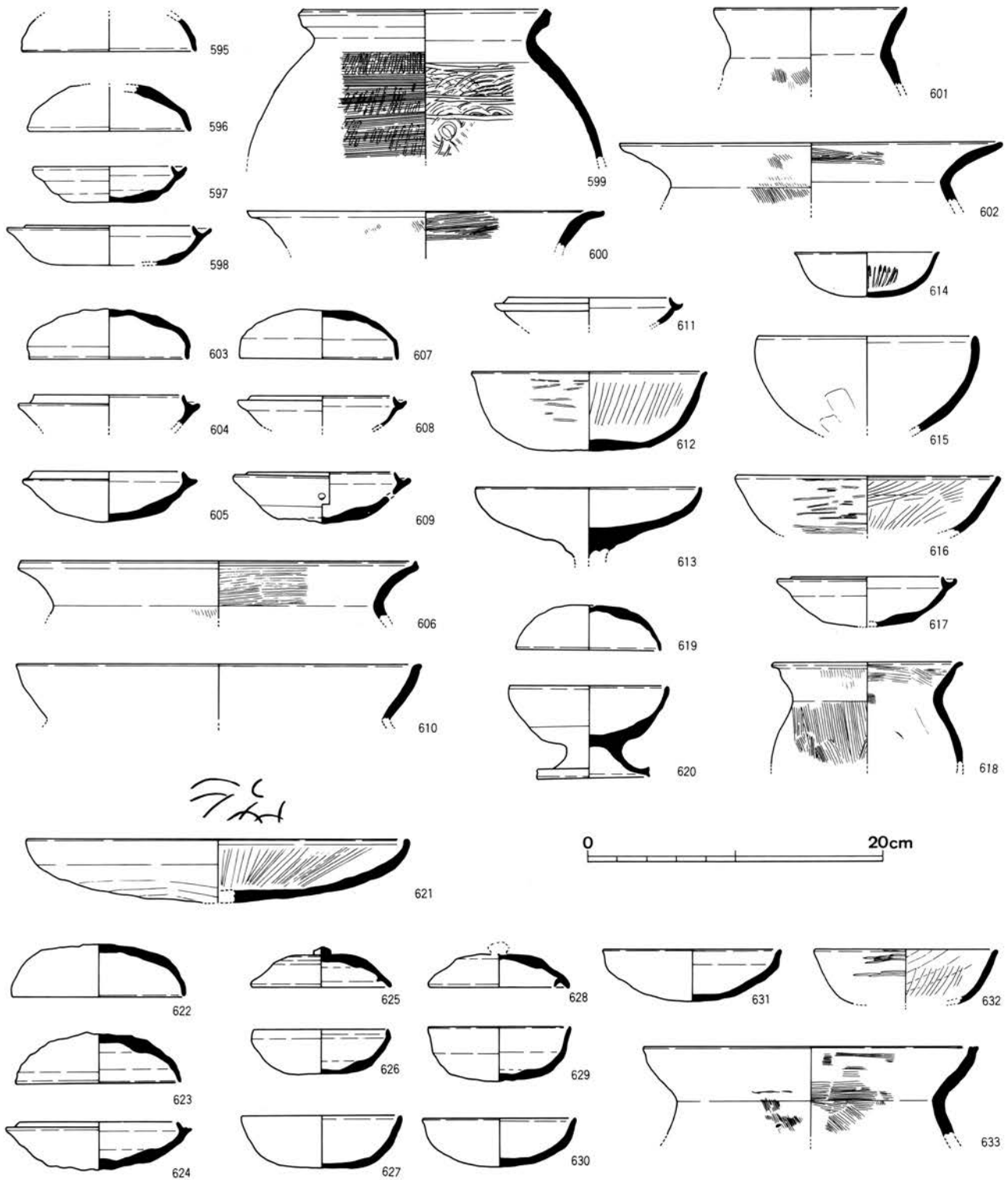
580・581：S H97295

582～585：S H97280

586・587：S H97287

588～592：S H95059

593・594：S H97260



出土土器実測図(25)

595~602 : S H97278

603~606 : S H97283

607~610 : S H97284

611~613 : S H97279

614~616 : S H97268

617 : S H97288

618 : S H97266

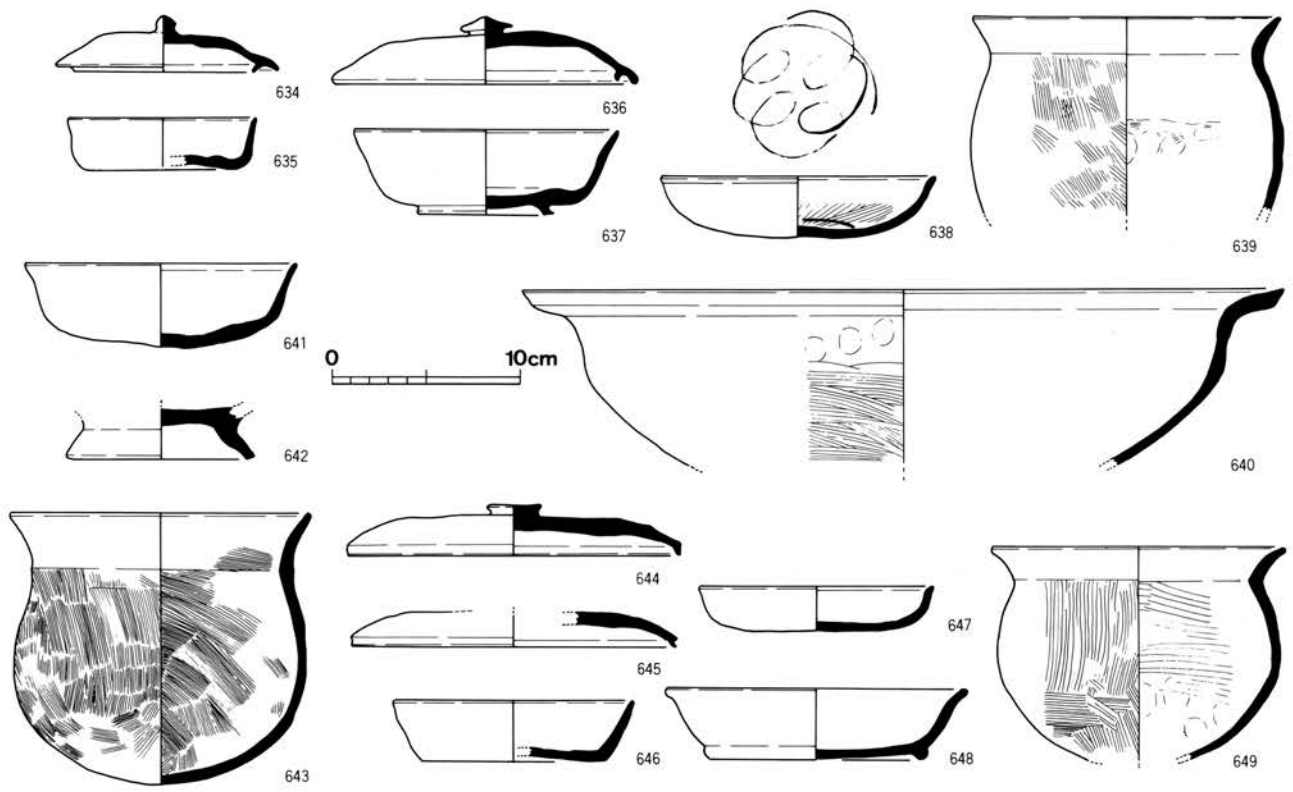
619 : S H97276

620 : S H97280

621 : S H97281

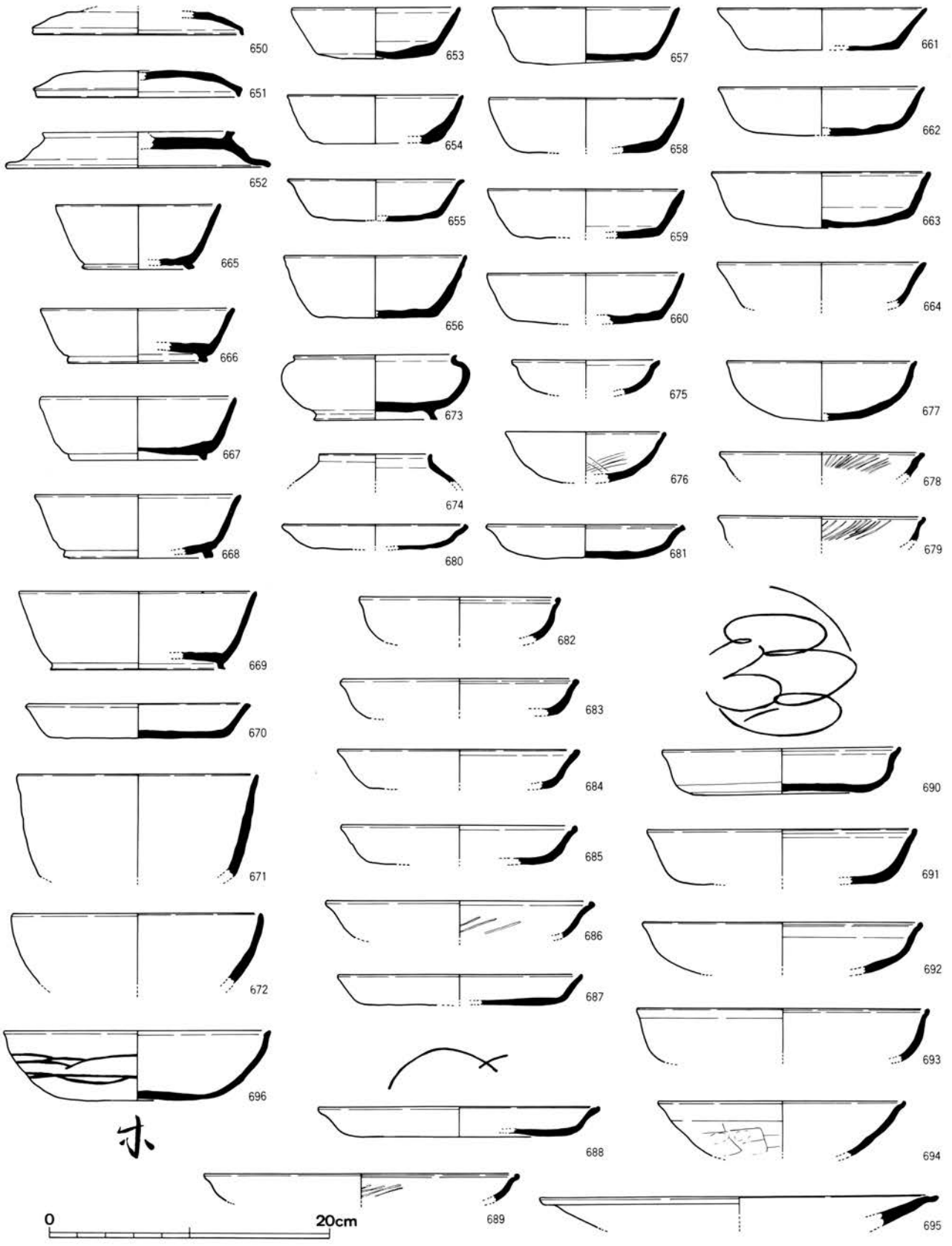
622~624 : S X96027

625~633 : S K96028



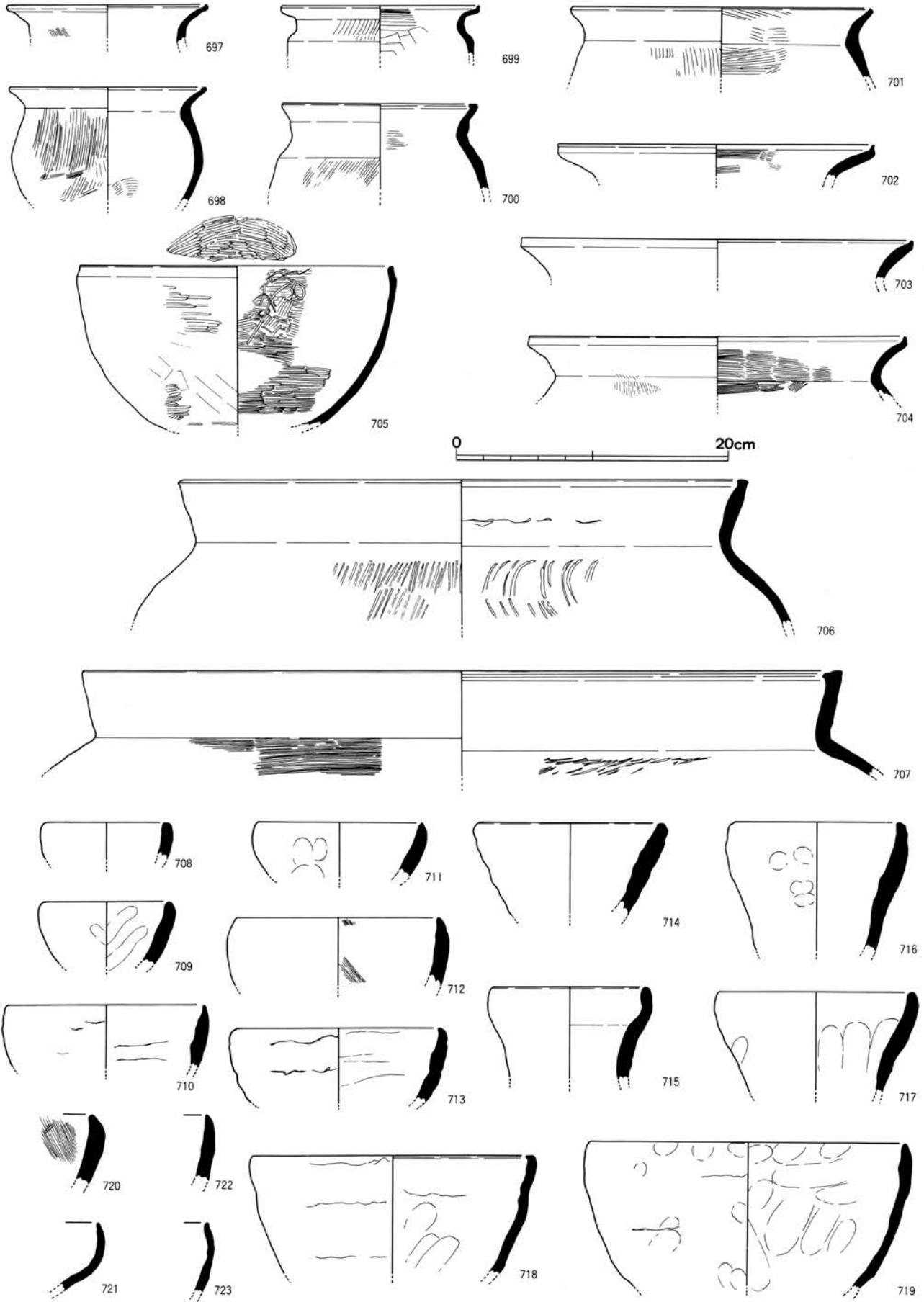
出土土器実測図(26)

634・635：S D97247 636～640：S D97246 641～643：S E96051 644～649：S D97236

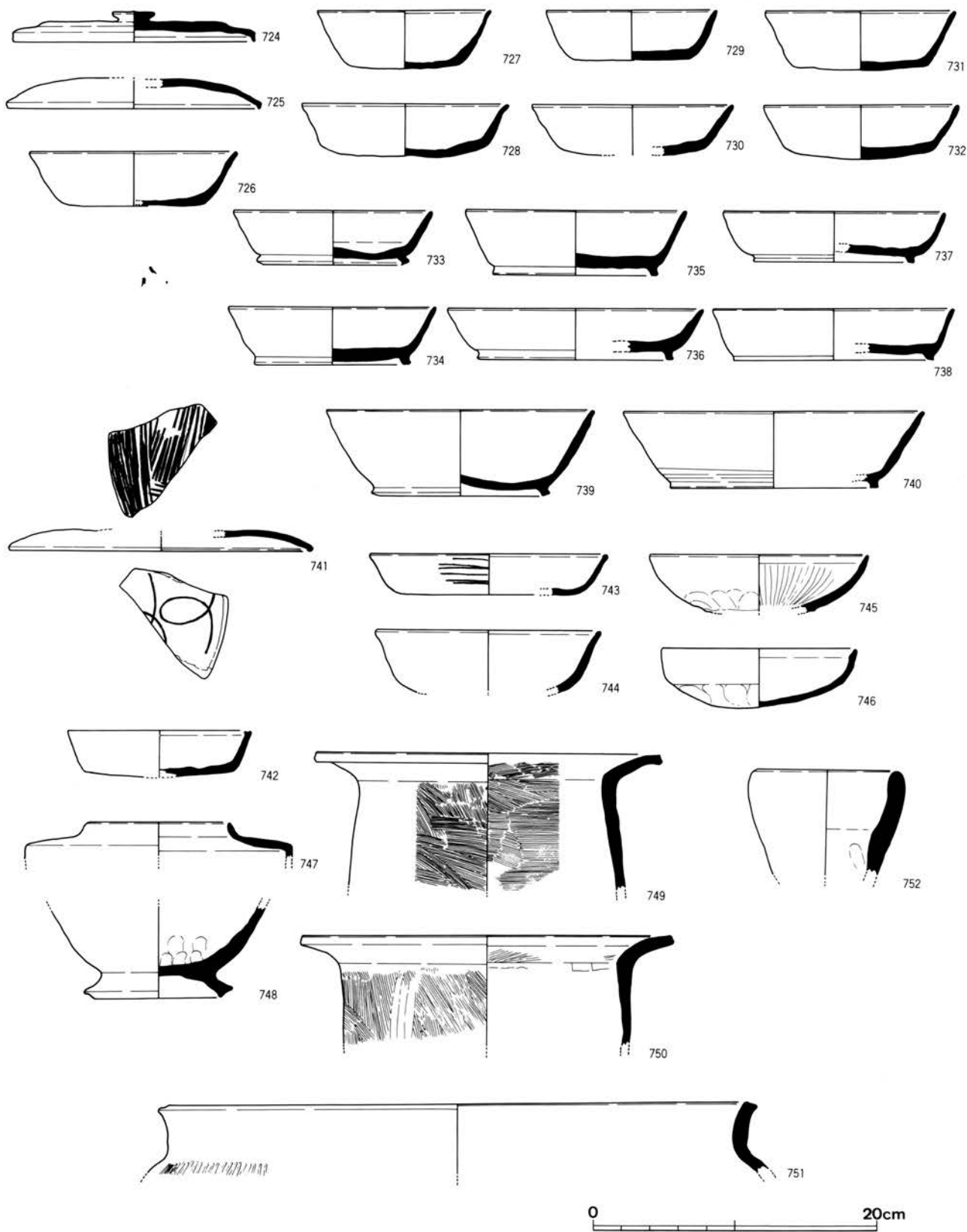


出土土器实测图(27) S X97203

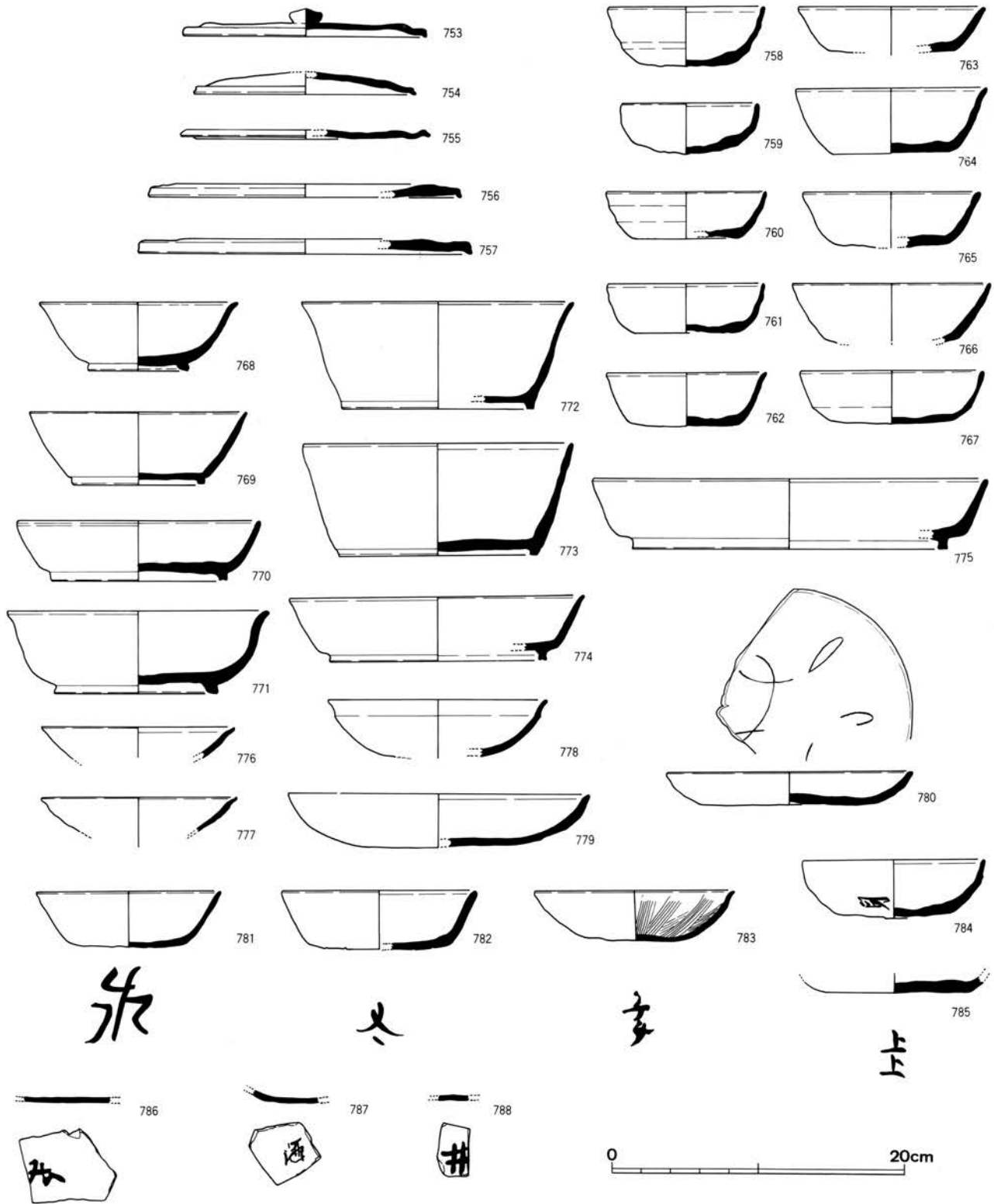
图版第七八

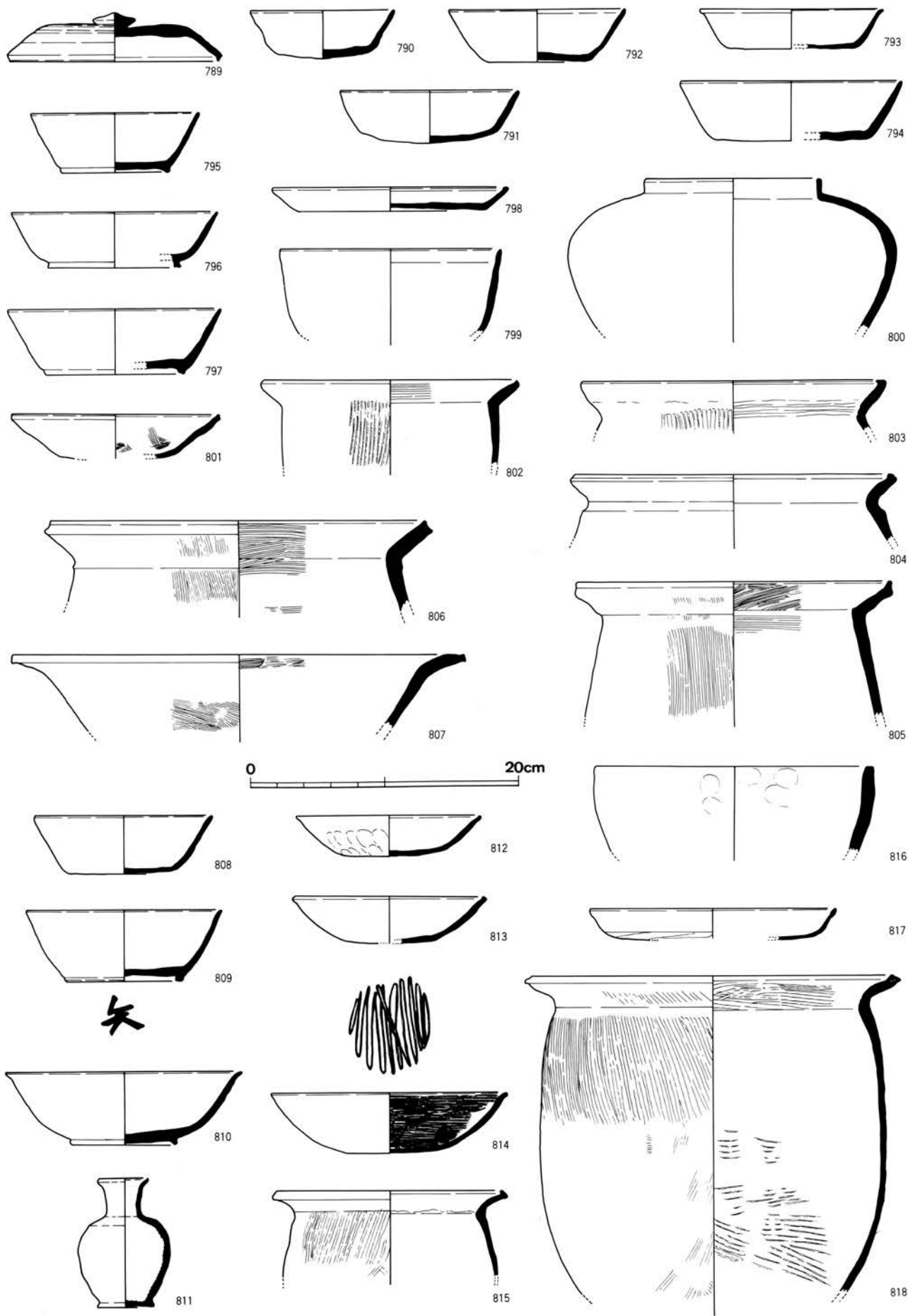


出土土器实测图(28) S X 97203

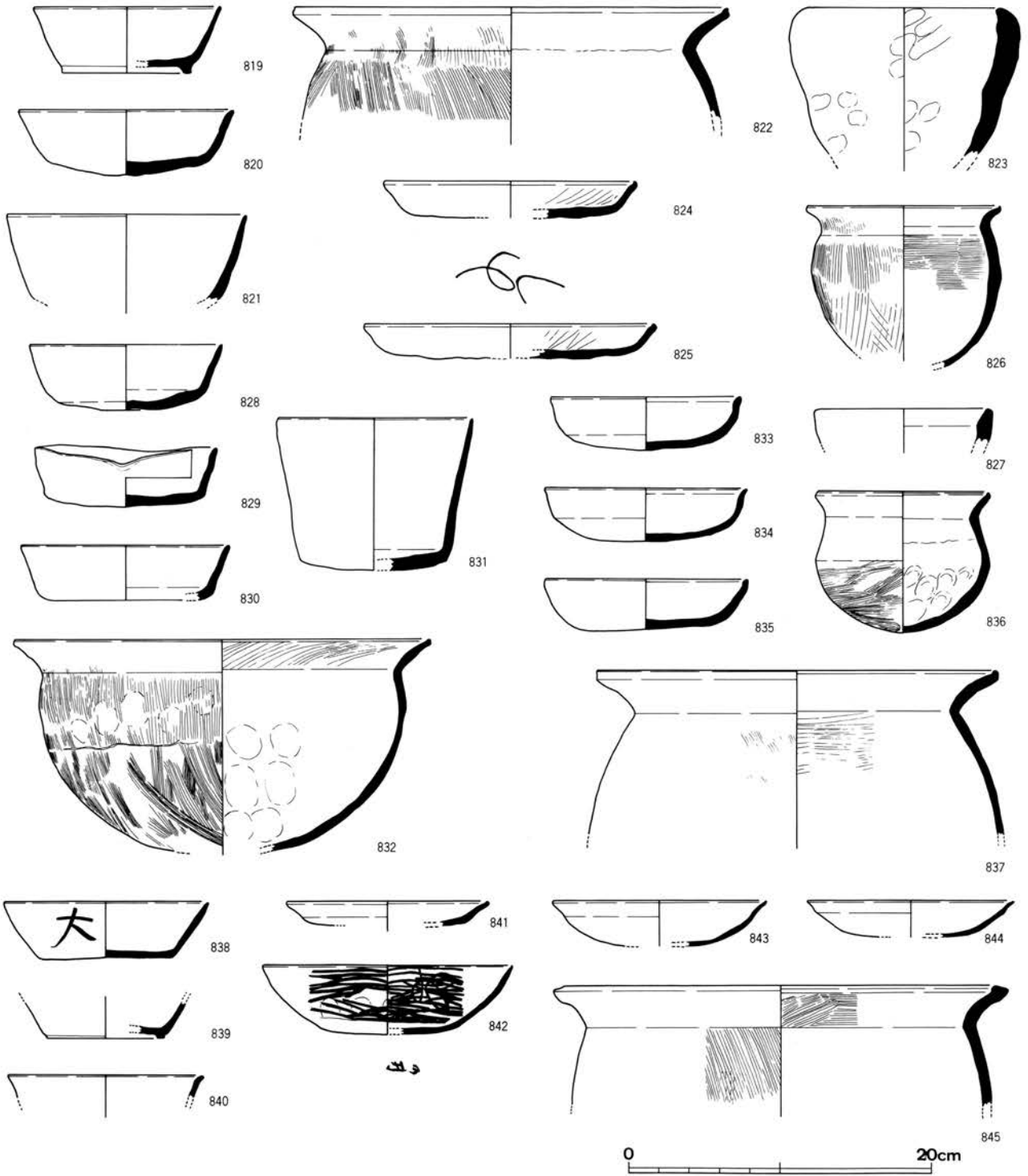


出土土器实测图(29) S D97219





出土土器实测图(31) S D97217-2



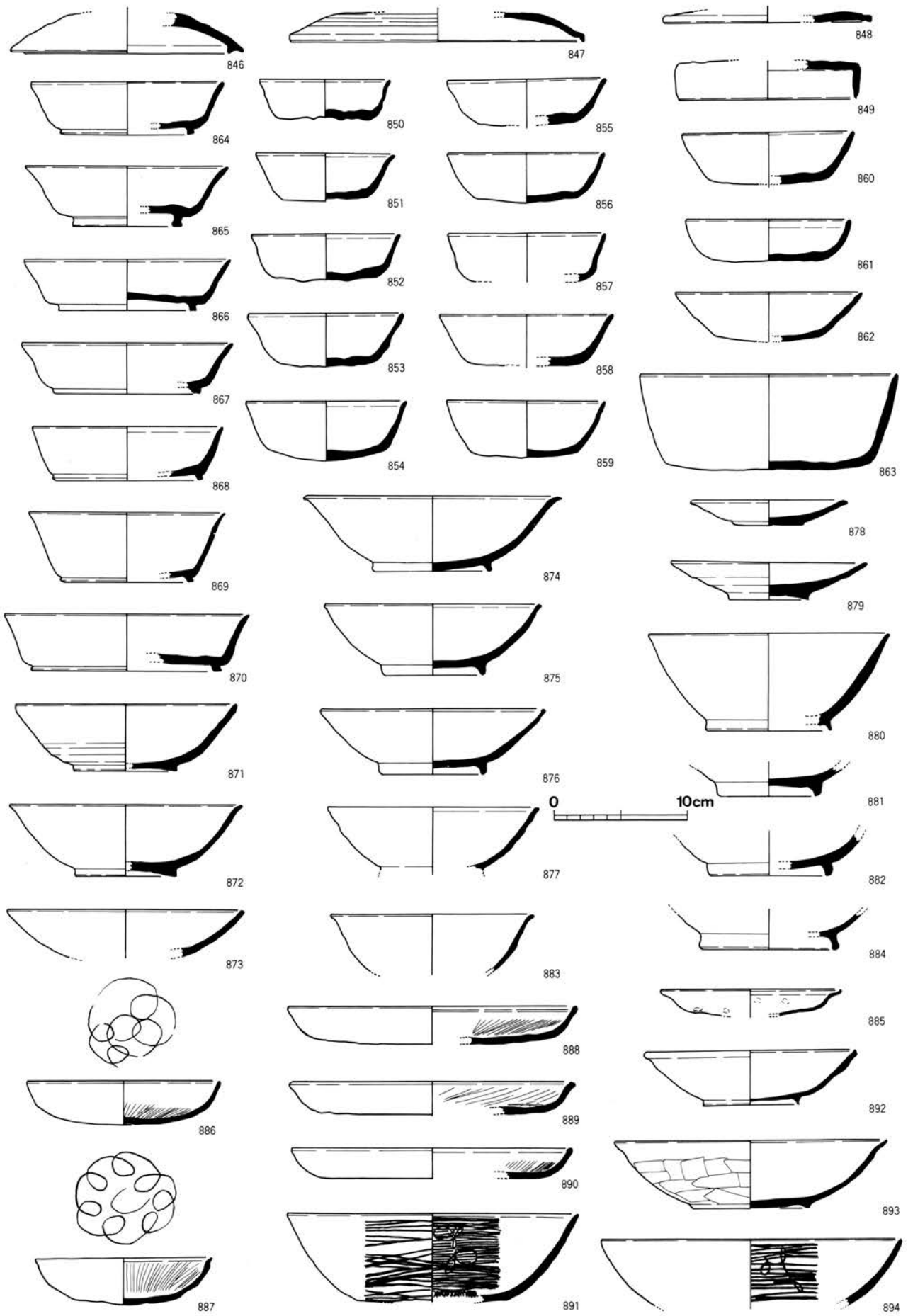
出土土器実測図(32)

819~823 : S E 95042

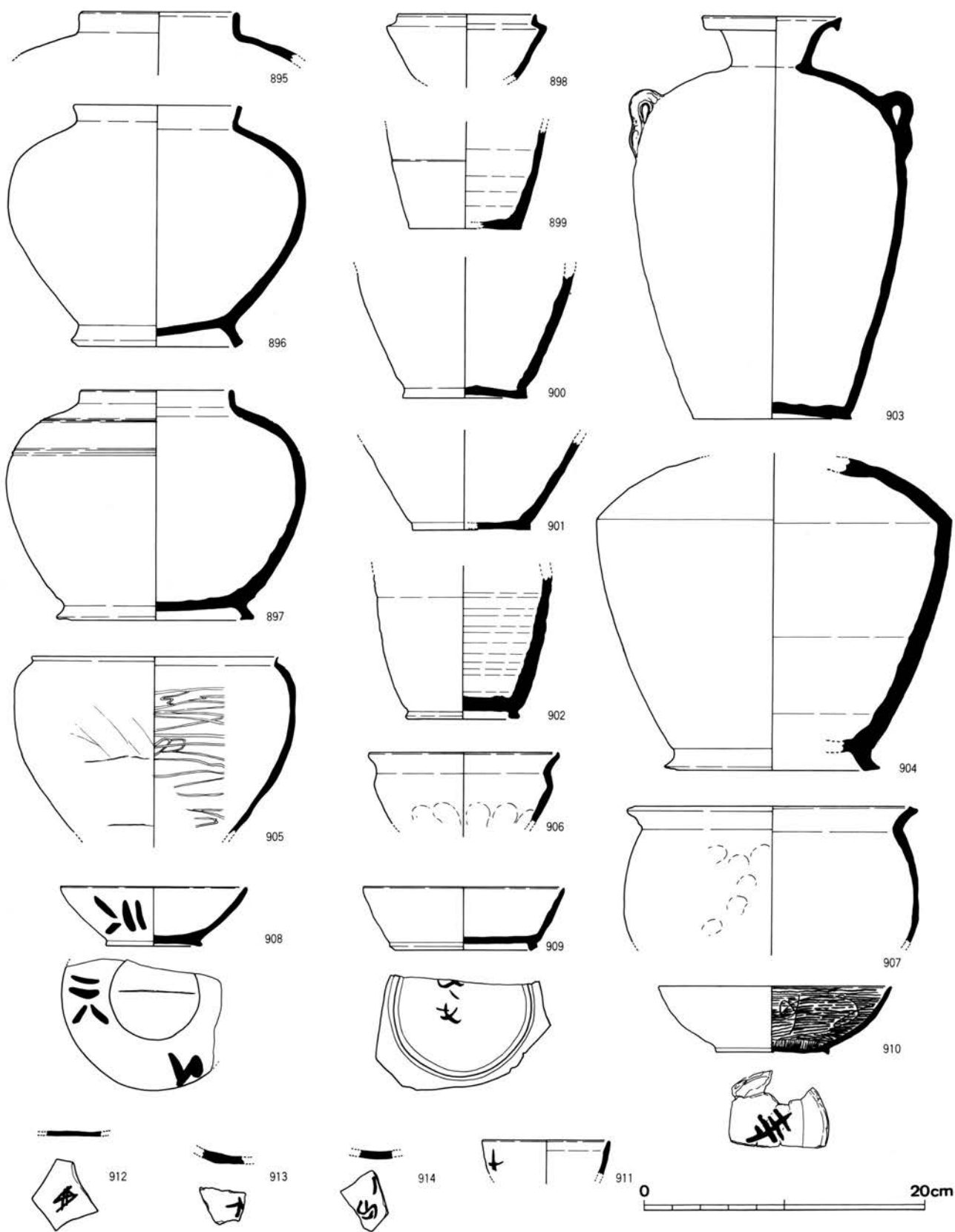
824~827 : S E 95072

828~837 : S H 95049

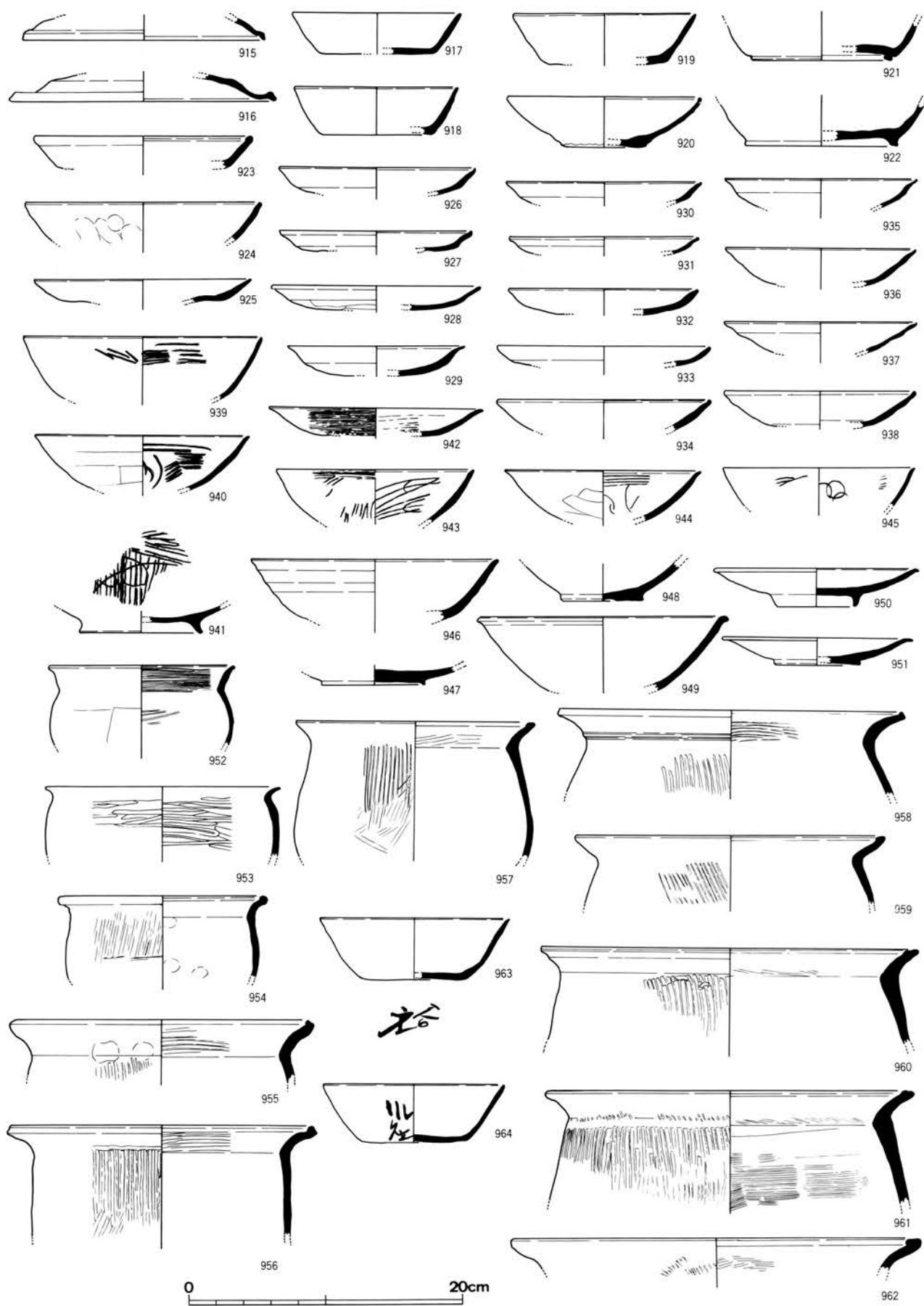
838~845 : S E 97223



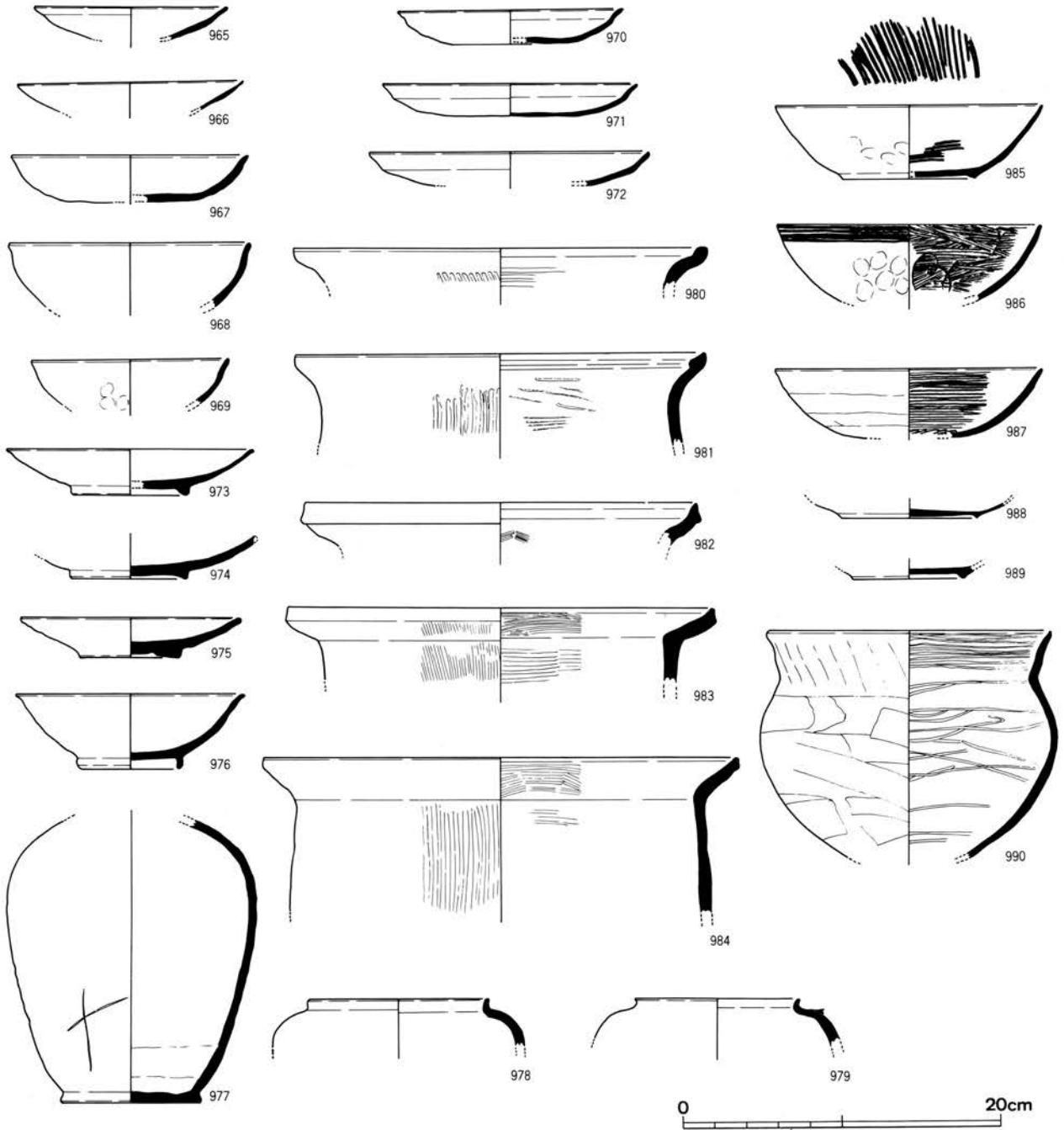
出土土器实测图(33) S D97218-1



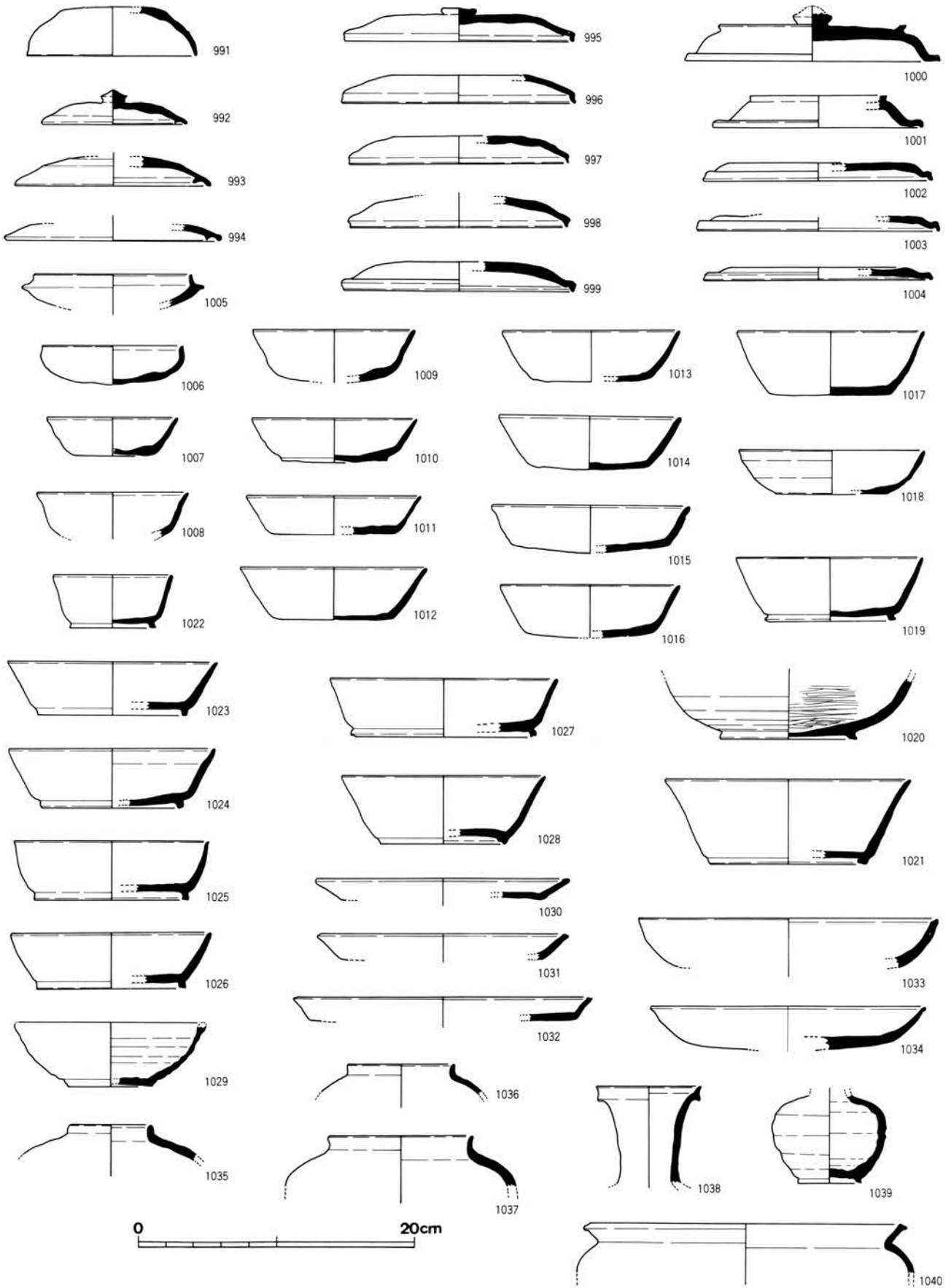
出土土器実測図(34) S D97218-1



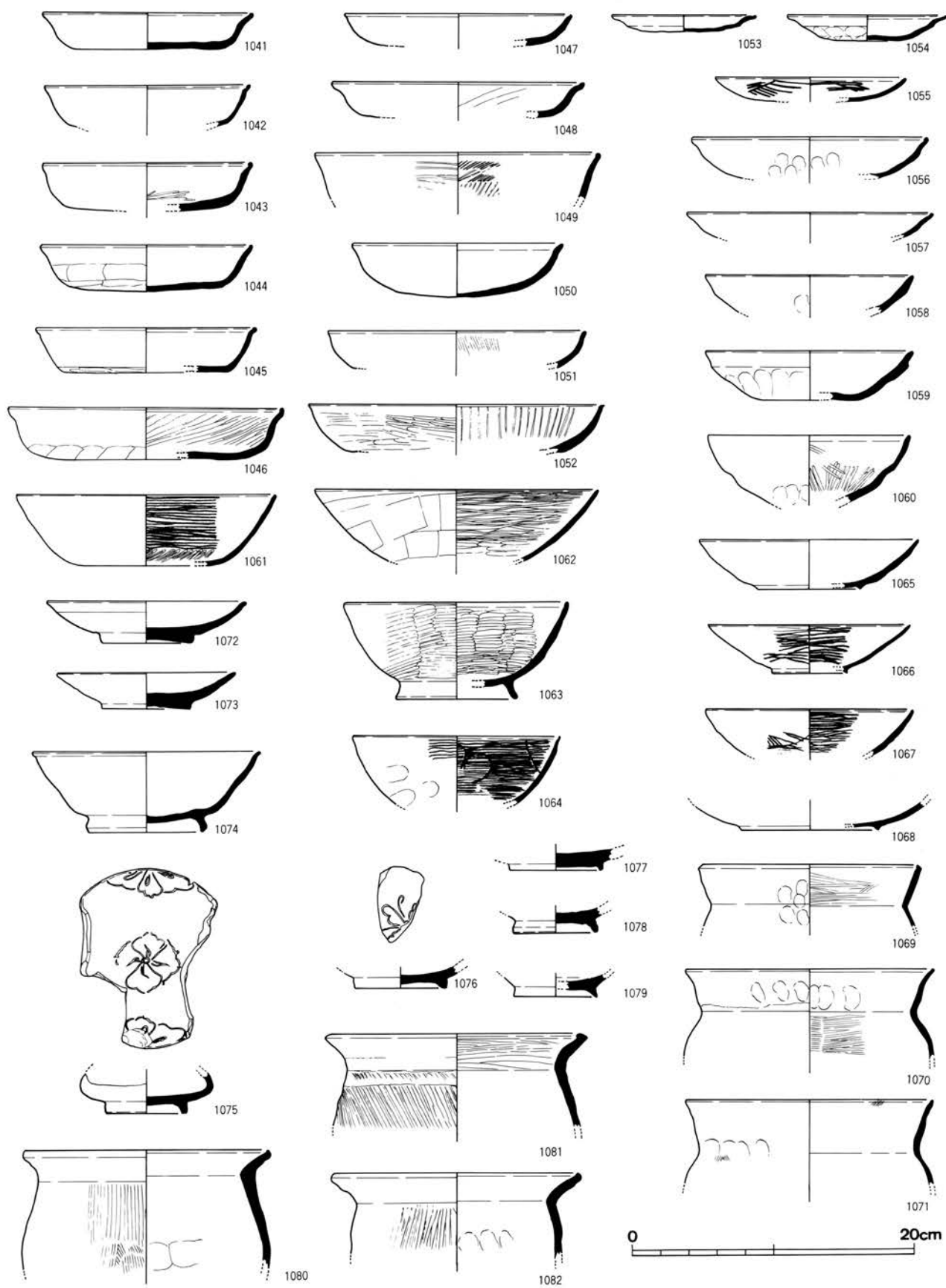
出土土器实测图(35) S D97218-2



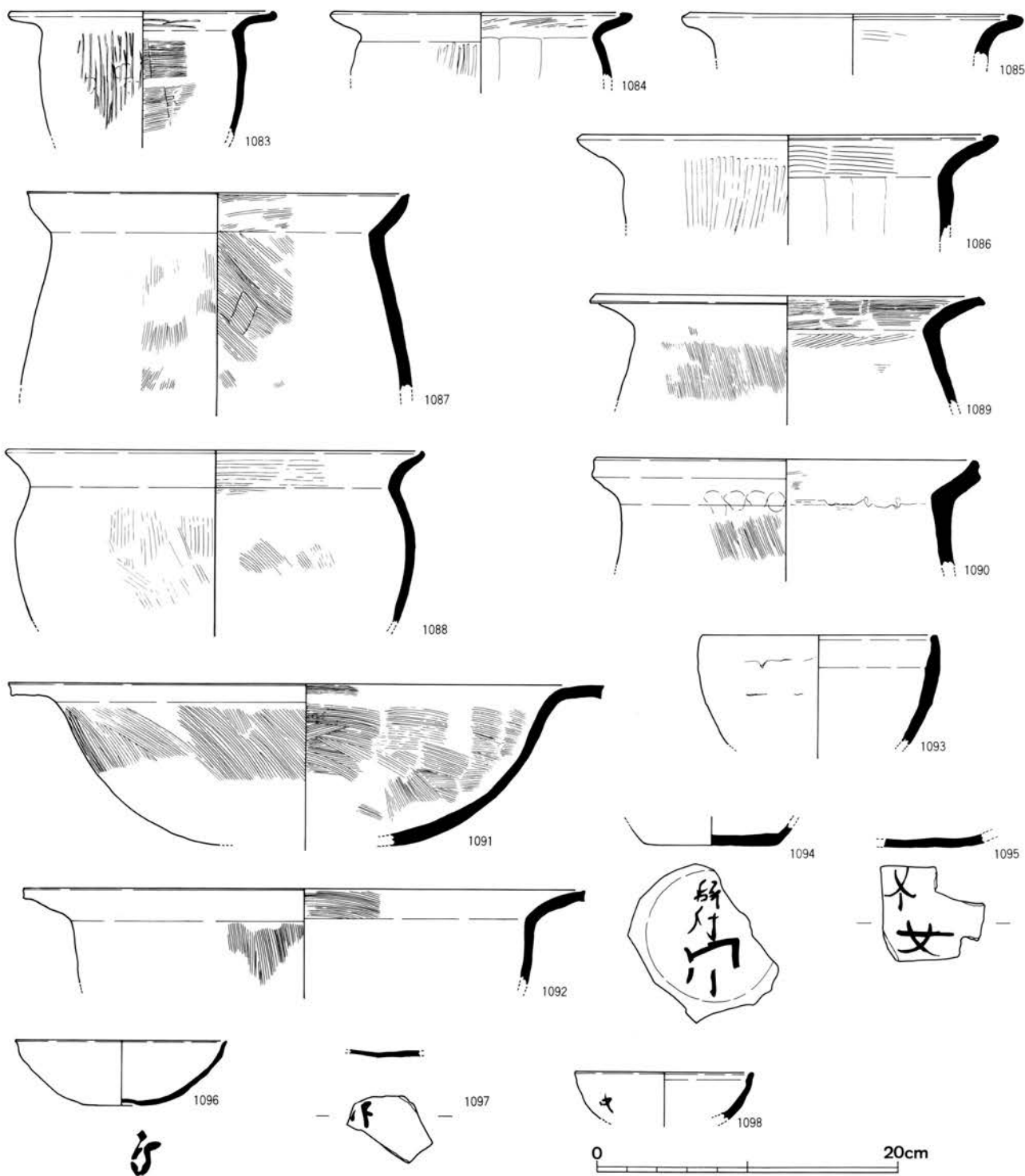
出土土器実測図(36) S D97307

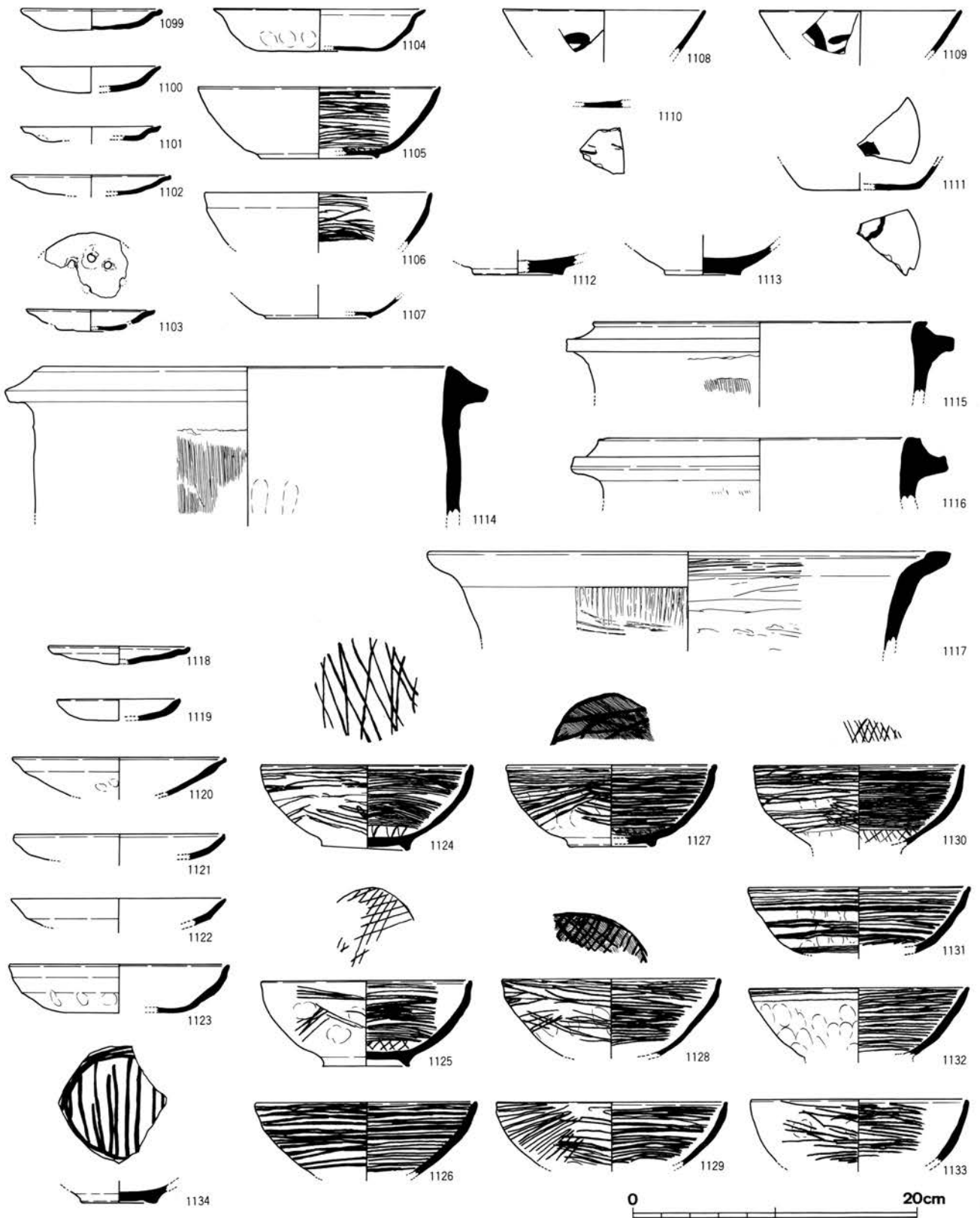


出土土器实测图(37)



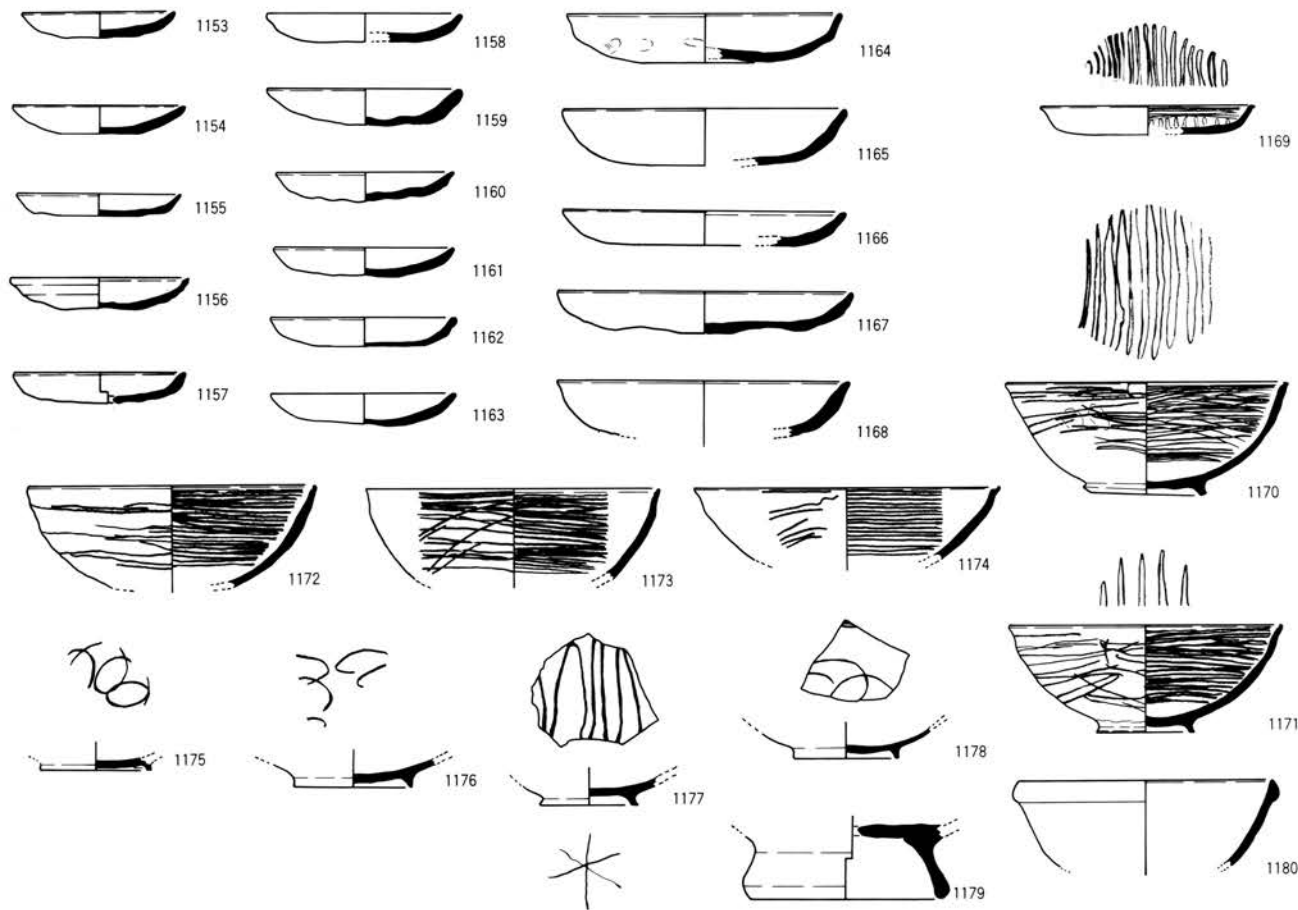
出土土器实测图(38)





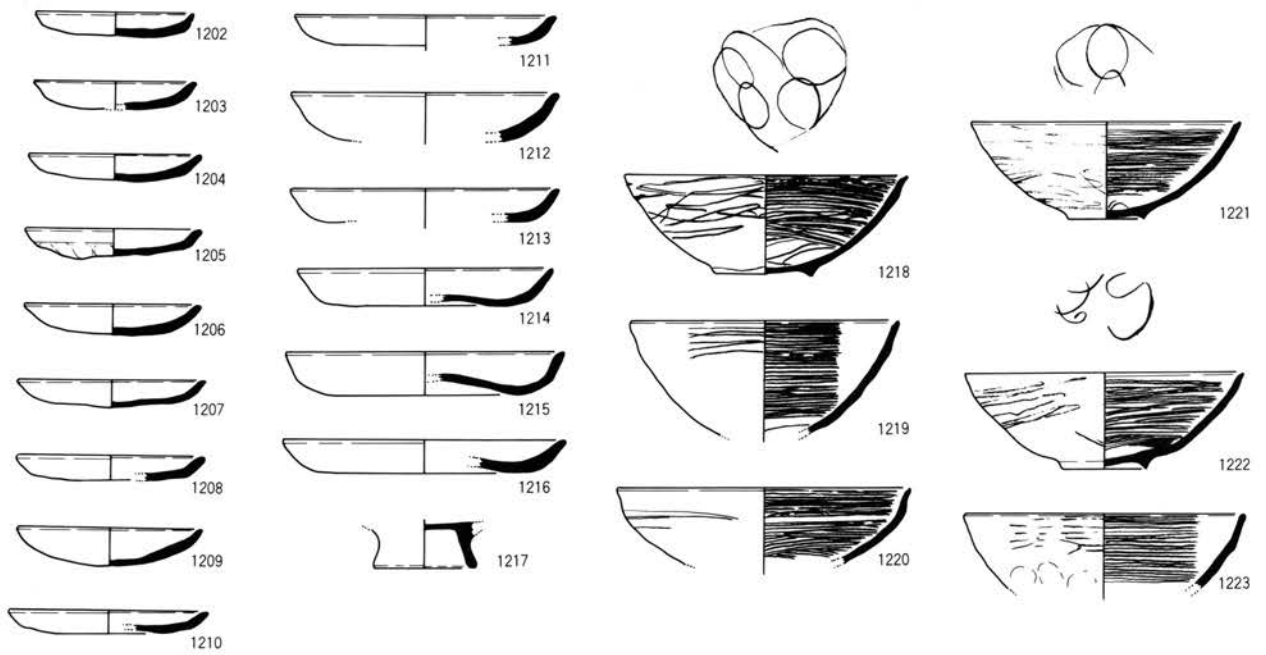
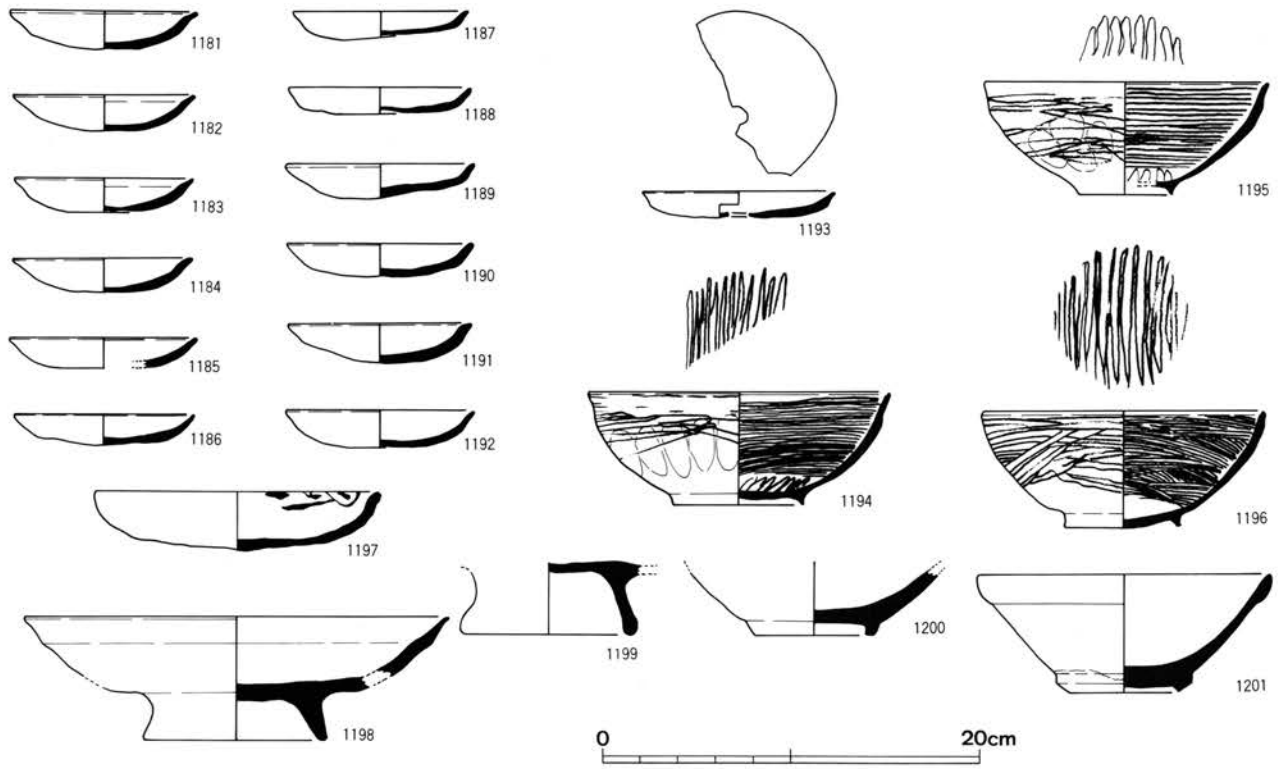
出土土器実測図(40)

1099~1117 : S E 96023 1118~1134 : S E 95204



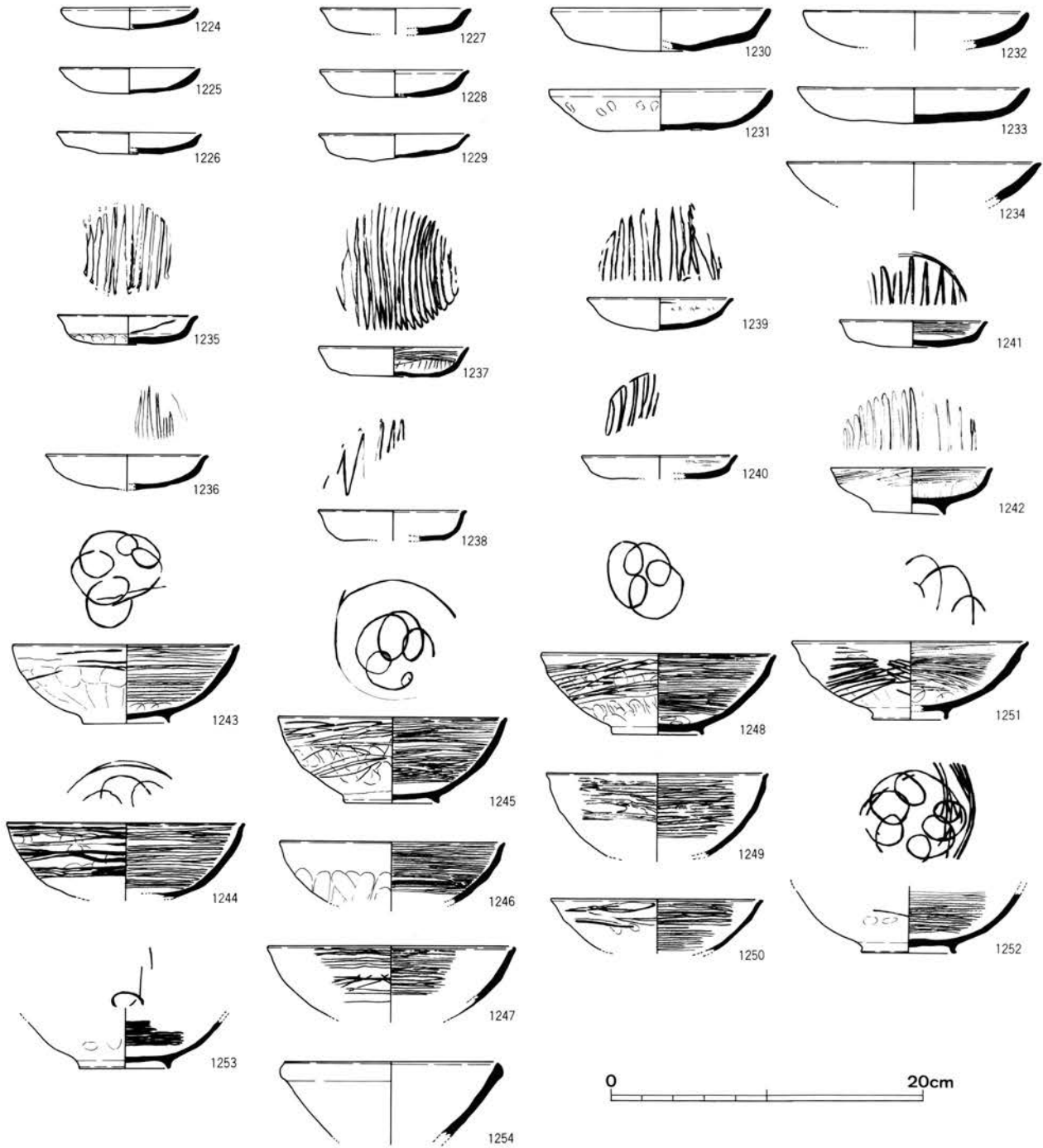
出土土器实测图(41)

1135~1152 : S E 95205 1153~1180 : S E 95035

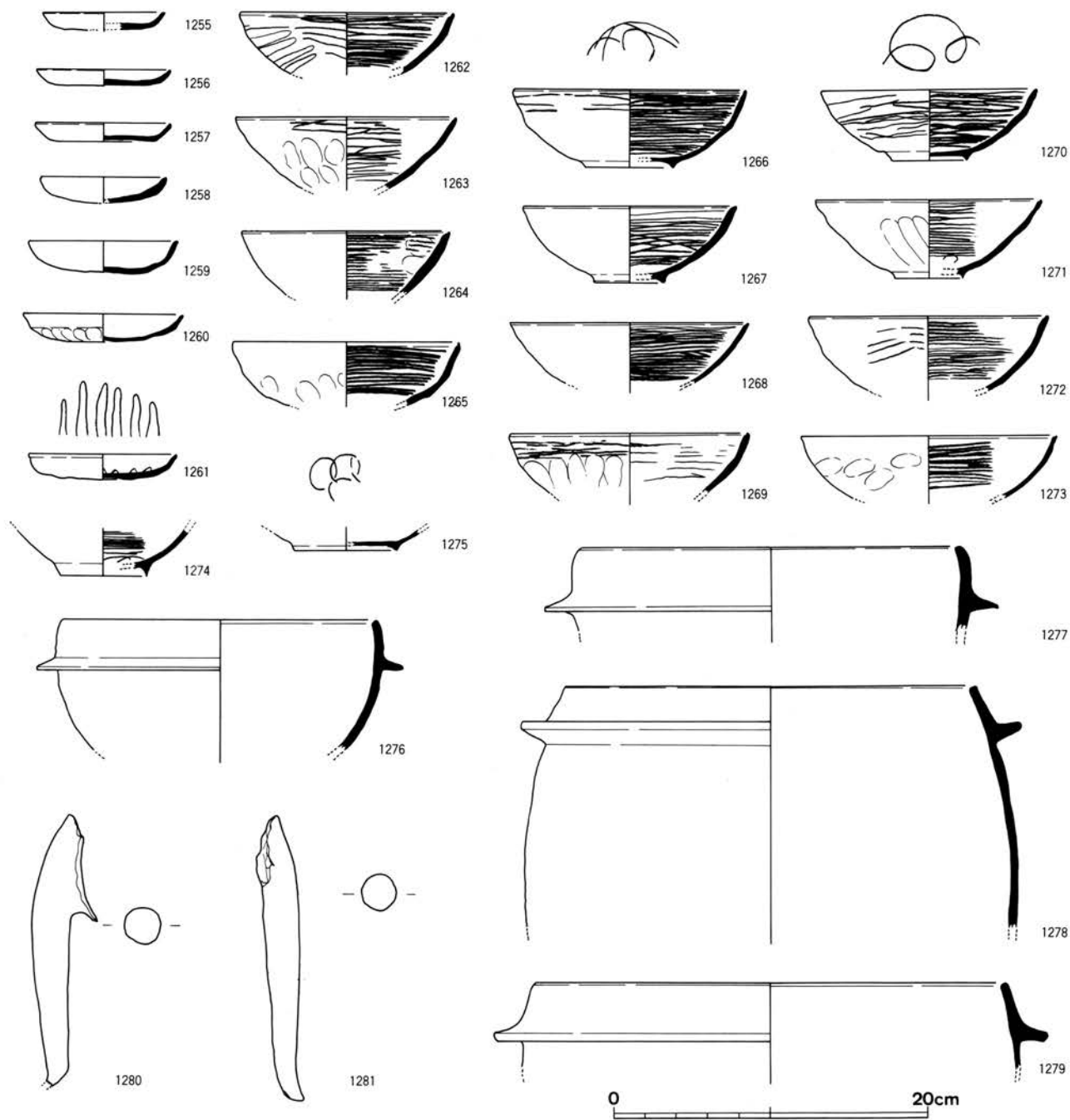


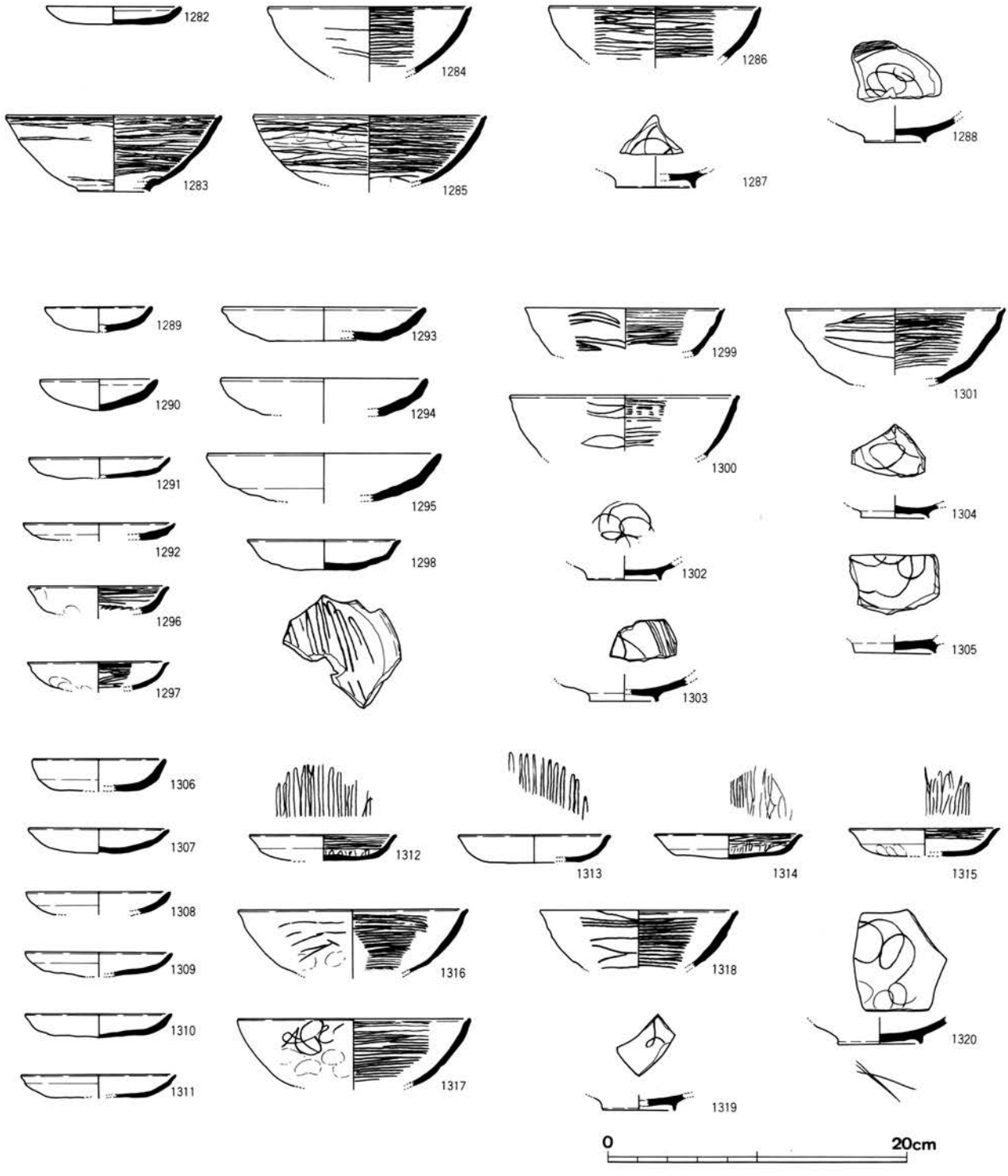
出土土器実測図(42)

1181~1201 : S E 94010 1202~1223 : S E 96096



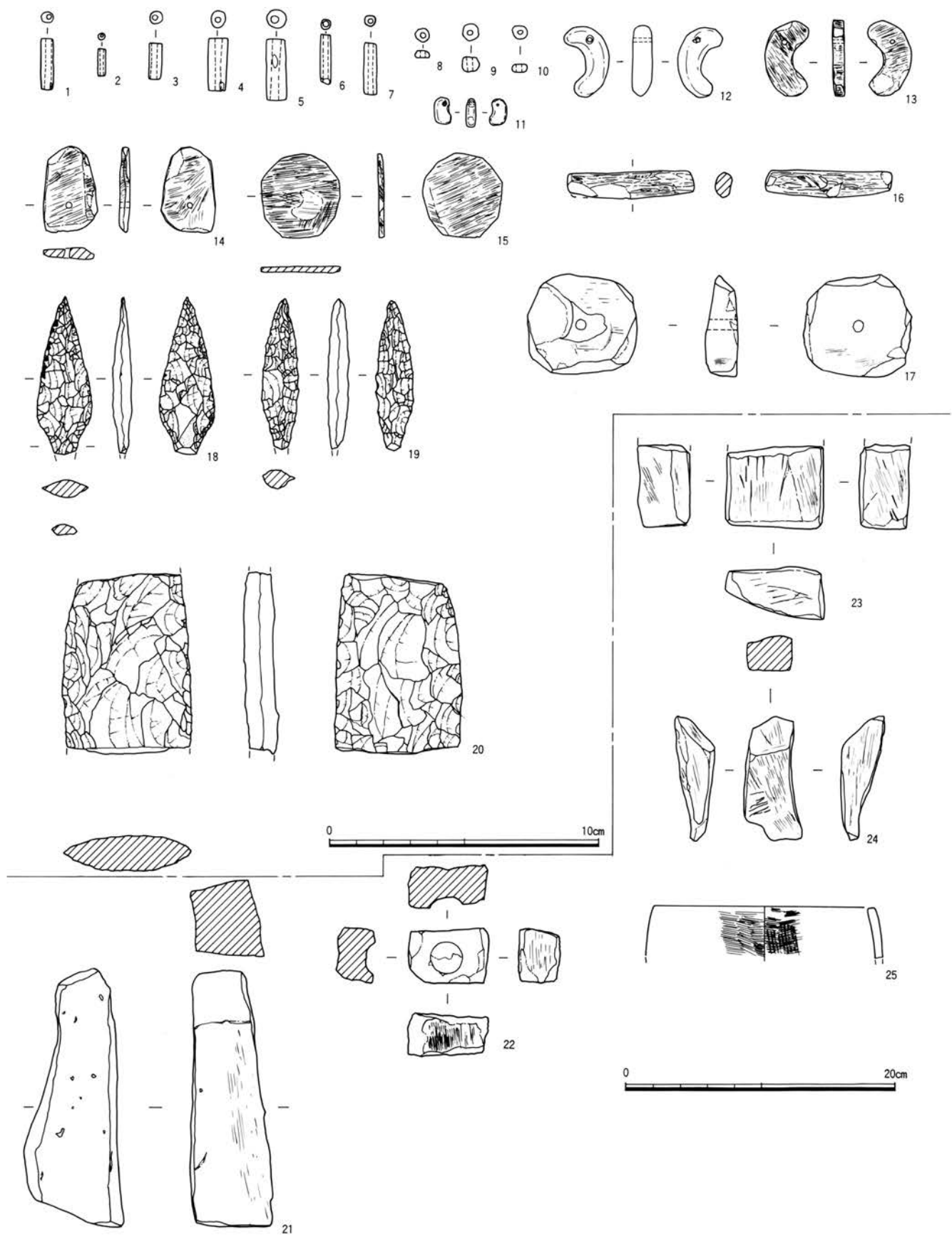
出土土器実測図(43) S E 95071



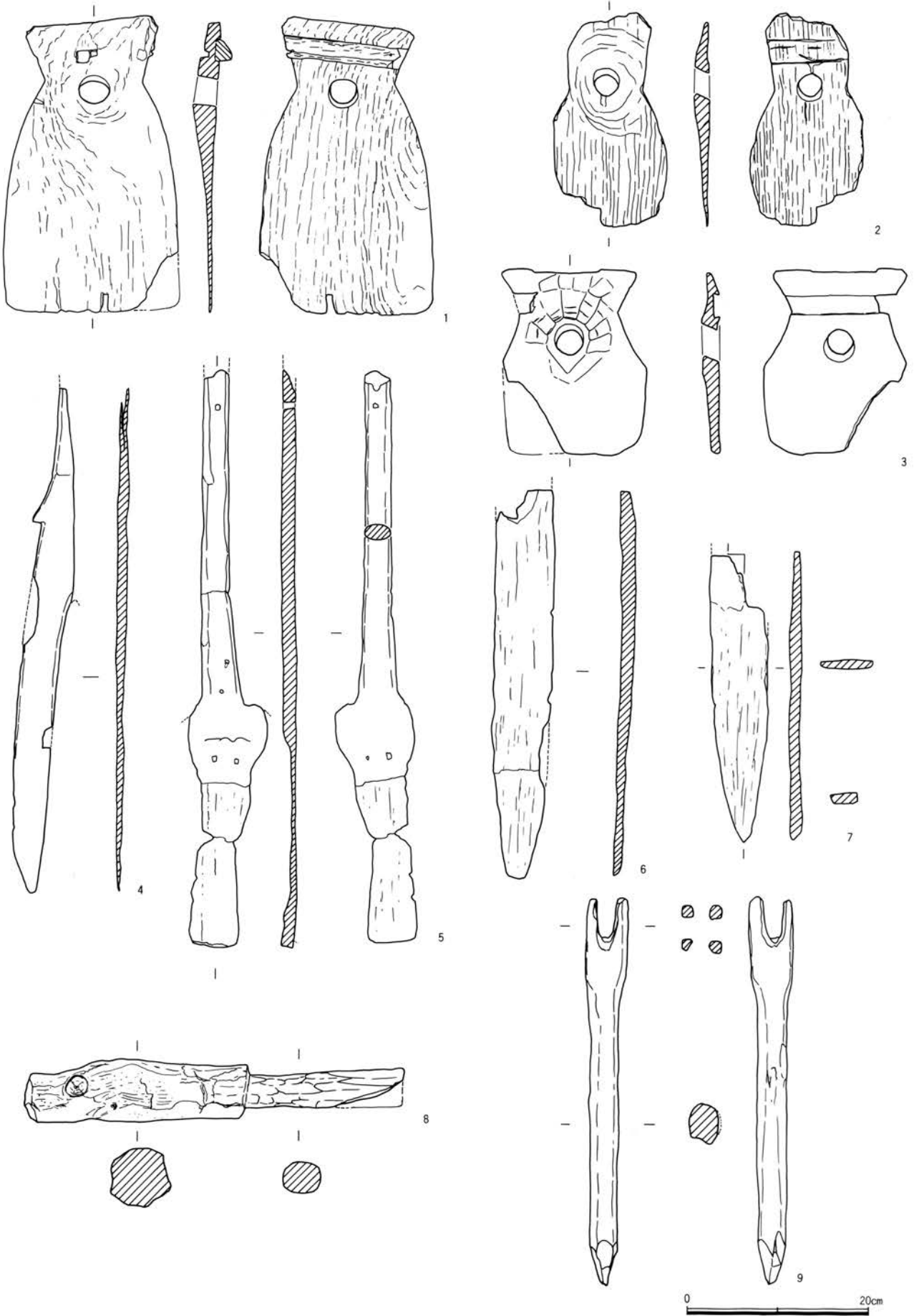


出土土器実測図(45)

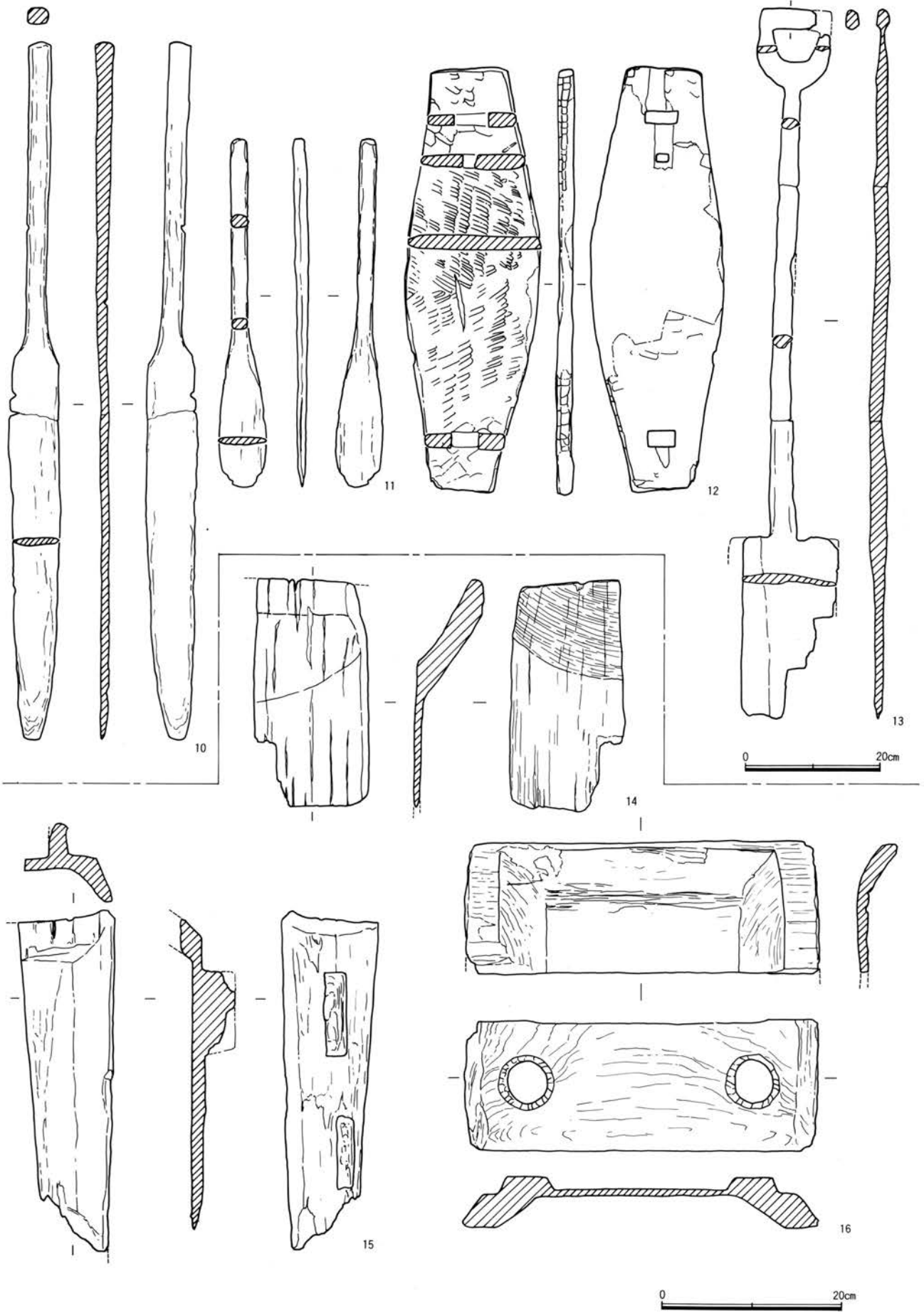
1282~1288 : S E96085 1289~1305 : S K95005 1306~1320 : S B95001



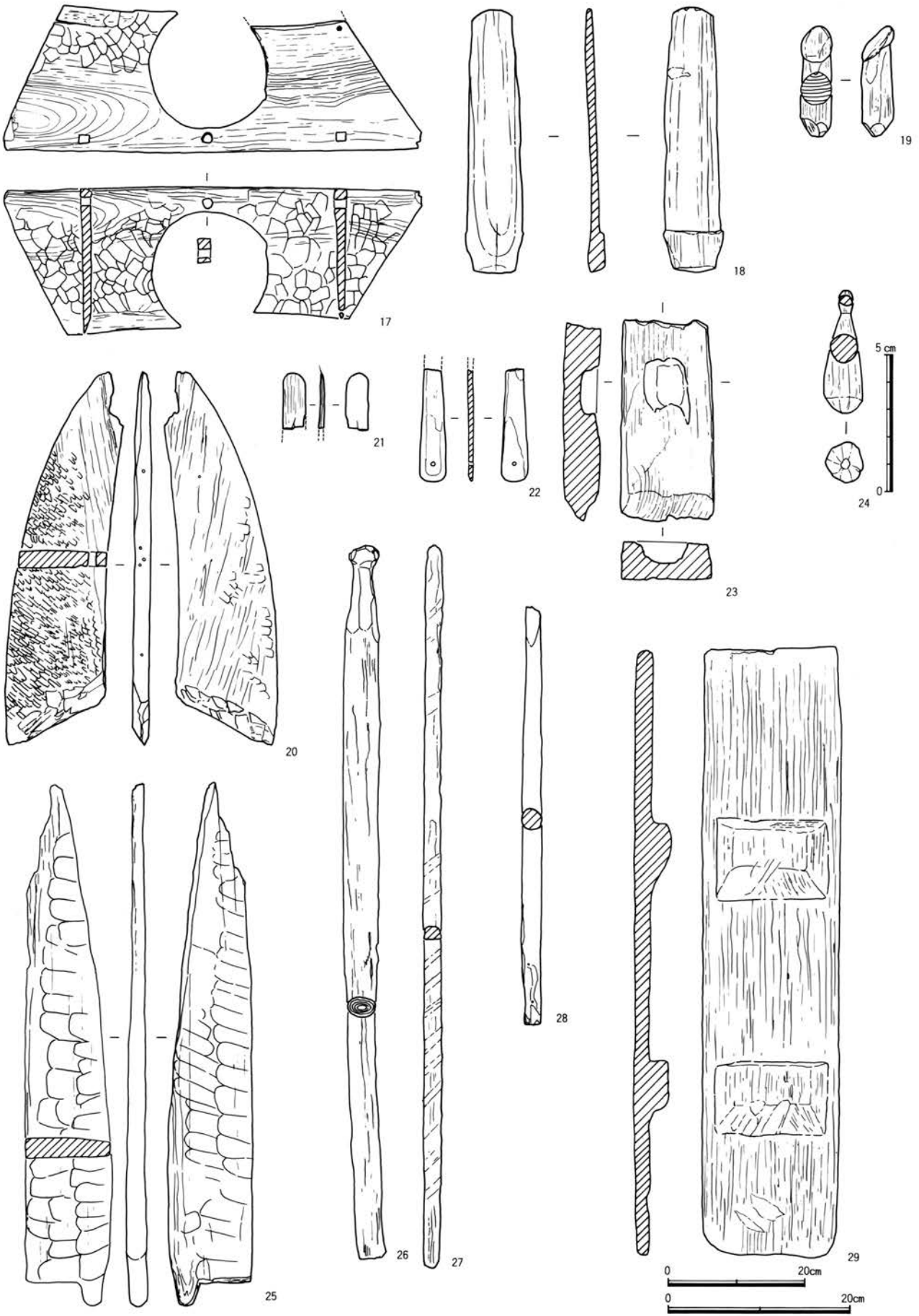
出土玉類・石製品実測図



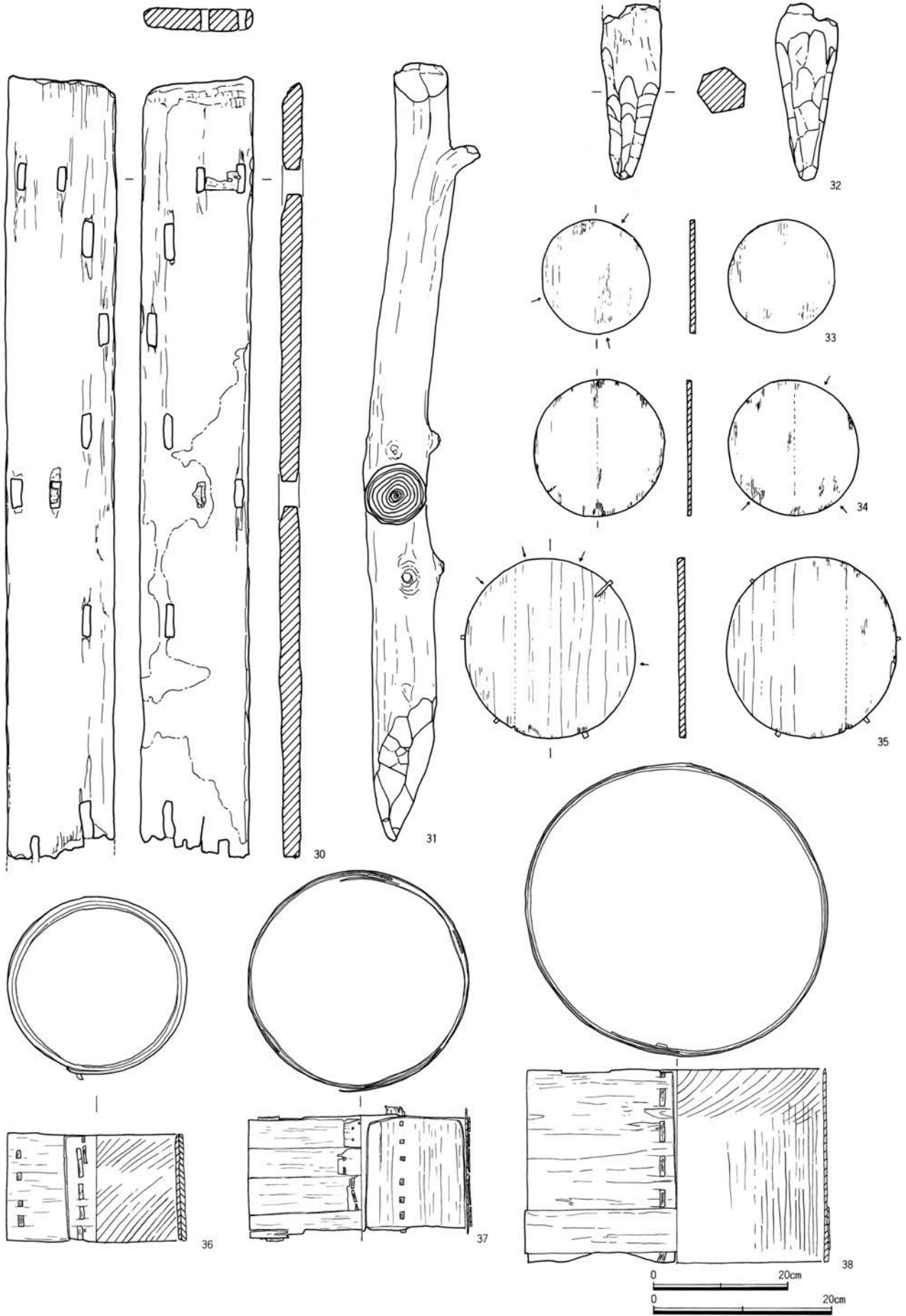
出土木製品実測図(1)



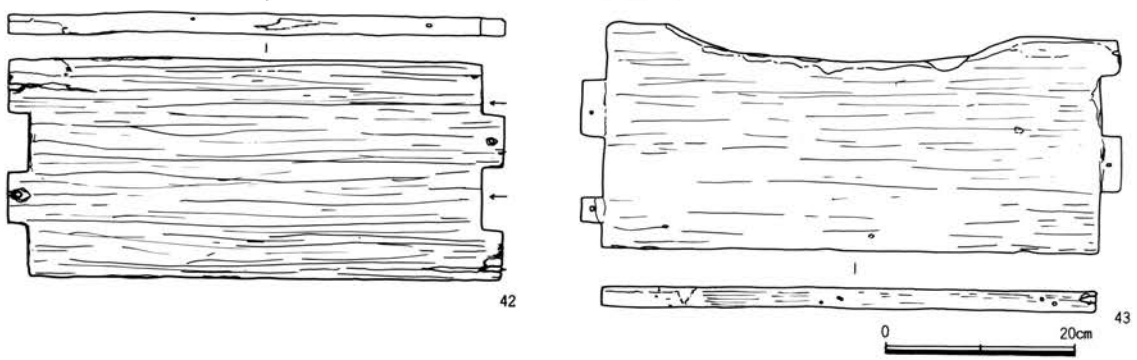
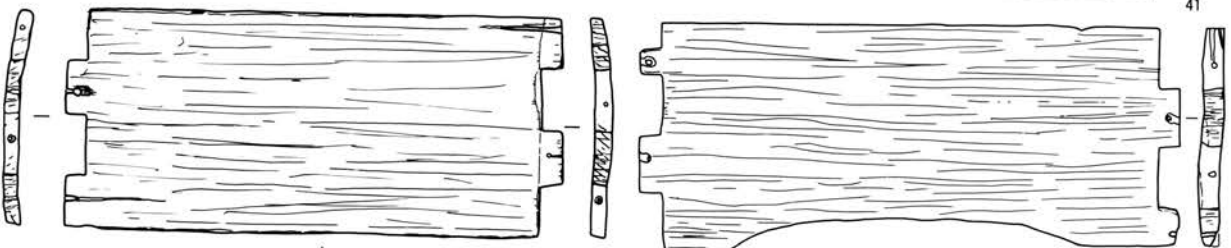
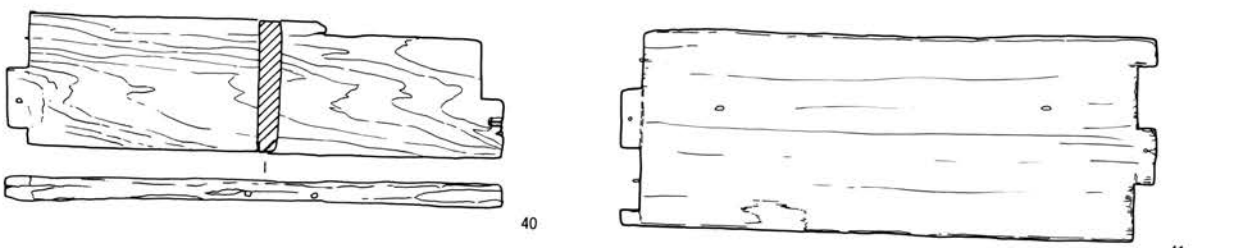
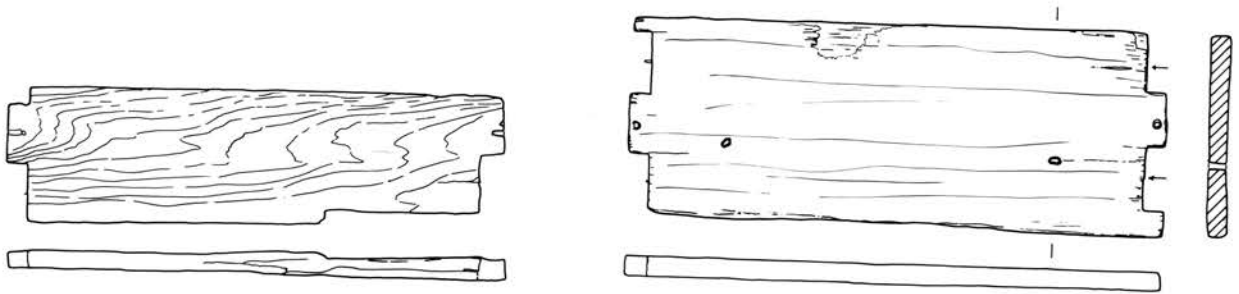
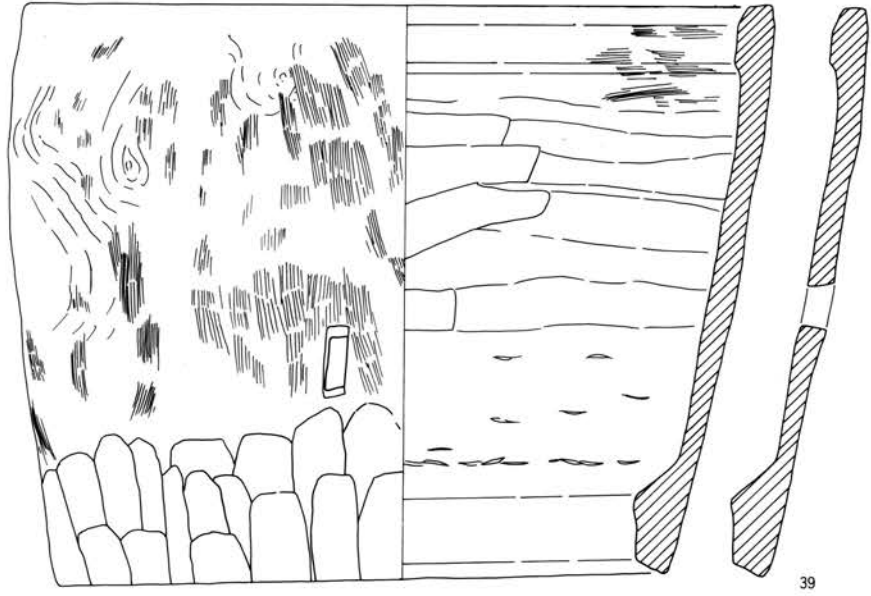
出土木製品実測図(2)



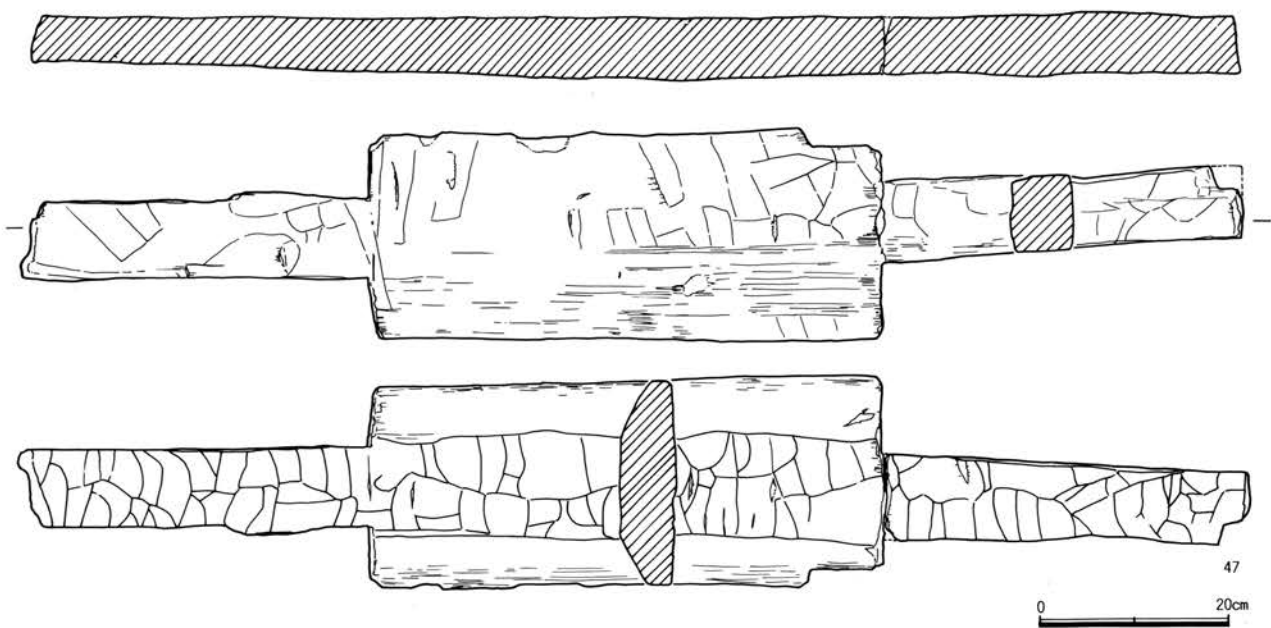
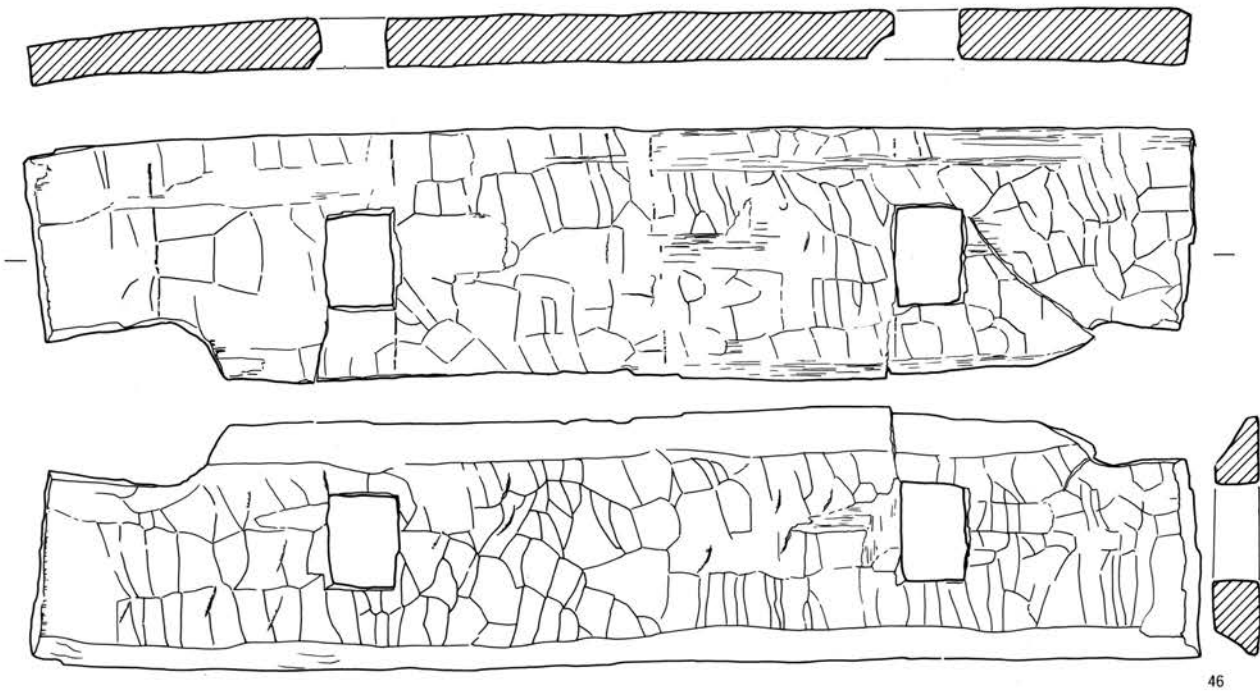
出土木製品実測図(3)



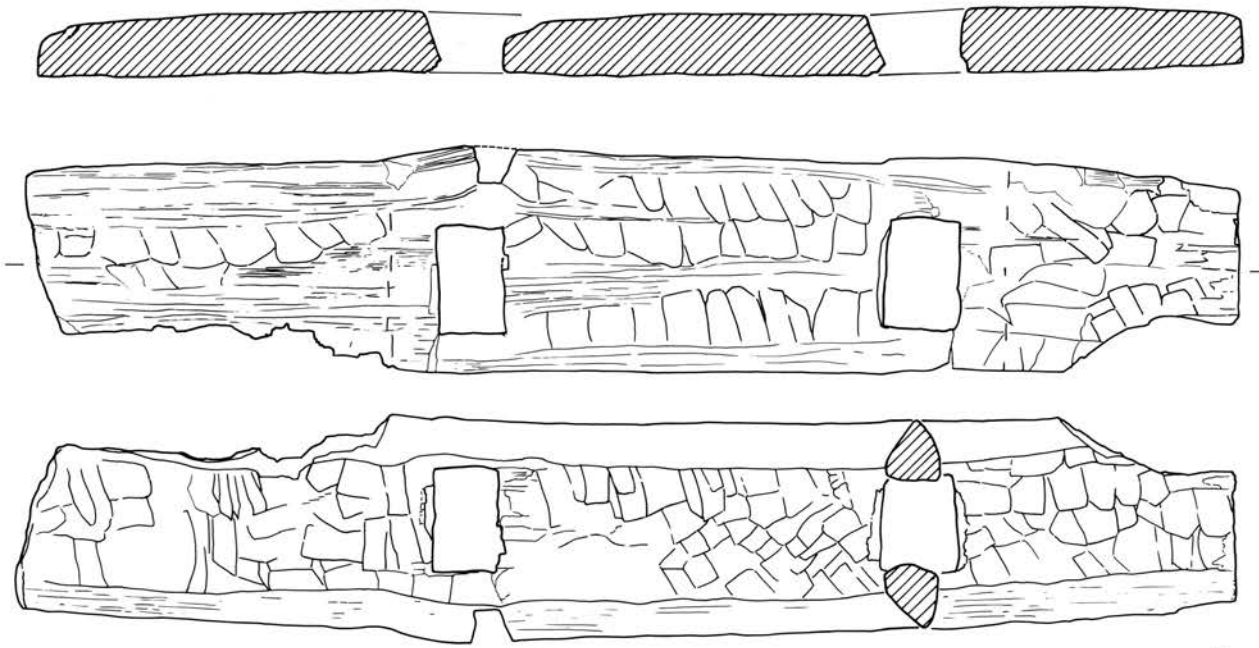
出土木製品実測図(4)



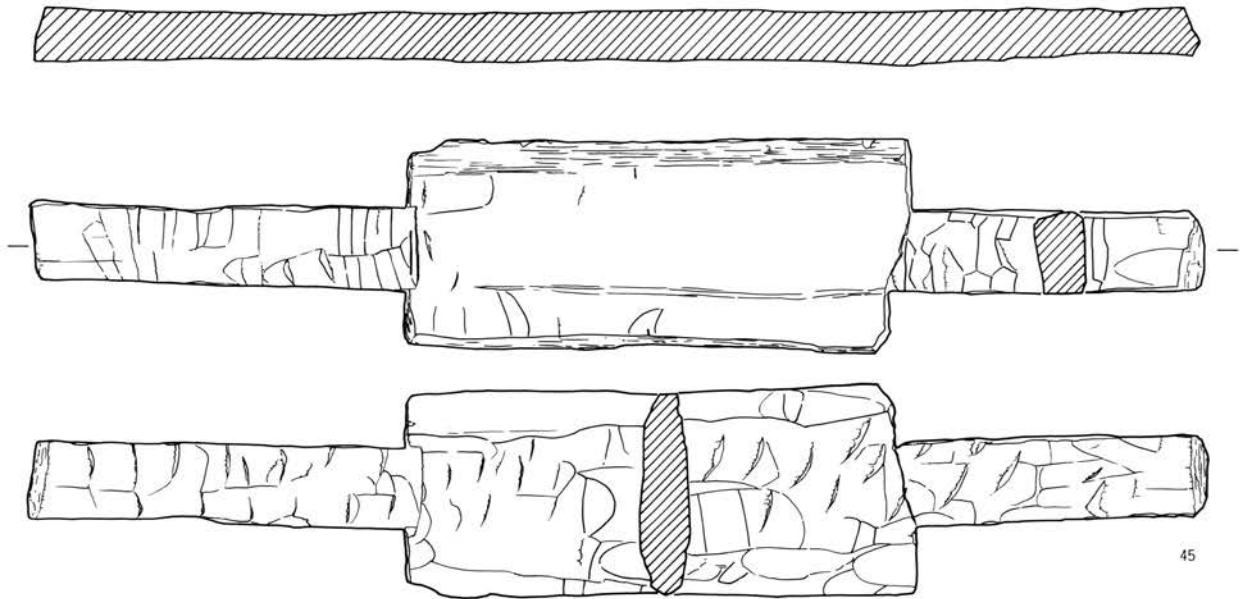
出土木製品実測図(5)



出土木製品実測図(6)



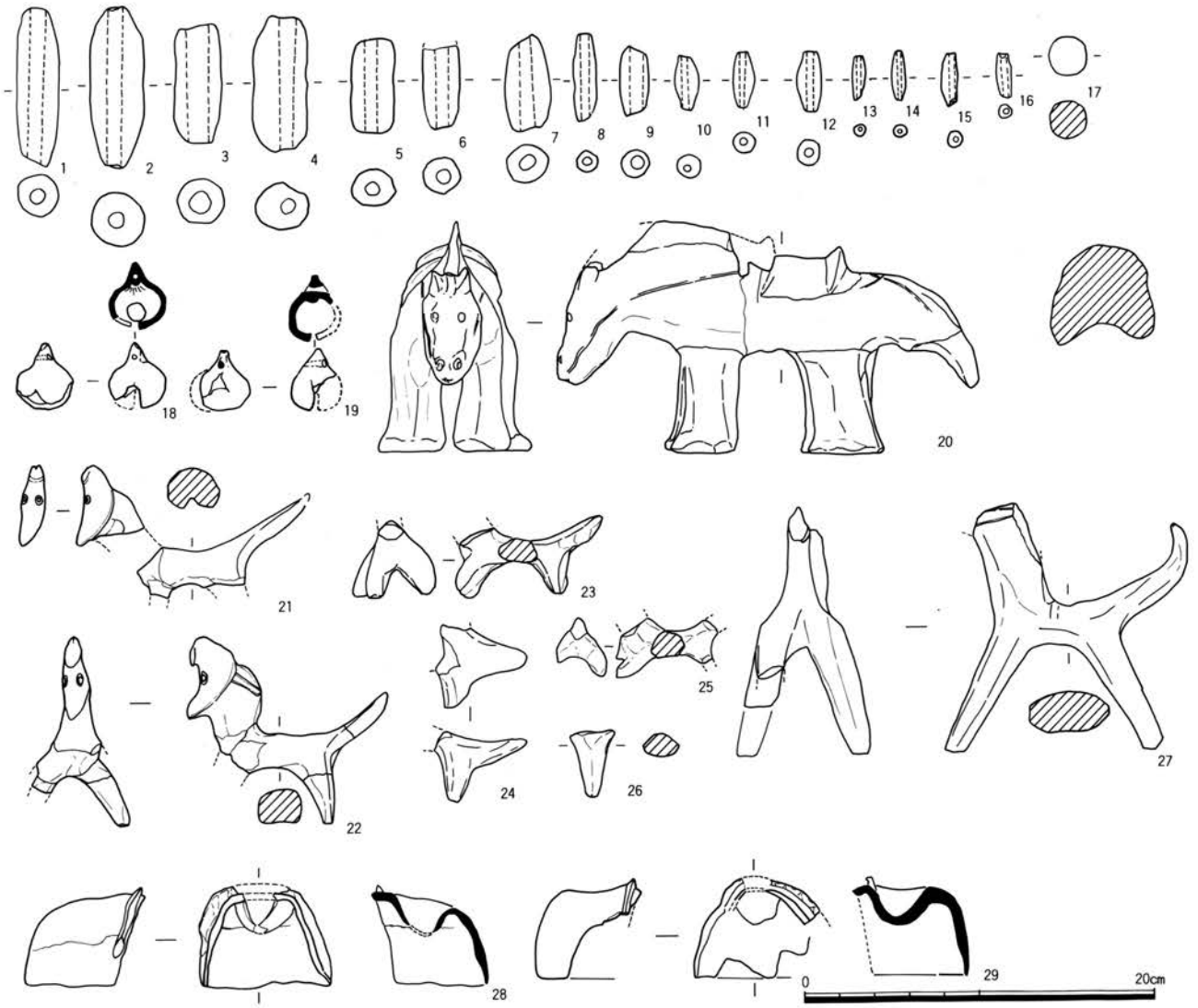
44



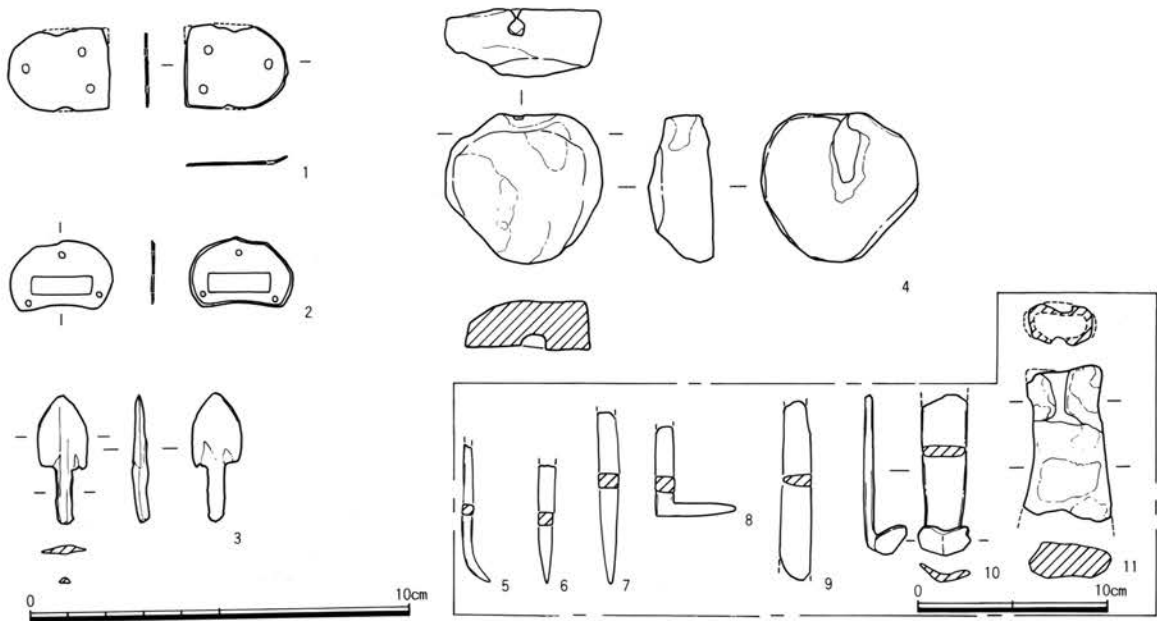
45

0 20cm

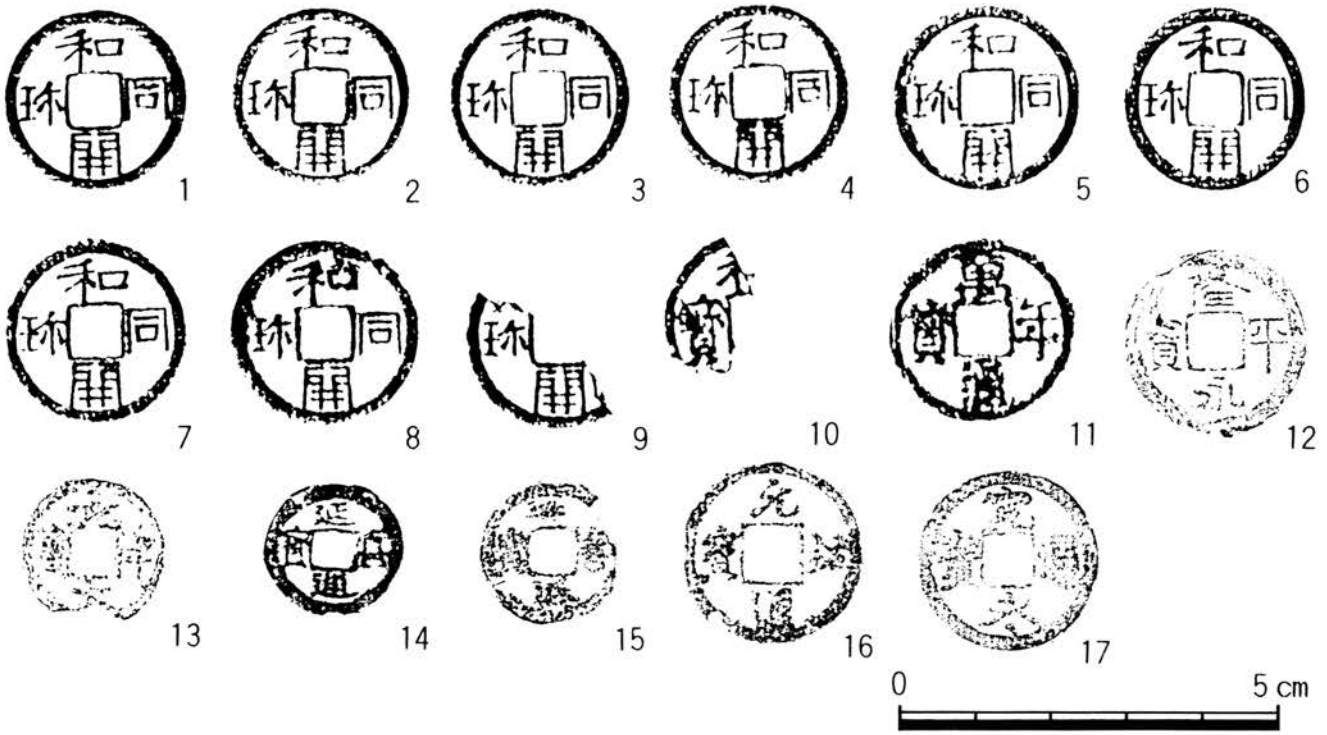
出土木製品実測図(7)



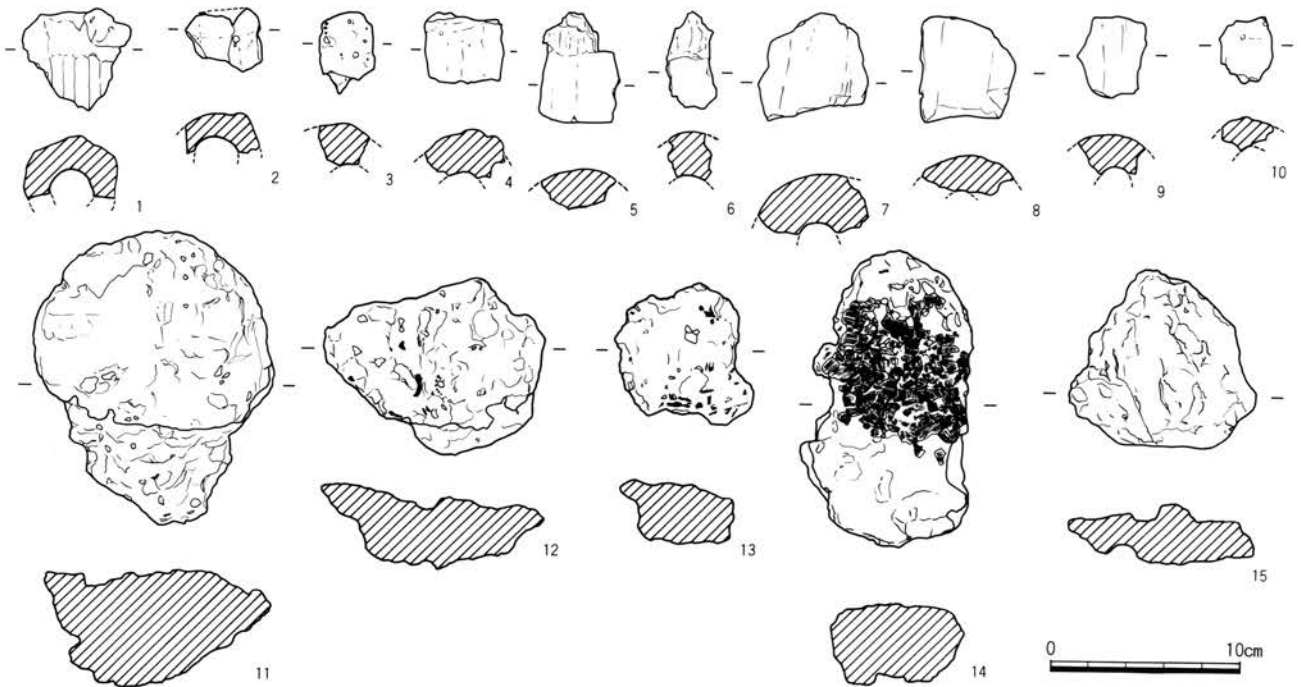
(1) 出土土製品実測図



(2) 出土金属器実測図



(1) 出土貨幣実測図



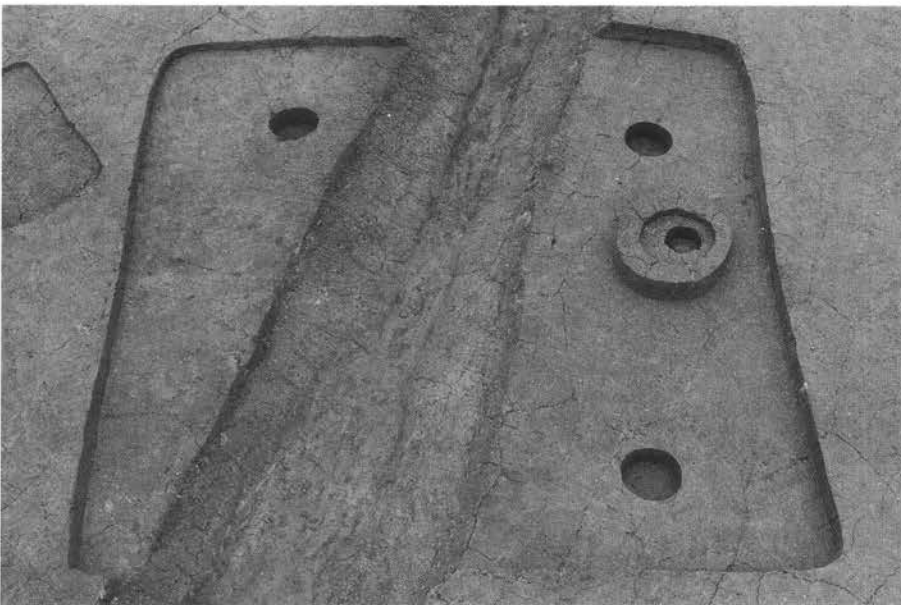
(2) 鍛冶関連遺物実測図



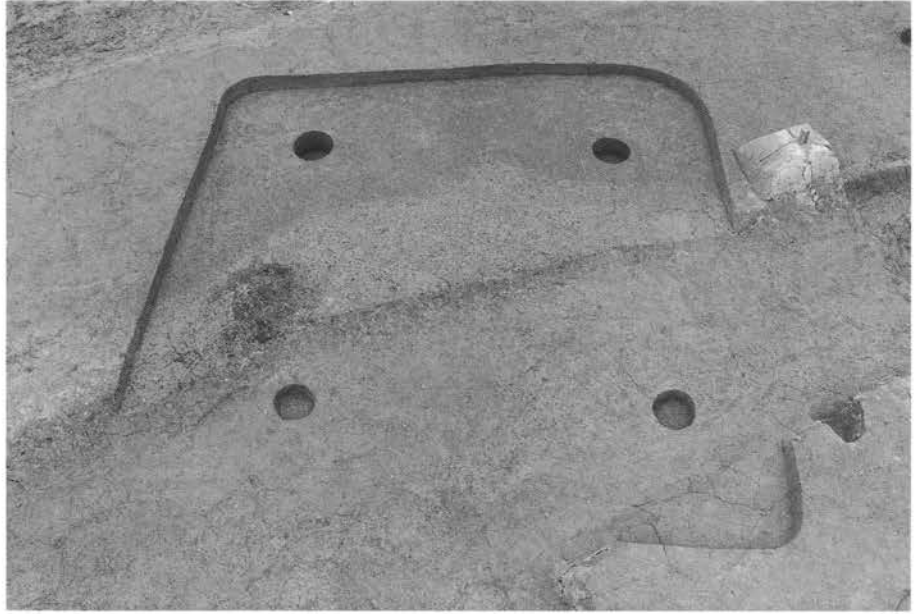
(1) D 1 地区竪穴式住居跡
S H94007遺物出土状
況(北西から)



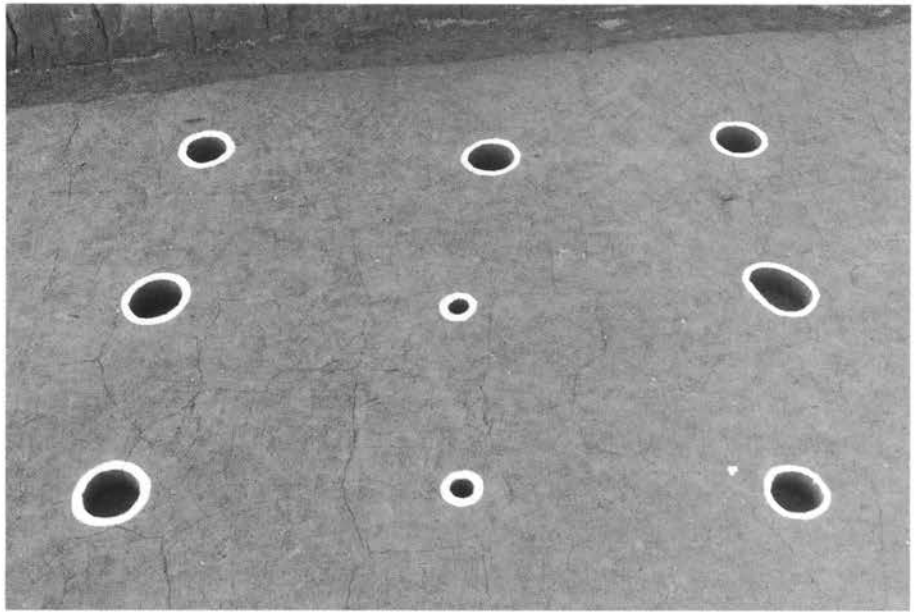
(2) D 1 地区竪穴式住居跡
S H94008遺物出土状
況(南から)



(3) D 1 地区竪穴式住居跡
S H94009完掘状
況(南から)



(1) D 1 地区竪穴式住居跡
S H 94010 完掘状況(東
から)



(2) D 1 地区掘立柱建物跡
S B 94022 完掘状況(南
から)



(3) D 1 地区第 3 遺構面完
掘状況(北から)



(1) D 1 地区竪穴式住居跡
S H94004遺物出土状況
(西から)



(2) D 1 地区竪穴式住居跡
S H94005遺物出土状況
(西から)



(3) D 1 地区竪穴式住居跡
S H94006完掘状況(北
東から)



(1) D 1 地区溝跡 S D97217
完掘状況(北西から)



(2) D 1 地区井戸 S E94010
遺物出土状況(南から)



(3) D 1 地区第 4 遺構面全
景(南東から)



(1) D1地区第2遺構面完
掘状況(南から)



(2) D1地区井戸S E94009
検出状況(南から)



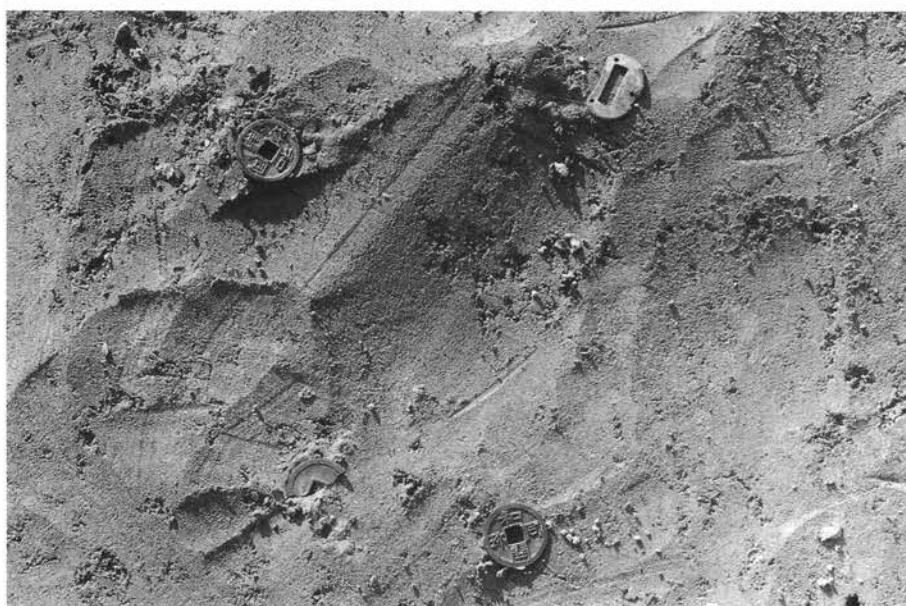
(3) D1地区S X94013検出
状況(南東から)



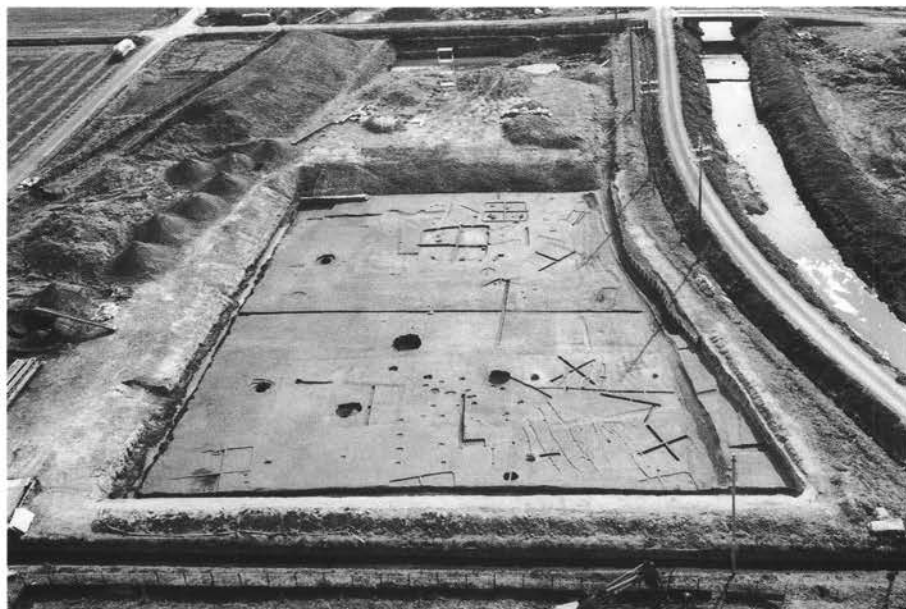
(1) D 1 地区木製暗渠 S X
94013 検出状況 (東から)



(2) D 1 地区木製暗渠 S X
94013 (南西から)



(3) D 1 地区池状遺構 S X
94011 遺物出土状況 (東
から)



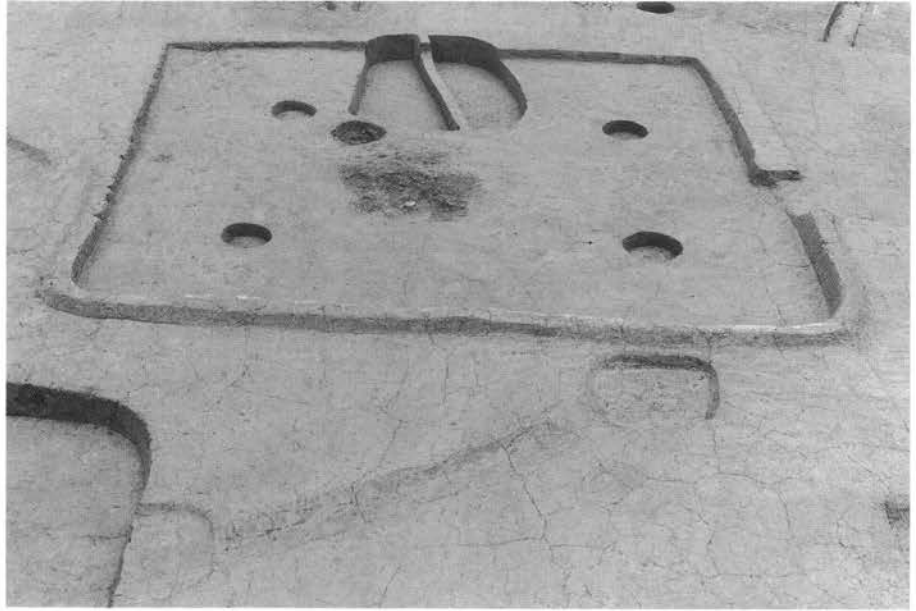
(1) D2地区第4遺構面(北から)



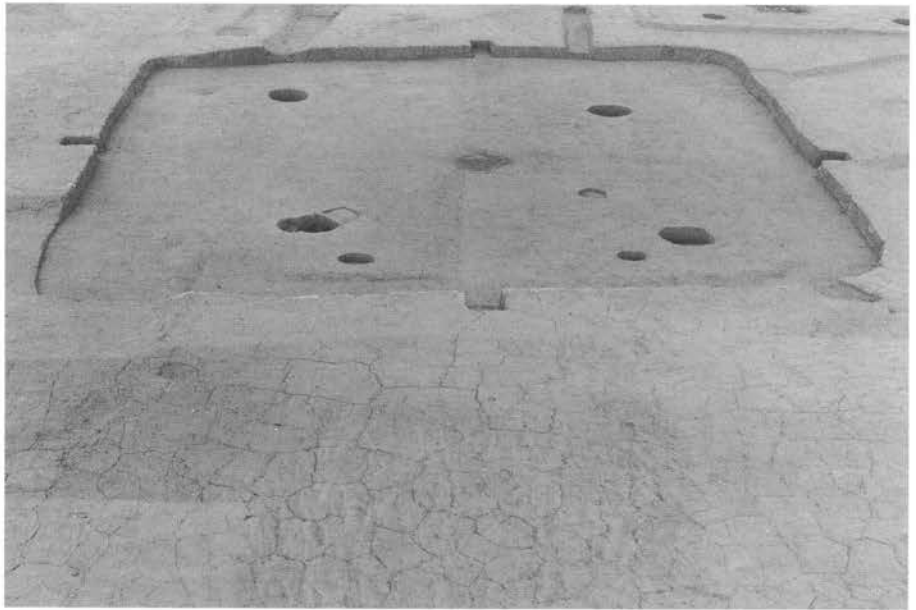
(2) D2地区第4遺構面(西から)



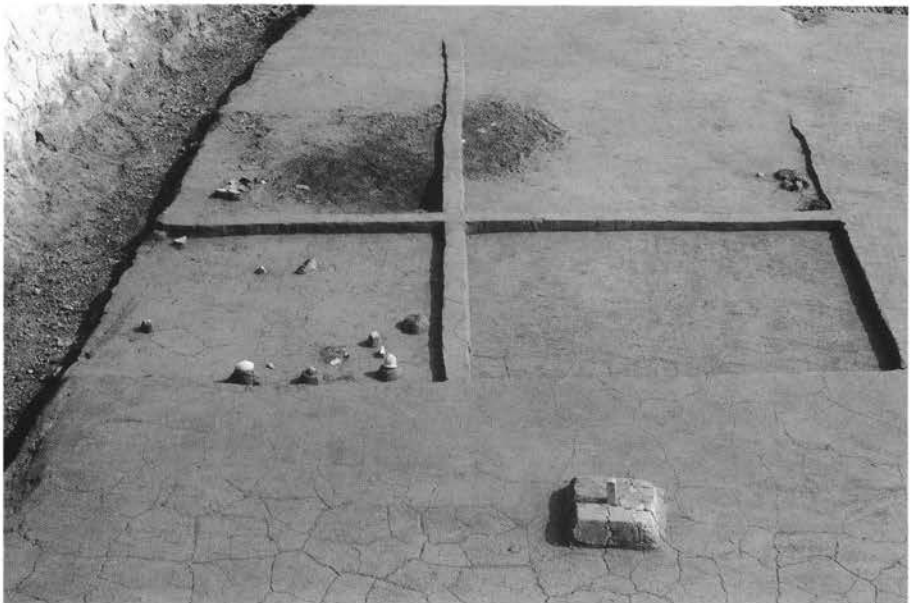
(3) D2地区第4遺構面(南から)



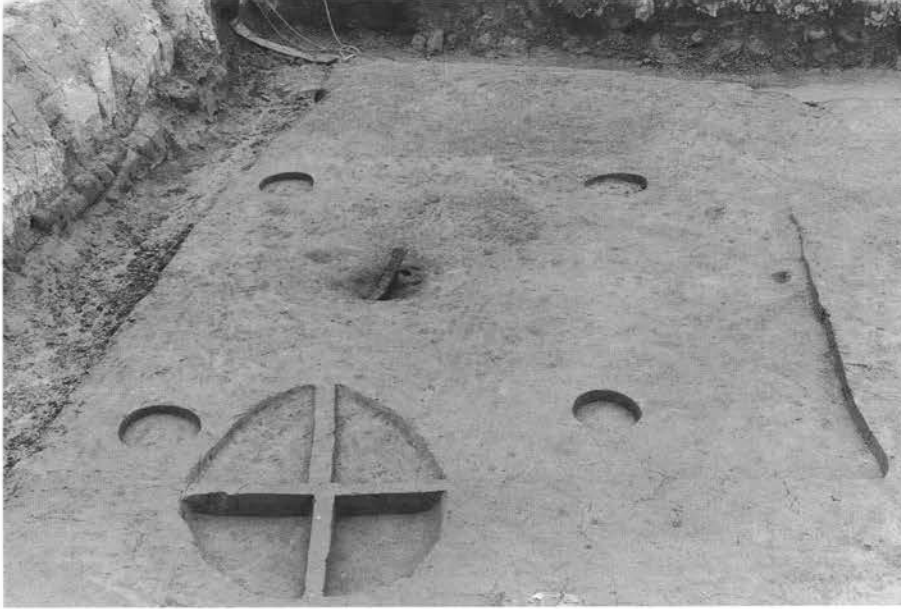
(1) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95025完掘状況(北
から)



(2) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95090完掘状況(北
から)



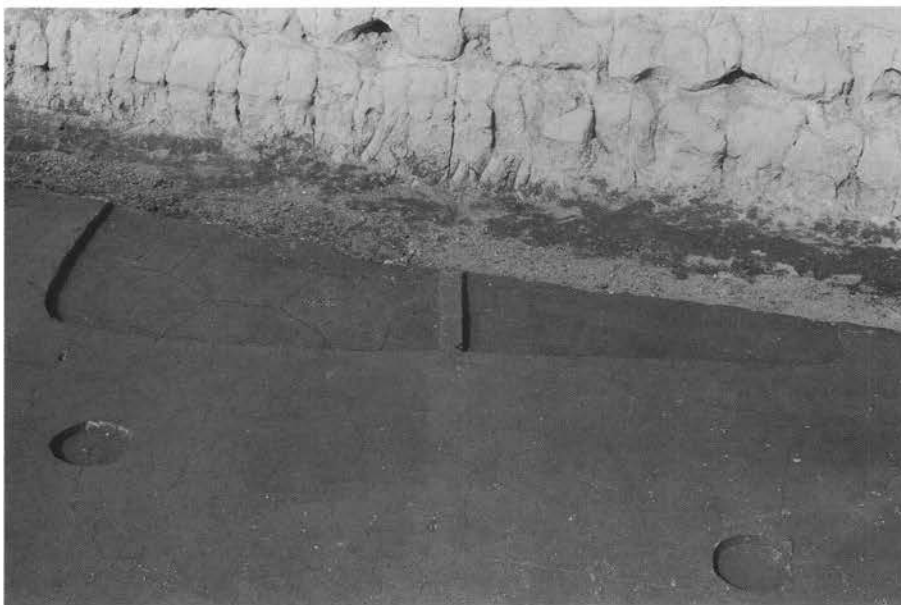
(3) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95087遺物出土状況
(西から)



(1) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95087完掘状況(西
から)



(2) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95089遺物出土状況
(南から)



(3) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95089完掘状況(南
から)



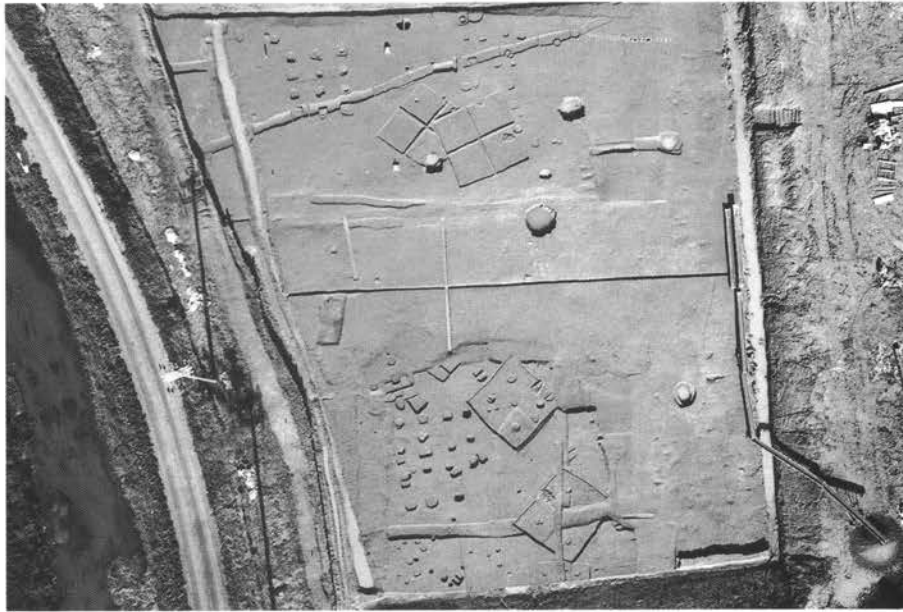
(1) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95089完掘状況(北
から)



(2) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95092完掘状況(西
から)



(3) D 2 地区土坑 S K95095
検出状況(東から)



(1) D 2 地区第 3 遺構面全
景(真北から)



(2) D 3 地区竪穴式住居跡
S H95051完掘状況(南
から)



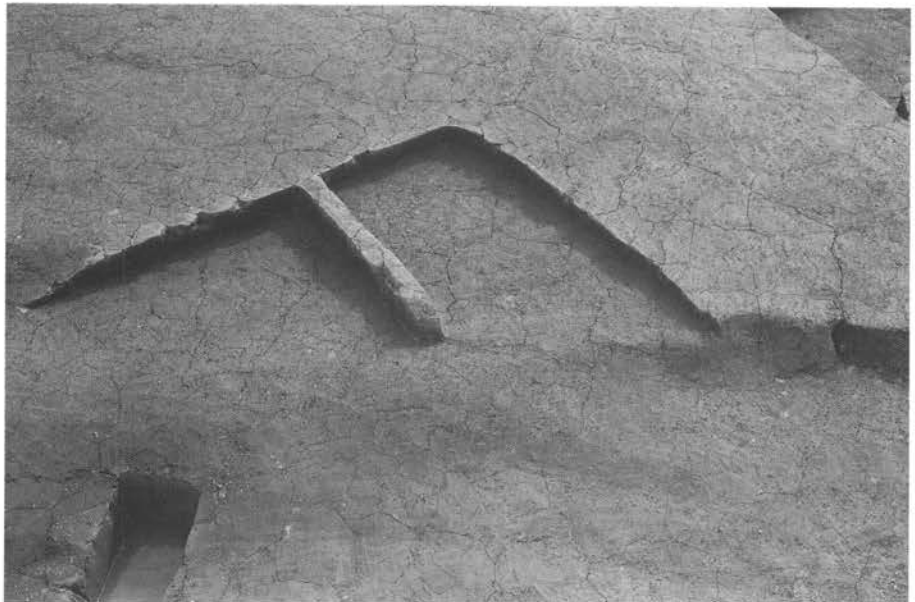
(3) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95051遺物出土状況
(北西から)



(1) D 2 地区 竪穴式住居跡
S H95052完掘状況(北
西から)



(2) D 2 地区 S H95054完掘
状況(南東から)



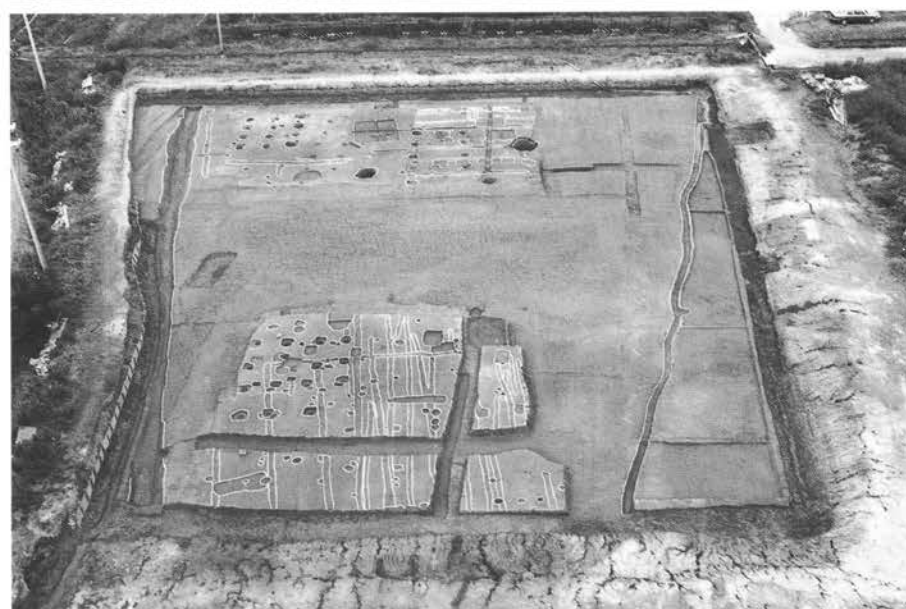
(3) D 2 地区 竪穴式住居跡
S H95053検出状況(北
から)



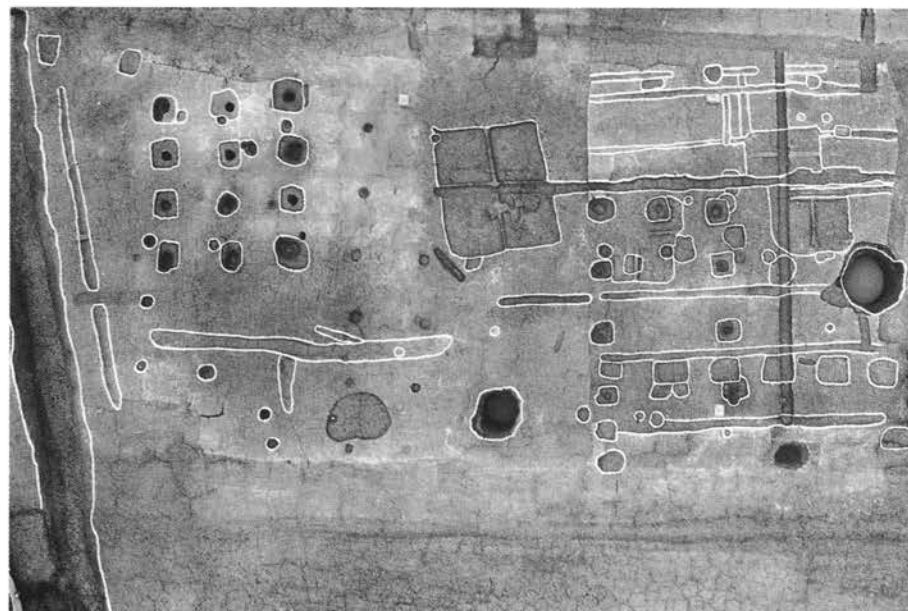
(1) D 2 地区竪穴式住居跡
S H95059(左)・S H
95054(右)完掘状況(南
から)



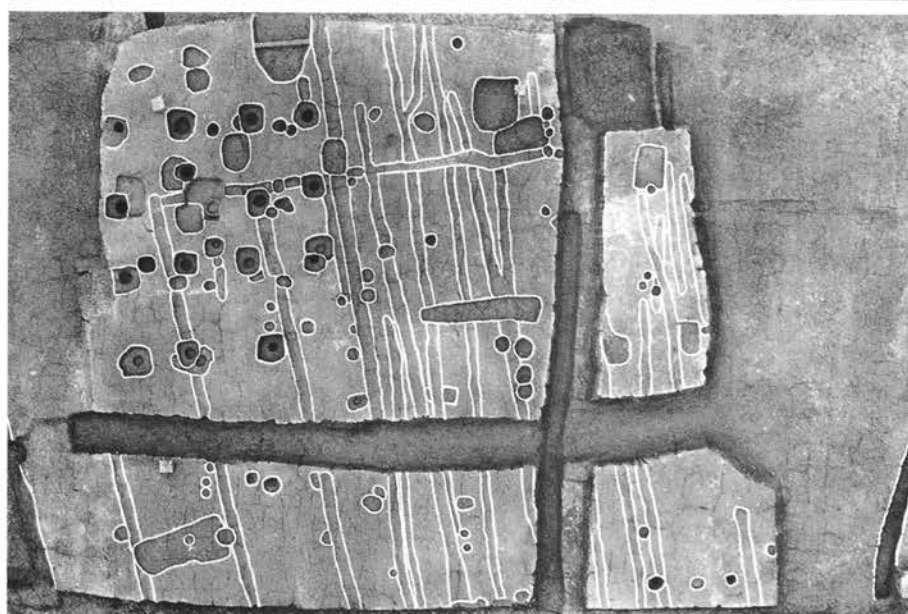
(2) D 2 地区溝 S D95074検
出状況(西から)



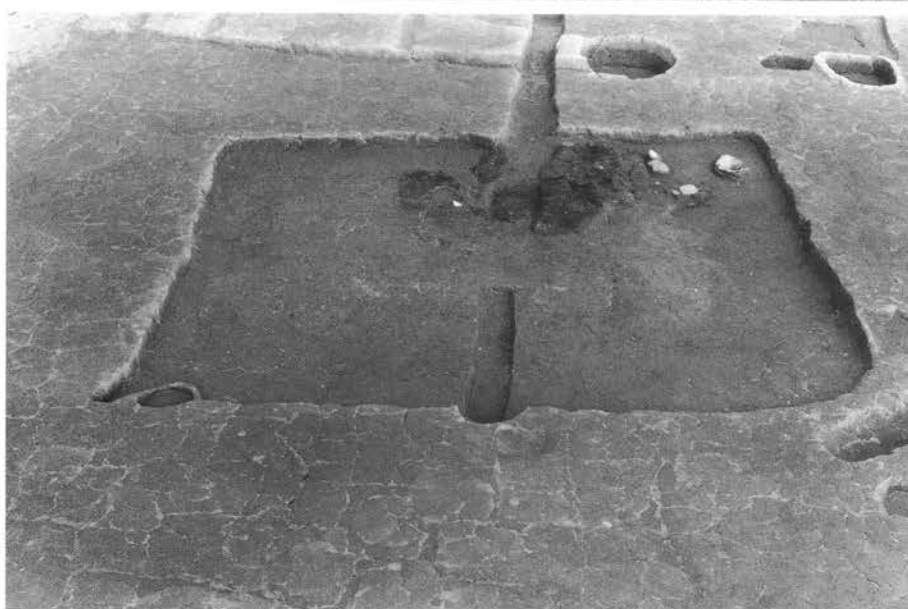
(3) D 2 地区第 2 遺構面全
景(南から)



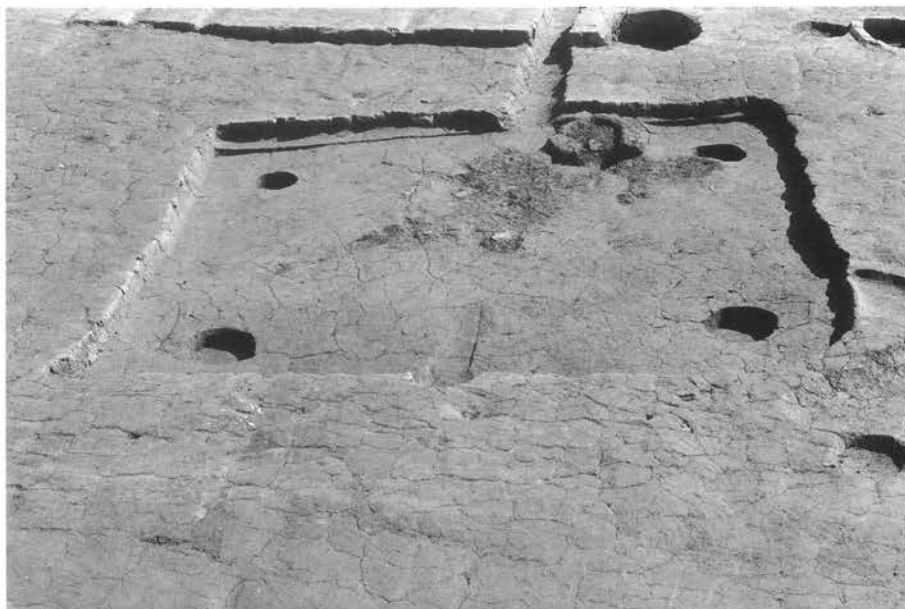
(1) D 2 地区第 2 遺構面北
半部(上が北)



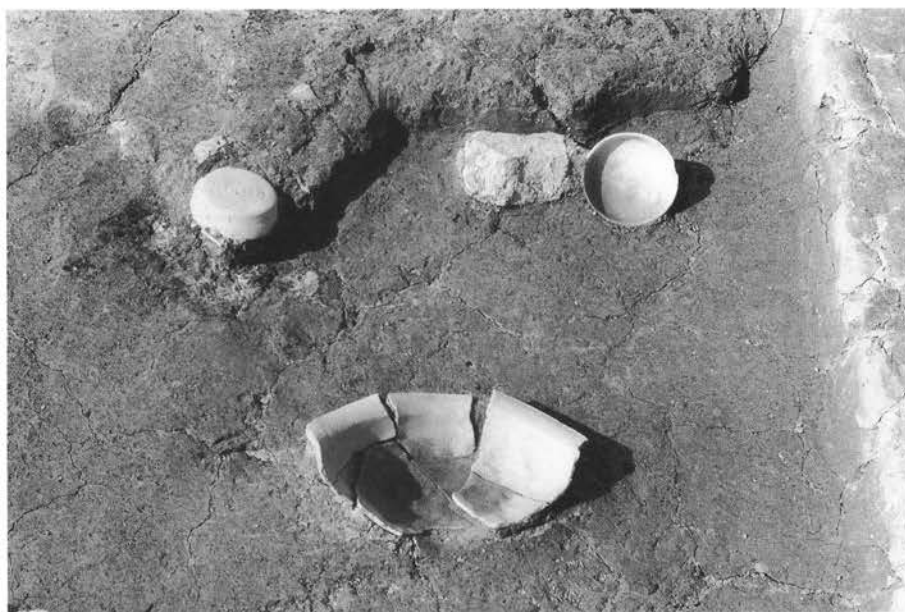
(2) D 2 地区第 2 遺構面南
西部(上が北)



(3) D 2 地区竪穴式住居跡
S H 95048 遺物出土状況
(西から)



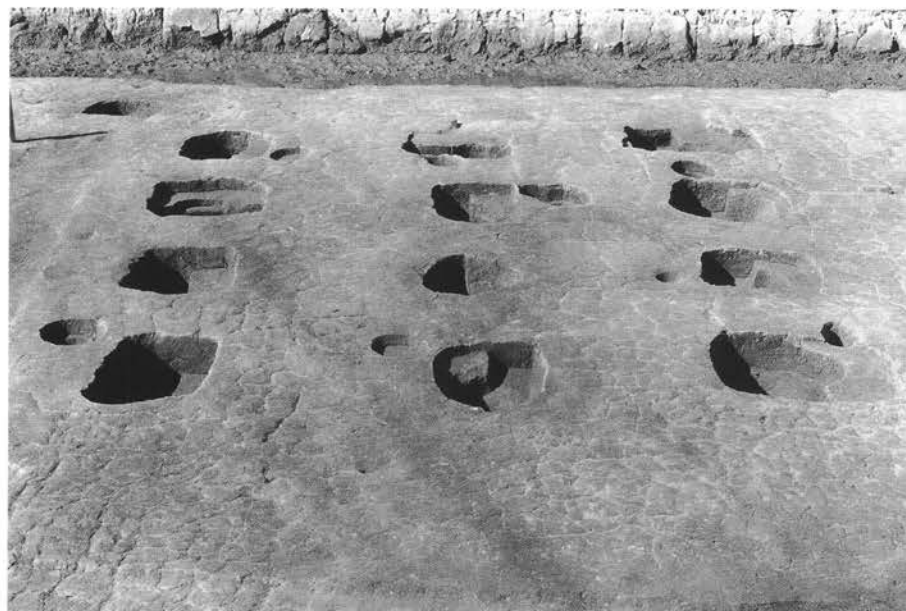
(1) D 2 地区竪穴式住居跡
S H 95048完掘状況(西
から)



(2) D 2 地区竪穴式住居跡
S H 95048遺物出土状況
(南から)



(3) D 2 地区掘立柱建物跡
S B 95002完掘状況(南
から)



(1) D 2 地区掘立柱建物跡
S B 95002 近景(南から)



(2) D 2 地区北遺構群(南から)



(3) D 2 地区掘立柱建物跡
S B 95033 完掘状況(南から)



(1) D 2 地区掘立柱建物跡
S B 95036・S B 95064
(北から)



(2) D 2 地区土坑 S K 95045
完掘状況(東から)



(3) D 2 地区井戸跡 S E
95042 遺物出土状況(南
から)



(1) D 2 地区井戸跡 S E
95072完掘状況(東から)



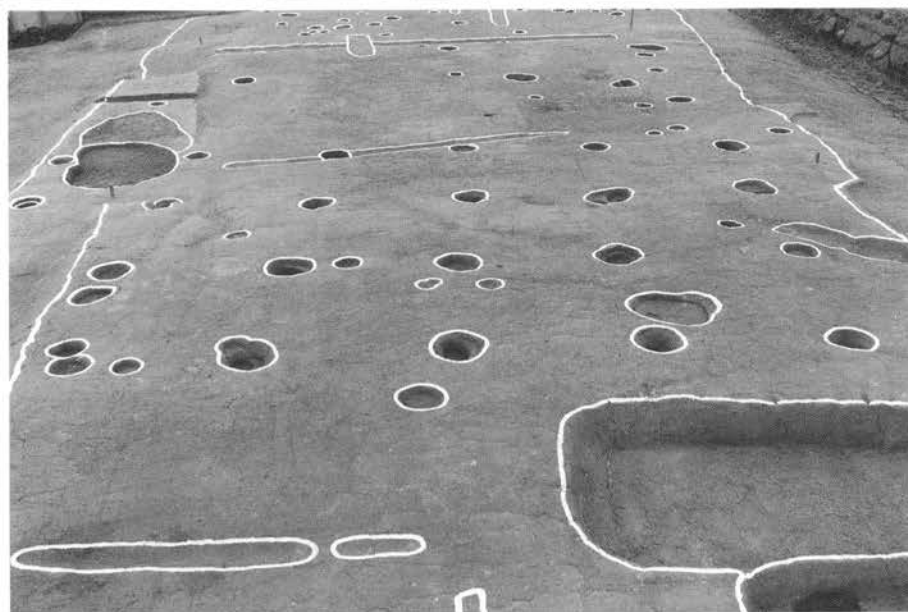
(2) D 2 地区井戸跡 S E
95073検出状況(北から)



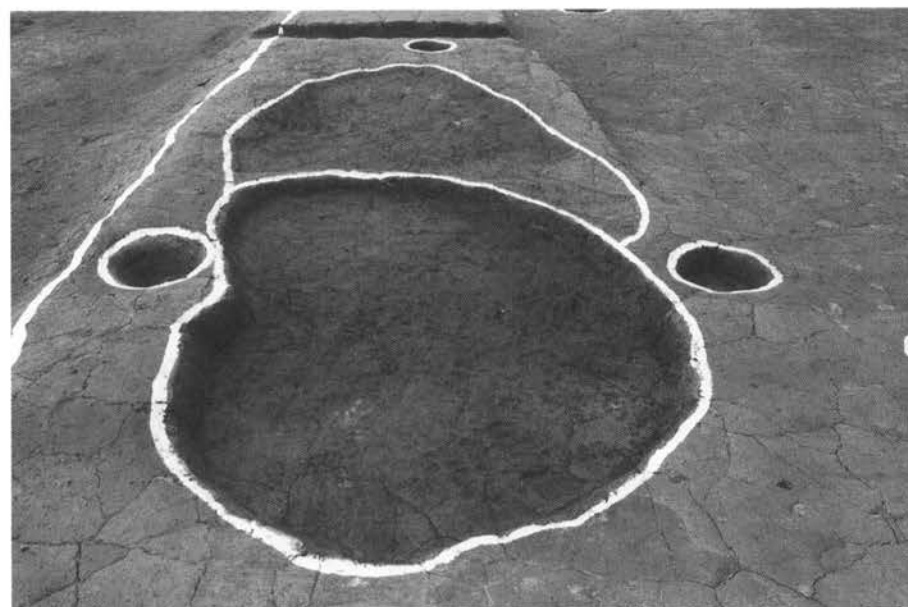
(3) D 2 地区 S X 95106遺物
出土状況(南から)



(1) D 2 地区高畠9502全景
(東から)



(2) D 2 地区掘立柱建物跡
S B 95001完掘状況(東
から)



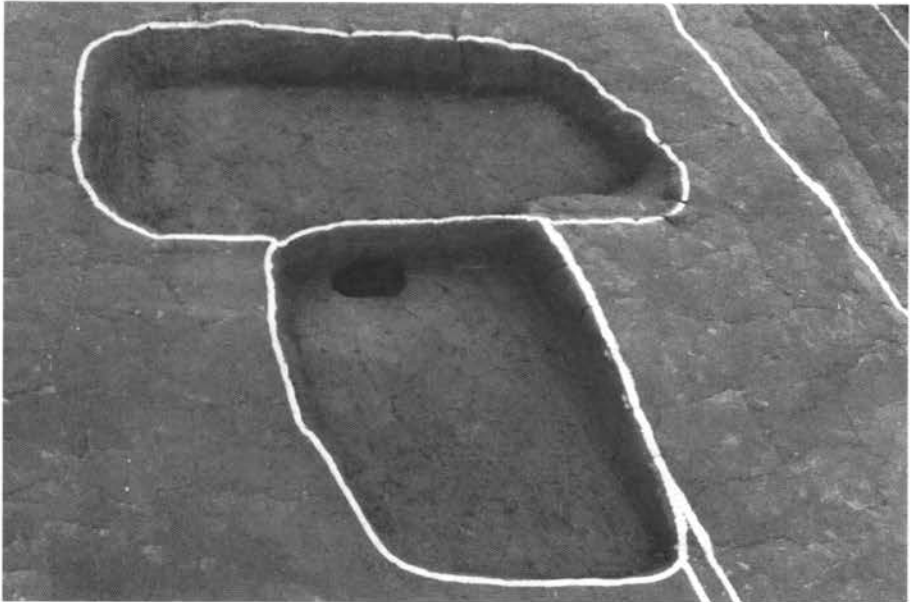
(3) D 2 地区土坑 S K
95009・95010完掘状況
(東から)



(1) D 2 地区土坑 S K95003
遺物出土状況



(2) D 2 地区土坑 S K95003
遺物出土状況(北から)



(3) D 2 地区土坑 S K95005
(奥)・S K95008完掘状
況(東から)



(1) D 2 地区井戸跡 S E
95035完掘状況(東から)



(2) D 2 地区井戸跡 S E
95071完掘状況(西から)



(3) C・F地区全景(下が北)

(1) C地区第4遺構面西部
竪穴式住居跡群(南から)



(2) C地区竪穴式住居跡 S
H96083・96092・96082
(手前から)(南から)



(3) C地区竪穴式住居跡完
掘状況 S H96084・96083・
96092(手前から)(南から)





(1) C地区竪穴式住居跡S
H96083完掘状況(南か
ら)

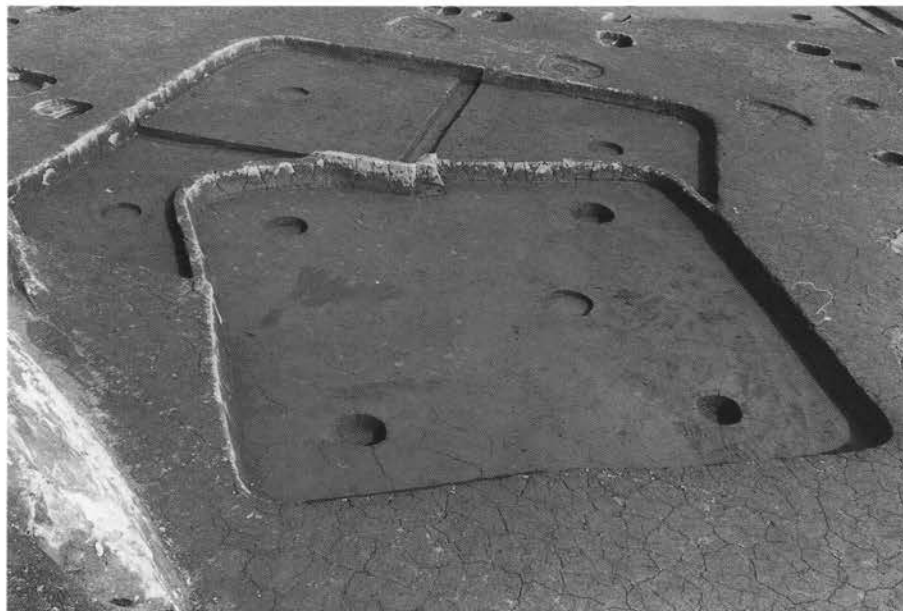


(2) C地区竪穴式住居跡S
H96084完掘状況(南か
ら)

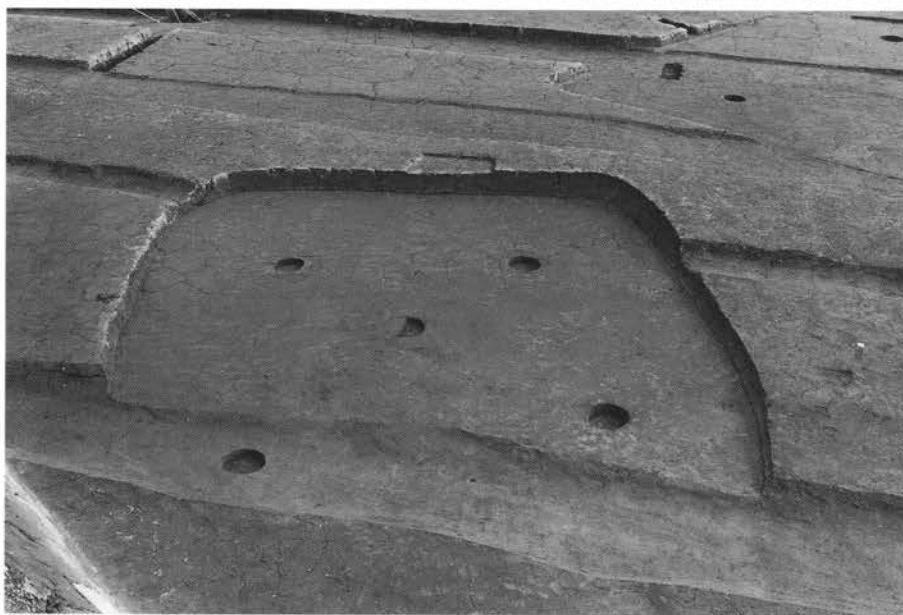


(3) C地区竪穴式住居跡S
H96091礫敷部(南東か
ら)

(1) C地区竪穴式住居跡 S
H96092・96082完掘状況
(西から)



(2) C地区竪穴式住居跡 S
H96085完掘状況(西か
ら)



(3) C地区周溝遺構 S X
96079・96098完掘状況
(南東から)





(1) C地区周溝遺構 S X
96079(南から)



(2) C地区周溝遺構 S X
96079南東隅遺物出土状況(東から)



(3) C地区周溝遺構 S X
96079北辺遺物出土状況(北から)



(1) C地区第3遺構面(南から)



(2) C地区掘立柱建物跡S
B96021完掘状況(南から)



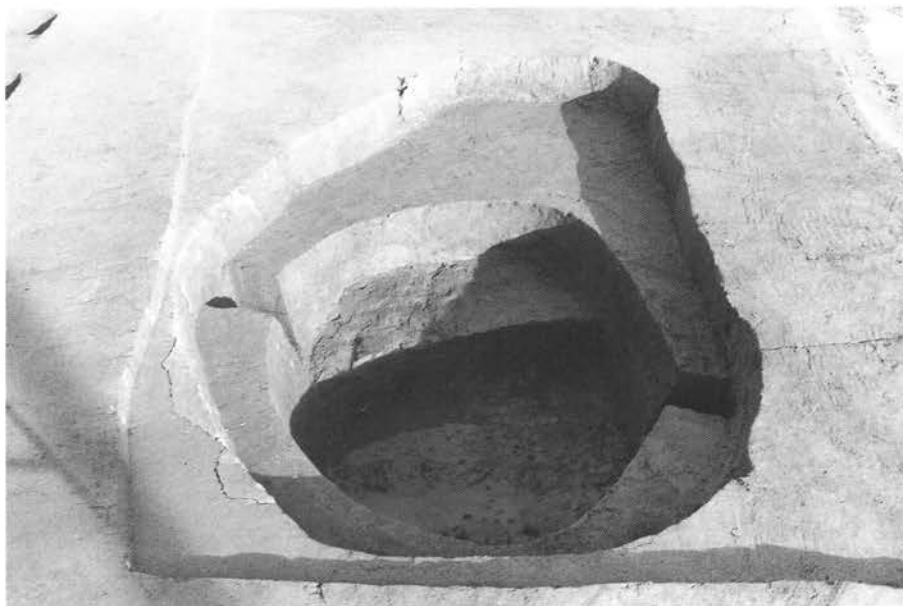
(3) C地区掘立柱建物跡S
B96056・96057完掘状況(北から)



(1) C地区掘立柱建物跡 S B96056・96057完掘状況(東から)



(2) C地区土坑 S X96033完掘状況(北西から)

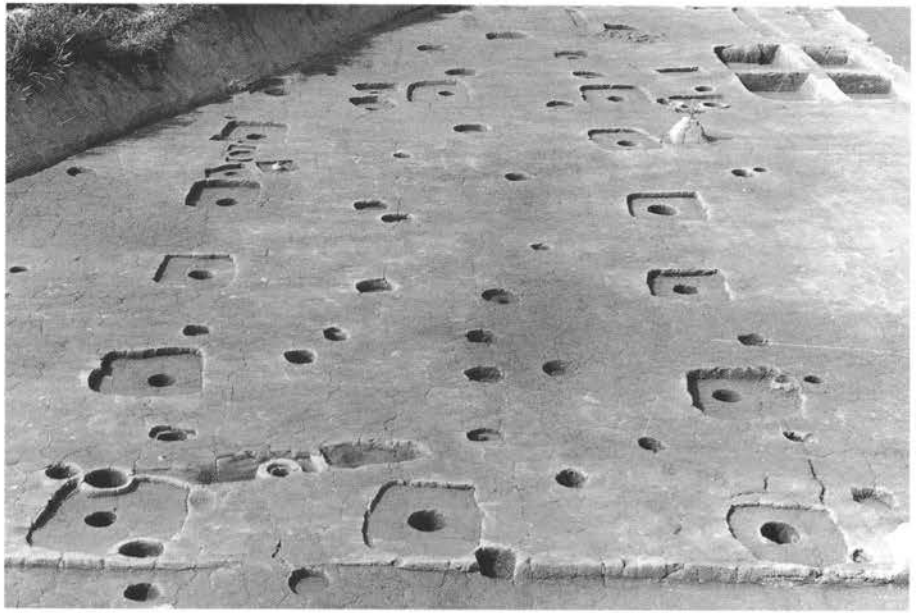


(3) C地区井戸跡 S E96051完掘状況(西から)

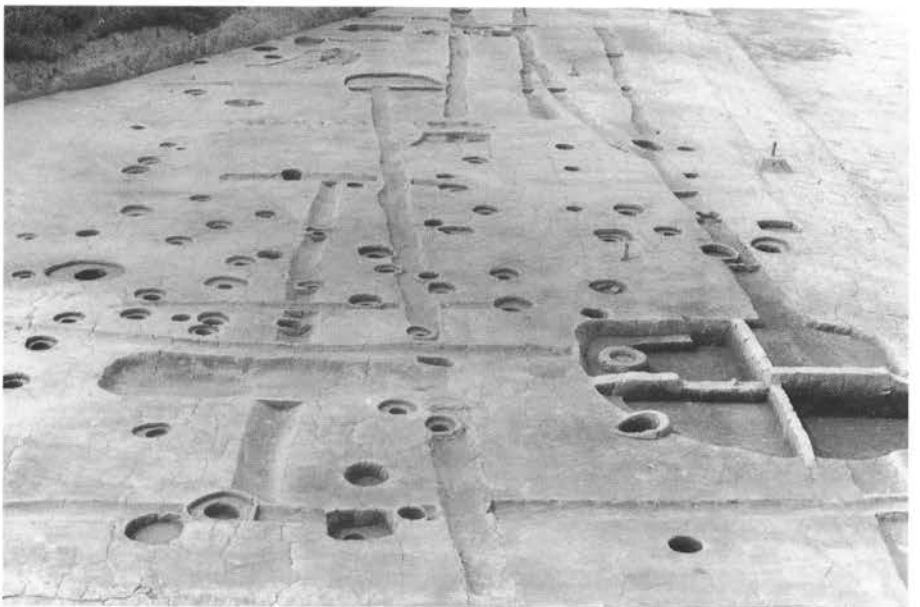
(1) C地区第2遺構面掘立柱建物跡S B96020完掘状況(南から)



(2) C地区掘立柱建物跡S B96020近景(南から)



(3) C地区掘立柱建物跡S B96024・96025完掘状況(南から)





(1) C地区井戸跡 S E96022
検出状況(南から)



(2) C地区井戸跡 S E96022
完掘状況(南から)



(3) C地区第1遺構面島畠
9601・9602(南から)

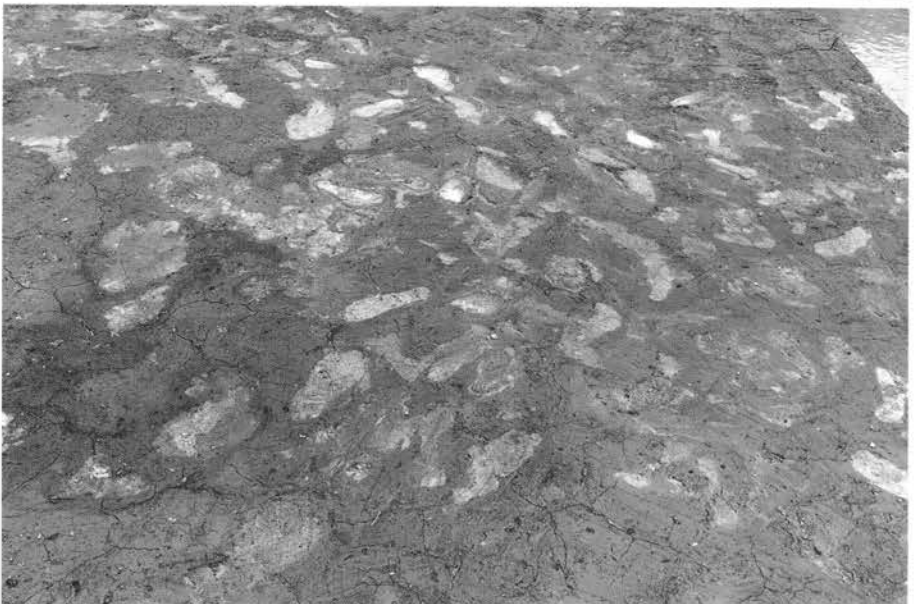
(1) C・F地区全景(下が北)



(2) F地区第6遺構面流路跡S D96224(南から)



(3) F地区流路跡S D96224内足跡(西から)





(1) F 1 地区流路跡 S D
96224 上層遺物出土状況

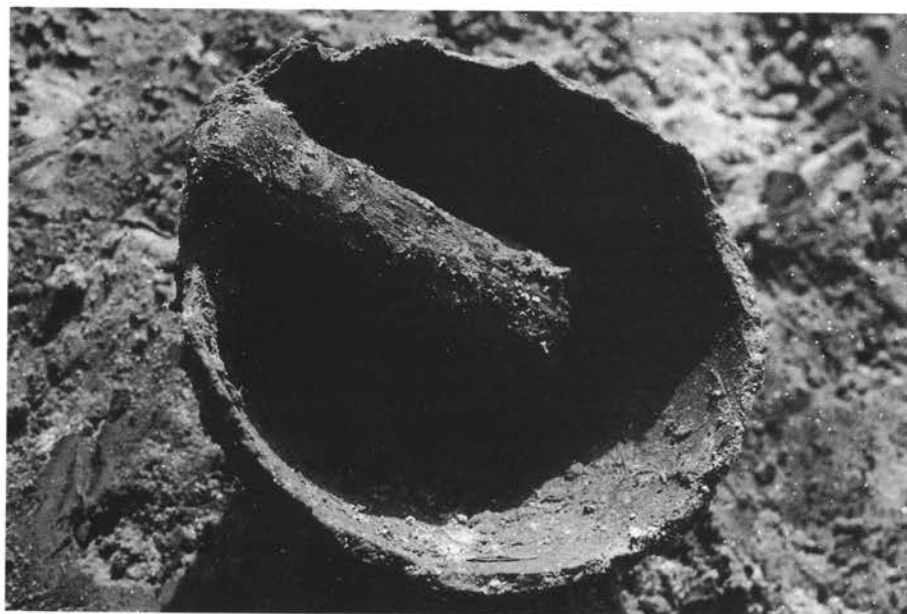


(2) F 1 地区流路跡 S D
96224 鋤出土状況



(3) F 1 地区第 5 遺構面流
路跡 S D96222 全景(南
から)

(1) F 1 地区流路跡 S D
96222陽物形木製品出土
状況



(2) F 1 地区流路跡 S D
96222鍬出土状況

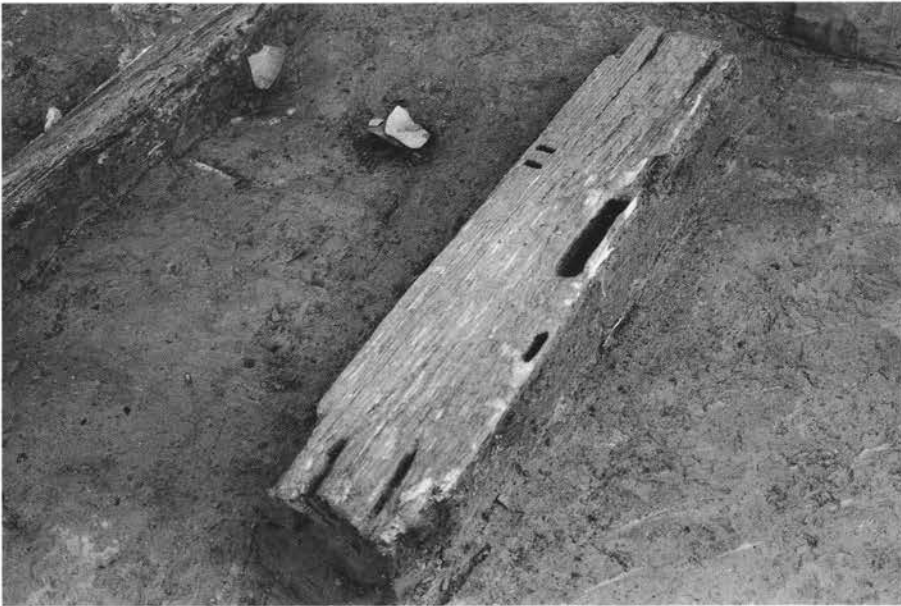


(3) F 1 地区流路跡 S D
96222槽出土状況

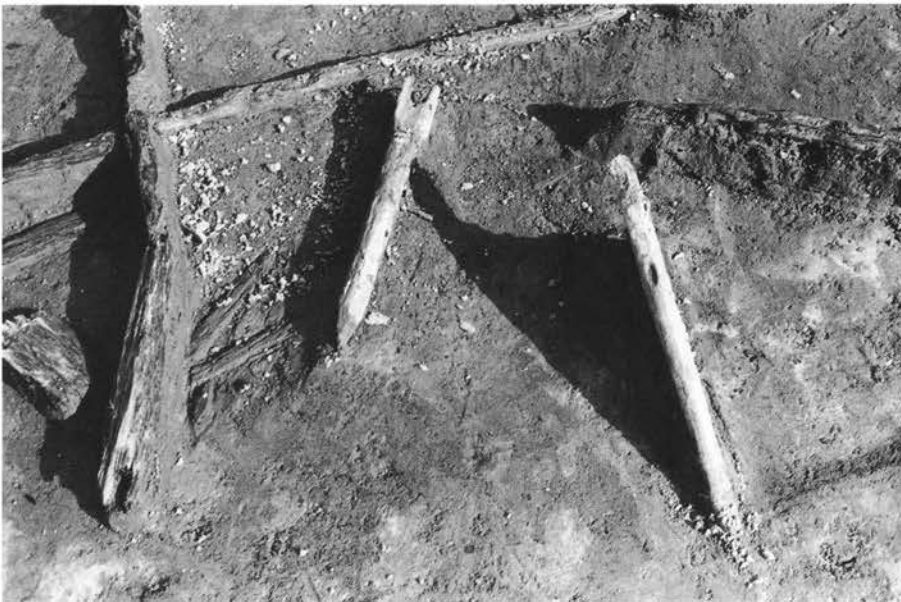




(1) F 1 地区流路跡 S D
96000木製品出土状況



(2) F 1 地区流路跡 S D
96222木製品出土状況



(3) F 1 地区流路跡 S D
96222木製品出土状況



(1) F 1 地区流路跡 S D
96222土器出土状況



(2) F 1 地区流路跡 S D
96222土器出土状況近景



(3) F 1 地区第 3 遺構面全
景(南から)



(1) F 1 地区第 2 遺構面主要部(左が北)



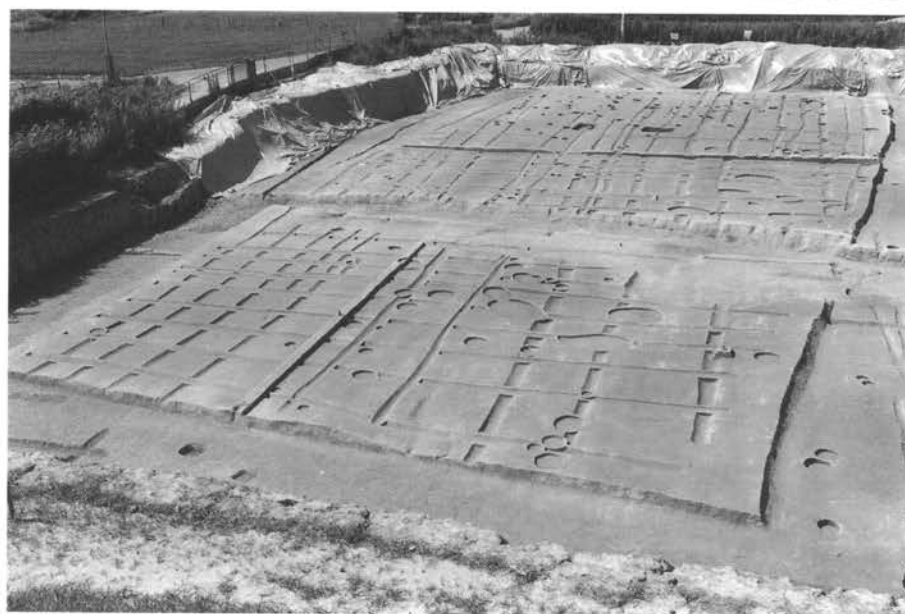
(2) F 1 地区掘立柱建物跡 S B 96214 完掘状況(南から)



(3) F 1 地区掘立柱建物跡 S B 96215 完掘状況(北から)



(1) F 1 地区島島 3 (南から)



(2) F 1 地区第 2 遺構面素掘り溝群(南から)



(3) E 地区第 4・5 遺構面全景(北から)



(1) E地区第5遺構面北半部遺構検出状況(北から)

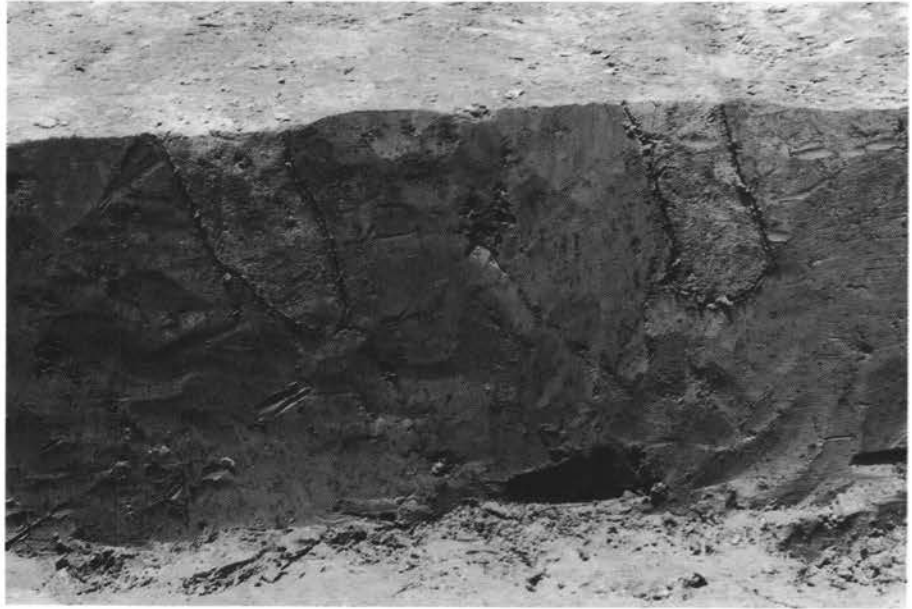


(2) E地区第5遺構面南半部遺構検出状況(北から)

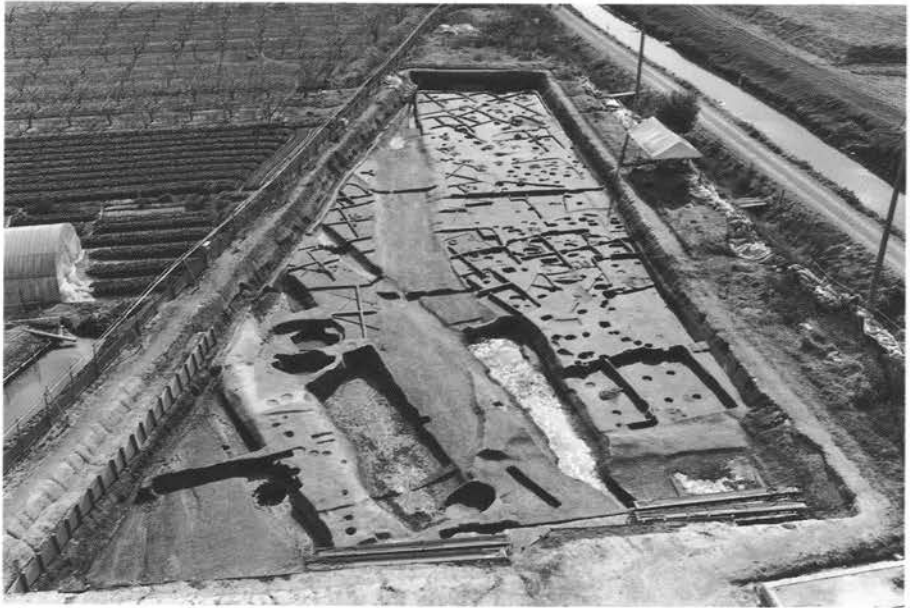


(3) E地区第5遺構面南半部素掘り溝群(南から)

(1) E地区第5遺構面小
孔断ち割り状況(南から)

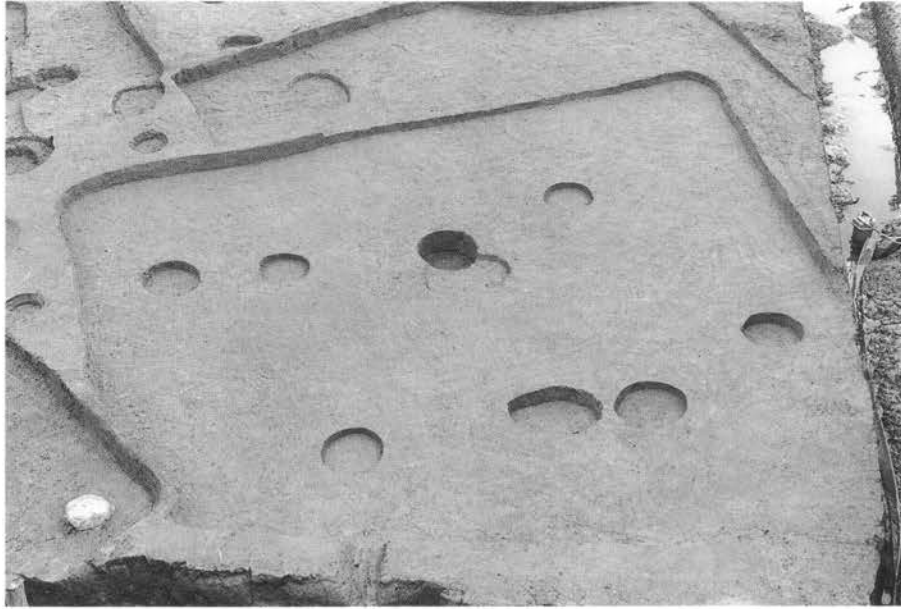


(2) E地区第4遺構面全景
(北から)

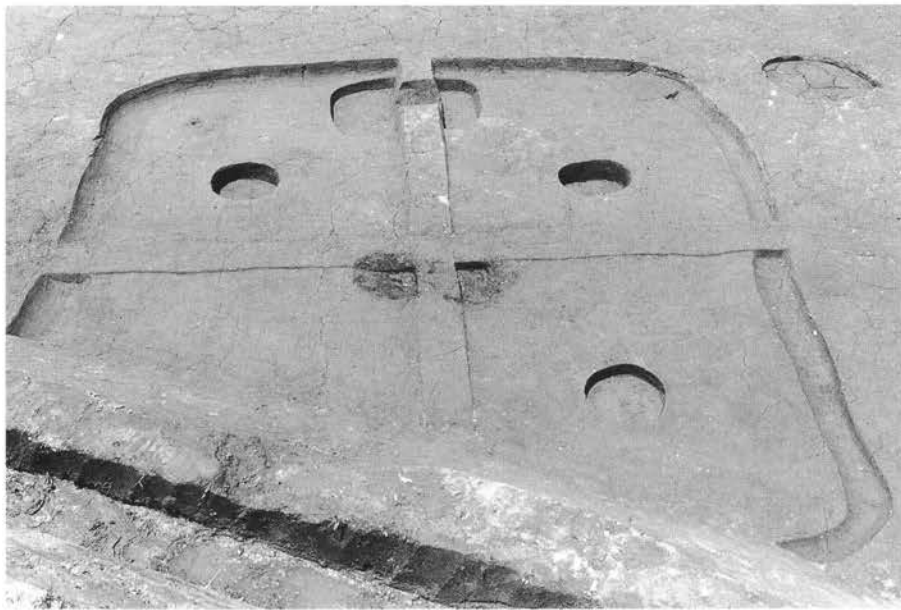


(3) E地区第4遺構面全景
(南から)





(1) E地区竪穴式住居跡 S
H97287完掘状況(南から)



(2) E地区竪穴式住居跡 S
H97300完掘状況(東から)



(3) E地区竪穴式住居跡 S
H97259(奥)・97260検
出状況(東から)

(1) E地区竪穴式住居跡S
H97260完掘状況(南から)

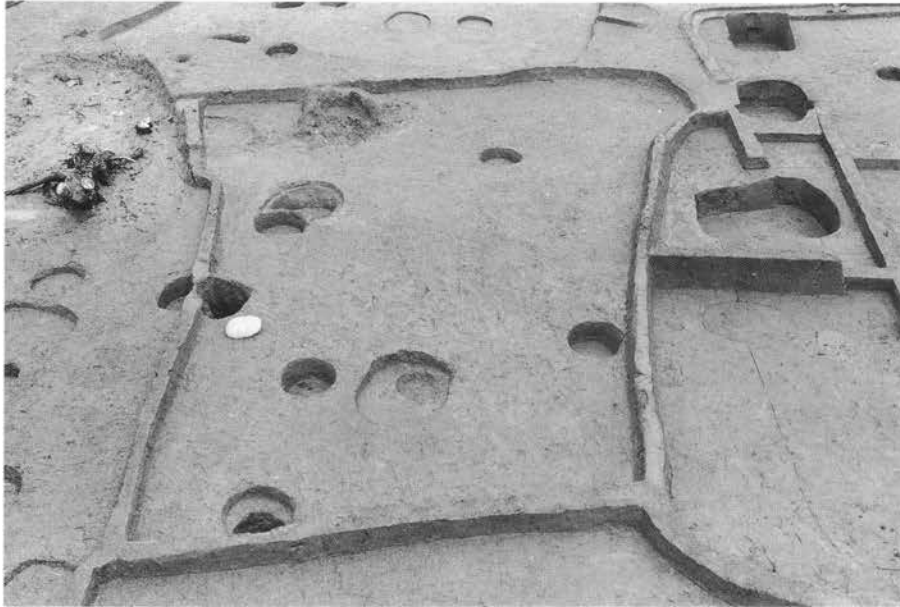


(2) E地区竪穴式住居跡S
H97263遺物出土状況
(北西から)



(3) E地区竪穴式住居跡S
H97282・97297完掘状況
(南東から)





(1) E地区竪穴式住居跡S
H97283完掘状況(南東
から)



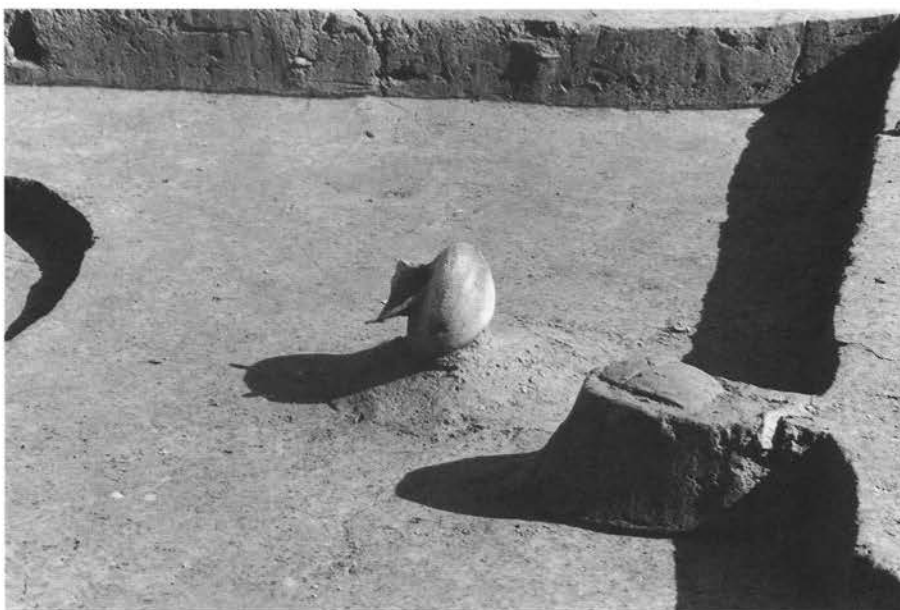
(2) E地区竪穴式住居跡S
H97683竈土器出土状況
(南東から)



(3) 同上甕口縁部取り上げ
後(南東から)



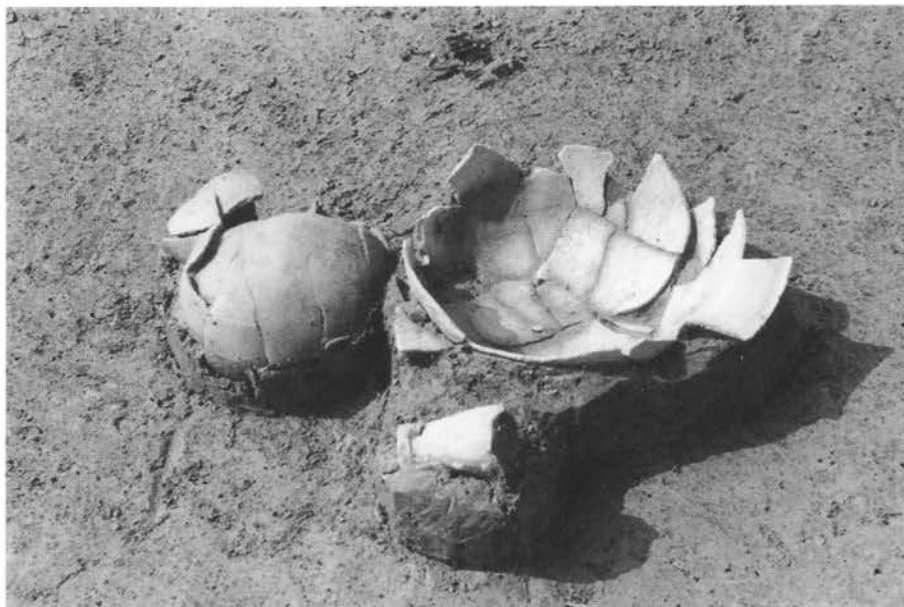
(1) E地区竪穴式住居跡S
H97283竈完掘状況(南
東から)



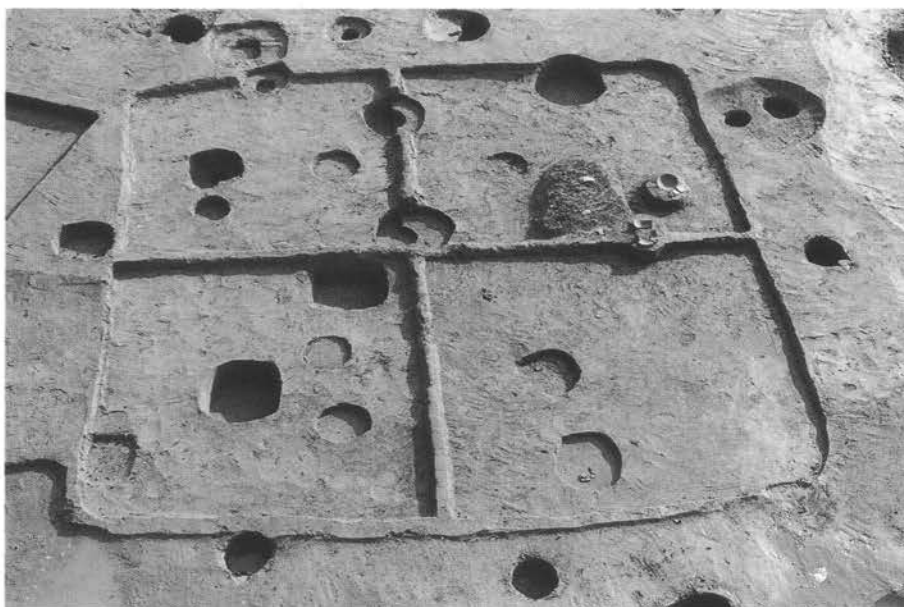
(2) 同上遺物出土状況(南東
から)



(3) E地区竪穴式住居跡S
H97301完掘状況(西か
ら)



(1) E地区竪穴式住居跡S
H97301土器出土状況
(西から)



(2) E地区竪穴式住居跡S
H97279土器出土状況
(西から)



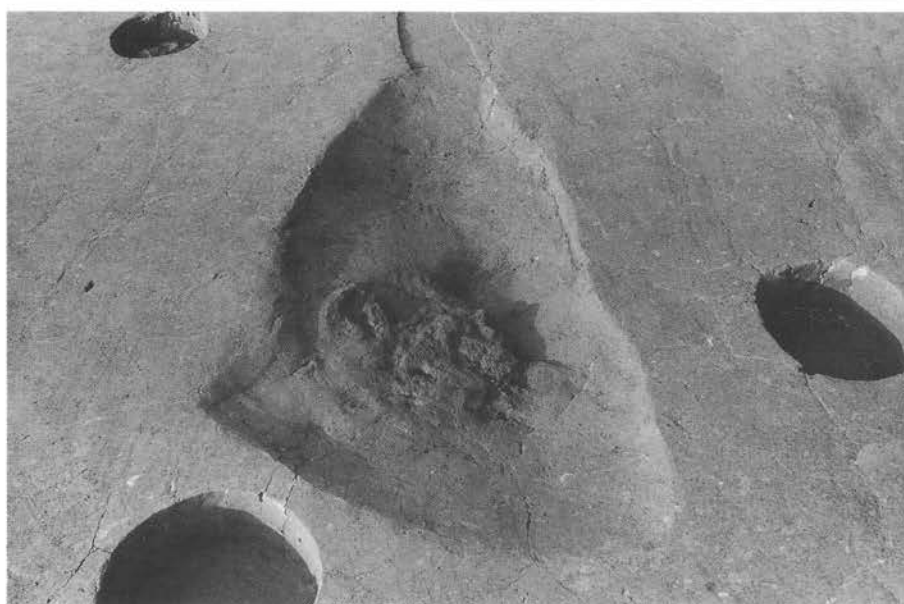
(3) E地区竪穴式住居跡S
H97279完掘状況(西から)



(1) E地区竪穴式住居跡S
H97280完掘状況(南東
から)



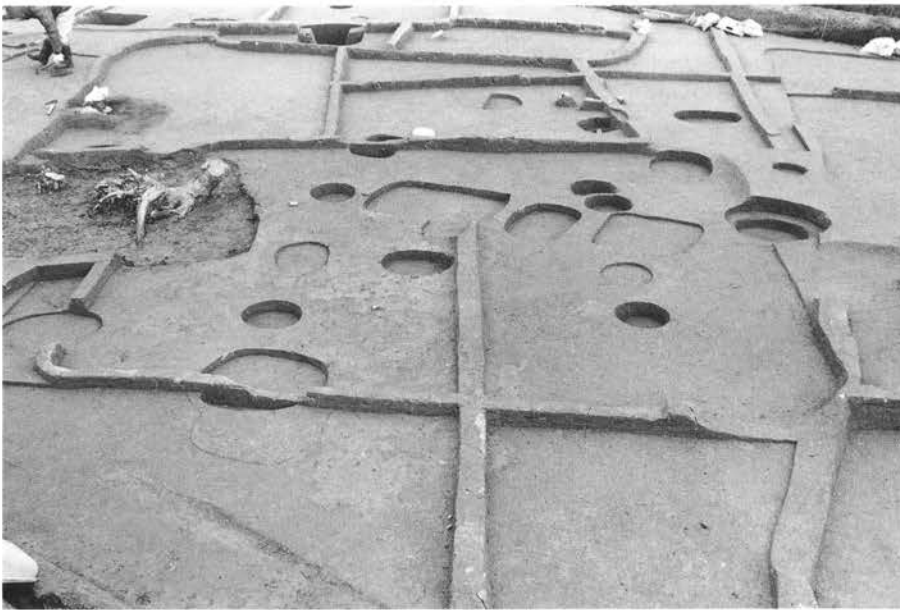
(2) 同上炉状遺構検出状況
(南東から)



(3) 同上炉状遺構完掘状況
(南東から)



(1) E地区竪穴式住居跡S
H97266完掘状況(西から)



(2) E地区竪穴式住居跡S
H97284(中)・97285検
出状況(西から)



(3) E地区第3遺構面遺構
検出状況(北から)

(1) E地区掘立柱建物跡 S
B97226検出状況(南から)



(2) E地区中央付近第3～
4遺構面柱穴および堅
穴式住居跡検出状況(南
から)



(3) E地区溝 S D97236およ
び掘立柱建物跡 S B
97253検出状況





(1) E・F地区全景(南東から)



(2) E地区第2遺構面全景(北から)



(3) E地区第2遺構面全景(左が北)



(1) E地区道路状遺構(北西から)



(2) E地区道路状遺構(北西から)



(3) E地区掘立柱建物跡S
B97225検出状況(西から)



(1) E地区井戸跡S E97223
検出状況(南から)



(2) E地区同近景(南から)



(3)同断ち割り(南から)



(1) E地区土坑S K97203遺物出土状況(南から)



(2) E地区池状遺構S X97249完掘状況(南から)



(3) E地区掘立柱建物跡S B97212、土坑S K97201完掘状況(北から)



(1) E地区井戸跡S E97204
遺物出土状況(南から)



(2) 同近景(南から)



(3) E地区井戸跡S E97205
検出状況(南から)



(1) E地区井戸跡 S E 97205
蒸籠組の状況(北から)



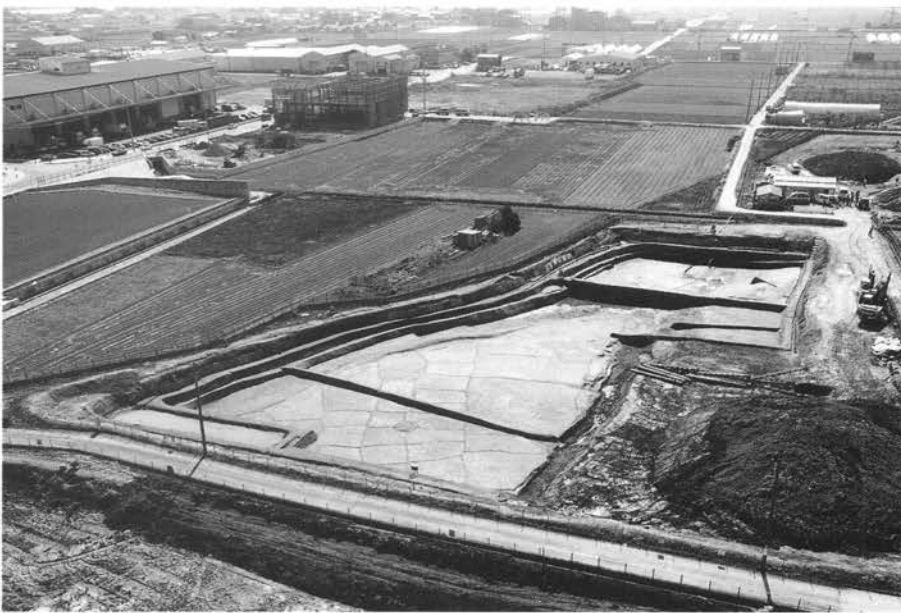
(2) 同下部構造(西から)



(3) E地区第1遺構面島島
9707(左)・島島
9708(右)(南から)



(1) F 2 地区遠景(北西から)



(2) F 2 地区第6遺構面全景(北西から)



(3) F 2 地区第6遺構面水田跡(北西から)

(1) F 2 地区第 6 遺構面水
田跡全景(左が北)



(2) F 2 地区第 6 遺構面水
田跡(左が北)



(3) F 2 地区第 6 遺構面全
景(南から)





(1) F 2 地区水田跡(西から)



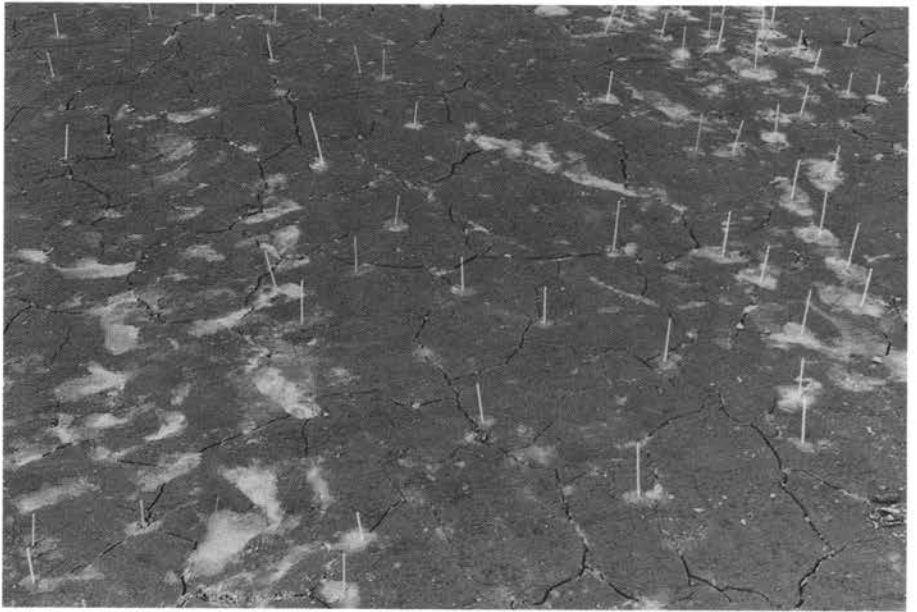
(2) F 2 地区水田跡(北西から)



(3) F 2 地区水田稻株痕跡
検出状況(北西から)



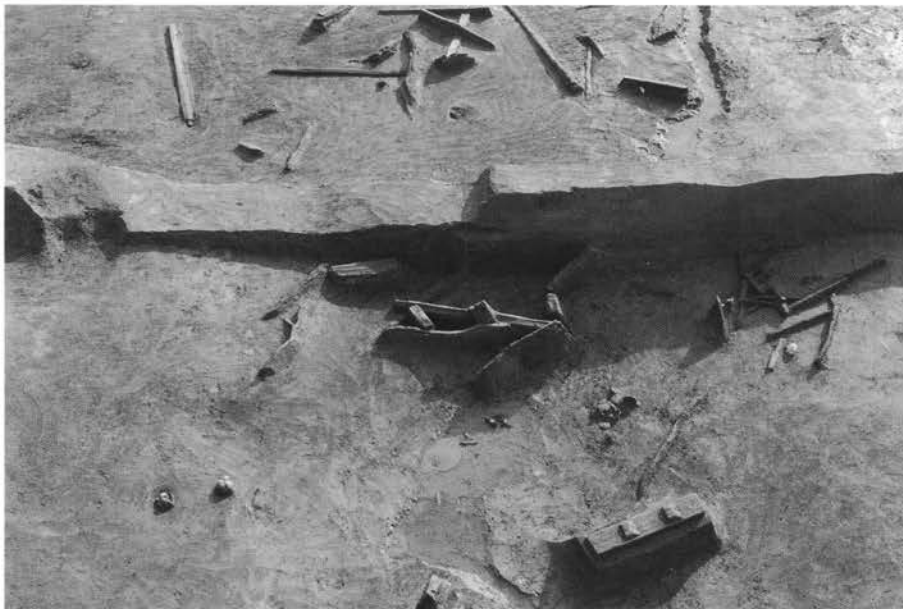
(1) F 2 地区水田稲株痕跡
(竹串部分)(南西から)



(2) 同稲株痕跡および足跡



(3) F 2 地区第 5 遺構面(南
から)



(1) F 2 地区流路跡 S R
96224遺物出土状況(南
から)



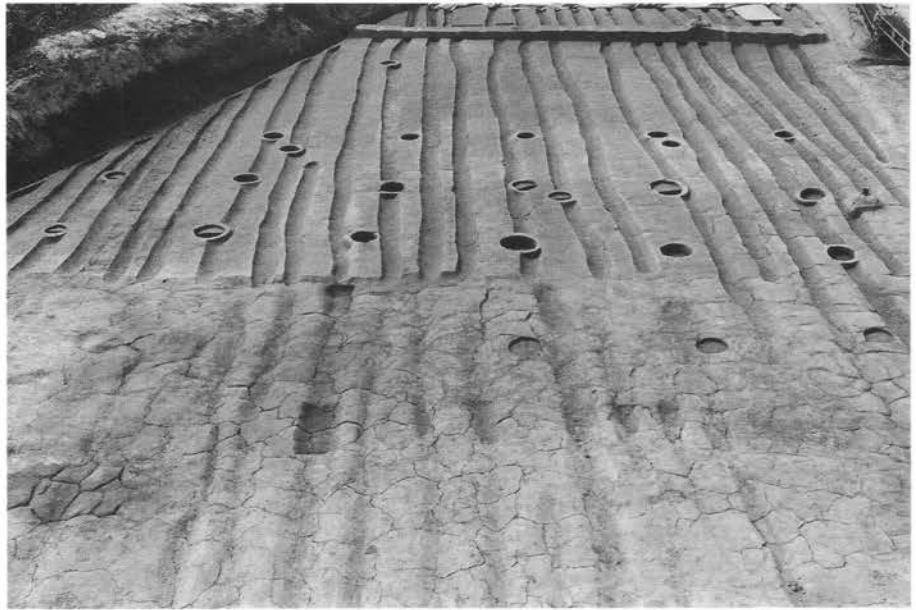
(2) F 2 地区第 4 遺構面全
景(南から)



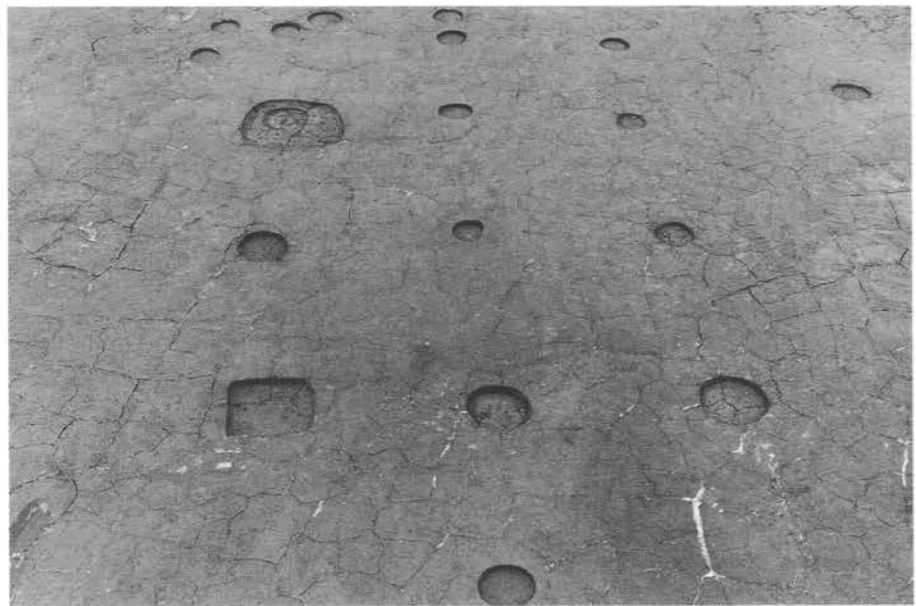
(3) F 2 地区第 3 遺構面(北
から)



(1) F 2 地区第 3 遺構面全
景(左が北)



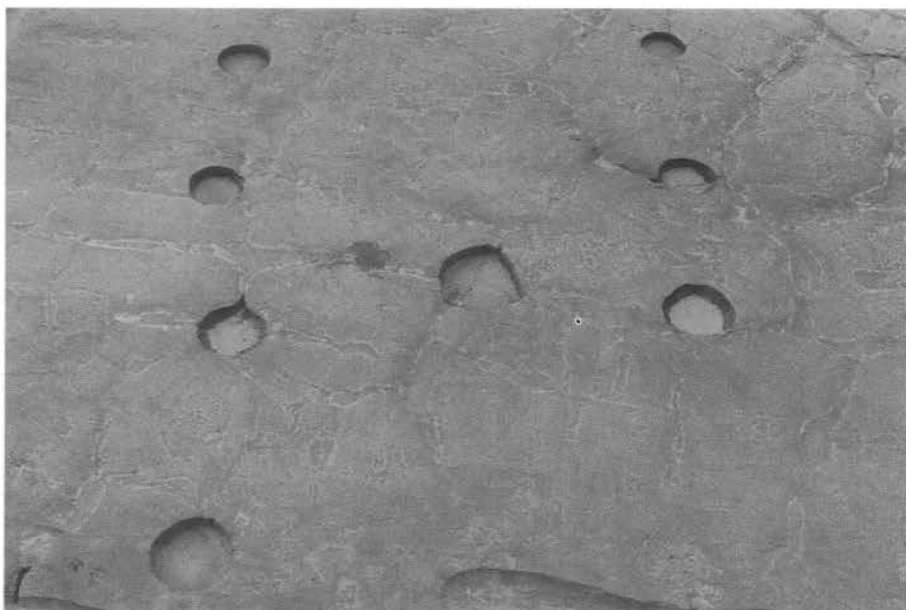
(2) F 2 地区掘立柱建物跡
S B 97302 完掘状況(北
から)



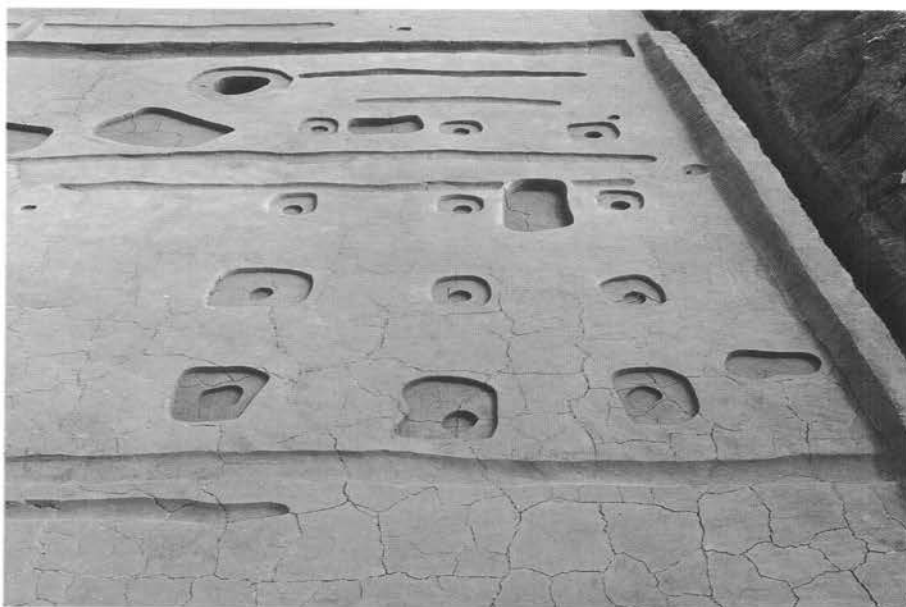
(3) F 2 地区掘立柱建物跡
S B 97311 検出状況(北
から)



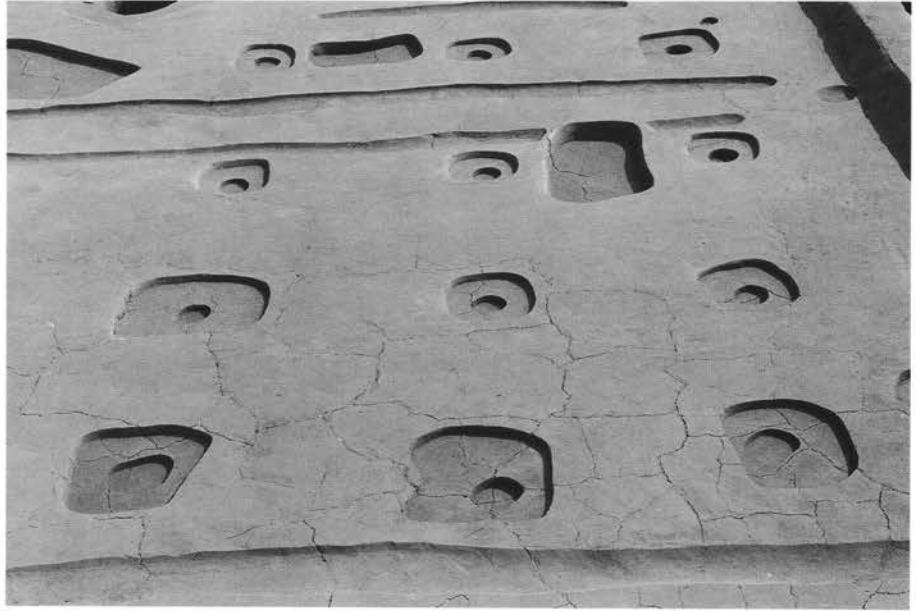
(1) F 2 地区掘立柱建物跡
S B97313検出状況(南
から)



(2) F 2 地区掘立柱建物跡
S B97314検出状況(西
から)



(3) F 2 地区掘立柱建物跡
S B97314検出状況(西
から)



(1) F 2 地区掘立柱建物跡
S B 97314 近景(西から)



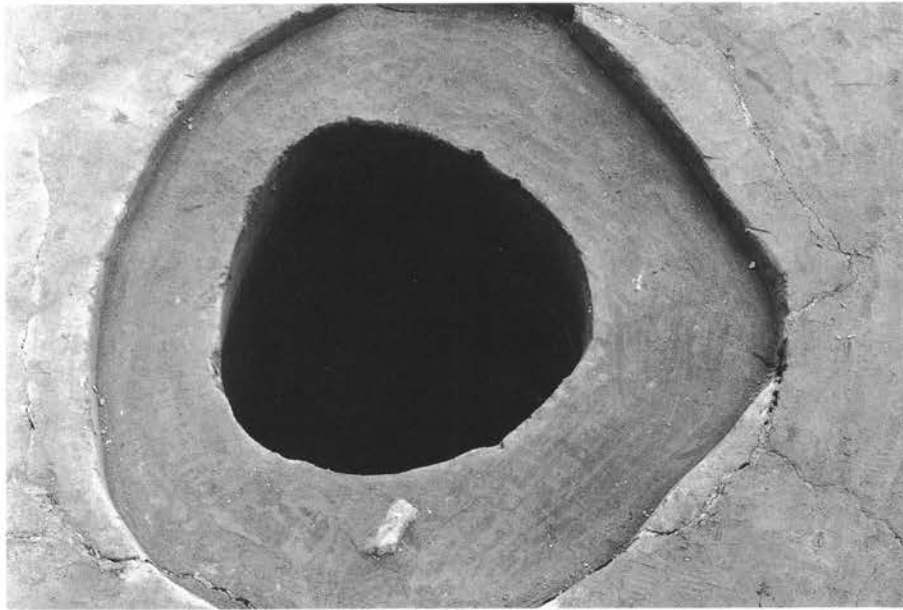
(2) F 2 地区掘立柱建物跡
S B 97318 検出状況(西から)



(3) F 2 地区井戸跡 S E
97303 完掘状況(南から)



(1) F 2 地区井戸跡 S E
97319 検出状況 (北から)



(2) 同完掘状況 (南から)



(3) F 2 地区溝跡 S D97317
完掘状況 (南西から)

(1) F 2 地区第 2 遺構面全
景(南から)



(2) 同素掘り溝群(南西か
ら)



(3) F 2 地区第 1 遺構面島
島(南から)





出土遺物(1) 番号は遺物実測図と対応





出土遺物(3) 番号は遺物実測図と対応



121



149



131



155



133



158



135



159



160



164



161



168



162



174



163



184



175



187



176



191



198



201



201



186



205



239



211



259



216



282



262



314



387



294



317



296



340



318



348



323



369



427



444



433



446



438



447



439



448



449



467



458



500



459



502



463



508



503



519



504



520



521



529



510



522



517



523



526



525



588



532



605



607



540



609



612



544



618



出土遺物(13) 番号は遺物実測図と対応



781



785



783



786



787



788



784



790



833



834



835



842



875



879



896



897



899



902



903

出土遺物(15) 番号は遺物実測図と対応



908



973



910



977



912



990



963



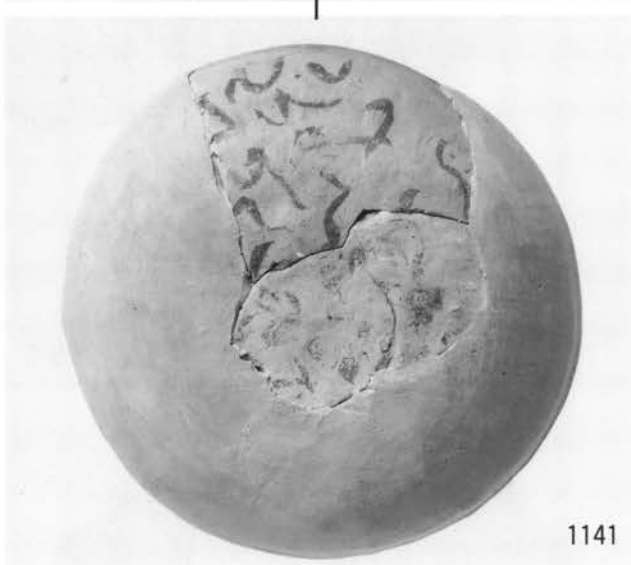
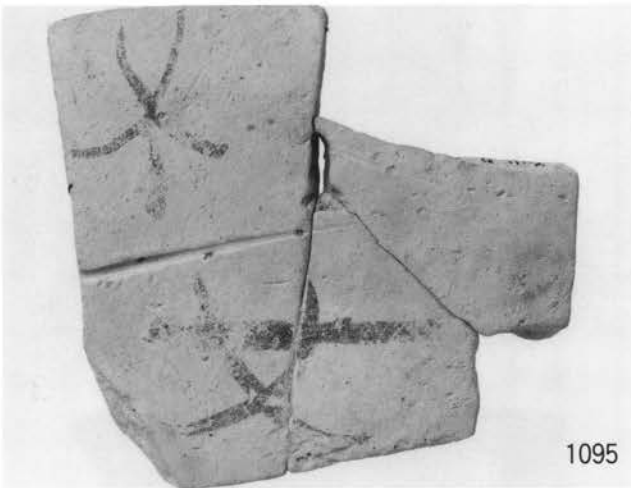
995



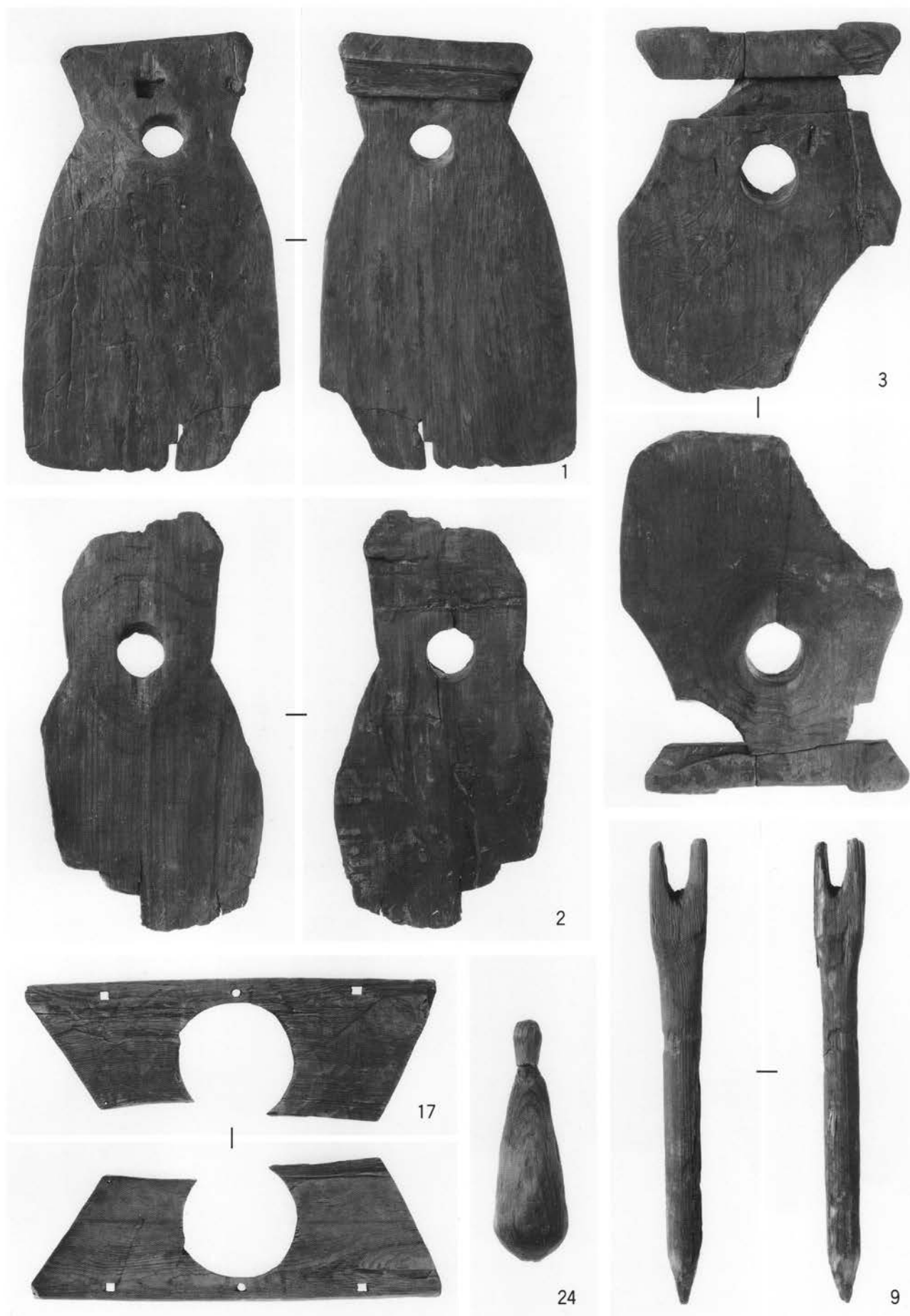
964



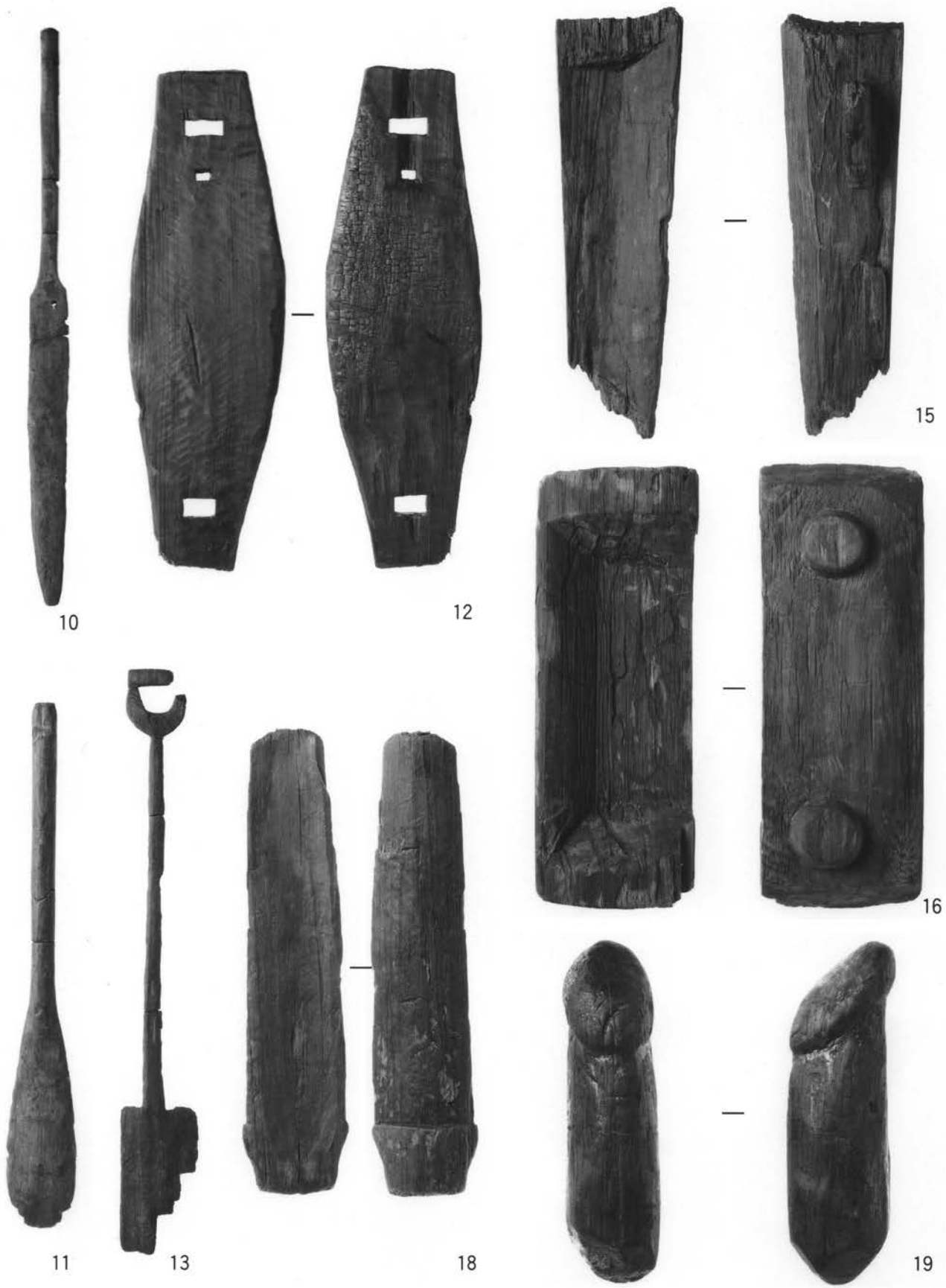
1000



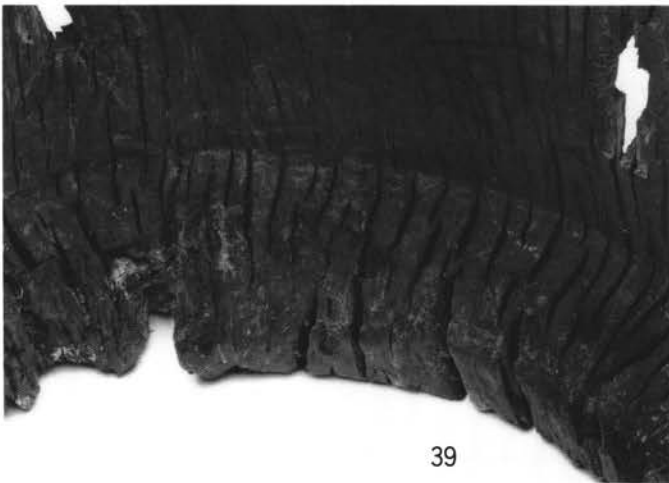
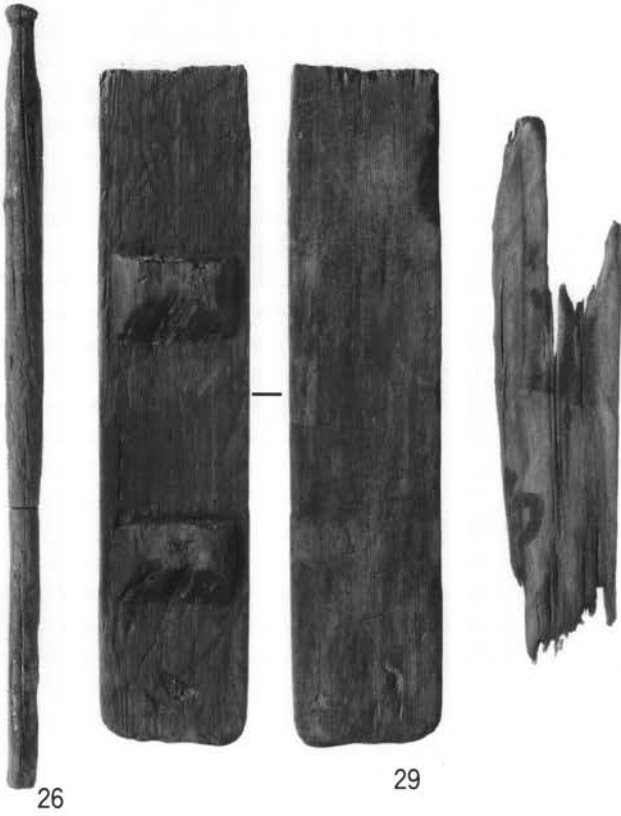
出土遺物(17) 番号は遺物実測図と対応



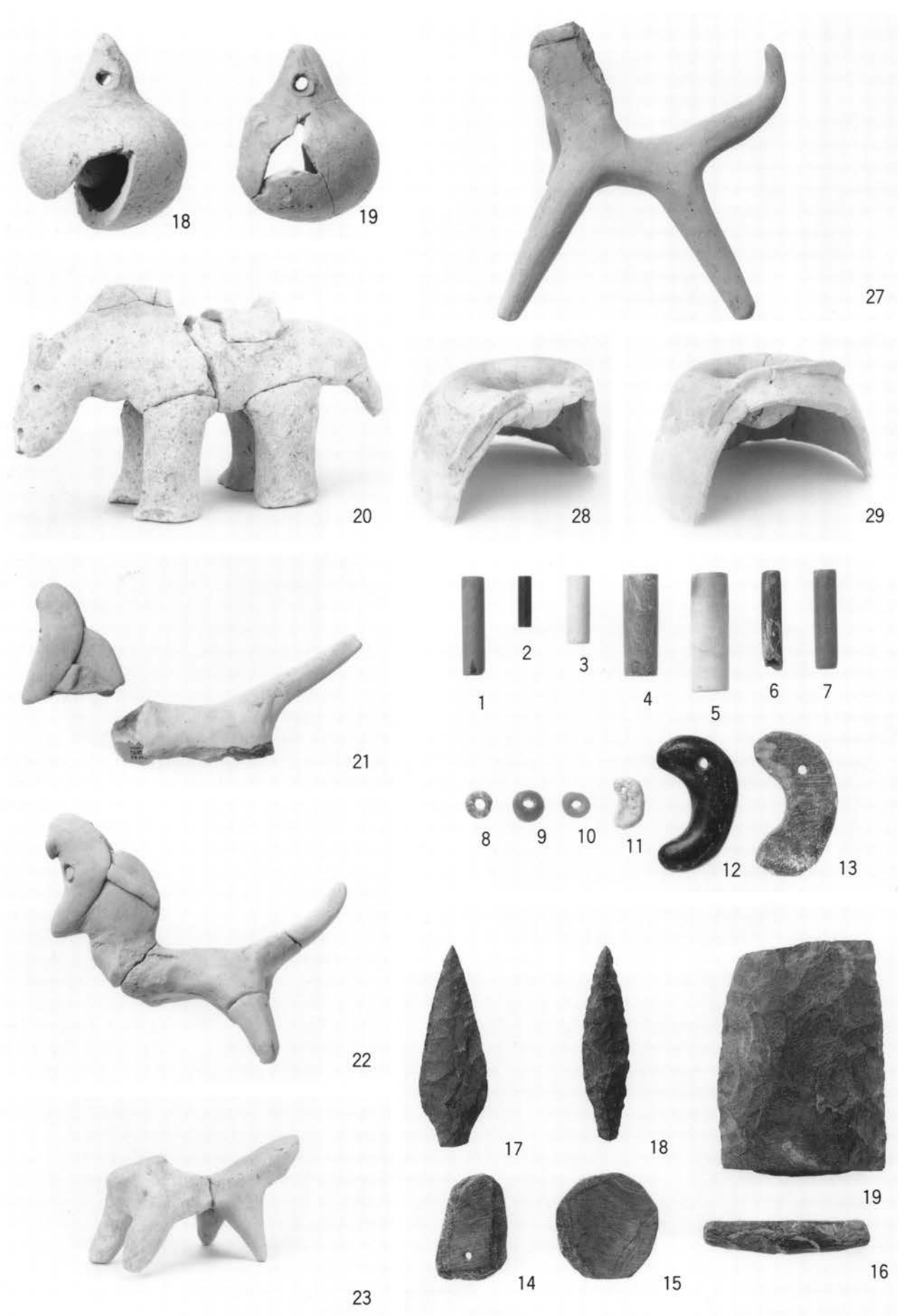
出土遺物(18) 番号は図版第97~99の遺物実測図と対応



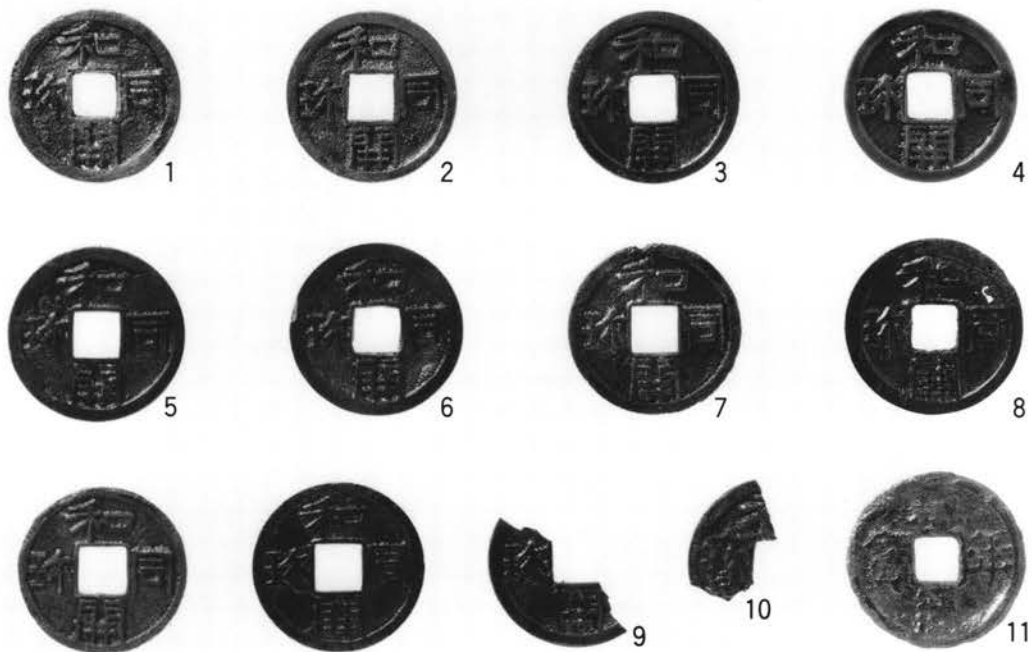
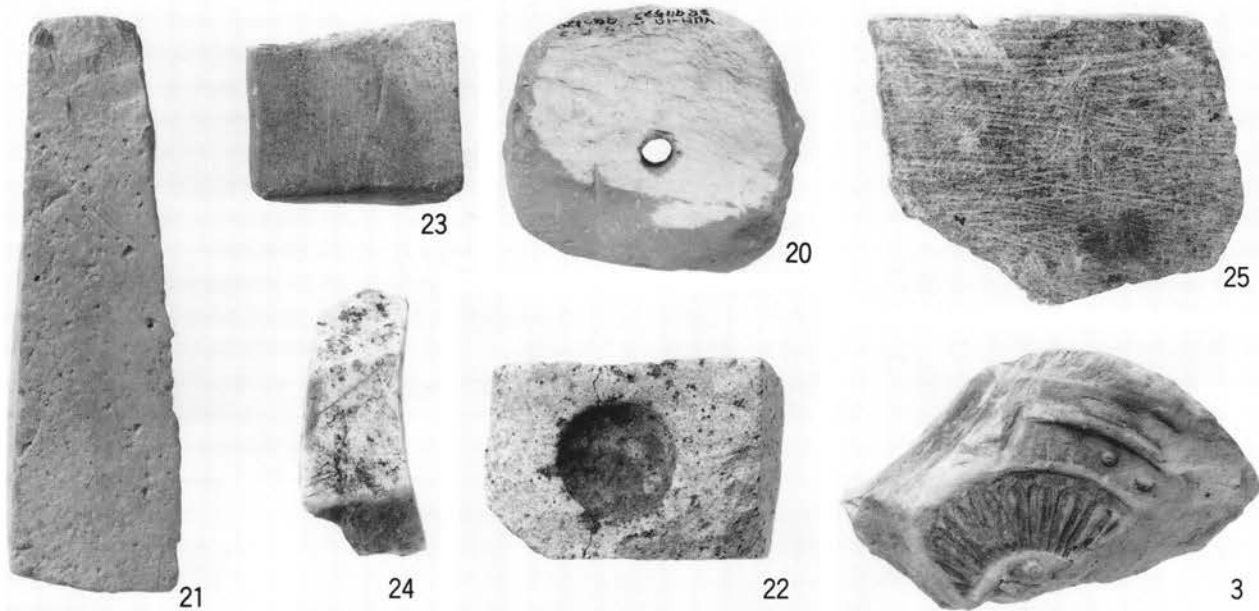
出土遺物(19) 番号は図版第98~99の遺物実測図と対応



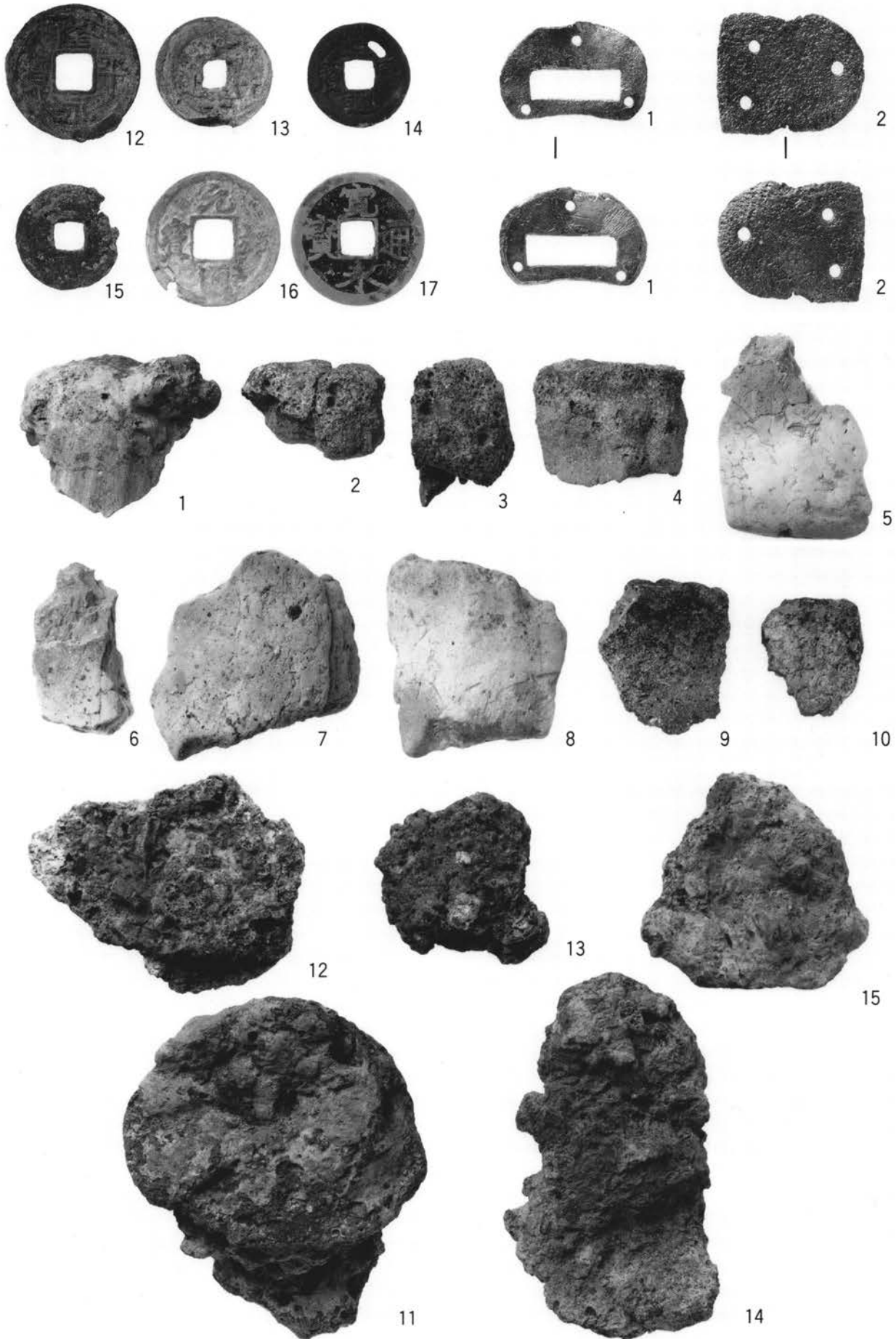
出土遺物(20) 番号は図版第99~101の遺物実測図と対応



出土遺物(21) 番号は図版第96・104の遺物実測図と対応



出土遺物(22) 番号は図版第96・105および本文第14図の遺物実測図と対応



出土遺物(23) 番号は図版第104・105の遺物実測図と対応

報告書抄録

ふりがな								
書名	内里八丁遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第30冊							
編著者名	森下 衛・柴 暁彦							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2001 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
うちさとはっ ちょういせき 内里八丁遺 跡	やわたしおおあざう ちさとこあざはっ ちょうほか 八幡市大字内里小 字八丁ほか	210	37	34° 51' 34"	135° 44' 17"	19940413 ～ 19980625	12,150	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
内里八丁遺 跡	集落・道路・水田	弥生時代後期末～ 古墳時代前期 古墳時代中・後期 飛鳥～平安時代 中世		水田跡・竪穴式住居跡 竪穴式住居跡 竪穴式住居跡・掘立柱建物 跡・井戸・溝・道路状遺構 掘立柱建物跡・井戸 島畠・溝		古式土師器・石器・ 管玉・鶏形土製品 土師器・須恵器 土師器・須恵器・石 帯・瓦・土馬 土師器・瓦器・輸入 陶磁器		稲株痕

京都府遺跡調査報告書 第30冊

平成13年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

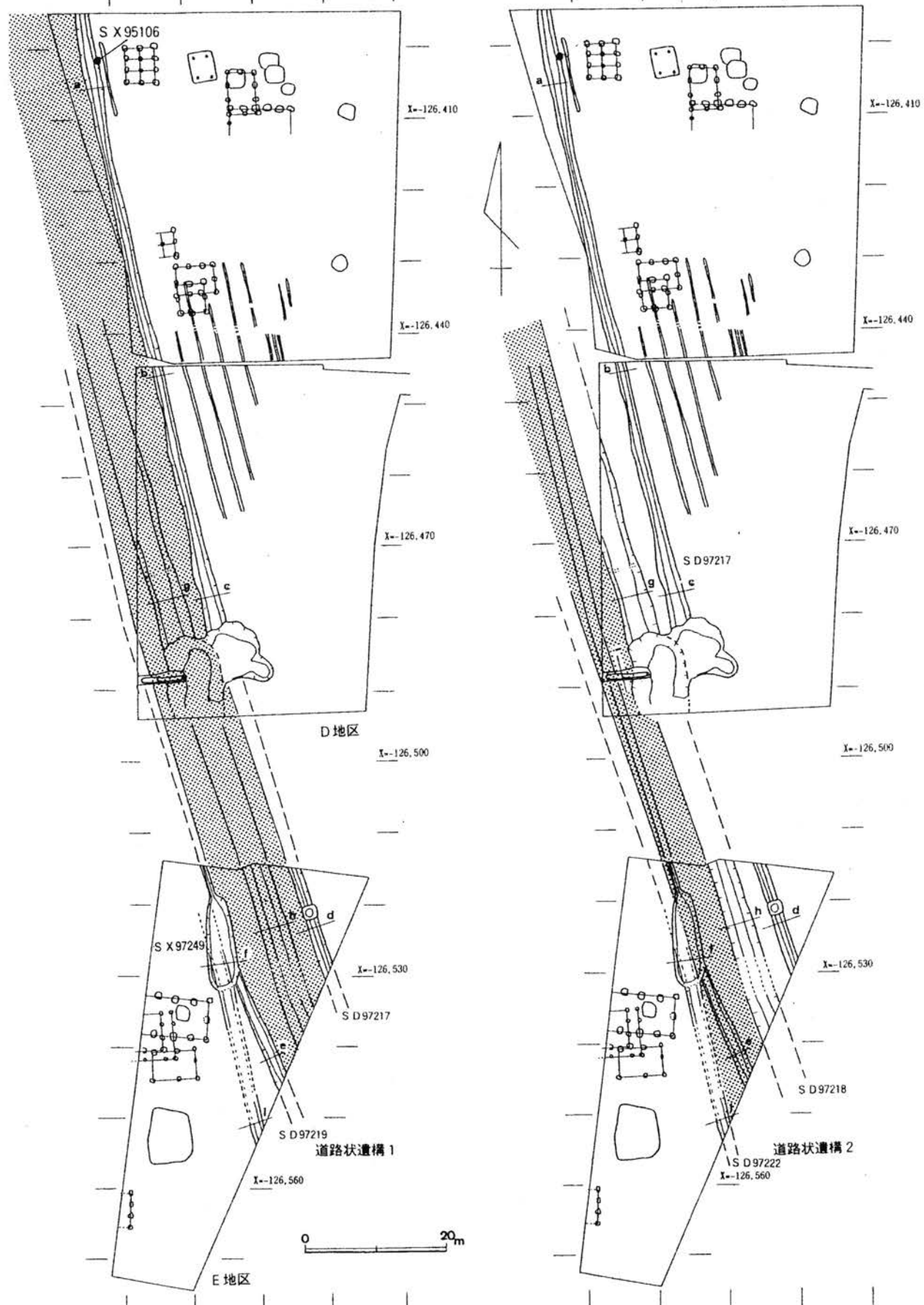
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
Phone (075)441-3155 (代)

『京都府遺跡調査報告書』第30冊正誤表

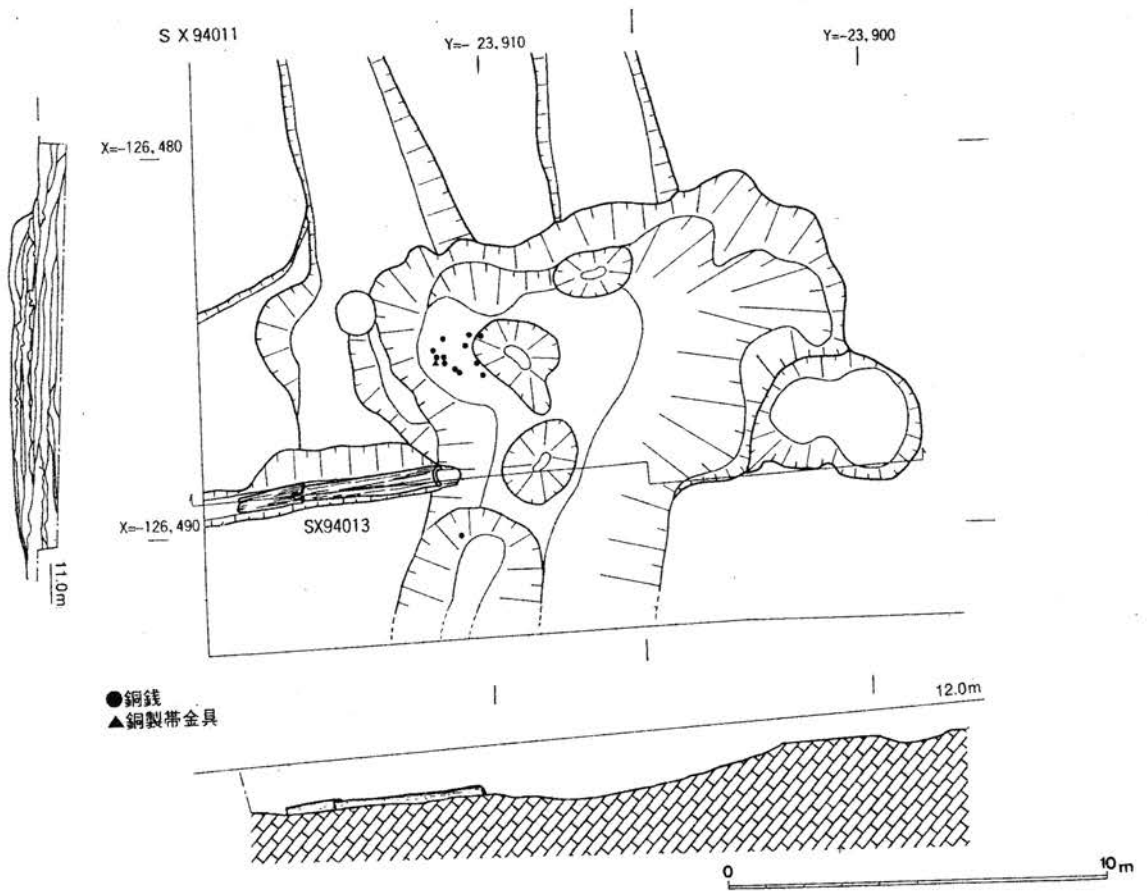
頁	行	誤	正
II	11行目	大阪建設局	関西支社
4	第1表	園山哲二	園山 哲
14	1行目	S H97098	S H96078
18	1・12行目	S D96005	S D96004
19	14行目	104～107・122～124	104～107・110・122～124
19	下から7・13行目	S D97222	S D97218
20	18行目	図版第53：68・71・	図版第53：68・70・71・
20	下から7行目	図版第56：125	図版第56：149
20	下から4行目	約2m・幅(東西)約0.8m	約3.9m・幅(東西)約1.6m
21	8行目	N D96222	N R96222
21	9行目	約6m	8m
21	10行目	約20m	13m
21	下から3行目	S X95223	S X96223
28	9行目	これに先行する。	S H97262に先行し、S H97270に後出する。
28	下から7行目	竈は	削除
29	10行目	図版第72	図版第72・74
30	15行目	約0cm	約15cm
31	下から14行目	S D97218	S D97219
33	10行目	96053	削除
38	下から9行目	万年通寶	萬年通寶
42	14・18行目	S D97219	S D97217
51	16行目	上記のとおり、	上記のとおり、
57	下から8行目	104～107・110)	104～107・110・122～124)
57	下から8行目	(104)	(104・122)
57	下から8行目	甕B(105・106)	甕B(105・106)・C(123・124)
58	5行目	S H96291・・・がある。	削除
65	下から12行目	S H97280	S H97282
65	下から8行目	S H97287	S H97278
73	7・9行目	S D97222-1	S D97217-1
73	7行目・下から13行目	S D97222-2	S D97217-2
74	4行目	S H95049	S H95048
74	12行目	S D97222	S D97217
84	5行目	、貨銭	削除
99	下から5行目	道路状構	道路状遺構
100	3行目	東側溝(S D94085)	東側溝(S D97217=S D94085)
100	4行目	和銅開珎	和同開珎
112	挿図キャプション	奈良庄	奈良莊
124	12～14行目	SH96287	SH97287
137	10～16行目	SH97298	SH97294
138	18～21行目	SH97280	SH97282
138	22・23行目	SH97287	SH97278
138	下から5～12行目	SH97278	SH97276
139	13行目	SH97276	SH97280

144	13~21行目	SE95049	SH95048
図版第五	(第3遺構面)写植	X=-126490	X=-126470
図版第五	(第3遺構面)写植	X=-126470	X=-126490
図版第五	(第4遺構面)写植	S B 94004	S H 94004
図版第五	(第5遺構面)写植	S B 94005	S H 94005
図版第五	(第6遺構面)写植	S B 94006	S H 94006
図版第一九	写植	N R 96222	N R 96224
図版第一九	写植	N R 96224	N R 96222
図版第二八	S K 95063・95065	レベル値抜け	11.7m
図版第三四	上段		右側の断面図削除
図版第五一	キャプション	S H 95052	S H 95092
図版第五五	キャプション	S H 96287	S H 97287
図版第七二	キャプション	S H 97298	S H 97294
図版第七三	キャプション	S H 95048	包含層
図版第七四	キャプション	S H 97280	S H 97282
図版第七四	キャプション	S H 97278	S H 97287
図版第七五	キャプション	S H 97278	S H 97276
図版第七五	キャプション	S H 97283	S H 97273
図版第七五	キャプション	619 : S H 97276	削除
図版第七五	キャプション	620 : S H 97280	619・620 : S H 97280
図版第八一	キャプション	S D 97217-2	808~815・817・818 : S X 95106、他はS D 97217-2
図版第八二	キャプション	S H 95049	S H 95048
図版第九五	キャプション	S E 96085	S E 96095

Y--23,920 Y--23,900 Y--23,880 Y--23,920 Y--23,900 Y--23,880



奈良～平安時代道路状遺構想定図



『京都府遺跡調査報告書』第30冊の図版第33・34については、
本図のとおり訂正をお願いします。